



『聖書 新改訳』の訳業は、次のような原則によっています。

- 1・原典にできるだけ忠実であること。
- 2・文法的に正確であること。
- 3・一般の人に理解できるものであること。
- 4・主イエス・キリストの占められるべき地位、みことばが主にささげる地位を正しく認めること。そしてこの業績は決して個人に帰せられるべきものではない。

# 新約聖書

[マタイの福音書](#)

[マルコの福音書](#)

[ルカの福音書](#)

[ヨハネの福音書](#)

[使徒の働き](#)

[ローマ人への手紙](#)

[コリント人への手紙 第一](#)

[コリント人への手紙 第二](#)

[ガラテヤ人への手紙](#)

[エペソ人への手紙](#)

[ピリピ人への手紙](#)

[コロサイ人への手紙](#)

[テサロニケ人への手紙 第一](#)

[テサロニケ人への手紙 第二](#)

[テモテへの手紙 第一](#)

[テモテへの手紙 第二](#)

[テトスへの手紙](#)

[ピレモンへの手紙](#)

[ヘブル人への手紙](#)

[ヤコブの手紙](#)

[ペテロの手紙 第一](#)

[ペテロの手紙 第二](#)

[ヨハネの手紙 第一](#)

[ヨハネの手紙 第二](#)

[ヨハネの手紙 第三](#)

[ユダの手紙](#)

[ヨハネの黙示録](#)

[あとがき](#)

[第三版あとがき](#)

[著作権について](#)

# マタイの福音書

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)

[十一章](#) [十二章](#) [十三章](#) [十四章](#) [十五章](#)

[十六章](#) [十七章](#) [十八章](#) [十九章](#) [二〇章](#)

[二十一章](#) [二十二章](#) [二十三章](#) [二十四章](#) [二十五章](#)

[二十六章](#) [二十七章](#) [二十八章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。
- 2 アブラハムにイサクが生まれ、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブにユダとその兄弟たちが生まれ、
- 3 ユダに、タマルによってパレスとザラが生まれ、パレスにエスロンが生まれ、エスロンにアラムが生まれ、
- 4 アラムにアミナダブが生まれ、アミナダブにナアソンが生まれ、ナアソンにサルモンが生まれ、
- 5 サルモンに、ラハブによってボアズが生まれ、ボアズに、ルツによってオベデが生まれ、オベデにエッサイが生まれ、
- 6 エッサイにダビデ王が生まれた。
- ダビデに、ウリヤの妻<sup>つま</sup>によってソロモンが生まれ、
- 7 ソロモンにレハブアムが生まれ、レハブアムにアビヤが生まれ、アビヤに<sup>1</sup>アサが生まれ、
- 8 アサにヨサバデが生まれ、ヨサバデにヨラムが生まれ、ヨラムにウジヤが生まれ、
- 9 ウジヤにヨタムが生まれ、ヨタムにアハズが生まれ、アハズにヒゼキヤが生まれ、
- 10 ヒゼキヤにマナセが生まれ、マナセに<sup>2</sup>アモンが生まれ、アモンにヨシヤが生まれ、
- 11 ヨシヤに、バビロン移住<sup>いじゆう</sup>のころ<sup>3</sup>エコニヤとその兄弟たちが生まれた。
- 12 バビロン移住<sup>いじゆう</sup>の後、エコニヤにサラテルが生まれ、サラテルにゾロバベルが生まれ、
- 13 ゾロバベルにアビウデが生まれ、アビウデにエリヤキムが生まれ、エリヤキムにアゾルが生まれ、
- 14 アゾルにサドクが生まれ、サドクにアキムが生まれ、アキムにエリウデが生まれ、
- 15 エリウデにエレアザルが生まれ、エレアザルにマタン<sup>え</sup>が生まれ、マタンにヤコブが生まれ、
- 16 ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた。<sup>4</sup>キリストと呼ばれるイエスはこのマリヤからお生まれになった。
- 17 それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住<sup>いじゆう</sup>までが十四代、バビロン移住<sup>いじゆう</sup>からキリストまでが十四代になる。
- 18 イエス・キリストの誕生<sup>たんじゆう</sup>は次のようであつた。その母マリヤはヨセフの妻<sup>つま</sup>と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊<sup>せいれい</sup>によって身重<sup>みおも</sup>になったことがわかった。
- 19 夫のヨセフは正しい人であつて、彼女をさらし者にはしたくなかつたので、内密<sup>ないみつ</sup>に<sup>5</sup>去らせようと決めた。
- 20 彼<sup>おそ</sup>がこのことを思い巡<sup>めぐ</sup>らしていたとき、主の使い<sup>ゆめ</sup>が夢<sup>あらか</sup>に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎<sup>たい</sup>に宿<sup>せいれい</sup>ているものは聖霊によるのです。
- 21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」
- 22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就<sup>じようじゆ</sup>するためであつた。
- 23 「見よ、処女<sup>しよじよ</sup>がみごっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）
- 24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻<sup>つま</sup>を迎え入れ、
- 25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。

## 二章

1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の<sup>6</sup>博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。

2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、<sup>おが</sup>拝みにまいりました。」

3 それを聞いて、ヘロデ王は<sup>おそ</sup>恐れ<sup>まど</sup>惑った。エルサレム中の人も王と同様であつた。

4 そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、<sup>2</sup>キリストはどこで生まれるのかと問いただした。

5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。<sup>よ</sup>預言者<sup>げんしや</sup>によってこう書かれているからです。

6 『ユダの地、ベツレヘム。

あなたはユダを治める者たちの中で、  
決して一番<sup>たみ</sup>小さくはない。

わたしの民イスラエルを治める支配者が、  
あなたから出るのだから。』」

7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。

8 そして、こう言つて彼らをベツレヘムに送つた。「行つて<sup>おきな</sup>幼子<sup>ご</sup>のことを詳しく調べ、わかつたら知らせてもらいたい。私も行つて拝むから。」

9 彼らは王の言つたことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに<sup>おきな</sup>幼子<sup>ご</sup>のおられる所まで進んで行き、その上にとどまつた。

10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

11 そしてその家に入つて、母マリヤとともに<sup>おきな</sup>おられる<sup>ふ</sup>幼子<sup>おが</sup>を見、ひれ伏して拝んだ。そして、<sup>たから</sup>宝<sup>おう</sup>の箱をあけて、黄金、乳香、没薬<sup>めいやく</sup>を贈り物としてささげた。

12 それから、夢でヘロデのところへ戻るといふ<sup>いまし</sup>戒め<sup>いまい</sup>を受けたので、別の道から自分の国へ帰つて行つた。

13 彼らが帰つて行つたとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言つた。「立つて、<sup>おきな</sup>幼子<sup>ご</sup>とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子<sup>ご</sup>を捜し出して殺そうとしています。」

14 そこで、ヨセフは立つて、夜のうちに<sup>おきな</sup>幼子<sup>ご</sup>とその母を連れてエジプトに立ちのき、

15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が<sup>よ</sup>預言者<sup>だ</sup>を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであつた。

16 その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこつて、人をやつて、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。

17 そのとき、<sup>よ</sup>預言者<sup>げんしや</sup>エレミヤを通して言われた事が成就した。

18 「ラマで声<sup>なげ</sup>がする。

泣き、そして嘆き<sup>なげ</sup>叫ぶ声。

ラケルがその子らのために<sup>なげ</sup>泣<sup>なげ</sup>いている。

ラケルは慰められることを拒んだ。

子らがもういないからだ。」

19 ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが、夢でエジプトにいるヨセフに現れて、言つた。

20 「立つて、<sup>おきな</sup>幼子<sup>ご</sup>とその母を連れて、イスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちをつけねらつていた人たちは死にました。」

21 そこで、彼は立つて、<sup>おきな</sup>幼子<sup>ご</sup>とその母を連れて、イスラエルの地に入つた。

22 しかし、アケラオが父ヘロデに代わつてユダヤを治めていると聞いたので、そこに行つてとどまることを<sup>おそ</sup>恐れた。そして、夢で戒めを受けたので、ガリラヤ地方に<sup>おそ</sup>立ち<sup>おそ</sup>のいた。

23 そして、ナザレという町に行つて住んだ。これは<sup>よ</sup>預言者<sup>げんしや</sup>たちを通して「この方はナザレ人と呼ばれる」と言われた事が成就するためであつた。

## 三章

1 そのころ、バプテスマのヨハネが<sup>あらわ</sup>8現れ、ユダヤの<sup>あら</sup>荒野で教<sup>の</sup>えを宣べて、言った。

2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

3 この人は預言者イザヤによって、  
「荒野で叫ぶ者の声がする。  
『主の道を用意し、  
主の通られる道をまっすぐにせよ。』」  
と言われたその人である。

4 このヨハネは、らくだの毛の着物を着、<sup>こし</sup>腰には皮の<sup>し</sup>帯を締め、その食べ物はいなごと野蜜であつた。

5 さて、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川<sup>がわ</sup>沿いの全<sup>ぜん</sup>地<sup>ち</sup>域<sup>いき</sup>の人々がヨハネのところへ出て行き、

6 自分の罪を告白して、ヨルダン川<sup>つみ</sup>で彼からバプテスマを受けた。

7 しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。」

8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。

9 『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言っておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。

10 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。

11 私は、あなたがたが悔い改めるために、<sup>く</sup>9水のバプテスマを授けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに<sup>せい</sup>聖<sup>れい</sup>と火とのバプテスマをお授けになります。

12 手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、穀を消えない火で焼き<sup>や</sup>尽くされます。」

13 さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに来られた。

14 しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして、言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか。」

15 ところが、イエスは答えて言われた。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」そこで、ヨハネは<sup>しょう</sup>承<sup>ちやう</sup>知した。

16 こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>が鳩<sup>はと</sup>のように下つて、自分の上に来られるのをご<sup>らん</sup>覧になった。

17 また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

## 四章

1 さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。

2 そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。

3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」

4 イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」

5 すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、

6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから。」

7 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。」

8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、

9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」

10 イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。」

11 すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。

12 ヨハネが<sup>10</sup>捕らえられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた。

13 そしてナザレを去って、カペナウムに来て住まわれた。ゼブルンとナフタリとの境にある、湖のほとりの町である。

14 これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、<sup>11</sup>湖に向かう道、

ヨルダンの向こう岸、<sup>12</sup>異邦人のガリラヤ。

16 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、

死の地と死の陰にすわっていた人々に、

光が上った。」

17 この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

18 イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、ふたりの兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になった。彼らは湖で網を打っていた。漁師だったからである。

19 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」

20 彼らはすぐに網を捨てて従った。

21 そこからなお行かれると、イエスは、別のふたりの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイといっしょに舟の中で網を繕っているのをご覧になり、ふたりをお呼びになった。

22 彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った。

23 イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の<sup>13</sup>福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。

24 イエスのうわさはシリア全体に広まった。それで人々は、さまざまな病気や痛み<sup>いた</sup>に苦しむ病人、悪霊につかれた人、<sup>14</sup>てんかんの<sup>おゆうぶ</sup>人、中風の人などをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らをいやされた。

25 こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆<sup>ぐんしゆう</sup>がイエスにつき従った。



## 五章

- 1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来了。  
2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。  
3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。  
4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。  
5 <sup>15</sup> 柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。  
6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。  
7 あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。  
8 心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。  
9 平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。  
10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。  
11 わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。  
12 喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。  
13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。  
14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。  
15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、<sup>16</sup> 家にいる人々全部を照らします。  
16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。  
17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思つてはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。  
18 まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。  
19 だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。  
20 まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません。  
21 昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。  
22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって<sup>17</sup>腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって<sup>18</sup>『能なし』と言うような者は、<sup>19</sup>最高議会議に引き渡されます。また、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。  
23 だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、  
24 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。  
25 あなたを告訴する者とは、あなたが彼といつしよに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることになります。  
26 まことに、あなたがたに告げます。あなたは最後の—<sup>20</sup>コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。  
27 『姦淫してはならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。  
28 しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。  
29 もし、右の目が、あなたを<sup>21</sup>つまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。  
30 もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切つて、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです。

- 31 また『だれでも、妻を<sup>つま</sup><sup>り</sup><sup>べつ</sup>22離別する者は、妻に離婚状を与えよ』と言われています。
- 32 しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであつても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。
- 33 さらにまた、昔の人々に、『<sup>つま</sup><sup>り</sup><sup>べつ</sup>23偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。
- 34 しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓つてはいけません。すなわち、天をさして誓つてはいけません。そこは神の御座だからです。
- 35 地をさして誓つてもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓つてもいけません。そこは偉大な王の都だからです。
- 36 あなたの頭をさして誓つてもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです。
- 37 だから、あなたがたは、<sup>ちか</sup><sup>み</sup><sup>け</sup>24『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい。それ以上のことは<sup>ちか</sup>25悪いことです。
- 38 『目には目で、歯には歯で』と言われたのを、あなたがたは聞いています。
- 39 しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かつてはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。
- 40 あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。
- 41 あなたに—<sup>ちか</sup>26ミリオン行けと強いるような者とは、いつしよに二ミリオン行きなさい。
- 42 求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい。
- 43 『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。
- 44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。
- 45 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。<sup>ちか</sup>27天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。
- 46 自分を愛してくる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。
- 47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか。
- 48 だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。

## 六章

1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。

2 だから、<sup>28</sup>施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。

3 あなたは、<sup>ほどこ</sup>施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。

4 あなたの<sup>ほどこ</sup>施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に<sup>29</sup>見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。

6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

7 また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。

8 だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。

9 だから、こう祈りなさい。

『天にいます私たちの父よ。

御名があがめられますように。』

10 御国が来ますように。

みこころが天で行われるように地でも行われますように。

11 私たちの<sup>30</sup>日ごとの糧をきょうもお与えください。

12 私たちの<sup>31</sup>負いめをお赦しください。

私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。

13 私たちを試みに会わせないで、<sup>32</sup>悪からお救いください。』〔<sup>33</sup>国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。〕

14 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。

15 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。

16 断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつつのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。

17 しかし、あなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。

18 それは、断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます。

19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。

20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。

21 あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

22 からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が<sup>34</sup>健全なら、あなたの全身が明るいが、

23 もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。

24 だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また<sup>35</sup>富にも仕えるということはできません。

25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと<sup>36</sup>心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもので、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。

26 <sup>37</sup>空の鳥を見なさい。種時きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分の<sup>38</sup>いのちを<sup>39</sup>少しでも延ばすことができますか。

28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華<sup>えい が きわ</sup>を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾<sup>き かざ</sup>ってはいませんでした。

30 きょうあつても、あすは炉<sup>ろ</sup>に投げ込まれる野の草<sup>な こ</sup>さえ、神はこれほどに装<sup>よそお</sup>ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくだらないわけがありませんか。信仰<sup>しんこう</sup>の薄い<sup>うす</sup>人<sup>うす</sup>たち。

31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。

32 こういうものはみな、異邦人<sup>い ほうじん</sup>が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知<sup>き</sup>っておられます。

33 だから、神の国と<sup>40</sup>その義とをまず第一に<sup>41</sup>求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて<sup>42</sup>与えられます。

34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

## 七章

- 1 さばいてはいけません。さばかれないからです。
- 2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、<sup>43</sup>あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。
- 3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。
- 4 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。
- 5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。
- 6 聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みじりに、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。
- 7 <sup>44</sup>求めなさい。そうすれば与えられます。<sup>45</sup>捜しなさい。そうすれば見つかります。<sup>46</sup>たたきなさい。そうすれば開かれます。
- 8 だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。
- 9 あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。
- 10 また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。
- 11 してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。
- 12 それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、<sup>47</sup>ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。
- 13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。
- 14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。
- 15 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。
- 16 あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。
- 17 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。
- 18 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。
- 19 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。
- 20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。
- 21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。
- 22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって<sup>48</sup>奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』
- 23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』
- 24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。
- 25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。
- 26 また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。
- 27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」
- 28 イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。
- 29 というのは、イエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである。

# 八章

- 1 イエスが山から降りて来られると、多くの群衆がイエスに従った。
- 2 すると、<sup>49</sup>ツァアラトに冒された人がみもとに来て、<sup>50</sup>ひれ伏して言った。「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます。」
- 3 イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐに彼のツァアラトはきよめられた。
- 4 イエスは彼に言われた。「気をつけて、だれにも話さないようにしなさい。ただ、人々へのあかしのために、行って、自分を祭司に見せなさい。そして、モーセの命じた供え物をささげなさい。」
- 5 イエスがカベナウムに入られると、ひとりの百人隊長がみもとに来て、懇願して、
- 6 言った。「主よ。私の<sup>51</sup>しもべが中風で、家に寝ていて、ひどく苦しんでいます。」
- 7 イエスは彼に言われた。「行って、直してあげよう。」
- 8 しかし、百人隊長は答えて言った。「主よ。あなたを私の屋根の下にお人れる資格は、私にはありません。<sup>52</sup>ただ、おことばを下さい。そうすれば、私の<sup>53</sup>しもべは直ります。」
- 9 と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私自身の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ』と言えば、そのとおりにいたします。」
- 10 イエスは、これを聞いて驚かれ、ついて来た人たちにこう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしは<sup>54</sup>イスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことはありません。」
- 11 あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに<sup>55</sup>食卓に着きます。
- 12 しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ざしりするのです。」
- 13 それから、イエスは百人隊長に言われた。「さあ行きなさい。あなたの信じたとおりにするように。」すると、ちょうどその時、その<sup>56</sup>しもべはいやされた。
- 14 それから、イエスは、ペテロの家に来られて、ペテロのしゅうとめが熱病で床に着いているのをご覧になった。
- 15 イエスが手にさわられると、熱がひき、彼女は起きて<sup>57</sup>イエスをもてなした。
- 16 夕方になると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れて来た。そこで、イエスはみことばをもって霊どもを追出し、また病氣の人々をみないやされた。
- 17 これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。「彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を<sup>58</sup>背負った。」
- 18 さて、イエスは群衆が自分の回りにいるのをご覧になると、向こう岸に行くための<sup>59</sup>用意をお命じになった。
- 19 そこに、ひとりの律法学者が来てこう言った。「先生。私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついてまいります。」
- 20 すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には<sup>まくら</sup>する所もありません。」
- 21 また、別のひとりの弟子がイエスにこう言った。「主よ。まず行って、私の父を葬ることを許してください。」
- 22 ところが、イエスは彼に言われた。「わたしについて来なさい。死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。」
- 23 イエスが舟にお乗りになると、弟子たちも従った。
- 24 すると、見よ、湖に<sup>60</sup>大暴風が起こって、舟は大波をかぶった。ところが、イエスは眠っておられた。
- 25 弟子たちはイエスのみもとに来て、イエスを起こして言った。「主よ。助けてください。私たちはおぼれそうです。」
- 26 イエスは言われた。「なぜこわがるのか、信仰の薄い者たちだ。」それから、起き上がって、風と湖をしっかりとつけられると、大なぎになった。
- 27 人々は驚いてこう言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」
- 28 それから、向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人がふたり墓から出て来て、イエスに出会った。彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった。
- 29 すると、見よ、彼らはわめいて言った。「神の子よ。いったい私たちに何をしようというのです。まだ<sup>61</sup>その時ではないのに、もう私たちを苦しめに来られたのですか。」
- 30 ところで、そこからずっと離れた所に、たくさんの豚の群れが飼ってあった。
- 31 それで、悪霊どもはイエスに願ってこう言った。「もし私たちを追いつき出そうとされるのであれば、どうか豚の群れの中にやってください。」

32 イエスは彼らに「行け」と言われた。すると、彼らは出て行って豚<sup>ぶた</sup>に入った。すると、見よ、その群<sup>む</sup>れ全体がどつとがけから湖<sup>か</sup>へ駆け降り<sup>お</sup>て行って、水におぼれて死んだ。

33 飼<sup>か</sup>っていた者たちは逃げ出して町<sup>に</sup>に行き、悪霊<sup>あくれい</sup>につかれた人たちのことなどを残らず知らせた。

34 すると、見よ、町中の者がイエスに会<sup>に</sup>いに出て来た。そして、イエスに会<sup>に</sup>うと、どうかこの地方を立ち去<sup>に</sup>ってくださいと願った。



# 九章

- 1 イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた。
- 2 すると、人々が中風の人を床に寝かせたままで、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりとしなさい。あなたの罪は<sup>62</sup>赦された」と言われた。
- 3 すると、律法学者たちは、心の中で、「この人は神をけがしている」と言った。
- 4 イエスは彼らの心の思いを知って言われた。「なぜ、心の中で悪いことを考えているのか。」
- 5 『あなたの罪は<sup>63</sup>赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。
- 6 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言って、それから中風の  
人に、「起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい」と言われた。
- 7 すると、彼は起きて家に帰った。
- 8 群衆はそれを見て恐ろしくなり、こんな権威を<sup>64</sup>人にお与えになった神をあがめた。
- 9 イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、「わたしにつ  
いて来なさい」と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った。
- 10 イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっ  
しょに食卓に着いていた。
- 11 すると、これを見たパリサイ人たちが、イエスの弟子たちに言った。「なぜ、あなたがたの先生は、取税人や罪人  
といっしょに食事をするのですか。」
- 12 イエスはこれ聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」
- 13 『<sup>65</sup>わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正  
しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」
- 14 するとまた、ヨハネの弟子たちが、イエスのところに来てこう言った。「私たちとパリサイ人は断食するのに、  
なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」
- 15 イエスは彼らに言われた。「<sup>66</sup>花婿につき添う友だちは、花婿がいっしょにいる間は、どうして悲しんだりできま  
しょう。しかし、花婿が取り去られる時が来ます。そのときには断食します。」
- 16 だれも、真新しい<sup>67</sup>布切れで古い着物の継ぎをするようなことはしません。そんな<sup>68</sup>継ぎ切れは着物を引き破つ  
て、破れがもっとひどくなるからです。
- 17 また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、皮袋は裂けて、ぶ  
どう酒が流れ出てしまい、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れば、両方とも保  
ちます。」
- 18 イエスがこれらのことを話しておられると、見よ、ひとりの<sup>69</sup>会堂管理者が来て、<sup>70</sup>ひれ伏して言った。「私の  
娘がいま死にました。でも、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。そうすれば娘は生き返り  
ます。」
- 19 イエスが立って彼について行かれると、弟子たちもついて行った。
- 20 すると、見よ。十二年の間長血をわずらっている女が、イエスのうしろに来て、その着物のふさにさわった。
- 21 「お着物にさわることでもできれば、きっと<sup>71</sup>直る」と心のうちで考えていたからである。
- 22 イエスは、振り向いて彼女を見て言われた。「娘よ。しっかりとしなさい。あなたの信仰があなたを<sup>72</sup>直したの  
です。」すると、女はその時から全く直った。
- 23 イエスはその管理者の家に来られて、笛吹く者たちや騒いでいる群衆を見て、
- 24 言われた。「あちらに行きなさい。その<sup>73</sup>子は死んだのではない。眠っているのです。」すると、彼らはイエスを  
あざ笑った。
- 25 イエスは群衆を外に出してから、うちにお入りになり、少女の手を取られた。すると少女は起き上がった。
- 26 このうわさはその地方全体に広まった。
- 27 イエスがそこを出て、道を通って行かれると、ふたりの盲人が大声で、「ダビデの子よ。私たちをあわれんでく  
ださい」と叫びながらついて来た。
- 28 家に入られると、その盲人たちはみもとにやって来た。イエスが「わたしにそんなことができると信じるのか」と  
言われると、彼らは「そうです。主よ」と言った。
- 29 そこで、イエスは彼らの目にさわって、「あなたがたの信仰のとおりになれ」と言われた。
- 30 すると、彼らの目があいた。イエスは彼らをきびしく戒めて、「決してだれにも知られないように気をつけな  
さい」と言われた。
- 31 ところが、彼らは出て行って、イエスのことをその地方全体に言いふらした。



- 32 この人たちが出て行くと、見よ、悪霊あくれいにつかれて口のきけない人が、みもとに連れて来られた。
- 33 悪霊あくれいが追い出されると、その人はものを言った。群衆ぐんしゆうは驚おどろいて、「こんなことは、イスラエルでいまだかつて見たことがない」と言った。
- 34 しかし、パリサイ人たちは、「彼は悪霊あくれいどものかしらを使って、悪霊あくれいどもを追い出しているのだ」と言った。
- 35 それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやされた。
- 36 また、群衆ぐんしゆうを見て、羊飼ひつじいのない羊のように、**74**弱たおり果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。
- 37 そのとき、弟子でしたちに言われた。「収穫しゆうかくは多いが、働き手が少ない。
- 38 だから、収穫しゆうかくの主いのに、収穫しゆうかくのために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」

# 一〇章

1 イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追出し、あらゆる病氣、あらゆるわずらいをいやすためであった。

2 さて、十二使徒の名は次のとおりである。まず、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、

3 ビリポと<sup>75</sup>バルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、

4 熱心党员シモンとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。

5 イエスは、この十二人を遣わし、そのとき彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行つてはいけません。サマリヤ人の町に入つてはいけません。

6 イスラエルの家の失われた羊のところにいきなさい。

7 行つて、『天の御国が近づいた』と<sup>76</sup>宣べ伝えなさい。

8 病人をいやし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊を追出しなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

9 銅巻に金貨や銀貨や銅貨を入れてはいけません。

10 旅行用の袋も、二枚目の下着も、くつも、杖も持たずに行きなさい。働く者が食べ物を与えられるのは当然だからです。

11 どんな町や村に入つても、そこでだれが適当な人かを調べて、そこを立ち去るまで、その人のところにとどまりなさい。

12 その家に入るときには、平安を祈るあいさつをしなさい。

13 その家がそれにふさわしい家なら、その平安はきつとその家に来るし、もし、ふさわしい家でないなら、その平安はあなたがたのところに返つて来ます。

14 もしだれも、あなたがたを受け入れず、あなたがたのことに耳を傾けないなら、その家またはその町を出て行くときに、あなたがたの足のちりを払い落としなさい。

15 まことに、あなたがたに告げます。さばきの日には、ソドムとゴモラの地でも、その町よりはまた<sup>77</sup>罰が軽いのです。

16 いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。

17 人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを<sup>78</sup>議会に引き渡し、会堂でむち打ちますから。

18 また、あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、<sup>79</sup>彼らと異邦人たちにあかしをするためです。

19 人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。

20 というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。

21 兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に立ち逆らつて、彼らを死なせます。

22 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

23 彼らがこの町であなたがたを迫害するなら、<sup>80</sup>次の町にのがれなさい。というわけは、確かなことをあなたがたに告げるのですが、人の子が来るときまでに、あなたがたは決してイスラエルの町々を巡り尽くせないからです。

24 <sup>81</sup>弟子はその師にまさらず、しもべはその主人にまさりません。

25 弟子がその師のようになれば十分だし、しもべがその主人のようになれば十分です。彼らは家長を<sup>82</sup>ベルゼブルと呼ぶぐらいいですから、ましてその家族の者のことは、何と呼ぶでしょう。

26 だから、彼らを恐れてはいけません。おおわれているもので、現されないものではなく、隠されているもので知られずに済むものはありません。

27 わたしが暗やみであなたがたに話すことを明るみで言いなさい。また、あなたがたが耳もとで聞くことを屋上で言い広めなさい。

28 からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。

29 二羽の雀は—<sup>83</sup>アサリオンで売つていでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの<sup>84</sup>父のお祈りなしには地に落ちることはありません。

30 また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。

- 31 だから恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です。
- 32 ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。
- 33 しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。
- 34 わたしが来たのは地に平和を<sup>85</sup>もたらすためだと思っ<sup>すずめ</sup>てはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。
- 35 なぜなら、わたしは人をその父に、娘<sup>むすめ</sup>をその母に、嫁<sup>よめ</sup>をそのしゅうとめに逆<sup>さか</sup>らわせるために来たからです。
- 36 さらに、家族の者がその人の敵<sup>てき</sup>となります。
- 37 わたしよりも父や母を愛<sup>あい</sup>する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘<sup>むすこ</sup>を愛<sup>むすめ</sup>する者は、わたしにふさわしい者ではありません。
- 38 自分の十字架<sup>じゆうじか</sup>を負<sup>お</sup>ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。
- 39 自分のいのちを<sup>86</sup>自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のもの<sup>つか</sup>とします。
- 40 あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣<sup>つか</sup>わした方を受け入れるのです。
- 41 預言者を預言者<sup>よげんしや</sup>だというので受け入れる者は、預言者の受ける報<sup>むく</sup>いを受けます。また、義人を義人<sup>ぎじん</sup>だということで受け入れる者は、義人<sup>ぎじん</sup>の受ける報<sup>むく</sup>いを受けます。
- 42 わたしの弟子だというので、この<sup>87</sup>小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報<sup>みづいつぱい</sup>いに漏れることはありません。」

## 一章

1 イエスはこのように十二弟子に<sup>で し</sup>88注意<sup>あた</sup>を与え、それを終えられると、彼らの町々で教えたり<sup>の</sup>89宣べ伝えたりするため、そこを立ち去られた。

2 さて、獄中でキリストのみわざについて聞いたヨハネは、その弟子たちに託して、

3 イエスにこう言い送った。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。」

4 イエスは答えて、彼らに言われた。「あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告<sup>ほう</sup>しなさい。

5 目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツァラトに冒<sup>おか</sup>された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに<sup>の</sup>90福音<sup>ふくいん</sup>が宣べ伝えられている。

6 だれでもわたしに<sup>の</sup>91つまづかない者は幸いです。」

7 この人たちが行ってしまうと、イエスは、ヨハネについて群衆<sup>ぐんしゅう</sup>に話<sup>わ</sup>しだされた。「あなたがたは、何を見に荒野<sup>あら の</sup>に出て行ったのですか。風に揺れる葦<sup>あし</sup>ですか。

8 でなかったら、何を見に行ったのですか。柔らかい着物を着た人ですか。柔らかい着物を着た人なら王<sup>やわ</sup>の<sup>きゆうでん</sup>92宮殿<sup>きゆうでん</sup>にいます。

9 でなかったら、なぜ行ったのですか。預言者<sup>よげんしや</sup>を見るためですか。そのとおり。だが、わたしが言いましょ。預言者<sup>よげん</sup>よりもすぐれた者をです。

10 この人こそ、

『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣<sup>つか</sup>わし、

あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』

と書かれているその人です。

11 まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者<sup>の</sup>の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国<sup>みくに</sup>の一番小さい者でも、彼より偉大<sup>たい</sup>です。

12 バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国<sup>みくに</sup>は激しく攻められています。そして、激しく攻める者<sup>はげ</sup>たちがそれを奪<sup>せ</sup>い取っています。

13 ヨハネに至るまで、すべての預言者<sup>よげんしや</sup>たちと律法<sup>りつぽう</sup>とが預言<sup>よげん</sup>をしたのです。

14 あなたがたが進んで受け入れるなら、実はこの人こそ、きたるべきエリヤなのです。

15 耳のある者は聞きなさい。

16 この時代は何にたとえたらよいでしょう。市場にすわっている子どもたちのようです。彼らは、ほかの子どもたち<sup>の</sup>に呼びかけて、

17 こう言うのです。

『笛<sup>ふえ</sup>を吹いてやっても、君たちは踊<sup>おど</sup>らなかった。

弔<sup>とむら</sup>いの歌を歌ってやっても、<sup>の</sup>93悲<sup>かな</sup>しなかつた。』

18 ヨハネが来て、食べも飲みもしないと、人々は『あれは悪霊<sup>あくれい</sup>につかれているのだ』と言い、

19 人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『あれ見よ。食<sup>し</sup>いんぼうの大酒<sup>しゆべい</sup>飲み、取税人<sup>しゆでい</sup>や罪人<sup>つみびと</sup>の仲間だ』と言います。でも、知恵<sup>ちえ</sup>の正しいことは、その行<sup>い</sup>いが証明<sup>しやうめい</sup>します。」

20 それから、イエスは、数々の<sup>の</sup>94力<sup>ちから</sup>あるわざの行われた町々が悔い改めなかつたので、責め始められた。

21 「ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちのうちで行われた力あるわざが、もしもツロとシドンで行われたのだったら、彼らはとうの昔に荒布<sup>あらふ</sup>をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。

22 しかし、そのツロとシドンのほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえたちよりは罰<sup>ばつ</sup>が軽いのだ。

23 カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスに落とされるのだ。おまえの中でなされた力あるわざが、もしもソドムでなされたのだったら、ソドムはきょうまで残っていたことだろう。

24 しかし、そのソドムの地のほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえよりは罰<sup>ばつ</sup>が軽いのだ。」

25 そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢<sup>かしこ</sup>い者<sup>ちえ</sup>や知恵<sup>ちえ</sup>のある者<sup>かく</sup>には隠<sup>かく</sup>して、幼子<sup>おきな</sup>たちに現<sup>あらわ</sup>してくださいました。

26 そうです、父よ。これがみこころになつたことでした。

27 すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子<sup>の</sup>を<sup>95</sup>知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者<sup>の</sup>がありません。

28 すべて、<sup>の</sup>96疲<sup>つか</sup>れた人、重荷<sup>おもに</sup>を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

29 わたしは心優<sup>こころやさ</sup>しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そ

うすればたましいに安らぎが来ます。

30 わたしのくびきは<sup>97</sup>負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

## 一二章

- 1 そのころ、イエスは、安息日<sup>あんそくにち</sup>に麦畑<sup>でし</sup>を通られた。弟子たちはひもじくなったので、穂<sup>ほ</sup>を摘<sup>つ</sup>んで食べた。
- 2 すると、パリサイ人<sup>びと</sup>たちがそれを見つけて、イエスに言った。「ご覧なさい。あなたの弟子たちが、安息日<sup>あんそくにち</sup>にしてはならないことをしています。」
- 3 しかし、イエスは言われた。「ダビデとその連れの者<sup>そな</sup>たちが、ひもじかったときに、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。
- 4 神の家<sup>と</sup>に入<sup>とも</sup>って、祭司<sup>あんそくにち</sup>のほかは自分も供<sup>しんせい</sup>の者<sup>わか</sup>たちも食<sup>つみ</sup>べてはならない供<sup>りつぱう</sup>えのパン<sup>あんそくにち</sup>を食<sup>つみ</sup>べました。
- 5 また、安息日<sup>あんそくにち</sup>に宮<sup>あんそくにち</sup>にいる祭司<sup>しんせい</sup>たちは安息日<sup>98</sup>の神聖<sup>わか</sup>を冒<sup>つみ</sup>しても罪<sup>りつぱう</sup>にならないということを、律法<sup>あんそくにち</sup>で読んだことはな
- 6 いのですか。
- 7 『わたしはあわれみは好<sup>つみ</sup>むが、いけにえは好<sup>つみ</sup>まない』ということがどういう意味<sup>あんそくにち</sup>かを知<sup>つみ</sup>っていたら、あなたがたは、罪<sup>あんそくにち</sup>のない者<sup>あんそくにち</sup>たちを罪<sup>あんそくにち</sup>に定めはしなかったでしょう。
- 8 人の子<sup>あんそくにち</sup>は安息日<sup>あんそくにち</sup>の主<sup>あんそくにち</sup>です。」
- 9 イエスはそこを去<sup>あんそくにち</sup>って、会堂<sup>あんそくにち</sup>に入<sup>あんそくにち</sup>られた。
- 10 そこに片手<sup>かたて</sup>のなえた人<sup>うづ</sup>がいた。そこで彼らはイエスに質<sup>しつもん</sup>問<sup>あんそくにち</sup>して「安息日<sup>しつもん</sup>にいやすのは正<sup>あんそくにち</sup>しいことでしょうか」と言<sup>しつもん</sup>った。イエスを訴<sup>しつもん</sup>えるためであ<sup>しつもん</sup>った。
- 11 イエスは彼らに言<sup>びき</sup>われた。「あなたがたのうち、だれかが一匹<sup>あんそくにち</sup>の羊<sup>あな</sup>を持<sup>あな</sup>っていて、もしその羊<sup>あな</sup>が安息日<sup>あな</sup>に穴<sup>あな</sup>に落ちたら、それを引き上げてやらないでしょうか。
- 12 人間<sup>あな</sup>は羊<sup>あな</sup>より、はるかに値<sup>あな</sup>うちのあるものでしょう。それなら、安息日<sup>あな</sup>に良いことをすることは、正しいです。」
- 13 それから、イエスはそ<sup>の</sup>の人に、「手<sup>の</sup>を伸ばしなさい」と言<sup>の</sup>われた。彼<sup>の</sup>が手<sup>の</sup>を伸ばすと、手<sup>の</sup>は直<sup>の</sup>って、もう一方<sup>の</sup>の手<sup>の</sup>と同じように<sup>99</sup>な<sup>の</sup>った。
- 14 パリサイ人は出<sup>びと</sup>て行<sup>びと</sup>って、どのようにしてイエスを滅<sup>ほろ</sup>ぼそうかと相<sup>あ</sup>談<sup>あ</sup>した。
- 15 イエスはそれを知<sup>あ</sup>って、そこを立ち去<sup>あ</sup>られた。すると多く<sup>あ</sup>の人<sup>あ</sup>がついて来<sup>あ</sup>たので、彼ら<sup>あ</sup>をみないやし、
- 16 そして、ご自分<sup>よげんしや</sup>のことを人々<sup>あ</sup>に知らせないようにと、彼ら<sup>あ</sup>を戒<sup>あ</sup>められた。
- 17 これは、預<sup>あ</sup>言<sup>あ</sup>者<sup>あ</sup>イザヤを通<sup>あ</sup>して言<sup>あ</sup>われた事<sup>あ</sup>が成<sup>あ</sup>就<sup>あ</sup>するためであ<sup>あ</sup>った。
- 18 「これぞ、わたし<sup>あ</sup>の選<sup>あ</sup>んだわたし<sup>あ</sup>の<sup>100</sup>しもべ、
- わたし<sup>あ</sup>の心<sup>あ</sup>の喜<sup>あ</sup>ぶわたし<sup>あ</sup>の愛<sup>あ</sup>する者<sup>あ</sup>。
- わたしは彼<sup>あ</sup>の上にわたし<sup>あ</sup>の霊<sup>あ</sup>を置<sup>あ</sup>き、
- 彼は<sup>あ</sup><sup>101</sup>異<sup>あ</sup>邦<sup>あ</sup>人<sup>あ</sup>に<sup>102</sup>公<sup>あ</sup>義<sup>あ</sup>を宣<sup>あ</sup>べる。
- 19 争<sup>あ</sup>うこともなく、叫<sup>あ</sup>ぶこともせず、
- 大<sup>あ</sup>路<sup>あ</sup>でその声<sup>あ</sup>を聞<sup>あ</sup>く者<sup>あ</sup>もない。
- 20 彼はいたんだ葦<sup>あ</sup>を折<sup>あ</sup>ることもなく、
- くすぶる燈<sup>あ</sup>心<sup>あ</sup>を消<sup>あ</sup>すこともない、
- <sup>103</sup>公<sup>あ</sup>義<sup>あ</sup>を勝<sup>あ</sup>利<sup>あ</sup>に導<sup>あ</sup>くまでは。
- 21 <sup>104</sup>異<sup>あ</sup>邦<sup>あ</sup>人<sup>あ</sup>は彼<sup>あ</sup>の名<sup>あ</sup>に望<sup>あ</sup>みをかけ<sup>あ</sup>る。」
- 22 そのとき、悪<sup>あ</sup>霊<sup>あ</sup>につか<sup>あ</sup>れて、目<sup>あ</sup>も見<sup>あ</sup>えず、口<sup>あ</sup>もきけ<sup>あ</sup>ない人<sup>あ</sup>が連<sup>あ</sup>れて来<sup>あ</sup>られた。イエス<sup>あ</sup>が彼<sup>あ</sup>をい<sup>あ</sup>やされたので、そ<sup>あ</sup>の人<sup>あ</sup>はも<sup>あ</sup>の言<sup>あ</sup>い、目<sup>あ</sup>も見<sup>あ</sup>えるようにな<sup>あ</sup>った。
- 23 群<sup>あ</sup>衆<sup>あ</sup>はみな驚<sup>あ</sup>いて言<sup>あ</sup>った。「この人<sup>あ</sup>は、ダビデ<sup>あ</sup>の子<sup>あ</sup>なのだ<sup>あ</sup>らうか。」
- 24 これ<sup>あ</sup>を聞<sup>あ</sup>いたパ<sup>あ</sup>リ<sup>あ</sup>サイ<sup>あ</sup>人<sup>あ</sup>は言<sup>あ</sup>った。「この人<sup>あ</sup>は、た<sup>あ</sup>だ悪<sup>あ</sup>霊<sup>あ</sup>どものか<sup>あ</sup>しら<sup>あ</sup><sup>105</sup>ベルゼブ<sup>あ</sup>ルの力<sup>あ</sup>で、悪<sup>あ</sup>霊<sup>あ</sup>どもを追<sup>あ</sup>い出<sup>あ</sup>しているだけだ。」
- 25 イエス<sup>あ</sup>は彼<sup>あ</sup>らの思<sup>あ</sup>いを知<sup>あ</sup>ってこ<sup>あ</sup>う言<sup>あ</sup>われた。「ど<sup>あ</sup>んな国<sup>あ</sup>でも、内<sup>あ</sup>輪<sup>あ</sup>もめ<sup>あ</sup>して争<sup>あ</sup>えば荒<sup>あ</sup>れすた<sup>あ</sup>れ、ど<sup>あ</sup>んな町<sup>あ</sup>でも家<sup>あ</sup>でも、内<sup>あ</sup>輪<sup>あ</sup>もめ<sup>あ</sup>して争<sup>あ</sup>えば立<sup>あ</sup>ち行<sup>あ</sup>きませ<sup>あ</sup>ん。
- 26 もし、サ<sup>あ</sup>タン<sup>あ</sup>がサ<sup>あ</sup>タン<sup>あ</sup>を追<sup>あ</sup>い出<sup>あ</sup>して<sup>あ</sup>いて仲<sup>あ</sup>間<sup>あ</sup>割<sup>あ</sup>れしたのだ<sup>あ</sup>ったら、ど<sup>あ</sup>うしてそ<sup>あ</sup>の国<sup>あ</sup>は立<sup>あ</sup>ち行<sup>あ</sup>くでし<sup>あ</sup>ょう。
- 27 また、もしわ<sup>あ</sup>たし<sup>あ</sup>がベルゼブ<sup>あ</sup>ルによ<sup>あ</sup>って悪<sup>あ</sup>霊<sup>あ</sup>どもを追<sup>あ</sup>い出<sup>あ</sup>しているのなら、あ<sup>あ</sup>なた<sup>あ</sup>がたの<sup>106</sup>子<sup>あ</sup>らはだ<sup>あ</sup>れによ<sup>あ</sup>って追<sup>あ</sup>い出<sup>あ</sup>すのですか。だ<sup>あ</sup>から、あ<sup>あ</sup>なた<sup>あ</sup>がたの<sup>あ</sup>子<sup>あ</sup>らが、あ<sup>あ</sup>なた<sup>あ</sup>がたをさ<sup>あ</sup>ばく人<sup>あ</sup>とな<sup>あ</sup>るのです。
- 28 し<sup>あ</sup>かし、わ<sup>あ</sup>たし<sup>あ</sup>が神<sup>あ</sup>の御<sup>あ</sup>霊<sup>あ</sup>によ<sup>あ</sup>って悪<sup>あ</sup>霊<sup>あ</sup>どもを追<sup>あ</sup>い出<sup>あ</sup>しているのなら、も<sup>あ</sup>う神<sup>あ</sup>の国<sup>あ</sup>はあ<sup>あ</sup>なた<sup>あ</sup>がたの<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>ころに<sup>あ</sup>来<sup>あ</sup>てい<sup>あ</sup>るのです。
- 29 強<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>人<sup>あ</sup>の家<sup>あ</sup>に入<sup>あ</sup>って家<sup>あ</sup>財<sup>あ</sup>を奪<sup>あ</sup>い取<sup>あ</sup>ろうとす<sup>あ</sup>るなら、ま<sup>あ</sup>ずそ<sup>あ</sup>の人<sup>あ</sup>を縛<sup>あ</sup>ってしま<sup>あ</sup>わないで、ど<sup>あ</sup>うしてそ<sup>あ</sup>のよう<sup>あ</sup>なこ<sup>あ</sup>とが<sup>あ</sup>でき<sup>あ</sup>ましょ<sup>あ</sup>うか。そ<sup>あ</sup>のよう<sup>あ</sup>にして初<sup>あ</sup>めて、そ<sup>あ</sup>の家<sup>あ</sup>を略<sup>あ</sup>奪<sup>あ</sup>するこ<sup>あ</sup>ともでき<sup>あ</sup>るのです。
- 30 わ<sup>あ</sup>たし<sup>あ</sup>の味<sup>あ</sup>方<sup>あ</sup>でな<sup>あ</sup>い者<sup>あ</sup>はわ<sup>あ</sup>たし<sup>あ</sup>に逆<sup>あ</sup>らう者<sup>あ</sup>であ<sup>あ</sup>り、わ<sup>あ</sup>たし<sup>あ</sup>ととも<sup>あ</sup>に集<sup>あ</sup>めな<sup>あ</sup>い者<sup>あ</sup>は散<sup>あ</sup>らす者<sup>あ</sup>です。

- 31 だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。しかし、御霊に逆らう冒瀆は赦されません。
- 32 また、人の子に逆らうことばを口にする者でも、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません。
- 33 木が良ければ、その実も良いとし、木が悪ければその実も悪いとしなさい。木のよしあしはその実によって知られるからです。
- 34 まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましょう。心に満ちていることを口が話すのです。
- 35 良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。
- 36 わたしはあなたがたに、こう言いましょう。人はその口にするあらゆる<sup>107</sup>むだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。
- 37 あなたが正しいとされるのは、あなたのことばによるのであり、罪に定められるのも、あなたのことばによるのです。」
- 38 そのとき、<sup>りつぼうがくしや</sup>律法学者、<sup>びと</sup>パリサイ人たちのうちのある者がイエスに答えて言った。「先生。私たちは、あなたから<sup>108</sup>しるしを見せていただきたいのです。」
- 39 しかし、イエスは答えて言われた。「悪い、<sup>かんいん</sup>姦淫の時代はしるしを求めています。だが<sup>よげんしや</sup>預言者ヨナ<sup>あた</sup>のしるしのほかには、しるしは与えられません。
- 40 ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、<sup>どうよう</sup>同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。
- 41 ニネベの人々が、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです。
- 42 南の女王が、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、彼女はソロモン<sup>あゝ</sup>の恵恩を聞くために地の果てから来たからです。しかし、見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです。
- 43 汚れた<sup>けが</sup>霊が人から出て行って、水の<sup>れい</sup>ない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。
- 44 そこで、『出て来た自分の家に帰ろう』と言って、帰って見ると、家はあいていて、掃除してきちんとかたづいていました。
- 45 そこで、出かけて行って、自分よりも悪い<sup>れい</sup>ほかの霊を七つ連れて来て、みな入り込んでそこに住みつくのです。そうなると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです。」
- 46 イエスがまだ群衆に話しておられるときに、イエスの母と兄弟たちが、イエスに何か話そうとして、外に立っていた。
- 47 すると、だれかが言った。「<sup>らん</sup>ご覧なさい。あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに話そうとして外に立っています。」
- 48 しかし、イエスはそう言っている人に答えて言われた。「わたしの母とはだれですか。また、わたしの兄弟たちとはだれですか。」
- 49 それから、イエスは手<sup>でし</sup>を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。
- 50 天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」

## 一三章

- 1 その日、イエスは家を出て、湖のほとりにすわっておられた。
- 2 すると、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に移って腰をおろされた。それで群衆はみな浜に立っていた。
- 3 イエスは多くのことを、彼らにたとえで話して聞かされた。
- 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。
- 4 蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると鳥が来て食べてしまった。
- 5 また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。
- 6 しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。
- 7 また、別の種はいばらの<sup>109</sup>中に落ちたが、いばらが伸びて、ふさいでしまった。
- 8 別の種は良い地に落ちて、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだ。
- 9 耳のある者は聞きなさい。」
- 10 すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」
- 11 イエスは答えて言われた。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。
- 12 というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。
- 13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。
- 14 こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。
- 『あなたがたは確かに聞きはするが、  
決して悟らない。  
確かに見てはいるが、  
決してわからない。』
- 15 この民の心は鈍くなり、  
その耳は遠く、  
目はつぶっているからである。  
それは、彼らがその目で見、その耳で聞き、  
その心で悟って立ち返り、  
わたしにいやされることのないためである。』
- 16 しかし、あなたがたの目は見えているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。
- 17 まことに、あなたがたに告げます。多くの預言者や義人たちが、あなたがたの见ているものを見たいと、切に願ったのに見られず、あなたがたの聞いていることを聞きたいと、切に願ったのに聞けなかったのです。
- 18 ですから、種蒔きのたとえを聞きなさい。
- 19 御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。
- 20 また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。
- 21 しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。
- 22 また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この<sup>110</sup>世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。
- 23 ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。」
- 24 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。
- 「天の御国は、こういう人にたとえることができます。ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。
- 25 ところが、人々の眠っている間に、彼の敵が来て麦の中に毒麦を蒔いて行った。
- 26 <sup>111</sup>麦が芽ええ、やがて実ったとき、毒麦も現れた。
- 27 それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。<sup>112</sup>どうして毒麦が出たのでしょうか。』
- 28 主人は言った。『敵のやったことです。』すると、しもべたちは言った。『では、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』
- 29 だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。』



30 だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましよう。』」

31 イエスは、また別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取つて、畑に蒔くと、

32 どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。」

33 イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取つて、三<sup>113</sup>サトンの粉の中に入れると、全体がふくらんで来ます。」

34 イエスは、これらのことをみな、たとえで群衆に話され、たとえを使わずには何もお話しにならなかった。

35 それは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。

「わたしはたとえ話をもって口を開き、  
世の初めから隠されていることどもを物語ろう。」

36 それから、イエスは群衆と別れて家に入られた。すると、弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。

37 イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は人の子です。」

38 畑はこの世界のこと、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。

39 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の<sup>114</sup>終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。

40 ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。

41 人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、<sup>115</sup>つまずきを与える者や不法を行う者たちをみな、御国から取り集めて、

42 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。

43 そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。

44 天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。

45 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。

46 すばらしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。

47 また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。

48 網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨てるのです。

49 この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、

50 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。

51 あなたがたは、これらのことがみなわかりましたか。」彼らは「はい」とイエスに言った。

52 そこで、イエスは言われた。「だから、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。」

53 これらのたとえを話し終えると、イエスはそこを去られた。

54 それから、ご自分の郷里に行つて、会堂で人々を<sup>116</sup>教え始められた。すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と<sup>117</sup>不思議な力をどこで得たのでしょうか。」

55 この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか。

56 妹たちもみな私たちといっしょにいるではありませんか。とすると、いったいこの人は、これらのものをどこから得たのでしょうか。」

57 こうして、彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」

58 そして、イエスは、彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの<sup>118</sup>奇蹟をなさらなかった。

## 一四章

- 1 そのころ、<sup>こくしゆ</sup>国主ヘロデは、イエスのうわさを聞いて、  
2 侍従<sup>じじゆう</sup>たちに言った。「あれはバプテスマのヨハネだ。ヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんなが彼のうちに働いているのだ。」  
3 実は、このヘロデは、自分の兄弟<sup>つま</sup>ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕らえて縛り、牢<sup>と</sup>に入れたのであった。  
4 それは、ヨハネが彼に、「あなたが彼女<sup>い</sup>をめとするのは不法です」と言い張ったからである。  
5 ヘロデはヨハネを殺したかったが、群衆<sup>よげんしや</sup>を恐れた。というのは、彼らはヨハネを預言者と認めていたからである。  
6 たまたまヘロデの誕生祝<sup>むすめ</sup>いがあって、ヘロデヤの娘<sup>むすめ</sup>がみな<sup>ちか</sup>の<sup>かた</sup>119前<sup>おと</sup>で踊りを踊ってヘロデを喜ばせた。  
7 それで、彼は、その娘に、願<sup>むすめ</sup>う物は何でも必ず上げると、誓<sup>ちか</sup>って堅<sup>かた</sup>い約束をした。  
8 ところが、娘は母親にそそのかされて、こう言った。「今ここに、バプテスマのヨハネの首<sup>おんしゆう</sup>を盆<sup>の</sup>に載せて私に下ささい。」  
9 王は心を痛めたが、自分の誓<sup>ちか</sup>いもあり、また列席の人々の手前もあって、与えるように命令した。  
10 彼は人をやって、牢<sup>ろう</sup>の中でヨハネの首<sup>おんしゆう</sup>をはねさせた。  
11 そして、その首は盆に載せて運ばれ、少女に与えられたので、少女はそれを母親のところに持って行つた。  
12 それから、ヨハネの弟子<sup>でし</sup>たちがやって来て、死体を引き取って葬<sup>ほうむ</sup>つた。そして、イエスのところ<sup>ほうこく</sup>に行つて報告した。  
13 イエスはこのことを聞かれると、舟<sup>ふね</sup>でそこを去り、自分だけで寂しい所<sup>さび</sup>に行かれた。すると、群衆<sup>ぐんしゆう</sup>がそれと聞いて、町々から、歩いてイエスのあとを追つた。  
14 イエスは舟から上<sup>あ</sup>がると、多くの群衆を見、彼らを深くあわれんで、彼らの病気をいやされた。  
15 夕方<sup>ゆふぐ</sup>になつたので、弟子<sup>でし</sup>たちはイエスのところ<sup>さび</sup>に来て言つた。「ここは寂しい所<sup>さび</sup>ですし、時刻ももう回つています。ですから群衆を解散させてください。そして村に行つてめいめいで食物を買<sup>か</sup>うようにさせてください。」  
16 しかし、イエスは言われた。「彼らが出かけて行く必要はありません。あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」  
17 しかし、弟子<sup>でし</sup>たちはイエスに言つた。「ここには、パンが五つと魚<sup>うお</sup>が二匹よりほかありません。」  
18 すると、イエスは言われた。「それを、ここに持つて来なさい。」  
19 そしてイエスは、群衆に命じて草の上<sup>ぐんしゆう</sup>にすわらせ、五つのパンと二匹の魚<sup>うお</sup>を取り、天を見上げて、それらを祝福し、パンを裂いてそれを弟子<sup>でし</sup>たちに与えられたので、弟子<sup>でし</sup>たちは群衆に配つた。  
20 人々はみな、食べて満腹<sup>みん</sup>した。そして、パン切れの余りを取り集めると、十二の<sup>の</sup>120かご<sup>かご</sup>にいっぱいあつた。  
21 食べた者は、女と子どもを除いて、男五千人ほどであつた。  
22 それからすぐ、イエスは弟子<sup>でし</sup>たちを強<sup>し</sup>いて舟<sup>ふね</sup>に乗り込ませて、自分より先に向こう岸<sup>ぐんしゆう</sup>へ行かせ、その間に群衆を帰<sup>かへ</sup>してしまわれた。  
23 群衆を帰<sup>かへ</sup>したあとで、祈るために、ひとりで山に登られた。夕方<sup>ゆふぐ</sup>になつたが、まだそこに、ひとりでおられた。  
24 しかし、舟は、陸からもう<sup>の</sup>121何キロメートルも離れていたが、風が向かい風<sup>なや</sup>なので、波に悩まされていた。  
25 すると、<sup>の</sup>122夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところ<sup>うたが</sup>に行かれた。  
26 弟子<sup>でし</sup>たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊<sup>おそ</sup>だ」と言つて、<sup>の</sup>123おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫<sup>おこ</sup>び声を上げた。  
27 しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「<sup>の</sup>124しつかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。  
28 すると、ペテロが答えて言つた。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いて<sup>の</sup>125ここまで来い、とお命じになってください。」  
29 イエスは「来なさい」と言われた。そこで、ペテロは舟から出で、水の上を歩いてイエスのほうに行つた。  
30 ところが、風を見て、こわく<sup>の</sup>なり、沈みかけたので叫<sup>おこ</sup>び出し、「主よ。助けてください」と言つた。  
31 そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰<sup>しんこう</sup>の薄い人だな。なぜ疑うのか。」  
32 そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。  
33 そこで、舟の中にいた者たちは、イエスを拝<sup>た</sup>いで、「確かにあなたは神の子です」と言つた。  
34 彼らは湖を渡つてゲネサレの地に着いた。  
35 すると、その地の人々は、イエスと<sup>の</sup>126気がついて、付近の地域<sup>ちいき</sup>にくまなく知らせ、病人という病人をみな、みもとに連れて来た。  
36 そして、せめて彼らに、着物のふさにでもさわらせてやつてくださいと、イエスにお願いした。そして、さわつた人々はみな、いやされた。

# 一五章

- 1 そのころ、パリサイ人や律法学者たちが、エルサレムからイエスのところに来て、言った。
- 2 「あなたのお弟子たちは、なぜ長老たちの言い伝えを犯すのですか。パンを食べるときに手を洗っていないではありませんか。」
- 3 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを犯すのですか。」
- 4 神は『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をののしる者は死刑に処せられる』と言われたのです。
- 5 それなのに、あなたがたは、『だれでも、父や母に向かって、私からあなたのために差し上げられる物は、供え物になりましと言う者は、
- 6 <sup>127</sup>その物をもって父や<sup>128</sup>母を尊んではならない』と言っています。こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神の<sup>129</sup>ことばを無にしてみました。
- 7 偽善者たち。イザヤはあなたがたについて預言しているが、まさにそのとおりです。
- 8 『この民は、口先ではわたしを敬うが、  
その心は、わたしから遠く離れている。
- 9 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。  
人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』」
- 10 イエスは群衆を呼び寄せて言われた。「聞いて悟りなさい。
- 11 口に入る物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します。」
- 12 そのとき、弟子たちが、近寄って来て、イエスに言った。「パリサイ人が、みことばを聞いて、<sup>130</sup>腹を立てたのをご存じですか。」
- 13 しかし、イエスは答えて言われた。「わたしの天の父がお植えにならなかった木は、みな根こそぎにされます。
- 14 彼らのことは放っておきなさい。彼らは<sup>131</sup>盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。」
- 15 そこで、ペテロは、イエスに答えて言った。「私たちに、そのたとえを説明してください。」
- 16 イエスは言われた。「あなたがたも、まだわからないのですか。
- 17 口に入る物はみな、腹に入り、かわやに捨てられることを知らないのですか。
- 18 しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。
- 19 悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。
- 20 これらは、人を汚すものです。しかし、洗わない手で食べることは人を汚しません。」
- 21 それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ちのかれた。
- 22 すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」
- 23 しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。そこで、弟子たちはみもとに来て、「あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです」と言ってイエスに願った。
- 24 しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外のところには遣わされていません」と言われた。
- 25 しかし、その女は来て、イエス<sup>132</sup>の前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください」と言った。
- 26 すると、イエスは答えて、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです」と言われた。
- 27 しかし、女は言った。「主よ。そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」
- 28 そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「<sup>133</sup>ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はその時から直った。
- 29 それから、イエスはそこを去って、ガリラヤ湖の岸を行き、山に登って、そこにすわっておられた。
- 30 すると大ぜいの人の群れが、足のなえた者、手足の不自由な者、盲人、口のきけない者、そのほか多くの人をみもとに連れて来た。そして彼らをイエスの足もとに置いたので、イエスは彼らをいやされた。
- 31 それで群衆は、口のきけない者がものを言い、手足の不自由な者が直り、足のなえた者が歩き、盲人たちが見えるようになるのを見て驚いた。そして彼らはイスラエルの神をあがめた。
- 32 イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。彼らを空腹のままに帰せたくありません。途中で動けなくなるといけないから。」

- 33 そこで弟子<sup>でし</sup>たちは言った。「このへんびな所で、こんなに大ぜいの人に、十分食べさせるほどたくさんのパンが、どこから手に入るでしょう。」
- 34 すると、イエスは彼らに言われた。「どれぐらいパンがありますか。」彼らは言った。「七つです。それに、小さい魚<sup>うお</sup>が少しあります。」
- 35 すると、イエスは群衆<sup>ぐんしゅう</sup>に、地面にすわるように命じられた。
- 36 それから、七つのパンと魚<sup>うお</sup>とを取り、感謝<sup>かんしゃ</sup>をささげてからそれを裂<sup>さ</sup>き、弟子<sup>でし</sup>たちに与<sup>あた</sup>えられた。そして、弟子<sup>でし</sup>たちは群衆<sup>ぐんしゅう</sup>に配<sup>くば</sup>った。
- 37 人々はみな、食べて満腹<sup>まんぷく</sup>した。そして、パン切れの余<sup>あま</sup>りを取り集めると、七つのかごにいっぱいあった。
- 38 食べた者は、女と子どもを除<sup>のぞ</sup>いて、男四千人<sup>おとよっせん</sup>であった。
- 39 それから、イエスは群衆<sup>ぐんしゅう</sup>を解散<sup>さんさん</sup>させて舟<sup>ふね</sup>に乗り、マガダン地方に行かれた。

## 一六章

- 1 パリサイ人やサドカイ人たちがみそばに寄って来て、イエスをためそうとして、天からのしるしを見せてくださいと頼んだ。
- 2 しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「<sup>134</sup>あなたがたは、夕方には、『夕焼けだから晴れる』と言うし、
- 3 朝には、『朝焼けでどんよりしているから、きょうは荒れ模様だ』と言う。そんなによく、空模様の見分け方を知っていながら、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか。
- 4 悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」そう言って、イエスは彼らを残して去って行かれた。
- 5 弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れた。
- 6 イエスは彼らに言われた。「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」
- 7 すると、彼らは、「これは私たちがパンを持って来なかったからだ」と言って、議論を始めた。
- 8 イエスはそれに気づいて言われた。「あなたがた、信仰の薄い人たち。パンがないからだなどと、なぜ論じ合っているのですか。
- 9 まだわからないのですか、覚えていないのですか。五つのパンを五千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。
- 10 また、七つのパンを四千人に分けてあげて、なお幾かご集めましたか。
- 11 わたしの言ったのは、パンのことなどではないことが、どうしてあなたがたには、わからないのですか。ただ、パリサイ人やサドカイ人たちのパン種に気をつけることです。」
- 12 彼らはようやく、イエスが気をつけよと言われたのは、パン種のことでなくて、パリサイ人やサドカイ人たちの教えのことであることを悟った。
- 13 さて、ヒリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」
- 14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」
- 15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」
- 16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」
- 17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「<sup>135</sup>バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは<sup>136</sup>人間ではなく、天にいますわたしの父です。
- 18 ではわたしもあなたに言います。あなたは<sup>137</sup>ペテロです。わたしはこの<sup>138</sup>岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。
- 19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上で<sup>139</sup>つなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で<sup>140</sup>解くなら、それは天においても解かれています。」
- 20 そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。
- 21 その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。
- 22 するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。<sup>141</sup>神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに<sup>142</sup>起こるはずはありません。」
- 23 しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」
- 24 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。
- 25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。
- 26 人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。
- 27 人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行いに応じて報いをします。
- 28 まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々がいます。」

## 一七章

- 1 それから六日たつて、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。<sup>みちび</sup>
- 2 そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。
- 3 しかも、モーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているではないか。
- 4 すると、ペテロが口出してイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」
- 5 彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを楽しむ。彼の言うことを聞きなさい」と言う声がした。
- 6 弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。
- 7 すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない」と言われた。
- 8 それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけであった。
- 9 彼らが山を降りるとき、イエスは彼らに、「人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見た幻にだれにも話してはならない」と命じられた。
- 10 そこで、弟子たちは、イエスに尋ねて言った。「すると、律法学者たちが、まずエリヤが来るはずだと言っているのは、どうしてでしょうか。」
- 11 イエスは答えて言われた。「エリヤが来て、すべてのことを立て直すのです。」
- 12 しかし、わたしは言います。エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。人の子もまた、彼らから同じように苦しめられようとしています。」
- 13 そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと気づいた。
- 14 彼らが群衆のところに来たとき、ひとりの人がイエスのそば近くに来て、御前にひざまずいて言った。
- 15 「<sup>143</sup>主よ。私の息子をあわれんでください。<sup>144</sup>てんかんで、たいへん苦しんでおります。何度も何度も火の中に落ちたり、水の中に落ちたりいたします。」
- 16 そこで、その子をお弟子たちのところに連れて来たのですが、直すことができませんでした。」
- 17 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまであなたがたといっしょにいないといけないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」
- 18 そして、イエスがその子をおしかりになると、悪霊は彼から出て行き、その子はその時から直った。
- 19 そのとき、弟子たちはそつとイエスのもとに来て、言った。「なぜ、私たちには悪霊を追い出せなかったのですか。」
- 20 イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに告げます。もし、からし種ほどの信仰があつたら、この山に、『ここからあそこに移れ』と言えば移るのです。どんなことでも、あなたがたにできないことはありません。」
- 21 <sup>145</sup>「ただし、この種のものは、祈りと断食によらなければ出て行きません。」
- 22 彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは彼らに言われた。「人の子は、いまに人々の手に渡されます。」
- 23 そして彼らに殺されるが、三日目によみがえります。」すると、彼らは非常に悲しんだ。
- 24 また、彼らがカペナウムに来たとき、宮の<sup>146</sup>納入金を集める人たちが、ペテロのところに来て言った。「あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか。」
- 25 彼は「納めます」と言つて、家に入ると、先にイエスのほうからこう言い出された。「シモン。どう思いますか。世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか。」
- 26 ペテロが「ほかの人たちからです」と言うと、イエスは言われた。「では、子どもたちにはその義務がないのです。」
- 27 しかし、彼らにつまずきを与えないために、湖に行つて釣りをして、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけると<sup>147</sup>スタテル一枚が見つかるから、それを取つて、わたしとあなたとの分として納めなさい。」



# 一八章

- 1 そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「それでは、天の御国では、だれが一番偉いのでしょうか。」
- 2 そこで、イエスは小さい子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、
- 3 言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも<sup>148</sup>悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、入れません。
- 4 だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。
- 5 また、だれでも、このような子どものひとりを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。
- 6 しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりででもつまずきを与えるような者は、<sup>149</sup>大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。
- 7 つまずきを与えるこの世はわざわざいだ。つまずきが起こるのは避けられないが、つまずきをもたらす者はわざわざいだ。
- 8 もし、あなたの手か足の一つがあなたをつまづかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちに入るほうが、両手両足そろっていて永遠の火に投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。
- 9 また、もし、あなたの一方の目が、あなたをつまづかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。片目でいのちに入るほうが、両目そろっていて燃えるゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。
- 10 あなたがたは、この小さい者たちを、ひとりでも見下げたりしないように気をつけなさい。まことに、あなたがたに告げます。彼らの天の御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。
- 11 <sup>150</sup>〔人の子は、失われている者を救うために来たのです。〕
- 12 あなたがたはどう思いますか。もし、だれかが百匹の羊を持っていて、そのうちの一匹が迷い出たとしたら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。
- 13 そして、もし、いたとなれば、まことに、あなたがたに告げます。その人は迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶのです。
- 14 このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの<sup>151</sup>父のみこところではありません。
- 15 また、もし、あなたの兄弟が<sup>152</sup>罪を犯したなら、行って、<sup>153</sup>ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。
- 16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての<sup>154</sup>事実が確認されるためです。
- 17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。
- 18 まことに、あなたがたに告げます。何でもあなたがたが地上で<sup>155</sup>つなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたがたが地上で<sup>156</sup>解くなら、それは天においても解かれているのです。
- 19 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をついて祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。
- 20 ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」
- 21 そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」
- 22 イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。
- 23 このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。
- 王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。
- 24 清算が始まると、まず一万<sup>157</sup>タラントの借りのあるしもべが、王のところに連れて来られた。
- 25 しかし、彼は返済することができなかったので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。
- 26 それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします』と言った。
- 27 しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を救し、借金を免除してやった。
- 28 ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間、彼から百<sup>158</sup>デナリの借りのある者に会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ』と言った。
- 29 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから』と言って頼んだ。

- 30 しかし彼は承<sup>しょう</sup>知<sup>ち</sup>せず、連れて行って、借金<sup>ろう</sup>を返すまで牢<sup>ろう</sup>に投げ入れた。
- 31 彼の仲間たちは事の成<sup>よ</sup>り行きを見て、非常<sup>ひじょう</sup>に悲しみ、行って、その一部始終<sup>たの</sup>を主人<sup>ゆう</sup>に話した。
- 32 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦<sup>ゆる</sup>してやったのだ。
- 33 私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』
- 34 こうして、主人は怒<sup>いか</sup>って、借金<sup>ろう</sup>を全部返<sup>かへ</sup>すまで、彼<sup>かれ</sup>を獄吏<sup>ごくり</sup>に引き渡<sup>わた</sup>した。
- 35 あなたがたもそれぞれ、心から兄弟を赦<sup>ゆる</sup>さないなら、天のわたしの父も、あなたがたに、このようになさるので  
す。」



## 一九章

- 1 イエスはこの話を終えると、ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行かれた。
- 2 すると、大ぜいの群衆がついて来たので、そこで彼らをいやされた。
- 3 パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」
- 4 イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、
- 5 『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。
- 6 それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」
- 7 彼らはイエスに言った。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」
- 8 イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったではありません。
- 9 まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のために、その妻を離別し、別の女を妻にする者は、<sup>159</sup>姦淫を犯すのです。」<sup>160</sup>
- 10 弟子たちはイエスに言った。「もし妻に対する夫の立場がそんなものなら、結婚しないほうがましです。」
- 11 しかし、イエスは言われた。「そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。ただ、それが許されている者だけができます。
- 12 というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」
- 13 そのとき、イエスに手を置いて祈っていたくために、子どもたちが連れて来られた。ところが、弟子たちは彼らをしかった。
- 14 しかし、イエスは言われた。「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのような者たちの国なのです。」
- 15 そして、手を彼らの上に置いてから、そこを去って行かれた。
- 16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」
- 17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。<sup>161</sup>良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」
- 18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。
- 19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」
- 20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」
- 21 イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」
- 22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。
- 23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。
- 24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」
- 25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」
- 26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」
- 27 そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるでしょうか。」
- 28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。
- 29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、<sup>162</sup>子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その<sup>163</sup>幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。

30 ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。

## 二〇章

- 1 天の御国は、自分のぶどう園で働く労働者を雇いに朝早く出かけた<sup>164</sup>主人のようなものです。
- 2 彼は、労働者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。
- 3 それから、<sup>165</sup>九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。
- 4 そこで、彼は那些人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』
- 5 彼らは出て行った。それからまた、<sup>166</sup>十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。
- 6 また、<sup>167</sup>五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいますか。』
- 7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』
- 8 こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちまでに、賃金を払ってやりなさい。』
- 9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。
- 10 最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。
- 11 そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、
- 12 言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』
- 13 しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。』
- 14 自分の分を取って帰るなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。
- 15 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が<sup>168</sup>気前がいいので、あなたの目には<sup>169</sup>ねたましく思われるのですか。』
- 16 このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」
- 17 さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。
- 18 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。
- 19 そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」
- 20 そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、願いがありますと言った。
- 21 イエスが彼女に、「どんな願いですか」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりはおあなたの右に、ひとりは左にすわれるようにおことばを下さい。」
- 22 けれども、イエスは答えて言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。わたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか。」彼らは「できます」と言った。
- 23 イエスは言われた。「あなたがたはわたしの杯を飲みます。しかし、わたしの右と左にすわることは、このわたしの許すことではなく、わたしの父によって<sup>170</sup>それに備えられた人々があるのです。」
- 24 このことを聞いたほかの十人は、このふたりの兄弟のことで腹を立てた。
- 25 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。
- 26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。
- 27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。
- 28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」
- 29 彼らがエリコを出て行くと、大ぜいの群衆がイエスについて行った。
- 30 すると、道ばたにすわっていたふたりの盲人が、イエスが通られると聞いて、叫んで言った。「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ。」
- 31 そこで、群衆は彼らを黙らせようとして、たしなめたが、彼らはますます、「主よ。私たちをあわれんでください。ダビデの子よ」と叫び立てた。
- 32 すると、イエスは立ち止まって、彼らを呼んで言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」
- 33 彼らはイエスに言った。「主よ。この目をあけていただきたいのです。」

34 イエスはかわいそうに思って、彼らの目にさわられた。すると、すぐさま彼らは見えるようになり、イエスについて行った。

## 二一章

- 1 それから、彼らはエルサレムに近づき、オリーブ山のふもととのベテパゲまで来た。そのとき、イエスは、弟子をふたり使いに出して、
- 2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。そうするとすぐに、ろばがつかがれていて、いっしょにろばの子がいるのに気がつくでしょう。それをほどいて、わたしのところに連れて来なさい。」
- 3 もしだれかが何か言ったら、『主がお入用なのです』と言いなさい。そうすれば、すぐに<sup>わた</sup>171渡してくれます。」
- 4 これは、預言者を通して言われた事が成就するために起こったのである。
- 5 「シオンの娘に伝えなさい。  
『見よ。あなたの王があなたのところに来られる。  
柔和で、ろばの背に乗って、  
それも、荷物を運ぶろばの子に乗って。』」
- 6 そこで、弟子たちは行つて、イエスが命じられたとおりにした。
- 7 そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。
- 8 すると、群衆のうち大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切つて来て、道に敷いた。
- 9 そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言つて叫んでいた。  
「ダビデの子にホサナ。  
祝福あれ。主の御名によって来られる方に。  
ホサナ。いと高き所に。」
- 10 こうして、イエスがエルサレムに入られると、都中がこぞつて騒ぎ立ち、「この方は、どういう方なのか」と言つた。
- 11 群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレの、預言者イエスだ」と言つた。
- 12 それから、イエスは宮に入って、宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。
- 13 そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の<sup>172</sup>巢にしている。」
- 14 また、宮の中で、盲人や足のなえた人たちがみもとに來たので、イエスは彼らをいやされた。
- 15 ところが、祭司長、律法学者たちは、イエスのなされた驚くべきいろいろの事を見、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と言つて叫んでいるのを見て腹を立てた。
- 16 そしてイエスに言つた。「あなたは、子どもたちが何と言っているか、お聞きですか。」イエスは言われた。「聞いています。『あなたは幼子と乳飲み子たちの口に賛美を用意された』とあるのを、あなたがたは読まなかったのですか。」
- 17 イエスは彼らをあとに残し、都を出てベタニヤに行き、そこに泊まれた。
- 18 翌朝、イエスは都に帰る途中、空腹を覚えられた。
- 19 道ばたにいちじくの木が見えたので、近づいて行かれたが、葉のほかは何も無いのに気づかれた。それで、イエスはその木に「おまえの実は、もういつまでも、ならないように」と言われた。すると、たちまちいちじくの木は枯れた。
- 20 弟子たちは、これを見て、驚いて言つた。「どうして、こうすぐにいちじくの木が枯れたのでしょうか。」
- 21 イエスは答えて言われた。「まことに、あなたがたに告げます。もし、あなたがたが、信仰を持ち、疑うことがなければ、いちじくの木になされたようなことができるだけでなく、たとい、この山に向かつて、『動いて、海に入れ』と言つても、そのとおりになります。」
- 22 あなたがたが信じて祈り求めるものなら、何でも与えられます。」
- 23 それから、イエスが宮に入って、教えておられると、祭司長、民の長老たちが、みもとに來て言つた。「何の權威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたがたにその權威を授けたのですか。」
- 24 イエスは答えて、こう言われた。「わたしも一言あなたがたに尋ねましょう。もし、あなたがたが答えるなら、わたしも何の權威によって、これらのことをしているかを話しましょう。」
- 25 ヨハネのバプテスマは、どこから來たものですか。天からですか。それとも人からですか。」すると、彼らはこう言いながら、互いに論じ合つた。「もし、天から、と言えば、それならなぜ、彼を信じなかったか、と言うだろう。」
- 26 しかし、もし、人から、と言えば、群衆がこわい。彼らはみな、ヨハネを預言者と認めているのだから。」
- 27 そこで、彼らはイエスに答えて、「わかりません」と言つた。イエスもまた彼らにこう言われた。「わたしも、何の權威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい。」

28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。

ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『<sup>173</sup>きょう、ぶどう園に行つて働いてくれ』と言つた。

29 兄は答えて『行きます。<sup>174</sup>お父さん』と言つたが、行かなかつた。

30 それから、弟のところに来て、同じように言つた。ところが、弟は答えて『行きたくありません』と言つたが、あとから悪かつたと思つて出かけて行つた。

31 ふたりのうちどちらが、父の願つたとおりにしたのでしょうか。」彼らは言つた。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入っているのです。

32 というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持つて來たのに、彼を信じなかつた。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかつたのです。

33 もう一つのたとえを聞きなさい。

ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造つて、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを<sup>175</sup>農夫たちに貸して、旅に出かけた。

34 さて、<sup>176</sup>収穫の時が近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。

35 すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりはお袋だきにし、もうひとりはお殺し、もうひとりはお石で打つた。

36 そこでもう一度、前よりももっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。

37 しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬つてくれるだろう』と言つて、息子を遣わした。

38 すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合つた。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』

39 そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまつた。

40 この場合、ぶどう園の主人が歸つて來たら、その農夫たちをどうするでしょう。」

41 彼らはイエスに言つた。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」

42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。

『家を建ててゐる者たちの見捨てた石。

それが礎の石になつた。

これは主のなさつたことだ。

私たちの目には、

不思議なことである。』

43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。

44 また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまひます。」

45 祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちをさして話しておられることに気づいた。

46 それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

## 二二章

- 1 イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。
- 2 「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。
- 3 王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。
- 4 それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いておいた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふって、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。」』
- 5 ところが、彼らは気にもかけず、ある者は<sup>177</sup>畑に、別の者は商売に出て行き、
- 6 そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。
- 7 王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。
- 8 そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。
- 9 だから、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさい。』
- 10 それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は<sup>178</sup>客でいっぱいになった。
- 11 ところで、王が客を見ようとして入って来ると、そこに婚禮の礼服を着ていない者がひとりいた。
- 12 そこで、王は言った。『<sup>179</sup>あなたは、どうして礼服を<sup>180</sup>着ないで、ここに入ってきたのですか。』しかし、彼は黙っていた。
- 13 そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ざしりするのだ』と言った。
- 14 招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」
- 15 そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにイエスをことばのわなにかけようかと相談した。
- 16 彼らはその弟子たちを、ヘロデ党の者たちといっしょにイエスのもとにやって、こう言わせた。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、<sup>181</sup>だれをもはばからない方だと存じています。あなたは、人の顔色を見られないからです。
- 17 それで、どう思われるのか言ってください。<sup>182</sup>税金をカイザルに納めることは、<sup>183</sup>律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」
- 18 イエスは彼らの悪意を知って言われた。「偽善者たち。なぜ、わたしをためすのか。
- 19 納め金にするお金をわたしに見せなさい。」そこで彼らは、<sup>184</sup>デナリを一枚イエスのもとに持って来た。
- 20 そこで彼らに言われた。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」
- 21 彼らは、「カイザルのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」
- 22 彼らは、これを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。
- 23 その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て、質問して、
- 24 言った。「先生。モーセは『もし、ある人が子のないまま死んだなら、その弟は兄の妻をめとって、兄のための子をもうけねばならない』と言いました。
- 25 ところで、私たちの間に七人兄弟がありました。長男は結婚しましたが、死んで、子がなかったので、その妻を弟に残しました。
- 26 次男も三男も、七人とも同じようになりました。
- 27 そして、最後に、その女も死にました。
- 28 すると復活の際には、その女は七人のうちだれの妻なのでしょうか。彼らはみな、その女を妻にしたのです。」
- 29 しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。
- 30 復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の<sup>185</sup>御使いたちのようです。
- 31 それに、死人の復活については、神があなたがたに語られた事を、あなたがたは読んだことがないのですか。
- 32 『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」
- 33 群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚いた。
- 34 しかし、パリサイ人たちは、イエスがサドカイ人たちを黙らせたと聞いて、いっしょに集まった。
- 35 そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。
- 36 「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」

- 37 そこで、イエスは彼に言われた。「『心を<sup>つ</sup>尽くし、思いを<sup>つ</sup>尽くし、知力を<sup>つ</sup>尽くして、あなたの神である主を<sup>あい</sup>愛せよ。』
- 38 これがたいせつな第一の<sup>いまし</sup>戒めです。
- 39 『あなたの隣人をあなた自身のように<sup>あい</sup>愛せよ』という第二の<sup>いまし</sup>戒めも、それと同じようにたいせつです。
- 40 律法全体と<sup>よ</sup>預言者とが、この二つの<sup>いまし</sup>戒めにかかっているのです。」
- 41 パリサイ人たちが集まっているときに、イエスは彼らに<sup>たず</sup>尋ねて言われた。
- 42 「あなたがたは、キリストについて、どう思いますか。彼はだれの子ですか。」彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」
- 43 イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは、御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>によって、彼を主と<sup>よ</sup>呼び、
- 44 『主は私の主<sup>で</sup>に言われた。  
「わたしがあなたの敵<sup>したか</sup>を  
あなたの足の下に<sup>したが</sup>従わせるまでは、  
わたしの右の座<sup>さ</sup>に着いていなさい。」』
- と言っているのですか。
- 45 ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう。」
- 46 それで、だれもイエスに一言も答えることができなかった。また、その日以来、もはやだれも、イエスにあえて<sup>しつ</sup>質問をする者はなかった。



## 二三章

- 1 そのとき、イエスは群衆と弟子たちに話をして、
- 2 こう言われた。「律法学者、パリサイ人たちは、モーセの座を占めています。
- 3 ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行い、守りなさい。けれども、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。
- 4 また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。
- 5 彼らのしていることはみな、人に見せるためです。<sup>186</sup> 経札の幅を広くしたり、衣のふさを長くしたりするのもそうです。
- 6 また、宴会の上座や会堂の上席が大好きで、
- 7 広場であいさつされたり、人から<sup>187</sup>先生と呼ばれたりすることが好きです。
- 8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。
- 9 あなたがたは地上のだれかを、われらの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、すなわち天にいます父だけだからです。
- 10 また、<sup>188</sup>師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただひとり、キリストだからです。
- 11 あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。
- 12 だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。
- 13 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは<sup>189</sup>人々から天の御国をささげているのです。自分も入らず、人ろうとしている人々をも入らせません。
- 14 <sup>190</sup>「わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはやもめの家を食いつぶし、見えのために長い祈りをしています。だから、おまえたちは人一倍ひどい罰を受けます。」
- 15 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは改宗者をひとりつくるのに、海と陸とを飛び回り、改宗者ができると、彼を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのです。
- 16 わざわいだ。目の見えぬ手引きども。おまえたちは言う。『だれでも、<sup>191</sup>神殿をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、神殿の黄金をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』
- 17 愚かで、目の見えぬ者たち。黄金と、黄金を聖いものにする神殿と、どちらがたいせつなのか。
- 18 また、言う。『だれでも、祭壇をさして誓ったのなら、何でもない。しかし、祭壇の上の供え物をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならない。』
- 19 目の見えぬ者たち。供え物と、その供え物を聖いものにする祭壇と、どちらがたいせつなのか。
- 20 だから、祭壇をさして誓う者は、祭壇をも、その上のすべての物をもさして誓っているのです。
- 21 また、神殿をさして誓う者は、神殿をも、その中に住まわれる方をもさして誓っているのです。
- 22 天をさして誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方をさして誓うのです。
- 23 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、はつか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実を、おろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もおろそかにしてはいけません。
- 24 目の見えぬ手引きども。ぶよは、こして除くが、らくだは飲み込んでいます。
- 25 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは 杯 や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縱でいっぱいです。
- 26 目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。
- 27 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。
- 28 そのように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。
- 29 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者の墓を建て、義人の記念碑を飾って、
- 30 『私たちが、父祖たちの時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかっただろう』と言います。
- 31 こうして、預言者を殺した者たちの<sup>192</sup>子孫だと、自分で証言しています。
- 32 おまえたちも父祖たちの罪の目盛りの不足分を満たしなさい。
- 33 おまえたちへ蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。
- 34 だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につ

け、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して行くのです。

35 それは、義人アベルの血からこのかた、193神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復がおまえたちの上に来るためです。

36 まことに、おまえたちに告げます。これらの報いはみな、この時代の上に来ます。

37 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遭わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

38 見なさい。あなたがたの家は194荒れ果てたままに残される。

39 あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」

## 二四章

- 1 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。
- 2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目を見はつていられるでしょう。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」
- 3 イエスがオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」
- 4 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。
- 5 わたしの名を名の者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。
- 6 また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。
- 7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。
- 8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。
- 9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。
- 10 また、そのときは、人々がだぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。
- 11 また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。
- 12 不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。
- 13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。
- 14 この御国の福音は全<sup>195</sup>世界に宣傳えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。
- 15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべきもの』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)
- 16 そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。
- 17 屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。
- 18 畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。
- 19 だがその日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。
- 20 ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。
- 21 そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。
- 22 もし、その日数が少なくされなかったら、<sup>196</sup>ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。
- 23 そのとき、『そら、キリストがここにいる』とか、『そこにいる』とか言う者があっても、信じてはいけません。
- 24 にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きな<sup>197</sup>しるしや不思議なことをして見せます。
- 25 さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。
- 26 だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる』と言っても、飛び出して行つてはいけません。『そら、へやにいらっしゃる』と聞いても、信じてはいけません。
- 27 人の子の来るのは、いなずまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。
- 28 死体のある所には、はげたがが集まります。
- 29 だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。
- 30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。
- 31 人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。
- 32 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになつて、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。
- 33 そのように、これらのことすべてを見たら、あなたがたは、<sup>198</sup>人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。
- 34 まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この<sup>199</sup>時代は過ぎ去りません。
- 35 この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。
- 36 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。
- 37 人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。

38 洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついたりしていました。

39 そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らは<sup>200</sup>わからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

40 そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

41 ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。

42 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。

43 しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていったでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。

44 だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。

45 主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。

46 主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。

47 まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。

48 ところが、それが悪いしもべで、『主人は<sup>201</sup>まだまだ帰るまい』と心の中で思い、

49 その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、

50 そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。

51 そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ざしりするのです。

## 二五章

- 1 そこで、天の御国は、たとえて言えば、それぞれがともしびを持って、花婿を出迎える十人の娘のようです。
- 2 そのうち五人は愚かで、五人は賢かった。
- 3 愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を用意しておかなかった。
- 4 賢い娘たちは、自分のともしびといっしょに、入れ物に油を入れて持っていた。
- 5 花婿が来るのが遅れたので、みな、うとうとして眠り始めた。
- 6 ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声をした。
- 7 娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。
- 8 ところが愚かな娘たちは、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消えそうです。』
- 9 しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげるにはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』
- 10 そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。
- 11 そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さま。あけてください』と言った。
- 12 しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたがたを知りません』と言った。
- 13 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないからです。
- 14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。
- 15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五<sup>202</sup>タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。
- 16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。
- 17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。
- 18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。
- 19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。
- 20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』
- 21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』
- 22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』
- 23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』
- 24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。』
- 25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』
- 26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。』
- 27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。
- 28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』
- 29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。
- 30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出さなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。
- 31 人の子が、その栄光を帯びて、すべての御使いたちを伴って来るとき、人の子はその栄光の位に着きます。
- 32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、
- 33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。
- 34 そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』
- 35 あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ま

せ、わたしが旅人であつたとき、わたしに宿を貸し、

36 わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。』

37 すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、<sup>かわ</sup> 渴いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。

38 いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。

39 また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか。』

40 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』

41 それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、<sup>はな</sup> 悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。

42 おまえたちは、わたしが空腹であつたとき、食べる物をくれず、<sup>かわ</sup> 渴いていたときにも飲ませず、

43 わたしが旅人であつたときにも泊まらせず、裸であつたときにも着る物をくれず、<sup>はだか</sup> 病気のとときや牢にいたときにもたずねてくれなかった。』

44 そのとき、彼らも答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹であり、<sup>かわ</sup> 渴き、旅をし、裸であり、病気をし、牢におられるのを見て、お世話をしなかったのでしょうか。』

45 すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、おまえたちに告げます。おまえたちが、この最も小さい者たちのひとりにしなかったのは、<sup>えい えん</sup> わたしに**し**なかったのです。』

46 こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入ります。」

## 二六章

- 1 イエスは、これらの話をすべて終えると、弟子たちに言われた。
- 2 「あなたがたの知っているとおりに、二日たつと過越の祭りになります。人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」
- 3 そのころ、祭司長、民の長老たちは、カヤパという大祭司の家の庭に集まり、
- 4 イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。
- 5 しかし、彼らは、「祭りの間は、いけない。民衆の騒ぎが起るといけないから」と話していた。
- 6 さて、イエスがベタニヤで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられると、
- 7 ひとりの女がたいへん高価な香油のつぼを持ってみもとに来て、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。
- 8 弟子たちはこれを見て、憤慨と言った。「何のために、こんなむだなことをするのか。」
- 9 この香油なら、高く売れて、貧しい人たちに施しのできたのに。」
- 10 するとイエスはこれを知って、彼らに言われた。「なぜ、この女を困らせるのです。わたしに対してりつぱなことをしてくれたのです。」
- 11 貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。
- 12 この女が、この香油をわたしのからだに注いだのは、わたしの埋葬の用意をしてくれたのです。
- 13 まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」
- 14 そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちのところへ行つて、
- 15 こう言った。「彼をあなたがたに203売るとしたら、いったいいくらくれますか。」すると、彼らは204銀貨三十枚を彼に支払った。
- 16 そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた。
- 17 さて、種なしパンの祝いの第一日に、弟子たちがイエスのところに来て言った。「過越の食事をなさるのに、私たちはどこで用意をしましょうか。」
- 18 イエスは言われた。「都に入つて、これこれの人のところに行つて、『先生が「わたしの時が近づいた。わたしの弟子たちといっしょに、あなたのところで過越を守ろう」と言つておられる』と言いなさい。」
- 19 そこで、弟子たちはイエスに言いつけられたとおりにして、過越の食事を用意をした。
- 20 さて、夕方になって、イエスは十二弟子といっしょに食卓に着かれた。
- 21 みなが食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちひとりが、わたしを裏切ります。」
- 22 すると、弟子たちは非常に悲しんで、「主よ。まさか私のことではないでしょう」と205わかるがわるイエスに言った。
- 23 イエスは答えて言われた。「わたしといっしょに鉢に手を浸した者が、わたしを裏切るのです。」
- 24 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去つて行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」
- 25 すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが答えて言った。「206先生。まさか私のことではないでしょう。」イエスは彼に、「いや、そうだ」と言われた。
- 26 また、彼らが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取つて食べなさい。これはわたしのからだです。」
- 27 また杯を取り、感謝をささげて後、こう言つて彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。」
- 28 これは、わたしの契約の血です。罪を赦すために多くの人のために流されるものです。
- 29 ただ、言つておきます。わたしの父の御国で、あなたがたと新しく飲むその日まで、わたしはもはや、ぶどうの実で造つた物を飲むことはありません。」
- 30 そして、賛美の歌を歌つてから、みなオリーブ山へ出かけて行つた。
- 31 そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、今夜、わたしのゆえにつまずきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散り散りになる』と書いてあるからです。」
- 32 しかしわたしは、よみがえつてから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」
- 33 すると、ペテロがイエスに答えて言つた。「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。」



34 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。今夜、<sup>にわとり</sup>鶏が鳴く前に、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

35 ペテロは言った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」弟子たちはみなそう言った。

36 それからイエスは弟子たちといっしょにゲツセマネという所に来て、彼らに言われた。「わたしがあそこに行つて祈っている間、ここにすわっていないさい。」

37 それから、ペテロとゼバダイの子ふたりとをいっしょに連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。

38 そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」

39 それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈つて言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」

40 それから、イエスは弟子たちのところに戻つて来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「あなたがたは、そんなに、一時間でも、わたしといっしょに目をさましていいることができなかったのか。」

41 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていないさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。

42 イエスは二度目に離れて行き、祈つて言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」

43 イエスが戻つて来て、ご覧になると、彼らはまたも眠っていた。目をあけていることができなかったのである。

44 イエスは、またも彼らを置いて行かれ、もう一度同じことをくり返して三度目の祈りをされた。

45 それから、イエスは弟子たちのところに来て言われた。「<sup>207</sup>まだ眠つて休んでいるのですか。見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されるのです。」

46 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」

47 イエスがまだ話しておられるうちに、見よ、十二弟子のひとりであるユダがやつて来た。剣や棒を手にした大ぜいの群衆もいっしょであつた。群衆はみな、祭司長、民の長老たちから差し向けられたものであつた。

48 イエスを裏切る者は、彼らと合図を決めて、「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえるのだ」と言つておいた。

49 それで、彼はすぐにイエスに近づき、「先生。お元気で」と言つて、口づけした。

50 イエスは彼に、「友よ。何のために来たのですか」と言われた。そのとき、群衆が来て、イエスに手をかけて捕らえた。

51 すると、イエスといっしょにいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、大祭司のしもべに撃つてかかり、その耳を切り落とした。

52 そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」

53 それとも、わたしが父にお願いして、十二<sup>208</sup>軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとも思うのですか。

54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましよう。」

55 そのとき、イエスは群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持つてわたしをつかまえて来たのですか。わたしは毎日、宮ですわつて教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえなかったのです。」

56 しかし、すべてこうなつたのは、預言者たちの書が実現するためです。」そのとき、弟子たちはみな、イエスを見捨てて、逃げてしまつた。

57 イエスをつかまえた人たちは、イエスを大祭司カヤパのところへ連れて行つた。そこには、律法学者、長老たちが集まつていた。

58 しかし、ペテロも遠くからイエスのあとをつけながら、大祭司の中庭まで入つて行き、成り行きを見ようと<sup>209</sup>役人たちといっしょにすわつた。

59 さて、祭司長たちと全<sup>210</sup>議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える偽証を求めていた。

60 偽証者がたくさん出て来たが、証拠はつかめなかつた。しかし、最後にふたりの者が進み出て、

61 言つた。「この人は、『わたしは神の<sup>211</sup>神殿をこわして、それを三日の<sup>212</sup>うちに建て直せる』と言いました。」

62 そこで、大祭司は立ち上がつてイエスに言つた。「何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしています、これはどうなのですか。」

63 しかし、イエスは黙つておられた。それで、大祭司はイエスに言つた。「私は、生ける神によつて、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」

64 イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言つておきますが、今からのち、人の子



が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」  
65 すると、大祭司は、自分の<sup>213</sup>衣を引き裂いて言った。「神への冒瀆だ。これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、今、神をけがすことばを聞いたのです。」  
66 どう考えますか。」彼らは答えて、「彼は死刑に当たる」と言った。  
67 そうして、彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしでなぐりつけ、また、他の者たちは、イエスを<sup>214</sup>平手で打って、  
68 こう言った。「当ててみる。<sup>215</sup>キリスト。あなたを打ったのはだれか。」  
69 ペテロが外の中庭にすわっていると、女中のひとりが来て言った。「あなたも、ガリラヤ人イエスといっしょにいましたね。」  
70 しかし、ペテロはみなの前でそれを打ち消して、「何を言っているのか、私にはわからない」と言った。  
71 そして、ペテロが入口まで出て行くと、ほかの女中が、彼を見て、そこにいる人々に言った。「この人はナザレ人イエスといっしょでした。」  
72 それで、ペテロは、またもそれを打ち消し、誓って、「そんな人は知らない」と言った。  
73 しばらくすると、そのあたりに立っている人々がペテロに近寄って来て、「確かに、あなたもあの仲間だ。ことばのなまりではっきりわかる」と言った。  
74 すると彼は、「そんな人は知らない」と言って、のろいをかけて誓い始めた。するとすぐに、鶏が鳴いた。  
75 そこでペテロは、「鶏が鳴く前に三度、あなたは、わたしを知らないと言います」とイエスの言われたあのことばを思い出した。そうして、彼は出て行って、激しく泣いた。

## 二七章

- 1 さて、夜が明けると、祭司長、民の長老たち全員は、イエスを死刑にするために協議した。
- 2 それから、イエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。
- 3 そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、<sup>216</sup>銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、
- 4 「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして」と言った。しかし、彼らは、「私たちの知ったことか。自分で始末することだ」と言った。
- 5 それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。
- 6 祭司長たちは銀貨を取って、「これを神殿の金庫に入れるのはよくない。血の代価だから」と言った。
- 7 彼らは相談して、その金で陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。
- 8 それで、その畑は、今でも血の畑と呼ばれている。
- 9 そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。「<sup>217</sup>彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの人々に値積もりされた人の値段である。
- 10 <sup>218</sup>彼らは、主が私にお命じになったように、その金を払って、陶器師の畑を買った。」
- 11 さて、イエスは総督の前に立たれた。すると、総督はイエスに「あなたは、ユダヤ人の王ですか」と尋ねた。イエスは彼に「そのとおりです」と言われた。
- 12 しかし、祭司長、長老たちから訴えがなされたときは、何もお答えにならなかった。
- 13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにいろいろとあなたに不利な証言をしているのに、聞こえないのですか。」
- 14 それでも、イエスは、どんな訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。
- 15 ところで総督は、その祭日には、群衆のために、いつも望みの囚人をひとりだけ赦免してやっていた。
- 16 そのころ、バラバという名の知れた囚人が捕らえられていた。
- 17 それで、彼らが集まったとき、ピラトが言った。「あなたがたは、だれを釈放してほしいのか。バラバか、それともキリストと呼ばれているイエスカ。」
- 18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことに気づいていたのである。
- 19 また、ピラトが裁判の席に着いていたとき、彼の妻が彼のもとに人をやって言わせた。「あの正しい人にはかわり合わないでください。<sup>219</sup>ゆうべ、私は夢で、あの人のことで苦しいめに会いましたから。」
- 20 しかし、祭司長、長老たちは、バラバのほうを願うよう、そして、イエスを死刑にするよう、群衆を説きつけた。
- 21 しかし、総督は彼らに答えて言った。「あなたがたは、ふたりのうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」
- 22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしましょうか。」彼らはいつせいに言った。「十字架につけろ。」
- 23 だが、ピラトは言った。「あの人がどんな悪い事をしたというのか。」しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けた。
- 24 そこでピラトは、自分では手の下しようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、群衆の目の前で水を取り寄せ、手を洗って、言った。「<sup>220</sup>この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」
- 25 すると、民衆はみな答えて言った。「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」
- 26 そこで、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。
- 27 それから、総督の兵士たちは、イエスを官邸の中に連れて行って、イエスの回りに全<sup>221</sup>部隊を集めた。
- 28 そして、イエスの着物を脱がせて、緋色の上着を着せた。
- 29 それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に<sup>222</sup>葦を持たせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」
- 30 また彼らはイエスにつばきをかけ、葦を取り上げてイエスの頭をたたいた。
- 31 こんなふうに、イエスをからかったあげく、その着物を脱がせて、もとの着物を着せ、十字架につけるために連れ出した。
- 32 そして、彼らが出て行くと、シモンというクレネ人を見つけたので、彼らは、この人にイエスの十字架を、むりやりに背負わせた。
- 33 ゴルゴタという所（「どくろ」と言われている場所）に来てから、

34 彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。

35 こうして、イエスを十字架につけてから、彼らはくじを引いて、イエスの着物を分け、

36 そこにすわって、イエスの見張りをした。

37 また、イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。

38 そのとき、イエスといっしょに、ふたりの強盗が、ひとりには右に、ひとりには左に、十字架につけられた。

39 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、

40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」

41 同じように、祭司長たちも律法学者、長老たちといっしょになって、イエスをあざけって言った。

42 「彼は他人を救ったが、[223](#)自分は救えない。イスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおうか。そうしたら、われわれは信じるから。」

43 彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」

44 イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。

45 さて、[224](#)十二時から、全地が暗くなつて、[225](#)三時まで続いた。

46 三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」という意味である。

47 すると、それを聞いて、そこに立っていた人々のうち、ある人たちは、「この人はエリヤを呼んでいる」と言った。

48 また、彼らのひとりがすぐ走って行って、海綿を取り、それに酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。

49 ほかの者たちは、「私たちはエリヤが助けに来るかどうか[226](#)見ることにしよう」と言った。[227](#)

50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。

51 すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真つ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。

52 また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返つた。

53 そして、イエスの復活の後に墓から出て来て、聖都に入つて多くの人に現れた。

54 百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「この方はまことに神の子であつた」と言った。

55 そこには、遠くからながめている女たちがたくさんいた。イエスに仕えてガリラヤからついて来た女たちであつた。

56 その中に、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、ゼベダイの子らの母がいた。

57 夕方になつて、アリマタヤの金持ちでヨセフという人が来た。彼もイエスの弟子になつていた。

58 この人はピラトのところに行つて、イエスのからだの下げ渡しを願つた。そこで、ピラトは、渡すように命じた。

59 ヨセフはそれを取り降ろして、きれいな亜麻布に包み、

60 岩を掘つて造つた自分の新しい墓に納めた。墓の入口には大きな石をころがしかけて歸つた。

61 そこにはマグダラのマリヤとほかのマリヤとが墓のほうを向いてすわつていた。

62 さて、次の日、すなわち備えの日の翌日、祭司長、パリサイ人たちはピラトのところに集まつて、

63 こう言った。「かつか。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる』と言つていたのを思い出しました。」

64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を[228](#)盗み出して、『死人の中からよみがえつた』と民衆に言うかもしれません。そうなると、この惑わしのほうが、前の場合より、もっとひどいことになります。」

65 ピラトは「番兵を出してやるから、行つてできるだけ番をさせるがよい」と彼らに言った。

66 そこで、彼らは行つて、石に封印をし、番兵が墓の番をした。

## 二八章

- 1 さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。
- 2 すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。
- 3 その顔は、いなくまのように輝き、その衣は雪のように白かった。
- 4 番兵たちは、御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。
- 5 すると、御使いは女たちに言った。「[229](#) 恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。
- 6 ここにはおられません。前から言っておられたように、よみがえられたからです。来て、納めてあった場所を見てごらんなさい。
- 7 ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこで、お会いできるということです。では、これだけはお伝えしました。」
- 8 そこで、彼女たちは、恐ろしくはあったが大喜びで、急いで墓を離れ、弟子たちに知らせに走って行った。
- 9 すると、イエスが彼女たちに会って、「おはよう」と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエスを拝んだ。
- 10 すると、イエスは言われた。「恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。」
- 11 女たちが行き着かないうちに、もう、数人の番兵が都に来て、起こった事を全部、祭司長たちに報告した。
- 12 そこで、祭司長たちは民の長老たちとともに集まって協議し、兵士たちに多額の金を与えて、
- 13 こう言った。「『夜、私たちが眠っている間に、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った』と言うのだ。
- 14 もし、このことが総督の耳に入っても、私たちがうまく説得して、あなたがたには心配をかけないようにするから。」
- 15 そこで、彼らは金をもらって、指図されたとおりにした。それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。
- 16 しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行って、イエスの指示された山に登った。
- 17 そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑った。
- 18 イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。
- 19 それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを受け、
- 20 また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

- 1 ギリシヤ語は「アサフ」。「アサ」はヘブル語
- 2 ギリシヤ語は「アモス」。「アモン」はヘブル語
- 3 あるいは「エホヤキン」
- 4 すなわち「メシヤ」
- 5 あるいは「離縁しよう」
- 6 ギリシヤ語「マゴス」
- 7 すなわち「メシヤ」
- 8 あるいは「到着し」
- 9 あるいは「水の中で」「水をもって」「水によって」
- 10 直訳「引き渡された」
- 11 あるいは「湖に沿った地方」
- 12 あるいは「諸国民」
- 13 あるいは「良い知らせ」
- 14 直訳「月に打たれた人」
- 15 あるいは「へりくだった者」
- 16 別訳「家にあるすべてのもの」
- 17 異本に「理由なくして」の句を挿入するものがある
- 18 原語「ラカ」（アラム語）
- 19 ギリシヤ語「サンヘドリン」
- 20 一コドラント（二レブタ）は、一デナリの六四分の一
- 21 あるいは「罪を犯させる」
- 22 直訳「去らせる」
- 23 別訳「誓いを破って」
- 24 別訳「『はい』あるいは、『いいえ』とだけ言いなさい」
- 25 あるいは「悪い者から出るのです」
- 26 一ミリオンは約一五〇〇メートル
- 27 直訳「彼」
- 28 あるいは「慈善の行為」
- 29 直訳「明らかになるために」
- 30 別訳「あすのための糧」あるいは「必要な糧」
- 31 あるいは「罪」
- 32 あるいは「悪い者」
- 33 最古の写本ではこの句は欠けている
- 34 あるいは「明らか」「澄んでいる」
- 35 アラム語「マモン」
- 36 あるいは「心配することはやめなさい」
- 37 直訳「天」
- 38 別訳「身長」
- 39 直訳「一ペーキユス」一約四五センチ
- 40 あるいは「神の」
- 41 あるいは「求め続けなさい」
- 42 あるいは「備えられます」
- 43 直訳「あなたがたが量る量りによって」
- 44 あるいは、「求め続けなさい」
- 45 あるいは「捜し続けなさい」

- [46](#) あるいは「たたき続けなさい」
- [47](#) あるいは「あなたがたもそのようにしなさい」
- [48](#) あるいは「力あるわざ」
- [49](#) レビ一三章を参照
- [50](#) あるいは「拝んで」
- [51](#) 直訳「子（若者）」
- [52](#) 直訳「一言だけおっしゃってください」
- [53](#) 直訳「子（若者）」
- [54](#) 異本「イスラエルのうちにさえ、このような…」
- [55](#) あるいは「食事をします」
- [56](#) 直訳「子（若者）」
- [57](#) あるいは「イエスに仕えた」
- [58](#) あるいは「取り去った」
- [59](#) 「用意を」は補足
- [60](#) 直訳「震動」
- [61](#) すなわち「定められた審判の時」
- [62](#) 直訳「赦されている」
- [63](#) 直訳「赦されている」
- [64](#) あるいは「人々」
- [65](#) あるいは「わたしは犠牲よりもあわれみを好む」
- [66](#) 直訳「婚礼の式場の子たち」
- [67](#) 直訳「上に置かれるもの」
- [68](#) 直訳「欠けを満たすもの」
- [69](#) 直訳「管理者」
- [70](#) あるいは「拝んで」
- [71](#) 直訳「救われる」
- [72](#) 直訳「救った」
- [73](#) 直訳「少女」
- [74](#) あるいは「苦しめられて」
- [75](#) すなわち「タルマイの子」
- [76](#) あるいは「宣言しなさい」
- [77](#) 直訳「耐えやすい」
- [78](#) あるいは「法廷」ギリシヤ語「サンヘドリン」
- [79](#) 別訳「ユダヤ人にも異邦人にも」
- [80](#) 直訳「ほかの」
- [81](#) あるいは「生徒」
- [82](#) あるいは「ベエゼブル」「ベルゼブブ」
- [83](#) 最小単位の銅貨
- [84](#) 直訳「父とは無関係には」
- [85](#) 直訳「投ずる」
- [86](#) 直訳「見いだした者は…見いだします」
- [87](#) あるいは「へりくだった人たち」
- [88](#) あるいは「命令し」
- [89](#) あるいは「宣言したり」
- [90](#) あるいは「良い知らせ」

- [91](#) あるいは「腹を立てない」
- [92](#) 直訳「家」
- [93](#) 直訳「胸を打たなかった」
- [94](#) あるいは「奇蹟」
- [95](#) あるいは「完全に知る」
- [96](#) あるいは「疲れ果てた人」
- [97](#) あるいは「こちよく」
- [98](#) あるいは「を破っても」
- [99](#) 直訳「健康になった」
- [100](#) 直訳「子」
- [101](#) あるいは「諸国の民」
- [102](#) あるいは「さばき」
- [103](#) あるいは「さばき」
- [104](#) あるいは「諸国の民」
- [105](#) あるいは「ベエゼブル」「ベルゼブブ」
- [106](#) あるいは「仲間」
- [107](#) あるいは「無益な」
- [108](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [109](#) 直訳「上に」
- [110](#) あるいは「時代」
- [111](#) 直訳「草」
- [112](#) 直訳「どこから」
- [113](#) 一サトンは一三リットル
- [114](#) あるいは「総仕上げ」
- [115](#) あるいは「障害となるもの」
- [116](#) あるいは「教えておられた」
- [117](#) あるいは「奇蹟」
- [118](#) あるいは「力あるわざ」
- [119](#) 直訳「中で」
- [120](#) あるいは「大型のかご」
- [121](#) 原語「多くのスタディオン」 一スタディオンは一八五メートル
- [122](#) 直訳「第四の夜回り」すなわち「午前三ー六時」
- [123](#) あるいは「取り乱し」
- [124](#) あるいは「安心しなさい」
- [125](#) 直訳「あなたのところまで」
- [126](#) あるいは「知って」
- [127](#) 「その物をもって」は補足 あるいは「それを扶養のために用いて」を補う
- [128](#) 異本「母」を欠く
- [129](#) 異本「律法」
- [130](#) あるいは「つまずいた」
- [131](#) 異本「盲人を」を欠く
- [132](#) あるいは「を拝み」
- [133](#) 直訳「女よ」
- [134](#) 最も古い写本は「あなたがたは…」以下の二節および三節を欠いている
- [135](#) あるいは「ヨナの子シモン」

- [136](#) 直訳「肉と血」
- [137](#) ギリシャ語「ペトロス」一石
- [138](#) ギリシャ語「ペトラ」
- [139](#) あるいは「禁じる」「禁じられる」
- [140](#) あるいは「許す」「許される」
- [141](#) あるいは「とんでもないことです」
- [142](#) 直訳「ある」
- [143](#) あるいは「先生」
- [144](#) 直訳「月に打たれた」
- [145](#) 古い写本の多くは、この節を欠く
- [146](#) 直訳「二ドラクマ」一デナリ
- [147](#) あるいは「シケル」一四ドラクマ
- [148](#) 直訳「向きを変えて」
- [149](#) 直訳「ろばがひく石臼」
- [150](#) 古い写本の多くはこの節を欠く
- [151](#) 直訳「父の御前に」
- [152](#) 「あなたに対して」を挿入する異本も多い
- [153](#) 直訳「あなたと彼だけの間で」
- [154](#) 直訳「ことば」
- [155](#) あるいは「禁じる」「禁じられる」
- [156](#) あるいは「許す」「許される」
- [157](#) 一タラントは六〇〇〇デナリに相当する
- [158](#) 一デナリは当時の一日分の労賃に相当する
- [159](#) 「彼女に姦淫をさせる」とする異本もある
- [160](#) 「そして離縁された女を妻とする者は姦淫を犯すのです」を挿入する異本もある
- [161](#) 別訳「尊い方」
- [162](#) 「妻」を挿入する異本も多い
- [163](#) 「百倍も」とある異本も多い
- [164](#) あるいは「地主」
- [165](#) 原語「第三時」
- [166](#) 原語「第六時ごろと第九時ごろ」
- [167](#) 原語「第十一時」
- [168](#) 直訳「良い」
- [169](#) 直訳「悪く」
- [170](#) 直訳「備えられた人々になのです」
- [171](#) 直訳「派遣して」
- [172](#) 直訳「ほら穴」
- [173](#) 原文に「子よ」という呼びかけ語がある
- [174](#) 直訳「主よ」
- [175](#) あるいは「小作人」（三四、三五、三八、四〇節も同様）
- [176](#) 直訳「結実」
- [177](#) あるいは「野」
- [178](#) 直訳「食卓に着いた人々」
- [179](#) 原文に「友よ」という呼びかけ語がある
- [180](#) 直訳「持たないで」



- [181](#) すなわち「人に取り入ろうとしない」
- [182](#) あるいは「人頭税」
- [183](#) あるいは「よろしいのでしょうか。よろしくないのでしょうか」
- [184](#) あるいは「一デナリ貨」
- [185](#) 異本に「神の」が挿入されているものもある
- [186](#) すなわち、聖句をしるした小箱のようなもので、祈りのときに身に着けた
- [187](#) 原語「ラビ」
- [188](#) あるいは「指導者」
- [189](#) 直訳「人々の前で」
- [190](#) 異本に、この節を欠くものもある
- [191](#) あるいは「聖所」（一七、二一節も同様）
- [192](#) 直訳「子たち」
- [193](#) あるいは「聖所」
- [194](#) 異本「荒れ果てたまま」を欠くものもある
- [195](#) 直訳「人の住む地」
- [196](#) 直訳「あらゆる肉は救われない」
- [197](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [198](#) あるいは「そのこと」
- [199](#) 別訳「世代」
- [200](#) 直訳「知らなかった」
- [201](#) 直訳「時間がかかる」
- [202](#) 一タラントは六〇〇〇デナリ
- [203](#) あるいは「売り渡したいのだが」
- [204](#) すなわち「シケル銀貨」
- [205](#) あるいは「ひとりひとり」
- [206](#) 原語「ラビ」
- [207](#) 別訳「では、ぐっすり眠って休んでいなさい」
- [208](#) 原語「レギオン」一レギオンは六千人編成
- [209](#) あるいは「下役ども」
- [210](#) あるいは「サンヘドリン」
- [211](#) あるいは「聖所」
- [212](#) あるいは「後に」
- [213](#) あるいは「着物」
- [214](#) あるいは「棒で打って」
- [215](#) すなわち「メシヤ」
- [216](#) すなわち「シケル銀貨」
- [217](#) あるいは「私は」
- [218](#) 異本「私は」
- [219](#) 直訳「きょう」
- [220](#) 異本「この義人の血」
- [221](#) あるいは「大隊」
- [222](#) あるいは「葦の棒」
- [223](#) あるいは「自分は救えないのか」
- [224](#) 直訳「第六時」
- [225](#) 直訳「第九時」

[226](#) 直訳「見させてください」

[227](#) ここに「ほかの者が槍を取って、イエスのわき腹を突き刺した。すると、水と血が出てきた」を挿入している異本もある

[228](#) 直訳「民の前で盗む」

[229](#) あるいは「恐れることをやめなさい」

# マルコの福音書

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)

[十一章](#) [一二章](#) [一三章](#) [一四章](#) [一五章](#)

[一六章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1<sup>1</sup>神の子イエス・キリストの福音のはじめ。  
2 預言者イザヤの書にこう書いてある。  
「見よ。わたしは使いをあなたの前に遣わし、  
あなたの道を整えさせよう。」  
3 荒野で叫ぶ者の声がする。  
『主の道を用意し、  
主の通られる道をまっすぐにせよ。』」  
そのとおりには、  
4 バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを<sup>2</sup>宣べ伝えた。  
5 そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。  
6 ヨハネは、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。  
7 彼は<sup>3</sup>宣べ伝えて言った。「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方のくつのひもを解く値うちもありません。  
8 私はあなたがたに<sup>4</sup>水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに<sup>5</sup>聖霊のバプテスマをお授けになります。」  
9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来られ、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。  
10 そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上に下られるのを、ご覧になった。  
11 そして天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」  
12 そしてすぐ、御霊はイエスを荒野に追い遣われた。  
13 イエスは四十日間荒野にいて、サタンの誘惑を受けられた。野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた。  
14 ヨハネが<sup>6</sup>捕らえられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ言われた。  
15 「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」  
16 ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。  
17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」  
18 すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った。  
19 また少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった。彼らも舟の中で網を繕っていた。  
20 すぐに、イエスがお呼びになった。すると彼らは父ゼベダイを雇い人たちと一しょに舟に残して、<sup>7</sup>イエスについて行った。  
21 それから、一行はカペナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。  
22 人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである。  
23 すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。  
24 「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ばしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」  
25 イエスは彼をしかって、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。  
26 すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。  
27 人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」  
28 こうして、イエスの評判は、すぐに、ガリラヤ全地の至る所に広まった。  
29<sup>8</sup>イエスは会堂を出るとすぐに、ヤコブとヨハネを連れて、シモンとアンデレの家に入られた。  
30 ところが、シモンのしゅうとめが熱病で床に着いていたので、人々はさっそく彼女のことをイエスに知らせた。  
31 イエスは、彼女に近寄り、その手を取って起こされた。すると熱がひき、彼女は彼らを<sup>9</sup>もてなした。  
32 夕方になった。日が沈むと、人々は病人や悪霊につかれた人をみな、イエスのもとに連れて来た。  
33 こうして町中の者が戸口に集まって来た。  
34 イエスは、さまざまな病氣にかかっている多くの人をいやし、また多くの悪霊を追い出された。そして悪霊どもが

ものを言うのをお許しにならなかった。彼らが<sup>ゆる</sup>10イエスをよく知っていたからである。

35 さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。

36 シモンとその仲間は、イエスを追って来て、

37 彼を見つけ、「みんながあなたを捜しております」と言った。

38 イエスは彼らに言われた。「さあ、近くの別の村里へ行こう。そこにも福音<sup>ふくいん</sup>を知らせよう。わたしは、そのために出て来たのだから。」

39 こうしてイエスは、ガリラヤ全地にわたり、その会堂<sup>ふくいん</sup>に行つて、福音を告げ知らせ、悪霊<sup>あくれい</sup>を追い出された。

40 さて、<sup>おか</sup>11ツアラアトに冒された人がイエスのみもとにお願いに来て、ひざまずいて言った。「お心一つで、私をきよくしていただけます。」

41 イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって言われた。「わたしの心だ。きよくなれ。」

42 すると、すぐに、そのツアラアト<sup>いまし</sup>が消えて、その人はきよくなった。

43 そこでイエスは、彼をきびしく戒めて、すぐに彼を立ち去らせた。

44 そのとき彼にこう言われた。「気をつけて、だれにも何も言わないようにしなさい。ただ行つて、自分を祭司に見せなさい。そして、<sup>おかし</sup>12人々へのあかしのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめの供え物をしなさい。」

45 ところが、彼は出て行つて、この出来事をふれ回り、言い広め始めた。そのためイエスは表立って町の中に入ることができず、町はずれの寂しい所におられた。しかし、人々は、あらゆる所からイエスのもとにやって来た。

## 二章

- 1 数日たつて、イエスがカペナウムにまた来られると、家におられることが知れ渡つた。
- 2 それで多くの人が集まつたため、戸口のところまですきまもないほどになった。この人たちに、イエスはみことばを話しておられた。
- 3 そのとき、ひとりの中風ちゆうふうの人が四人の人にかつがれて、みもとに連れて来られた。
- 4 群衆のためにイエスに近づくことができなかったで、その人々はイエスのおられるあたりの屋根をはがし、穴をあけて、中風の人を寝かせたまそその床をつり降ろした。
- 5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。あなたの罪は赦されました」と言われた。
- 6 ところが、その場に律法学者が数人すわっていて、心の中で理屈つみ ゆるを言った。
- 7 「この人は、なぜ、あんなことを言うのか。神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができるよ。」
- 8 彼らが心の中でこのように理屈りくつを言っているのを、イエスはすぐにご自分の霊れいで見抜いて、こう言われた。「なぜ、あなたがたは心の中でそんな理屈つみ ゆるを言っているのか。
- 9 中風の人に、『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。
- 10 子の子が地上で罪を赦す権威を持つていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言ってから、中風の人に、
- 11 「あなたに言う。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい」と言われた。
- 12 すると彼は起き上がり、すぐに床を取り上げて、みなが見ている前を出て行つた。それでみなの方がすっかり驚いて、「こういうことは、かつて見たことがない」と言って神をあがめた。
- 13 イエスはまた湖のほとりに出て行かれた。すると群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。
- 14 イエスは、道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのをご覧になって、「わたしについて来なさい」と言われた。すると彼は立ち上がつて従つた。
- 15 それから、イエスは、彼の家で食卓に着かれた。取税人や罪人たちも大ぜい、イエスや弟子たちといっしょに食卓に着いていた。こういう人たちが大ぜいいて、イエスに従っていたのである。
- 16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちといっしょに食事をしておられるのを見て、イエスの弟子たちにこう言った。「なぜ、あの人は取税人や罪人たちといっしょに食事をするのですか。」
- 17 イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」
- 18 ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは断食をしていた。そして、イエスのもとに来て言った。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食するのに、あなたの弟子たちはなぜ断食しないのですか。」
- 19 イエスは彼らに言われた。「花婿が自分たちといっしょにいる間、<sup>13</sup>花婿につき添う友だちが断食できるでしょうか。花婿といっしょにいる時は、断食できないのです。
- 20 しかし、花婿が彼らから取り去られる時が来ます。その日には断食します。
- 21 だれも、真新しい布切れで古い着物の縫ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、新しい<sup>14</sup>縫ぎ切れは古い着物を引き裂き、破れはもつとひどくなります。
- 22 また、だれも新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を張り裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるのです。」
- 23 ある安息日のこと、イエスは麦畑の中を通して行かれた。すると、弟子たちが道々穂を摘み始めた。
- 24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日なのに、してはならないことをするのですか。」
- 25 イエスは彼らに言われた。「ダビデとその連れの者たちが、食物がなくてひもじかったとき、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。
- 26 <sup>15</sup>アビヤタルが大祭司のころ、ダビデは神の家に入って、祭司以外の者が食べてはならない供えのパンを、自分も食べ、またともにいた者たちにも与えたではありませんか。」
- 27 また言われた。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたではありません。
- 28 人の子は安息日にも主です。」

### 三章

- 1 イエスはまた会堂に入られた。そこに片手<sup>かたて</sup>のなえた人がいた。
- 2 彼らは、イエスが安息日にその人を直すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴<sup>うつた</sup>えるためであつた。
- 3 イエスは手のなえたその人に「立<sup>あんな</sup>って真<sup>ま</sup>ん中<sup>ちゅう</sup>に出<sup>で</sup>なさい」と言われた。
- 4 それから彼らに、「安息日<sup>あんな</sup>にしてよいのは、善<sup>ぜん</sup>を行<sup>な</sup>うことなのか、それとも悪<sup>あく</sup>を行<sup>な</sup>うことなのか。いのちを救<sup>すく</sup>うことなのか、それとも殺<sup>ころ</sup>すことなのか」と言われた。彼らは黙<sup>もく</sup>っていた。
- 5 イエスは怒<sup>いか</sup>って彼らを見回し、その心<sup>こ</sup>のかたくななを嘆<sup>なげ</sup>きながら、その人に、「手<sup>て</sup>を伸<sup>の</sup>ばしなさい」と言われた。彼は手を伸<sup>の</sup>ばした。するとその手が元<sup>もと</sup>どおりになつた。
- 6 そこでパリサイ人<sup>さ</sup>たちは出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>って、すぐ<sup>さ</sup>にヘロデ党<sup>はうむ</sup>の者<sup>もの</sup>たちといつしよになつて、イエスをどのようにして葬<sup>ほうむ</sup>り去<sup>さ</sup>ろうかと相談<sup>さうだん</sup>を始めた。
- 7 それから、イエスは弟子<sup>でし</sup>たちとともに湖<sup>うみ</sup>のほうに退<sup>しりぞ</sup>かれた。すると、ガリラヤから出<sup>で</sup>て来<sup>き</sup>た大ぜいの人々<sup>ひと</sup>がついて行<sup>い</sup>った。また、ユダヤから、
- 8 エルサレムから、イDMAヤから、ヨルダン<sup>よ</sup>の川<sup>がは</sup>向<sup>むか</sup>うやツロ、シドン<sup>し</sup>あたりから、大ぜいの人々<sup>ひと</sup>が、イエスの行<sup>い</sup>つておられることを聞<sup>き</sup>いて、みもとにやつて来<sup>き</sup>た。
- 9 イエスは、大ぜいの人<sup>お</sup>なので、押し寄<sup>よ</sup>せて来<sup>き</sup>ないよう、ご自分<sup>こ</sup>のために小舟<sup>こふね</sup>を用意<sup>ようい</sup>しておくように弟子<sup>でし</sup>たちに言<sup>い</sup>いつけられた。
- 10 それは、多くの人<sup>な</sup>をいやされたので、病氣<sup>なや</sup>に悩<sup>なや</sup>む人<sup>ひと</sup>たちがみな、イエスにさわろうとして、みもとに押しかけ<sup>お</sup>て来<sup>き</sup>たからである。
- 11 また、汚<sup>けが</sup>れた霊<sup>れい</sup>どもが、イエスを見<sup>み</sup>ると、みもとにひれ伏<sup>ふ</sup>し、「あなたこそ神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>です」と叫<sup>さけ</sup>ぶのであつた。
- 12 イエスは、ご自身<sup>ご</sup>のことを知<sup>し</sup>らせないようにと、きびしく彼ら<sup>かれら</sup>を戒<sup>い</sup>められた。
- 13 さて、イエスは山<sup>やま</sup>に登<sup>のぼ</sup>り、ご自身<sup>ご</sup>のお望<sup>のぞ</sup>みになる者<sup>もの</sup>たちを呼<sup>よ</sup>び寄<sup>よ</sup>せられたので、彼らはみもとに来<sup>き</sup>た。
- 14 そこでイエスは<sup>16</sup>十二弟子<sup>じふに</sup>を<sup>17</sup>任命<sup>にんめい</sup>された。それは、彼ら<sup>かれら</sup>を身<sup>み</sup>近<sup>ぢか</sup>に置<sup>お</sup>き、また彼ら<sup>かれら</sup>を遣<sup>つか</sup>わして福音<sup>ふくいん</sup>を宣<sup>のたま</sup>はさせ、
- 15 悪<sup>あく</sup>霊<sup>れい</sup>を追<sup>お</sup>い出<sup>だ</sup>す権<sup>けん</sup>威<sup>い</sup>を持<sup>も</sup>たせるためであつた。
- 16 こうして、イエスは<sup>18</sup>十二弟子<sup>じふに</sup>を任命<sup>にんめい</sup>された。そして、シモン<sup>し</sup>にはペテロ<sup>ぺ</sup>という名<sup>な</sup>をつけ、
- 17 ゼベダイの子<sup>こ</sup>ヤコブ<sup>や</sup>とヤコブ<sup>や</sup>の兄弟<sup>けい</sup>ヨハネ<sup>あ</sup>、このふたりにはボアネルゲ<sup>かみなり</sup>、すなわち、雷<sup>かみなり</sup>の子<sup>こ</sup>という名<sup>な</sup>をつけられた。
- 18 次に、アンデレ<sup>あ</sup>、ピリポ<sup>ひ</sup>、バルトロマイ<sup>ば</sup>、マタイ<sup>ま</sup>、トマス<sup>と</sup>、アルパヨの子<sup>こ</sup>ヤコブ<sup>や</sup>、タダイ<sup>た</sup>、熱心<sup>ねつしん</sup>党<sup>とう</sup>員<sup>いん</sup>シモン<sup>し</sup>、
- 19 イスカリオテ<sup>い</sup>・ユダ<sup>うだ</sup>。このユダ<sup>うだ</sup>が、イエスを裏<sup>う</sup>切<sup>き</sup>つたのである。
- 20 イエスが家<sup>もと</sup>に戻<sup>もど</sup>られると、また大ぜいの人<sup>ひと</sup>が集<sup>あ</sup>まつて来<sup>き</sup>たので、みなは食<sup>く</sup>事<sup>じ</sup>する暇<sup>ひま</sup>もなかつた。
- 21 イエスの身内<sup>み</sup>の人<sup>ひと</sup>が聞<sup>き</sup>いて、イエスを連<sup>つ</sup>れ戻<sup>もど</sup>しに出<sup>で</sup>て来<sup>き</sup>た。「氣<sup>き</sup>が狂<sup>くる</sup>つたのだ」と言う人<sup>ひと</sup>たちがいたからである。
- 22 また、エルサレムから下<sup>くだ</sup>つて来<sup>き</sup>た律法<sup>りつほう</sup>学<sup>がく</sup>者<sup>しや</sup>たちも、「彼<sup>かれ</sup>は、ベルゼブル<sup>べるぜぶる</sup>に取りつ<sup>と</sup>かれている」と言<sup>い</sup>い、「悪<sup>あく</sup>霊<sup>れい</sup>どものかしらによつて、悪<sup>あく</sup>霊<sup>れい</sup>どもを追<sup>お</sup>い出<sup>だ</sup>しているのだ」とも言<sup>い</sup>つた。
- 23 そこでイエスは彼ら<sup>かれら</sup>をそばに呼<sup>よ</sup>んで、たとえによつて話<sup>わ</sup>された。「サタン<sup>さ</sup>がどうしてサタン<sup>さ</sup>を追<sup>お</sup>い出<sup>だ</sup>せましよう。
- 24 もし国<sup>くに</sup>が内部<sup>ふん</sup>で分<sup>ぶん</sup>裂<sup>れつ</sup>したら、その国<sup>くに</sup>は立<sup>た</sup>ち行<sup>い</sup>きません。
- 25 また、家<sup>いえ</sup>が内輪<sup>ふん</sup>もめをし<sup>し</sup>たら、家<sup>いえ</sup>は立<sup>た</sup>ち行<sup>い</sup>きません。
- 26 サタンも、もし内輪<sup>ふん</sup>の争<sup>そう</sup>いが起<sup>お</sup>こつて分<sup>ぶん</sup>裂<sup>れつ</sup>していれば、立<sup>た</sup>ち行<sup>い</sup>くことができ<sup>き</sup>ないで滅<sup>ほろ</sup>びます。
- 27 確<sup>たし</sup>かに、強<sup>たけ</sup>い人<sup>にん</sup>の家<sup>いえ</sup>に押<sup>お</sup>し入<sup>い</sup>つて家財<sup>かざい</sup>を略<sup>りやく</sup>奪<sup>だつ</sup>するには、まづその強<sup>たけ</sup>い人<sup>にん</sup>を縛<sup>しば</sup>り上げなければなりません。そのあ
- とでその家<sup>いえ</sup>を略<sup>りやく</sup>奪<sup>だつ</sup>できるのです。
- 28 まことに、あなた<sup>お</sup>がたに告<sup>お</sup>げます。<sup>19</sup>人<sup>ひと</sup>はその犯<sup>おか</sup>すどんな罪<sup>つみ</sup>も赦<sup>ゆる</sup>していただけます。また、神<sup>かみ</sup>をけが<sup>けが</sup>すことと言<sup>い</sup>つても、それはみな赦<sup>ゆる</sup>していただけます。
- 29 しかし、聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>をけが<sup>けが</sup>す者<sup>もの</sup>はだれでも、永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>に赦<sup>ゆる</sup>されず、とこしえの罪<sup>つみ</sup>に定<sup>さだ</sup>められます。」
- 30 <sup>20</sup>このように言<sup>い</sup>われたのは、彼ら<sup>かれら</sup>が、「イエスは、汚<sup>けが</sup>れた霊<sup>れい</sup>につ<sup>と</sup>かれている」と言<sup>い</sup>つていたからである。
- 31 さて、イエスの母<sup>はは</sup>と兄弟<sup>けい</sup>たちが来<sup>き</sup>て、外<sup>そと</sup>に立<sup>た</sup>つていて、人<sup>ひと</sup>をやり、イエスを呼<sup>よ</sup>ばせた。
- 32 大ぜいの人<sup>ひと</sup>がイエスを囲<sup>かこ</sup>んですわつていたが、「ご覧<sup>らん</sup>なさい。あなたのお母<sup>はは</sup>さんと兄弟<sup>けい</sup><sup>21</sup>たちが、外<sup>そと</sup>であなたをた
- ずねています」と言<sup>い</sup>つた。
- 33 すると、イエスは彼ら<sup>かれら</sup>に答<sup>こた</sup>えて言<sup>い</sup>われた。「わたしの母<sup>はは</sup>とはだれのことですか。また、兄弟<sup>けい</sup>たちとはだれのことですか。」
- 34 そして、自分<sup>お</sup>の回<sup>まわ</sup>りにすわつてい<sup>い</sup>る人<sup>ひと</sup>たちを見<sup>み</sup>回<sup>まわ</sup>して言<sup>い</sup>われた。「ご覧<sup>らん</sup>なさい。わたしの母<sup>はは</sup>、わたしの兄弟<sup>けい</sup>たちで
- す。

35 神のみこころを行う人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」



## 四章

- 1 イエスはまた湖のほとりで教え始められた。おびたしい数の群衆がみもとに集まった。それでイエスは湖の上の舟に乗り、そこに腰をおろされ、群衆はみな岸への陸地にいた。
- 2 イエスはたとえによって多くのことを教えられた。その教えの中でこう言われた。
- 3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。
- 4 蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。
- 5 また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。
- 6 しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。
- 7 また、別の種がいばらの中に落ちた。ところが、いばらが伸びて、それをふさいでしまったので、実を結ばなかった。
- 8 また、別の種が良い地に落ちた。すると芽ばえ、育って、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。」
- 9 そしてイエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」
- 10 さて、イエスだけになったとき、<sup>22</sup>いつもつき従っている人たちが、<sup>23</sup>十二弟子とともに、これらのたとえのことを尋ねた。
- 11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。
- 12 それは、『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』です。」
- 13 そして彼らにこう言われた。「このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができませんか。」
- 14 種蒔く人は、みことばを蒔くのです。
- 15 みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。
- 16 同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、
- 17 根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。
- 18 もう一つの、いばらの中に種を蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞いてはいるが、
- 19 <sup>24</sup>世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。
- 20 良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちです。」
- 21 また言われた。「あかりを持って来るのは、柵の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。」
- 22 隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。
- 23 聞く耳のある者は聞きなさい。」
- 24 また彼らに言われた。「聞いていることによく注意しなさい。あなたがたは、人に量ってあげるその量りで、自分にも量り与えられ、さらにその上に増し加えられます。
- 25 持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っているものまでも取り上げられてしまいます。」
- 26 また言われた。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、
- 27 夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。
- 28 地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実が入ります。
- 29 実が熟すると、人はすぐにかまを<sup>25</sup>入れます。収穫の時が来たからです。」
- 30 また言われた。「神の国は、<sup>26</sup>どのようなものと言えよう。何にたとえたらよいでしょう。
- 31 それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれた種の中で、一番小さいのですが、
- 32 それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります。」
- 33 イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。
- 34 たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた。
- 35 さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう」と言われた。
- 36 そこで弟子たちは、群衆を<sup>27</sup>あとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。

37 すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。

38 ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思わないのですか。」

39 イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。

40 イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。」

41 彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

## 五章

- 1 こうして彼らは湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。
- 2 イエスが舟から上がられると、すぐに、汚れた霊につかれた人が墓場から出て来て、イエスを迎えた。
- 3 この人は墓場に住みついており、もはやだれも、鎖をもってしても、彼をつないでおくことができなかった。
- 4 彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまったからで、だれにも彼を押さえるだけの力がなかったのである。
- 5 それで彼は、夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた。
- 6 彼はイエスを遠くから見つけ、駆け寄って来てイエスを拝し、
- 7 大声で叫んで言った。「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのですか。神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください。」
- 8 それは、イエスが、「汚れた霊よ。この人から出て行け」と言われたからである。
- 9 それで、「おまえの名は何か」と尋ねになると、「私の名はレギオンです。私たちは大ぜいですから」と言った。
- 10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと懇願した。
- 11 ところで、その山腹に、豚の大群が飼ってあった。
- 12 彼らはイエスに願って言った。「私たちが豚の中に送って、彼らに乗り移らせてください。」
- 13 イエスがそれを許されたので、汚れた霊どもは出て行って、豚に乗り移った。すると、二千匹ほどの豚の群れが、険しいがけを駆け降り、湖へなだれ落ちて、湖におぼれてしまった。
- 14 豚を飼っていた者たちは逃げ出して、町や村々でこの事を告げ知らせた。人々は何事が起こったのかと見にやって来た。
- 15 そして、イエスのところに来て、悪霊につかれていた人、すなわちレギオンを宿していた人が、着物を着て、正気に返ってすわっているのを見て、恐ろしくなった。
- 16 見ていた人たちが、悪霊につかれていた人に起こったことや、豚のことを、つぶさに彼らに話して聞かせた。
- 17 すると、彼らはイエスに、この地方から離れてくださいよう願った。
- 18 それでイエスが舟に乘ろうとされると、悪霊につかれていた人が、<sup>28</sup> お供をしたいとイエスに願った。
- 19 しかし、お許しにならないで、彼にこう言われた。「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」
- 20 そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、デカポリスの地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた。
- 21 イエスが舟でまた向こう岸へ渡られると、大ぜいの人の群れがみもとに集まった。イエスは岸べに<sup>29</sup>とどまっておられた。
- 22 すると、会堂管理者のひとりでヤイロという者が来て、イエスを見て、その足もとにひれ伏し、
- 23 いっしょうけんめい願ってこう言った。「私の小さい娘が死にかけています。どうか、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。娘が<sup>30</sup>直って、助かるようにしてください。」
- 24 そこで、イエスは彼といっしょに出かけられたが、多くの群衆がイエスについて来て、イエスに押し迫った。
- 25 ところで、十二年の間長血をわずらっている女がいた。
- 26 この女は多くの医者からひどいめに会わされて、自分の持ち物をみな使い果たしてしまったが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった。
- 27 彼女は、イエスのことを耳にして、群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの<sup>31</sup>着物にさわった。
- 28 「お着物にさわることでもできれば、きっと<sup>32</sup>直る」と<sup>33</sup>考えていたからである。
- 29 すると、すぐに、血の源がかれて、ひどい痛みが直ったことを、からだに感じた。
- 30 イエスも、すぐに、自分のうちから力が外に出て行ったことに気づいて、群衆の中を振り向いて、「だれがわたしの着物にさわったのですか」と言われた。
- 31 そこで弟子たちはイエスに言った。「群衆があなたに押し迫っているのをご覧になっていて、それでも『だれがわたしにさわったのか』とおっしゃるのですか。」
- 32 イエスは、それをした人を知ろうとして、見回しておられた。
- 33 女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた。
- 34 そこで、イエスは彼女にこう言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを<sup>34</sup>直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。」
- 35 イエスが、まだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人がやって来て言った。「あなたのお嬢さんはな

くなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありましよう。」

36 イエスは、その話のことはをそばで聞いて、会堂管理者に言われた。「恐れ<sup>おそ</sup>ないで、ただ<sup>35</sup>信<sup>ゆる</sup>じていなさい。」

37 そして、ペテロとヤコブとヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれも自分といっしょに行くのをお許しにならなかった。

38 彼らはその会堂管理者の家に着いた。イエスは、人々が、取り乱し<sup>とみだ</sup>、大声で泣いたり、わめいたりしているのをご覧<sup>らん</sup>になり、

39 中に入<sup>と</sup>って、彼らにこう言<sup>みだ</sup>われた。「なぜ取り乱して、泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠<sup>ねむ</sup>っているのです。」

40 人々はイエスをあざ笑<sup>ともしや</sup>った。しかし、イエスはみんなを外に出し、ただその子どもの父と母、それにご自分の供<sup>とも</sup>の者たちだけを伴<sup>ともな</sup>って、子どものいる所へ入<sup>と</sup>って行かれた。

41 そして、その子どもの手を取<sup>やぐ</sup>って、「タリタ、クミ」と言<sup>やぐ</sup>われた。（訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい」という意味である。）

42 すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始<sup>さい</sup>めた。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常<sup>ひじょう</sup>な驚<sup>おどろ</sup>きに包<sup>と</sup>まれた。

43 イエスは、このことをだれにも知らせないようにと、きびしくお命<sup>いのち</sup>じになり、さらに、少女に食事<sup>しょくじ</sup>をさせるように言<sup>い</sup>われた。

## 六章

- 1 イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。
- 2 安息日になったとき、会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行われるこのような<sup>36</sup>力あるわざは、いったい何でしょう。」
- 3 この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。
- 4 イエスは彼らに言われた。「預言者が尊敬されたいのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」
- 5 それで、そこでは何一つ<sup>37</sup>力あるわざを行うことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。
- 6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた。
- 7 また、十二弟子を呼び、ふたりずつ遣わし始め、彼らに汚れた霊を追い出す権威をお与えになった。
- 8 また、彼らにこう命じられた。「旅のためには、杖一本のほかは、何も持って行ってはいけません。パンも、袋も、胴巻に金も持って行ってはいけません。」
- 9 くつは、はきなさい。しかし二枚の下着を着てはいけません。」
- 10 また、彼らに言われた。「どこででも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまっていなさい。」
- 11 もし、あなたがたを受け入れない場所、また、あなたがたに聞こうとしない人々なら、そこから出て行くときに、その人々に対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」
- 12 こうして十二人が出て行き、<sup>38</sup>悔い改めを説き広め、
- 13 悪霊を多く追い出し、大ぜいの病人に油を塗っていやした。
- 14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は、「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ」と言っていた。
- 15 別の人々は、「彼はエリヤだ」と言い、さらに別の人々は、「昔の預言者の中のひとりのような預言者だ」と言っていた。
- 16 しかし、ヘロデはうわさを聞いて、「私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ」と言っていた。
- 17 実は、このヘロデが、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、——ヘロデはこの女を妻としていた——人をやってヨハネを捕らえ、牢につないだのであった。
- 18 これは、ヨハネがヘロデに、「あなたが兄弟の妻を自分のものとしていることは不法です」と言い張ったからである。
- 19 ところが、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、果たせないでいた。
- 20 それはヘロデが、ヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、保護を加えていたからである。また、ヘロデはヨハネの教えを聞くとき、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた。
- 21 ところが、良い機会が訪れた。ヘロデがその誕生日に、重臣や、千人隊長や、ガリラヤのおもだった人などを招いて、祝宴を設けたとき、
- 22 ヘロデヤの娘が入って来て、踊りを踊ったので、ヘロデも列席の人々も喜んだ。そこで王は、この少女に、「何でもほしい物を言いなさい。与えよう」と言った。
- 23 また、「おまえの望む物なら、私の国の半分でも、与えよう」と言って、誓った。
- 24 そこで少女は出て行って、「何を願いましょうか」とその母親に言った。すると母親は、「バプテスマのヨハネの首」と言った。
- 25 そこで少女はすぐに、大急ぎで王の前に行き、こう言って頼んだ。「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せていただきとうございます。」
- 26 王は非常に心を痛めたが、自分の誓いもあり、列席の人々の手前もあって、少女の願いを退けることを好まなかった。
- 27 そこで王は、すぐに護衛兵をやって、ヨハネの首を持って来るように命令した。護衛兵は行って、牢の中でヨハネの首をはね、
- 28 その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女は、それを母親に渡した。
- 29 ヨハネの弟子たちは、このことを聞いたので、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めたのであった。
- 30 さて、使徒たちは、イエスのもとに集まって来て、自分たちのしたこと、教えたことを残らずイエスに報告した。
- 31 そこでイエスは彼らに、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい」と言われた。人々の出入りが多くて、ゆっくり食事する時間さえなかったからである。

- 32 そこで彼らは、舟に乗って、自分たちだけで寂しい所へ行った。
- 33 ところが、多くの人々が、彼らの出て行くのを見、それと気づいて、方々の町々からそこへ徒歩で駆けつけ、彼らよりも先に着いてしまった。
- 34 イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであることを深くあわれみ、いろいろと教え始められた。
- 35 そのうち、もう時刻もおそくなったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここはへんびな所で、もう時刻もおそくなりました。
- 36 みんなを解散させてください。そして、近くの部落や村に行って何か食べる物をめいめいで買うようにさせてください。」
- 37 すると、彼らに答えて言われた。「あなたがたで、あの人たちに何か食べる物を上げなさい。」そこで弟子たちは言った。「私たちが出かけて行って、二百デナリものパンを買ってあの人たちに食べさせるように、ということでしょうか。」
- 38 するとイエスは彼らに言われた。「パンはどれぐらいありますか。行って見て来なさい。」彼らは確かめて言った。「五つです。それと魚が二匹です。」
- 39 イエスは、みなを、それぞれ組にして青草の上にすわらせるよう、弟子たちにお命じになった。
- 40 そこで人々は、百人、五十人と固まって席に着いた。
- 41 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて祝福を求め、パンを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられた。また、二匹の魚もみなに分けられた。
- 42 人々はみな、食べて満腹した。
- 43 そして、パン切れを十二の<sup>39</sup>かごにいっぱい取り集め、魚の残りも取り集めた。
- 44 パンを食べたのは、男が五千人であった。
- 45 それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群衆を解散させておられた。
- 46 それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。
- 47 夕方になったころ、舟は湖の真ん中に出ており、イエスだけが陸地に<sup>40</sup>おられた。
- 48 イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、<sup>40</sup>夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった。
- 49 しかし、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、叫び声をあげた。
- 50 というのは、みなイエスを見て<sup>41</sup>おびえてしまったからである。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しつかりなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。
- 51 そして舟に乗り込まれると、風がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。
- 52 というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、<sup>42</sup>その心は堅く閉じていたからである。
- 53 彼らは湖を渡って、ゲネサレの地に着き、舟をつないだ。
- 54 そして、彼らが舟から上がると、人々はすぐにイエスだと気がついて、
- 55 そのあたりをくまなく走り回り、イエスがおられると聞いた場所へ、病人を床に載せて運んで来た。
- 56 イエスが入って行かれると、村でも町でも部落でも、人々は病人たちを広場に寝かせ、そして、せめて、イエスの着物の端にでもさわらせてくださるようにと願った。そして、さわった人々はみな、いやされた。

## 七章

- 1 さて、パリサイ人<sup>びと</sup>たちと幾人<sup>いくにん</sup>かの律法学者<sup>りつぽうがくしや</sup>がエルサレムから来ていて、イエスの回りに集まった。
- 2 イエスの弟子<sup>でし</sup>のうちに、汚れた手<sup>けが</sup>で、すなわち洗わない手でパン<sup>パン</sup>を食べている者があるのを見て、
- 3 ―パリサイ人<sup>びと</sup>をはじめユダヤ人<sup>あ</sup>らはみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わないでは食事<sup>さかすき</sup>をせず、
- 4 また、市場<sup>どうき</sup>から帰ったときには、からだをきよめてからでないと食事をしない。まだこのほかにも、杯<sup>かた</sup>、水差<sup>みづさ</sup>し、銅器<sup>どうき</sup>を洗うことなど、堅く守るように伝えられた、しきたりがたくさんある―
- 5 パリサイ人<sup>びと</sup>と律法学者<sup>りつぽうがくしや</sup>たちは、イエスに尋ねた。「なぜ、あなたの弟子<sup>でし</sup>たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手<sup>けが</sup>でパンを食べるのですか。」
- 6 イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者<sup>ぎぜんしや</sup>について預言<sup>よげん</sup>をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。
- 『この民<sup>たみ</sup>は、口先<sup>くち</sup>ではわたしを敬うが、
- その心<sup>こころ</sup>は、わたしから遠く離れている。
- 7 彼ら<sup>かれら</sup>が、わたしを拜んでも、むだなことである。
- 人間の教え<sup>おし</sup>を、教え<sup>おし</sup>として教えるだけだから。』
- 8 あなたがたは、神<sup>かみ</sup>の戒め<sup>いましめ</sup>を捨てて、人間の言い伝え<sup>いまたし</sup>を堅く守っている。」
- 9 また言われた。「あなたがたは、自分たちの言い伝えを守るために、よくも神<sup>かみ</sup>の戒め<sup>いましめ</sup>をないがしろにしたものです。
- 10 モーセは、『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をのしる者は死刑<sup>しがい</sup>に処せられる』と言っています。
- 11 それなのに、あなたがたは、もし人が父や母に向かって、私からあなたのために上げられる物<sup>もの</sup>は、コルバン（すなわち、ささげ物）になりました、と言えば、
- 12 その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。
- 13 こうしてあなたがたは、自分たちが受け継いだ言い伝えによって、神<sup>かみ</sup>のことばを空文<sup>くうぶん</sup>にしています。そして、これと同じようなことを、たくざんしているのです。」
- 14 イエスは再び群衆<sup>ぐんしゆう</sup>を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。
- 15 外側<sup>がわ</sup>から人<sup>ひと</sup>に入<sup>い</sup>って、人<sup>ひと</sup>を汚<sup>けが</sup>すことのできる物は何もありません。人から出て来るものが、人を汚<sup>けが</sup>すものなのです。」 <sup>43</sup>
- 17 イエスが群衆<sup>ぐんしゆう</sup>を離れて、家に入<sup>い</sup>られると、弟子<sup>でし</sup>たちは、このたとえについて尋ねた。
- 18 イエスは言われた。「あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側<sup>がわ</sup>から人<sup>ひと</sup>に入<sup>い</sup>って来る物<sup>もの</sup>は人を汚<sup>けが</sup>すことができない、ということがわからないのですか。
- 19 そのような物<sup>もの</sup>は、人の心<sup>こころ</sup>には、入らないで、腹<sup>はら</sup>に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」 イエスは、このように、すべての食物<sup>しょくぶつ</sup>をきよいとされた。
- 20 また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚<sup>けが</sup>すのです。
- 21 内側<sup>うち</sup>から、すなわち、人の心<sup>こころ</sup>から出て来るものは、悪い考え、不品行<sup>ふひんこう</sup>、盗み<sup>ぬす</sup>、殺人<sup>ころす</sup>、
- 22 姦淫<sup>かんいん</sup>、貪欲<sup>どんよく</sup>、よこしま、欺<sup>あそむ</sup>き、好色<sup>こうしき</sup>、<sup>44</sup>ねたみ、そしり、<sup>45</sup>高ぶり、愚かさであり、
- 23 これらの悪<sup>あく</sup>はみな、内側<sup>うち</sup>から出<sup>で</sup>て、人を汚<sup>けが</sup>すのです。」
- 24 イエスは、そこを出てツロ<sup>46</sup>の地方<sup>かた</sup>へ行かれた。家に入<sup>い</sup>られたとき、だれにも知られたくないと思われたが、隠れて<sup>かく</sup>いることはできなかった。
- 25 汚れた霊<sup>けがれ</sup>につかれた小さい娘<sup>むすめ</sup>のいる女<sup>おんな</sup>が、イエスのことを聞きつけてすぐにやって来て、その足もとにひれ伏した。
- 26 この女はギリシヤ人<sup>ギリシヤじん</sup>で、スロ・フェニキヤの生まれであった。そして、自分の娘<sup>むすめ</sup>から悪霊<sup>あくれい</sup>を追い出してくださるよう<sup>よう</sup>にイエスに願<sup>ねが</sup>ひ続けた。
- 27 するとイエスは言われた。「まず子どもたちに満腹<sup>まんぷく</sup>させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬<sup>しょうけん</sup>に投<sup>な</sup>げてやるのはよくないことです。」
- 28 しかし、女は答えて言<sup>こた</sup>った。「主よ。そのとおりです。でも、食卓<sup>しょくたく</sup>の下<sup>した</sup>の小犬<sup>しょうけん</sup>でも、子どもたちのパンくずをいただきます。」
- 29 そこでイエスは言われた。「そうまで言うのですか。それなら家にお帰<sup>かえ</sup>りなさい。悪霊<sup>あくれい</sup>はあなたの娘<sup>むすめ</sup>から出て行きました。」
- 30 女<sup>おんな</sup>が家<sup>うち</sup>に帰<sup>かえ</sup>てみると、その子<sup>こ</sup>は床<sup>とこ</sup>の上に伏<sup>ふ</sup>せており、悪霊<sup>あくれい</sup>はもう出ていた。
- 31 それから、イエスはツロ<sup>ツロ</sup>の地方<sup>かた</sup>を去<sup>さ</sup>り、シドン<sup>シドン</sup>を通<sup>とお</sup>って、もう一度、デカポリス地方<sup>デカポリス</sup>のあたりのガリラヤ湖<sup>ガリラヤ</sup>に来<sup>き</sup>られた。
- 32 人々<sup>ひと</sup>は、耳<sup>みみ</sup>が聞こえず、口<sup>くち</sup>のきけない人<sup>ひと</sup>を連れて来て、彼<sup>かれ</sup>の上に手<sup>て</sup>を置いてくださるよう、願<sup>ねが</sup>った。

- 33 そこで、イエスは、その人だけを群衆ぐんしゆうの中から連れ出し、その両耳に指を差し入れ、それからつばきをして、その人の舌にさわられた。  
34 そして、天を見上げ、深く嘆息たんそくして、その人ひとに「エパタ」すなわち、「開け」と言われた。  
35 すると彼の耳が開き、舌のもつれもすぐに解け、はっきりと話せるようになった。  
36 イエスは、このことをだれにも言ってはならない、と命じられたが、彼らは口止めされればされるほど、かえって言いふらした。  
37 人々は非常に驚おどろいて言った。「この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない者を聞こえるようにし、口のきけない者を話せるようにされた。」



## 八章

1 そのころ、また大ぜいの人の群れが集まっていたが、食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼んで言われた。

2 「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。

3 空腹のまま家に帰らせたなら、途中で動けなくなるでしょう。それに遠くから来ている人もいます。」

4 弟子たちは答えた。「こんなへんぴな所で、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができましょう。」

5 すると、イエスは尋ねられた。「パンはどれぐらいありますか。」弟子たちは、「七つです」と答えた。

6 すると、イエスは群衆に、地面に<sup>47</sup>すわるようにおっしゃった。それから、七つのパンを取り、感謝をささげてからそれを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に<sup>48</sup>配った。

7 また、魚が少しばかりあったので、そのために感謝をささげてから、これも配るように言われた。

8 人々は食べて満腹した。そして余りのパン切れを七つのかごに取り集めた。

9 人々はおよそ四千人であつた。それからイエスは、彼らを解散させられた。

10 そしてすぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマヌタ地方へ行かれた。

11 バリサイ人たちがやって来て、イエスに議論をしかけ、天からの<sup>49</sup>しるしを求めた。イエスをためそうとしたのである。

12 イエスは、心の中で深く嘆息して、こう言われた。「なぜ、今の時代はしるしを求めるのか。まことに、あなたがたに告げます。今の時代には、しるしは絶対に与えられません。」

13 イエスは彼らを離れて、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。

14 弟子たちは、パンを持って来るのを忘れ、舟の中には、パンがただ一つしかなかった。

15 そのとき、イエスは彼らに命じて言われた。「バリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。」

16 そこで弟子たちは、パンを持っていないということで、互いに議論し始めた。

17 それに気づいてイエスは言われた。「なぜ、パンがないといって議論しているのですか。まだわからないのですか、悟らないのですか。心が<sup>50</sup>堅く閉じているのですか。

18 目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。

19 わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」

20 「四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」

21 イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」

22 彼らはベツサイダに着いた。すると人々が盲人を連れて来て、彼にさわってくださるよう、イエスに願った。

23 イエスは盲人の手を取って村の外に連れて行かれた。そしてその両目につばきをつけ、両手を彼に当てて「何か見えるか」と聞かれた。

24 すると彼は、<sup>51</sup>見えるようになって、「人が見えます。木のようですが、歩いているのが見えます」と言った。

25 それから、イエスはもう一度彼の両目に両手を当てられた。そして、彼が見つめていると、すっかり直り、すべてのものがはっきり見えるようになった。

26 そこでイエスは、彼を家に帰し、「村に入って行かないように」と言われた。

27 それから、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられた。その途中、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々はわたしをだれだと言っていますか。」

28 彼らは答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます。」

29 するとイエスは、彼らに尋ねられた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えてイエスに言った。「あなたは、<sup>52</sup>キリストです。」

30 するとイエスは、自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた。

31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。

32 しかも、はつきりとこの事が話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。

33 しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

34 それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来た

いと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。

36 人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう。

37 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。

38 このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」

## 九章

1 イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者がいます。」

2 それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で御姿が変わった。

3 その御衣は、非常に白く光り、53世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった。

4 また、エリヤが、モーセとともに現れ、彼らはイエスと語り合っていた。

5 すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「54先生。55私たちがここにいることは、すばらしいことです。私たちが、幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」

6 実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖に打たれたのであった。

7 そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」と言う声がした。

8 彼らが急いであたりを見回すと、自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった。

9 さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるとき56までは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。

10 そこで彼らは、そのおこたばを心に堅く留め、死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った。

11 彼らはイエスに尋ねて言った。「律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか。」

12 イエスは言われた。「エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれと書いてあるのは、どうしてなのですか。」

13 しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです。」

14 さて、彼らが、弟子たちのところに帰って来て、見ると、その回りに大ぜいの人の群れがおり、また、律法学者たちが弟子たちと論じ合っていた。

15 そしてすぐ、群衆はみな、イエスを見ると驚き、走り寄って来て、あいさつをした。

16 イエスは彼らに、「あなたがたは弟子たちと何を議論しているのですか」と聞かれた。

17 すると群衆のひとり、イエスに答えて言った。「先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、先生のところに連れて来ました。」

18 その霊が息子にとりつく、と所かまわず彼を57押し倒します。そして彼はあわを吹き、歯ざしりして、からだを58こわばらせます。それでお弟子たちに、霊を追い出すよう願ったのですが、できませんでした。」

19 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な世だ。いつまであなたがたといっしょにいなければならないのでしょうか。いつまであなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」

20 そこで、人々はイエスのところにその子を連れて来た。59その子がイエスを見ると、霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。

21 イエスはその子の父親に尋ねられた。「この子がこんなになってから、どのくらいになりますか。」父親は言った。「幼い時からです。」

22 この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。」

23 するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」

24 するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」

25 イエスは、群衆が60駆けつけるのをご覧になると、汚れた霊をしかって言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」

26 するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。するとその子が死人のようになったので、多くの人々は、「この子は死んでしまった」と言った。

27 しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった。

28 イエスが家に入れると、弟子たちがそつとイエスに尋ねた。「どうしてでしょう。私たちには追い出せなかったのですか。」

29 すると、イエスは言われた。「この種のもの、61折りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません。」

- 30 さて、一行はそこを去って、ガリラヤを通して行った。イエスは、人に知られたくないと思われた。
- 31 それは、イエスは弟子たちを教えて、「人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる」と話しておられたからである。
- 32 しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。また、イエスに尋ねるのを恐れていた。
- 33 カペナウムに着いた。イエスは、家に入った後、弟子たちに質問された。「道で何を論じ合っていたのですか。」
- 34 彼らは黙っていた。道々、だれが一番偉いかと論じ合っていたからである。
- 35 イエスはおすわりになり、十二弟子を呼んで、言われた。「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなものしがりとなり、みなに仕える者となきなさい。」
- 36 それから、イエスは、ひとりの子どもを連れて来て、彼らの真ん中に立たせ、腕に抱き寄せて、彼らに言われた。
- 37 「だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」
- 38 ヨハネがイエスに言った。「先生。先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちの仲間ではないので、やめさせました。」 [62](#)
- 39 しかし、イエスは言われた。「やめさせることはありません。わたしの名を唱えて、[63](#)力あるわざを行いながら、すぐあとで、わたしを悪く言える者はないのです。
- 40 わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です。
- 41 あなたがたが、[64](#)キリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです。
- 42 また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、むしろ[65](#)大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。
- 43 もし、あなたの手があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片手でいのちに入るほうが、両手そろっていてゲヘナの消えぬ火の中に落ち込むよりは、あなたにとってよいことです。 [66](#)
- 45 もし、あなたの足があなたのつまずきとなるなら、それを切り捨てなさい。片足でいのちに入るほうが、両足そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。 [67](#)
- 47 もし、あなたの目があなたのつまずきを引き起こすのなら、それをえぐり出しなさい。片目で神の国に入るほうが、両目そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。
- 48 そこでは、[68](#)彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることはありません。
- 49 すべては、火によって、塩けをつけられるのです。
- 50 塩は、ききめのあるものです。しかし、もし塩に塩けがなくなったら、何によって[69](#)塩けを取り戻せましょう。あなたがたは、自分自身のうちに塩けを保ちなさい。そして、互いに和合して暮らさない。」

# 一〇章

1 イエスは、そこを立て、ユダヤ地方とヨルダンの向こうに行かれた。すると、群衆がまたもみもとに集まって来たので、またいつものように彼らを教えられた。

2 すると、パリサイ人たちがみもとにやって来て、夫が妻を離別することは許されるかどうかと質問した。イエスをためそうとしたのである。

3 イエスは答えて言われた。「モーセはあなたがたに、何と命じていますか。」

4 彼らは言った。「モーセは、離婚状を書いて妻を離別することを許しました。」

5 イエスは言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。」

6 しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。

7 それゆえ、人はその父と母を離れ、<sup>70</sup>

8 ふたりは一体となるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。

9 こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

10 家に戻った弟子たちが、この問題についてイエスに尋ねた。

11 そこで、イエスは彼らに言われた。「だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。」

12 妻も、夫を離別して別の男とつぐなら、姦淫を犯しているのです。」

13 さて、イエスにさわっていただくとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかった。

14 イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めたいけません。神の国は、このような者たちのものです。」

15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」

16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。

17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた。「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいでしょうか。」

18 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。<sup>71</sup>尊い方は、神おひとりのほかに、だれもありません。」

19 戒めはあなたもよく知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』」

20 すると、その人はイエスに言った。「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」

21 イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」

22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。

23 イエスは、見回して、弟子たちに言われた。「裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。」

24 弟子たちは、イエスのことばに驚いた。しかし、イエスは重ねて、彼らに答えて言われた。「子たちよ。<sup>72</sup>神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。」

25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」

26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」

27 イエスは、彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」

28 ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」

29 イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、

30 その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。」

31 しかし、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」

32 さて、一行は、エルサレムに上る途中にあった。イエスは先頭に立って歩いて行かれた。弟子たちは驚き、また、あとについて行く者たちは恐れを覚えた。すると、イエスは再び十二弟子をそばに呼んで、ご自分に起ころうとしていることを、話し始められた。

- 33 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは、人の子を死刑に定め、そして、異邦人に引き渡します。」
- 34 すると彼らはあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺します。しかし、人の子は三日の後に、よみがえります。」
- 35 さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。」
- 36 イエスは彼らに言われた。「何を<sup>を</sup>してほしいのですか。」
- 37 彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」
- 38 しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする<sup>を</sup>杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」
- 39 彼らは「できます」と言った。イエスは言われた。「なるほどあなたがたは、わたしの飲む<sup>を</sup>杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはします。」
- 40 しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。<sup>73</sup>それに備えられた人々があるのです。」
- 41 十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。
- 42 そこで、イエスは彼らと呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。」
- 43 しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。
- 44 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。
- 45 人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、<sup>あがな</sup>贖いの代価として、自分のいのちを<sup>を</sup>与えるためなのです。」
- 46 彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人の物ごいが、道ばたにすわっていた。
- 47 ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と叫び始めた。
- 48 そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください」と叫び立てた。
- 49 すると、イエスは立ち止まって、「あの人を<sup>を</sup>呼んで来なさい」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている」と言った。
- 50 すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。
- 51 そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何を<sup>を</sup>してほしいのか。」すると、盲人は言った。「<sup>74</sup>先生。目が見えるようになることです。」
- 52 するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

## 一章

- 1 さて、彼らがエルサレムの近くに来て、オリーブ山のふもととのベテバゲとベタニヤに近づいたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、
- 2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が、つないでゐるのに気がつくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。
- 3 もし、『なぜそんなことをするのか』と言う人があったら、『主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます』と言いなさい。」
- 4 そこで、出かけて見ると、表通りにある家の戸口に、ろばの子が一匹つないであったので、それをほどいた。
- 5 すると、そこに立っていた何人かが言った。「ろばの子をほどいたりして、どうするのですか。」
- 6 弟子たちが、イエスの言われたとおりを話すと、彼らは許してくれた。
- 7 そこで、ろばの子をイエスのところへ引いて行って、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。
- 8 すると、多くの人が、自分たちの上着を道に敷き、またほかの人々は、木の葉を枝ごと野原から切つて来て、道に敷いた。
- 9 そして、前を行く者も、あとに従う者も、叫んでいた。
- 「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」
- 10 祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。  
ホサナ。いと高き所に。」
- 11 こうして、イエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、時間ももうおそかったので、十二弟子といっしょにベタニヤに出て行かれた。
- 12 翌日、彼らがベタニヤを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。
- 13 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと見に行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。
- 14 イエスは、その木に向かって言われた。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」弟子たちはこれを聞いていた。
- 15 それから、彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、
- 16 また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。
- 17 そして、彼らに教えて言われた。「『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の75巢にしたのです。」
- 18 祭司長、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。
- 19 夕方になると、イエスとその弟子たちは、いつも都から外に出た。
- 20 朝早く、通りがかりに見ると、いちじくの木が根まで枯れていた。
- 21 ベテロは思い出して、イエスに言った。「先生。ご覧なさい。あなたののろわれたいちじくの木が枯れました。」
- 22 イエスは答えて言われた。「神を信じなさい。」
- 23 まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります。
- 24 だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。
- 25 また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があつたら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます。」76
- 27 彼らはまたエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると、祭司長、律法学者、長老たちが、イエスのところへやって来た。
- 28 そして、イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにこれらのことをする権威を授けたのですか。」
- 29 そこでイエスは彼らに言われた。「一言尋ねますから、それに答えなさい。そうすれば、わたしも、何の権威によってこれらのことをしているかを、話しましょう。
- 30 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、人から出たのですか。答えなさい。」
- 31 すると、彼らは、こう言いながら、互いに論じ合った。「もし、天から、と言えば、それならなぜ、彼を信じなかったかと言うだろう。」

32 だからといって、人から、と言ってよいだろうか。」——彼らは群衆ぐんしゆうを恐れおそていたのである。というのは、人々がみな、ヨハネは確かに預言者よ げん しやだと思っていたからである。

33 そこで彼らは、イエスに答えて、「わかりません」と言った。そこでイエスは彼らに、「わたしも、何の権威けん いによってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい」と言われた。



## 一 二 章

1 それからイエスは、たとえを用いて彼らに話し始められた。

「ある人がぶどう園を造って、垣を巡らし、酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを<sup>77</sup>農夫たちに貸して、旅に出かけた。

2 季節になると、ぶどう園の収穫の分けまえを受け取りに、しもべを農夫たちのところへ遣わした。

3 ところが、彼らは、そのしもべをつかまえて袋だたきにし、何も持たせないで送り帰した。

4 そこで、もう一度別のしもべを遣わしたが、彼らは、頭をなぐり、はずかしめた。

5 また別のしもべを遣わしたところが、彼らは、これも殺してしまった。続いて、多くのしもべをやったけれども、彼らは袋だたきにしたり、殺したりした。

6 その人には、なおもうひとりの者がいた。それは愛する息子であった。彼は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、最後にその息子を遣わした。

7 すると、その農夫たちはこう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。』

8 そして、彼をつかまえて殺してしまい、ぶどう園の外に投げ捨てた。

9 ところで、ぶどう園の主人は、どうするでしょう。彼は<sup>78</sup>戻って来て、農夫どもを打ち滅ぼし、ぶどう園をほかの人たちに与えてしまいます。

10 あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。

『家を建てる者たちの見捨てた石、

それが 礎 の石になった。

11 これは主のなさったことだ。

私たちの目には、  
不思議なことである。』

12 彼らは、このたとえ話が、自分たちをさして語られたことに気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、やはり群衆を恐れた。それで、イエスを残して、立ち去った。

13 さて、彼らは、イエスに何か言わせて、わなに 陥 れようとして、パリサイ人とヘロデ党の者数人をイエスのところへ送った。

14 彼らはイエスのところに来て、言った。「先生。私たちは、あなたが真実な方で、<sup>79</sup>だれをもはばからない方だと存じています。あなたは人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、カイザルに<sup>80</sup>税金を納めることは<sup>81</sup>律法にかなっていることでしょうか、かなっていないことでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないのでしょうか。」

15 イエスは彼らの擬装を見抜いて言われた。「なぜ、わたしをためすのか。<sup>82</sup>デナリ銀貨を持って来て見せなさい。」

16 彼らは持って来た。そこでイエスは彼らに言われた。「これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」彼らは、「カイザルのです」と言った。

17 するとイエスは言われた。「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」彼らはイエスに驚嘆した。

18 また、復活はないと主張していたサドカイ人たちが、イエスのところに来て、質問した。

19 「先生。モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、兄が死んで妻をあとに残し、しかも子がない場合には、その弟はその女を妻にして、兄のために子をもうけなければならない。』

20 さて、七人の兄弟がいきました。長男が妻をめとりましたが、子を残さずに死にました。

21 そこで次男がその女を妻にしたところ、やはり子を残さずに死にました。三男も同様でした。

22 こうして、七人とも子を残しませんでした。最後に、女も死にました。

23 復活の際、<sup>83</sup>彼らがよみがえるとき、その女はだれの妻なのでしょう。七人ともその女を妻にしたのですが。」

24 イエスは彼らに言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではありませんか。

25 人が死人の中からよみがえるときには、めとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。

26 それに、死人がよみがえることについては、モーセの書にある柴の個所で、神がモーセにどう語られたか、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。

27 神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。あなたがたはたいへんな思い違いをしています。」

28 律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが<sup>84</sup>一番たいせつですか。」

- 29 イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。』
- 30 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』
- 31 次にこれはです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」
- 32 そこで、この律法学者は、イエスに言った。「先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほかに、主はない』と言われたのは、まさにそのとおりです。」
- 33 また『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。」
- 34 イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。
- 35 イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた。「律法学者たちは、どうして<sup>85</sup>キリストをダビデの子と言うのですか。」
- 36 ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。  
『主は私の主に言われた。  
「わたしがあなたの敵を  
あなたの足の下に従わせるまでは、  
わたしの右の座に着いていなさい。」』
- 37 ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるのに、どういうわけでキリストがダビデの子なのでしょう。」大ぜいの群衆は、イエスの言われることを喜んで聞いていた。
- 38 イエスはその教えの中でこう言われた。「律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが大好きで、
- 39 また会堂の上席や、宴会の上座が大好きです。」
- 40 また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。」
- 41 それから、イエスは献金箱に向かってすわり、人々が献金箱へ<sup>86</sup>金を投げ入れる様子を見ておられた。多くの金持ちが大金を投げ入れていた。
- 42 そこへひとりの貧しいやもめが来て、<sup>87</sup>レプタ銅貨を二つ投げ入れた。それは—<sup>88</sup>コドラントに当たる。
- 43 すると、イエスは弟子たちを呼び寄せて、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました。」
- 44 みなは、あり余る中から投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。」

# 一三章

- 1 イエスが、宮から出て行かれるとき、弟子のひとりがイエスに言った。「先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう。」
- 2 すると、イエスは彼に言われた。「この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」
- 3 イエスがオリーブ山で宮に向かってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにイエスに質問した。
- 4 「お話しください。いつ、そういうことが起こるのでしょうか。また、それがみな実現するようなときには、どんな<sup>89</sup>前兆があるのでしょうか。」
- 5 そこで、イエスは彼らに話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。
- 6 わたしの名を名の者が大ぜい現れ、『私こそそれだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。
- 7 また、戦争のことや戦争のうわさを聞いても、あててはいけません。それは必ず起こることです。しかし、終わりが来たものではありません。
- 8 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、ききんも起こるはずだからです。これらのことは、産みの苦しみの初めです。
- 9 だが、あなたがたは、気をつけていなさい。人々は、あなたがたを<sup>90</sup>議会に引き渡し、また、あなたがたは会堂でむち打たれ、また、わたしのゆえに、総督や王たちの前に立たされます。それは彼らに対してあかしをするためです。
- 10 こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。
- 11 彼らに<sup>91</sup>捕らえられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。
- 12 また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。
- 13 また、わたしの名のために、あなたがたはみな者の者に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。
- 14 『荒らす憎むべきもの』が、自分の立つてはならない所に立っているのを見たならば（読者はよく読み取るように。） ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。
- 15 屋上にいる者は降りてはいけません。家から何かを取り出そうとして中に入ってはいけません。
- 16 畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。
- 17 だがその日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。
- 18 ただ、このことが冬に起こらないように祈りなさい。
- 19 その日は、神が天地を創造された初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日だからです。
- 20 そして、もし主がその日数を少なくしてくださらないなら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、主は、ご自分で選んだ選びの民のために、その日数を少なくしてくださったのです。
- 21 そのとき、あなたがたに、『そら、<sup>92</sup>キリストがここにいる』とか、『ほら、あそこにいる』とか言う者があっても、信じてはいけません。
- 22 にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民を惑わそうとして、<sup>93</sup>しるしや不思議なことをして見せます。
- 23 だから、気をつけていなさい。わたしは、何もかも前もって話しました。
- 24 だが、その日には、その苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たず、
- 25 星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。
- 26 そのとき、人々は、人の子が偉大な力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。
- 27 そのとき、人の子は、御使いたちを送り、地の果てから天の果てまで、四方からその選びの民を集めます。
- 28 いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔かくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。
- 29 そのように、これらのことが起こるのを見たら、<sup>94</sup>人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。
- 30 まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この<sup>95</sup>時代は過ぎ去りません。
- 31 この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。
- 32 ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。
- 33 気をつけなさい。目をさまし、注意していなさい。<sup>96</sup>その定めの時がいつだか、あなたがたは知らないからです。

34 それはちょうど、旅に立つ人が、出がけに、しもべたちにはそれぞれ仕事を割り当てて<sup>わ あ</sup>97責任を持たせ、門番には目をさましてるように言いつけるようなものです。

35 だから、目をさましていなさい。家の主人がいつ帰って来るか、夕方か、夜中か、<sup>にわとり</sup>鶏の鳴くころか、明け方か、わからないからです。

36 主人が不意に帰って来たとき眠<sup>ねむ</sup>っているのを見られないようにしなさい。

37 わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい。」

## 一四章

1 さて、過越の祭りと種なしパンの祝いが二日後に迫っていたので、祭司長、律法学者たちは、どうしたらイエスをだまして捕らえ、殺すことができるだろうか、とけんめいであった。

2 彼らは、「祭りの間はいけない。民衆の騒ぎが起こるといけないから」と話していた。

3 イエスがベタニヤで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられたとき、食卓に着いておられると、ひとりの女が、純粋で、非常に高価なナルド油の入った石膏のつばを持って来て、そのつばを割り、イエスの頭に注いだ。

4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなにむだにしたのか。」

5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そうして、その女をきびしく責めた。

6 すると、イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。」

7 貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。それで、あなたがたがしたいときは、いつでも彼らに良いことをしてやれます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。

8 この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。

9 まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」

10 ところで、イスカリオテ・ユダは、十二弟子のひとりであるが、イエスを<sup>98</sup>売ろうとして祭司長たちのところへ出向いて行った。

11 彼らはこれを聞いて喜んで、金をやろうと約束した。そこでユダは、どうしたら、うまいぐあいにイエスを引き渡せるかと、ねらっていた。

12 種なしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の小羊を<sup>99</sup>ほふる日に、弟子たちはイエスに言った。「過越の食事をなさるのに、私たちは、どこへ行つて用意をしましょうか。」

13 そこで、イエスは、弟子のうちふたりを送って、こう言われた。「都に入りなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。」

14 そして、その人が入って行く家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする、わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる』と言いなさい。

15 するとその主人が自分で、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をしなさい。」

16 弟子たちが出かけte行って、都に入ると、まさしくイエスの言われたとおりであった。それで、彼らはそこで過越の食事の用意をした。

17 夕方になって、イエスは十二弟子といっしょにそこに来られた。

18 そして、みなが席に着いて、食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを<sup>100</sup>裏切ります。」

19 弟子たちは悲しくなって、「まさか私ではないでしょう」とかわるがわるイエスに言いだした。

20 イエスは言われた。「この十二人の中のひとりで、わたしといっしょに鉢に浸している者です。」

21 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」

22 それから、みなが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、彼らに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしのからだです。」

23 また、杯を取り、感謝をささげて後、彼らに与えられた。彼らはみなその杯から飲んだ。

24 イエスは彼らに言われた。「これはわたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。」

25 まことに、あなたがたに告げます。神の国で新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」

26 そして、賛美の歌を歌ってから、みなでオリブ山へ出かけて行った。

27 イエスは、弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる』と書いてありますから。」

28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」

29 すると、ペテロがイエスに言った。「たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません。」

30 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、今夜、鶏が二度鳴く前に、わたしを知らないと言います。」

31 ペテロは力を込めて言い張った。「たとい、ごいっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らない

いなどとは決して申しません。」みな<sup>みんな</sup>の者もそう言った。

32 ゲツセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたし<sup>わたし</sup>が祈る間、ここにすわっていなさい。」

33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れ<sup>おそ</sup>れもだえ始められた。

34 そして彼らに言われた。「<sup>101</sup>わたしは悲しみのあまり死ぬ<sup>しぬ</sup>ほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」

35 それから、イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し<sup>ふ</sup>、もしできることなら、この時が自分から過ぎ去る<sup>す</sup>ようにと祈り、

36 またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯<sup>さかずき</sup>をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」

37 それから、イエスは戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「シモン。眠っているのか。一時間でも目をさましていることができなかったのか。」

38 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」

39 イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。

40 そして、また戻って来て、ご覧になると、彼らは眠<sup>ねむ</sup>っていた。ひどく眠け<sup>ねむ</sup>がさしていたのである。彼らは、イエスにどう言ってよいか、わからなかった。

41 イエスは三度目に来て、彼らに言われた。「<sup>102</sup>まだ眠<sup>ねむ</sup>って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。」

42 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者<sup>うらぎ</sup>が近づきました。」

43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが現れた。剣や棒を手にした群衆もいっしょであつた。群衆はみな、祭司長、律法学者、長老たちから差し向けられたものであつた。

44 イエスを裏切る者は、彼らと前もって次のような合図を決めておいた。「私が口づけをするのが、その人だ。その人をつかまえて、しっかりと引いて行くのだ。」

45 それで、彼はやって来るとすぐに、イエスに近寄って、「<sup>103</sup>先生」と言って、口づけした。

46 すると人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

47 そのとき、イエスのそばに立っていたひとりが、剣を抜いて大祭司のしもべに撃ちかかり、その耳を切り落とした。

48 イエスは彼らに向かって言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。」

49 わたしは毎日、宮であなたがたといっしょにいて、教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえなかったのです。しかし、<sup>104</sup>こうなったのは聖書のことばが実現するためです。」

50 すると、みながイエスを見捨てて、逃げてしまった。

51 ある青年が、素はだに亜麻布を一枚ままとったままで、イエスについて行ったところ、人々は彼を捕らえようとした。

52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、はだかで逃げた。

53 彼らがイエスを大祭司のところ<sup>ところ</sup>に連れて行くと、祭司長、長老、律法学者たちがみな、集まって来た。

54 ペテロは、遠くからイエスのあとをつけながら、大祭司の庭の中まで入って行った。そして、<sup>105</sup>役人たちといっしょにすわって、<sup>106</sup>火にあたっていた。

55 さて、祭司長たちと<sup>107</sup>全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える証拠をつかもうと努めたが、何も見つからなかった。

56 イエスに対する偽証をした者は多かったが、一致しなかったのである。

57 すると、数人が立ち上がって、イエスに対する偽証をして、次のように言った。

58 「私たちは、この人が『わたしは手で造られたこの<sup>108</sup>神殿をこわして、三日のうちに、手で造られない別の神殿を造ってみせる』と言うのを聞きました。」

59 しかし、この点でも証言は一致しなかった。

60 そこで大祭司が立ち上がり、真ん中に進み出てイエスに尋ねて言った。「何も答えないのでですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしています。これはどうなのですか。」

61 しかし、イエスは黙ったままで、何もお答えにならなかった。大祭司は、さらにイエスに尋ねて言った。「あなたは、ほむべき方の子、<sup>109</sup>キリストですか。」

62 そこでイエスは言われた。「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずです。」

だいたいし　ころも　ひ　さ

63　すると、大祭司は、自分の<sup>110</sup>衣を引き裂いて言った。「これでもまだ、証人が必要でしょうか。」

しょうにん

64　あなたがたは、神をけがすこのことばを聞いたのです。どう考えますか。」すると、彼らは全員で、イエスには死刑に当たる罪があると決めた。

み　かお

65　そうして、ある人々は、イエスにつばきをかけ、御顔をおおい、こぶしでなぐりつけ、「言い当ててみろ」などと言ったりし始めた。また、役人たちは、イエスを受け取って、<sup>111</sup>平手で打った。

66　ペテロが下の庭にいと、大祭司の女中のひとりが来て、

67　ペテロが火にあたっているのを見かけ、彼をじっと見つめて、言った。「あなたも、あのナザレ人、あのイエスといっしょにいましたね。」

68　しかし、ペテロはそれを打ち消して、「何を言っているのか、わからない。見当もつかない」と言って、<sup>112</sup>出口のほうへと出て行った。<sup>113</sup>

69　すると女中は、ペテロを見て、そばに立っていた人たちに、また、「この人はあの仲間です」と言いだした。

70　しかし、ペテロは再び打ち消した。しばらくすると、そばに立っていたその人たちが、またペテロに言った。「確かに、あなたはあの仲間だ。ガリラヤ人なのだから。」

71　しかし、彼はのろいをかけて誓い始め、「私は、あなたがたの話しているその人を知りません」と言った。

72　するとすぐに、鶏が、二度目に鳴いた。そこでペテロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは、わたしを知らない」と三度言います」というイエスのおことばを思い出した。<sup>114</sup>それに思い当たったとき、彼は泣き出した。

にわとり　にわとり



# 一五章

- 1 夜が明けるとすぐに、祭司長たちをはじめ、長老、律法学者たちと、全<sup>115</sup>議会は協議をこらしたすえ、イエスを縛って連れ出し、ピラトに引き渡した。
- 2 ピラトはイエスに尋ねた。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」イエスは答えて言われた。「そのとおりです。」
- 3 そこで、祭司長たちはイエスを<sup>116</sup>きびしく訴えた。
- 4 ピラトはもう一度イエスに尋ねて言った。「何も答えないのですか。見なさい。彼らはあんなにまであなたを訴えているのです。」
- 5 それでも、イエスは何もお答えにはならなかった。それにはピラトも驚いた。
- 6 ところでピラトは、その祭りには、人々の願う囚人をひとりだけ赦免するのを例としていた。
- 7 たまたま、バラバという者がいて、暴動のとき人殺しをした暴徒たちといっしょに牢に入っていた。
- 8 それで、群衆は進んで行って、いつものようにしてもらふことを、ピラトに要求し始めた。
- 9 そこでピラトは、彼らに答えて、「このユダヤ人の王を釈放してくれといふのか」と言った。
- 10 ピラトは、祭司長たちが、ねたみからイエスを引き渡したことに、気づいていたからである。
- 11 しかし、祭司長たちは群衆を扇動して、むしろバラバを釈放してもらいたいと言わせた。
- 12 そこで、ピラトはもう一度答えて、「ではいったい、あなたがたがユダヤ人の王と呼んでいるあの人を、私にどうせよといふのか」と言った。
- 13 すると彼らはまたも「十字架につけろ」と叫んだ。
- 14 だが、ピラトは彼らに、「あの人がどんな悪い事をしたといふのか」と言った。しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ」と叫んだ。
- 15 それで、ピラトは群衆のきげんをとろうと思い、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打って後、十字架につけるようにと引き渡した。
- 16 兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の中に連れて行き、<sup>117</sup>全部隊を呼び集めた。
- 17 そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、
- 18 それから、「ユダヤ人の王さま。ばんざい」と叫んであいさつをし始めた。
- 19 また、葦の棒でイエスの頭をたたいたり、つばきをかけたり、ひざまずいて拝んだりしていた。
- 20 彼らはイエスを嘲弄したあげく、その紫の衣を脱がせて、もとの着物をイエスに着せた。それから、イエスを十字架につけるために連れ出した。
- 21 そこへ、アレキサンデルとルポスとの父で、シモンというクレネ人が、いなかから出て来て通りかかったので、彼らはイエスの十字架を、むりやりに彼に背負わせた。
- 22 そして、彼らはイエスをゴルゴタの場所（訳すと、「どくろ」の場所）へ連れて行った。
- 23 そして彼らは、没薬を混ぜたぶどう酒をイエスに与えようとしたが、イエスはお飲みにならなかった。
- 24 それから、彼らは、イエスを十字架につけた。そして、だれが何を取るかをくじ引きで決めたうえで、イエスの着物を分けた。
- 25 彼らがイエスを十字架につけたのは、<sup>118</sup>午前九時であつた。
- 26 イエスの罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあつた。
- 27 また彼らは、イエスとともにふたりの強盗を、ひとりには右に、ひとりには左に、十字架につけた。<sup>119</sup>
- 29 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おお、神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。
- 30 十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」
- 31 また、祭司長たちも同じように、律法学者たちといっしょになって、イエスをあざけて言った。「他人は救つたが、<sup>120</sup>自分は救えない。
- 32 キリスト、イスラエルの王さま。今、十字架から降りてもらおうか。われわれは、それを見たら信じるから。」
- また、イエスといっしょに十字架につけられた者たちもイエスをののしった。
- 33 さて、<sup>121</sup>十二時になったとき、全地が暗くなって、<sup>122</sup>午後三時まで続いた。
- 34 そして、三時に、イエスは大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは訳すと「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。
- 35 そばに立っていた幾人かが、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言った。
- 36 すると、ひとりが走って行って、海綿に酸いぶどう酒を含ませ、それを葦の棒につけて、イエスに飲ませようとしながら言った。「エリヤがやって来て、彼を降ろすかどうか、私たちは<sup>123</sup>見ることにしよう。」



37 それから、イエスは大声をあげて息を引き取られた。

38 神殿の幕が上から下まで真つ二つに裂けた。

39 **124** イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「この方はまことに神の子であつた」と言った。

40 また、遠くのほうから見ていた女たちもいた。その中にマグダラのマリヤと、小ヤコブとヨセの母マリヤと、またサロメもいた。

41 イエスがガリラヤにおられたとき、いつもつき従つて仕えていた女たちである。このほかにも、イエスといっしょにエルサレムに上つて来た女たちがたくさんいた。

42 すっかり夕方になった。その日は備えの日、すなわち安息日の前日であつたので、

43 アリマタヤのヨセフは、思い切つてピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを願つた。ヨセフは有力な議員であり、みずからも神の国を待ち望んでいた人であつた。

44 ピラトは、イエスがもう死んだのかと驚いて、百人隊長を呼び出し、イエスがすでに死んでしまったかどうかを問いただした。

45 そして、百人隊長からそうと確かめてから、イエスのからだをヨセフに与えた。

46 そこで、ヨセフは亜麻布を買い、イエスを取り降ろしてその亜麻布に包み、岩を掘つて造つた墓に納めた。墓の入口には石をころがしかけておいた。

47 マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとは、イエスの納められる所をよく見ていた。

## 一六章

- 1 さて、安息日あんそくにちが終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとは、イエスに油あぶを塗りに行こうと思い、香料かうりようを買った。
- 2 そして、週の初めはじの日の早朝、日が上ったとき、墓はかに着いた。
- 3 彼女たちは、「墓はかの入口からあの石をころがしてくれる人が、だれかいるでしょうか」とみなで話し合っていた。
- 4 ところが、目を上げて見ると、あれほど大きな石ころもだったのに、その石がすでにころがしてあった。
- 5 それで、墓の中に入ったところ、真っ白な長い衣をまとった青年が右側にすわっているのが見えた。彼女たちは驚いた。
- 6 青年は言った。「驚おどろいてはいけません。あなたがたは、十字架じゆうじうにつけられたナザレ人ナザレイエスを捜さがしているのです。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められた所です。
- 7 ですから行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます』とそう言いなさい。」
- 8 女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒てんとうしていたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。<sup>125</sup>
- 9 <sup>126</sup>〔さて、週の初めはじの日の朝早くによみがえったイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を現あらわされた。イエスは、以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたのであった。
- 10 マリヤはイエスといっしょにいた人たちが嘆き悲しんで泣いているところに行き、そのことを知らせた。
- 11 ところが、彼らは、イエスが生きておられ、お姿をよく見た、と聞いても、それを信じようとはしなかった。
- 12 その後、彼らのうちのふたりがいなかのほうへ歩いていたり、イエスは別の姿でご自分を現あらわされた。
- 13 そこでこのふたりも、残りの人たちのところへ行つてこれを知らせたが、彼らはふたりふたりの話も信じなかった。
- 14 しかしそれから後になつて、イエスは、その十一人が食卓に着いているところに現れて、彼らの不信仰とかたくな心をお責めになった。それは、彼らが、よみがえられたイエスを見た人たちの言うところを信じなかったからである。
- 15 それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造つくられた者ものに、福音を宣べ伝えなさい。
- 16 信じてバプテスマを受ける者は、救きうわれます。しかし、信じない者は罪に定められます。
- 17 信じる人々には次のような<sup>127</sup>ししが伴ともないます。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、
- 18 蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます。」
- 19 主イエスは、彼らにこう話されて後、天に上げられて神の右の座きに着かれた。
- 20 そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴ともなう<sup>128</sup>ししをもって、みことばを確かなものとされた。<sup>129</sup>〕

### 別の追加文<sup>130</sup>

〔さて、女たちは、命じられたすべてのことを、ペテロとその仲間の人々にさっそく知らせた。その後、イエスご自身、彼らによって、きよく、朽ちることのない、永遠えいえんの救いのおとずれを、東の果てから、西の果てまで送り届けられた。〕

- 1 異本「神の子」を欠く
- 2 あるいは「宣言した」
- 3 あるいは「宣言して」
- 4 あるいは「水をもって」異本「水の中で」
- 5 直訳「聖霊によって」
- 6 直訳「引き渡された」
- 7 直訳「イエスのあとから出て行つた」
- 8 異本「一行は」
- 9 あるいは「に仕えた」
- 10 異本「イエスがキリストであることを知っていた」
- 11 レビ一三章を参照
- 12 直訳「彼らへの」
- 13 直訳「婚礼の式場の子たち」
- 14 直訳「欠けを満たすもの」
- 15 ヘブル語「エブヤタル」
- 16 直訳「十二人」
- 17 異本「任命して使徒と名づけられた」
- 18 直訳「十二人」
- 19 直訳「人の子たち」
- 20 「このように言われたのは」は補足
- 21 後代の写本に「と姉妹」を加えるものもある
- 22 直訳「回りにいる人たち」
- 23 直訳「十二人」
- 24 あるいは「時代」
- 25 直訳「送ります」
- 26 直訳「どのように比べたらよいでしょう」
- 27 あるいは「去らせ」
- 28 直訳「いっしょにいたい」
- 29 直訳「おられた」
- 30 直訳「救われて、生きるように」
- 31 あるいは「上着」
- 32 直訳「救われる」
- 33 直訳「言っていた」
- 34 直訳「救つた」
- 35 あるいは「信じ続けなさい」
- 36 あるいは「奇蹟」
- 37 あるいは「奇蹟」
- 38 直訳「悔い改めるべきことを」
- 39 すなわち「大型のかご」
- 40 直訳「第四の夜回り」すなわち「午前三一六時」
- 41 あるいは「取り乱して」
- 42 あるいは「彼らの思いが鈍くなっていた」
- 43 後代の写本に一六節として、「聞く耳のある者は聞きなさい」を加える
- 44 直訳「悪い目」
- 45 あるいは「誇り」

- 46 初期の写本では「とシドン」を加える
- 47 直訳「からだを横にする」
- 48 直訳「の前に置いた」
- 49 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 50 あるいは「鈍くなって」
- 51 あるいは「見上げて」
- 52 すなわち「メシヤ」
- 53 直訳「地上の」
- 54 直訳「ラビ」
- 55 別訳「ちょうどよく私たちがここにいます」
- 56 直訳「のほかは」
- 57 あるいは「引き裂きます」
- 58 あるいは「萎縮させてしまいます」
- 59 あるいは「霊が」
- 60 あるいは「群がり寄って来る」
- 61 異本に「と断食」を加えるものもある
- 62 ごく初期の写本に「私たちの仲間になろうとしなかったからです」を加える
- 63 あるいは「奇蹟」
- 64 直訳「キリストのものであるという名目で」
- 65 直訳「ろばがひく石臼」
- 66 四八節と同じことばを加える異本がある
- 67 四八節と同じことばを加える異本がある
- 68 直訳「彼らのうじ」
- 69 直訳「それに味をつけるのですか」
- 70 異本「その妻に結びついて」を加える
- 71 直訳「良い方」
- 72 異本「富にたよる者が」を加える
- 73 直訳「備えられた人々に与えられるのです」
- 74 原語「ラボニ」直訳「私の先生」
- 75 直訳「ほら穴」
- 76 異本 二六節として、「しかし、もし赦してやらないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの罪を赦してくださいませんか」を加える
- 77 あるいは「小作人」（二、七、九節も同様）
- 78 直訳「来て」
- 79 すなわち「人に取り入ろうとしない」
- 80 あるいは「人頭税」
- 81 あるいは「よろしいのでしょうか、よろしくないのでしょうか」
- 82 一デナリは当時の一日分の労賃に相当する
- 83 ごく初期の写本に「彼らがよみがえるとき」を欠くものも多い
- 84 あるいは「第一ですか」
- 85 すなわち「メシヤ」
- 86 直訳「銅貨」
- 87 一レブタは一デナリの一二八分の一に相当する最小単位の銅貨
- 88 一コドラントは一デナリの六四分の一
- 89 あるいは「証拠としての奇蹟」

- 90 ギリシヤ語「サンヘドリン」
- 91 あるいは「引いて行かれ」
- 92 すなわち「メシヤ」
- 93 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 94 あるいは「そのこと」
- 95 別訳「世代」
- 96 異本に「祈っていなさい」を加えるものがある
- 97 直訳「権限を与え」
- 98 あるいは「引き渡そう」
- 99 あるいは「犠牲としてささげる」
- 100 あるいは「引き渡します」
- 101 別訳「わたしの心は」
- 102 別訳「では、ぐっすり眠って休んでいなさい」
- 103 原語「ラビ」
- 104 あるいは「聖書のことばを実現させなさい」
- 105 あるいは「下役」
- 106 直訳「光」
- 107 ギリシヤ語「サンヘドリン」
- 108 あるいは「聖所」
- 109 すなわち「メシヤ」
- 110 あるいは「下着」
- 111 あるいは「棒で打った」
- 112 あるいは「前庭」
- 113 異本に「すると、鶏が鳴いた」を加えるものもある
- 114 異本「そして、ペテロは泣き出した」
- 115 ギリシヤ語「サンヘドリン」
- 116 あるいは「多くのことで」
- 117 あるいは「大隊」
- 118 直訳「第三時」
- 119 異本 二八節として「こうして『この人は罪人とともに数えられた』とある聖書が実現したのである」を加えるものもある
- 120 あるいは「自分は救えないのか」
- 121 直訳「第六時」
- 122 直訳「第九時」
- 123 直訳「...見させてください」
- 124 あるいは「イエスと向かい合って」
- 125 この章の終わりにある別の追加文参照
- 126 異本九―二〇節を欠くものがある
- 127 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 128 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 129 異本「アーメン」を加える
- 130 この追加文を八節のあとに置いている少数の異本や古代訳がある

# ルカの福音書

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)

[十一章](#) [十二章](#) [十三章](#) [十四章](#) [十五章](#)

[一六章](#) [一七章](#) [一八章](#) [一九章](#) [二〇章](#)

[二一章](#) [二二章](#) [二三章](#) [二四章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 2 私たちの間ですでに<sup>1</sup>確信<sup>かくしん</sup>されている出来事<sup>はじ</sup>については、初めからの目撃者<sup>もくげきしや</sup>で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝えたそのとおりを、多くの人が記事にまとめて書き上げようと、すでに試みておりますので、
- 3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べておりますから、あなたのために、順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。尊敬するテオビ<sup>ていひ</sup>ロ殿。
- 4 それによって、すでに教えを受けられた事がらが正確な事実であることを、よくわかつていただきたいと存じます。
- 5 ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの組の者でザカリヤという祭司<sup>さいし</sup>がいた。彼の妻はアロンの子孫<sup>つま</sup>で、名をエリサベツ<sup>し ぞん</sup>といった。
- 6 ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを<sup>2</sup>落度なく踏み行っていた。
- 7 エリサベツは不妊の女だったので、彼らには子がなく、ふたりとももう年をとっていた。
- 8 さて、ザカリヤは、自分の組が当番で、神の御前に祭司<sup>さいし</sup>の務めをしていたが、
- 9 祭司職<sup>さいししよく</sup>の習慣によって、くじを引いたところ、主の神殿に入<sup>しん でん</sup>って香をたくことになった。
- 10 彼が香をたく間、大ぜいの民はみな、外で祈っていた。
- 11 ところが、主の使いが彼に現れて、香壇<sup>かうだん</sup>の右に立った。
- 12 これを見たザカリヤは不安を覚え、恐怖に襲われたが、
- 13 御使いは彼に言った。「こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです。あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。
- 14 その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生<sup>たんじよう</sup>を喜びます。
- 15 彼は主の御前にすぐれた者となるからです。彼は、ぶどう酒も強い酒も飲まず、まだ母の胎内にあるときから聖霊に満たされ、
- 16 そしてイスラエルの多くの子らを、彼らの神である主に立ち返らせます。
- 17 彼こそ、エリヤの霊と力<sup>れい</sup>で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。」
- 18 そこで、ザカリヤは御使いに言った。「私は何によってそれを知ることができましようか。私ももう年寄りですし、妻も年をとっております。」
- 19 御使いは答えて言った。「私は神の御前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この喜びのおとずれを伝えるように遣わされているのです。
- 20 ですから、見なさい。これらのことが起こる日までは、あなたは、ものが言えず、話せなくなります。私のことばを信じなかったからです。私のことばは、その時が来れば実現します。」
- 21 人々はザカリヤを待っていたが、神殿であまり暇取るので不思議に思った。
- 22 やがて彼は出て来たが、人々に話すことができなかった。それで、彼は神殿で 幻<sup>まぼろし</sup>を見たのだとわかった。ザカリヤは、彼らに<sup>3</sup>合図<sup>ごうず</sup>を続けるだけで、口がきけないままであった。
- 23 やがて、務めの期間が終わったので、彼は自分の家に帰った。
- 24 その後、妻エリサベツはみごもって、五か月の間引きこもって、こう言った。
- 25 「主は、人中で私の恥を取り除こうと心にかけられ、今、私をこのようにしてくださいました。」
- 26 ところで、その六か月目に、御使いがガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女<sup>しよじよ</sup>のところに来た。
- 27 この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名を<sup>4</sup>マリヤ<sup>めい</sup>といった。
- 28 御使いは、入って来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」<sup>5</sup>
- 29 しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと 考え込んだ。
- 30 すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。
- 31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。
- 32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。
- 33 彼はこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」
- 34 そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましよう。私はまだ男の人を知りませんのに。」

35 御使いは答えて言った。「聖霊<sup>せいれい</sup>があなたの上に臨<sup>のぞ</sup>み、いと高さ方の力があなたをおおいます。それゆえ、<sup>6</sup>生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。

36 ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿<sup>ふ</sup>しています。不妊<sup>ふにん</sup>の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。

37 神にとって不可能なことは一つありません。」

38 マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしめです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。

39 そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。

40 そしてザカリヤの家に行<sup>い</sup>って、エリサベツにあいさつした。

41 エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内<sup>たいない</sup>でおどり、エリサベツは聖霊<sup>せいれい</sup>に満たされた。

42 そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福<sup>しゆくふく</sup>された方。あなたの胎の実も祝福されています。

43 私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。」

44 ほんとうに、あなたのあいさつ<sup>じつげん</sup>の聲が私の耳に入<sup>い</sup>ったとき、私の胎内<sup>たいない</sup>で子どもが喜んでおどりました。

45 主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」

46 マリヤは言った。  
「わがたましいは主をあがめ、

47 わが霊<sup>い</sup>は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

48 主はこの卑しいはしのために  
目を留めてくださったからです。  
ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、  
私をしあわせ者と思うでしょう。

49 力ある方が、  
私に大きなことをしてくださいました。  
その御名は聖く、

50 そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、  
代々にわたって及びます。

51 主は、御腕<sup>みうで</sup>をもって力強いわざをなし、  
心の思いの高ぶっている者を追い散らし、

52 権力ある者を王位から引き降ろされます。  
低い者を高く引き上げ、

53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、  
富む者を何も持たせないで追い返されました。

54 主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、  
そのしもべイスラエルをお助けになりました。

55 私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫<sup>しそん</sup>に  
語られたとおりです。」

56 マリヤは三か月ほどエリサベツと暮らして、家に帰った。

57 さて月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。

58 近所の人々や親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをおかけになったと聞いて、彼女とともに喜んだ。

59 さて八日目に、人々は幼子に割礼するためにやって来て、幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、

60 母は答えて、「いいえ、そうではなくて、ヨハネという名にしなければなりません」と言った。

61 彼らは彼女に、「あなたの親族にはそのような名の人はひとりもいません」と言った。

62 そして、身振りで父親に合図して、幼子に何という名をつけるつもりかと尋ねた。

63 すると、彼は書き板を持って来させて、「彼の名はヨハネ」と書いたので、人々はみな驚いた。

64 すると、たちどころに、彼の口が開け、舌は解け、ものが言えるようになって神をほめたたえた。

65 そして、近所の人々はみな恐れた。さらにこれらのことの一部始終が、ユダヤの山地全体にも語り伝えられて行った。

66 聞いた人々はみな、それを心にとどめて、「いったいこの子は何になるのでしょうか」と言った。主の御手が彼とともにあったからである。

67 さて父ザカリヤは、聖霊<sup>せいれい</sup>に満たされて、預言<sup>よげん</sup>して言った。

68 「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。  
主はその民を顧みて、贖<sup>あがな</sup>いをなし、



- 69 救いの角を、われらのために、  
しもベダビデの家に立てられた。
- 70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、  
主が話してくださったとおり。
- 71 この救いはわれらの敵からの、  
すべてわれらを憎む者の手からの救いである。
- 72 主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、  
その聖なる契約を、
- 73 われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、
- 74 75 われらを敵の手から救い出し、  
われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、  
恐れなく、主の御前に仕えることを許される。
- 76 幼子よ。あなたもまた、  
いと高き方の預言者と呼ばれよう。
- 主の御前に先立って行き、その道を備え、
- 77 神の民に、罪の赦しによる  
救いの知識を与えるためである。
- 78 これはわれらの神の深いあわれみによる。  
そのあわれみにより、
- 日の出がいと高き所からわれらを訪れ、
- 79 暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、  
われらの足を平和の道に導く。」
- 80 さて、幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に 公 に出現する日まで荒野にいた。

## 二章

- 1 そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。
- 2 これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。
- 3 それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。
- 4 ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、
- 5 身重になっているいいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。
- 6 ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、
- 7 男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。
- 8 さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。
- 9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。
- 10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来了のです。」
- 11 きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主<sup>Z</sup>キリストです。
- 12 あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つめます。これが、あなたがたのためのしるしです。」
- 13 すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。
- 14 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。  
地の上に、平和が、  
御心にかなう人々にあるように。」
- 15 御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行つて、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」
- 16 そして急いで行つて、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。
- 17 それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。
- 18 それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。
- 19 しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
- 20 羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。
- 21 八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。
- 22 さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。
- 23 —それは、主の律法に「母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者、と呼ばなければならない」と書いてあるとおりであった—
- 24 また、主の律法に「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定められたところに従つて犠牲をささげるためであった。
- 25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖霊が彼の上にとどまっておられた。
- 26 また、主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた。
- 27 彼が御霊に感じて宮に入ると、幼子イエスを連れた両親が、その子のために律法の慣習を守るために、入つて来た。
- 28 すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。
- 29 「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、  
みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。
- 30 私の目があなたの御救いを見たからです。
- 31 御救いはあなたが  
万民の前に備えられたもので、
- 32 異邦人を照らす啓示の光、  
御民イスラエルの光栄です。」
- 33 父と母は、幼子についていろいろ語られる事に驚いた。

- 34 また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。」
- 35 剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです。」
- 36 また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者の<sup>8</sup>アンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。<sup>9</sup>処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、
- 37 その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。
- 38 ちょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。
- 39 さて、彼らは主の律法による定めをすべて果たしたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰った。
- 40 幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった。神の恵みがその上にあった。
- 41 さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。
- 42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り、
- 43 祭りの期間を過ぎてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかなかった。
- 44 イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを行った。それから、親族や知人の中を捜し回ったが、
- 45 見つからなかったので、イエスを捜しながら、エルサレムまで引き返した。
- 46 そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たちの真ん中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。
- 47 聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。
- 48 両親は彼を見て驚き、母は言った。「<sup>10</sup>まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」
- 49 するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の<sup>11</sup>家にいることを、ご存じなかったのですか。」
- 50 しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかった。
- 51 それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらの<sup>12</sup>ことをみな、心に留めておいた。
- 52 イエスはますます知恵が進み、<sup>13</sup>背たけも大きくなり、神と人ともに愛された。

### 三章

- 1 皇帝テベリオの治世の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国王、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国王、ルサニヤがアビレネの国王であり、
- 2 アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った。
- 3 そこでヨハネは、ヨルダン川のほとりのすべての地方に行って、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説いた。
- 4 そのことは預言者イザヤのことがの書に書いてあるとおりである。
- 「荒野で叫ぶ者の声がする。  
『主の道を用意し、  
主の通られる道をまっすぐにせよ。  
すべての谷はうずめられ、  
すべての山と丘とは低くされ、  
曲がった所はまっすぐになり、  
でこぼこ道は平らになる。」
- 6 こうして、あらゆる<sup>14</sup>人が、  
神の救いを見るようになる。』」
- 7 それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。
- 8 それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言っておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです。
- 9 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」
- 10 群衆はヨハネに尋ねた。「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。」
- 11 彼は答えて言った。「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい。」
- 12 取税人たちも、バプテスマを受けに出て来て、言った。「先生。私たちはどうすればよいのでしょうか。」
- 13 ヨハネは彼らに言った。「決められたもの以上には、何も<sup>15</sup>取り立ててはいけません。」
- 14 兵士たちも、彼に尋ねて言った。「私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネは言った。「だれからでも、力ずくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」
- 15 民衆は救い主を待ち望んでおり、みな心の中で、ヨハネについて、もしかするとこの方が<sup>16</sup>キリストではあるまいか、と<sup>17</sup>考えていたので、
- 16 ヨハネはみなに答えて言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火との<sup>18</sup>バプテスマをお授けになります。」
- 17 また手に箕を持って脱穀場をことごとくきよめ、麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」
- 18 ヨハネは、そのほかにも多くのことを教えて、民衆に福音を知らせた。
- 19 さて国王ヘロデは、その兄弟の妻ヘロデヤのことについて、また、自分の行った悪事のすべてを、ヨハネに責められたので、
- 20 ヨハネを牢に閉じ込め、すべての悪事にもう一つこの悪事を加えた。
- 21 さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、
- 22 聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」
- 23 教えを始められたとき、イエスはおよそ三十歳で、人々からヨセフの子と思われていた。このヨセフは、<sup>19</sup>ヘリの子、順次さかのぼって、
- 24 マタテの子、レビの子、メルキの子、ヤンナイの子、ヨセフの子、
- 25 マタテヤの子、アモスの子、ナホムの子、<sup>20</sup>エスリの子、ナンガイの子、
- 26 マハテの子、マタテヤの子、シメイの子、ヨセクの子、ヨダの子、
- 27 ヨハナンの子、レサの子、ゾロバベルの子、<sup>21</sup>サラテルの子、ネリの子、
- 28 メルキの子、アデイの子、コサムの子、エルマダムの子、エルの子、
- 29 <sup>22</sup>ヨシュアの子、エリエゼルの子、ヨリムの子、マタテの子、レビの子、

- 30 シメオンの子、ユダの子、ヨセフの子、ヨナムの子、エリヤキムの子、
- 31 メレヤの子、メナの子、マタタの子、ナタンの子、ダビデの子、
- 32 エッサイの子、オベデの子、ボアズの子、<sup>23</sup>サラの子、ナアソンの子、
- 33 アミナダブの子、アデミンの子、<sup>24</sup>アルニの子、エスロンの子、バレスの子、ユダの子、
- 34 ヤコブの子、イサクの子、アブラハムの子、テラの子、ナホルの子、
- 35 セルグの子、<sup>25</sup>レウの子、ペレグの子、エベルの子、サラの子、
- 36 カイナンの子、アルパクサデの子、セムの子、ノアの子、ラメクの子、
- 37 メトセラの子、エノクの子、ヤレデの子、マハラレルの子、カイナンの子、
- 38 エノスの子、セツの子、アダムの子、このアダムは神の子である。

## 四章

- 1 さて、聖霊に満ちたイエスは、ヨルダンから帰られた。そして<sup>26</sup>御霊に導かれて荒野におり、
- 2 四十日間、悪魔の試みに会われた。その間何も食わず、その時が終わると、空腹を覚えられた。
- 3 そこで、悪魔はイエスに言った。「あなたが神の子なら、この石に、パンになれと言いつけなさい。」
- 4 イエスは答えられた。「『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある。」
- 5 また、悪魔はイエスを連れて行き、またたくまに<sup>27</sup>世界の国々を全部見せて、
- 6 こう言った。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。」
- 7 ですから、もしあなたが<sup>28</sup>私を拝むなら、すべてをあなたのものとしましょう。」
- 8 イエスは答えて言われた。「『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えなさい』と書いてある。」
- 9 また、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の頂に立たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。」
- 10 『神は、御使いたちに命じてあなたを守らせる』とも、
- 11 『あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らの手で、あなたをささえさせる』とも書いてあるからです。」
- 12 するとイエスは答えて言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない』とされている。」
- 13 誘惑の手を尽くしたあとで、悪魔はしばらくの間イエスから離れた。
- 14 イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が回り一帯に、くまなく広まった。
- 15 イエスは、彼らの会堂で教え、みなの人にあがめられた。
- 16 それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。
- 17 すると、預言者イザヤの<sup>29</sup>書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。
- 18 「わたしの上に主の御霊がおられる。  
主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、  
わたしに油をそそがれたのだから。  
主はわたしを遣わされた。  
捕らわれ人には赦免を、  
盲人には目の開かれることを告げるために。  
しいたげられている人々を自由にし、
- 19 主の恵みの年を告げ知らせるために。」
- 20 イエスは<sup>30</sup>書を巻き、係りの者に渡してすわられた。会堂にいるみな目がイエスに注がれた。
- 21 イエスは人々にこう言って話し始められた。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」
- 22 みなイエスを<sup>31</sup>ほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。そしてまた、「この人は、ヨセフの子ではないか」と彼らは言った。
- 23 イエスは言われた。「きつとあなたがたは、『医者よ。自分を直せ』というたとえを引いて、カペナウムで行われたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ、と言うでしょう。」
- 24 また、こう言われた。「まことに、あなたがたに告げます。預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません。」
- 25 わたしが言うのは真実のことです。エリヤの時代に、三年六か月の間天が閉じて、全国に大ききんが起こったとき、イスラエルにもやもめは多くいたが、
- 26 エリヤはだれのところにも遣わされず、シドンのサレプタにいたやもめ女にだけ遣わされたのです。
- 27 また、預言者エリシャのときに、イスラエルには、<sup>32</sup>ツァアマトに冒された人がたくさんいたが、そのうちのだれもきよめられないで、シリヤ人ナアマンだけがきよめられました。」
- 28 これらのことを聞くと、会堂にいた人たちはみな、ひどく怒り、
- 29 立ち上がってイエスを町の外に追い出し、町が立っていた丘のがけのふちまで連れて行き、そこから投げ落とそうとした。
- 30 しかしイエスは、彼らの真ん中を通り抜けて、行ってしまわれた。
- 31 それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下られた。そして、安息日ごとに、人々を教えられた。
- 32 人々は、その教えに驚いた。そのことばに権威があったからである。

33 また、会堂に、汚れた悪霊につかれた人がいて、大声でわめいた。

34 「<sup>33</sup>ああ、ナザレ人のイエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょ<sup>ほろ</sup>う。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」

35 イエスは彼をしかって、「黙れ。その人から出て行け」と言われた。するとその悪霊は人々の真ん中で、その人を投げ倒して出て行ったが、その人は別に何の害も受けなかった。

36 人々はみな驚いて、互いに話し合った。「今のおことはどうだ。権威と力とでお命じになったので、汚れた霊でも出て行ったのだ。」

37 こうしてイエスのうわさは、回りの地方の至る所に広まった。

38 イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。すると、シモンのしゅうとめが、ひどい熱で苦しんでいた。人々は彼女のためにイエスにお願いした。

39 イエスがその枕もとに来て、熱をしっかりとつけられると、熱がひき、彼女はすぐに立ち上がって彼らを<sup>34</sup>もてなし始めた。

40 日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた。

41 また、悪霊どもも、「あなたこそ神の子です」と大声で叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは、悪霊どもをしかって、ものを言うのをお許しにならなかった。彼らはイエスが<sup>35</sup>キリストであることを知っていたからである。

42 朝になって、イエスは寂しい所に出て行かれた。群衆は、イエスを捜し回って、みもとに来ると、イエスが自分たちから離れて行かないよう引き止めておこうとした。

43 しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、どうしても神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」

44 そして<sup>36</sup>ユダヤの諸会堂で、福音を告げ知らせておられた。

## 五章

- 1 群衆ぐんしゆうがイエスに押し迫るおようにして神のこばを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸せまべに立っておられたが、
- 2 岸べに小舟が二そうあるのをご覧らんになった。漁師りようしたちは、その舟から降りて網ふねを洗あらっていた。
- 3 イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟ふねに乗り、陸から少し漕こぎ出すように頼たのまれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。
- 4 話が終わると、シモンに、「深みに漕こぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」と言われた。
- 5 するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働あみきましたが、何一つとれませんでした。でもおこぼどおり、網をおろしてみましよう。」
- 6 そして、そのとおりになると、たくさんうおの魚が入り、網は破れそうになった。
- 7 そこで別の舟にいた仲間の者たちあみに合図うおをして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟あみいっばいに上げたところ、二そうとも沈みたのそうになった。
- 8 これを見たシモン・ペテロは、イエスの足あしもとにひれ伏して、「主よ。私のような者はなから離れてください。私は、罪深い人間ですから」と言った。
- 9 それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなおどろの者も、ひどく驚いたからである。
- 10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」
- 11 彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。
- 12 さて、イエスがある町におられたとき、全身ツアラアトの人ふがいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ。お心一つで、私をきよくしていただけます。」
- 13 イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐに、そのツアラアトが消えた。
- 14 イエスは、彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ祭司さいしのところに行つて、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物ものをしなさい。」
- 15 しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群むれが、話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まって来た。
- 16 しかし、イエスご自身は、よく荒野あらのに退しりぞいて祈いのっておられた。
- 17 ある日のこと、イエスが教えておられると、パリサイ人と律法の教師たちも、そこにすわっていた。彼らは、ガリラヤとユダヤとのすべての村々や、エルサレムから来ていた。イエスは、主の御力みちからをもって、病気を直しておられた。
- 18 するとそこに、男たちが、中風ちゆうふうをわずらっている人ひとを、床のままで運んで来た。そして、何とかして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとしていた。
- 19 しかし、大ぜい人がいて、どうにも病人を運び込む方法が見つからないので、屋上に上つて屋根かわらの瓦をはがし、そこから彼の寢床ねどこを、ちょうど人々の真ん中のイエスの前に、つり降ろした。
- 20 彼らの信仰を見て、イエスは「38友よ。あなたの罪は赦ゆるされました」と言われた。
- 21 ところが、律法学者、パリサイ人たちは、理屈りくつを言い始めた。「神をけがすことを言うこの人は、いったい何者だ。神のほかに、だれが罪を赦すことができる。」
- 22 その理屈を見抜みぬいておられたイエスは、彼らに言われた。「なぜ、心の中でそんな理屈を言っているのか。」
- 23 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。
- 24 人の子が地上で罪を赦す権威けんいを持つていることを、あなたがたに悟らせるために」と言つて、中風の人に、「あなたに命じる。起きなさい。寢床をたたんで、家に帰りなさい」と言われた。
- 25 すると彼は、たちどころに人々の前まへで立ち上がり、寝ていた床をたたんで、神をあがめながら自分の家に帰った。
- 26 人々はみな、ひどく驚き、神をあがめ、恐れに満たされて、「私たちは、きょう、驚くべきことを見た」と言った。
- 27 この後、イエスは出て行き、収税所にすわっているレビという取税人しゆぜいにんに目を留めて、「わたしについて来なさい」と言われた。
- 28 するとレビは、何もかも捨て、立ち上がつてイエスに従った。
- 29 そこでレビは、自分の家でイエスのために大ぶるまいをしたが、取税人たちや、ほかに大ぜいの人たちが食卓しよくたくに着いていた。
- 30 すると、パリサイ人やその派の律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かつて、つぶやいて言った。「なぜ、あな



たがたは、取税人しゆぜいじんや罪人つみびとどもといっしょに飲み食いするのですか。」

31 そこで、イエスは答えて言われた。「医者いしやを必要とするのは丈夫じやうぶな者ではなく、病人です。

32 わたしは正しい人ただしいひとを招くためではなく、罪人つみびとを招いて、悔い改めさせるために来たのです。」

33 彼らはイエスに言った。「ヨハネの弟子でしたちは、よく断食だんじきをしており、祈りもしています。また、パリサイ人の弟子たちも同じなのに、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています。」

34 イエスは彼らに言われた。「花婿はなむこがいっしょにいるのに、39 花婿はなむこにつき添う友だちに断食だんじきさせることが、あなたがたにできますか。

35 しかし、やがてその時が来て、花婿はなむこが取り去られたら、その日には彼らは断食だんじきします。」

36 イエスはまた一つのたとえを彼らに話された。「だれも、新しい着物きものから布切れを引き裂いて、古い着物きものに継ぎをするようなことはしません。そんなことをすれば、その新しい着物を裂くことになるし、また新しいのを引き裂いた継ぎ切れも、古い物には合わないのです。

37 また、だれも新しいぶどう酒かわぶくらうを古い皮袋かわふくらうに入れるようなことはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋かわふくらうを張り裂き、ぶどう酒は流れ出て、皮袋かわふくらうもだめになってしまいます。

38 新しいぶどう酒は新しい皮袋かわふくらうに入れなければなりません。

39 また、だれでも古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。『古い物は良い』と言うのです。」

## 六章

- 1 <sup>あんにそくにち</sup>ある安息日に、イエスが麦畑を通しておられたとき、弟子たちは麦の穂を摘んで、手でもみ出しては食べていた。
- 2 すると、あるパリサイ人たちが言った。「なぜ、あなたがたは、安息日にしてはならないことをするのですか。」
- 3 イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、ダビデが連れの者といつしよにいて、ひもじかったときにしたことを読まなかったのですか。」
- 4 <sup>さいし</sup>ダビデは神の家に入って、<sup>そな</sup>祭司以外の者はだれも食べではならぬ供えのパンを取って、自分も食べたし、<sup>とも</sup>供の者にも与えたではありませんか。」
- 5 そして、彼らに言われた。「人の子は、安息日の主です。」
- 6 <sup>あんにそくにち</sup>別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに、右手のなえた人がいた。
- 7 <sup>かつぱうがくしや</sup>そこで律法学者、<sup>びと</sup>パリサイ人たちは、イエスが安息日に人を直すかどうか、じっと見ていた。彼を訴える口実を見つけたためであった。
- 8 イエスは彼らの考えをよく知っておられた。それで、手のなえた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は、起き上がって、そこに立った。
- 9 イエスは人々に言われた。「あなたがたに聞きますが、安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも失うことなのか、どうですか。」
- 10 そして、みなの方を見回してから、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりになると、彼の手は元どおりになった。
- 11 すると彼らはすっかり分別を失ってしまって、イエスをどうしてやろうかと話し合った。
- 12 このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。
- 13 夜明けになって、<sup>でし</sup>弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。
- 14 すなわち、ペテロという名をいただいたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、
- 15 マタイとトマス、アルバヨの子ヤコブと熱心党員と呼ばれるシモン、
- 16 ヤコブの子ユダとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。
- 17 それから、イエスは、彼らとともに山を下り、平らな所にお立ちになったが、多くの弟子たちの群れや、ユダヤ全土、エルサレム、さてはツロやシドンの海べから来た大ぜいの民衆がそこにいた。
- 18 イエスの教えを聞き、また病気を直していただくために来た人々である。また、<sup>けが</sup>汚れた<sup>れい</sup>霊に悩まされていた人たちもいやされた。
- 19 群衆のだれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。大きな力がイエスから出て、すべての人をいやしたからである。
- 20 イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話しだされた。「<sup>まず</sup>貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだから。」
- 21 いま飢えている者は幸いです。やがてあなたがたは満ち足りるから。  
いま泣く者は幸いです。やがてあなたがたは笑うから。
- 22 人の子のため、人々があなたがたを憎むとき、あなたがたを除名し、<sup>じよめい</sup>辱め、あなたがたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。
- 23 その日には喜びなさい、おどりが上って喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。彼らの父祖たちも、<sup>よげんしや</sup>預言者たちに同じことをしたのです。
- 24 しかし、あなたがた富む者は哀れです。慰めをすでに受けているから。
- 25 いま食べ飽きているあなたがたは哀れです。やがて飢えるようになるから。  
いま笑うあなたがたは哀れです。やがて悲しみ泣くようになるから。
- 26 みなの人があはれするとき、あなたがたは哀れです。彼らの父祖たちも、にせ預言者たちに同じことをしたのです。
- 27 しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。
- 28 あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。
- 29 あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。
- 30 すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。
- 31 自分にしてもいたいものと望むとおり、人にもそのようにしなさい。
- 32 自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛しています。
- 33 自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。

罪人たちでさえ、同じことをしています。

34 返してもらうつもりで人に貸してやったからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。貸した分を取り返すつもりなら、罪人たちでさえ、罪人たちに貸しています。

35 ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。

36 あなたがたの<sup>41</sup>天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。

37 さばいてはいけません。そうすれば、自分もさばかれません。人を罪に定めてはいけません。そうすれば、自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。

38 与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでに  
して、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。」  
もたらさん ともさん

39 イエスはまた一つのたとえを話された。「いったい、盲人に盲人の手引きができるのでしょうか。ふたりとも穴に落ち込まないのでしょうか。」

40 弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。

41 あなたは、兄弟の目にあるちりが見えながら、どうして自分の目にある梁には気がつかないのですか。

42 自分の目にある梁が見えずに、どうして兄弟に、『兄弟。あなたの目のちりを取らせてください』と言えますか。  
偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうしてこそ、兄弟の目のちりがはっきり見えて、取りのける  
ことができるのです。

43 悪い実を結ぶ良い木はないし、良い実を結ぶ悪い木也没有。

44 木はどれでも、その実によってわかるものです。いばからいちじくは取れず、野ばらからぶどうを集めることはできません。

45 良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。

46 なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。

47 わたしのもとに来て、わたしのことを聞き、それを行う人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。

48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。

49 聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのかわれ方はひどいものとなりました。」

## 七章

- 1 イエスは、耳を傾けている民衆にこれらのことばをみな話し終えられると、カペナウムに入られた。
- 2 ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけていた。
- 3 百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。
- 4 イエスのもとにきたその人たちは、熱心にお願ひして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。」
- 5 この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。」
- 6 イエスは、彼らと一いつしよに行かれた。そして、百人隊長の家からあまり遠くない所に来られたとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスに伝えた。「主よ。わざわざおいでくださいませんかように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。」
- 7 ですから、私のほうから伺うことさえ失礼と存じました。ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。
- 8 と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ』と言えば、そのとおりにいたします。」
- 9 これを聞いて、イエスは驚かれ、ついて来ていた群衆のほうに向いて言われた。「あなたがたに言いますが、このようなつばな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません。」
- 10 使いにきた人たちが家に帰ってみると、しもべはよくなっていた。
- 11 それから43間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大ぜいの人の群れが一いつしよに行った。
- 12 イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されたところであつた。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた。
- 13 主はその母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい」と言われた。
- 14 そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいた人たちが立ち止まったので、「青年よ。あなたに言う、起きなさい」と言われた。
- 15 すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された。
- 16 人々は恐れを抱き、「大預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がその民を顧みてくださった」などと言って、神をあがめた。
- 17 イエスについてこの話がユダヤ全土と回りの地方一帯に広まった。
- 18 さて、ヨハネの弟子たちは、これらのことをすべてヨハネに報告した。
- 19 すると、ヨハネは、弟子の中からふたりを呼び寄せて、主のもとに送り、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか」と言わせた。
- 20 ふたりはみもとに来て言った。「バプテスマのヨハネから遣わされてまいりました。『おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも私たちはなほほかの方を待つべきでしょうか』とヨハネが申しております。」
- 21 ちょうどそのころ、イエスは、多くの人々を病氣と苦しみと悪霊からいやし、また多くの盲人を見えるようにされた。
- 22 そして、答えてこう言われた。「あなたがたは行つて、自分たちの見たり聞いたりしたことをヨハネに報告しなさい。目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツアラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている。」
- 23 だれでもわたしにつまずかない者は幸いです。」
- 24 ヨハネの使いが帰つてから、イエスは群衆に、ヨハネについて話しだされた。「あなたがたは、何を見に荒野に出て行つたのですか。風に揺れる草ですか。」
- 25 でなかったら、何を見に行つたのですか。柔らかい着物を着た人ですか。きらびやかな着物を着て、ぜいたくに暮らしている人たちなら宮殿にいます。」
- 26 でなかったら、何を見に行つたのですか。預言者ですか。そのとおり。だが、わたしが言いましょう。預言者よりもすぐれた者です。」
- 27 その人こそ、
- 『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう』と書かれているその人です。」
- 28 あなたがたに言いますが、女から生まれた者の中で、ヨハネよりもすぐれた人は、ひとりもいません。しかし、神の国で一番小さい者でも、彼よりもすぐれています。」

29 <sup>45</sup> ヨハネの教えを聞いたすべての民は、取税人たちさえ、ヨハネのバプテスマを受けて、<sup>46</sup> 神の正しいことを認めたのです。

30 これに反して、パリサイ人、律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けないで、神の自分たちに対するみこころを拒みました。

31 では、この時代の人々は、何にたとえたらよいでしょう。何に似ているでしょう。

32 市場にすわって、互いに呼びかけながら、こう言っている子どもたちに似ています。

『笛を吹いてやっても、君たちは踊らなかつた。

とむら  
弔いの歌を歌ってやっても、泣かなかつた。』

33 というわけは、バプテスマのヨハネが来て、パンも食べず、ぶどう酒も飲まずにいと、『あれは悪霊につかれている』とあなたがたは言うし、

34 人の子が来て、食べもし、飲みもすると、『あれ見よ。食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言うのです。

35 だが、知恵の正しいことは、そのすべての子どもたちが証明します。」

36 さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家に入つて食卓に着かれた。

37 すると、その町にひとりの<sup>47</sup> 罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏のつばを持って来て、

38 泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗つた。

39 イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、「この方がもし<sup>48</sup> 預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから」と心ひそかに思っていた。

40 するとイエスは、彼に向かって、「シモン。あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生。お話しください」と言った。

41 「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりには五百デナリ、ほかのひとりには五十デナリ借りていた。

42 彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。

では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」

43 シモンが、「よけいに赦してもらつたほうだと思います」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています」と言われた。

44 そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入つて来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかつたが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。

45 あなたは、口づけしてくれなかつたが、この女は、わたしが入つて来たときから足に口づけしてやめませんでした。

46 あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかつたが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。

47 だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」

48 そして女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。

49 すると、いっしょに食卓にいた人たちは、<sup>49</sup> 心の中でこう言い始めた。「罪を赦したりするこの人は、いったいだれだろう。」

50 しかし、イエスは女に言われた。「あなたの信仰が、あなたを救つたのです。安心して行きなさい。」

# 八章

1 その後、イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を次から次に旅をしておられた。十二弟子もお供をした。

2 また、悪霊や病気を直していただいた女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ、

3 自分の財産をもって彼らに仕えているヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか大ぜいの女たちもいっしょであった。

4 さて、大ぜいの人の群れが集まり、また方々の町からも人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。

5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると、人に踏みつけられ、空の鳥がそれを食べてしまった。

6 また、別の種は岩の上に落ち、生え出たが、水分がなかったので、枯れてしまった。

7 また、別の種はいばらの真ん中に落ちた。ところが、いばらもいっしょに生え出て、それを押しふさいでしまった。

8 また、別の種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」

イエスは、これらのことを話しながら「聞く耳のある者は聞きなさい」と叫ばれた。

9 さて、弟子たちは、このたとえがどんな意味かをイエスに尋ねた。

10 そこでイエスは言われた。「あなたがたに、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの者には、たとえて話します。彼らが見ていても見えず、聞いていても悟らないからです。

11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。

12 道ばたに落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心から、みことばを持ち去ってしまうのです。

13 岩の上に落ちるとは、こういう人たちのことです。聞いたときには喜んでみことばを受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練のときになると、身を引いてしまうのです。

14 いばらの中に落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞きはしたが、とかくしているうちに、この世の心づかいや、富や、快楽によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。

15 しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。

16 あかりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする者はありません。燭台の上に置きます。入って来る人々に、その光が見えるからです。

17 隠れているもので、あらわにならぬものではなく、秘密にされているもので、知られず、また現れないものはありません。

18 だから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、[50](#)持っているものまでも取り上げられるからです。

19 イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のためにそばへ近寄れなかった。

20 それでイエスに、「あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに会おうとして、外に立っています」という知らせがあった。

21 ところが、イエスは人々にこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行方の人たちです。」

22 そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。

23 舟で渡っている間にイエスはぐっすり眠ってしまった。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった。

24 そこで、彼らは近寄って行ってイエスを起こし、「先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです」と言った。イエスは、起き上がって、風と荒波をしかりつけられた。すると風も波も収まり、なぎになった。

25 イエスは彼らに、「あなたがたの信仰はどこにあるのです」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

26 こうして彼らは、ガリラヤの向こう側の[51](#)ゲラサ人の地方に着いた。

27 イエスが陸に上がれると、この町の者で悪霊につかれている男がイエスに出会った。彼は、長い間着物も着けず、家には住まないで、墓場に住んでいた。

28 彼はイエスを見ると、叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのです。お願いします。どうか私を苦しめないでください。」

29 それは、イエスが、汚れた霊に、この人から出て行け、と命じられたからである。汚れた霊が何回となくこの人を捕らえたので、彼は鎖や足かせでつながれて看視されていたが、それでもそれらを断ち切っては悪霊によって荒野に追いやられていたのである。

30 イエスが、「何という名か」とお尋ねになると、「52レギオンです」と答えた。悪霊が大ぜい彼に入っていたからである。

31 悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。

32 ちょうど、山のそのあたりに、おびただしい豚の群れが飼ってあったので、悪霊どもは、その53豚に入ることを許してくださいと願った。イエスはそれを許された。

33 悪霊どもは、その人から出て、豚に入った。すると、豚の群れはいきなりがけを駆け下って湖に入り、おぼれ死んだ。

34 飼っていた者たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や村々でこの事を告知らせた。

35 人々が、この出来事を見に来て、イエスのそばに来たところ、イエスの足もとに、悪霊の去った男が着物を着て、正気に返って、すわっていた。人々は恐ろしくなった。

36 目撃者たちは、悪霊につかれていた人の救われた次第を、その人々に知らせた。

37 54ゲラサ地方の民衆はみな、すっかりおびえてしまい、イエスに自分たちのところから離れていただきたいと願った。そこで、イエスは舟に乗って帰られた。

38 そのとき、悪霊を追い出された人が、55お供をしたいとしきりに願ったが、イエスはこう言って彼を帰された。

39 「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。

40 さて、イエスが帰られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたからである。

41 するとそこに、ヤイロという人が来た。この人は会堂管理者であつた。彼はイエスの足もとにひれ伏して自分の家に来ていただきたいと願った。

42 彼には十二歳ぐらいのひとり娘がいて、死にかけていたのである。イエスがお出かけになると、群衆がみもとに押し迫って来た。

43 ときに、十二年の間長血をわずらった女がいた。56だれにも直してもらえなかったこの女は、

44 イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、たちどころに出血が止まった。

45 イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロ57は、「先生。この大ぜいの人が、ひしめき合って押しているのです」と言った。

46 しかし、イエスは、「だれかが、わたしにさわったのです。わたしから力が出て行くのを感じたのだから」と言われた。

47 女は、隠しきれないと知って、震えながら進み出て、御前にひれ伏し、すべての民の前で、イエスにさわったわけと、たちどころにいやされた次第を話した。

48 そこで、イエスは彼女に言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを58直したのです。安心して行きなさい。」

49 イエスがまだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人が来て言った。「あなたのお嬢さんはなくなりまして。もう、先生を煩わすことはありません。」

50 これを聞いて、イエスは答えられた。「恐れないうで、ただ信じなさい。そうすれば、娘は59直ります。」

51 イエスは家に入られたが、ペテロとヨハネとヤコブ、それに子どもの父と母のほかは、だれもいっしょに入ることをお許しにならなかった。

52 人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。「泣かなくてもよい。死んだのではない。眠っているのです。」

53 人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑っていた。

54 しかしイエスは、娘の手を取って、叫んで言われた。「子どもよ。起きなさい。」

55 すると、娘の霊が戻って、娘はただちに起き上がった。それでイエスは、娘に食事をさせるように言いつけられた。

56 両親がひどく驚いていると、イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。



# 九章

1 イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追ひ出し、病気を直すための、力と權威とお授けになった。

2 それから、神の国を宣べ伝え、病気を直すために、彼らを遣わされた。

3 イエスは、こう言われた。「旅のために何も持って行かないようにしなさい。杖も、袋も、パンも、金も。また下着も、二枚は、いりません。

4 どんな家に入っても、そこにとどまり、そこから次の旅に出かけなさい。

5 人々があなたがたを受け入れない場合は、その町を出て行くときに、彼らに対する証言として、足のちりを払い落としなさい。」

6 十二人は出かけて行って、村から村へと回りながら、至る所で福音を宣べ伝え、病気を直した。

7 さて、国主ヘロデは、このすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。それは、ある人々が、「ヨハネが死人の中からよみがえったのだ」と言い、

8 ほかに人々は、「エリヤが現れたのだ」と言い、さらに別の人々は、「昔の預言者のひとりがよみがえったのだ」と言っていたからである。

9 ヘロデは言った。「ヨハネなら、私が首をはねたのだ。そうしたことがうわさされているこの人は、いったいだれなのだろう。」ヘロデはイエスに会ってみようとした。

10 さて、使徒たちは帰って来て、自分たちのして来たことを報告した。それからイエスは彼らを連れてベツサイダという町へひそかに退かれた。

11 ところが、多くの群衆がこれを知って、ついて来た。それで、イエスは喜んで彼らを迎え、神の国のことを話し、また、いやしの必要な人たちをおいやしになった。

12 そのうち、日も暮れ始めたので、十二人はみもとに来て、「この群衆を解散させてください。そして回りの村や部落にやって、宿をとらせ、何か食べることができるようになさせてください。私たちは、こんな人里離れた所にいるのですから」と言った。

13 しかしイエスは、彼らに言われた。「あなたがたで、何か食べる物を上げなさい。」彼らは言った。「私たちには五つのパンと二匹の魚のほか何もありません。私たちが出かけて行って、この民全体のために食物を買うのでしょうか。」

14 それは、男だけでおよそ五千人もいたからである。しかしイエスは、弟子たちに言われた。「人々を、五十人ぐらゐずつ組にしてすわらせなさい。」

15 弟子たちは、そのようにして、全部をすわらせた。

16 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。

17 人々はみな、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを取り集めると、十二<sup>60</sup>かごあつた。

18 さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」

19 彼らは、答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています。」

20 イエスは、彼らに言われた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えて言った。「神の<sup>61</sup>キリストです。」

21 するとイエスは、このことをだれにも話さないようにと、彼らを戒めて命じられた。

22 そして言われた。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」

23 イエスは、みなの人に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

24 自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。

25 人は、たとい全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありません。

26 もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。

27 しかし、わたしは真実をあなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国を見るまでは、決して死を味わわない者たちがいます。」

28 これらの教えがあつてから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。

29 祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く<sup>62</sup>光り輝いた。



- 30 しかも、ふたりの人がイエスと話し合っているではないか。それはモーセとエリヤであって、
- 31 <sup>63</sup> 栄光のうちに現れて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。
- 32 ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきり目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。
- 33 それから、ふたりがイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。「先生。ここにいることは、すばらしいことです。私たちが三つの<sup>64</sup> 幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」ペテロは何を言うべきかを知らなかったのである。
- 34 彼がこう言っているうちに、雲がわき起こってその人々をおおった。彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった。
- 35 すると雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい」と言う声があった。
- 36 この声が出たとき、そこに見えたのはイエスだけであつた。彼らは沈黙を守り、その当時は、自分たちの見たこのことをいっさい、だれにも話さなかった。
- 37 次の日、一行が山から降り来ると、大ぜいの人の群れがイエスを迎えた。
- 38 すると、群衆の中から、ひとりの人が叫んで言った。「先生。お願いします。息子を見てやってください。ひとり息子です。」
- 39 ご覧ください。霊がこの子に取りつきますと、突然叫び出します。そしてひきつけさせてあわを吹かせ、かき裂いて、なかなか離れようとしません。
- 40 お弟子たちに、この霊を追い出してくださいをお願いしたのですが、お弟子たちにはできませんでした。」
- 41 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な、曲がった今の世だ。いつまで、あなたがたといっしょにいて、あなたがたにがまんしていなければならないのでしょうか。あなたの子をここに連れて来なさい。」
- 42 その子が近づいて来る間にも、悪霊は彼を<sup>65</sup> 打ち倒して、激しくひきつけさせてしまった。それで、イエスは汚れた霊をしかって、その子をいやし、父親に渡された。
- 43 人々はみな、神のご威光に驚嘆した。
- イエスのなさったすべてのことに、人々がみな驚いていると、イエスは弟子たちにこう言われた。
- 44 「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に<sup>66</sup> 渡されます。」
- 45 しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。このみことばの意味は、わからないように、彼らから隠されていたのである。また彼らは、このみことばについてイエスに尋ねるのを恐れた。
- 46 さて、弟子たちの間に、自分たちの中で、だれが一番偉いかという議論が<sup>67</sup> 持ち上がった。
- 47 しかしイエスは、彼らの心の中の<sup>68</sup> 考えを知っておられて、ひとりの子どもの手を取り、自分のそばに立たせ、
- 48 彼らに言われた。「だれでも、このような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れる者です。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れる者です。あなたがたすべての中で<sup>69</sup> 一番小さい者が一番偉いのです。」
- 49 ヨハネが答えて言った。「先生。私たちは、先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、やめさせました。私たちの仲間ではないので、やめさせたのです。」
- 50 しかしイエスは、彼に言われた。「やめさせることはありません。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です。」
- 51 さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられ、
- 52 ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリヤ人の町に入り、イエスのために準備した。
- 53 しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。
- 54 弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。<sup>70</sup>」
- 55 しかし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。<sup>71</sup>
- 56 そして一行は別の村に行った。
- 57 さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。」
- 58 すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません。」
- 59 イエスは別のの人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「<sup>72</sup> まず行って、私の父を葬ることを許してください。」

60 すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを<sup>ほうむ</sup>葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」

61 別の人はこう言った。「主よ。あなたに<sup>したが</sup>従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」

62 するとイエスは彼に言われた。「<sup>つき</sup>だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

## 一〇章

- 1 その後、主は、別に<sup>73</sup>七十人を定め、ご自分が行くつもりのすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。
- 2 そして、彼らに言われた。「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい。
- 3 さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。
- 4 財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。だれにも、道であいさつしてはいけません。
- 5 どんな家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。
- 6 もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。
- 7 その家に泊まっていて、出してくれる物を飲み食いしなさい。働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。
- 8 どの町に入っても、あなたがたを受け入れてくれたら、出される物を食べなさい。
- 9 そして、その町の病人を直し、彼らに、『神の国が、あなたがたに近づいた』と言いなさい。
- 10 しかし、町に入っても、人々があなたがたを受け入れないならば、大通りに出て、こう言いなさい。
- 11 『私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。』
- 12 あなたがたに言うが、その日には、その町よりもソドムのほうがまだ罰が軽いのです。
- 13 ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちの間に起こった力あるわざが、もしもツロとシドンでなされたのだったら、彼らはとうの昔に荒布をまとい、灰の中にすわって、悔い改めていただろう。
- 14 しかし、さばきの日には、そのツロとシドンのほうが、まだおまえたちより罰が軽いのだ。
- 15 カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスにまで落とされるのだ。
- 16 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒む者です。」
- 17 さて、<sup>74</sup>七十人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」
- 18 イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、いなくまのように天から落ちました。
- 19 確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。
- 20 だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」
- 21 ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。
- 22 すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、子がだれであるかは、父のほかには知る者がありません。また父がだれであるかは、子と、子が父を知らせようと心に定めた人たちのほかは、だれも知る者がありません。」
- 23 それからイエスは、弟子たちのほうに向いて、ひそかに言われた。「あなたがたの見ていることを見る目は幸いです。
- 24 あなたがたに言いますが、多くの預言者や王たちがあなたがたの見ていることを見たいと願ったのに、見られなかったのです。また、あなたがたの聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けなかったのです。」
- 25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」
- 26 イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか。」
- 27 すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります。」
- 28 イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」
- 29 しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」
- 30 イエスは答えて言われた。

「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。

- 31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。<sup>さい し</sup> <sup>とお す</sup>
- 32 同じようにレビ人も、その場所にきて彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。<sup>と</sup> <sup>ちゆう</sup>
- 33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、<sup>ちか よ</sup> <sup>きず</sup> <sup>かい ほう</sup>
- 34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。
- 35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が滞りに払います。』<sup>わた</sup> <sup>かい ほう</sup> <sup>はら</sup> <sup>ごう とう</sup> <sup>おそ</sup> <sup>となりびと</sup>
- 36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」
- 37 彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行つて同じようにしなさい。」
- 38 さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。<sup>むか</sup>
- 39 彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。
- 40 ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」
- 41 主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。
- 42 しかし、<sup>75</sup>どうしても必要なことはわずかです。<sup>76</sup>いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

## 一章

1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

2 そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ。御名があがめられますように。

御国が来ますように。

3 私たちの78日ごとの糧を毎日お与えください。

4 私たちの罪をお赦しください。

私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。

私たちを試みに会わせないでください。』」

5 また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。

6 友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ』と言ったとします。

7 すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけないでくれ。もう戸締まりもしてしまったし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』

8 あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで79頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。

9 わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。

10 だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

11 あなたがたの中で、子どもが80魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるでしょうか。

12 卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。

13 してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがあります。」

14 イエスは悪霊、それも口をきけなくする悪霊を追い出しておられた。悪霊が出て行くと、口がきけなかった者がものを言い始めたので、群衆は驚いた。

15 しかし、彼らのうちには、「悪霊どものかしら81ベルゼブルによって、悪霊どもを追い出しているのだ」と言う者もいた。

16 また、イエスをためそうとして、彼に天からの82しるしを求める者もいた。

17 しかし、イエスは、彼らの心を見抜いて言われた。「どんな国でも、内輪もめしたら荒れすたれ、家にしても、83内輪で争えばつづれます。

18 サタンも、もし仲間割れしたのだったら、どうしてサタンの国が立ち行くことができません。それなのにあなたがたは、わたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出していると言います。

19 もしもわたしが、ベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているのなら、あなたがたの84仲間は、だれによって追い出すのですか。だから、あなたがたの仲間が、あなたがたをさばく人となるのです。

20 しかし、わたしが、神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、神の国はあなたがたに来ているのです。

21 85強い人が十分に武装して自分の家を守っているときには、その持ち物は安全です。

22 しかし、もっと強い者が襲って来て彼に打ち勝つと、彼の頼みにしていた武器を奪い、分捕り品を分けます。

23 わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともに集めない者は散らす者です。

24 汚れた霊が86人から出て行って、水のない所をさまよいながら、休み場を捜します。一つも見つからないので、『出て来た自分の家に帰ろう』と言います。

25 帰って見ると、家は、掃除をしてきちんとかたづいていました。

26 そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みな入り込んでそこに住みつくのです。そうなると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなります。」

27 イエスが、これらのことを話しておられると、群衆の中から、ひとりの女が声を張り上げてイエスに言った。「あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。」

28 しかし、イエスは言われた。「いや、幸いですのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。」

29 さて、群衆の数がふえてくると、イエスは話し始められた。「この時代は悪い時代です。<sup>87</sup>しるしを求めているが、ヨナの<sup>88</sup>しるしのほかには、しるしは与えられません。

30 というのは、ヨナがニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。

31 南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、彼らを罪に定めます。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし、見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです。

32 ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです。

33 だれも、あかりをつけてから、それを穴倉や、枘の下に置く者はいません。燭台の上に置きます。入って来る人々に、その光が見えるためです。

34 からだのあかりは、あなたの目です。目が健全なら、あなたの全身も明るいが、しかし、目が悪いと、からだも暗くなります。

35 だから、あなたのうちの光が、暗やみにならないように、気をつけなさい。

36 もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、その全身はちょうどあかりが輝いて、あなたを照らすときのように明るく輝きます。」

37 イエスが話し終わられると、ひとりのパリサイ人が、食事をいっしょにしてください、とお願いした。そこでイエスは家に入って、食卓に着かれた。

38 そのパリサイ人は、イエスが<sup>89</sup>食事の前に、まず<sup>90</sup>きよめの洗いをなさらないのを見て、驚いた。

39 すると、主は言われた。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や大皿の外側はきよめるが、その内側は、強奪と邪悪とでいっぱいです。

40 愚かな人たち。外側を造られた方は、内側も造られたではありませんか。

41 とにかく、うちのものを施しに用いなさい。<sup>91</sup>そうすれば、いつさいが、あなたがたにとってきよいものとなります。

42 だが、わざわざだ。パリサイ人。おまえたちは、はつか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神への愛はおおりにしています。<sup>92</sup>これこそしなければならないことです。ただし、<sup>93</sup>十分の一もおおりにしてはいけません。

43 わざわいだ。パリサイ人。おまえたちは会堂の上席や、市場であいさつされることが好きです。

44 わざわいだ。おまえたちは人目につかぬ墓のようで、その上を歩く人々も気がつかない。」

45 すると、ある律法の専門家が、答えて言った。「先生。そのようなことを言われることは、私たちをも侮辱することです。」

46 しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわざだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせる<sup>94</sup>が、自分は、その荷物に指一本さわろうとはしない。

47 わざわいだ。おまえたちは預言者たちの<sup>95</sup>墓を建てている。しかし、おまえたちの父祖たちが彼らを殺しました。

48 したがって、おまえたちは父祖たちがしたことの証人となり、同意しているのです。彼らが預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。

49 だから、神の知恵もこう言いました。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遭わすが、彼らは、そのうちのあつる者を殺し、ある者を<sup>96</sup>迫害する。

50 51 それは、アベルの血から、祭壇と<sup>97</sup>神の家との間で殺されたザカリヤの血に至るまでの、世の初めから流されたすべての<sup>98</sup>預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。そうだ。わたしは言う。<sup>99</sup>この時代はその責任を問われる。』

52 わざわいだ。律法の専門家たち。おまえたちは知識のかぎを持ち去り、自分も入らず、入ろうとする人々をも妨げたのです。」

53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者、パリサイ人たちのイエスに対する激しい敵対と、いろいろのことに ついてのしつこい質問攻めとが始まった。

54 彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと、ひそかに計った。

## 一二章

- 1 そうこうしている間に、おびたしい数の群衆が集まって来て、互いに足を踏み合うほどになった。イエスはま  
ず弟子たちに対して、話された。「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善の事です。」
- 2 おおいかぶされているもので、現されないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものではありません。
- 3 ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中で<sup>100</sup>ささやいたことが、屋上で言い広め  
られます。
- 4 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐  
れてはいけません。
- 5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持つてお  
られる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。
- 6 五羽の雀は二<sup>101</sup>アサリオンで売っているでしょう。そんな雀の一羽でも、神の御前には忘れられてはいません。
- 7 それどころか、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、た  
くさんの雀よりもすぐれた者です。
- 8 そこで、あなたがたに言います。だれでも、わたしを人の前で認める者は、人の子もまた、その人を神の御使いた  
ちの前で認めます。
- 9 しかし、わたしを人の前で知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。
- 10 たとい、人の子をそしめることばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。
- 11 また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何  
を言おうかと心配するには及びません。
- 12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」
- 13 群衆の中のひとりが、「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください」と言った。
- 14 すると彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」
- 15 そして人々に言われた。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人  
のいのちは財産にあるのではないからです。」
- 16 それから人々にたとえを話された。
- 「ある金持ちの畑が豊作であった。
- 17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』
- 18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっ  
ておこう。
- 19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心  
して、食べて、飲んで、楽しめ。』」
- 20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。<sup>102</sup>おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おま  
えが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』
- 21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」
- 22 それから弟子たちに言われた。「だから、わたしはあなたがたに言います。いのちのことで何を食べようかと心  
配したり、からだのことで何を着ようかと心配したりするのはやめなさい。
- 23 いのちは食べ物よりたいせつであり、からだは着物よりたいせつだからです。
- 24 鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養っ  
てくださいます。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。
- 25 あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分の<sup>103</sup>いのちを<sup>104</sup>少しでも延ばすことができますか。
- 26 こんな小さなことさえできないで、なぜほかのことまで心配するのですか。
- 27 ゆりの花のことを考えてみなさい。どうして<sup>105</sup>育つのか。紡ぎもせず、織りもしないのです。しかし、わたしは  
あなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。
- 28 しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。まし  
てあなたがたには、どんなによくしてくださることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。
- 29 何を食べたらよいか、何を飲んだらよいか、と捜し求めることをやめ、気をもむことをやめなさい。
- 30 <sup>106</sup>これらはみな、この世の異邦人たちが切に求めているものです。しかし、あなたがたの父は、それがあなたが  
たにも必要であることを知っておられます。
- 31 何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。
- 32 小さな群れよ。恐れることはない。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。」



- 33 持ち物もちものを売うって、施ほどこしをしなさい。自分のために、古くならない財布さいふを作り、朽くちることのない宝たからを天に積み上げなさい。そこには、盗人ぬすびとも近寄ちからず、しみもいためることがありません。
- 34 あなたがたの宝しのあるところに、あなたがたの心もあるからです。
- 35 腰こんれいに帯を締め、あかりをともしていなさい。
- 36 主人が婚礼こんりから帰かえって来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。
- 37 帰かえって来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓しょくたくに着かせ、そばにいて給仕きゆうじをしてくれます。
- 38 主人が<sup>107</sup>真夜中に帰かえっても、<sup>108</sup>夜明けに帰かえっても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。
- 39 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家おに<sup>109</sup>押し入れられはしなかったでしょう。
- 40 あなたがたも用心いしていなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。」
- 41 そこで、ペテロが言った。「主よ。このたとえは私たちのために話してくださるのですか。それともみなのためなのですか。」
- 42 主は言われた。「では、主人から、その家のしもべたちを任まかされて、食事時には彼らに食べ物を与える忠実な賢い管理人とは、いったいだれでしょう。
- 43 主人が帰かえって来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。
- 44 わたしは真実をあなたがたに告げます。主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。
- 45 ところが、もし、そのしもべが、『<sup>110</sup>主人の帰りはまだだ』と心の中で思い、下男や下女を打たたき、食べたあり飲んだり、酒に酔よったりし始めると、
- 46 しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間ばつに帰かえって来ます。そして、彼をきびしく罰ふして、不忠実な者どもと同じめに会わせるに違いありません。
- 47 主人の心を知りながら、その思いどおりに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。
- 48 しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しで済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任まかされた者は多く要求もとされます。
- 49 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。
- 50 しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。
- 51 あなたがたは、地に平和へいを与えるためにわたしに来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂ぶんれつです。
- 52 今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗たいこうして分かれるようになります。
- 53 父は息子に、息子は父に対抗たいこうし、母は娘に、娘は母に対抗たいこうし、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」
- 54 群衆ぐんしゅうにもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が起こるのを見るとすぐに、『にわか雨が来るぞ』と言い、事実そのとおりになります。
- 55 また南風なんふうが吹きだすと、『暑い日になるぞ』と言い、事実そのとおりになります。
- 56 偽善者ぎぜんしやたち。あなたがたは地や空の現象げんじょうを見分けることを知りながら、<sup>111</sup>どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。
- 57 また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断はんだんしないのですか。
- 58 あなたを告訴こくそする者といっしょに役人の前に行くときは、途中とちゅうでも、熱心ねっしんに<sup>112</sup>彼と和解するよう努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行きます。裁判官は執行人に引き渡し、執行人は牢に投げ込んでしまします。
- 59 あなたに言います。最後の<sup>113</sup>レブタを支払うまでは、そこから決して出られないのです。」



# 一三章

- 1 ちょうどそのとき、ある人たちがやって来て、イエスに報告した。ピラトがガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに<sup>114</sup>混ぜたというのである。
- 2 イエスは彼らに答えて言われた。「そのガリラヤ人たちがそのような災難を受けたから、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。
- 3 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。
- 4 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも<sup>115</sup>罪深い人たちだったとでも思うのですか。
- 5 そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」
- 6 イエスはこのようなたとえを話された。  
「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。実を取りに来たが、何も見つからなかった。
- 7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年もの間、やって来ては、このいちじくの実のなるのを待っているのに、<sup>116</sup>なっていたためしがない。これを切り倒してしまいなさい。何のために土地をふさいでいるのですか。』
- 8 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますか。
- 9 もしそれで来年、実を結ば<sup>117</sup>よし、それでもだめなら、切り倒してください。』」
- 10 イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。
- 11 すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全然伸ばすことのできない女がいた。
- 12 イエスは、その女を見て、呼び寄せ、「<sup>118</sup>あなたの病気はいやされました」と言って、
- 13 手を置かれると、女はたちどころに腰が伸びて、神をあがめた。
- 14 すると、それを見た会堂管理者は、イエスが安息日にいやされたのを 憤<sup>いきどお</sup>って、群衆に言った。「働いてよい日は六日です。その間に来て直してもらうがよい。安息日には、いけないのです。」
- 15 しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たち。あなたがたは、安息日に、牛やろばを小屋からほどもき、水を飲ませに連れて行くではありませんか。
- 16 この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サタンが縛<sup>しば</sup>っていたのです。安息日だからといってこの束縛を解いてやってはいけないのですか。」
- 17 こう話されると、反対していた者たちはみな、恥じ入り、群衆はみな、イエスのなさったすべての輝かしいみわざを喜んだ。
- 18 そこで、イエスはこう言われた。「神の国は、何に似ているでしょう。何に比べたらよいでしょう。
- 19 それは、からし種のようなものです。それを取って庭に蒔いたところ、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」
- 20 またこう言われた。「神の国を何に比べましょう。
- 21 パン種のようなものです。女がパン種を取って、三<sup>119</sup>サトンの粉に混ぜたところ、全体がふくれました。」
- 22 イエスは、町々村々を次々に教えながら通り、エルサレムへの旅を続けられた。
- 23 すると、「主よ。救われる者は少ないのですか」と言う人があった。イエスは、人々に言われた。
- 24 「努力して狭い門から入りなさい。なぜなら、あなたがたに言いますが、入ろうとしても、入れなくなる人が多いのですから。
- 25 家の主人が、立ち上がって、戸をしめてしまってからでは、外に立って、『ご主人さま。あけてください』と言って、戸をいくらたたいても、もう主人は、『あなたがたがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。
- 26 すると、あなたがたは、こう言い始めるでしょう。『私たちは、<sup>120</sup>ごいっしょに、食べたり飲んだりいたしましたし、私たちの大通りで教えていただきました。』
- 27 だが、主人はこう言うでしょう。『私はあなたがたがどこの者だか知りません。不正を行う者たち。みな出て行きなさい。』
- 28 神の国にアブラハムやイサクやヤコブや、すべての預言者たちが入っているのに、あなたがたは外に投げ出されることになったとき、そこで泣き叫んだり、歯ざしりしたりするのです。
- 29 人々は、東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。
- 30 いいですか、今しんがりの者があとで先頭になり、いま先頭の者がしんがりになるのです。」
- 31 ちょうどそのとき、何人かのパリサイ人が近寄って来て、イエスに言った。「ここから出てほかの所へ行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうと思っています。」
- 32 イエスは言われた。「行つて、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きょうと、あすとは、

悪霊どもを追出し、病人をいやし、三日目に全うされます。

33 だが、わたしは、きょうもあすも次の日も進んで行かなければなりません。なぜなら、預言者がエルサレム以外の所で死ぬことはありえないからです。』

34 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。

35 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うときが来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることができません。』

# 一四章

1 ある安息日<sup>あんそくにち</sup>に、食事をしようとして、パリサイ派のある指導者の家に入られたとき、みんながじっとイエスを見つめていた。

2 <sup>すいしゆ</sup>121そこには、イエスの真つ正面に、水腫<sup>みづは</sup>をわずらっている人がいた。

3 イエスは、律法の専門家、パリサイ人たちに、「安息日に病気を直すことは正しいことですか、それともよくないことですか」と言われた。

4 しかし、彼らは黙っていた。それで、イエスはその人<sup>だ</sup>を抱いていやし、帰された。

5 それから、彼らに言われた。「自分の<sup>むす</sup>122息子や牛が井戸に落ちたのに、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者があなたがたのうちにいるでしょうか。」

6 彼らは答えることができなかった。

7 招かれた人々が上座を選んでいる様子に気づいておられたイエスは、彼らにたとえを話された。

8 「婚礼の披露宴に招かれたときには、上座<sup>じやうざ</sup>にすわってはいけません。あなたより身分の高い人が、招かれているかもしれないし、

9 あなたやその人を招いた人が来て、『この人に席を譲ってください』とあなたに言うなら、そのときあなたは恥を<sup>は</sup>かいて、<sup>まね</sup>123末席に着かなければならないでしょう。

10 招かれるようなことがあつて、行つたなら、末席に着きなさい。そうしたら、あなたを招いた人が来て、『<sup>まね</sup>124どうぞもつと上席にお進みください』と言うでしょう。そのときは、<sup>まんざ</sup>125満座の中で面目を施すことになります。

11 なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

12 また、イエスは、自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や夕食のふるまいをするなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどと呼んではいけません。でないと、今度は彼らがあなたを招いて、お返しすることになるからです。

13 祝宴を催す場合には、むしろ、貧しい者、からだの不自由な者、足のなえた者、盲人たちを招きなさい。

14 その人たちはお返しのできないので、あなたは幸いです。義人の復活のときお返しを受けるからです。」

15 イエスといっしょに食卓に着いていた客のひとり<sup>しよくたく</sup>はこれを聞いて、イエスに、「神の国で食事する人は、何と辛いことでしょう」と言つた。

16 するとイエスはこう言われた。

「ある人が盛大な宴会を催し、大ぜいの人を招いた。

17 宴会の時刻になつたのでしもべをやり、招いておいた人々に、『さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから』と言わせた。

18 ところが、みな同じように断り始めた。最初の人<sup>ことわ</sup>はこう言つた。『畑を買つたので、どうしても見に出かけなければなりません。<sup>ことわ</sup>126すみませんが、お断りさせていただきます。』

19 もうひとり<sup>ことわ</sup>はこう言つた。『五くびきの牛を買つたので、それをためしに行くところです。<sup>ことわ</sup>127すみませんが、お断りさせていただきます。』

20 また、別の人<sup>けつこん</sup>はこう言つた。『結婚したので、行くことができません。』

21 しもべは帰つて、このことを主人に報告した。すると、おこつた主人は、そのしもべに言つた。『急いで町の大通りや路地に出て行つて、貧しい者や、からだの不自由な者や、盲人や、足のなえた者たちをここに連れて来なさい。』

22 しもべは言つた。『ご主人さま。仰せのとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』

23 主人は言つた。『街道や垣根のところに出かけて行つて、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい。』

24 言つておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は、ひとりもいないのです。』」

25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いてしたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。

26 「わたしのも<sup>つま</sup>に<sup>にく</sup>に来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。

27 自分の十字架を負つてわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

28 塔を築こうとするとき、まずすわつて、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。

29 基礎を築いただけで完成できなかったら、見ていた人はみな彼をあざ笑つて、

30 『この人は、建て始めはしたもの、完成できなかった』と言うでしょう。

31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かつて来る敵を、一万人で

迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。

32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、[128](#)使者を送って講和を求めましょう。

33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

34 ですから、塩は良いものですが、もしその塩が塩けをなくしたら、何によつてそれに味をつけるのでしょうか。

35 土地にも肥やしにも役立たず、[129](#)外に投げ捨てられてしまいます。聞く耳のある人は聞きなさい。」

# 一五章

- 1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。
- 2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」
- 3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。
- 4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を<sup>130</sup>野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。
- 5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、
- 6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。
- 7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。
- 8 また、女の人が<sup>131</sup>銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか。
- 9 見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なくした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。
- 10 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたち<sup>132</sup>に喜びがわき起こるのです。」
- 11 またこう話された。
- 「ある人に息子がふたりあった。
- 12 弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。
- 13 それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。
- 14 何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。
- 15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。
- 16 彼は豚の食べるいご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。
- 17 しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。
- 18 立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。
- 19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』
- 20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を<sup>133</sup>抱き、<sup>134</sup>口づけした。
- 21 息子は言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』<sup>135</sup>
- 22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。
- 23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。
- 24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。
- 25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。
- 26 それで、しもべのひとりを選んで、これはいったい何事かと尋ねると、
- 27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなさったのです。』
- 28 すると、兄はおこって、家に入ろうとしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。
- 29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒め<sup>136</sup>を破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。
- 30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなさったのですか。』
- 31 父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。
- 32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜

ぶのは当然ではないか。』」

## 一六章

- 1 イエスは、弟子たちにも、こういう話をされた。
- 「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この管理人が主人の財産を乱費している、という訴えが出された。
- 2 主人は、彼を呼んで言った。『おまえについてこんなことを聞いたが、何ということをしてくれたのだ。もう管理を任せておくことはできないから、会計の報告を出しなさい。』
- 3 管理人は心の中で言った。『主人にこの管理の仕事を取り上げられるが、さてどうしよう。土を掘るには力がないし、物ごいをするのは恥ずかしい。』
- 4 ああ、わかった。こうしよう。こうしておけば、いつ管理の仕事をやめさせられても、人がその家に私を迎えてくれるだろう。』
- 5 そこで彼は、主人の債務者たちをひとりひとり呼んで、まず最初の者に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言うと、
- 6 その人は、『油百<sup>137</sup>バテ』と言った。すると彼は、『さあ、あなたの証文だ。すぐにすわって五十と書きなさい』と言った。
- 7 それから、別の人に、『さて、あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、『小麦百<sup>138</sup>コル』と言った。彼は、『さあ、あなたの証文だ。八十と書きなさい』と言った。
- 8 この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがないものなので、主人は、不正な管理人がこうも抜けめなくやったのをほめた。
- 9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。
- 10 小さい事に 忠実な人は、大きい事に 忠実であり、小さい事に 不忠実な人は、大きい事に 不忠実です。
- 11 ですから、あなたがたが不正の富に 忠実でなかったら、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょう。
- 12 また、あなたがたが他人のものに 忠実でなかったら、だれがあなたがたに、<sup>139</sup>あなたがたのものを持たせるでしょう。
- 13 しもべは、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、または一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」
- 14 さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。
- 15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられるものは、神の前で憎まれ、きらわれます。
- 16 律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしています。
- 17 しかし律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。
- 18 だれでも妻を離別してほかの女と結婚する者は、姦淫を犯す者であり、また、夫から離別された女と結婚する者も、姦淫を犯す者です。
- 19 ある金持ちがいた。いつも 紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。
- 20 ところが、その門前にラザロという全身おできの貧しい人が寝ていて、
- 21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。
- 22 さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。
- 23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。
- 24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』
- 25 アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。』
- 26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』
- 27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。』
- 28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』
- 29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者があります。その言うことを聞くべきです。』

30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』

31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』」



# 一七章

1 イエスは弟子たちにこう言われた。「<sup>140</sup>つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者はわざわいだ。

2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであつたら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。

4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。』

5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。

6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があつたなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ』と言えば、<sup>141</sup>言いつけどおりになるのです。

7 ところで、あなたがたのだからに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野から帰つて来たとき、<sup>142</sup>さあ、さあ、ここに来て、<sup>142</sup>食事をしなさい』としもべに言うでしょうか。

8 かつて、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい』と言わないでしょうか。

9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。

10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまつたら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。』

11 そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。

12 ある村に入ると、十人のツアラアトに冒された人がイエスに出会つた。彼らは遠く離れた所に立って、

13 声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。

14 イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中できよめられた。

15 そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、

16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であつた。

17 そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。

18 神をあがめるために戻つて来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」

19 それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」

20 さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。

21 『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」

22 イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願つても、見られない時が来ます。

23 人々が『こちらだ』とか、『あちらだ』とか言つても行つてはなりません。あとを追いかけてはなりません。

24 いなづまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。

25 しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。

26 人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こつたことと同様です。

27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとつたり、とついたりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

28 また、ロトの時代にあつたことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売つたり、買つたり、植えたり、建てたりしていたが、

29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降つて、すべての人を滅ぼしてしまいました。

30 人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。

31 その日には、屋上にいる者は家に家財があつても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰つてはいけません。

32 ロトの妻を思い出しなさい。

33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失ひ、それを失う者はいのちを保ちます。

34 あなたがたに言うが、その夜、同じ寝たてふたりの人が寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。

35 女がふたりいっしょに白をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」 <sup>143</sup>

37 <sup>でし</sup>弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、[144](#)はげたかも集まります。」

# 一八章

- 1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。
- 2 「ある町に、神を恐れず、人を<sup>145</sup>人とも思わない裁判官がいた。
- 3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、<sup>146</sup>私を守ってください』と言っていた。
- 4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、
- 5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、<sup>147</sup>この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来て<sup>148</sup>うるさくてしかたがない』と言った。』
- 6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。
- 7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。
- 8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくれます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に<sup>149</sup>信仰が見られるでしょうか。』
- 9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。
- 10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりとはパリサイ人で、もうひとりとは取税人であった。
- 11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。
- 12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』
- 13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』
- 14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』
- 15 イエスにさわっていたかどうかとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちがそれを見てしかつた。
- 16 しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めはいけません。神の国は、このような者たちのものです。
- 17 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。』
- 18 またある役人が、イエスに質問して言った。「<sup>150</sup>尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。』
- 19 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。
- 20 戒めはあなたもよく知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』」
- 21 すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。』
- 22 イエスはこれ聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。』
- 23 すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。
- 24 イエスは彼を見てこう言われた。「裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。
- 25 金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。』
- 26 これを聞いた人々が言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。』
- 27 イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。』
- 28 すると、ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは<sup>151</sup>自分の家を捨てて従ってまいりました。』
- 29 イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、
- 30 この世にあつてその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。』
- 31 さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。
- 32 人の子は異邦人に<sup>152</sup>引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。
- 33 彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。』

34 <sup>で し</sup>しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠<sup>かく</sup>されていて、話された事が理解<sup>り かい</sup>できなかった。

35 イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人<sup>もうじん</sup>が、道ばたにすわり、物ごいをしていた。

36 群衆<sup>ぐんしゆう</sup>が通って行くのを耳にして、これはいったい何事ですか、と尋ねた。

37 ナザレのイエスがお通りになるのだ、と知らせると、

38 彼は大声で、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と言った。

39 彼を黙らせようとして、先頭にいた人々がたしなめたが、盲人<sup>もうじん</sup>は、ますます「ダビデの子よ。私をあわれんでください」と叫<sup>こ</sup>び立てた。

40 イエスは立ち止まって、彼をそばに連れて来るように言いつけられた。

41 彼が近寄<sup>ちかい</sup>って来たので、「わたしに何をしてほしいのか」と尋ね<sup>たず</sup>られると、彼は、「主よ。目が見えるようになることです」と言った。

42 イエスが彼に、「見えるようになれ。あなたの信仰<sup>しんこう</sup>があなたを直したのです」と言われると、

43 彼はたちどころに目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行<sup>たみ</sup>った。これを見て民はみな神を賛美<sup>さんび</sup>した。

## 一九章

- 1 それからイエスは、エリコに入って、町をお通りになった。
- 2 ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。
- 3 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見る事ができなかった。
- 4 それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく 桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。
- 5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」
- 6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。
- 7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って<sup>153</sup>客となられた」と言って<sup>154</sup>つぶやいた。
- 8 ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」
- 9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」
- 10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」
- 11 人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国がすぐにでも現れるように思っていたからである。
- 12 それで、イエスはこう言われた。  
「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった。
- 13 彼は自分の十人のしもべを呼んで、十<sup>155</sup>ミナを与え、彼らに言った。『私が<sup>156</sup>帰るまで、これで商売しなさい。』
- 14 しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなつてもらいたくありません』と言った。
- 15 さて、彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼らと呼び出すように言いつけた。
- 16 さて、最初の者が現れて言った。『ご主人さま。あなたの—<sup>157</sup>ミナで、十ミナをもうけました。』
- 17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』
- 18 二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの—<sup>158</sup>ミナで、五ミナをもうけました。』
- 19 主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』
- 20 もうひとりが来て言った。『ご主人さま。さあ、ここにあなたの—ミナがご置います。私はふろしきに包んでしまっておきました。
- 21 あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしいうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お貸きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』
- 22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私は<sup>159</sup>あなたのことばによって、あなたをさばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。
- 23 だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』
- 24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その—ミナを彼から取り上げて、十ミナ持っている人にやりなさい。』
- 25 すると彼らは、『ご主人さま。その人は十ミナも持っています』と言った。
- 26 彼は言った。『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている物までも取り上げられるのです。
- 27 ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。』」
- 28 これらのことを話して後、イエスは、さらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。
- 29 <sup>160</sup>オリーブという<sup>161</sup>山<sup>162</sup>のふもと<sup>163</sup>のベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、
- 30 言われた。「向こうの村に行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない、ろばの子がつかないであるのに気がつくでしょう。それをほどいて連れて来なさい。
- 31 もし、『なぜ、ほどくのか』と尋ねる人があつたら、こう言いなさい。『主がお入用なのです。』」
- 32 使いに出されたふたりが行って見ると、イエスが話されたとおりであつた。
- 33 彼らがろばの子をほどいていると、その<sup>162</sup>持ち主が、「なぜ、このろばの子をほどくのか」と彼らに言った。
- 34 弟子たちは、「主がお入用なのです」と言った。
- 35 そしてふたりは、それをイエスのもたに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエ

スをお乗せした。

36 イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着しを敷いた。

37 イエスがすでにオリーブ山のふもとに近づかれたとき、弟子たちの群れはみな、自分たちの見たすべての力あるわざのことで、喜んで大声に神を賛美し始め、

38 こう言った。

「祝福しゆくふくあれ。

主の御名によって来られる王に。

天には平和。

栄光は、いと高き所に。」

39 するとパリサイ人のうちのある者たちが、群衆ぐんしゆうの中から、イエスに向かって、「先生。お弟子たちをしかつてく  
ださい」と言った。

40 イエスは答えて言われた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」

41 エルサレムに近くなつたころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、

42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえ  
の目から隠されている。

43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘るいを築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

44 そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままで  
は残されない日が、やって来る。それはおまえが、<sup>163</sup>神おとずの訪れの時を知らなかったからだ。」

45 宮に入られたイエスは、商売人たちを追出し始め、

46 こう言われた。「『わたしの家は、祈りの家でなければならない』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれ  
を強盗の<sup>164</sup>巢にした。」

47 イエスは毎日、宮で教えておられた。祭司長さいし、律法学者りつぽうがくしや、民のおもだった者たちは、イエスを殺そうとねらつ  
ていたが、

48 どうしてよいかわからなかった。民衆みんしゆうがみな、熱心に<sup>165</sup>イエスの話に耳を傾けていたからである。

## 二〇章

- 1 イエスは宮で民衆を教え、福音を宣べ伝えておられたが、ある日、祭司長、律法学者たちが、長老たちといっしょにイエスに立ち向かって、
- 2 イエスに言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。あなたにその権威を授けたのはだれですか。それを言ってください。」
- 3 そこで答えて言われた。「わたしも一言尋ねますから、それに答えなさい。
- 4 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、人から出たのですか。」
- 5 すると彼らは、こう言って、互いに論じ合った。「もし、天から、と云えば、それならなぜ、彼を信じなかったか、と言うだろう。
- 6 しかし、もし、人から、と云えば、民衆がみなで私たちを石で打ち殺すだろう。ヨハネを預言者と信じているのだから。」
- 7 そこで、「どこからか知りません」と答えた。
- 8 するとイエスは、「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい」と言われた。
- 9 また、イエスは、民衆にこのようなたとえを話された。
- 「ある人がぶどう園を造り、それを<sup>166</sup>農夫たちに賃して、長い旅に出た。
- 10 そして季節になったので、ぶどう園の収穫の分けまえをもらうために、農夫たちのところへひとりのしもべを遣わした。ところが、農夫たちは、そのしもべを袋だたきに、何も持たせないで送り帰した。
- 11 そこで、別のしもべを遣わしたが、彼らは、そのしもべも袋だたきに、はずかしめたうえで、何も持たせないで送り帰した。
- 12 彼はさらに三人目のしもべをやったが、彼らは、このしもべにも傷を負わせて追い出した。
- 13 ぶどう園の主人は言った。『どうしたものか。よし、愛する息子を送ろう。彼らも、この子はたぶん敬ってくれるだろう。』
- 14 ところが、農夫たちはその息子を見て、議論しながら言った。『あれはあと取りだ。あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。』
- 15 そして、彼をぶどう園の外に追い出して、殺してしまった。
- こうなると、ぶどう園の主人は、どうするでしょう。
- 16 彼は<sup>167</sup>戻って来て、この農夫どもを打ち滅ぼし、ぶどう園をほかの人たちに与えてしまいます。」これを聞いた民衆は、「そんなことがあつてはなりません」と言った。
- 17 イエスは、彼らを見つめて言われた。「では、
- 『家を建てる者たちの見捨てた石、
- それが 礎 の石となった。』
- と書いてあるのは、何のことでしょう。
- 18 この石の上に落ちれば、だれでも粉々に砕け、またこの石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛び散らしてしまうのです。」
- 19 律法学者、祭司長たちは、イエスが自分たちをさしてこのたとえを話されたと気づいたので、この際イエスに手をかけて捕まえようとしたが、やはり民衆を恐れた。
- 20 さて、機会をねらっていた彼らは、義人を装った問者を送り、イエスのことばを取り上げて、総督の支配と権威にイエスを引き渡そう、と計った。
- 21 その問者たちは、イエスに質問して言った。「先生。私たちは、あなたがお話しになり、お教えるになることは正しく、またあなたは分け隔てなどせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。
- 22 ところで、私たちが、カイザルに税金を納めることは、<sup>168</sup>律法にならっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」
- 23 イエスはそのたくらみを見抜いて彼らに言われた。
- 24 「<sup>169</sup>デナリ銀貨をわたしに見せなさい。これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」彼らは、「カイザルのです」と言った。
- 25 すると彼らに言われた。「では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」
- 26 彼らは、民衆の前でイエスのことばじりをつかむことができず、お答えに驚嘆して黙ってしまった。
- 27 ところが、復活があることを否定するサドカイ人のある者たちが、イエスのところに来て、質問して、
- 28 こう言った。「先生。モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が妻をめとって死に、しかも子がなかった場合は、その弟はその女を妻にして、兄のための子をもうけなければならない。』
- 29 ところで、七人の兄弟がいました。長男は妻をめとりましたが、子どもがなくて死にました。」

- 30 次男も、
- 31 三男もその女をめとり、七人とも同じようにして、子どもを残さずに死にました。
- 32 あとで、その女も死にました。
- 33 すると復活の際、その女はだれの妻になるでしょうか。七人ともその女を妻としたのですが。」
- 34 イエスは彼らに言われた。「この世の子らは、めとったり、とついたりするが、
- 35 次の世に入るのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。
- 36 彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また、復活の子として神の子どもだからです。
- 37 それに、死人がよみがえることについては、モーセもしば か・しよの個所で、主を、『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、このことを示しました。
- 38 神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。というのは、神に対しては、みなが生きているからです。」
- 39 律法学者のうちのある者たちが答えて、「先生。りつばなお答えです」と言った。
- 40 彼らはもうそれ以上何も質問する勇気がなかった。
- 41 すると、イエスが彼らに言われた。「どうして人々は、170キリストをダビデの子と言うのですか。
- 42 ダビデ自身が詩篇の中でこう言っています。  
『主は私の主に言われた。
- 43 「わたしが、あなたの敵を  
あなたの足台とする時まで、  
わたしの右の座に着いていなさい。」』
- 44 こういうわけで、ダビデがキリストを主と呼んでいるのに、どうしてキリストがダビデの子でしょう。」
- 45 また、民衆がみな耳を傾けているときに、イエスは弟子たちにこう言われた。
- 46 「律法学者たちには気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ったり、広場であいさつされたりすることが好きで、また会堂の上席や宴会の上座が好きです。
- 47 また、やもめの家を食いつぶし、見えを飾るために長い祈りをします。こういう人たちは人一倍きびしい罰を受けるのです。」



## 二一章

- 1 さてイエスが、目を上げてご覧になると、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れていた。
- 2 また、ある貧しいやもめが、そこに<sup>171</sup>レプタ銅貨二つを投げ入れているのをご覧になった。
- 3 それでイエスは言われた。「わたしは真実をあなたがたに告げます。この貧しいやもめは、どの人よりもたくさん投げ入れました。」
- 4 みなは、あり余の中から献金を投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。」
- 5 宮がすばらしい石や奉納物で飾ってであると話していた人々があつた。するとイエス是这样言われた。
- 6 「あなたがたの見ているこれらの物について言えば、石がくずされずに<sup>172</sup>積まれたまま残ることのない日がやってくる。」
- 7 彼らは、イエスに質問して言った。「先生、それでは、これらのことは、いつ起こるのでしょうか。これらのことが起こるときは、どんな<sup>173</sup>前兆があるのでしょうか。」
- 8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名の者が大ぜい現れ、『私がそれだ』とか『時は近づいた』とか言います。そんな人々のあとについて行つてはなりません。
- 9 戦争や暴動のことを聞いても、こわがってはいけません。それは、初めに必ず起こることです。だが、終わりは、すぐには来ません。」
- 10 それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、
- 11 大地震があり、方々に疫病やききんが起こり、恐ろしいことや天からのすさまじい<sup>174</sup>前兆が現れます。
- 12 しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名ののために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。
- 13 それは<sup>175</sup>あなたがたのあかしをする機会となります。
- 14 それで、どう弁明するかは、あらかじめ考えないことに、心を定めておきなさい。
- 15 どんな反対者も、反論もできず、反証もできないような<sup>176</sup>ことばと知恵を、わたしがあなたがたに与えます。
- 16 しかしあなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにまで裏切られます。中には殺される者もあり、
- 17 わたしの名のために、みなの人に憎まれます。
- 18 しかし、あなたがたの髪の毛一筋も失われることはありません。
- 19 あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。
- 20 しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。
- 21 そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都に入つてはいけません。
- 22 これは、書かれているすべてのことが成就する報復の日だからです。
- 23 その日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨むからです。
- 24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となつてあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。
- 25 そして、日と月と星には、<sup>177</sup>前兆が現れ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥つて悩み、
- 26 人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。
- 27 そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。
- 28 これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上になげなさい。贖いが近づいたのです。」
- 29 それからイエスは、人々にたとえを話された。「いちじくの木や、すべての木を見なさい。
- 30 木の芽が出ると、それを見て夏の近いことがわかります。
- 31 そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい。
- 32 まことに、あなたがたに告げます。すべてのことが起こつてしまうまでは、この<sup>178</sup>時代は過ぎ去りません。
- 33 この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。
- 34 あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。
- 35 その日は、全地の表に住むすべての人に臨むからです。
- 36 しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができ

るように、いつも油断ゆ だんせずに祈いのっていなさい。」

37 さてイエスは、昼は宮で教え、夜はいつも外に出て179オリーブという山で過すごされた。

38 民衆みんしゆうはみな朝早く起きて、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとに集まって来た。

## 二二章

- 1 さて、過越すぎこしの祭りといわれる、種なしパンの祝いが近づいていた。
- 2 祭司長さいし、律法学者たちは、イエスを殺すための良い方法を捜していた。というのは、彼らは民衆みんしゆうを恐れていたからである。
- 3 さて、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った。
- 4 ユダは出かけて行って、祭司長たちや宮の守衛長たちと、どのようにしてイエスを彼らに引き渡そうかと相談した。
- 5 彼らは喜んで、ユダに金をやる約束をした。
- 6 ユダは承知しやうちした。そして群衆ぐんしゆうの180いないときにイエスを彼らに引き渡そうと機会をねらっていた。
- 7 さて、過越の山羊のほふられる、種なしパンの日が来た。
- 8 イエスは、こう言ってペテロとヨハネを遣わされた。「わたしたちの過越すぎこしの食事ができるように、準備じゆん びをしに行きなさい。」
- 9 彼らはイエスに言った。「どこに準備しましょうか。」
- 10 イエスは言われた。「町に入ると、水がめを運んでいる男に会うから、その人が入る家にまでついて行きなさい。」
- 11 そして、その家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする客間はどこか、と先生があなたに言っておられる』と言いなさい。
- 12 すると主人は、席が整っている二階の大広間を見せてくれます。そこで準備じゆん びをしなさい。」
- 13 彼らが出かけて見ると、イエスの言われたとおりであった。それで、彼らは過越の食事の用意をした。
- 14 さて時間になって、イエスは食卓に着かれ、使徒たちもイエスといっしょに席に着いた。
- 15 イエスは言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越すぎこしの食事をするのをどんなに望んでいたことか。
- 16 あなたがたに言いますが、過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません。」
- 17 そしてイエスは、杯を取り、感謝をささげて後、言われた。「これを取って、互いに分けて飲みなさい。」
- 18 あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時まで、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」
- 19 それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行いなさい。」
- 20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」
- 21 しかし、見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓にあります。
- 22 人の子は、定められたおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわいです。」
- 23 そこで弟子たちは、そんなことをしようとしている者は、いったいこの中のだれなのかと、互いに議論をし始めた。
- 24 また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった。
- 25 すると、イエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。
- 26 だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。」
- 27 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むしろ、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。
- 28 けれども、あなたがたこそ、わたしのさまざまな試練の時にも、わたしについて来てくれた人たちです。
- 29 わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。
- 30 それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。
- 31 シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。
- 32 しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」
- 33 シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」
- 34 しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたがたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを

知らないと言います。」

35 それから、弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは言った。「いいえ。何もありませんでした。」

36 そこで言われた。「しかし、今は、財布のある者は財布を持ち、同じく 袋を持ち、剣のない者は着物を売って剣を買いなさい。」

37 あなたがたに言いますが、『彼は罪人たちの中に数えられた』と書いてあるこのことが、わたしに必ず実現するのです。わたしにかかわることは実現します。」

38 彼らは言った。「主よ。このとおり、ここに剣が二振りあります。」イエスは彼らに、「それで十分」と言われた。

39 それからイエスは出て、いつものようにオリブ山に行かれ、弟子たちも従った。

40 いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい。」と言われた。

41 そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。

42 「父よ。みこころならば、この 杯 をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」

43 **181**すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。

44 イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。

45 イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに来て見ると、彼らは悲しみの果てに、眠り込んでしまっていた。

46 それで、彼らに言われた。「なぜ、眠っているのか。起きて、誘惑に陥らないように祈っていなさい。」

47 イエスがまだ話をしておられるとき、群衆がやって来た。十二弟子のひとりで、ユダという者が、先頭に立っていた。ユダはイエスに口づけしようとして、みもとに近づいた。

48 だが、イエスは彼に、「ユダ。口づけで、人の子を裏切ろうとするのか」と言われた。

49 イエスの回りにいた者たちは、事の成り行きを見て、「主よ。剣で撃ちましょうか」と言った。

50 そしてそのうちのある者が、大祭司のしもべに撃ってかかり、その右の耳を切り落とした。

51 するとイエスは、「**182**やめなさい。それまで」と言われた。そして、耳にさわって彼をいやされた。

52 そして押しかけて来た祭司長、宮の守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのですか。」

53 あなたがたは、わたしが毎日宮でいっしょにいる間は、わたしに手出しもしなかった。しかし、今はあなたがたの時です。暗やみの力です。」

54 彼らはイエスを捕らえ、引いて行って、大祭司の家に連れて来た。ペテロは、遠く離れてついて行った。

55 彼らは中庭の真ん中に火をたいて、みなすわり込んだので、ペテロも中に混じって腰をおろした。

56 すると、女中が、火あかりの中にペテロのすわっているのを見つけ、まじまじと見て言った。「この人も、イエスといっしょにいました。」

57 ところが、ペテロはそれを打ち消して、「いいえ、私はあの人を知りません」と言った。

58 しばらくして、ほかの男が彼を見て、「あなたも、彼らの仲間だ」と言った。しかしペテロは、「いや、違います」と言った。

59 それから一時間ほどたつと、また別の男が、「確かにこの人も彼といっしょだった。この人もガリラヤ人だから」と言い張った。

60 しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません」と言った。それといっしょに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏 が鳴いた。

61 主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「きょう、鶏 が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う」と言われた主のおことばを思い出した。

62 彼は、外に出て、激しく泣いた。

63 さて、イエスの監視人どもは、イエスをからかい、むちでたたいた。

64 そして目隠しをして、「言い当ててみる。今たたいたのはだれか」と聞いたりした。

65 また、そのほかさまざまな悪口をイエスに浴びせた。

66 夜が明けると、民の長老会、それに祭司長、律法学者たちが、集まった。彼らはイエスを **183**議会に連れ出し、

67 こう言った。「あなたが **184**キリストなら、そうだと言いなさい。」しかしイエスは言われた。「わたしが言っても、あなたがたは決して信じないでしょうし、

68 わたしが尋ねても、あなたがたは決して答えないでしょう。」

69 しかし今から後、人の子は、神の大能の右の座に着きます。」

70 彼らはみなで言った。「ではあなたは神の子ですか。」すると、イエスは彼らに「あなたがたの言うとおり、わた

しはそれです」と言われた。

71 すると彼らは「<sup>しょうにん</sup>これでもまだ証人が必要でしょうか。私たち自身が彼の口から<sup>ちよくせつ</sup>直接それを聞いたのだから」と言った。

## 二三章

- 1 そこで、彼らは全員が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。
- 2 そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」
- 3 するとピラトはイエスに、「あなたは、ユダヤ人の王ですか」と尋ねた。イエスは答えて、「そのとおりです」と言われた。
- 4 ピラトは祭司長たちや群衆に、「この人には何の<sup>185</sup>罪も見つからない」と言った。
- 5 しかし彼らはあくまで言い張って、「この人は、ガリラヤからここまで、ユダヤ全土で教えながら、この民を扇動しているのです」と言った。
- 6 それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ねて、
- 7 ヘロデの支配下にあるとわかると、イエスをヘロデのところへ送った。ヘロデもそのころエルサレムにいたからである。
- 8 ヘロデはイエスを見ると非常に喜んだ。ずっと前からイエスのことを聞いていたので、イエスに会いたいと思っていたし、イエスの行う何かの<sup>186</sup>奇蹟を見たいと考えていたからである。
- 9 それで、<sup>187</sup>いろいろと質問したが、イエスは彼に何もお答えにならなかった。
- 10 祭司長たちと律法学者たちは立って、イエスを激しく訴えていた。
- 11 ヘロデは、自分の兵士たちといっしょにイエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はでな衣を着せて、ピラトに送り返した。
- 12 この日、ヘロデとピラトは仲よくなった。それまでは互いに敵対していたのである。
- 13 ピラトは祭司長たちと指導者たちと民衆を呼び集め、
- 14 こう言った。「あなたがたは、この人を、民衆を惑わす者として、私のところに連れて来たけれども、私があなたがたの前で取り調べたところ、あなたがたが訴えているような<sup>188</sup>罪は別に何も見つかりません。
- 15 ヘロデととても同じです。彼は私たちにこの人を送り返しました。見なさい。この人は、死罪に当たることは、何一つしていません。
- 16 だから私は、懲らしめたくて、釈放します。」<sup>189</sup>
- 18 しかし彼らは、声をそろえて叫んだ。「この人を除け。バラバを釈放しろ。」
- 19 バラバとは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入っていた者である。
- 20 ピラトは、イエスを釈放しようと思って、彼らに、もう一度呼びかけた。
- 21 しかし、彼らは叫び続けて、「十字架だ。十字架につけろ」と言った。
- 22 しかしピラトは三度目に彼らにこう言った。「あの人がどんな悪いことをしたというのか。あの人には、死に当たる<sup>190</sup>罪は、何も見つかりません。だから私は、懲らしめたくて、釈放します。」
- 23 ところが、彼らはあくまで主張し続け、十字架につけるよう大声で要求した。そしてついにその声が勝った。
- 24 ピラトは、彼らの要求どおりにすることを宣告した。
- 25 すなわち、暴動と人殺しのかどで牢に入っていた男を願いどおりに釈放し、イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。
- 26 彼らは、イエスを引いて行く途中、いなかから出て来たシモンというクレネ人をつかまえ、この人に十字架を負わせてイエスのうしろから運ばせた。
- 27 大ぜいの民衆やイエスのことを<sup>191</sup>嘆き悲しむ女たちの群れが、イエスのあとについて行った。
- 28 しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。
- 29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は、幸いだ』と言う日が来るのですから。
- 30 そのとき、人々は山に向かって、『われわれの上に倒れかかってくれ』と言い、丘に向かって、『われわれをおおってくれ』と言い始めます。
- 31 彼らが生木にこのようなことをするのなら、枯れ木には、いったい、何が起こるでしょう。」
- 32 ほかにふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。
- 33 「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとりには右に、ひとりには左に。
- 34 <sup>192</sup>そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

35 民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神の<sup>193</sup>キリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」

36 兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、

37 「ユダヤ人の王なら、自分を救え」と言った。

38 「これはユダヤ人の王」と書いた札もイエスの頭上<sup>かか</sup>に掲げてあった。

39 十字架<sup>じゆうじか</sup>にかけられていた犯罪人のひとり<sup>はんざいにん</sup>はイエスに悪口<sup>あくこう</sup>を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言った。

40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れ<sup>おそ</sup>れないのか。おまえも同じ<sup>おな</sup>に刑罰<sup>けいばつ</sup>を受けているではないか。

41 われわれは、自分のしたことの報い<sup>むく</sup>を受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」

43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

44 そのときすでに<sup>194</sup>十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、<sup>195</sup>三時まで続いた。

45 太陽は光を失っていた。また、神殿の幕は真つ二つに裂けた。

46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

47 この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった<sup>むね</sup>」と言った。

48 また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、こういういろいろの出来事を見たので、胸をたたいて悲しみながら帰った。

49 しかし、イエスの知人たちと、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちとはみな、遠く離れて立ち、これらのことを見ていた。

50 さてここに、ヨセフという、議員のひとりで、りっぱな、正しい人がいた。

51 この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった。彼は、アリマタヤというユダヤ人の町の人で、神の国を待ち望んでいた。

52 この人が、ピラトのところに行つて、イエスのからだの下げ渡し<sup>さわた</sup>を願った。

53 それから、イエスを取り降ろして、亜麻布で包み、そして、まだだれをも葬<sup>ほうむ</sup>ったことのない、岩に掘られた墓<sup>はか</sup>にイエスを納めた。

54 この日は準備の日で、もう安息日<sup>あんそくにち</sup>が<sup>196</sup>始まろうとしていた。

55 ガリラヤからイエスといっしょに出て来た女たちは、ヨセフについて行つて、墓と、イエスのからだの納められる様子を見届けた。

56 そして、戻って来て、香料と香油を用意した。安息日には、戒めに従つて、休んだが、



## 二四章

- 1 週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って墓に着いた。
- 2 見ると、石が墓からわきにころがしてあった。
- 3 入って見ると、主イエスのからだはなかった。
- 4 そのため女たちが途方にくれていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着たふたりの人が、女たちの近くに来た。
- 5 恐ろしくなって、地面に顔を伏せていると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で捜すのですか。
- 6 [197](#)ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。
- 7 人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。」
- 8 女たちはイエスのみことばを思い出した。
- 9 そして、墓から戻って、十一弟子とそのほかの人たち全部に、一部始終を報告した。
- 10 この女たちは、マグダラのマリヤとヨハannaとヤコブの母マリヤとであった。彼女たちといっしょにいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。
- 11 ところが、[198](#)使徒たちにはこの話はたわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかった。
- 12 [199](#)「しかしペテロは、立ち上がると走って墓へ行き、かがんでのぞき込んだところ、亜麻布だけがあった。それで、この出来事に驚いて家に帰った。」
- 13 ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから[200](#)十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。
- 14 そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。
- 15 話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。
- 16 しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。
- 17 イエスは彼らに言われた。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。
- 18 クレオバというほうが答えて言った。「[201](#)エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」
- 19 イエスが、「どんな事ですか」と聞かれると、ふたりは答えた。「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。
- 20 それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。
- 21 しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、
- 22 また仲間の女たちが私たちを驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみました、
- 23 イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。
- 24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。」
- 25 するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。
- 26 キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光に入るはずではなかったのですか。」
- 27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。
- 28 彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうな様子であった。
- 29 それで、彼らが、「いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから」と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中に入られた。
- 30 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。
- 31 それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。
- 32 そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を[202](#)説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」
- 33 すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、
- 34 「ほんとうに主はよみがえて、シモンにお姿を現された」と言っていた。
- 35 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。
- 36 これらのことを話している間に、イエスご自身が彼らの真ん中に立たれた。[203](#)



37 彼らは驚き恐れて、霊を見ているのだと思った。

38 すると、イエスは言われた。「なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。」

39 わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」 [204](#)

41 それでも、彼らは、うれしさのあまりまだ信じられず、不思議がつているので、イエスは、「ここに何か食べ物がありますか」と言われた。

42 それで、焼いた魚を一切れ差し上げると、

43 イエスは、彼らの前で、それを取って召し上がった。

44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」

45 そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、

46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

47 その名によって、[205](#) 罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。

48 あなたがたは、これらのことの証人です。

49 さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

50 それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。

51 そして祝福しながら、彼らから離れて行かれた。 [206](#)

52 彼らは、[207](#) 非常に喜びを抱いてエルサレムに帰り、

53 いつも宮にいて神を [208](#) ほめたたえていた。

- 1 別訳「すでに成就された出来事」
- 2 あるいは「非難されるところなく」
- 3 あるいは「身振り、手振りをする」「うなづく」
- 4 ギリシヤ語「マリヤム」ヘブル語の「ミリヤム」に当たる
- 5 異本「あなたはどの女よりも祝福された方です」を加えるものもある
- 6 直訳「生まれて来る聖なる者は」
- 7 すなわち「メシヤ」―油そそがれた者
- 8 あるいは「ハンナ」
- 9 別訳「結婚してから七年…」
- 10 直訳「子よ」
- 11 別訳「仕事（複数）」すなわち「わたしの父の仕事に」
- 12 直訳「ことば」
- 13 あるいは「年」
- 14 直訳「肉」
- 15 あるいは「強請しては…」
- 16 すなわち「メシヤ」
- 17 あるいは「論じていた、討論していた」
- 18 あるいは「…によるバプテスマ」
- 19 イエスの母マリヤの父。ヨセフの義父。「エリ」とも読む
- 20 「ヘスリ」ともつづる
- 21 ギリシヤ語「サラティエール」
- 22 ギリシヤ語「イエス」
- 23 「サルモン」とする異本もある
- 24 異本「ラム」
- 25 ギリシヤ語「ラガウ」
- 26 直訳「御霊にあつて」
- 27 直訳「人が居住していた地の国々」
- 28 あるいは「私の前にひれ伏すなら」
- 29 あるいは「巻き物」
- 30 あるいは「巻き物」
- 31 あるいは「証言する、確認する」
- 32 レビ一三章を参照
- 33 別訳「放っておいてください」
- 34 あるいは「仕え始めた」
- 35 すなわち「メシヤ」
- 36 異本「ガリラヤの諸会堂で」
- 37 直訳「ひざもと」
- 38 直訳「人よ」
- 39 直訳「婚礼の式場の子ら」
- 40 多くの写本は「第二・第一安息日」と読む
- 41 「天の」は補足
- 42 直訳「子（若者）」
- 43 異本「翌日」とするものもある

- 44 別訳「劣った者」
- 45 「ヨハネの教えを」は補足
- 46 あるいは「神を正しいとした」
- 47 すなわち「不道德な女」
- 48 異本「あの預言者」
- 49 別訳「彼らの間で」
- 50 あるいは「持っているように見えるものまでも」
- 51 異本「ゲルゲサ人」「ガダラ人」
- 52 すなわち「ローマ軍隊の一軍団」 別訳「大ぜい、多数」
- 53 直訳「彼らに」
- 54 異本「ゲルゲサ地方」「ガダラ地方」
- 55 直訳「いつしよにいたい」
- 56 異本に「医者のために自分の生活費を全部使い果たしてしまった」を加えるものもある
- 57 異本に「...および彼とともにいた者たち」を加えるものもある
- 58 直訳「救ったのです」
- 59 あるいは「救われます」
- 60 あるいは「大型のかご」
- 61 すなわち「メシヤ」
- 62 直訳「いなずまのように光り輝いた」
- 63 あるいは「輝き」
- 64 あるいは「聖なる天幕」
- 65 あるいは「引き裂き」
- 66 あるいは「裏切る」
- 67 直訳「始まった」
- 68 直訳「議論」
- 69 あるいは「最も身分の低い者」
- 70 異本に「エリヤがしたように」を加えるものもある
- 71 異本「そして彼は言われた。『あなたがたは自分たちがどのような霊的状态にあるのかを知らないのです。 56  
人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなくそれを救うためです』」を加える
- 72 異本に「主よ」を加えるものもある
- 73 異本「七十二人」
- 74 異本「七十二人」
- 75 異本「どうしても必要なものはただ一つだけです」
- 76 直訳「あるいは」
- 77 異本には、この箇所をマタイ六・九―一三に合わせるために、ルカに欠けているものをマタイから取って挿入するものもある
- 78 あるいは「きたるべき日の食物」「必要欠くべからざる食物」
- 79 あるいは「あつかましさのゆえに」
- 80 異本に「パンを下さいと言うときに、石を与える父親がいるでしょうか。あるいは子どもが」を挿入するものもある
- 81 異本に一五、一八、一九節のこの語を「ベエゼブル」とするものもある
- 82 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 83 直訳「家が家の上に倒れる」

- 84 あるいは「子ら」
- 85 原文には「強い人」に定冠詞がある
- 86 原文には「人」に定冠詞がついている
- 87 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 88 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 89 あるいは「昼食」
- 90 ギリシヤ語「バプテスマ」
- 91 直訳「見よ」
- 92 直訳「これらのこと」
- 93 直訳「ほかのこと」
- 94 直訳「そして」
- 95 あるいは「記念碑」
- 96 あるいは「追い出す」
- 97 「神の」は補足
- 98 あるいは「預言者の血がこの時代に求められるためです」
- 99 あるいは「求められる」
- 100 直訳「耳の中に語った」
- 101 一デナリの十六分の一
- 102 直訳「彼らがおまえのたましいをおまえから求めている」
- 103 あるいは「身長」
- 104 原語「ペーキュス」長さを測る単位（「前腕」の長さ）
- 105 異本に「育つのか」を欠くものもある
- 106 別訳「これらの物をすべての異邦人…」
- 107 直訳「第二の夜回り」すなわち「午後九時から夜中まで」
- 108 直訳「第三の夜回り」すなわち「夜中の十二時から午前三時まで」
- 109 直訳「掘り抜かれる」
- 110 直訳「主人の帰りは時間がかかる」
- 111 直訳「どのようにして」
- 112 直訳「彼から赦してもらえるように」
- 113 一レプタは一デナリの一二八分の一に相当する最小単位の銅貨
- 114 あるいは「とともに流した」
- 115 直訳「負いめのある人たち」
- 116 直訳「私は見ていない」
- 117 「よし」は補足
- 118 「あなた」の前に、女の人に対する呼びかけ語「ギユナイ」がある
- 119 一サトンは一三リットル
- 120 直訳「あなたの前で」
- 121 直訳「見よ」
- 122 異本に「ろば」とするものがある
- 123 直訳「末席に着くために動き始める」
- 124 直訳「友よ」
- 125 直訳「共に席に着いている全員の前で」
- 126 直訳「お願いいたします」

[127](#) 直訳「お願いいたします」

[128](#) あるいは「大使」

[129](#) 直訳「彼らはそれを外に投げ捨ててしまいます」

[130](#) 直訳「荒野」

[131](#) ギリシヤ語「ドラクマ」

[132](#) 直訳「の前に」

[133](#) 直訳「首を抱きかかえて」

[134](#) 直訳「何度も何度も口づけした」

[135](#) 異本に「私をあなたの雇い人のひとりのようにしてください」を加えるものがある

[136](#) あるいは「に従わなかった」

[137](#) 一バテは三七リットル

[138](#) 一コルは三七〇リットル

[139](#) 異本「私たち自身のもの」

[140](#) あるいは「罪の誘惑」

[141](#) 直訳「従ったことでしょう」

[142](#) 直訳「食卓に着きなさい」

[143](#) 異本に三六節として、「ふたりの男が畑にいと、ひとりには取られ、他のひとりには残されます」を加えるものもある

[144](#) あるいは「驚」

[145](#) あるいは「敬わない」

[146](#) 直訳「私の敵に対して、私を正当に扱ってください」

[147](#) 直訳「彼女を正当に扱うことにしよう」

[148](#) 直訳「私の目の下を打ちたたく」

[149](#) 原語では「信仰」に定冠詞がついている

[150](#) 直訳「良い」

[151](#) 直訳「自分たちの物」

[152](#) あるいは「裏切られ」

[153](#) あるいは「宿を取られた」

[154](#) 直訳「彼らの間でつぶやいた」

[155](#) 一ミナは約百日分の労賃に相当する額

[156](#) 直訳「私が出かけている間」

[157](#) 参照ルカー九・一三注

[158](#) 参照ルカー九・一三注

[159](#) 直訳「あなた自身の口によって」

[160](#) あるいは「オリーブの森」

[161](#) あるいは「丘」

[162](#) 直訳「主人たち」

[163](#) 「神の」は補足

[164](#) 直訳「ほら穴」

[165](#) 直訳「彼に」

[166](#) あるいは「小作人」（九、一〇、一四、一六節も同様）

[167](#) 直訳「来て」

[168](#) あるいは「許されている」

- [169](#) 一デナリは当時の一日の労賃に相当する
- [170](#) すなわち「メシヤ」
- [171](#) レプトタは一デナリの一八分の一に相当する最小単位の銅貨
- [172](#) 別訳「石が.....石の上に」
- [173](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [174](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [175](#) 直訳「あなたがたにとって一つのあかしとなります」
- [176](#) 直訳「口」
- [177](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [178](#) 別訳「世代」
- [179](#) あるいは「オリーブの森」
- [180](#) あるいは「騒ぎを起こさないで」
- [181](#) 異本に四三、四四節を欠くものもある
- [182](#) あるいは「少なくともわたしにこのことをさせてもらいたい」
- [183](#) ギリシヤ語「サンヘドリン」
- [184](#) すなわち「メシヤ」
- [185](#) あるいは「有罪とする理由」
- [186](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [187](#) 直訳「多くのことばで」
- [188](#) あるいは「有罪とする理由」
- [189](#) 異本 一七節「さて、ピラトは祭りのときにひとりを彼らのために釈放してやらなければならなかった」を挿入する
- [190](#) あるいは「有罪とする理由」
- [191](#) 直訳「胸をたたき」
- [192](#) 異本に「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。...自分でわからないのです。』」を欠くものがある
- [193](#) すなわち「メシヤ」
- [194](#) 直訳「第六時」
- [195](#) 直訳「第九時」
- [196](#) 直訳「明けようとしていた」
- [197](#) 異本「ここには...よみがえられたのです」を欠く
- [198](#) 直訳「彼らの前には」
- [199](#) 異本 一二節を欠く
- [200](#) 原語「六〇スタディオン」一スタディオンは一八五メートル
- [201](#) 別訳「あなたはエルサレムにたったひとりで滞在していて、近ごろそこで起こった事を知らなかったのですか」
- [202](#) 直訳「聞いてくださった」
- [203](#) 異本「そして彼らに言われた。『あなたがたに平安があるように。』」を加える
- [204](#) 異本に四〇節「イエスはこう言われて、その手と足を彼らにお示しになった」を加えるものもある
- [205](#) 異本「悔い改めと罪の赦しが...」
- [206](#) 異本「そして、天に上げられた」を加える
- [207](#) 異本「イエスを拝し、そして...」を加える
- [208](#) 直訳「祝福していた」

# ヨハネの福音書

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)

[十一章](#) [十二章](#) [十三章](#) [十四章](#) [十五章](#)

[一六章](#) [一七章](#) [一八章](#) [一九章](#) [二〇章](#)

[二一章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 <sup>はじ</sup>初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。
- 2 この方は、<sup>はじ</sup>初めに神とともに**おられた**。
- 3 すべてのものは、この方によって**造られた**。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。
- 4 この方にいの**ち**があった。このいのち**は**人の光であった。
- 5 光はやみの中に輝いている。<sup>2</sup>やみはこれに打ち勝たなかった。
- 6 神から遣わされたヨハネという人が現れた。
- 7 この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。
- 8 彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである。
- 9 すべての人を照らすそのまことの光が世に<sup>3</sup>来ようとしていた。
- 10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって**造られた**のに、世はこの方を知らなかった。
- 11 この方は<sup>4</sup>ご自分のく**に**に**来られた**のに、<sup>5</sup>ご自分の民は受け入れなかった。
- 12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる**特権**をお与えになった。
- 13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。
- 14 ことばは<sup>6</sup>人となって、私たちの間に**住まわれた**。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから**来られた**ひとり子としての<sup>7</sup>栄光である。この方は**恵み**とまことに満ちて**おられた**。
- 15 ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。「『私のあとから来る方は、<sup>8</sup>私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです。』
- 16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、<sup>9</sup>恵みの上にさらに恵みを受けたのである。
- 17 というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。
- 18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の<sup>10</sup>神が、神を説き明かされたのである。
- 19 ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、「あなたはどなたですか」と尋ねさせた。
- 20 彼は告白して否まず、「私は<sup>11</sup>キリストではありません」と言明した。
- 21 また、彼らは聞いた。「では、いったい何ですか。あなたはエリヤですか。」彼は言った。「そうではありません。」「あなたはあの預言者ですか。」彼は答えた。「違います。」
- 22 そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちを遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」
- 23 彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまつすぐにせよ』と**荒野で叫んでいる者の声**です。」
- 24 彼らは、パリサイ人の中から遣わされたのであった。
- 25 彼らはまた尋ねて言った。「キリストでもなく、エリヤでもなく、またあの預言者でもないなら、なぜ、あなたはバプテスマを授けているのですか。」
- 26 ヨハネは答えて言った。「私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立っておられます。
- 27 その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」
- 28 この事があったのは、ヨルダンの向こう岸のバタニヤであって、ヨハネはそこでバプテスマを授けていた。
- 29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。
- 30 私が『私のあとから来る人がある。その方は<sup>12</sup>私にまさる方である。私より先におられたからだ』と言ったのは、この方のことです。
- 31 私もこの方を<sup>13</sup>知りませんでした。しかし、この方がイスラエルに明らかにされるために、私は来て、水でバプテスマを授けているのです。」
- 32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。
- 33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』
- 34 私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」



- 35 その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、
- 36 イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊」と言った。
- 37 ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。
- 38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ（訳して言えば、先生）。今どこにお泊まりですか。」
- 39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らはついて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らは<sup>14</sup>イエスといっしょにいた。時は<sup>15</sup>第十時ごろであった。
- 40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。
- 41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちは<sup>16</sup>メシヤ（訳して言えば、キリスト）に会った」と言った。
- 42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたを<sup>17</sup>ケパ（訳すとペテロ）と呼ぶことにします。」
- 43 その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて「わたしに従って来なさい」と言われた。
- 44 ピリポは、ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった。
- 45 彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」
- 46 ナタナエルは彼に言った。「ナザレから何の良いものが出るだろう。」ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」
- 47 イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」
- 48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」
- 49 ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」
- 50 イエスは答えて言われた。「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることになります。」
- 51 そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」

## 二章

- 1 それから三日目に、ガリラヤのカナで<sup>こん れい</sup>婚禮があつて、そこにイエスの母がいた。
- 2 イエスも、また弟子たちも、その婚禮に招かれた。
- 3 ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かつて「ぶどう酒がありません」と言った。
- 4 すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」
- 5 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」
- 6 さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ<sup>18</sup>八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあつた。
- 7 イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。
- 8 イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところに行って行きなさい。」彼らは持つて行つた。
- 9 宴会の世話役はぶどう酒になつたその水を味わつてみた。それがどこから来たのか、知らなかつたので、——しかし、水をくんだ手伝い<sup>はじ</sup>の者たちは知つていた——彼は、花婿を呼んで、
- 10 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、人々が<sup>19</sup>十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取つておきました。」
- 11 イエスはこのことを最初の<sup>20</sup>しるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。
- 12 その後、イエスは母や兄弟たちや弟子たちといつしよに、カペナウムに下つて行き、長い日数ではなかつたが、そこに滞在された。
- 13 ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。
- 14 そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわつているのをご覧になり、
- 15 細なわでむちを作つて、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、
- 16 また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持つて行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」
- 17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。
- 18 そこで、ユダヤ人たちが答えて言つた。「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちに現してくれるのですか。」
- 19 イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」
- 20 そこで、ユダヤ人たちは言つた。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」
- 21 しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。
- 22 それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。
- 23 イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。
- 24 しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかつた。なぜなら、イエスはすべての人を知つておられたからであり、
- 25 また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知つておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかつたからである。

### 三章

- 1 さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。
- 2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」
- 3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、<sup>21</sup>新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」
- 4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎<sup>たい</sup>に入<sup>はい</sup>って生まれることができましようか。」
- 5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>によって生まれなければ、神の国に入<sup>はい</sup>ることができません。」
- 6 肉によって生まれた者は肉です。御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>によって生まれた者は霊<sup>れい</sup>です。
- 7 あなたがたは<sup>22</sup>新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っ<sup>おも</sup>てはなりません。
- 8 風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞<sup>き</sup>くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>によって生まれる者もみな、そのとおりです。」
- 9 ニコデモは答えて言った。「どうして、そのようなことがありうるのでしょうか。」
- 10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こうい<sup>き</sup>ょうい<sup>よう</sup>ことがわからないのですか。
- 11 まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知<sup>し</sup>っていることを話<sup>わ</sup>し、見<sup>み</sup>たことをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。
- 12 あなたがたは、わたしが地上のことを話<sup>わ</sup>したとき、信<sup>し</sup>じないくらいなら、天上のことを話<sup>わ</sup>したとて、どうして信<sup>し</sup>じるでしょう。
- 13 だれも天に上<sup>あ</sup>った者はいません。しかし天から下<sup>くだ</sup>った者はいます。すなわち<sup>23</sup>人の子です。
- 14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上<sup>あ</sup>げられなければなりません。
- 15 それは、信<sup>し</sup>じる者がみな、<sup>24</sup>人の子にあつて永遠<sup>えいゑん</sup>のいのちを持つためです。」<sup>25</sup>
- 16 神は、実に、その<sup>26</sup>ひとり子をお与<sup>あた</sup>えになったほどに、世<sup>あゐ</sup>を愛<sup>あい</sup>された。それは御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>を信<sup>し</sup>じる者が、ひとりとして滅<sup>ほろ</sup>びることなく、永遠<sup>えいゑん</sup>のいのちを持つためである。
- 17 神が御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>を世<sup>よ</sup>に遣<sup>つか</sup>わされたのは、世<sup>よ</sup>をさばくためではなく、御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>によって世<sup>よ</sup>が救<sup>きう</sup>われるためである。
- 18 御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>を信<sup>し</sup>じる者はさばかれない。信<sup>し</sup>じない者は神の<sup>27</sup>ひとり子の御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>を信<sup>し</sup>じなかつたので、すでにさばかれています。
- 19 そのさばきというのは、こうである。光が世<sup>よ</sup>に來<sup>き</sup>ているのに、人々は光よりもやみ<sup>あゐ</sup>を愛<sup>あい</sup>した。その行<sup>い</sup>いが悪<sup>あく</sup>かつたからである。
- 20 悪いことをする者は光を憎<sup>にく</sup>み、その行<sup>い</sup>いが明<sup>あ</sup>るみに出<sup>で</sup>されることを恐<sup>おそ</sup>れて、光のほうに來<sup>き</sup>ない。
- 21 しかし、真理を行<sup>い</sup>う者は、光のほうに來<sup>き</sup>る。その行<sup>い</sup>いが神にあつてなされたこと<sup>こと</sup>が明<sup>あ</sup>らかにされるためである。
- 22 その後、イエスは弟子たちと、ユダヤの地に行<sup>い</sup>き、彼らとともにそこに滞<sup>あゐ</sup>在<sup>ざい</sup>して、バプテスマを授<sup>あづ</sup>けておられた。
- 23 一方ヨハネもサリムに近いアイノンでバプテスマを授<sup>あづ</sup>けていた。そこには水が多かつたからである。人々は次々にや<sup>や</sup>つて來<sup>き</sup>て、バプテスマを受け<sup>う</sup>けていた。
- 24 —ヨハネは、まだ投<sup>とう</sup>獄<sup>ごく</sup>されていなかったからである—
- 25 それで、ヨハネの弟子たちが、あるユダヤ人ときよめについて論<sup>ろん</sup>議<sup>ぎ</sup>した。
- 26 彼らはヨハネのところに來<sup>き</sup>て言<sup>い</sup>った。「先生。見てください。ヨルダンの向<sup>むか</sup>う岸<sup>ぎし</sup>であな<sup>なん</sup>たといつしよにいて、あなたが証<sup>しやうげん</sup>言<sup>げん</sup>なさつたあの方が、バプテスマを授<sup>あづ</sup>けておられます。そして、みなあの方のほうへ行<sup>い</sup>きます。」
- 27 ヨハネは答えて言<sup>い</sup>った。「人は、天から与<sup>あた</sup>えられるのでなければ、何<sup>なん</sup>も受<sup>う</sup>けることはできません。
- 28 あなたがたこそ、『私はキリストではなく、その前<sup>まへ</sup>に遣<sup>つか</sup>わされた者である』と私が言<sup>い</sup>つたこと<sup>こと</sup>の証<sup>しやうにん</sup>人<sup>にん</sup>です。
- 29 花嫁を迎<sup>むか</sup>える者は花婿<sup>はなむこ</sup>です。そこにいて、花婿<sup>はなむこ</sup>のこ<sup>こ</sup>とばに耳<sup>みみ</sup>を傾<sup>かたむ</sup>けているその友人<sup>ゆうじん</sup>は、花婿<sup>はなむこ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>を聞<sup>き</sup>いて大<sup>おほ</sup>いに喜<sup>よろこ</sup>びます。それで、私もその喜<sup>よろこ</sup>びで満<sup>み</sup>たされてい<sup>い</sup>るのです。
- 30 あの方は盛<sup>さか</sup>んになり私は衰<sup>おとろ</sup>えなければなりません。」<sup>28</sup>
- 31 上から來<sup>き</sup>る方は、すべてのものの上におられ、地から出<sup>で</sup>る者は地<sup>ち</sup>に属<sup>ぞく</sup>し、地のこ<sup>こ</sup>とばを話<sup>わ</sup>す。天から來<sup>き</sup>る方は、すべてのものの上におられる。
- 32 この方は見<sup>み</sup>たこと、また聞<sup>き</sup>いたことをあかしされるが、だれもそのあかし<sup>あかし</sup>を受け入れない。
- 33 そのあかしを受け入れた者は、神は真<sup>ま</sup>実<sup>じつ</sup>であるということに確<sup>かく</sup>認<sup>にん</sup>の印<sup>いん</sup>を押<sup>お</sup>したのである。
- 34 神がお遣<sup>つか</sup>わしになった方は、神のこ<sup>こ</sup>とばを話<sup>わ</sup>される。神が<sup>29</sup>御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>を無<sup>む</sup>限<sup>げん</sup>に与<sup>あた</sup>えられるからである。
- 35 父は御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>を愛<sup>あい</sup>しておられ、万物を御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>の手にお渡<sup>わた</sup>しになった。

36 <sup>み こ</sup>御子を信じる者は永遠<sup>えいえん</sup>のいのちを持つが、御子<sup>み こ</sup>に聞き従<sup>したが</sup>わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒<sup>いか</sup>りがその上にとどまる。

## 四章

- 1 イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがバリサイ人の耳に入<sup>びと</sup>った。それを主が知られたとき、
- 2 ―イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであつたが――
- 3 主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。
- 4 しかし、サマリヤを通して行かなければならなかつた。
- 5 それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に來られた。
- 6 そこにはヤコブの井戸があつた。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は<sup>30</sup>第六時ごろであつた。
- 7 ひとりのサマリヤの女が水をくみに來た。イエスは「わたしに水を飲ませてください」と言われた。
- 8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。
- 9 そこで、そのサマリヤの女は言つた。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」――ユダヤ人はサマリヤ人と同じあいをしなかつたからである――
- 10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに<sup>31</sup>生ける水を与えたことでしょう。」
- 11 彼女は言つた。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。」
- 12 あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。」
- 13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。
- 14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」
- 15 女はイエスに言つた。「<sup>32</sup>先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに來なくてもよいように、その水を私に下さい。」
- 16 イエスは彼女に言われた。「行つて、あなたの夫をここに呼んで來なさい。」
- 17 女は答えて言つた。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もつともです。
- 18 あなたには夫が五人あつたが、今あなたといつしよにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言つたことはほんとうです。」
- 19 女は言つた。「<sup>33</sup>先生。あなたは預言者だと思います。」
- 20 私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」
- 21 イエスは彼女に言われた。「<sup>34</sup>わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が來ます。
- 22 救いはユダヤ人から出るのですから、わたしたちは知つて礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。
- 23 しかし、眞の礼拝者たちが靈とまことによつて父を礼拝する時が來ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。
- 24 神は靈ですから、神を礼拝する者は、靈とまことによつて礼拝しなければなりません。」
- 25 女はイエスに言つた。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの來られることを知っています。その方が來られるときには、いつさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」
- 26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」
- 27 このとき、弟子たちが歸つて來て、イエスが女の人と話しておられるのを不思議に思つた。しかし、だれも、「何を求めておられるのですか」とも、「なぜ彼女と話しておられるのですか」とも言わなかつた。
- 28 女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言つた。
- 29 「來て、見てください。私のしたこと全部を私に言つた人がいるのです。この方が<sup>35</sup>キリストなのでしょうか。」
- 30 そこで、彼らは町を出て、イエスのほうへやつて來た。
- 31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください」とお願いした。
- 32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」
- 33 そこで、弟子たちは互いに言つた。「だれか食べる物を持って來たのだろうか。」
- 34 イエスは彼らに言われた。「わたしを遣<sup>め</sup>わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。
- 35 あなたがたは、『刈り入れ時が來るまでに、まだ四か月ある』と言つてはいませんか。さあ、わたしの言うことを

聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。

36 <sup>36</sup>すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。

37 こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。

38 わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」

39 さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。

40 そこで、サマリヤ人たちはイエスのところに来たとき、自分たちのところに滞在してくださるように願った。そこでイエスは二日間そこに滞在された。

41 そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。

42 そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」

43 さて、二日の後、イエスはここを去って、ガリラヤへ行かれた。

44 イエスご自身が、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言しておられたからである。

45 そういうわけで、イエスがガリラヤに行かれたとき、ガリラヤ人はイエスを歓迎した。彼らも祭りに行っていたので、イエスが祭りの間にエルサレムでなさったすべてのことを見ていたからである。

46 イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた。

47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやしてくださるように願った。息子が死にかかっていたからである。

48 そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」

49 その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死ないうちに下って来ててください。」

50 イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。

51 彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。

52 そこで子どもがよくなった時刻を彼らに尋ねると、「きのう、<sup>37</sup>第七時に熱がひきました」と言った。

53 それで父親は、イエスが「あなたの息子は直っている」と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。

54 イエスはユダヤを去ってガリラヤに入られてから、またこのことを第二のしるしとして行われたのである。

## 五章

- 1 その後、ユダヤ人の<sup>38</sup>祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。
- 2 さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語で<sup>39</sup>ベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。
- 3 その中に大ぜいの病人、盲人、足のなえた者、やせ衰えた者たちが伏せていた。<sup>40</sup>
- 5 そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。
- 6 イエスは彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたいか。」
- 7 病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」
- 8 イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」
- 9 すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。
- とところが、その日は安息日であった。
- 10 そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない。」
- 11 しかし、その人は彼らに答えた。「私を直してくださった方が、『床を取り上げて歩け』と言われたのです。」
- 12 彼らは尋ねた。「『取り上げて歩け』と言った人はだれだ。」
- 13 しかし、いやされた人は、それがだれであるか知らなかった。人が大ぜいそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。
- 14 その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたはよくなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから。」
- 15 その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を直してくれた方はイエスだと告げた。
- 16 このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。イエスが安息日にこのようなことをしておられたからである。
- 17 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」
- 18 このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。
- 19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様にを行うのです。」
- 20 それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子におしになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。
- 21 父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。
- 22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。
- 23 それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。
- 24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。
- 25 まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。
- 26 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。
- 27 また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は<sup>41</sup>人の子だからです。
- 28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。
- 29 善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。
- 30 わたしは、自分からは何事も行うことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。
- 31 もしわたし<sup>42</sup>だけが自分のことを証言するのなら、わたしの証言は<sup>43</sup>真実ではありません。
- 32 わたしについて証言する方がほかにあるのです。その方のわたしについて証言される証言が<sup>44</sup>真実であることは、わたしが知っています。
- 33 あなたがたは、ヨハネのところに人をやりましたが、彼は真理について証言しました。
- 34 といっても、わたしは人の証言を受けるではありません。わたしは、あなたがたが救われるために、そのことを言うのです。
- 35 彼は燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で楽しむことを願ったのです。

- 36 しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです。
- 37 また、わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたこともなく、御姿を見たこともありません。
- 38 また、そのみことばをあなたがたのうちにとどめてもいません。父が遣わした者をあなたがたが信じないからです。
- 39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、45聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。
- 40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。
- 41 わたしは人からの栄誉は受けません。
- 42 ただ、わたしはあなたがたを知っています。あなたがたのうちには、神の愛がありません。
- 43 わたしはわたしの父の名によって来ましたが、あなたがたはわたしを受け入れません。ほかの人がその人自身の名において来れば、あなたがたはその人を受け入れるのです。
- 44 互いの46栄誉は受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたは、どうして信じることができますか。
- 45 わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思っではなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みをおいているモーセです。
- 46 もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。
- 47 しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。」



## 六章

- 1 その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、テベリヤの湖の向こう岸へ行かれた。
- 2 大ぜいの人の群れがイエスにつき従っていた。それはイエスが病人たちになさっていた<sup>47</sup>しるしを見たからである。
- 3 イエスは山に登り、弟子たちとともにそこにすわられた。
- 4 さて、ユダヤ人の祭りである過越が間近になっていた。
- 5 イエスは目を上げて、大ぜいの人の群れがご自分のほうに来るのを見て、ビリポに言われた。「どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。」
- 6 もっとも、イエスは、ビリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。
- 7 ビリポはイエスに答えた。「めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」
- 8 弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。
- 9 「ここに少年が大麦のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう。」
- 10 イエスは言われた。「人々をすわらせなさい。」その場所には草が多かった。そこで男たちは<sup>48</sup>すわった。その数はおよそ五千人であった。
- 11 そこで、イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしただけ分けられた。
- 12 そして、彼らが十分食べたとき、弟子たちに言われた。「余ったパン切れを、一つもむだに捨てないように集めなさい。」
- 13 彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出て来たパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。
- 14 人々は、イエスのなさったしるしを見て、「まことに、この方こそ、世に來られるはずの預言者だ」と言った。
- 15 そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行こうと<sup>49</sup>しているのを知って、ただひとり、また山に退かれた。
- 16 夕方になって、弟子たちは湖畔に降りて行つた。
- 17 そして、舟に乗り込み、カペナウムのほうへ湖を渡っていた。すでに暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。
- 18 湖は吹きまくる強風に荒れ始めた。
- 19 こうして、<sup>50</sup>四、五キロメートルほどこぎ出したころ、彼らは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて來られるのを見て、恐れた。
- 20 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。<sup>51</sup>恐れることはない。」
- 21 それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。舟はほどなく目的の地に着いた。
- 22 その翌日、湖の向こう岸にいた群衆は、そこには小舟が一隻あっただけで、ほかにはなかったこと、また、その舟にイエスは弟子たちといっしょに乗られないで、弟子たちだけが行つたということに気づいた。
- 23 しかし、主が感謝をささげられてから、人々がパンを食べた場所の近くに、テベリヤから数隻の小舟が来た。
- 24 群衆は、イエスがそこにおられず、弟子たちもいないことを知ると、自分たちもその小舟に乗り込んで、イエスを捜してカペナウムに來た。
- 25 そして湖の向こう側でイエスを見つけたとき、彼らはイエスに言った。「先生。いつここにおいでになりましたか。」
- 26 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」
- 27 なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなただたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。」
- 28 すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」
- 29 イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じることで、それが神のわざです。」
- 30 そこで彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるために、しるしとして何をしてくださいますか。どのようなことをなさいますか。」
- 31 私たちの父祖たちは荒野でマナを食べました。『彼は彼らに天からパンを与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」
- 32 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたわけではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。」

- 33 というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与える<sup>あた</sup>52ものだからです。」
- 34 そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与え<sup>あた</sup>ください。」
- 35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことがありません。」
- 36 しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと、わたしはあなたがたに言いました。
- 37 父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。
- 38 わたしが天から下って来たのは、自分のところを行うためではなく、わたしを遣わした方のみところを行うためです。
- 39 わたしを遣わした方のみところは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。
- 40 事実、わたしの父のみところは、子を見て信じる者がみな永遠<sup>えいえん</sup>のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」
- 41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンである」と言われたので、イエスについてつぶやいた。
- 42 彼らは言った。「あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている、そのイエスではないか。どうしていま彼は『わたしは天から下って来た』と言うのか。」
- 43 イエスは彼らに答えて言われた。「互<sup>たが</sup>いにつぶやくのはやめなさい。
- 44 わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。
- 45 預言者<sup>よげんし</sup>の書に、『そして、彼らはみな神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのところに来ます。
- 46 だれも父を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。
- 47 まことに、まことに、あなたがたに告げます。53信じる者は永遠<sup>えいえん</sup>のいのちを持ちます。
- 48 わたしはいのちのパンです。
- 49 あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。
- 50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。
- 51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠<sup>えいえん</sup>に生きます。またわたしが与えようとするパンは、54世のいのちのための、わたしの肉です。」
- 52 すると、ユダヤ人たちは、「この人は、どのようにしてその肉を私たちに与えて食べさせることができるのか」と言って互<sup>たが</sup>いに議論<sup>ぎろん</sup>し合った。
- 53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。
- 54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠<sup>えいえん</sup>のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。
- 55 わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。
- 56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。
- 57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。
- 58 これは天から下って来たパンです。あなたがたの父祖たちが食べて死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠<sup>えいえん</sup>に生きます。」
- 59 これは、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである。
- 60 そこで、弟子たちのうちの多くの者が、これを聞いて言った。「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか。」
- 61 しかし、イエスは、弟子たちがこうつぶやいているのを、知っておられ、彼らに言われた。「このことであなたがたはつまずくのか。
- 62 それでは、もし人の子がもいた所に上るのを見たら、どうなるのか。
- 63 いのちを与えるのは御霊<sup>みたま</sup>です。肉は何の益<sup>えき</sup>ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことは、霊<sup>れい</sup>であり、またいのちです。
- 64 しかし、あなたがたのうちには信じない者がいます。」——イエスは初めから、信じない者がだれであるか、55裏切る者がだれであるかを、知っておられたのである——
- 65 そしてイエスは言われた。「それだから、わたしはあなたがたに、『父のみところによるのでないかぎり、だれもわたしのところに来ることにはできない』と言ったのです。」
- 66 こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去って行き、もはやイエスとともに歩かなかった。

- 67 そこで、イエスは十二弟子<sup>でし</sup>に言われた。「まさか、あなたがたも離れたいと思うのではないでしょう。<sup>はな</sup>」
- 68 すると、シモン・ペテロが答えた。「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠<sup>えいえん</sup>のいのちのことばを持っておられます。
- 69 私たちは、あなたが神の聖者<sup>せいじや</sup>であることを信じ、また知っています。」
- 70 イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがた十二人を選んだ<sup>あぐま</sup>ではありませんか。しかしそのうちのひとり  
は悪魔<sup>あくま</sup>です。」
- 71 イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子<sup>でし</sup>のひとりであったが、イエスを<sup>56</sup>売ろうとしていた。

## 七章

- 1 その後、イエスはガリラヤを巡<sup>めぐ</sup>っておられた。それは、ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡<sup>めぐ</sup>りたいとは思われなかったからである。
- 2 さて、仮庵<sup>かりいお</sup>の祭りというユダヤ人の祝<sup>かく</sup>いが近づいていた。
- 3 そこで、イエスの兄弟たちはイエスに向かつて言った。「あなたの弟子たちもあなたがしているわざを見ることができるよう<sup>で</sup>に、ここを去<sup>おと</sup>ってユダヤに行きなさい。
- 4 自分から 公<sup>おおやけ</sup>の場に出たいと思いながら、隠れた所で事を行う者はありません。あなたがこれらの事を行うのなら、自分を世に現しなさい。」
- 5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。
- 6 そこでイエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも来ているのです。
- 7 世はあなたがたを憎<sup>にく</sup>むことはできません。しかしわたしを憎<sup>にく</sup>んでいます。わたしが、世について、その行いが悪いことをあかしするからです。
- 8 あなたがたは祭りに上<sup>あ</sup>って行きなさい。わたしはこの祭りには<sup>57</sup>行きません。わたしの時がまだ満ちていないからです。」
- 9 こう言<sup>い</sup>って、イエスはガリラヤにとどまられた。
- 10 しかし、兄弟たちが祭りに上<sup>あ</sup>ったとき、イエスご自身も、公<sup>おおやけ</sup>ではなく、いわば内密<sup>ないみつ</sup>に上<sup>あ</sup>って行かれた。
- 11 ユダヤ人たちは、祭りのとき、「あの方はどこにおられるのか」と言<sup>い</sup>って、イエスを捜<sup>さが</sup>していた。
- 12 そして<sup>58</sup>群衆<sup>ぐんしゅう</sup>の間には、イエスについて、いろいろとひそひそ話<sup>わ</sup>がされていた。「良い人だ」と言う者もあり、「違<sup>ちが</sup>う。群衆<sup>ぐんしゅう</sup>を惑<sup>ご</sup>わしているのだ」と言う者もいた。
- 13 しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然<sup>こうぜん</sup>と語る者はひとりもいなかった。
- 14 しかし、祭りもすでに中ごろにな<sup>な</sup>ったとき、イエスは宮に上<sup>あ</sup>って教<sup>おし</sup>え始められた。
- 15 ユダヤ人たちは驚<sup>おどろ</sup>いて言<sup>い</sup>った。「この人は正規<sup>せいぎ</sup>に学んだことがないのに、どうして学問があるのか。」
- 16 そこでイエスは彼らに答<sup>こた</sup>えて言<sup>い</sup>われた。「わたしの教<sup>おし</sup>えは、わたしのものではなく、わたしを遣<sup>つか</sup>わした方のものです。
- 17 だれでも神のみこころを行おうと願<sup>ねが</sup>うなら、その人には、この教<sup>おし</sup>えが神から出たものか、わたしが自分から語<sup>かた</sup>っているのかがわかります。
- 18 自分から語る者は、自分の栄光<sup>ようこう</sup>を求めます。しかし自分を遣<sup>つか</sup>わした方の栄光<sup>ようこう</sup>を求める者は真実であり、その人には不正がありません。
- 19 モーセがあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守<sup>もつ</sup>っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺<sup>ころ</sup>そうとするのですか。」
- 20 群衆<sup>ぐんしゅう</sup>は答<sup>こた</sup>えた。「あなたは<sup>59</sup>悪霊<sup>あくれい</sup>につかれています。だれがあなたを殺<sup>ころ</sup>そうとしているのですか。」
- 21 イエスは彼らに答<sup>こた</sup>えて言<sup>い</sup>われた。「わたしは一つの<sup>60</sup>わざをしました。それであなたがたはみな驚<sup>おどろ</sup>いています。
- 22 モーセはこのためにあなたがたに割<sup>かつ</sup>礼<sup>れい</sup>を与<sup>たま</sup>えました。——ただし、それはモーセから始<sup>はじ</sup>まったのではなく、父祖<sup>ふそ</sup>たちからです——それで、あなたがたは安息日にも人に割<sup>かつ</sup>礼<sup>れい</sup>を施<sup>ほどこ</sup>しています。
- 23 もし、人がモーセの律法が破<sup>やぶ</sup>られないようにと、安息日にも割<sup>かつ</sup>礼<sup>れい</sup>を受けるのなら、わたしが安息日<sup>あんそくにち</sup>に人の全身<sup>しんしん</sup>をすこやかにしたからといって、何でわたしに腹<sup>はら</sup>を立てるのですか。
- 24 うわべによって人をさばかないで、<sup>61</sup>正しいさばきをしなさい。」
- 25 そこで、エルサレムのある人たちが言<sup>い</sup>った。「この人は、彼らが殺<sup>ころ</sup>そうとしている人ではないか。
- 26 見なさい。この人は公然<sup>こうぜん</sup>と語<sup>かた</sup>っているのに、彼らはこの人に何も言<sup>い</sup>わない。議員<sup>ぎいん</sup>たちは、この人が<sup>62</sup>キリストであることを、ほんとうに知<sup>し</sup>ったのだろうか。
- 27 けれども、私たちはこの人がどこから来たのか知<sup>し</sup>っている。しかし、キリストが来られるとき、それが、どこから知<sup>し</sup>っている者はだれもないのだ。」
- 28 イエスは、宮で教<sup>おし</sup>えておられるとき、大声<sup>おほこゑ</sup>をあげて言<sup>い</sup>われた。「あなたがたはわたしを知<sup>し</sup>っており、また、わたしがどこから来たかも知<sup>し</sup>っています。しかし、わたしは自分で来たではありません。わたしを遣<sup>つか</sup>わした方は真実です。あなたがたは、その方<sup>かた</sup>を知らないのです。
- 29 わたしはその方<sup>かた</sup>を知<sup>し</sup>っています。なぜなら、わたしはその方<sup>かた</sup>から出たのであり、その方<sup>かた</sup>がわたしを遣<sup>つか</sup>わしたからです。」
- 30 そこで人々はイエスを捕<sup>と</sup>らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである。
- 31 群衆<sup>ぐんしゅう</sup>のうちの多くの者がイエスを信じて言<sup>い</sup>った。「キリストが来られても、この方がしているよりも多くのしるしを行われるだろうか。」
- 32 パリサイ人は、群衆<sup>ぐんしゅう</sup>がイエスについてこのようなことをひそひそと話<sup>わ</sup>しているのを耳<sup>みみ</sup>にした。それで祭司長<sup>さいしちょう</sup>、パ

リサイ人たちは、イエスを捕らえようとして、役人たちを遣わした。

33 そこでイエスは言われた。「まだしばらくの間、わたしはあなたがたといっしょにいて、それから、わたしを遣わした方のもとに行きます。」

34 あなたがたはわたしを捜すが、見つからないでしょう。また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。」

35 そこで、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには、見つからないという。それならあの人はどこへ行こうとしているのか。まさかギリシヤ人の中に離散している人々のところへ行行って、ギリシヤ人を教えるつもりではあるまい。」

36 『あなたがたはわたしを捜すが、見つからない』、また『わたしのいる所にあなたがたは来ることができない』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」

37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、63わたしのもとに来て飲みなさい。」

38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の64心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊は65まだ注がれていなかったからである。

40 このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、「あの方は、確かにあの預言者なのだ」と言い、

41 またある者は、「この方は66キリストだ」と言った。またある者は言った。「まさか、67キリストはガリラヤからは出ないだろう。」

42 キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」

43 そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった。

44 その中にはイエスを捕らえたいと思った者もいたが、イエスに手をかけた者はなかった。

45 それから役人たちは祭司長、パリサイ人たちのもとに帰って来た。彼らは役人たちに言った。「なぜあの人を連れて来なかったのか。」

46 役人たちは答えた。「あの方が話すように話した人は、いまだかつてありません。」

47 すると、パリサイ人が答えた。「おまえたちも惑わされているのか。」

48 議員とかパリサイ人のうちで、だれかイエスを信じた者があつたか。

49 だが、律法を知らないこの群衆は、のろわれている。」

50 彼らのうちのひとり、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。

51 「私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。」

52 彼らは答えて言った。「あなたもガリラヤの出身なのか。調べてみなさい。ガリラヤから預言者は起こらない。」

53 68〔そして人々はそれぞれ家に帰った。〕

# 八章

1 イエスはオリブ山に行かれた。

2 そして、朝早く、イエスはもう一度宮に入られた。民衆はみな、みもとに寄つて来た。イエスはすわって、彼らに教え始められた。

3 すると、律法学者とパリサイ人が、姦淫<sup>かんいん</sup>の場で捕らえられたひとりの女を連れて来て、真ん中に置いてから、

4 イエスに言った。「先生。この女は姦淫<sup>かんいん</sup>の現場でつかまえられたのです。

5 モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」

6 彼らはイエスをためてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。

7 けれども、彼らが問いつけてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」

8 そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。

9 彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。

10 イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」

11 彼女は言った。「<sup>69</sup>だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」

12 イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

13 そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言<sup>しょうげん</sup>しています。だから、あなたの証言は<sup>70</sup>真実ではありません。」

14 イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。」

15 あなたがたは<sup>71</sup>肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。

16 しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした<sup>72</sup>父とが<sup>73</sup>さばくのだからです。

17 あなたがたの律法にも、ふたりの証言は<sup>74</sup>真実であると書かれています。

18 わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについてあかしされます。」

19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしをも、わたしの父をも知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたでしょう。」

20 イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

21 イエスはまた彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」

22 そこで、ユダヤ人たちは言った。「あの人は『わたしが行く所に、あなたがたは来ることができない』と言うが、自殺するつもりなのか。」

23 それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。」

24 それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、<sup>75</sup>わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」

25 そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれですか。」イエスは言われた。「それは初めからわたしがあなたがたに<sup>76</sup>話そうとしていることです。

26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であって、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです。」

27 彼らは、イエスが父のことを語っておられたことを悟らなかった。

28 イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、<sup>77</sup>わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。」

29 わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり<sup>78</sup>残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行うからです。」

30 イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。

31 そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、



あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。

32 そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

33 彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であって、決してだれの奴隷になったこともありません。あなたはどのように、『あなたがたは自由になる』と言われるのですか。」

34 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。」

35 奴隷はいつまでも家にいるのではありません。しかし、息子はいつまでもいます。

36 ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。

37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。

38 わたしは<sup>79</sup>父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行うのです。」

39 彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい。

40 ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。

41 あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っています。」彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神があります。」

42 イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいますからです。わたしは自分で来たのではなく、<sup>80</sup>神がわたしを遣わしたのです。

43 あなたがたは、なぜわたしの<sup>81</sup>話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。

44 あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。彼のうちには真理がないからです。<sup>82</sup>彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。

45 しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。

46 あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。

47 神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」

48 ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか。」

49 イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかれてはいません。わたしは父を敬っています。しかしあなたがたは、わたしを卑しめています。」

50 しかし、わたしはわたしの栄誉を求めません。それを求めになり、さばきをなさる方がおられます。

51 まことに、まことに、あなたがたに告げます。だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることがありません。」

52 ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今こそわかりました。アブラハムは死に、預言者たちも死にました。しかし、あなたは、『だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を味わうことがない』と言うのです。」

53 あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか。そのアブラハムは死んだのです。預言者たちもまた死にました。あなたは、自分自身をだれだと言うのですか。」

54 イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光はむなしいものです。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方のことを、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。

55 けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています。

56 あなたがたの父アブラハムは、<sup>83</sup>わたしの日を見ることを思っ大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」

57 そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのに<sup>84</sup>アブラハムを見たのですか。」

58 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが<sup>85</sup>生まれる前から、<sup>86</sup>わたしはいるのです。」

59 すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは<sup>87</sup>身を隠<sup>かく</sup>して、宮から出て行かれた。<sup>88</sup>



# 九章

- 1 またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。
- 2 弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」
- 3 イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」
- 4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。
- 5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」
- 6 イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。
- 7 「行って、シロアム（訳して言えば、遣わされた者）の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。
- 8 近所の人たちや、前に彼が物ごいをしていたのを見ていた人たちが言った。「これはすわって物ごいをしていた人ではないか。」
- 9 ほかの人は、「これはその人だ」と言い、またほかの人は、「そうではない。ただその人に似ているだけだ」と言った。当人は、「私がその人です」と言った。
- 10 そこで、彼らは言った。「それでは、あなたの目はどのようにしてあいたのですか。」
- 11 彼は答えた。「イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行って洗いなさい』と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」
- 12 また彼らは彼に言った。「その人はどこにいるのですか。」彼は「私は知りません」と言った。
- 13 彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。
- 14 ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。
- 15 こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。」
- 16 すると、パリサイ人の中のある人々が、「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ」と言った。しかし、ほかの者は言った。「罪人である者に、どうしてこのような<sup>99</sup>しるしを行うことができますよう。」そして、彼らの間に、分裂が起こった。
- 17 そこで彼らはもう一度、盲人に言った。「あの方が目をあけてくれたことで、あの人を何だと思っているのか。」彼は言った。「あの方は預言者です。」
- 18 しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということを信ぜず、ついにその両親を呼び出して、
- 19 尋ねて言った。「この人はあなたがたの息子で、生まれつき盲目だったとあなたがたが言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか。」
- 20 そこで両親は答えた。「私たちは、これが私たちの息子で、生まれつき盲目だったことを知っています。
- 21 しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。」
- 22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちの恐れからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスを<sup>90</sup>キリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。
- 23 そのために彼の両親は、「あれはもうおとなです。あれに聞いてください」と言ったのである。
- 24 そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。「<sup>91</sup>神に栄光を帰しなさい。私たちはあの方が罪人であることを知っているのだ。」
- 25 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」
- 26 そこで彼らは言った。「あの方はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。」
- 27 彼は答えた。「もうお話ししたのですが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのです。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」
- 28 彼らは彼をのしって言った。「おまえもあの方の弟子だ。しかし私たちはモーセの弟子だ。
- 29 私たちは、神がモーセにお話しになったことは知っている。しかし、あの方については、どこから来たのか知らないのだ。」
- 30 彼は答えて言った。「これは、驚きました。あなたがたは、あの方がどこから来られたのか、ご存じないと言う。しかし、あの方は私の目をおあけになったのです。」

- 31 神は、<sup>つみびと</sup>罪人の言うことはお聞きになりません。しかし、だれでも神を敬い、そのみこころを行うなら、神はその人の言うことを聞いてくださると、私たちは知っています。
- 32 盲目に生まれついた者の目をあけた者があるなどとは、<sup>92</sup>昔から聞いたこともありません。
- 33 もしあの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできないはずですよ。」
- 34 彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちを教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。
- 35 イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」
- 36 その人は答えた。「<sup>93</sup>主よ。その方はどなたでしょうか。私がおの方を信じることができるよう。」
- 37 イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれですよ。」
- 38 彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。
- 39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世にきました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」
- 40 パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「<sup>もうもく</sup>私たちも盲目なのですか。」
- 41 イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であつたなら、あなたがたに罪はなかつたでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」

# 一〇章

- 1 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。
- 2 しかし、門から入る者は、その羊の牧者です。
- 3 門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けます。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。
- 4 彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。
- 5 しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」
- 6 イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことかよくわからなかった。
- 7 そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です。
- 8 わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。
- 9 わたしは門です。だれでも、わたしを通して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。
- 10 盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、また<sup>94</sup>それを豊かに持つためです。
- 11 わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。
- 12 牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。
- 13 それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけしていないからです。
- 14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。
- 15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。
- 16 わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。
- 17 わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。
- 18 だれも、わたしからいのちを<sup>95</sup>取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」
- 19 このみことばを聞いて、ユダヤ人たちの間にまた分裂が起こった。
- 20 彼らのうちの多くの者が言った。「あれは悪霊につかれて気が狂っている。どうしてあなたがたは、あの人の言うことに耳を貸すのか。」
- 21 ほかの者は言った。「これは悪霊につかれた人のことばではない。悪霊がどうして盲人の目をあけることができようか。」
- 22 そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。
- 23 時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。
- 24 それでユダヤ人たちは、イエスを取り囲んで言った。「あなたは、いつまで私たちに気をもませるのですか。もしあなたが<sup>96</sup>キリストなら、はっきりとそう言ってください。」
- 25 イエスは彼らに答えられた。「わたしは話しました。しかし、あなたがたは信じないのです。わたしが父の御名によって行わずが、わたしについて証言しています。
- 26 しかし、あなたがたは信じません。それは、あなたがたがわたしの羊に属していないからです。
- 27 わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。
- 28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。
- 29 わたしに彼らをお与えになった<sup>97</sup>父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。
- 30 わたしと父とは<sup>98</sup>一つです。」
- 31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。
- 32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは、父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」
- 33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたがたを石打ちにするのではありません。冒瀆のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」

- 34 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、『わたしは言った、おまえたちは神々である』と書いてはいないか。
- 35 もし、神のことばを受けた人々を、神々と呼んだとすれば、聖書は廃棄されるものではないから、
- 36 『わたしは神の子である』とわたしが言ったからといって、どうしてあなたがたは、父が、聖であることを示して世に遣わした者について、『神を冒瀆している』と言うのですか。
- 37 もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じないでいなさい。
- 38 しかし、もし行っているなら、たとえわたしの言うことが信じられなくても、わざを信用しなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしが父に在ることを、あなたがたが悟り、また知るためです。」
- 39 そこで、彼らはまたイエスを捕らえようとした。しかし、イエスは彼らの手からのがれられた。
- 40 そして、イエスはまたヨルダンを渡って、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた所に行かれ、そこに滞在された。
- 41 多くの人々がイエスのところに来た。彼らは、「ヨハネは何一つしるしを行わなかったけれども、彼がこの方について話したことはみな真実であった」と言った。
- 42 そして、その地方で多くの人々がイエスを信じた。

## 一章

- 1 さて、ある人が病氣にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。
- 2 このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。
- 3 そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病氣です。」
- 4 イエスはこれを聞いて、言われた。「この病氣は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」
- 5 イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。
- 6 そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。
- 7 その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。
- 8 弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」
- 9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまりくことはありません。この世の光を見ているからです。」
- 10 しかし、夜歩けばつまづきます。光がその人のうちにないからです。」
- 11 イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」
- 12 そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」
- 13 しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは100眠った状態のことを言われたものと思った。
- 14 そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。」
- 15 わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいす。さあ、彼のところへ行きましょう。」
- 16 そこで、101デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行つて、主といっしょに死のうではないか。」
- 17 それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れられて四日もたっていた。
- 18 ベタニヤはエルサレムに近く、102三キロメートルほど離れた所にあった。
- 19 大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに來ていた。その兄弟のことにについて慰めるためであった。
- 20 マルタは、イエスが來られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。
- 21 マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」
- 22 今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」
- 23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」
- 24 マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」
- 25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」
- 26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」
- 27 彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に103來られる神の子104キリストである、と信じております。」
- 28 こう言うてから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそつと云った。
- 29 マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がつて、イエスのところに行った。
- 30 さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。
- 31 マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がつて出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだらう105と思い、彼女について行つた。
- 32 マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかる、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」
- 33 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに來たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、靈の憤りを覚え、心の動揺を感じて、
- 34 言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。來てご覧ください。」
- 35 イエスは涙を流された。

- 36 そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」
- 37 しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う者もいた。
- 38 そこでイエスは、またも心のうちに 憤りを覚えながら、墓に來られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。
- 39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっております。四日になりますから。」
- 40 イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」
- 41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。
- 42 わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」
- 43 そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」
- 44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て來た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」
- 45 そこで、マリヤのところに來ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。
- 46 しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行つて、イエスのなさったことを告げた。
- 47 そこで、祭司長とパリサイ人たちは議會を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人が多くの人を106しるしを行っているというのに。」
- 48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうなると、ローマ人がやつて來て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」
- 49 しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であつたカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然何もわかつていない。
- 50 ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」
- 51 ところで、このことは彼が自分から言つたのではなくて、その年の大祭司であつたので、イエスが国民のために死のうとしておられること、
- 52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。
- 53 そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。
- 54 そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをしないで、そこから荒野に近い地方に去り、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。
- 55 さて、ユダヤ人の過越の祭りが間近であつた。多くの人々が、身を清めるために、過越の祭りの前にいなかからエルサレムに上つて來た。
- 56 彼らはイエスを捜し、宮の中に立つて、互いに言った。「あなたがたはどう思いますか。あの方は祭りに來られることはないでしょうか。」
- 57 さて、祭司長、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は届け出なければならぬという命令を出していた。

## 一二章

- 1 イエスは過越の祭りの六日前にバタニヤに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。
- 2 人々はイエスのために、そこに晩餐を用意した。そしてマルタは給仕していた。ラザロは、イエスとともに食卓に着いている人々の中に混じっていた。
- 3 マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油<sup>107</sup>三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。
- 4 ところが、弟子のひとりで、イエスを<sup>108</sup>裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。
- 5 「なぜ、この香油を<sup>109</sup>三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか。」
- 6 しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。
- 7 イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。マリヤはわたしの葬りの日のために、<sup>110</sup>それを取っておこうとしていたのです。」
- 8 あなたがたは、貧しい人々とはいつもいっしょにいるが、わたしとはいつもいっしょにいるわけではないからです。」
- 9 大ぜいのユダヤ人の群れが、イエスがそこにおられることを聞いて、やって来た。それはただイエスのためだけではなく、イエスによって死人の中からよみがえったラザロを見るためでもあった。
- 10 祭司長たちはラザロも殺そうと相談した。
- 11 それは、彼のために多くのユダヤ人が去って行き、イエスを信じるようになったからである。
- 12 その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れは、イエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、
- 13 しゅろの木の枝を取って、出迎えるために出て行った。そして大声で叫んだ。  
「ホサナ。  
祝福あれ。  
主の御名によって来られる方に。  
イスラエルの王に。」
- 14 イエスは、ろばの子を見つけて、それに乗られた。それは次のように書かれているとおりであった。
- 15 「恐れるな。  
シオンの娘。  
見よ。あなたの王が来られる。  
ろばの子に乗って。」
- 16 初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのおりにイエスに対して行ったことを、彼らは思い出した。
- 17 イエスがラザロを墓から呼び出し、死人の中からよみがえらせたときにイエスといっしょにいた大ぜいの人々は、そのことのあかしをした。
- 18 そのために群衆もイエスを出迎えた。イエスがこのしるしを行われたことを聞いたからである。
- 19 そこで、パリサイ人たちは互いに言った。「どうしたのだ。何一つうまくいっていない。見なさい。世はあげてあの人のあとについて行ってしまった。」
- 20 さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。
- 21 この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリボのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのです。」と言って頼んだ。
- 22 ピリボは行ってアンデレに話し、アンデレとピリボとは行って、イエスに話した。
- 23 すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」
- 24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。
- 25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。
- 26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。
- 27 今わたしの心は騒いでいる。<sup>111</sup>何と言おうか。『父よ。この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。
- 28 父よ。御名の栄光を現してください。」そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。」



- 29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。ほかの人々は、「御使いがあなたの方に話したのだ」と言った。
- 30 イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためです。」
- 31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。
- 32 わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」
- 33 イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。
- 34 そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは、律法で、<sup>112</sup>キリストはいつまでも生きておられると聞きましたが、どうしてあなたは、人の子は上げられなければならない、と言われるのですか。その人の子とはだれですか。」
- 35 イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。」
- 36 あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」
- イエスは、これらのことをお話しになると、立ち去って、彼らから身を隠された。
- 37 イエスが彼らの目の前でこのように多くの<sup>113</sup>しるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。
- 38 それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。
- 39 彼らが信じることができなかったのは、イザヤがまた次のように言ったからである。
- 40 「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理解せず、<sup>114</sup>回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである。」
- 41 イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。
- 42 しかし、それにもかかわらず、指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた。ただ、パリサイ人たちははばかりで、告白はしなかった。会堂から<sup>115</sup>追放されないためであった。
- 43 彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛したからである。
- 44 また、イエスは大声で言われた。「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わした方を信じるのです。」
- 45 また、わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのです。
- 46 わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。
- 47 だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。
- 48 わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。
- 49 わたしは、自分から話したものではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。
- 50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」



# 一三章

- 1 さて、<sup>すぎこし</sup>過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を<sup>あいくま</sup><sup>116</sup>残るところなく示された。
- 2 夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イエスを売ろうとする思いを入れていたが、
- 3 イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、
- 4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。
- 5 それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまとっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。
- 6 こうして、イエスはシモン・ペテロのところに來られた。ペテロはイエスに言った。「主よ。あなたが、私の足を洗ってくださるのですか。」
- 7 イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」
- 8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにしないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」
- 9 シモン・ペテロは言った。「主よ。私の足だけでなく、手も頭も洗ってください。」
- 10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません。」
- 11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みながきよいのではない」と言われたのである。
- 12 イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。」
- 13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。<sup>117</sup>あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。
- 14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。
- 15 わたしがあなたがたにしたとおり、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。
- 16 まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遭わされた者は遭わした者にまさるものではありません。
- 17 あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行うときに、あなたがたは祝福されるのです。
- 18 わたしは、あなたがた全部の者について言っているではありません。わたしは、あなたが選んだ者を知っています。しかし聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた』と書いてあることは成就するのです。
- 19 わたしは、そのことが起こる前に、今あなたがたに話しておきます。そのことが起こったときに、わたしがその人であることをあなたがたが信じるためです。
- 20 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしの遭わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。わたしを受け入れる者は、わたしを遭わした方を受け入れるのです。」
- 21 イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを<sup>うらぎ</sup><sup>118</sup>裏切ります。」
- 22 弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。
- 23 弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの<sup>119</sup>右側で席に着いていた。
- 24 そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。「だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。」
- 25 その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。「主よ。それはだれですか。」
- 26 イエスは答えられた。「それはわたしがパン切れを浸して与える者です。」それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。
- 27 彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」
- 28 席に着いている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。
- 29 ユダが金入れを持っていたので、イエスが彼に、「祭りのために入用の物を買え」と言われたのだとか、または、貧しい人々に何か施しをするように言われたのだかと思つた者も中にはいた。
- 30 ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった。
- 31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今こそその子は栄光を<sup>120</sup>受けました。また、神は人の子によって栄光を<sup>121</sup>お受けになりました。」
- 32 <sup>122</sup>神が、人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も、ご自身によって人の子に栄光をお与えになり

ます。しかも、ただちにお与えになります。

33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。

34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

35 もし互いの間に愛があるなら、それによつてあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」

37 ペテロはイエスに言った。「主よ。なぜ今はあなたについて行くことができないのですか。あなたのためにはいのちも捨てます。」

38 イエスは答えられた。「わたしのためにはいのちも捨てる、と言うのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

## 一四章

- 1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。<sup>さわ</sup>123神を信じ、またわたしを信じなさい。
- 2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。<sup>そな</sup>
- 3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。
- 4 124わたしの行く道はあなたがたも知っています。」
- 5 トマスはイエスに言った。「主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」
- 6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません。」
- 7 あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」
- 8 ピリポはイエスに言った。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」
- 9 イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。
- 10 わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。
- 11 わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。
- 12 まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。
- 13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。
- 14 あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。
- 15 もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。
- 16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの<sup>あ</sup>125助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。
- 17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。
- 18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。
- 19 いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。
- 20 その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。
- 21 わたしの戒めを保ち、<sup>たも</sup>それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。<sup>あらわ</sup>」
- 22 イスカリオテでないユダがイエスに言った。「主よ。あなたは、私たちにはご自分を現<sup>あらわ</sup>そうとしながら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか。」
- 23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。
- 24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。<sup>つか</sup>
- 25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。<sup>つみ</sup>
- 26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。
- 27 わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。
- 28 『わたしは去って行き、また、あなたがたのところに来る』とわたしが言ったのを、あなたがたは聞きました。あなたがたは、もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを喜ぶはずです。父はわたしよりも偉大な方だからです。
- 29 そして今わたしは、そのことの起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったときに、あなたがたが信じるためです。

30 わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を<sup>しはい</sup>支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。

31 しかしそのことは、わたしが父を<sup>あい</sup>愛しており、父の命じられたとおりに行っていることを世が知るためです。立ちなさい。さあ、ここから行くのです。

## 一五章

- 1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。
- 2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなします。
- 3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。
- 4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。
- 5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。
- 6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。
- 7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。
- 8 あなたがたが多くの実を結び、<sup>126</sup>わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。
- 9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。
- 10 もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。
- 11 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。
- 12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。
- 13 人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。
- 14 わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行うなら、あなたがたはわたしの友です。
- 15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。
- 16 あなたがたがわたしを選んだわけではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。
- 17 あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです。
- 18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを<sup>127</sup>知っておきなさい。
- 19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。
- 20 しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。
- 21 しかし彼らは、わたしの名のゆえに、あなたがたに対してそれらのことをみな行います。それは彼らがわたしを遣わした方を知らないからです。
- 22 もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに<sup>128</sup>罪はなかったでしょう。しかし今では、その罪について弁解の余地はありません。
- 23 わたしを憎んでいる者は、わたしの父をも憎んでいるのです。
- 24 もしわたしが、ほかのだれも行ったことのないわざを、彼らの間で行わなかったのなら、彼らには<sup>129</sup>罪がなかったでしょう。しかし今、彼らはわたしをも、わたしの父をも見て、そのうえで憎んだのです。
- 25 これは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と彼らの律法に書かれていることばが成就するためです。
- 26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。
- 27 あなたがたも<sup>130</sup>あかしするのです。初めからわたしといっしょにいたからです。

## 一六章

- 1 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまずくことのないためです。
- 2 人々はあなたがたを会堂から<sup>131</sup>追放するでしょう。事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。
- 3 彼らがこういうことを行うのは、父をもわたしをも知らないからです。
- 4 しかし、わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、その時が来れば、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしが初めからこれらのことをあなたがたに話さなかったのは、わたしがあなたがたといっしょにいたからです。
- 5 しかし今わたしは、わたしを遣わした方のもとに行こうとしています。しかし、あなたがたのうちには、ひとりとして、どこに行くのですかと尋ねる者がありません。
- 6 かえって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。
- 7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。
- 8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。
- 9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。
- 10 また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。
- 11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。
- 12 わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。
- 13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。
- 14 御霊はわたしの栄光を現します。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。
- 15 父が持つておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。
- 16 しばらくするとあなたがたは、もはやわたしを見なくなります。しかし、またしばらくするとわたしを見ます。」
- 17 そこで、弟子たちのうちのある者は互いに言った。「『しばらくするとあなたがたは、わたしを見なくなる。しかし、またしばらくするとわたしを見る』、また『わたしは父のもとに行くからだ』と主が言われるのは、どういうことなのだろう。」
- 18 そこで、彼らは「しばらくすると、と主が言われるのは何のことだろうか。私たちに主の言われることがわからない」と言った。
- 19 イエスは、彼らが質問したがっていることを知って、彼らに言われた。「『しばらくするとあなたがたは、わたしを見なくなる。しかし、またしばらくするとわたしを見る』とわたしが言ったことについて、互いに論じ合っているのですか。
- 20 まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。
- 21 女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます。
- 22 あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。
- 23 その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。
- 24 あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。
- 25 これらのことを、わたしはあなたがたに<sup>132</sup>たとえて話しました。もはやたとえでは話さないで、父についてはっきりと告げる時が来ます。
- 26 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。
- 27 それはあなたがたがわたしを愛し、また、わたしを<sup>133</sup>神から出て来た者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられるからです。
- 28 わたしは父から出て、世に来ました。もう一度、わたしは世を去って父のもとに行きます。」
- 29 弟子たちは言った。「ああ、今あなたははっきりとお話しになって、何一つ<sup>134</sup>たとえ話はなさいません。
- 30 いま私たちは、あなたがいつさいのことをご存じで、だれもあなたにお尋ねする必要がないことがわかりました。

これで、私たちはあなたが神から来られたことを信じます。」

31 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは今、信じているのですか。

32 見なさい。あなたがたが散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとり残す時が来ます。いや、すでに来ています。しかし、わたしはひとりではありません。父がわたしといっしょにおられるからです。

33 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあつて平安を持つためです。あなたがたは、世にあつては患難かんなんがあります。しかし、勇敢ゆうかんでありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」

## 一七章

- 1 イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」
- 2 それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。
- 3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。
- 4 あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。
- 5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていました。あの方が輝かせてください。
- 6 わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみことばを守りました。
- 7 いま彼らは、あなたがわたしに下さったものはみな、あなたから出ていることを知っています。
- 8 それは、あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたから出て来たことを確かに知り、また、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。
- 9 わたしは彼らのためにお願いします。世のためではなく、あなたがわたしに下さった者たちのためにです。なぜなら彼らはあなたのもだからです。
- 10 わたしのもはみなあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。
- 11 わたしはもう世にいません。彼らは世にいますが、わたしはあなたのみもとにまいります。聖なる父。あなたがわたしに下さっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それはわたしたちと同様に、彼らが一つとなるためです。
- 12 わたしは彼らといっしょにいたとき、あなたがわたしに下さっている御名の中に彼らを保ち、また守りました。彼らのうちだれも滅びた者はなく、ただ滅びの子が滅びました。それは、聖書が成就するためです。
- 13 わたしは今もとにまいります。わたしは彼らの中でわたしの喜びが全うされるために、世にあつてこれらのことを話しているのです。
- 14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。
- 15 彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、<sup>135</sup>悪い者から守ってくださるようお願いします。
- 16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。
- 17 真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。
- 18 あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。
- 19 わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです。
- 20 わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。
- 21 それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が<sup>136</sup>信じるためののです。
- 22 またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。
- 23 わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが<sup>137</sup>全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が<sup>138</sup>知るためです。
- 24 父よ。お願いします。あなたがわたしに下さった<sup>139</sup>ものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。
- 25 正しい父よ。この世はあなたを知りません。しかし、わたしはあなたを知っています。また、この人々は、あなたがわたしを遣わされたことを知りました。
- 26 そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にあるためです。」



# 一八章

- 1 イエスはこれらのことを話し終えられると、弟子たちとともに、ケデロン<sup>149</sup>の<sup>かわすじ</sup>川の向こう側に出て行かれた。そこに園があつて、イエスは弟子たちといっしょに、そこに入られた。
- 2 ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。
- 3 そこで、ユダは<sup>141</sup>隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た。
- 4 イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、出て来て、「だれを捜すのか」と彼らに言われた。
- 5 彼らは、「ナザレ人イエスを」と答えた。イエスは彼らに「それはわたしです」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らといっしょに立っていた。
- 6 イエスが彼らに、「それはわたしです」と言われたとき、彼らはあとずさりし、そして地に倒れた。
- 7 そこで、イエスがもう一度、「だれを捜すのか」と問われると、彼らは「ナザレ人イエスを」と言った。
- 8 イエスは答えられた。「それはわたしだと、あなたがたに言つたでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。」
- 9 それは、「あなたがわたしに下さった者のうち、ただのひとりをも失いませんでした」とイエスが言われたことばが実現するためであつた。
- 10 シモン・ペテロは、剣を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであつた。
- 11 そこで、イエスはペテロに言われた。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」
- 12 そこで、一隊の兵士と千人隊長、それにユダヤ人から送られた役人たちは、イエスを捕らえて縛り、
- 13 まずアンナスのところに連れて行つた。彼がその年の大祭司カヤバのしゅうとだつたからである。
- 14 カヤバは、ひとりの人が民に代わつて死ぬことが得策である、とユダヤ人に助言した人である。
- 15 シモン・ペテロともうひとりの弟子は、イエスについて行つた。この弟子は大祭司の知り合いで、イエスといっしょに大祭司の中庭に入つた。
- 16 しかし、ペテロは外で門のところに立っていた。それで、大祭司の知り合いである、もうひとりの弟子が出て来て、門番の女に話して、ペテロを連れて入つた。
- 17 すると、門番のはしためがペテロに、「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね」と言つた。ペテロは、「そんな者ではない」と言つた。
- 18 寒かつたので、しもべたちや役人たちは、炭火をおこし、そこに立って暖まつていた。ペテロも彼らといっしょに、立って暖まつていた。
- 19 そこで、大祭司はイエスに、弟子たちのこと、また、教えのことについて尋問した。
- 20 イエスは彼に答えられた。「わたしは世に向かつて公然と話しました。わたしはユダヤ人がみな集まつて来る会堂や宮で、いつも教えたのです。隠れて話したことは何もありません。」
- 21 なぜ、あなたはわたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、わたしから聞いた人たちに尋ねなさい。彼らならわたしが話した事からを知っています。」
- 22 イエスがこう言われたとき、そばに立っていた役人のひとりが、「大祭司にそのような答え方をするのか」と言つて、平手でイエスを打つた。
- 23 イエスは彼に答えられた。「もしわたしの言つたことが悪いなら、その悪い証拠を示しなさい。しかし、もし正しいのなら、なぜ、わたしを打つのか。」
- 24 アンナスはイエスを、縛つたままで大祭司カヤバのところに送つた。
- 25 一方、シモン・ペテロは立って、暖まつていた。すると、人々は彼に言つた。「あなたもあの人の弟子ではないでしょうね。」ペテロは否定して、「そんな者ではない」と言つた。
- 26 大祭司のしもべのひとりで、ペテロに耳を切り落とされた人の親類に当たる者が言つた。「私が見なかつたとしてもいふのですか。あなたは園であの人といっしょにいました。」
- 27 それで、ペテロはもう一度否定した。するとすぐ、鶏が鳴いた。
- 28 さて、彼らはイエスを、カヤバのところから<sup>142</sup>総督官邸に連れて行つた。時は明け方であつた。彼らは、過越の食事が食べられなくなることはないように、汚れを受けまいとして、官邸に入らなかつた。
- 29 そこで、ピラトは彼らのところに出て来て言つた。「あなたがたは、この人に対して何を告発するのですか。」

- 30 彼らはピラトに答えた。「もしこの人が悪いことをしていなかったら、私たちはこの人をあなたに引き渡しはしなかったでしょう。」
- 31 そこでピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、自分たちの律法に従ってさばきなさい。」ユダヤ人たちは彼に言った。「私たちには、だれを死刑にすることも許されてはいません。」
- 32 これは、ご自分がどのような死に方をされるのかを示して話されたイエスのことばが成就するためであった。
- 33 そこで、ピラトはもう一度官邸に入って、イエスと呼んで言った。「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」
- 34 イエスは答えられた。「あなたは、自分でそのことを言っているのですか。それともほかの人が、あなたにわたしのことを話したのですか。」
- 35 ピラトは答えた。「私はユダヤ人ではないでしょう。あなたの同国人と祭司長たちが、あなたを私に引き渡したのです。あなたは何をしたのですか。」
- 36 イエスは答えられた。「わたしの国は<sup>143</sup>この世のものではありません。もしこの世のものであったなら、わたしのしもべたちが、わたしをユダヤ人に渡さないように、戦ったことでしょう。しかし、事実、わたしの国はこの世のものではありません。」
- 37 そこでピラトはイエスに言った。「それでは、あなたは王なのですか。」イエスは答えられた。「わたしが王であることは、あなたが言うとおりです。わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」
- 38 ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」
- 彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には<sup>144</sup>罪を認めません。
- 39 しかし、過越の祭りに、私があなたがたのためにひとりの者を釈放するのがならわしになっています。それで、あなたがたのために、ユダヤ人の王を釈放することにしましょうか。」
- 40 すると彼らはみな、また大声をあげて、「この人ではない。バラバだ」と言った。このバラバは強盗であった。

## 一九章

- 1 そこで、ピラトはイエスを捕らえて、むち打ちにした。
- 2 また、兵士たちは、いばらで 冠 を編んで、イエスの頭にかぶらせ、紫 色の着物を着せた。
- 3 彼らは、イエスに近寄っては、「ユダヤ人の王さま。ばんざい」と言い、またイエスの顔を平手で打った。
- 4 ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の<sup>145</sup>罪も見られないということを、あなたがたに知らせるためです。」
- 5 それでイエスは、いばらの 冠 と 紫 色の着物を着けて、出て来られた。するとピラトは彼らに「さあ、この人です」と言った。
- 6 祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ。」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には<sup>146</sup>罪を認めません。」
- 7 ユダヤ人たちは彼に答えた。「私たちには律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります。」
- 8 ピラトは、このことばを聞くと、ますます恐れた。
- 9 そして、また<sup>147</sup>官邸に入って、イエスに言った。「あなたはどこの人ですか。」しかし、イエスは彼に何の答えもされなかった。
- 10 そこで、ピラトはイエスに言った。「あなたは私に話さないのですか。私にはあなたを釈放する権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのですか。」
- 11 イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」
- 12 こういうわけで、ピラトはイエスを釈放しようと努力した。しかし、ユダヤ人たちは激しく叫んで言った。「もしこの人を釈放するなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、カイザルにそむくのです。」
- 13 そこでピラトは、これらのことばを聞いたとき、イエスを外に引き出し、敷石<sup>148</sup>（ヘブル語ではガバタ）と呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。
- 14 その日は過越の備え日で、時は<sup>149</sup>第六時ごろであった。ピラトはユダヤ人たちに言った。「さあ、あなたがたの王です。」
- 15 彼らは激しく叫んだ。「除け。除け。十字架につけろ。」ピラトは彼らに言った。「あなたがたの王を私が十字架につけるのですか。」祭司長たちは答えた。「カイザルのほかに、私たちに王はありません。」
- 16 そこでピラトは、そのとき、イエスを、十字架につけるため彼らに引き渡した。
- 17 彼らはイエスを受け取った。そして、イエスのご自分で十字架を負って、「どくろの地」という場所（ヘブル語でゴルゴタと言われる）に出て行かれた。
- 18 彼らはそこでイエスを十字架につけた。イエスといっしょに、ほかのふたりの者をそれぞれ両側に、イエスを真ん中にしてであった。
- 19 ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」と書いてあった。
- 20 それで、大ぜいのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブル語、ラテン語、ギリシャ語で書いてあった。
- 21 そこで、ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いてください。」と言った。
- 22 ピラトは答えた。「私の書いたことは私が書いたのです。」
- 23 さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また<sup>150</sup>下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。
- 24 そこで彼らは互いに言った。「それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」それは、「彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた」という聖書が成就するためであった。
- 25 兵士たちはこのようなことをしたが、イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロバの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた。
- 26 イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。
- 27 それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。

- 28 この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、「わたしは渴く」と言われた。
- 29 そこには酸いぶどう酒のいっぱい入った入れ物が置いてあった。そこで彼らは、酸いぶどう酒を含んだ海綿を<sup>151</sup>ヒソブの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。
- 30 イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、「完了した」と言われた。そして、頭をたれて、霊をお渡しになった。
- 31 その日は備え日であったため、ユダヤ人たちは安息日に（その安息日は大いなる日であったので）、死体を十字架の上に残しておかないように、すねを折ってそれを取りのける処置をピラトに願った。
- 32 それで、兵士たちが来て、イエスといっしょに十字架につけられた第一の者と、もうひとりの者とのすねを折った。
- 33 しかし、イエスのところ来ると、イエスがすでに死んでおられるのを認めたので、そのすねを折らなかった。
- 34 しかし、兵士のうちのひとりがイエスのわき腹を槍で突き刺した。すると、ただちに血と水が出て来た。
- 35 それを目撃した者があかしをしているのである。そのあかしは真実である。その人が、あなたがたにも信じさせるために、真実を話すということをよく知っているのである。
- 36 この事が起こったのは、「彼の骨は一つも砕かれない」という聖書のことばが成就するためであった。
- 37 また聖書の別のところには、「彼らは自分たちが突き刺した方を見る」と言われているからである。
- 38 そのあとで、イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った。それで、ピラトは許可を与えた。そこで彼は来て、イエスのからだを取り降ろした。
- 39 前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエ<sup>152</sup>を混ぜ合わせたものをおよそ<sup>153</sup>三十キログラムばかり持って、やって来た。
- 40 そこで、彼らはイエスのからだを取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従って、それを香料といっしょに亜麻布で巻いた。
- 41 イエスが十字架につけられた場所に園があつて、そこには、まだだれも葬られたことのない新しい墓があつた。
- 42 その日がユダヤ人の備え日であったため、墓が近かったので、彼らはイエスをそこに納めた。

## 二〇章

1 さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に來た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

2 それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」

3 そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。

4 ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。

5 そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中に入らなかった。

6 シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、

7 イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。

8 そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って來た。そして、見て、信じた。

9 彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。

10 それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。

11 しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。

12 すると、ふたりの御使いが、イエスのからだがか置かれていた場所に、ひとり頭のところ、ひとり足のところ、白い衣をまとうてすわっているのが見えた。

13 彼らは彼女に言った。「<sup>154</sup>なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」

14 彼女はこう言うてから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立つておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。

15 イエスは彼女に言われた。「<sup>155</sup>なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか言ってください。そうすれば私が引き取ります。」

16 イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ（すなわち、先生）」とイエスに言った。

17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行つて、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」

18 マグダラのマリヤは、行つて、「私は主に目にかかりました」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたと弟子たちに告げた。

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方のごとであつた。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸が<sup>156</sup>しめてあつたが、イエスが來られ、彼らの中に立つて言われた。「平安があなたがたにあるように。」

20 こう言うてイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。

21 イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

22 そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は<sup>157</sup>赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」

24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが來られたときに、彼らといっしょにいなかった。

25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た」と言つた。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言つた。

26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が<sup>158</sup>閉じられていたが、イエスが來て、彼らの中に立つて「平安があなたがたにあるように」と言われた。

27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者にならないで。」

28 トマスは答えてイエスに言つた。「私の主。私の神。」

29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

30 この書には書かれていないが、まだほかの多くの<sup>159</sup>しるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。

31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子<sup>160</sup>キリストであることを、あなたがたが信じるため、ま

た、あなたがたが信じて、イエスの御名<sup>みな</sup>によっていのちを得るためである。

## 二一章

- 1 この後、イエスはテベリヤの湖畔で、もう一度ご自分を弟子たちに現された。その現された次第はこうであった。
- 2 シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子たち、ほかにふたりの弟子がいっしょにいた。
- 3 シモン・ペテロが彼らに言った。「私は漁に行く。」彼らは言った。「私たちもいっしょに行きましょう。」彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。
- 4 夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。
- 5 イエスは彼らに言われた。「子どもたちよ。食べる物がありませんね。」彼らは答えた。「はい。ありません。」
- 6 イエスは彼らに言われた。「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」そこで、彼らは網をおろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかった。
- 7 そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。「主です。」すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸だったので、上着をまとい、湖に飛び込んだ。
- 8 しかし、ほかの弟子たちは、魚の満ちたその網を引いて、小舟でやって来た。陸地から遠くなく、**161**百メートル足らずの距離だったからである。
- 9 こうして彼らが陸地に上がったとき、そこに炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見た。
- 10 イエスは彼らに言われた。「あなたがたの今とった魚を幾匹か持って来なさい。」
- 11 シモン・ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったけれども、網は破れなかった。
- 12 イエスは彼らに言われた。「さあ来て、朝の食事をしなさい。」弟子たちは主であることを知っていたので、だれも「あなたはどなたですか」とあえて尋ねる者はいなかった。
- 13 イエスは来て、パンを取り、彼らにお与えになった。また、魚も同じようにされた。
- 14 イエスが、死人の中からよみがえってから、弟子たちにご自分を現されたのは、すでにこれで三度目である。
- 15 彼らが食事を済ませたとき、イエスはシモン・ペテロに言われた。「**162**ヨハネの子シモン。あなたは、この人たちに以上に、わたしを**163**愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを**164**愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの小羊を飼いなさい。」
- 16 イエスは再び彼に言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを**165**愛しますか。」ペテロはイエスに言った。「はい。主よ。私があなたを**166**愛することは、あなたがご存じです。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を牧しなさい。」
- 17 イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを**167**愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを**168**愛しますか」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」
- 18 まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」
- 19 これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現すかを示して、言われたことであった。こうお話しになってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」
- 20 ペテロは振り向いて、イエスが愛された弟子があとについて来るのを見た。この弟子はあの晩餐のとき、イエスの右側にいて、「主よ。あなたを裏切る者はだれですか」と言った者である。
- 21 ペテロは彼を見て、イエスに言った。「主よ。この人はどうですか。」
- 22 イエスはペテロに言われた。「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」
- 23 そこで、その弟子は死なないという話が兄弟たちの間に行き渡った。しかし、イエスはペテロに、その弟子が死なないと言われたのでなく、「わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか」と言われたのである。
- 24 これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である。そして、私たちは、彼のあかしが真実であることを、知っている。
- 25 イエスが行われたことは、ほかにたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた

書物を入れることができまい、と私は思う。



- 1 「ことば」はキリストのこと。したがって「初めに」はキリストの永遠的存在を意味する
- 2 別訳「しかし、やみはこれを悟らなかった」
- 3 別訳「まことの光があった。それは世に来て、すべての人を照らすものである」
- 4 あるいは「ご自分のもの、所領」
- 5 あるいは「ご自分の人々」
- 6 別訳「肉」
- 7 別訳「...栄光で、恵みとまことに満ちていた」
- 8 直訳「私の前に成った」
- 9 別訳「恵みに代えて恵みを...」
- 10 異本に「子」となっているものもある。「ただひとりの御子が」と訳す
- 11 すなわち「メシヤ」
- 12 直訳「私の前に成った」
- 13 あるいは「メシヤとしては」を補う
- 14 別訳「イエスのところにとどまった」
- 15 この書では、共観福音書の時刻の呼称と異なる方式を用いたとみる。同じなら午後四時
- 16 原意「油をそそがれた者」
- 17 すなわち「岩」
- 18 原語「二、三メートル」一メートルは約四〇リットル
- 19 別訳「酔ったころになると」
- 20 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 21 あるいは「上から」
- 22 あるいは「上から」
- 23 異本「天にいる人の子」
- 24 別訳「人の子を信じる者がみな永遠のいのちを持つためです」
- 25 キリストのみことばの引用をここまでとしないで、二一節の終わりまでとして訳すこともできる
- 26 すなわち「独自の（比類のない）御子」
- 27 参照ヨハネ三・一六注
- 28 バプテスマのヨハネの引用をここまでとしないで、三六節の終わりまでとして訳すこともできる
- 29 直訳「神は御霊を量つては与えられない」
- 30 参照ヨハネ一・三九注
- 31 あるいは「わき出る水」
- 32 別訳「主よ」
- 33 別訳「主よ」
- 34 原文には「わたし」の前に、女の人に対する呼びかけ語「ギュナイ」がある
- 35 すなわち「メシヤ」
- 36 「すでに」を三五節の「色づいて」の前に置く読み方もある
- 37 参照ヨハネ一・三九注
- 38 定冠詞のある異本がある。その場合は過越祭のこと
- 39 「ベテサダ」または「ベテサイダ」と読む写本が多い
- 40 異本に三節後半、四節として、次の一部または全部を含むものがある。「彼らは水の動くのを待っていた。4 主の使いが時々この池に降りて来て、水を動かすのであるが、水が動かされたあとで最初に入った者は、どのような病気にかかっている者でもいやされたからである」
- 41 「人の子」は「人」と訳すこともできる

- 42 「だけ」は補足
- 43 法的に正しい有効な証拠と認めることができないことをさす
- 44 参照ヨハネ五・三一注
- 45 別訳「聖書を調べなさい。というのは、あなたがたは聖書の中に...と思っているからです」
- 46 あるいは「名誉」「評判」
- 47 あるいは「証拠としての奇蹟」
- 48 直訳「からだを横にした」
- 49 あるいは「意図している」
- 50 直訳「二五、三〇スタディオン」一スタディオンは一八五メートル
- 51 あるいは「恐れることはやめなさい」
- 52 あるいは「かた」
- 53 異本「わたしを信じている者」
- 54 異本「世のいのちのためにわたしが与えるわたしの肉」
- 55 あるいは「引き渡す者」
- 56 直訳「引き渡そう」
- 57 異本「まだ行きません」
- 58 原語では複数形「幾つもの群れ」。単数形を示す異本もある
- 59 あるいは「気が狂っています」
- 60 あるいは「行為」
- 61 直訳「正しいさばきをさばきなさい」
- 62 すなわち「メシヤ」
- 63 すなわち「いつもわたしのもとに来て、いつも飲んでいなさい」
- 64 直訳「腹から」
- 65 直訳「まだ、なかった」異本「聖霊はまだ与えられていなかった」
- 66 すなわち「メシヤ」
- 67 すなわち「メシヤ」
- 68 古い写本のほとんど全部が七・五三―八・一一を欠いている。この部分を含む異本も相互間の相違が大きい
- 69 原文では「主よ」との呼びかけがある
- 70 別訳「有効ではありません」
- 71 すなわち「人間的判断で」
- 72 異本「父」
- 73 「さばく」は原文にないが含意されている
- 74 別訳「有効である」
- 75 直訳「わたしがあるということ」出エジプト三・一四と関連させてキリストが主なる神であることを言われたと解する者が多い
- 76 別訳「話して来たとおりのものです」
- 77 参照ヨハネ八・二四注
- 78 あるいは「残された」
- 79 あるいは「父の前で」
- 80 直訳「彼」「そのかた」
- 81 あるいは「わたしの話のしかた」
- 82 別訳「人が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら、彼の父もまたうそつきだからです」

- [83](#) 直訳「わたしの日を見るために」
- [84](#) 異本「アブラハムがあなたを見たことがあるのですか」
- [85](#) 直訳「存在するようになる」
- [86](#) 参照ヨハネ八・二四注。あるいは「あった」と訳す
- [87](#) 直訳「隠されて」
- [88](#) 異本に「そして彼らの間を通り抜けて進み、通り過ぎて行かれた」を挿入するものもある
- [89](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [90](#) すなわち「メシヤ」
- [91](#) 別訳「真実を言いなさい」
- [92](#) 直訳「古い時代以来聞かれなかった」
- [93](#) あるいは「先生」
- [94](#) あるいは「豊かになる」
- [95](#) 異本「取るではありません」
- [96](#) すなわち「メシヤ」
- [97](#) 異本「わたしの父がわたしにお与えになったものは、すべてにまさって大きいものです」
- [98](#) あるいは「同一の本質」
- [99](#) 直訳「知り、また知り続ける」
- [100](#) 直訳「眠りの眠り」
- [101](#) 「ふたご」の意
- [102](#) 直訳「一五スタディオン」一スタディオンは一八五メートル
- [103](#) 別訳「きたるべきかた」（「メシヤ」の称号）
- [104](#) すなわち「メシヤ」
- [105](#) 異本「と言って」
- [106](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [107](#) 直訳「一リトラ」一三二八グラム
- [108](#) あるいは「引き渡そうと」
- [109](#) 約十か月分の生活費に相当する金額
- [110](#) 別訳「そうしたのです」
- [111](#) 別訳「何と言ったらよいか。『父よ。この時からわたしをお救いください』」
- [112](#) すなわち「メシヤ」
- [113](#) あるいは「証拠としての奇蹟」
- [114](#) あるいは「向きを変え」
- [115](#) すなわち「除名」
- [116](#) 別訳「最後まで」
- [117](#) あるいは「あなたがたは正しい」
- [118](#) あるいは「引き渡す」
- [119](#) 直訳「御胸のそばで（食事のために）からだを横にしていた」
- [120](#) あるいは「受けます」
- [121](#) あるいは「お受けになります」
- [122](#) この句を欠く写本がある
- [123](#) あるいは「あなたがたは神を信じています」
- [124](#) 異本「わたしがどこへ行くかあなたがたは知っており、またその道を知っています」
- [125](#) ギリシヤ語「バラクレスト」―援助のためにそばに呼ばれた者。とりなしてくれる人

[126](#) 異本「そうしてわたしの弟子であることを証明することによって」

[127](#) あるいは「あなたがたは知のです」

[128](#) すなわち「罪責」

[129](#) すなわち「罪責」

[130](#) あるいは「あかししなさい」

[131](#) あるいは「除名」

[132](#) 直訳「比喩を用いて」

[133](#) 「父」とする写本もある

[134](#) あるいは「比喩」

[135](#) あるいは「悪」

[136](#) あるいは「信じ続ける」

[137](#) あるいは「一致の中に完成される」

[138](#) あるいは「知り続ける」

[139](#) 異本「（あなたがわたしに下さった）人々を」

[140](#) 原語「ケイマロス」（冬になると激流になる川）

[141](#) ローマの軍隊の一単位で通常六百人

[142](#) 原語「ブラエトリウム」

[143](#) あるいは「この世から出たものではありません」

[144](#) あるいは「有罪とする理由」

[145](#) あるいは「有罪とする理由」

[146](#) 参照ヨハネ一九・四注

[147](#) 原語「ブラエトリウム」

[148](#) ユダヤのアラム語

[149](#) 参照ヨハネ一・三九注

[150](#) ギリシャ語「キトン」一肌着として着たもの

[151](#) 直訳「ヒソブにつけて」

[152](#) 異本「...の包みを」

[153](#) 直訳「百リトラ」一リトラは三二八グラム

[154](#) 「なぜ」の前に、女の人に対する呼びかけ語「ギユナイ」がある

[155](#) 「なぜ」の前に、女の人に対する呼びかけ語「ギユナイ」がある

[156](#) あるいは「かぎをかけられていた」

[157](#) 直訳「赦されている」

[158](#) あるいは「かぎをかけられていた」

[159](#) あるいは「証拠としての奇蹟」

[160](#) すなわち「メシヤ」

[161](#) 直訳「二〇〇ペーキウス」一ペーキウスは四五センチ

[162](#) 異本「ヨナ」

[163](#) ギリシャ語「アガパオー」

[164](#) ギリシャ語「フィレオー」

[165](#) ギリシャ語「アガパオー」

[166](#) ギリシャ語「フィレオー」

[167](#) ギリシャ語「フィレオー」

[168](#) ギリシャ語「フィレオー」

# 使徒の働き

- [一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)
- [六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)
- [十一章](#) [十二章](#) [十三章](#) [十四章](#) [十五章](#)
- [十六章](#) [十七章](#) [十八章](#) [十九章](#) [二〇章](#)
- [二一章](#) [二二章](#) [二三章](#) [二四章](#) [二五章](#)
- [二六章](#) [二七章](#) [二八章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 テオピロよ。私は前の書で、イエスが<sup>し と</sup>行い始め、<sup>せい れい</sup>教え始められたすべてのことについて書き、
- 2 お選びになった使徒たちに<sup>せい れい</sup>聖霊によって命じてから、<sup>お よ</sup>天に上げられた日のことにまで及びました。

- 3 イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、<sup>あら わ</sup>彼らに現れて、<sup>た し</sup>神の国のことを語り、<sup>し ょ う こ</sup>数多くの確かな証<sup>お よ</sup>証をもつて、
- ご自分が<sup>し と</sup>生きていることを使徒たちに<sup>し め</sup>示された。
- 4 彼らと<sup>い</sup>いっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを<sup>は な</sup>離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。
- 5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは<sup>せい れい</sup>聖霊のバプテスマを受けるからです。」
- 6 そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興<sup>さ い</sup>してくださるのですか。」
- 7 イエスは言われた。「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもつてお定めになっています。
- 8 しかし、<sup>せい れい</sup>聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」
- 9 こう言うてから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。
- 10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、<sup>こ ろ も</sup>白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。
- 11 そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを<sup>は な</sup>離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」
- 12 そこで、彼らはオリブという山からエルサレムに帰った。この山はエルサレムの近くにあって、安息日の道のりほどの距離<sup>き ょ り</sup>であった。
- 13 彼らは町に入ると、泊まっている屋上<sup>ま</sup>の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心<sup>ねつ しん</sup>党員<sup>とう いん</sup>シモンとヤコブの<sup>2</sup>子ユダであった。
- 14 この人たちは、婦人<sup>ふ じん</sup>たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念<sup>いの</sup>していた。
- 15 そのころ、百二十名ほどの兄弟たちが集まっていたが、ペテロはその中に立ってこう言った。
- 16 「兄弟たち。イエスを捕らえた者どもの手引きをしたユダについて、<sup>せい れい</sup>聖霊がダビデの口を通して預言<sup>よ げん</sup>された聖書<sup>せい し ょ</sup>のことは、成就しなければならなかったのです。
- 17 ユダは私たちの仲間として数えられており、この務めを受けていました。
- 18 （ところがこの男は、不正なことをして得た報酬<sup>つと</sup>で地所<sup>ち し ょ う</sup>を手に入れたが、まさかさまに落ち、からだは真つ二つに裂け、はらわたが全部飛び出してしまった。
- 19 このことが、エルサレムの住民<sup>じ ゅ ん</sup>全部に知れて、その地所は彼らの国語でアケルダマ、すなわち『血の地所』と呼ばれるようになった。）
- 20 実は詩篇<sup>し へん</sup>には、こう書いてあるのです。『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』また、『その職は、ほかの人に取らせよ。』
- 21 ですから、主イエスが私たちといっしょに生活された間、
- 22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をとともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活<sup>ふ つ か つ</sup>の証人<sup>し ょ う に ん</sup>とならなければなりません。」
- 23 そこで、彼らは、バルサバと呼ばれ別名をユストというヨセフと、マッテヤとのふたりを立てた。
- 24 そして、こう祈った。「すべての人の心を知っておられる主よ。

- 25 この務<sup>つと</sup>めと使徒<sup>し と しよく</sup>職<sup>つ</sup>の地位<sup>3</sup>を継<sup>つ</sup>がせるために、このふたりのうちのどちらをお選<sup>しめ</sup>びになるか、お示<sup>しめ</sup>してください。ユダは自分のところへ行くために脱<sup>だ</sup>落<sup>つらく</sup>して行きましたから。」
- 26 そしてふたりのためにくじを引くと、くじはマッテヤに当たったので、彼は十一人の使徒<sup>し と</sup>たちに加えられた。

## 二章

- 1 五旬節の日<sup>4</sup>になって、みなが一つ所に集まっていた。
- 2 すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。
- 3 また、災のような<sup>5</sup>分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。
- 4 すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話さしてくださるとおりに、他国のことばで話した。
- 5 さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国から来て住んでいたが、
- 6 この物音が起ると、大ぜいの人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。
- 7 彼らは驚き怪しんで言った。「どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。
- 8 それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くと、いったいどうしたことでしょう。
- 9 私たちは、バルテヤ人、メジャ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントと<sup>6</sup>アジヤ、
- 10 フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、また滞在中のローマ人たちで、
- 11 ユダヤ人もいれば<sup>7</sup>改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは。」
- 12 人々はみな、驚き惑って、互いに「いったいこれはどうしたことか」と言った。
- 13 しかし、ほかに「彼らは<sup>8</sup>甘いぶどう酒に酔っているのだ」と言ってあざける者たちもいた。
- 14 そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。「ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての人々。あなたがたに知っていただきたいことがあります。どうか、私のことばに耳を貸してください。
- 15 今は<sup>9</sup>朝の九時ですから、あなたがたの思っているようにこの人たちは酔っているわけではありません。
- 16 これは、預言者ヨエルによって語られた事です。
- 17 『神は言われる。
- 終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。
- すると、あなたがたの息子や娘は預言し、
- 青年は幻を見、
- 老人は夢を見る。
- 18 その日、わたしのしもべにも、はしためにも、
- わたしの霊を注ぐ。
- すると、彼らは預言する。
- 19 また、わたしは、上は天に不思議なわざを示し、
- 下は地にしるしを示す。
- それは、血と火と立ち上る煙である。
- 20 主の大いなる輝かしい日が来る前に、
- 太陽はやみとなり、月は血に変わる。
- 21 しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』
- 22 イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。
- これは、あなたがた自身がご承知のことです。
- 23 あなたがたは、神の定めた計画と神の予告とによって引き渡されたこの方を、<sup>10</sup>不法な者の手によって十字架につけて殺しました。



24 しかし神は、この方を死の<sup>と</sup><sup>はな</sup><sup>11</sup>苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につなげられていることなど、ありえないからです。

25 ダビデはこの方について、こう言っています。

『私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。

主は、私が動かされないように、

私の右におられるからである。』

26 それゆえ、私の心は楽しみ、

私の舌は大いに喜んだ。

さらに私の肉体も望みの中に安らう。

27 あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、

あなたの聖者が朽ち果てるのを

<sup>ゆる</sup><sup>12</sup>お許しにならないからである。

28 あなたは、私にいのちの道を知らせ、

<sup>み</sup><sup>かお</sup><sup>しめ</sup>御顔を示して、私を喜びで満たしてくださる。』

29 兄弟たち。父祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります。

30 彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとり<sup>ちか</sup>を彼の王位に着かせると誓って言われたことを知っていたのです。

31 それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。

32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。

33 ですから、神の<sup>せいれい</sup><sup>13</sup>右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。

34 ダビデは天に上ったわけではありません。彼は自分でこう言っています。

『主は私の主に言われた。

35 わたしがあなたの敵<sup>てき</sup>をあなたの足台とするまでは

わたしの右の座に着いていなさい。』

36 ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」

37 人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか」と言った。

38 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。

39 なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」

40 ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から<sup>14</sup>救われなさい」と言って彼らに勧めた。

41 そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

42 そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。

43 そして、一同の心に恐れが生じ、<sup>15</sup>使徒たちによって多くの不思議としるしが行われた。

44 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。

45 そして、資産や持ち物を売って、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。

46 そして毎日、心を一つにして宮に集まり、<sup>16</sup>家でパンを裂き、喜びと<sup>まごころ</sup><sup>17</sup>真心をもって食事をともにし、

47 神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

# 三章

- 1 ペテロとヨハネは<sup>18</sup>午後三時の祈りの時間<sup>いの</sup>に宮に上って行った。
- 2 すると、生まれつき足のなえた人が運ばれて来た。この男は、宮に入る人たちから施しを求めるために、毎日「美しの門」という名の宮の門に置いてもらっていた。
- 3 彼は、ペテロとヨハネが宮に入ろうとするのを見て、<sup>ほどこ</sup>施しを求めた。
- 4 ペテロは、ヨハネとともに、その男を見つめて、「私たちを見なさい」と言った。
- 5 男は何かもらえると思って、ふたりに目を注いだ。
- 6 すると、ペテロは、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい」と言って、
- 7 彼の右手を取って立たせた。するとたちまち、彼の足とくるぶしが強くなり、
- 8 おどりが上がつてまっすぐに立ち、歩きだした。そして歩いたり、はねたりしながら、神を<sup>さん び</sup>賛美しつつ、ふたりと一しょに宮に入って行った。
- 9 人々はみな、彼が歩きながら、神を<sup>さん び</sup>賛美しているのを見た。
- 10 そして、これが、<sup>ほどこ</sup>施しを求めるために宮の「美しの門」にすわっていた男だとわかると、この人の身に起こったことに驚き、あきれた。
- 11 この人が、ペテロとヨハネにつきまとっている間に、<sup>ひ じょう</sup>非常に<sup>おどろ</sup>驚いた人々がみないっせいに、ソロモンの廊<sup>ろう</sup>という<sup>かい ゑう</sup>19回廊にいる彼らのところに、やって来た。
- 12 ペテロはこれを見て、人々に向かってこう言った。「イスラエル人たち。なぜこのことに<sup>おどろ</sup>驚いているのですか。なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さとかによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。
- 13 アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの父祖たちの神は、その<sup>20</sup>しもペイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その面前でこの方を拒みました。
- 14 そのうえ、このきよい、正しい方を<sup>こぼ</sup>拒んで、人殺しの男を<sup>しや めん</sup>赦免するように要求し、
- 15 いのちの<sup>21</sup>君を殺しました。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの<sup>しようにん</sup>証人です。
- 16 そして、このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、あなたがたがいま見ており知っているこの人を強くしたのです。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの目の前で完全なからだにしたのです。
- 17 ですから、兄弟たち。私は知っています。あなたがたは、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたのです。
- 18 しかし、神は、すべての<sup>よ げん しや</sup>預言者たちの口を通して、<sup>22</sup>キリストの<sup>じゆなん</sup>受難をあらかじめ語っておられたことを、このように実現されました。
- 19 そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、<sup>23</sup>神に立ち返りなさい。
- 20 それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのために<sup>24</sup>メシヤと定められたイエスを、主が遣わして下さるためなのです。
- 21 このイエスは、神が昔から、<sup>せい</sup>聖なる<sup>よ げん しや</sup>預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。
- 22 モーセはこう言いました。『神である主は、あなたがたのために、<sup>25</sup>私のようなひとりの<sup>よ げん しや</sup>預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。この方があなたがたに語ることはみな聞きなさい。
- 23 その預言者に聞き従わない者はだれでも、民の中から滅ばし絶やされる。』
- 24 また、サムエルをはじめとして、彼に続いて語ったすべての預言者たちも、今の時について宣べました。
- 25 あなたがたは<sup>よ げん しや</sup>預言者たちの子孫です。また、神がアブラハムに、『あなたの子孫によって、地の諸民族はみな祝福<sup>しよく</sup>を受ける』と言って、あなたがたの父祖たちと結ばれたあの契約<sup>けいやく</sup>の子孫です。
- 26 神は、まずその<sup>26</sup>しもべを立てて、あなたがたにお遣わしになりました。それは、この方があなたがたを祝福<sup>しよく</sup>し

て、ひとりひとりをその邪悪じやあくな生活から立ち返らせてくださるためなのです。」

## 四章

- 1 彼らが民に話していると、祭司たち、宮の守衛長、またサドカイ人たちがやって来たが、
- 2 この人たちは、ペテロとヨハネが民を教え、イエスのことを例にあげて死者の復活を宣べ伝えているのに、困り果て、
- 3 彼らに手をかけて捕らえた。そして翌日まで留置することにした。すでに夕方だったからである。
- 4 しかし、みことばを聞いた人々が大ぜい信じ、男の数が五千人ほどになった。
- 5 翌日、民の指導者、長老、学者たちは、エルサレムに集まった。
- 6 大祭司アンナス、カヤパ、ヨハネ、アレキサンデル、そのほか大祭司の一族もみな出席した。
- 7 彼らは使徒たちを真ん中に立たせて、「あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか」と尋問しだした。
- 8 そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。
- 9 私たちがきょう取り調べられているのが、病人に行った良いわざについてであり、その人が<sup>27</sup>何によっていやされたか、ということのためであるなら、
- 10 皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名<sup>28</sup>によるのです。
- 11 『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった』というのはこの方のことです。
- 12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」
- 13 彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。
- 14 そればかりでなく、いやされた人がふたりといっしょに立っているのを見ては、返すことばもなかった。
- 15 彼らはふたりに議会から退場するように命じ、そして互いに協議した。
- 16 彼らは言った。「あの人たちをどうしよう。あの人たちによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全部に知れ渡っているから、われわれはそれを否定できない。
- 17 しかし、これ以上民の間に広がらないために、今後だれにもこの名によって語ってはならないと、彼らをきびしく戒めよう。」
- 18 そこで彼らと呼んで、いっさいイエスの名に<sup>29</sup>よって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。
- 19 ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。
- 20 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」
- 21 そこで、彼らはふたりをさらにおどしたうえで、釈放した。それはみなの方が、この出来事のゆえに神をあがめていたので、人々の手前、ふたりを罰するすべがなかったからである。
- 22 この奇蹟によっていやされた男は四十歳余りであった。
- 23 釈放されたふたりは、仲間のあるところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。
- 24 これを聞いた人々はみな、心をつにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。
- 25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口<sup>30</sup>を通して、こう言われました。
- 『なぜ<sup>31</sup>異邦人たちは騒ぎ立ち、
- もろもろの民はむなしきことを計るのか。
- 26 地の王たちは<sup>32</sup>立ち上がり、

し どうしや  
指導者たちは、主と<sup>はん こう</sup>33キリストに反抗して、  
一つに組んだ。』

27 事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、<sup>い ほうじん たみ</sup>34異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油をそそがれた、あなたの  
の聖なるしもベイエスに逆らってこの都に集まり、

28 あなたの御手とみころによって、あらかじめお定めになったことを行いました。

29 主よ。<sup>おびや ちん</sup>35いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにもことばを大胆に語らせてください。

30 御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なる<sup>せい</sup>36しもベイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせて  
ください。」

31 彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

32 信じた者の<sup>む</sup>37群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有に  
していた。

33 使徒たちは、主イエス<sup>ふつ かつ ひ じょう</sup>38の復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みとそのすべての者の上にあつた。

34 彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、

35 使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである。

36 キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ（訳すと、<sup>やく なぐさ</sup>39慰めの子）と呼ばれていたヨセフも、

37 畑を持っていたので、それを売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

## 五章

- 1 ところが、アナニヤという人は、妻のサツピラとともにその持ち物を売り、
- 2 妻<sup>40</sup>も承知のうで、その代金の一部を残しておき、ある部分を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。
- 3 そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。
- 4 それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの<sup>41</sup>自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」
- 5 アナニヤはこのことばを聞くと、倒れて息が絶えた。そして、これを聞いたすべての人に、非常に恐れが生じた。
- 6 青年たちは立って、彼を包み、運び出して葬った。
- 7 三時間ほどたって、彼の妻はこの出来事を知らずに入って来た。
- 8 ペテロは彼女にこう言った。「あなたがたは地所をこの値段で売ったのですか。私に言いなさい。」彼女は「はい。その値段です」と言った。
- 9 そこで、ペテロは彼女に言った。「どうしてあなたがたは心を合わせて、主の御霊を試みたのですか。見なさい、あなたの夫を葬った者たちが、戸口に来ていて、あなたをも運び出します。」
- 10 すると彼女は、たちまちペテロの足もとに倒れ、息が絶えた。入って来た青年たちは、彼女が死んだのを見て、運び出し、夫のそばに葬った。
- 11 そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちとに、非常に恐れが生じた。
- 12 また、使徒たちの手<sup>42</sup>によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行われた。みなは一つ心になってソロモンの廊にいた。
- 13 ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。
- 14 そればかりか、主を信じる者は男も女もますますふえていった。
- 15 ついに、人々は病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせ、ペテロが通りかかるときには、せめてその影でも、だれかにかかるようにするほどになった。
- 16 また、エルサレムの付近の町々から、大ぜいの人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人などを連れて集まって来たが、その全部がいやされた。
- 17 そこで、大祭司とその仲間たち全部、すなわちサドカイ派の者はみな、ねたみに燃えて立ち上がり、
- 18 使徒たち<sup>43</sup>を捕らえ、留置場に入れた。
- 19 ところが、夜、主の使いが牢の戸を開き、彼らを連れ出し、
- 20 「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばを、ことごとく<sup>44</sup>語りなさい」と言った。
- 21 彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間たちは集まって来て、議会とイスラエル人のすべての長老を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を獄舎にやった。
- 22 ところが役人たちが行ってみると、牢の中には彼らがいなかったので、引き返してこう報告した。
- 23 「獄舎は完全にしまっており、番人たちが戸口に立っていましたが、あけてみると、中にはだれもおりませんでした。」
- 24 宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞いて、いったいこれはどうなっていくのかと、使徒たちのことで当惑した。
- 25 そこへ、ある人がやって来て、「<sup>45</sup>大変です。あなたがたが牢に入れた人たちが、宮の中に立って、人々を教えています」と告げた。
- 26 そこで、宮の守衛長は役人たちといっしょに出て行き、使徒たちを連れて来た。しかし、手荒なことはしなかった。人々に石で打ち殺されるのを恐れたからである。
- 27 彼らが使徒たちを連れて来て議会の中に立たせると、大祭司は使徒たちを問いただして、

- 28 言った。「あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何とということだ。エルサレム中にあなたがたの教をを広めてしまい、そのうえ、あの人の血の責任をわれわれに負わせようとしているではないか。」
- 29 ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。」
- 30 私たちの父祖たちの神は、あなたがたが<sup>46</sup>十字架にかけて<sup>47</sup>殺したイエスを、よみがえらせたのです。
- 31 そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを<sup>48</sup>君とし、救い主として、ご自分の<sup>49</sup>右に上げられました。
- 32 私たちは<sup>50</sup>そのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」
- 33 彼らはこれを聞いて<sup>51</sup>怒り狂い、使徒たちを殺そうと計った。
- 34 ところが、すべての人に尊敬されている律法学者で、ガマリエルというパリサイ人が議会の中に立ち、使徒たちをしばらく外に出させるように命じた。
- 35 それから、議員たちに向かってこう言った。「イスラエルの皆さん。この人々をどう扱うか、よく気をつけてください。
- 36 というのは、先ごろチウダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどありましたが、結局、彼は殺され、従った者はみな散らされて、あとかたもなくなりました。
- 37 その後、人口調査のとき、ガリラヤ人ユダが立ち上がり、民衆をそそのかして反乱を起こしましたが、自分は滅び、従った者たちもみな散らされてしまいました。
- 38 そこで今、あなたがたに申したいのです。あの人たちから手を引き、放っておきなさい。もし、その計画や行動が人から出たものならば、自滅してしまうでしょう。
- 39 しかし、もし神から出たものならば、あなたがたには彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすれば、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」彼らは彼に説得され、
- 40 使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言い渡したうえで釈放した。
- 41 そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。
- 42 そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。



## 六章

- 1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。
- 2 そこで、十二使徒は弟子たち<sup>52</sup>全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことはあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。
- 3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。
- 4 そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」
- 5 この提案は<sup>53</sup>全員の承認するところとなり、彼らは、信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの改宗者ニコラオを選び、
- 6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。そこで使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いた。
- 7 こうして神のことは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。そして、多くの祭司たちが次々に信仰に入った。
- 8 さて、ステパノは恵みと力とに満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとしるしを行っていた。
- 9 ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤや<sup>54</sup>アジヤから来た人々などが立ち上がって、ステパノと議論した。
- 10 しかし、彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった。
- 11 そこで、彼らはある人々をそそのかし、「私たちは彼がモーセと神とをけがすことばを語るのを聞いた」と言わせた。
- 12 また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、彼を襲って捕らえ、議会にひっぱって行った。
- 13 そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。「この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。
- 14 『あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」
- 15 議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように見えた。

## 七章

- 1 大祭司は、「そのとおりか」と尋ねた。
- 2 そこでステパノは言った。「兄弟たち、父たちよ。聞いてください。私たちの父アブラハムが、ハランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、
- 3 『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました。
- 4 そこで、アブラハムはカルデア人の地を出て、ハランに住みました。そして、父の死後、神は彼をそこから今あなたがたの住んでいるこの地にお移しになりましたが、
- 5 ここでは、足の踏み場となるだけのものさえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした。それでも、子どももなかった彼に対して、この地を彼とその子孫に財産として与えることを約束されたのです。
- 6 また神は次のようなことを話されました。『彼の子孫は外国に移り住み、四百年間、奴隷にされ、虐待される。』
- 7 そして、こう言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしがさばく。その後、彼らはのがれ出て、この所で、わたしを礼拝する。』
- 8 また神は、アブラハムに割礼の契約をお与えになりました。こうして、彼にイサクが生まれました。彼は八日目にイサクに割礼を施しました。それから、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブに十二人の族長が生まれました。
- 9 族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売り飛ばしました。しかし、神は彼とともにおられ、
- 10 あらゆる患難から彼を救い出し、エジプト王パロの前で、恵みと知恵をお与えになったので、パロは彼をエジプトと王の家全体を治める大臣に任じました。
- 11 ところが、エジプトとカナンとの全地にききんが起り、大きな災難が襲って来たので、私たちの父祖たちには、食物がなくなりました。
- 12 しかし、ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、初めに私たちの父祖たちを遣わしました。
- 13 二回目のとき、ヨセフは兄弟たちに、自分のことを打ち明け、ヨセフの家族のことがパロに明らかになりました。
- 14 そこで、ヨセフは人をやって、父ヤコブと七十五人の全親族を呼び寄せました。
- 15 ヤコブはエジプトに下り、そこで彼も私たちの父祖たちも死にました。
- 16 そしてシケムに運ばれ、かねてアブラハムがいくらかの金でシケムのハモルの子から買っておいだ墓に葬られました。
- 17 神がアブラハムにお立てになった約束の時が近づくにしたがって、民はエジプトの中にふえ広がり、
- 18 ヨセフのことを知らない別の王がエジプトの王位につくときまで続けました。
- 19 この王は、私たちの同胞に対して策略を巡らし、私たちの父祖たちを苦しめて、幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました。
- 20 このようなときに、モーセが生まれたのです。彼は神の目にかなった、かわいらしい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、
- 21 ついに捨てられたのをパロの娘が拾い上げ、自分の子として育てたのです。
- 22 モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。
- 23 四十歳になったころ、モーセはその兄弟であるイスラエル人を、顧みる心を起こしました。
- 24 そして、同胞のひとりが虐待されているのを見て、その人をかばい、エジプト人を打ち倒して、乱暴されているその人の返返しをしました。
- 25 彼は、自分の手によって神が兄弟たちに救いを与えようとしておられることを、みなが理解してくれるものと思っていたのですが、彼らは理解しませんでした。
- 26 翌日彼は、兄弟たちが争っているところに現れ、和解させようとして、『あなたがたは、兄弟なのだ。それなのにどうしてお互いに傷つけ合っているのか』と言いました。
- 27 すると、隣人を傷つけていた者が、モーセを押しつけてこう言いました。『だれがあなたを、私たちの支配者や

さいばん かん  
裁判官にしたのか。

28 きのうエジプト人を殺したように、私も殺す気か。』

29 このことばを聞いたモーセは、逃げてミデアン<sup>に</sup>の地に身を寄せ、そこで男の子ふたりをもうけました。

30 四十年たったとき、御使いが、モーセに、シナイ山<sup>あら の</sup>の荒野<sup>しば も</sup>で柴<sup>ほのお</sup>の燃える炎<sup>あらわ</sup>の中に現れました。

31 その光景を見たモーセは驚いて、それをよく見ようとして近寄ったとき、主<sup>み</sup>の御声<sup>こえ</sup>が聞こえました。

32 『わたしはあなたの父祖たちの神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である。』そこで、モーセは震え上がり、見定める勇氣もなくなりました。

33 すると、主は彼にこう言われたのです。『あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたの立っている所は聖なる地である。

34 わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難<sup>たみ くなん</sup>を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下つて来た。さあ、行きなさい。わたしはあなたをエジプトに遣わそう。』

35 『だれがあなたを支配者や裁判官にしたのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は柴の中で彼に現れた御使いの手によって、支配者また解放者としてお遣わしになったのです。

36 この人が、彼らを導き出し、エジプトの地で、紅海で、また四十年間荒野で、不思議なわざとしるしを行いました。

37 このモーセが、イスラエルの人々に、『神はあなたがたのために、<sup>よ げん しや</sup>61私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる』と言ったのです。

38 また、この人が、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの父祖たちとともに、荒野<sup>あら の</sup>の<sup>62</sup>集会において、生けるみことばを授かり、あなたがたに与えたのです。

39 ところが、私たちの父祖たちは彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトを<sup>63</sup>なつかしく思っ

40 『私たちに、先立って行く神々を作ってください。私たちをエジプトの地から導き出したモーセは、どうなったのかわかりませんから』とアロンに言いました。

41 そのころ彼らは子牛を作り、この偶像に供え物をささげ、彼らの手で作った物を楽しんでいました。

42 そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の星に仕えるままにされました。預言者たちの書に書いてあるとおりです。

『イスラエルの家よ。あなたがたは

<sup>あら の</sup>荒野にいた四十年の間に、

ほふられた獣<sup>けもの</sup>と供え物<sup>そな もの</sup>とを、

わたしにささげたことがあったか。

43 あなたがたは、モロクの幕屋と

<sup>64</sup>ロンバの神の星をかついでいた。

それらは、あなたがたが拝むために

作った偶像ではないか。

それゆえ、わたしは、あなたがたを

バビロンのかなたへ移す。』

44 私たちの父祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋<sup>まくや</sup>がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました。

45 私たちの父祖たちは、この幕屋を次々に受け継いで、神が彼らの前から異邦人を追い払い、その領土を取らせてくださったときには、ヨシュアとともにそれを運び入れ、ついにダビデの時代となりました。

46 ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの<sup>65</sup>神のために御住まいを得たいと願い求めました。

47 けれども、神のために家を建てたのはソロモンでした。

48 しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。

- 49 『主は言われる。  
天はわたしの王座、  
地はわたしの足の足台である。  
あなたがたは、どのような家を  
わたしのために建てようとするのか。  
わたしの休む所とは、どこか。
- 50 わたしの手が、これらのものを  
みな、造ったのではないか。』
- 51 かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。
- 52 あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者がだれかあったでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。
- 53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」
- 54 人々はこれを聞いて、<sup>66</sup>はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって齒ざしりした。
- 55 しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、
- 56 こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」
- 57 人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いつせいにステパノに殺到した。
- 58 そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。
- 59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは<sup>67</sup>主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」
- 60 そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。

# 八章

1 サウロは、ステパノを殺すことに賛成<sup>さん せい</sup>していた。

その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害<sup>し と ぼう</sup>が起り、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。

2 敬虔<sup>けいけん</sup>な人たちはステパノを葬<sup>ほうむ</sup>り、彼のために非常<sup>ひ じょう</sup>に悲しんだ。

3 サウロは教会を荒らし、家々に入<sup>あ</sup>って、男も女も引きずり出し、次々に牢<sup>ろう</sup>に入れた。

4 他方、散らされた人たちは、みことばを宣<sup>の</sup>べながら、巡<sup>めぐ</sup>り歩いた。

5 ビリボはサマリヤの町に下<sup>くだ</sup>って行き、人々にキリストを宣<sup>の</sup>べ伝えた。

6 群衆<sup>ぐんしゅう</sup>はビリボの話<sup>わ</sup>を聞き、その行<sup>い</sup>っていたしるしを見て、みなそろって、彼の語<sup>かたむ</sup>ることに耳を傾けた。

7 汚<sup>けが</sup>れた霊<sup>れい</sup>につかれた多くの<sup>れい</sup>人々からは、その霊<sup>れい</sup>が大声<sup>さけ</sup>で叫<sup>さけ</sup>んで出て行くし、多くの中風<sup>ちゅうふう</sup>の者や足のなえた者は直<sup>ち</sup>ったからである。

8 それでその町に大きな喜<sup>き</sup>びが起<sup>お</sup>こった。

9 ところが、この町にシモンという人<sup>まじゆつ</sup>がいた。彼は以前からこの町で魔術<sup>おどろ</sup>を行<sup>おどろ</sup>って、サマリヤの人々を驚かし、自分は偉大な者だと話<sup>い だい</sup>していた。

10 小さな者から大きな者<sup>いた</sup>に至<sup>いた</sup>るまで、あらゆる人々が彼に関心<sup>いた</sup>を抱<sup>まじゆつ</sup>き、「この人こそ、大能<sup>たいのう</sup>と呼ばれる、神の力<sup>ちから</sup>だ」と言<sup>い</sup>っていた。

11 人々が彼に関心<sup>いた</sup>を抱<sup>まじゆつ</sup>いたのは、長い間、その魔術<sup>おどろ</sup>に驚<sup>おどろ</sup>かされていたからである。

12 しかし、ビリボが神の国とイエス・キリストの御名<sup>の</sup>について宣<sup>の</sup>べるのを信<sup>の</sup>じた彼らは、男も女もバプテスマを受け<sup>の</sup>た。

13 シモン自身も信<sup>の</sup>じて、バプテスマを受け、いつもビリボにつ<sup>おどろ</sup>いていた。そして、しるしとすばらしい奇蹟<sup>き せき</sup>が行われ<sup>おどろ</sup>るのを見て、驚<sup>おどろ</sup>いていた。

14 さて、エルサレムにいる使徒<sup>し と</sup>たちは、サマリヤの人々が神の<sup>つか</sup>ことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣<sup>つか</sup>わした。

15 ふたりは下<sup>くだ</sup>って行<sup>い</sup>って、人々が聖霊<sup>せいれい</sup>を受け<sup>い</sup>るように祈<sup>いの</sup>った。

16 彼らは主イエスの御名<sup>せいれい</sup>によってバプテスマを受け<sup>せいれい</sup>ただけで、聖霊<sup>せいれい</sup>がまだだれにも下<sup>せいれい</sup>っておられなかったからである。

17 ふたりが彼らの上に手<sup>せいれい</sup>を置くと、彼らは聖霊<sup>せいれい</sup>を受け<sup>せいれい</sup>た。

18 使徒<sup>し と</sup>たちが手<sup>み たま</sup>を置くと御霊<sup>せいれい</sup>が与えられるのを見たシモンは、使徒<sup>し と</sup>たちのところ<sup>し と</sup>に金<sup>し と</sup>を持<sup>し と</sup>って来<sup>し と</sup>て、

19 「私が手<sup>せいれい</sup>を置いた者がだれでも聖霊<sup>せいれい</sup>を受けられるように、この権威<sup>けん い</sup>を私にも下<sup>けん い</sup>さい」と言<sup>い</sup>った。

20 ペテロは彼に向<sup>ほう</sup>かって言<sup>ほう</sup>った。「あなたの金<sup>きん</sup>は、あなたとともに滅<sup>ほろ</sup>びるがよい。あなたは金<sup>きん</sup>で神の賜物<sup>たまもの</sup>を手<sup>たまもの</sup>に入れようと思っているからです。

21 あなたは、この<sup>68</sup>ことについては何の関係<sup>かんけい</sup>もないし、それにあずかることもできません。あなたの心<sup>こころ</sup>が神の前に正<sup>ただ</sup>しくないからです。

22 だから、この悪事<sup>あくじ</sup>を悔<sup>く</sup>い改<sup>あらた</sup>めて、主<sup>いの</sup>に祈<sup>いの</sup>りなさい。あるいは、心に抱<sup>いだ</sup>いた思<sup>し</sup>いが赦<sup>ゆる</sup>されるかもしれません。

23 あなたはまだ苦<sup>く</sup>い胆汁<sup>たんじゆう</sup>と不義<sup>ふぎ</sup>のきずなの中にいることが、私にはよくわかつています。」

24 シモンは答<sup>こた</sup>えて言<sup>い</sup>った。「あなたがたの言<sup>い</sup>われた事<sup>こと</sup>が何も私<sup>わたし</sup>に起<sup>おこ</sup>らないように、私のために主<sup>いの</sup>に祈<sup>いの</sup>ってください。」

25 このようにして、使徒<sup>し と</sup>たちはおごそかにあかしをし、また主<sup>き と</sup>のことばを語<sup>かたむ</sup>って後、エルサレムへの帰途<sup>き と</sup>につき、サマリヤ人の多くの村<sup>ふくいん</sup>でも福音<sup>の</sup>を宣<sup>の</sup>べ伝えた。

26 ところが、主<sup>き と</sup>の使<sup>つか</sup>いがビリボに向<sup>むか</sup>ってこ<sup>こ</sup>う言<sup>い</sup>った。「立<sup>た</sup>って南<sup>みなみ</sup>へ行<sup>い</sup>き、エルサレムからガザに下<sup>くだ</sup>る道<sup>みち</sup>に出<sup>で</sup>なさい。」（<sup>69</sup>このガザは今<sup>いま</sup>、荒<sup>あ</sup>れ果<sup>は</sup>てている。）

- 27 そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、
- 28 いま帰る途中であつた。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。
- 29 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい」と言われた。
- 30 そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが、わかりますか」と言った。
- 31 すると、その人は、「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」と言った。そして、79馬車に乗っていっしょにすわるように、ピリポに頼んだ。
- 32 彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあつた。
- 「ほふり場に連れて行かれる羊のように、  
また、黙々として  
毛を刈る者の前に立つ小羊のように、  
彼は口を開かなかつた。
- 33 彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。  
彼の71時代のことを、だれが話すことができるか。  
彼のいのちは地上から取り去られたのである。」
- 34 宦官はピリポに向かって言った。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」
- 35 ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。
- 36 道を進んで行くうちに、水のある所に来たので、宦官は言った。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」72
- 38 そして馬車を止めさせ、ピリポも宦官も水の中へ降りて行き、ピリポは宦官にバプテスマを授けた。
- 39 水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られたので、宦官はそれから後彼を見なかったが、喜びながら帰って行った。
- 40 それからピリポは73アゾトに現れ、すべての町々を通して福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。

## 九章

- 1 さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する<sup>で し</sup> 脅<sup>おびや</sup>かしと殺害の意に燃えて、大祭司の<sup>も</sup> ところに行き、
- 2 ダマスコの<sup>しよかいどう</sup> 諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。それは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第<sup>し だい</sup> 縛<sup>しば</sup>り上げてエルサレムに引いて来るためであった。
- 3 ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、<sup>とつぜん</sup> 天からの光が彼を巡り照らした。<sup>めぐ て</sup>
- 4 彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するの<sup>はくがい</sup>か」という声を聞いた。
- 5 彼が、「主よ。あなたはどなたですか」と言うと、お答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。
- 6 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならないことが告げられるはずです。」
- 7 同行していた人たちは、<sup>74</sup> 声は聞こえても、だれも見えないので、ものも言えずに立っていた。
- 8 サウロは地面から立ち上がったが、目は開いていても何も見えなかった。そこで人々は彼の手を引いて、ダマスコへ連れて行った。
- 9 彼は三日の間、目が見えず、また飲み食いもしなかった。
- 10 さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に<sup>まほうし</sup> 幻<sup>まほうし</sup>の中で、「アナニヤよ」と言われたので、「主よ。ここにおります」と答えた。
- 11 すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの<sup>たす</sup> 家<sup>たす</sup>に尋ねなさい。そこで、彼は祈<sup>いの</sup>っています。
- 12 彼は、アナニヤという者が入って来て、自分の上に手を置くと、目が再び見えるようになるのを、<sup>ふたたび</sup> <sup>75</sup> 幻<sup>まほうし</sup>で見たとです。」
- 13 しかし、アナニヤはこう答えた。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの<sup>せい と</sup> 聖徒<sup>せい と</sup>たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。
- 14 彼はここでも、あなたの<sup>みな</sup> 御名<sup>みな</sup>を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」
- 15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、<sup>い ほうじん</sup> 異邦人<sup>い ほうじん</sup>、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの<sup>うつわ</sup> 選び<sup>うつわ</sup>の器<sup>うつわ</sup>です。
- 16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」
- 17 そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。「兄弟サウロ。あなたの<sup>と ちゆう</sup> 来る途中<sup>と ちゆう</sup>、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、<sup>ふたたび</sup> 聖霊<sup>せい れい</sup>に満たされるためです。」
- 18 するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、
- 19 食事をして元気づいた。
- サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいた。
- 20 そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。
- 21 これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名<sup>みな</sup>を呼ぶ者たちを滅<sup>ほろ</sup>ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼ら<sup>しば</sup>を縛<sup>しば</sup>って、祭司長<sup>さい し ちよう</sup>たちのところへ引いて行くためではないのですか。」
- 22 しかしサウロはますます力を増し、<sup>76</sup> イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。
- 23 多くの日数がたつて後、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたが、
- 24 その陰謀はサウロに知られてしまった。彼らはサウロを殺してしまおうと、昼も夜も町の門を全部見張<sup>み は</sup>っていた。
- 25 そこで、彼の弟子<sup>で し</sup>たちは、夜中に彼をかごに乗せ、町の城壁<sup>じやう へき</sup>伝いに<sup>り</sup> 降り<sup>り</sup>降<sup>り</sup>ろした。
- 26 サウロはエルサレムに着いて、弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、<sup>で し</sup> みなは彼を弟子<sup>で し</sup>だとは信じないで、<sup>おそ</sup> 恐<sup>おそ</sup>れて

いた。

27 ところが、バルナバは彼を引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に向かって語られたこと、また彼がダマスコでイエスの御名を大胆に宣べた様子などを彼らに説明した。

28 それからサウロは、エルサレムで弟子たちとともにいて自由にはいりし、主の御名によって大胆に語った。

29 そして、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていた。しかし、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。

30 兄弟たちはそれと知って、彼をカイザリヤに連れて下り、タルソへ送り出した。

31 こうして教会は、ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、77信者の数がふえて行った。

32 さて、ペテロはあらゆる所を巡回したが、ルダに住む聖徒たちのところへも下って行った。

33 彼はそこで、八年の間も床に着いているアイネヤという人に会った。彼は中風であつた。

34 ペテロは彼にこう言った。「アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。」すると彼はただちに立ち上がった。

35 ルダとサロンに住む人々はみな、アイネヤを見て、主に立ち返った。

36 ヨッパにタビタ（ギリシヤ語に訳せば、78ドルカス）という女の弟子がいた。この女は、多くの良いわざと施しをしていた。

37 ところが、そのころ彼女は病気になって死に、人々はその遺体を洗って、屋上の間に置いた。

38 ルダはヨッパに近かったので、弟子たちは、ペテロがそこにいと聞いて、人をふたり彼のところへ送って、「すぐに来てください」と頼んだ。

39 そこでペテロは立つて、いっしょに出かけた。ペテロが到着すると、彼らは屋上の間に案内した。やもめたちはみな泣きながら、彼のそばに来て、ドルカスがいっしょにいたころ作ってくれた下着や上着の数々を見せるのであつた。

40 ペテロはみなの方を外に出し、ひざまずいて祈った。そしてその遺体のほうを向いて、「タビタ。起きなさい」と言った。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった。

41 そこで、ペテロは手を貸して彼女を立たせた。そして聖徒たちとやもめたちとを呼んで、生きている彼女を見せた。

42 このことがヨッパ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた。

43 そして、ペテロはしばらくの間、ヨッパで、皮なめしのシモンという人の家に泊まっていた。



# 一〇章

- 1 さて、カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリヤ<sup>79</sup>隊という部隊の百人隊長であった。
- 2 彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていたが、
- 3 ある日の<sup>80</sup>午後三時ごろ、<sup>まぼろし</sup>幻の中で、はっきりと神の御使いを見た。御使いは彼のところに来て、「コルネリオ」と呼んだ。
- 4 彼は、御使いを見つめていると、恐ろしくなって、「主よ。何でしょうか」と答えた。すると御使いはこう言った。「あなたの祈りと施しは神の前に立ち上って、覚えられています。」
- 5 さあ今、ヨッパに人をやって、シモンという人を招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれています。
- 6 この人は皮なめしのシモンという人の家に泊まっていますが、その家は海べにあります。」
- 7 御使いが彼にこう語って立ち去ると、コルネリオはその<sup>81</sup>しもべたちの中のふたりと、側近の部下の中の敬虔な兵士ひとりと呼び寄せ、
- 8 全部のことを説明してから、彼らをヨッパへ遣わした。
- 9 その翌日、この人たちが旅を続けて、町の近くまで来たところ、ペテロは祈りをするために屋上に上った。昼の<sup>82</sup>十二時ごろであった。
- 10 すると彼は非常に空腹を覚え、<sup>83</sup>食事をしたくなった。ところが、食事の用意がされている間に、彼はうつとりと夢ごちになった。
- 11 見ると、天が開けており、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来た。
- 12 その中には、地上のあらゆる種類の四つ足の<sup>84</sup>動物や、はうもの、また、空の鳥などがいた。
- 13 そして、彼に、「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい」という声が聞こえた。
- 14 しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことがありません。」
- 15 すると、再び声があつて、彼にこう言った。「神がきよめた物を、きよくないと言つてはならない。」
- 16 こんなことが三回あつて後、その入れ物はすぐ天に引き上げられた。
- 17 ペテロが、いま見た<sup>85</sup>幻はいったいどういうことだろう、と思ひ惑っていると、ちょうどそのとき、コルネリオから遣わされた人たちが、シモンの家をたずね当てて、その門口に立っていた。
- 18 そして、声をかけて、ペテロと呼ばれるシモンという人がここに泊まっているだろうかと尋ねていた。
- 19 ペテロが<sup>86</sup>幻について思い巡らしているとき、御霊が彼にこう言われた。「見なさい。<sup>86</sup>三人の人があなたをたずねて来ています。」
- 20 さあ、下に降りて行って、<sup>87</sup>ためらわずに、彼らといっしょに行きなさい。彼らを遣わしたのはわたしです。」
- 21 そこでペテロは、その人たちのところへ降りて行って、こう言った。「あなたがたのたずねているペテロは、私です。どんなご用でおいでになったのですか。」
- 22 すると彼らはこう言った。「百人隊長コルネリオという正しい人で、神を恐れかしこみ、ユダヤの全国民に評判の良い人が、あなたを自分の家にお招きして、あなたからお話を聞くように、聖なる御使いによって示されました。」
- 23 それで、ペテロは、彼らを中に入れて泊ませた。
- 24 明くる日、ペテロは、立って彼らといっしょに出かけた。ヨッパの兄弟たちも数人同行した。
- 25 ペテロが着くと、コルネリオは出迎えて、彼の足もとに<sup>88</sup>ひれ伏して拝んだ。
- 26 するとペテロは彼を起こして、「お立ちなさい。私もひとりの人間です」と言った。
- 27 それから、コルネリオとことばをかわしながら家に入り、多くの人が集まっているのを見て、

28 彼らにこう言った。「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間に入ったり、訪問したりするのは、律法にかなわしめないことです。ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言けがってはならないことを示しめしてくださいました。

29 それで、お迎えを受けたとき、ためらわずに來たのです。そこで、お尋ねしますが、あなたがたは、いったいどういわうわけで私をお招きになつたのですか。」

30 するとコルネリオがこう言った。「四日前のこの時刻に、私が家じこくで89午後三時の祈りをしていいのますと、90どうでしょう、輝いた衣を着た人きが、私の前に立たつて、

31 こう言いいました。『コルネリオ。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられている。

32 それで、ヨッパに人をやつてシモンを招きなさい。彼の名はペテロとも呼ばれている。この人は海べにある、皮なめしのシモンの家に泊まとっている。』

33 それで、私はすぐあなたのところへ人を送つたのですが、よくおいでくださいました。いま私たちは、主があなたにお命じになつたすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております。」

34 そこでペテロは、口を開いてこう言いった。

「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよつたことをなさらず、

35 どの国の人であつても、神を91恐れかしこみ、正義を行せいぎう人なら、神に受け入れられるのです。

36 92神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です。

37 あなたがたは、ヨハネが宣べ伝えたバプテスマの後、ガリラヤから始のまつて、ユダヤ全土に起こつた事がらを、よくご存じです。

38 93それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。

39 私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行われたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。

40 しかし、神はこのイエスを三日目によみがえらせ、現れさせてくださいました。

41 しかし、それはすべての人々にはなく、神によって前もつて選ばれた証人である私たちにです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられて後、ごいっしょに94食事をしました。

42 イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。

43 イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しを受けられる、とあかししています。」

44 ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになつた。

45 割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに來た人たちは、異邦人に聖霊の賜物が注がれたので驚いた。

46 彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。そこでペテロはこう言いった。

47 「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いっただれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができまみしょうか。」

48 そして、イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるように彼らに命じた。彼らは、ペテロに数日間滞在するように願たいざいつた。

## 一章

- 1 さて、使徒たちやユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のみことばを受け入れた、ということを目にした。
- 2 そこで、ペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を受けた者たちは、彼を非難して、
- 3 「<sup>95</sup>あなたは割礼のない人々の<sup>96</sup>ところに行って、彼らと一つしよに食事をした」と言った。
- 4 そこでペテロは口を開いて、事の次第を順序正しく説明して言った。
- 5 「私がヨッパの町で祈っていると、うっとり夢ごちになり、幻を見ました。四隅をつり下げられた大きな敷布のような入れ物が天から降りて来て、私のところに届いたのです。
- 6 その中をよく見ると、地の四つ足<sup>97</sup>の獣、野獣、はうもの、空の鳥などが見えました。
- 7 そして、『ペテロ。さあ、ほふって食べなさい』と言う声を聞きました。
- 8 しかし私は、『主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません』と言いました。
- 9 すると、もう一度天から声がして、『神がきよめた物を、きよくないと<sup>98</sup>言うてはならない』というお答えがありました。
- 10 こんなことが三回あって後、全部の物がまた天へ引き上げられました。
- 11 すると、<sup>99</sup>どうでしょう。ちょうどそのとき、カイザリヤから私のところへ遭わされた三人の人が、私たちのいた家の前に来ていました。
- 12 そして御霊は私に、<sup>100</sup>ためらわずにその人たちと一つしよに行くように、と言われました。そこで、この六人の兄弟たちも私に同行して、私たちはその人の家に入って行きました。
- 13 その人が私たちに告げたところによると、彼は御使いを見ましたが、御使いは彼の家の中に立って、『ヨッパに使いをやつて、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。
- 14 その人があなたとあなたの家にいるすべての人を救うことばを話してくれます』と言ったということです。
- 15 そこで私が話し始めていると、聖霊が、あの最初のとき私たちにお下りになったと同じように、彼らの上にもお下りになったのです。
- 16 私はそのとき、主が、『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは、聖霊によってバプテスマを授けられる』と言われたみことばを思い起こしました。
- 17 こういうわけですから、私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神<sup>101</sup>のなさることを妨げることができません。」
- 18 人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。
- 19 さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかつた。
- 20 ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからは<sup>102</sup>ギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。
- 21 そして、主の御手が彼らとともにあつたので、大ぜいの人が信じて主に立ち返つた。
- 22 この知らせが、エルサレムにある教会に聞こえたので、彼らはバルナバをアンテオケに派遣した。
- 23 彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みな心が堅く保つて、常に主にとどまつているようにと励ました。
- 24 彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であつた。こうして、大ぜいの人が主に<sup>103</sup>導かれた。
- 25 バルナバはサウロを捜しにタルソへ行き、
- 26 彼に会つて、アンテオケに連れて来た。そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。
- 27 そのころ、預言者たちがエルサレムからアンテオケに下つて来た。

- 28 その中のひとりでアガボという人が立って、世界中に大きなことが起こると御霊<sup>みたま</sup>によって預言<sup>よげん</sup>したが、はたしてそれがクラウドオの治世<sup>でし</sup>に起こった。
- 29 そこで、弟子<sup>でし</sup>たちは、それぞれの力<sup>ちから</sup>に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟<sup>きょうだい</sup>たちに救援<sup>きゆうえん</sup>の物を送ることに決めた。
- 30 彼らはそれを実行して、バルナバとサウロの手によって長老<sup>ちやうろう</sup>たちに送った。

## 一二章

- 1 そのころ、<sup>104</sup>ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、
- 2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。
- 3 それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であつた。
- 4 ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであつたからである。
- 5 こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。
- 6 ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。
- 7 すると<sup>105</sup>突然、主の御使いが現れ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたいて彼を起こし、「急いで立ち上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。
- 8 そして御使いが、「帯を締めて、くつをはきなさい」と言うので、彼はそのとおりにした。すると、「上着を着て、私について来なさい」と言った。
- 9 そこで、外に出て、御使いについて行つた。彼には御使いのしている事が現実の事だとはわからず、幻を見ているのだと思われた。
- 10 彼らが、第一、第二の衛衛を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた。
- 11 そのとき、ペテロは我に返つて言つた。「今、確かにわかつた。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての<sup>106</sup>災いから、私を救い出してくださつたのだ。」
- 12 こうとわかつたので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行つた。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。
- 13 彼が入口の戸をたたくと、ログという女中が応対に出て来た。
- 14 ところが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり門をあけもしないで、奥へ駆け込み、ペテロが門の外に立っていることをみなに知らせた。
- 15 彼らは、「あなたは気が狂っているのだ」と言つたが、彼女はほんとうだと言い張つた。そこで彼らは、「それは彼の御使いだ」と言っていた。
- 16 しかし、ペテロはたたき続けていた。彼らが門をあけると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。
- 17 しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださつたかを、彼らに話して聞かせた。それから、「このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください」と言つて、ほかの所へ出て行つた。
- 18 さて、朝になると、ペテロはどうなつたのかと、兵士たちの間に大騒ぎが起こつた。
- 19 ヘロデは彼を捜したが見つけることができないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じ、そして、ユダヤからカイザリヤの下つて行つて、そこに滞在した。
- 20 さて、ヘロデはツロとシドンの人々に対して強い敵意を抱いていた。そこで彼らはみなでそろつて彼をたずね、王の侍従ブラストに取り入つて和解を求めた。その地方は王の国から食糧を得ていたからである。
- 21 定められた日に、ヘロデは王服を着けて、<sup>107</sup>王座に着き、彼らに向かつて演説を始めた。
- 22 そこで民衆は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。
- 23 するとたちまち、主の使いがヘロデを打つた。ヘロデが神に栄光を帰さなかつたからである。彼は虫にかまれて息が絶えた。
- 24 主のみことばは、ますます盛んになり、広まて行つた。
- 25 任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレム<sup>108</sup>から帰つて来た。



# 一三章

- 1 さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。
- 2 彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われた。
- 3 そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。
- 4 ふたりは聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った。
- 5 サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ始めた。彼らはヨハネを助手として連れていた。
- 6 島全体を巡回して、パボスまで行ったところ、にせ預言者で、名をバルイエスというユダヤ人の魔術師に出会った。
- 7 この男は地方総督セルギオ・パウロのもとにいた。この総督は賢明な人であって、バルナバとサウロを招いて、神のことばを聞きたいと思っていた。
- 8 ところが、魔術師エルマ（エルマという名を訳すと魔術師）は、ふたりに反対して、総督を信仰の道から遠ざけようとした。
- 9 しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、
- 10 言った。「ああ、あらゆる偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。
- 11 見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる」と言った。するとたちまち、かすみとやみが彼をおおったので、彼は手を引いてくれる人を捜し回った。
- 12 この出来事を見た総督は、主の教えに驚嘆して信仰に入った。
- 13 パウロの一行は、パボスから船出して、パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰った。
- 14 しかし彼らは、ペルガから進んでピンデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂に入って席に着いた。
- 15 律法と預言者の朗読があつて後、会堂の管理者たちが、彼らのところに人をやってこう言わせた。「兄弟たち。あなたがたのうちどなたか、この人たちのために奨励のことがあったら、どうぞお話しください。」
- 16 そこでパウロが立ち上がり、手を振りながら言った。
- 「イスラエルの人たち、ならびに神を恐れかしこむ方々。よく聞いてください。
- 17 この民イスラエルの神は、私たち父祖たちを選び、民がエジプトの地に滞在していた間にこれを強大にし、御腕を高く上げて、彼らをその地から導き出してくださいました。
- 18 そして約四十年間、荒野で<sup>109</sup>彼らを耐え忍ばれました。
- 19 それからカナンの地で、七つの民を滅ばし、その地を相続財産として分配されました。これが、約四百五十年間のことです。
- 20 その後、預言者サムエルの時代までは、さばき人たちをお遣わしになりました。
- 21 それから彼らが王をほしがったので、神はベニヤミン族の人、キスの子サウロを四十年間お与えになりました。
- 22 それから、彼を退けて、ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかしして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしのこころを余すところなく実行する。』
- 23 神は、このダビデの子孫から、約束に従つて、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました。
- 24 この方がおいでになる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に、前もって悔い改めのバプテスマを宣べ伝えていました。
- 25 ヨハネは、その一生を終えようとするころ、こう言いました。『<sup>110</sup>あなたがたは、私をだれと思うのですか。私

はその方ではありません。ご覧なさい。その方は私のあとからおいでになります。私は、その方のくつひもを解く  
ね 値うちもありません。』

26 兄弟の方々、アブラハムの子孫の方々、ならびに皆さんの中で神を恐れかしこむ方々。この救いのことばは、私た  
ちに送られているのです。

27 エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者のことばを理  
解せず、イエスを罪に定めて、その預言を成就させてしまいました。

28 そして、死罪に当たる何の理由も見いだせなかったのに、イエスを殺すことをピラトに強要したのです。

29 こうして、イエスについて書いてあることを全部成し終えて後、**111**イエスを**112**十字架から取り降ろして墓の中に  
おさ 納めました。

30 しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせたのです。

31 イエスは幾日にもわたり、ご自分といっしょにガリラヤからエルサレムに上った人たちに、現れました。きよ  
う、その人たちがこの民に対してイエスの証人となっています。

32 私たちは、神が父祖たちに対してなされた約束について、あなたがたに良い知らせをしているのです。

33 神は、イエスをよみがえらせ、それによって、**113**私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、  
『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』と書いてあるとおりです。

34 神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちることのない方とされたことについては、『わたしはダビ  
デに約束した聖なる確かな祝福を、あなたがたに与える』というように言われていました。

35 ですから、ほかの所でこう言っておられます。『あなたは、あなたの**114**聖者を朽ち果てるままにはしておかれな  
い。』

36 ダビデは、**115**その生きていた時代において神のみこころに仕えて後、死んで父祖たちの仲間に加えられ、ついに  
く は 朽ち果てました。

37 しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちることがありませんでした。

38 ですから、兄弟たち。あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方によるということを、よく知っておい  
てください。

39 モーセの律法によっては**116**解放されることのできなかったすべての点について、信じる者はみな、この方によ  
て、**117**解放されるのです。

40 ですから、**118**預言者に言われているような事が、あなたがたの上に起こらないように気をつけなさい。

41 『見よ。あざける者たち。驚け。そして滅びよ。

わたしはおまえたちの時代に一つのことをする。

それは、おまえたちに、どんなに説明しても、

とうてい信じられないほどのことである。』」

42 ふたりが会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じ**119**ことについて話してくれるように頼んだ。

43 会堂の集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロとバルナバについて来たので、  
ふたりは彼らと話し合って、いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた。

44 次の安息日には、ほとんど町中の人が、**120**神のことばを聞きに集まって来た。

45 しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなくののしった。

46 そこでパウロとバルナバは、はつきりこう宣言した。「神のことばは、まずあなたがたに語られなければならな  
かったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。

見なさい。私たちは、これから異邦人のほうへ向かいます。

47 なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。

『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。



あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである。』」  
い はうじん

48 異邦人たちは、それを聞いて喜び、<sup>121</sup>主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った。  
さん び えい えん

49 こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。

50 ところが、ユダヤ人たちは、神を<sup>122</sup>敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその<sup>123</sup>地方から追い出した。  
うやま き ふ じん せん どう はく がい

51 ふたりは、彼らに対して足のちりを払い落として、イコニウムへ行った。  
はら お

52 弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。  
で し せいれい

## 一四章

1 イコニオムでも、ふたりは<sup>124</sup>連れ立ってユダヤ人の会堂に入り、話をすると、ユダヤ人もギリシヤ人も大ぜいの人々が信仰に入った。

2 しかし、信じようとしな<sup>い</sup>いユダヤ人たちは、異邦人たちをそそのかして、兄弟たちに対し悪意を抱かせた。

3 それでも、ふたりは長らく滞在し、主によって大胆に語った。主は、彼らの手にしるしと不思議なわざを行わせ、御恵みのことばの証明をされた。

4 ところが、町の人々は二派に分かれ、ある者はユダヤ人の側につき、ある者は使徒たちの側についた。

5 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちといっしょになって、使徒たちをはずかしめて、石打ちにしようと企てたとき、

6 ふたりはそれを知って、ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、

7 そこで福音の宣教を続けた。

8 ルステラでのことであるが、ある足のきかない人がすわっていた。彼は生まれつき足のなえた人で、歩いたことがなかった。

9 この人がパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼に目を留め、<sup>125</sup>いやされる信仰があるのを見て、

10 大声で、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は飛び上がって、歩き出した。

11 パウロのしたことを見た群衆は、声を張り上げ、ルカオニヤ語で、「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ」と言った。

12 そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼んだ。

13 すると、町の門の前にあるゼウス神殿の祭司は、雄牛数頭と花飾りを門の前に携えて来て、群衆といっしょに、いけにえをささげようとした。

14 これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは、衣を裂いて、群衆の中に駆け込み、叫びながら、

15 言った。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのような<sup>126</sup>むなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。

16 過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。

17 とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです。」

18 こう言って、ようやくのことで、群衆が彼らにいけにえをささげるのをやめさせた。

19 ところが、アンテオケとイコニオムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。

20 しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かった。

21 彼らはその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、ルステラとイコニオムとアンテオケとに引き返して、

22 弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ」と言った。

23 また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈って後、彼らをその信じていた主にゆだねた。

24 ふたりはピンデヤを通してパンフリヤに着き、

25 ペルガでみことばを語ってから、アタリヤに下り、

26 そこから船でアンテオケに帰った。そこは、彼らがいま成し遂げた働きのために、以前神の恵みにゆだねられて送り出された所であった。

27 そこに着くと、教会の人々を集め、神が彼らとともにいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。

28 で し す  
そして、彼らはかなり長い期間を弟子たちとともに過ごした。

# 一五章

- 1 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。
- 2 そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。
- 3 彼らは教会の人々に見送られ、フェニキヤとサマリヤを通る道々で、異邦人の改宗のことを詳しく話したので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。
- 4 エルサレムに着くと、彼らは教会と使徒たちと長老たちに迎えられ、神が彼らとともにいて行われたことを、みなに報告した。
- 5 しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである」と言った。
- 6 そこで使徒たちと長老たちは、この問題を検討するために集まった。
- 7 激しい論争があつて後、ペテロが立ち上がって言った。「兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。」
- 8 そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、
- 9 私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。
- 10 それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの父祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。
- 11 私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」
- 12 すると、全会衆は沈黙してしまった。そして、バルナバとパウロが、彼らを通して神が異邦人の間で行われたしるしと不思議なわざについて話すのに、耳を傾けた。
- 13 ふたりが話し終えると、ヤコブがこう言った。「兄弟たち。私の言うことを聞いてください。
- 14 神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。
- 15 預言者たちのことばもこれと一致しており、それにはこう書いてあります。
- 16 『この後、わたしは帰って来て、  
倒れたダビデの幕屋を建て直す。  
すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、  
それを元どりにする。』
- 17 それは、残った人々、すなわち、  
わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、  
主を求めるようになるためである。
- 18 大昔からこれらのことを知らせておられる主が、  
こう言われる。』
- 19 そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。
- 20 ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思ひます。
- 21 昔から、町ごとにモーセの律法を宣べる者がいて、それが安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」
- 22 そこで使徒たちと長老たち、また、全教会もともに、彼らの中から人を選んで、パウロやバルナバといつしよにアンテオケへ送ることを決議した。選ばれたのは兄弟たちの中の指導者たちで、バルサバと呼ばれるユダおよびシラスであつた。
- 23 彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。「兄弟である使徒および長老たちは、アンテオケ、シリヤ、キリ

キヤに<sup>い ほうじん</sup>いる異邦人の兄弟たちに、あいさつをいたします。

24 私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言<sup>い</sup>ってあなたがたを動<sup>どう</sup>揺させ、あなたがたの心<sup>こゝろ</sup>を乱<sup>みだ</sup>したことを聞<sup>き</sup>きました。

25 そこで、私たちは人々を選び、私たちの愛<sup>あい</sup>するバルナバおよびパウロといっしょに、あなたがたのところへ送<sup>おく</sup>ることに衆議一決<sup>しゅうぎいつけつ</sup>しました。

26 このバルナバとパウロは、私たちの主イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人たちです。

27 こういうわけで、私たちはユダとシラスを送<sup>おく</sup>りました。彼らは口頭<sup>くごう</sup>で同じ趣旨<sup>しゆし</sup>のことを伝えるはず<sup>はず</sup>です。

28 聖霊<sup>せいれい</sup>と私たちは、次のぜひ必要な事<sup>こと</sup>のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷<sup>じゆうか</sup>も負<sup>お</sup>わせないことを決めました。

29 すなわち、偶像<sup>ぐうざう</sup>に供えた物<sup>もの</sup>と、血<sup>ち</sup>と、絞<sup>し</sup>め殺<sup>ころ</sup>した物<sup>もの</sup>と、不品行<sup>ふひんこう</sup>とを避<sup>さ</sup>けることです。これらのことを注意<sup>ちゆうい</sup>深く避<sup>さ</sup>けてい<sup>い</sup>れば、それで結構<sup>けつこう</sup>です。以上。」

30 さて、一行は送<sup>おく</sup>り出<sup>で</sup>されて、アンテオケに下<sup>くだ</sup>り、教会の人々を集めて、手紙<sup>てがは</sup>を手渡<sup>てわた</sup>した。

31 それを読<sup>よ</sup>んだ人々は、その励<sup>はげ</sup>ましによって喜<sup>よろこ</sup>んだ。

32 ユダもシラスも預言者<sup>よげんしや</sup>であつたので、多くのことばをもつて兄弟<sup>はげ</sup>たちを励<sup>はげ</sup>まし、また力<sup>ちから</sup>づけた。

33 彼らは、しばらく滞<sup>たいざい</sup>在<sup>ざい</sup>して後、兄弟<sup>あいで</sup>たちの平安のあいさつに送<sup>おく</sup>られて、彼らを送<sup>おく</sup>り出<sup>で</sup>した人々のところへ帰<sup>かへ</sup>って行<sup>い</sup>った。[130](#)

35 パウロとバルナバはアンテオケにとどまつて、ほかの多くの<sup>の</sup>人々とともに、主のみことばを教<sup>の</sup>え、宣<sup>つた</sup>べ伝<sup>でん</sup>えた。

36 幾日<sup>いくにち</sup>かたつて後、パウロはバルナバにこう言<sup>い</sup>った。「先に主のことばを伝<sup>でん</sup>えたすべての町々の兄弟<sup>あいで</sup>たちのところ<sup>ところ</sup>に、またたずねて行<sup>い</sup>って、どうしているか見て来<sup>き</sup>ようではありませんか。」

37 ところが、バルナバは、マルコとも呼<sup>よ</sup>ばれるヨハネもいっしょに連<sup>つ</sup>れて行<sup>い</sup>くつもりであつた。

38 しかしパウロは、パンフリヤで一行<sup>はな</sup>から離<sup>はな</sup>れてしま<sup>い</sup>い、仕事のために同行<sup>どうぎょう</sup>しなかつたような者<sup>もの</sup>はいっしょに連<sup>つ</sup>れて行<sup>い</sup>かないほうがよいと考えた。

39 そして激<sup>はげ</sup>しい反目<sup>はんもく</sup>となり、その結果、互<sup>たが</sup>いに別行動<sup>べつぎょう</sup>をとることになつて、バルナバはマルコを連<sup>つ</sup>れて、船<sup>ふね</sup>でキプロスに渡<sup>わた</sup>って行<sup>い</sup>った。

40 パウロはシラスを選び、兄弟<sup>あいで</sup>たちから主の恵<sup>めぐ</sup>みにゆだねられて出<sup>で</sup>発<sup>はつ</sup>した。

41 そして、シリヤおよびキリキヤを通<sup>しよきようかい</sup>り、諸教会<sup>しよきようかい</sup>を力<sup>ちから</sup>づけた。

## 一六章

- 1 それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子<sup>で し しんじや ふ じん</sup>がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、
- 2 ルステラとイコニオムとの兄弟<sup>ひょうげん</sup>たちの間で評判の良<sup>よ</sup>い人であった。
- 3 パウロは、このテモテを連れて行きたかったので、その地方にいるユダヤ人の手前<sup>かつれい</sup>、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることを、みな<sup>じゆんかい</sup>が知<sup>し</sup>っていたからである。
- 4 さて、彼らは町々を巡<sup>めぐ</sup>回<sup>わい</sup>して、エルサレムの使徒<sup>しと</sup>たちと長老<sup>ちやうろう</sup>たちが決めた規定<sup>きてい</sup>を守らせようと、人々にそれを伝えた。
- 5 こうして諸教会は、その信仰<sup>しきやうかい</sup>を強<sup>しん</sup>められ、日ごと<sup>こう</sup>に人数を増<sup>ま</sup>して行<sup>い</sup>った。
- 6 それから彼らは、**131**アジャでみことばを語<sup>かた</sup>ることを聖霊<sup>せいれい</sup>によって禁<sup>きん</sup>じられたので、**132**フルギヤ・ガラテヤの地方を通<sup>とほ</sup>った。
- 7 こうしてムシヤに面<sup>めん</sup>した所<sup>ところ</sup>に来<sup>き</sup>たとき、ピテニヤのほうに行<sup>い</sup>こうとしたが、イエスの御霊<sup>みたま</sup>がそれをお許<sup>ゆる</sup>しにならなかつた。
- 8 それでムシヤを通<sup>とほ</sup>って、トロアスに下<sup>くだ</sup>った。
- 9 ある夜、パウロは幻<sup>まぼろし</sup>を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前<sup>まへ</sup>に立<sup>た</sup>って、「マケドニヤに渡<sup>わた</sup>って来て、私<sup>わたし</sup>たちを助けてください」と懇願<sup>こんがん</sup>するのであつた。
- 10 パウロがこの幻<sup>まぼろし</sup>を見たとき、私<sup>わたし</sup>たちはただちにマケドニヤへ出<sup>で</sup>かけることにした。神<sup>かん</sup>が私<sup>わたし</sup>たちを招<sup>まね</sup>いて、彼らに福音<sup>ふくいん</sup>を宣<sup>のたま</sup>へさせるのだ、と確信<sup>かくしん</sup>したからである。
- 11 **133**そこで、私<sup>わたし</sup>たちはトロアスから船<sup>ふね</sup>に乗り、サモトラケに直航<sup>よくじつ</sup>して、翌日<sup>あした</sup>ネアポリスに着<sup>い</sup>いた。
- 12 それからピリビに行<sup>い</sup>ったが、ここはマケドニヤのこの地方第一<sup>い</sup>の町<sup>まち</sup>で、植民都市<sup>いく</sup>であつた。私<sup>わたし</sup>たちはこの町に幾日<sup>いく</sup>か滞在<sup>たいざい</sup>した。
- 13 安息日<sup>あんそくにち</sup>に、私<sup>わたし</sup>たちは町の門<sup>かど</sup>を出<sup>で</sup>て、祈<sup>いの</sup>り場<sup>ば</sup>があると思<sup>おも</sup>われた川岸<sup>かわぎし</sup>に行<sup>い</sup>き、そこに腰<sup>こし</sup>をおろして、集<sup>あ</sup>まった女<sup>おんな</sup>たちに話<sup>わ</sup>した。
- 14 テアテラ市の紫<sup>むらさき</sup>布<sup>ぬの</sup>の商人<sup>かうじん</sup>で、神<sup>かみ</sup>を敬<sup>うやま</sup>う、ルデヤという女<sup>おんな</sup>が聞<sup>き</sup>いていたが、主<sup>しゅ</sup>は彼女<sup>かの</sup>の心<sup>こころ</sup>を開<sup>ひら</sup>いて、パウロの語<sup>かた</sup>る事<sup>こと</sup>に心<sup>こころ</sup>を留<sup>とど</sup>めるようにされた。
- 15 そして、彼女<sup>かの</sup>も、またその家族<sup>けぞく</sup>もバプテスマを受<sup>う</sup>けたとき、彼女<sup>かの</sup>は、「私<sup>わたし</sup>を主<sup>しゅ</sup>**134**に忠<sup>あやう</sup>実<sup>じつ</sup>な者<sup>もの</sup>とお思いでしたら、どうか、私<sup>わたし</sup>の家<sup>いえ</sup>に来てお泊<sup>とど</sup>まりください」と言<sup>い</sup>って頼<sup>たの</sup>み、強<sup>し</sup>いてそうさせた。
- 16 私<sup>わたし</sup>たちが祈<sup>いの</sup>り場<sup>ば</sup>に行く途中<sup>ちゆうちゆう</sup>、占<sup>うらな</sup>いの霊<sup>れい</sup>につかれ<sup>つか</sup>れた若い女<sup>わか</sup>奴隷<sup>おんな</sup>に出<sup>で</sup>会<sup>かい</sup>つた。この女<sup>おんな</sup>は占<sup>うらな</sup>いをして、主人<sup>しゅじん</sup>たちに多<sup>おほい</sup>くの利益<sup>りえき</sup>を得<sup>え</sup>させている者<sup>もの</sup>であつた。
- 17 彼女<sup>かの</sup>はパウロと私<sup>わたし</sup>たちのあとについて来<sup>き</sup>て、「この人<sup>ひと</sup>たちは、いと高<sup>たか</sup>き神<sup>かみ</sup>のしもべたちで、救<sup>きう</sup>いの道<sup>みち</sup>をあなた<sup>あなた</sup>がたに宣<sup>のたま</sup>へてい<sup>い</sup>る人<sup>ひと</sup>たちです」と叫<sup>こゑ</sup>び続<sup>つづ</sup>けた。
- 18 幾日<sup>いくにち</sup>もこんなことをする<sup>こと</sup>ので、困<sup>こま</sup>り果<sup>は</sup>てたパウロは、振<sup>は</sup>り返<sup>かへ</sup>ってその霊<sup>れい</sup>に、「イエス・キリストの御名<sup>み</sup>によつて命<sup>いのち</sup>じ<sup>じ</sup>る。この女<sup>おんな</sup>から出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>け」と言<sup>い</sup>った。すると即座<sup>そくざ</sup>に、霊<sup>れい</sup>は出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>った。
- 19 彼女<sup>かの</sup>の主人<sup>しゅじん</sup>たちは、もうける望<sup>のぞ</sup>みが**135**なくな<sup>な</sup>つたのを見て、パウロとシラスを捕<sup>と</sup>らえ、役人<sup>やくにん</sup>たちに訴<sup>う</sup>えるため広場<sup>ひろば</sup>へ引<sup>ひ</sup>き立<sup>た</sup>てて行<sup>い</sup>った。
- 20 そして、ふたりを長官<sup>かん</sup>たちの前<sup>まへ</sup>に引<sup>ひ</sup>き出<sup>で</sup>してこ<sup>こ</sup>う言<sup>い</sup>った。「この者<sup>もの</sup>たちはユダヤ人<sup>みだ</sup>でありまして、私<sup>わたし</sup>たちの町<sup>まち</sup>をかき乱<sup>みだ</sup>し、
- 21 ローマ人<sup>さいよう</sup>である私<sup>わたし</sup>たちが、採<sup>さい</sup>用<sup>よう</sup>も実<sup>じつ</sup>行<sup>ぎやう</sup>もしてはならない風習<sup>ふうしゅう</sup>を宣<sup>せん</sup>伝<sup>でん</sup>しております。」
- 22 群衆<sup>ぐんしゅう</sup>もふたりに反<sup>はん</sup>対<sup>たい</sup>して立<sup>た</sup>つたので、長官<sup>かん</sup>たちは、ふたりの着物<sup>ちやくぶつ</sup>をはいでむちで打<sup>う</sup>つように命<sup>めい</sup>じ、
- 23 何<sup>なん</sup>度もむちで打<sup>う</sup>たせてから、ふたりを牢<sup>ろう</sup>に入れて、看守<sup>かんしゆ</sup>には厳重<sup>げんじゆう</sup>に番<sup>ばん</sup>をするように命<sup>めい</sup>じた。
- 24 この命<sup>めい</sup>令<sup>れい</sup>を受<sup>う</sup>けた看守<sup>かんしゆ</sup>は、ふたりを輿<sup>こ</sup>の牢<sup>ろう</sup>に入れ、足<sup>あし</sup>に足<sup>あし</sup>かせを掛<sup>か</sup>けた。

- 25 真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。
- 26 ところが突然、大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまちとびらが全部あいて、みな鎖が解けてしまった。
- 27 目をさました看守は、見ると、牢のとびらがあいているので、囚人たちが逃げてしまったものと思い、剣を抜いて自殺しようとした。
- 28 そこでパウロは大声で、「自害してはいけない。私たちはみなここにいる」と叫んだ。
- 29 看守はあかりを取り、駆け込んで来て、パウロとシラスとの前に震えながらひれ伏した。
- 30 そして、ふたりを外に連れ出して「先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。
- 31 ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言った。
- 32 そして、彼とその家の者全部に136主のことばを語った。
- 33 看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。
- 34 それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、137全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。
- 35 夜が明けると、長官たちは警吏たちを送って、「あの人たちを釈放せよ」と言われた。
- 36 そこで看守は、この命令をパウロに伝えて、「長官たちが、あなたがたを釈放するようにと、使いをよこしました。どうぞ、ここを出て、ご無事に行ってください」と言った。
- 37 ところが、パウロは、警吏たちにこう言った。「彼らは、ローマ人である私たちを、取り調べもせずに公衆の前でむち打ち、牢に入れてしまいました。それなのに今になって、ひそかに私たちを送り出そうとするのですか。とてもない。彼ら自身で出向いて来て、私たちを連れ出すべきです。」
- 38 警吏たちは、このことばを長官たちに報告した。すると長官たちは、ふたりがローマ人であると聞いて恐れ、
- 39 自分が出向いて来て、わびを言い、ふたりを外に出して、町から立ち去ってくれるように頼んだ。
- 40 牢を出たふたりは、ルデヤの家に行った。そして兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出て行った。

# 一七章

- 1 彼らはアムピポリスとアポロニヤを通して、テサロニケへ行行った。そこには、ユダヤ人の会堂があった。
- 2 パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。
- 3 そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。
- 4 彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。またほかに、神を敬うギリシヤ人が大ぜいおり、貴婦人たちも少なくなかった。
- 5 ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして搜した。
- 6 しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱって行き、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。
- 7 それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです。」
- 8 こうして、それを聞いた群衆と町の役人たちとを不安に陥れた。
- 9 彼らは、ヤソンとそのほかの者たちから<sup>138</sup>保証金を取ったうえで釈放した。
- 10 兄弟たちは、さまざま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤへ送り出した。ふたりはそこに着くと、ユダヤ人の会堂に入って行行った。
- 11 このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。
- 12 そのため、彼らのうちの多くの者が信仰に入った。その中にはギリシヤの貴婦人や男子も少なくなかった。
- 13 ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがベレヤでも神のことばを伝えていることを知り、ここにもやって来て、群衆を扇動して騒ぎを起こした。
- 14 そこで兄弟たちは、ただちにパウロを送り出して海べまで行かせたが、シラスとテモテはベレヤに踏みとどまった。
- 15 パウロを案内した人たちは、彼をアテネまで連れて行行った。そしてシラスとテモテに一刻も早く来るように、という命令を受けて、帰って行行った。
- 16 さて、アテネでふたりを待っていたパウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。
- 17 そこでパウロは、会堂ではユダヤ人や神を敬う人たちと論じ、広場では毎日そこに居合わせた人たちと論じた。
- 18 エピクロス派とストア派の哲学者たちも幾人かいて、パウロと論じ合っていたが、その中のある者たちは、「この<sup>139</sup>おしゃべりは、何を言うつもりなのか」と言い、ほかの者たちは、「彼は外国の<sup>140</sup>神々を伝えているらしい」と言った。パウロがイエスと復活とを宣べ伝えたからである。
- 19 そこで彼らは、パウロを<sup>141</sup>アレオパグスに連れて行ってこう言った。「あなたの語っているその新しい教えがどんなものであるか、知らせていただけませんか。
- 20 私たちにとっては珍しいことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなものか、私たちは知りたいのです。」
- 21 アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。
- 22 そこでパウロは、アレオパグスの真ん中に立って言った。「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。
- 23 私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。
- 24 この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住



みになりません。

25 また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とお与えになった方だからです。

26 神は、[142](#)ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とお定めになりました。

27 これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはられません。

28 私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、『私たちもまたその子孫である』と言ったとおりです。

29 そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。

30 神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。

31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの実証をすべての人にお与えになったのです。」

32 死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑ひ、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。

33 こうして、パウロは彼らの中から出て行った。

34 しかし、彼につき従って信仰に入った人々もいた。それは、アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリスという女、その他の人々であった。

# 一八章

- 1 その後、パウロはアテネを去って、コリントへ行った。
- 2 ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウドオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、
- 3 自分も同業者であったので、その家に住んでいっしょに仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。
- 4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人とギリシヤ人を承服させようとした。
- 5 そして、シラスとテモテがマケドニアから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。
- 6 しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く」と言った。
- 7 そして、そこを去って、神を敬う<sup>143</sup>テテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。
- 8 会堂管理者クリスボは、一家をあけて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。
- 9 ある夜、主は幻によってパウロに、「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。
- 10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから」と言われた。
- 11 そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。
- 12 ところが、ガリオがアカヤの地方総督であったとき、ユダヤ人たちはこぞってパウロに反抗し、彼を法廷に引いて行って、
- 13 「この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています」と訴えた。
- 14 パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かってこう言った。「ユダヤ人の諸君。不正事件や悪質な犯罪のことであれば、私は当然、あなたがたの訴えを取り上げてもしょうが、
- 15 あなたがたの、ことばや名称や律法に関する問題であるなら、自分たちで始末をつけるのがよからう。私はそのようなことの裁判官にはなりたくない。」
- 16 こうして、彼らを法廷から追い出した。
- 17 そこで、みなのは、会堂管理者ゾステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった。
- 18 パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリヤへ向けて出帆した。プリスキラとアクラも同行した。パウロは一つの誓願を立てていたので、ケンクレヤで髪をそった。
- 19 彼らがエベソに着くと、パウロはふたりをそこに残し、自分だけ会堂に入って、ユダヤ人たちと論じた。
- 20 人々は、もっと長くどまるように頼んだが、彼は聞き入れないで、
- 21 「神のみこころなら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言って別れを告げ、エベソから船出した。
- 22 それからカイザリヤに上陸して<sup>144</sup>エルサレムに上り、教会にあいさつしてからアンテオケに下って行った。
- 23 そこにしばらくいてから、彼はまた出発し、ガラテヤの地方およびフルギヤを次々に巡って、すべての弟子たちを力づけた。
- 24 さて、アレキサンドリヤの生まれで、<sup>145</sup>雄弁なアポロというユダヤ人がエベソに来了。彼は聖書に通じていた。
- 25 この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった。
- 26 彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスキラとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明した。

27 そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思っていたので、兄弟たちは彼を励まし、その弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、146すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。

28 彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。

## 一九章

- 1 ア波罗がコリントにいた間に、パウロは<sup>おくち</sup>奥地を通してエベソに来た。そして<sup>いくにん</sup>幾人かの弟子に出会って、
- 2 「信じたとき、<sup>せいれい</sup>聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは、「いいえ、<sup>147</sup><sup>せいれい</sup>聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした」と答えた。
- 3 「では、どんなバプテスマを受けたのですか」と言うと、「ヨハネのバプテスマです」と答えた。
- 4 そこで、パウロは、「ヨハネは、自分のあとに來られるイエスを信じるように人々に告げて、<sup>くあらた</sup>悔い改めのバプテスマを授けたのです」と言った。
- 5 これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。
- 6 パウロが彼らの上に手を置いたとき、<sup>せいれい</sup>聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。
- 7 その人々は、みなで十二人ほどであった。
- 8 それから、パウロは会堂に入って、三か月の間<sup>だいたん</sup>大胆に語り、神の国<sup>148</sup><sup>ろん</sup>について論じて、彼らを説得しようと努めた。
- 9 しかし、ある者たちが心をかたくなにして<sup>き</sup>聞き入れず、<sup>かいしゆう</sup>会衆の前で、この道をののしったので、パウロは彼らから身を引き、弟子たちをも退かせて、毎日ツラノの講堂で論じた。
- 10 これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。
- 11 神はパウロの手によって<sup>おどろ</sup>驚くべき奇蹟を行われた。
- 12 パウロの身に着けている手ぬぐいや前掛けをはずして病人に当てると、その病気は去り、<sup>あくれい</sup>悪霊は出て行った。
- 13 ところが、<sup>しよこく</sup>諸国を<sup>じゆんかい</sup>巡回しているユダヤ人の<sup>ま</sup>魔よけ<sup>きとうし</sup>祈禱師の中のある者たちも、<sup>あくれい</sup>ために、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をととなえ、「パウロの<sup>おどろ</sup>宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる」と言っていた。
- 14 そういうことをしたのは、ユダヤの祭司長<sup>さいし</sup>スケワという人の<sup>むすこ</sup>七人の息子たちであった。
- 15 すると<sup>あくれい</sup>悪霊が答えて、「自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ」と言った。
- 16 そして<sup>あくれい</sup>悪霊につかれている人は、彼らに飛びかかり、ふたりの者を押さえつけて、<sup>お</sup>みなを打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負ってその家を逃げ出した。
- 17 このことがエベソに住むユダヤ人とギリシヤ人の全部に知れ渡ったので、<sup>おそ</sup>みな恐れを感じて、主イエスの御名をあがめるようになった。
- 18 そして、<sup>しんこう</sup>信仰に入った人たちの中から多くの者がやって来て、自分たちのしていることをさらけ出して告白した。
- 19 また<sup>まじゆつ</sup>魔術を行っていた多くの者が、その書物をかかえて来て、<sup>や</sup>みなの前で<sup>す</sup>焼き捨てた。その<sup>ねだん</sup>値段を合計してみると、<sup>149</sup><sup>まい</sup>銀貨五万枚になった。
- 20 こうして、<sup>おどろ</sup><sup>150</sup>主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。
- 21 これらのことが一段落すると、パウロは<sup>151</sup><sup>いちだんらく</sup>御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならない」と言った。
- 22 そこで、自分に仕えている者の中からテモテとエラストのふたりをマケドニアに送り出したが、パウロ自身は、なおしばらくアジアにとどまっていた。
- 23 そのころ、この道のことから、<sup>そうどう</sup>ただならぬ騒動が持ち上がった。
- 24 それというのは、<sup>しんでん</sup>デメテリオという<sup>152</sup><sup>もけい</sup>銀細工人がいて、銀でアルテミス神殿<sup>しよくにん</sup>の模型を作り、職人たちにかなりの<sup>しゆうにゆう</sup>収入を得させていたが、
- 25 彼が、その<sup>しよくにん</sup>職人たちや、同業の者たちをも集めて、こう言ったからである。「皆さん。ご承知のように、私たちが<sup>はんじよう</sup>繁盛しているのは、この仕事のおかげです。
- 26 ところが、皆さんが見てもいるし聞いてもいるように、あのパウロが、手で作った物など神ではないと言って、エ

- ペズばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、大ぜいの人々を説き伏せ、迷わせているのです。
- 27 これでは、私たちのこの仕事も信用を失う危険があるばかりか、大女神アルテミスの神殿も顧みられなくなり、全アジア、全世界の拝むこの大女神のご威光も地に落ちてしまいそうです。」
- 28 そう聞いて、彼らは大いに怒り、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と叫び始めた。
- 29 そして、町中が大騒ぎになり、人々はパウロの同行者であるマケドニヤ人ガイオとアリストアルコを捕らえ、一団となって劇場へなだれ込んだ。
- 30 パウロは、その集団の中に入って行こうとしたが、弟子たちがそうさせなかった。
- 31 アジア州の高官で、パウロの友人である人たちも、彼に使いを送って、劇場に<sup>153</sup>入らないように頼んだ。
- 32 ところで、<sup>154</sup>集会は混乱状態に陥り、大多数の者は、なぜ集まったのかさえ知らなかったので、ある者はこのことを叫び、ほかの者は別のことを叫んでいた。
- 33 ユダヤ人たちがアレキサンデルという者を前に押し出したので、群衆の中のある人たちが<sup>155</sup>彼を促すと、彼は手を振って、会衆に弁明しようとした。
- 34 しかし、彼がユダヤ人だとわかると、みなの方がいつせいに声をあげ、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と二時間ばかりも叫び続けた。
- 35 町の書記役は、群衆を押し静めてこう言った。「エペソの皆さん。エペソの町が、大女神アルテミスと<sup>156</sup>天から下ったそのご神体との守護者であることを知らない者が、いったいいるのでしょうか。
- 36 これは否定できない事実ですから、皆さんは静かにして、軽はずみなことをしないようにしなければいけません。
- 37 皆さんがここに引き連れて来たこの人たちは、宮を汚した者でもなく、私たちの女神をそしった者でもないのです。
- 38 それで、もしデメテリオとその仲間の職人たちが、だれかに文句があるのなら、裁判の日があるし、地方総督たちもいることですから、互いに訴え出たらよいのです。
- 39 もしあなたがたに、これ以上何か要求することがあるなら、正式の<sup>157</sup>議会で決めてもらわなければいけません。
- 40 きょうの事件については、正当な理由がないのですから、騒擾罪に問われる恐れがあります。その点に関しては、私たちはこの騒動の弁護はできません。」
- 41 こう言って、その<sup>158</sup>集まりを解散させた。

## 二〇章

- 1 騒<sup>さわ</sup>ぎが治<sup>し</sup>まると、パウロは弟子<sup>でし</sup>たちを呼<sup>よ</sup>び集<sup>あつ</sup>めて励<sup>はげ</sup>まし、別<sup>はげ</sup>れを告<sup>はげ</sup>げて、マケドニアへ向<sup>むか</sup>って出<sup>で</sup>発<sup>はつ</sup>した。
- 2 そして、その地<sup>ち</sup>方<sup>ほう</sup>を通<sup>す</sup>り、多<sup>おほ</sup>くの勸<sup>すす</sup>めを<sup>して</sup>159 兄<sup>あ</sup>弟<sup>でい</sup>たちを励<sup>はげ</sup>ましてから、ギリシヤに<sup>来</sup>た。
- 3 パウロはこ<sup>こ</sup>で三<sup>さん</sup>か<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>を過<sup>す</sup>ごしたが、そ<sup>そこ</sup>からシ<sup>し</sup>リヤ<sup>りや</sup>に向<sup>むか</sup>へて船<sup>ふな</sup>出<sup>で</sup>しようとい<sup>い</sup>うとき<sup>に</sup>、彼<sup>かれ</sup>に対<sup>たい</sup>するユ<sup>いん</sup>ダ<sup>う</sup>ヤ<sup>ん</sup>人<sup>にん</sup>の陰<sup>いん</sup>謀<sup>ぼう</sup>があ<sup>あ</sup>つたた<sup>た</sup>め、彼<sup>かれ</sup>はマ<sup>マ</sup>ケ<sup>ケ</sup>ド<sup>ド</sup>ニ<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>を<sup>を</sup>経<sup>へ</sup>て帰<sup>かへ</sup>るこ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>した。
- 4 プ<sup>プ</sup>ロ<sup>ロ</sup>の子<sup>こ</sup>で<sup>で</sup>あるベ<sup>ベ</sup>レ<sup>レ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>人<sup>にん</sup>ソ<sup>ソ</sup>パ<sup>パ</sup>テ<sup>テ</sup>ロ<sup>ロ</sup>、テ<sup>テ</sup>サ<sup>サ</sup>ロ<sup>ロ</sup>ニ<sup>ニ</sup>ケ<sup>ケ</sup>人<sup>にん</sup>ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>ス<sup>ス</sup>タル<sup>タル</sup>コ<sup>コ</sup>とセ<sup>セ</sup>ク<sup>ク</sup>ンド<sup>ンド</sup>、デ<sup>デ</sup>ル<sup>ル</sup>ベ<sup>ベ</sup>人<sup>にん</sup>ガ<sup>ガ</sup>イ<sup>イ</sup>オ<sup>オ</sup>、テ<sup>テ</sup>モ<sup>モ</sup>テ<sup>テ</sup>、ア<sup>ア</sup>ジ<sup>ジ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>人<sup>にん</sup>テ<sup>テ</sup>キ<sup>キ</sup>コ<sup>コ</sup>とト<sup>ト</sup>ロ<sup>ロ</sup>ビ<sup>ビ</sup>モ<sup>モ</sup>は、パ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>に同<sup>どう</sup>行<sup>ぎょう</sup>して<sup>いたが</sup>、
- 5 彼<sup>かれ</sup>ら<sup>ら</sup>は先<sup>さき</sup>発<sup>はつ</sup>して、ト<sup>ト</sup>ロ<sup>ロ</sup>ア<sup>ア</sup>ス<sup>ス</sup>で私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>を待<sup>まち</sup>って<sup>いた</sup>。
- 6 種<sup>しゅ</sup>な<sup>な</sup>しパ<sup>パ</sup>ンの祝<sup>い</sup>いが過<sup>す</sup>ぎて<sup>から</sup>、私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>はピ<sup>ピ</sup>リ<sup>リ</sup>ビ<sup>ビ</sup>から船<sup>ふな</sup>出<sup>で</sup>し、五<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>つてト<sup>ト</sup>ロ<sup>ロ</sup>ア<sup>ア</sup>ス<sup>ス</sup>で彼<sup>かれ</sup>ら<sup>ら</sup>と落<sup>おち</sup>ち<sup>ち</sup>合<sup>あ</sup>ひ、そ<sup>そ</sup>こに七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>間<sup>かん</sup>滞<sup>たい</sup>在<sup>ざい</sup>した。
- 7 週<sup>しゅう</sup>の初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>の日<sup>にち</sup>に、私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>はパ<sup>パ</sup>ン<sup>ん</sup>を裂<sup>さ</sup>ぐた<sup>た</sup>めに集<sup>あつ</sup>ま<sup>ま</sup>った。そ<sup>そ</sup>のときパ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>は、翌<sup>よく</sup>日<sup>にち</sup>出<sup>で</sup>発<sup>はつ</sup>するこ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>して<sup>いた</sup>ので、人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>と語<sup>ご</sup>り合<sup>あ</sup>ひ、夜<sup>よ</sup>中<sup>ちゅう</sup>ま<sup>ま</sup>で語<sup>ご</sup>り続<sup>つづ</sup>けた。
- 8 私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>が集<sup>あつ</sup>ま<sup>ま</sup>つて<sup>いた</sup>屋<sup>や</sup>上<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>間<sup>かん</sup>に<sup>に</sup>は、ともし<sup>ともし</sup>び<sup>び</sup>がた<sup>た</sup>く<sup>く</sup>さん<sup>さん</sup>とも<sup>とも</sup>してあ<sup>あ</sup>つた。
- 9 ユ<sup>ユ</sup>テ<sup>テ</sup>コ<sup>コ</sup>とい<sup>い</sup>う<sup>う</sup>ひと<sup>ひと</sup>りの<sup>の</sup>青<sup>せい</sup>年<sup>ねん</sup>が160 窓<sup>まど</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>ころ</sup>に腰<sup>こし</sup>を掛<sup>か</sup>け<sup>て</sup>いた<sup>が</sup>、ひ<sup>ひ</sup>ど<sup>ど</sup>く<sup>く</sup>眠<sup>ねむ</sup>け<sup>が</sup>さ<sup>さ</sup>し、パ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>の<sup>の</sup>話<sup>わ</sup>が長<sup>なが</sup>く続<sup>つづ</sup>く<sup>く</sup>ので、と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>眠<sup>ねむ</sup>り込<sup>こ</sup>んで<sup>しま</sup>つて、三<sup>さん</sup>階<sup>かい</sup>か<sup>か</sup>ら下<sup>した</sup>に<sup>に</sup>落<sup>お</sup>ち<sup>ち</sup>た。抱<sup>だ</sup>き<sup>き</sup>起<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>して<sup>み</sup>ると、も<sup>も</sup>う死<sup>し</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>いた</sup>。
- 10 パウロは降<sup>お</sup>りて<sup>来</sup>て、彼<sup>かれ</sup>の<sup>の</sup>上<sup>うへ</sup>に<sup>に</sup>身<sup>み</sup>をか<sup>か</sup>め、彼<sup>かれ</sup>を<sup>を</sup>抱<sup>だ</sup>き<sup>き</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>えて、「心<sup>こころ</sup>配<sup>はい</sup>するこ<sup>こ</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>い。ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>す」と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>つた。
- 11 そして、ま<sup>ま</sup>た上<sup>うへ</sup>が<sup>が</sup>つて<sup>行</sup>き、パ<sup>パ</sup>ン<sup>ん</sup>を裂<sup>さ</sup>いて<sup>食</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>から</sup>、明<sup>あけ</sup>け<sup>け</sup>方<sup>ほう</sup>ま<sup>ま</sup>で長<sup>なが</sup>く話<sup>わ</sup>し合<sup>あ</sup>つて、そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>か<sup>か</sup>ら出<sup>で</sup>発<sup>はつ</sup>した。
- 12 人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>は生<sup>せい</sup>き返<sup>かへ</sup>つた<sup>青年</sup>を<sup>を</sup>家<sup>いえ</sup>に<sup>に</sup>連<sup>れ</sup>て<sup>行</sup>き、ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>た<sup>た</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず慰<sup>なぐさ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れた。
- 13 さて、私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>は先<sup>さき</sup>に船<sup>ふね</sup>に<sup>に</sup>乗<sup>の</sup>り込<sup>こ</sup>んで、ア<sup>ア</sup>ソ<sup>ソ</sup>ス<sup>ス</sup>に向<sup>むか</sup>へて出<sup>で</sup>帆<sup>はん</sup>した。そ<sup>そ</sup>してア<sup>ア</sup>ソ<sup>ソ</sup>ス<sup>ス</sup>でパ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>を<sup>を</sup>船<sup>ふね</sup>に<sup>に</sup>乗<sup>の</sup>せるこ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>し<sup>て</sup>いた。パ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>が、自<sup>おの</sup>分<sup>ぶん</sup>は161 陸<sup>りく</sup>路<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>る<sup>つもり</sup>で、そ<sup>そ</sup>う決<sup>き</sup>め<sup>め</sup>てお<sup>お</sup>いた<sup>から</sup>で<sup>ある</sup>。
- 14 こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>して、パ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>はア<sup>ア</sup>ソ<sup>ソ</sup>ス<sup>ス</sup>で私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>と落<sup>おち</sup>ち<sup>ち</sup>合<sup>あ</sup>ひ、私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>は彼<sup>かれ</sup>を<sup>を</sup>船<sup>ふね</sup>に<sup>に</sup>乗<sup>の</sup>せてミ<sup>ミ</sup>テ<sup>テ</sup>レ<sup>レ</sup>ネ<sup>ネ</sup>に<sup>に</sup>着<sup>き</sup>いた。
- 15 そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>か<sup>か</sup>ら出<sup>で</sup>帆<sup>はん</sup>して、翌<sup>よく</sup>日<sup>にち</sup>キ<sup>キ</sup>ヨ<sup>ヨ</sup>ス<sup>ス</sup>の<sup>の</sup>沖<sup>おき</sup>に<sup>に</sup>達<sup>たつ</sup>し、次<sup>つぎ</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>サ<sup>サ</sup>モ<sup>モ</sup>ス<sup>ス</sup>に<sup>に</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>よ</sup>寄<sup>よ</sup>り、162 そ<sup>そ</sup>の翌<sup>よく</sup>日<sup>にち</sup>ミ<sup>ミ</sup>レ<sup>レ</sup>ト<sup>ト</sup>に<sup>に</sup>着<sup>き</sup>いた。
- 16 そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>はパ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>が、ア<sup>ア</sup>ジ<sup>ジ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>で時<sup>とき</sup>間<sup>かん</sup>を取<sup>と</sup>ら<sup>れ</sup>ない<sup>よう</sup>に<sup>に</sup>と、エ<sup>エ</sup>ベ<sup>ベ</sup>ソ<sup>ソ</sup>に<sup>に</sup>は寄<sup>き</sup>港<sup>こう</sup>し<sup>ない</sup>で<sup>行</sup>くこ<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>決<sup>き</sup>め<sup>め</sup>て<sup>いた</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>である</sup>。彼<sup>かれ</sup>は、で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>れ<sup>ば</sup>五<sup>ご</sup>旬<sup>じゆん</sup>節<sup>せつ</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>に<sup>に</sup>はエ<sup>エ</sup>ル<sup>エル</sup>サ<sup>サ</sup>レ<sup>レ</sup>ム<sup>ム</sup>に<sup>に</sup>着<sup>き</sup>いて<sup>いた</sup>い<sup>たい</sup>、と旅<sup>りょ</sup>路<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>急<sup>いそ</sup>いで<sup>いた</sup>の<sup>のである</sup>。
- 17 パウロは、ミ<sup>ミ</sup>レ<sup>レ</sup>ト<sup>ト</sup>か<sup>か</sup>らエ<sup>エ</sup>ベ<sup>ベ</sup>ソ<sup>ソ</sup>に<sup>に</sup>使<sup>つか</sup>い<sup>を</sup>送<sup>おく</sup>つて、教<sup>きやう</sup>会<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>長<sup>ちやう</sup>老<sup>らう</sup>たち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>呼<sup>よ</sup>んだ。
- 18 彼<sup>かれ</sup>ら<sup>ら</sup>が<sup>が</sup>集<sup>あつ</sup>ま<sup>ま</sup>つて<sup>来</sup>た<sup>とき</sup>、パ<sup>パ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ロ<sup>ロ</sup>はこ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>い</sup>つた。
- 「皆<sup>みな</sup>さん<sup>さん</sup>は、私<sup>わたし</sup>がア<sup>ア</sup>ジ<sup>ジ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>に<sup>に</sup>足<sup>あし</sup>を<sup>を</sup>踏<sup>ふ</sup>み<sup>い</sup>入<sup>い</sup>れた<sup>最初</sup>の<sup>の</sup>日<sup>にち</sup>か<sup>か</sup>ら、私<sup>わたし</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>ふ<sup>ふ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>過<sup>す</sup>ご<sup>す</sup>して<sup>来</sup>た<sup>か</sup>、よく<sup>よく</sup>ご<sup>ご</sup>存<sup>ぞん</sup>じ<sup>じ</sup>です。
- 19 私<sup>わたし</sup>は謙<sup>けん</sup>遜<sup>そん</sup>の<sup>の</sup>限<sup>かぎ</sup>り<sup>を</sup>を<sup>を</sup>尽<sup>つく</sup>くし、涙<sup>なみだ</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>つて、ま<sup>ま</sup>たユ<sup>いん</sup>ダ<sup>いん</sup>ヤ<sup>ぼう</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>陰<sup>いん</sup>謀<sup>ぼう</sup>に<sup>に</sup>よ<sup>よ</sup>りわ<sup>わ</sup>が<sup>が</sup>身<sup>み</sup>に<sup>に</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>かる<sup>数</sup>々<sup>さうさう</sup>の<sup>の</sup>試<sup>し</sup>練<sup>れん</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゅう</sup>で、主<sup>しゅ</sup>に<sup>に</sup>仕<sup>し</sup>え<sup>え</sup>ま<sup>ま</sup>した。
- 20 益<sup>えき</sup>にな<sup>な</sup>るこ<sup>こ</sup>とは、少<sup>せう</sup>しも<sup>も</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>ず、あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>に<sup>に</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>した。人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>の前<sup>まへ</sup>で<sup>で</sup>も、家<sup>いえ</sup>々<sup>々</sup>で<sup>で</sup>も、あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>を<sup>を</sup>教<sup>おし</sup>え<sup>え</sup>、
- 21 ユ<sup>ユ</sup>ダ<sup>ダ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>人<sup>にん</sup>に<sup>に</sup>もギ<sup>ギ</sup>リ<sup>リ</sup>シ<sup>シ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>人<sup>にん</sup>に<sup>に</sup>も、神<sup>かみ</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>する悔<sup>く</sup>い<sup>あらた</sup>改<sup>かへ</sup>め<sup>め</sup>と、私<sup>わたし</sup>たち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>主<sup>しゅ</sup>イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>ス<sup>す</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>する信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>とを<sup>を</sup>は<sup>は</sup>つ<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>と主<sup>しゅ</sup>張<sup>ちやう</sup>した<sup>の</sup>ので<sup>です</sup>。
- 22 い<sup>い</sup>ま私<sup>わたし</sup>は、163 心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>縛<sup>しば</sup>ら<sup>れ</sup>て、エ<sup>エ</sup>ル<sup>エル</sup>サ<sup>サ</sup>レ<sup>レ</sup>ム<sup>ム</sup>に<sup>に</sup>上<sup>あ</sup>る<sup>途</sup>中<sup>ちゅう</sup>で<sup>です</sup>。そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>で私<sup>わたし</sup>に<sup>に</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>起<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>る<sup>の</sup>か<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せん</sup>。
- 23 た<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>つて<sup>いる</sup>の<sup>の</sup>は、聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>が<sup>が</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>町<sup>まち</sup>で<sup>で</sup>も私<sup>わたし</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>つ<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>とあ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>さ<sup>さ</sup>れて、な<sup>な</sup>わ<sup>わ</sup>め<sup>め</sup>と苦<sup>くる</sup>しみ<sup>み</sup>が私<sup>わたし</sup>を<sup>を</sup>待<sup>まち</sup>て<sup>いる</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>れる<sup>こと</sup>で<sup>です</sup>。
- 24 け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>も、私<sup>わたし</sup>が<sup>が</sup>自<sup>おの</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>走<sup>そう</sup>る<sup>べき</sup>行<sup>ぎやう</sup>程<sup>てい</sup>を<sup>を</sup>走<sup>はし</sup>り<sup>つ</sup>尽<sup>つく</sup>くし、主<sup>しゅ</sup>イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>ス<sup>す</sup>か<sup>か</sup>ら受<sup>う</sup>け<sup>け</sup>た、神<sup>かみ</sup>の<sup>の</sup>恵<sup>めぐ</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>する<sup>任</sup>務<sup>む</sup>を<sup>を</sup>果<sup>は</sup>た<sup>た</sup>し<sup>終</sup>え<sup>え</sup>る<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>る<sup>なら</sup>、私<sup>わたし</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>は少<sup>せう</sup>しも<sup>も</sup>惜<sup>お</sup>しい<sup>とは思</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せん</sup>。
- 25 164 皆<sup>みな</sup>さん<sup>さん</sup>。御<sup>み</sup>国<sup>くに</sup>を<sup>を</sup>宣<sup>のたま</sup>へ<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゅう</sup>を<sup>を</sup>巡<sup>めぐ</sup>回<sup>かい</sup>した<sup>私</sup>の<sup>の</sup>顔<sup>がん</sup>を、あ<sup>あ</sup>な<sup>な</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>は<sup>は</sup>も<sup>も</sup>う二<sup>に</sup>度<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>見<sup>み</sup>る<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>ない<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>、い<sup>い</sup>ま私<sup>わたし</sup>は<sup>は</sup>知<sup>し</sup>つて<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

- 26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たち<sup>165</sup>が受けるさばきについて責任がありません。
- 27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。
- 28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、<sup>166</sup>神がご自身の血をもつて買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。
- 29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。
- 30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。
- 31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。
- 32 いま私は、あなたがたを<sup>167</sup>神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができるのです。
- 33 私は、人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。
- 34 あなたがた自身が知っているとおりの、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました。
- 35 このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」
- 36 こう言い終わって、パウロはひざまずき、みな<sup>168</sup>の者ととともに祈った。
- 37 みな<sup>169</sup>は声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、
- 38 彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。

## 二一章

- 1 私たちは彼らと別れて出帆し、コスに直航し、翌日ロドスに着き、そこからパトラに渡った。
- 2 そこにはフェニキヤ行きの船があったので、それに乗って出帆した。
- 3 やがてキプロスが見えて来たが、それを左にして、シリアに向かって航海を続け、ツロに上陸した。ここで船荷を降ろすことになっていたからである。
- 4 私たちは弟子たちを見つけ出して、そこに七日間滞在した。彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようにと、しきりにパウロに忠告した。
- 5 しかし、**168**滞在の日数が尽きると、私たちはそこを出て、旅を続けることにした。彼らはみな、妻や子どももいっしょに、町はずれまで私たちを送って来た。そして、ともに海岸にひざまずいて祈ってから、私たちは互いに別れを告げた。
- 6 それから私たちは船に乗り込み、彼らは家へ帰って行った。
- 7 私たちはツロからの航海を終えて、トレマイに着いた。その兄弟たちにあいさつをして、彼らのところに一日滞在した。
- 8 翌日そこを立て、カイザリヤに着き、あの七人のひとりである伝道者ピリボの家に入って、そこに滞在した。
- 9 この人には、預言する四人の未婚の娘がいた。
- 10 幾日かそこに滞在していると、アガボという預言者がユダヤから下って来た。
- 11 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、「『この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうには縛られ、異邦人の手に渡される』と聖霊がお告げになっています」と言った。
- 12 私たちはこれを聞いて、土地の人たちといっしょになって、パウロに、エルサレムには上らないよう頼んだ。
- 13 するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています」と答えた。
- 14 彼が聞き入れようとしないので、私たちは、「主のみこころのままに」と言って、黙ってしまった。
- 15 こうして数日たつと、私たちは旅仕度をして、エルサレムに上った。
- 16 カイザリヤの弟子たちも幾人か私たちと同行して、古くからの弟子であるキプロス人マナソンのところに案内してくれた。私たちはそこに泊まることになっていたのである。
- 17 エルサレムに着くと、兄弟たちは喜んで私たちを迎えてくれた。
- 18 次の日、パウロは私たちを連れて、ヤコブを訪問した。そこには長老たちがみな集まっていた。
- 19 彼らにあいさつしてから、パウロは彼の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ話した。
- 20 彼らはそれを聞いて神をほめたたえ、パウロにこう言った。「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰に入っている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。
- 21 ところで、彼らが聞かされていることは、あなたは異邦人の中にいるすべてのユダヤ人に、子どもに割礼を施すな、慣習に従って歩むな、と言って、モーセにそむくように教えているということなのです。
- 22 それで、どうしましょうか。あなたが来たことは、必ず彼らの耳に入るでしょう。
- 23 ですから、私たちの言うとおりにしてください。私たちの中に誓願を立てている者が四人います。
- 24 この人たちを連れて、あなたも彼らといっしょに身を清め、彼らが頭をそる費用を出してやりなさい。そうすれば、あなたについて聞かされていることは根も葉もないことで、あなたも律法を守って正しく歩んでいることが、みんなにわかるでしょう。
- 25 信仰に入った異邦人に関しては、偶像の神に供えた**169**肉と、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けるべきであると決定しましたので、私たちはすでに手紙を書きました。」
- 26 そこで、パウロは**170**その人たちを引き連れ、翌日、ともに身を清めて宮に入り、清めの期間が終わって、ひとりひとりのために供え物をささげる日時を告げた。



27 ところが、その七日がほとんど終わろうとしていたころ、アジアから来たユダヤ人たちは、パウロが宮にいるの  
を見たと、全群衆をあおりたて、彼に手をかけて、

28 こう叫んだ。「イスラエルの人々。手を貸してください。この男は、この民と、律法と、この場所に逆らうこと  
を、至る所ですべての人に教えている者です。そのうえ、ギリシヤ人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所をけが  
しています。」

29 彼らは前にエペソ人トロピモが町でパウロといつしよにいるのを見かけたので、パウロが彼を宮に連れ込んだのだ  
と思ったのである。

30 そこで町中が大騒ぎになり、人々は殺到してパウロを捕らえ、宮の外へ引きずり出した。そして、ただちに宮の門  
が閉じられた。

31 彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、<sup>171</sup>ローマ<sup>172</sup>軍の  
千人隊長に届いた。

32 彼はただちに、兵士たちと百人隊長たちとを率いて、彼らのところに駆けつけた。人々は千人隊長と兵士たちを  
見て、パウロを打つのをやめた。

33 千人隊長は近づいてパウロを捕らえ、二つの鎖につなぐように命じたうえ、パウロが何者なのか、何をしたの  
か、と尋ねた。

34 しかし、群衆が<sup>173</sup>めいめい勝手なことを叫び続けたので、その騒がしさのために確かなことがわからなかった。  
そこで千人隊長は、パウロを兵營に連れて行くように命令した。

35 パウロが階段にさしかかったときには、群衆の暴行を避けるために、兵士たちが彼をかつぎ上げなければならな  
かった。

36 大ぜいの群衆が「彼を除け」と叫びながら、ついて来たからである。

37 兵營の中に連れ込まれようとしたとき、パウロが千人隊長に、「一言お話ししてもよいでしょうか」と尋ねる  
と、千人隊長は、「あなたはギリシヤ語を知っているのか。

38 するとあなたは、以前暴動を起こして、四千人の刺客を荒野に引き連れて逃げた、あのエジプト人ではないのか」  
と言った。

39 パウロは答えた。「私はキリキヤのタルソ出身のユダヤ人で、れっきとした町の市民です。お願いです。この人々  
に話をさせてください。」

40 千人隊長がそれを許したので、パウロは階段の上に立ち、民衆に向かって手を振った。そして、すっかり静かにな  
ったとき、彼はヘブル語で次のように話した。

## 二二章

- 1 「兄弟たち、父たちよ。いま私が皆さんにしようとする弁明を聞いてください。」
- 2 パウロがヘブル語で語りかけるのを聞いて、人々はますます静粛になった。そこでパウロは話し続けた。
- 3 「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法<sup>174</sup>について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。
- 4 私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らせたのです。
- 5 このことは、大祭司も、長老たちの全議会も証言してくれます。この人たちから、私は兄弟たちへあてた手紙までも受け取り、ダマスコへ向かって出発しました。そこにいる者たちを縛り上げ、エルサレムに連れて来て処罰するためでした。
- 6 ところが、旅を続けて、真昼ごろダマスコに近づいたとき、突然、天からまばゆい光が私の回りを照らしたのです。
- 7 私は地に倒れ、『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか』という声を聞きました。
- 8 そこで私が答えて、『主よ。あなたはどなたですか』と言うと、その方は、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスだ』と言われました。
- 9 私といっしょにいた者たちは、その光は見たのですが、私に語っている方の声は聞き分けられませんでした。
- 10 私が、『主よ。私はどうしたらよいのでしょうか』と尋ねると、主は私に、『起きて、ダマスコに行きなさい。あなたがするように決められていることはみな、そこで告げられる』と言われました。
- 11 ところが、その光の輝きのために、私の目は何も見えなかったので、いっしょにいた者たちに手を引かれてダマスコに入りました。
- 12 すると、律法を重んじる敬虔な人で、そこに住むユダヤ人全体の間で評判の良いアナニヤという人が、
- 13 私のところに来て、そばに立ち、『兄弟サウロ。見えるようになりなさい』と言いました。すると、そのとき、私はその人が見えるようになりました。
- 14 彼はこう言いました。『私たちの父祖たちの神は、あなたにみこころを知らせ、義なる方を見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定めになったのです。』
- 15 あなたはその方のために、すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人とされるのですから。
- 16 さあ、なぜためらっているのですか。立ちなさい。その御名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。』
- 17 こうして私がエルサレムに帰り、宮で祈っていますと、夢ごちになり、
- 18 主を見たのです。主は言われました。『急いで、早くエルサレムを離れなさい。人々がわたしについてのあなたのあかしを受け入れないからです。』
- 19 そこで私は答えました。『主よ。私がどの会堂でも、あなたの信者を牢に入れたり、むち打ったりしていたことを、彼らはよく知っています。』
- 20 また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの着物の番をしていたのです。』
- 21 すると、主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす』と言われました。」
- 22 人々は、彼の話をここまで聞いていたが、このとき声を張り上げて、「こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしておくべきではない」と言った。
- 23 そして、人々がわめき立て、着物を放り投げ、ちりを空中にまき散らすので、
- 24 千人隊長はパウロを兵営の中に引き入れるように命じ、人々がなぜこのようにパウロに向かって叫ぶのかを知ろうとして、彼をむち打って取り調べるようにと言った。
- 25 彼らがむちを当てるためにパウロを<sup>175</sup>縛ったとき、パウロはそばに立っている百人隊長に言った。「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打ってよいのですか。」

- 26 これを聞いた百人隊長は、千人隊長のところに行って報告し、「どうなされていますか。あの人はローマ人です」と言った。
- 27 千人隊長はパウロのところに来て、「あなたはローマ市民なのか、私に言ってくれ」と言った。パウロは「そうです」と言った。
- 28 すると、千人隊長は、「私はたくさんの金を出して、この市民権を買ったのだ」と言った。そこでパウロは、「私は生まれながらの市民です」と言った。
- 29 このため、パウロを取り調べようとしていた者たちは、すぐにパウロから身を引いた。また千人隊長も、パウロがローマ市民だとわかると、彼を<sup>176</sup>鎖につないでいたので、恐れた。
- 30 その翌日、千人隊長は、パウロがなぜユダヤ人に告訴されたのかを確かめたいと思って、パウロの鎖を解いてやり、祭司長たちと全議会の召集を命じ、パウロを連れて行って、彼らの前に立たせた。

## 二三章

1 パウロは議會を見つめて、こう言った。「兄弟たちよ。私は今日まで、全くきよい良心をもって、神の前に生活して来ました。」

2 すると大祭司アナニヤは、パウロのそばに立っている者たちに、彼の口を打てと命じた。

3 そのとき、パウロはアナニヤに向かってこう言った。「ああ、白く塗った壁。神があなたを打たれる。あなたは、律法に従って私をさばく座に着きながら、律法にそむいて、私を打てと命じるのですか。」

4 するとそばに立っている者たちが、「あなたは神の大祭司をののしるのか」と言ったので、

5 パウロが言った。「兄弟たち。私は彼が大祭司だとは知らなかった。確かに、『あなたの民の指導者を悪く言うてはいけない』と書いてあります。」

6 しかし、パウロは、彼らの一部がサドカイ人で、一部がパリサイ人であるのを見て取って、議會の中でこう叫んだ。「兄弟たち。私はパリサイ人であり、パリサイ人の子です。私は死者の復活という望みのことで、さばきを受けているのです。」

7 彼がこう言うと、パリサイ人とサドカイ人との間に意見の衝突が起こり、議會は二つに割れた。

8 サドカイ人は、復活はなく、御使いも霊もないと言い、パリサイ人は、どちらもあると言っていたからである。

9 騒ぎがいよいよ大きくなり、パリサイ派のある律法学者たちが立ち上がって激しく論じて、「私たちは、この人に何の悪い点も見いださない。もしかしたら、霊か御使いかが、彼に語りかけたのかもしれない」と言った。

10 論争がますます激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵隊に、下に降りて行って、パウロを彼らの中から力ずくで引き出し、兵營に連れて来るように命じた。

11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ」と言われた。

12 夜が明けると、ユダヤ人たちは<sup>177</sup>徒党を組み、パウロを殺してしまうまでは飲み食いしないと誓い合った。

13 この陰謀に加わった者は、四十人以上であった。

14 彼らは、祭司長たち、長老たちのところに行つて、こう言った。「私たちは、パウロを殺すまでは何も食べない、と堅く誓い合いました。」

15 そこで、今あなたがたは議會と組んで、パウロのことをもつと詳しく調べるふりをして、彼をあなたがたのところに連れて来るように千人隊長に願ひ出てください。私たちのほうでは、彼がそこに近づく前に殺す手はずにしています。」

16 ところが、パウロの姉妹の子が、この待ち伏せのことを耳にし、<sup>178</sup>兵營に入つてパウロにそれを知らせた。

17 そこでパウロは、百人隊長のひとりを呼んで、「この青年を千人隊長のところに連れて行ってください。お伝えすることがありますから」と言った。

18 百人隊長は、彼を連れて千人隊長のもとに行き、「囚人のパウロが私を呼んで、この青年があなたにお話しすることがあるので、あなたのところに連れて行くようにと頼みました」と言った。

19 千人隊長は彼の手を取り、だれもない所に連れて行って、「私に伝えたいことというのは何か」と尋ねた。

20 すると彼はこう言った。「ユダヤ人たちは、パウロについてもつと詳しく調べようとしているかに見せかけて、あす、議會にパウロを連れて来てくださるよう、あなたに願ひすることを申し合わせました。」

21 どうか、彼らの願ひを聞き入れないでください。四十人以上の者が、パウロを殺すまでは飲み食いしない、と誓ひ合つて、彼を待ち伏せしているのです。今、彼らは手はずを整えて、あなたの承諾を待っています。」

22 そこで千人隊長は、「このことを私に知らせたことは、だれにも漏らすな」と命じて、その青年を帰らせた。

23 そしてふたりの百人隊長を呼び、「今夜<sup>179</sup>九時、カイザリヤに向けて出発できるように、歩兵二百人、騎兵七十人、<sup>180</sup>槍兵二百人を整えよ<sup>181</sup>」と言いつけた。

24 また、パウロを乗せて無事に総督ペリクスのもとに送り届けるように、馬の用意もさせた。

- 25 そして、次のような文面の手紙を書いた。
- 26 「クラウド・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下にごあいさつ申し上げます。
- 27 この者が、ユダヤ人に捕えられ、まさに殺されようとしていたとき、彼がローマ市民であることを知りましたので、私は兵隊を率いて行って、彼を助け出しました。
- 28 それから、どんな理由で彼が訴えられたかを知ろうと思い、彼をユダヤ人の議会に出頭させました。
- 29 その結果、彼が訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や~~182~~投獄に当たる罪はないことがわかりました。
- 30 しかし、この者に対する陰謀があるという情報を得ましたので、私はただちに彼を閣下のもとにお送りし、訴える者たちには、閣下の前で彼のことを訴えるようにと言い渡しておきました。」~~183~~
- 31 そこで兵士たちは、命じられたとおりにパウロを引き取り、夜中にアンテパトリスまで連れて行き、
- 32 翌日、騎兵たちにパウロの護送を任せて、兵營に帰った。
- 33 騎兵たちは、カイザリヤに着き、総督に手紙を手渡しして、パウロを引き合わせた。
- 34 総督は手紙を読んでから、パウロに、どの州の者かと尋ね、キリキヤの出であることを知って、
- 35 「あなたを訴える者が来てから、よく聞くことにしよう」と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた。

## 二四章

1 五日の後、大祭司アナニヤは、数人の長老およびテルトロという<sup>184</sup>弁護士といっしょに下って来て、<sup>185</sup>パウロを総督に訴えた。

2 パウロが呼び出されると、テルトロが訴えを始めてこう言った。

「ペリクス閣下。閣下のおかげで、私たちはすばらしい平和を与えられ、また、閣下のご配慮で、この国の改革が進行しておりますが、

3 その事実をあらゆる面において、また至る所で認めて、私たちは心から感謝しております。

4 さて、あまりご迷惑をおかけしないように、ごく手短かに申し上げますから、ご寛容をもってお聞きくださるようお願いいたします。

5 この男は、まるでペストのような存在で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人という一派の首領でございます。

6 この男は宮さえもけがそうとしましたので、私たちは彼を捕らえました。<sup>186</sup>

8 閣下ご自身で、これらすべてのことについて彼をお調べくださいますなら、私たちが彼を訴えております事がらを、おわかりになっていただけるはずです。」

9 ユダヤ人たちも、この訴えに同調し、全くそのとおりだと言った。

10 そのとき、総督がパウロに、話すようにと合図したので、パウロはこう答えた。

「閣下が多年に渡り、この民の裁判をつかさどる方であることを存じておりますので、私は喜んで弁明いたします。

11 お調べになればわかることですが、私が礼拝のためにエルサレムに上って来てから、まだ十二日しかたっておりません。

12 そして、宮でも会堂でも、また市内でも、私がだれかと論争したり、<sup>187</sup>群衆を騒がせたりするのを見た者はありません。

13 いま私を訴えていることについて、彼らは証拠をあげることができないはずです。

14 しかし、私は、彼らが異端と呼んでいるこの道に従って、私たちの先祖の神に仕えていることを、閣下の前で承認いたします。私は、律法にかなうことと、預言者たちが書いていることとを全部信じています。

15 また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱えている望みを、神にあって抱いております。

16 そのため、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と<sup>188</sup>最善を尽くしています。

17 さて私は、同胞に対して施しをし、また供え物をささげるために、幾年ぶりかで帰って来ました。

18 その供え物のことで私は清めを受けて宮の中にいたのを彼らに見られたのですが、別に群衆もおらず、騒ぎもありませんでした。ただアジャから来た幾人かのユダヤ人がおりました。

19 もし彼らに、私について何か非難したいことがあるなら、自分で閣下の前に来て訴えるべきです。

20 でなければ、今ここにいる人々に、議会の前に立っていたときの私にどんな不正を見つけたかを言わせてください。

21 彼らの中に立っていたとき、私はただ一言、『死者の復活のことで、私はきょう、あなたがたの前でさばかれているのです』と叫んだにすぎません。」

22 しかしペリクスは、この道について相当詳しい知識を持っていたので、「千人隊長ルシヤが下って来るとき、あなたがたの事件を解決することにしよう」と言って、裁判を延期した。

23 そして百人隊長に、パウロを監禁するように命じたが、ある程度の自由を与え、友人たちが世話をすることを許した。

24 数日後、ペリクスはユダヤ人である妻ドルシラを連れて来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスを信じる信

こ  
仰について話を聞いた。

25 しかし、パウロが正義と節制とやがて来る審判とを論じたので、ペリクスは恐れを感じ、「今は帰ってよい。おり  
を見て、また呼び出そう」と言った。

26 それとともに、彼はパウロから金をもらいたい下心があったので、幾度もパウロを呼び出して話し合った。

27 二年たって後、ポルキオ・フェストがペリクスの後任になったが、ペリクスはユダヤ人に恩を売ろうとして、パウ  
ロを牢につないだままにしておいた。

## 二五章

- 1 フェストは州総督として着任すると、三日後にカイザリヤからエルサレムに上った。
- 2 すると、祭司長たちとユダヤ人のおもだった者たちが、パウロのことを訴え出て、
- 3 パウロを取り調べる件について自分たちに好意を持ってくれるように頼み、パウロをエルサレムに呼び寄せていた  
だきたいと彼に懇願した。彼らはパウロを途中で殺害するために待ち伏せをさせていた。
- 4 ところが、フェストは、パウロはカイザリヤに拘留されているし、自分はまもなく出発の予定であると答え、
- 5 「だから、その男に何か不都合なことがあるなら、あなたがたのうちの有力な人たちが、私といっしょに下って  
行って、彼を告訴しなさい」と言った。
- 6 フェストは、彼らのところに八日あるいは十日ばかり滞在しただけで、カイザリヤへ下って行き、翌日、裁判の  
席に着いて、パウロの出廷を命じた。
- 7 パウロが出て来ると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちは、彼を取り囲んで立ち、多くの重い罪状を申し立  
てたが、それを証拠立てることはできなかった。
- 8 しかしパウロは弁明して、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、何の罪  
も犯してはおりません」と言った。
- 9 ところが、ユダヤ人の歓心を買おうとしたフェストは、パウロに向かって、「あなたはエルサレムに上り、この事  
件について、私の前で裁判を受けることを願うか」と尋ねた。
- 10 すると、パウロはこう言った。「私はカイザルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然で  
す。あなたもよくご存じのとおり、私はユダヤ人にどんな悪いこともしませんでした。
- 11 もし私が悪いことをして、死罪に当たることをしたのであれば、私は死をのがれようとはしません。しかし、この  
人たちが私を訴えていることに一つも根拠がないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカイ  
ザルに上訴します。」
- 12 そのとき、フェストは陪席の者たちと協議したうえで、こう答えた。「あなたはカイザルに上訴したのだから、  
カイザルのもとへ行きなさい。」
- 13 数日たってから、アグリッパ王とベルニケが、フェストに敬意を表するためにカイザリヤに来た。
- 14 ふたりがそこに長く滞在していたので、フェストはパウロの一件を王に持ち出してこう言った。「ペリクスが囚  
人として残して行ったひとりの男がおります。
- 15 私がエルサレムに行ったとき、祭司たちとユダヤ人の長老たちとが、その男のことを私に訴え出て、罪に定める  
ように要求しました。
- 16 そのとき私は、『被告が、彼を訴えた者の面前で訴えに対して弁明する機会を与えられないで、そのまま引き渡  
されるということはローマの慣例ではない』と答えておきました。
- 17 そういうわけで、訴える者たちがここに集まったとき、私は時を移さず、その翌日、裁判の席に着いて、その男  
を出廷させました。
- 18 訴えた者たちは立ち上がりましたが、私が予期していたような犯罪についての訴えは何一つ申し立てませんでし  
た。
- 19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関することであり、また、死んでしまったイエスという者の  
ことで、そのイエスが生きているとパウロは主張していたのです。
- 20 このような問題をどう取り調べたらよいか、私には見当がつかないので、彼に『エルサレムに上り、そこで、この  
事件について裁判を受けたいのか』と尋ねたところが、
- 21 パウロは、皇帝の判決を受けるまで保護してほしいと願ったので、彼をカイザルのもとに送る時まで守っておく  
ように、命じておきました。」
- 22 すると、アグリッパがフェストに、「私も、その男の話を聞きたいものです」と言ったので、フェストは、「で



は、明日お聞きください」と言った。

23 こういうわけで、翌日、アグリッパとベルニケは、大いに威儀を整えて到着し、千人隊長たちや市の首脳者たちにつき添われて講堂に入った。そのとき、フェストの命令によってパウロが連れて来られた。

24 そこで、フェストはこう言った。「アグリッパ王、ならびに、ここに同席の方々。ご覧ください。ユダヤ人がこぞって、一刻も生かしてはおけないと呼ばわり、エルサレムでも、ここでも、私に訴えて来たのは、この人のことです。

25 私としては、彼は死に当たることは何一つしていないと思います。しかし、彼自身が皇帝に上訴しましたので、彼をそちらに送ることに決めました。

26 ところが、彼について、わが君に書き送るべき確かな事がらが一つもないのです。それで皆さんの前に、わけてもアグリッパ王よ、あなたの前に、彼を連れてまいりました。取り調べをしてみたら、何か書き送るべきことが得られましょう。

27 囚人を送るのに、その訴えの個条を示さないのは、理に合わないと思うのです。」

## 二六章

- 1 すると、アグリッパがパウロに、「あなたは、自分の言い分を申し述べてよろしい」と言った。そこでパウロは、手を差し伸べて弁明し始めた。
- 2 「アグリッパ王。私がユダヤ人に訴えられているすべてのことについて、きょう、あなたの前で弁明できることを、幸いに存じます。
- 3 特に、あなたがユダヤ人の慣習や問題に<sup>189</sup>精通しておられるからです。どうか、私の申し上げることを、忍耐をもってお聞きくださるよう、お願いいたします。
- 4 では申し述べますが、私が最初から私の国民の中で、またエルサレムにおいて過ごした若い時からの生活ぶりは、すべてのユダヤ人の知っているところです。
- 5 彼らは以前から私を知っていますので、証言するつもりならできることですが、私は、私たちの宗教の最も厳格な派に従って、パリサイ人として生活してまいりました。
- 6 そして今、神が私たちの父祖たちに約束されたものを待ち望んでいることで、私は裁判を受けているのです。
- 7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。
- 8 神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。
- 9<sup>190</sup>以前は、私自身も、ナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考えていました。
- 10 そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を授けられた私は、多くの聖徒たちを牢に入れ、彼らが殺されるときには、それに賛成の票を投じました。
- 11 また、すべての会堂で、しばしば彼らを罰しては、強いて御名をけがすことばを言わせようとし、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには<sup>191</sup>国外の町々にまで彼らを追跡して行きました。
- 12 このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへ出かけて行きますと、
- 13 その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは<sup>192</sup>太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。
- 14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があつて、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。』
- 15 私が『主よ。あなたはどなたですか』と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。
- 16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが<sup>193</sup>見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。
- 17 わたしは、この民と異邦人の中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。
- 18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。』
- 19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、
- 20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。
- 21 そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです。
- 22 こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。
- 23 すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、<sup>194</sup>死者の中からの復活によって、この民と異邦人ともに最初に光を宣べ伝える、ということです。」
- 24 パウロがこのように弁明していると、フェストが大声で、「気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂

わせている」と言った。

25 するとパウロは次のように言った。「フェスト閣下。気は狂っておりません。私は、まじめな真理のことばを話しています。

26 王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げています。これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます。

27 アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います。」

28 するとアグリッパはパウロに、「あなたは、<sup>195</sup>わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」と言った。

29 パウロはこう答えた。「<sup>196</sup>ことばが少なかりと、多かりと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになつてくださることです。」

30 ここで王と総督とベルニケ、および同席の人々が立ち上がった。

31 彼らは退場してから、互いに話し合つて言った。「あの人は、死や<sup>197</sup>投獄に相当することは何もしていない。」

32 またアグリッパはフェストに、「この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに」と言った。

## 二七章

1 さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロと、ほかの数人の囚人は、ユリアスという親衛隊の百人隊長に引き渡された。

2 私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行くアドラミテオの船に乗り込んで出帆した。テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した。

3 翌日、シドンに入港した。ユリアスはパウロを親切に取り扱い、友人たちのところへ行行って、もてなしを受けることを許した。

4 そこから出帆したが、向かい風なので、キプロスの島陰を航行した。

5 そしてキリキヤとパンフリヤの<sup>198</sup>沖を航行して、ルキヤのミラに入港した。

6 そこに、イタリアへ行くアレキシサンドリヤの船があったので、百人隊長は私たちをそれに乗り込ませた。

7 幾日かの間、船の進みはおそく、ようやくのことでクニドの沖に着いたが、風のためにそれ以上進むことができず、サルモネ沖のクレテの島陰を航行し、

8 その岸に沿って進みながら、ようやく、良い港と呼ばれる所に着いた。その近くにラサヤの町があった。

9 かなりの日数が経過しており、<sup>199</sup>断食の季節もすでに過ぎていたため、もう航海は危険であったので、パウロは人々に注意して、

10 「皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます」と言った。

11 しかし百人隊長は、パウロのことばよりも、航海士や<sup>200</sup>船長のほうを信用した。

12 また、この港が冬を過ごすのに適していなかったので、大多数の者の意見は、ここを出帆して、できれば何とかして、南西と北西とに面しているクレテの港ピニクスまで行って、そこで冬を過ごすということになった。

13 おりから、穏やかな南風が吹いて来ると、人々は<sup>201</sup>この時とばかり錨を上げて、クレテの海岸に沿って航行した。

14 ところが、まもなく<sup>202</sup>ユーラクロンという暴風が陸から吹きおろして来て、

15 船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができないので、しかたなく吹き流されるままにした。

16 しかし<sup>203</sup>クラウダという小さな島の陰に入ったので、ようやくのことで小舟を処置することができた。

17 小舟を船に引き上げ、備え綱で船体を巻いた。また、スルテスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具をはずして流れるに任せた。

18 私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、

19 三日目には、自分の手で船具までも投げ捨てた。

20 太陽も星も見えない日が幾日も続き、激しい暴風が吹きまくるので、私たちが助かる<sup>204</sup>最後の望みも今や絶たれようとしていた。

21 だれも長いこと食事をとらなかったが、そのときパウロが彼らの中に立って、こう言った。「皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。

22 しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。

23 昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、

24 こう言いました。『恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。』

25 ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりになると、私は神によって信じています。

26 私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」

27 十四日目の夜になって、私たちがアドリヤ海を漂っていると、真夜中ごろ、水夫たちは、どこかの<sup>205</sup>陸地に近

づいたように感じた。

28 水の深さを測ってみると、<sup>はか</sup>206四十メートルほどであることがわかった。少し進んでまた測ると、<sup>はか</sup>207三十メートルほどであった。

29 どこかで暗礁に乗り上げはしないかと心配して、ともから四つの<sup>いかり</sup>錨を投げおろし、夜の明けるのを待った。

30 ところが、水夫たちは船から逃げ出そうとして、へさきから<sup>いかり</sup>錨を降ろすように見せかけて、小舟を海に降ろしていたので、

31 パウロは百人隊長や兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません」と言った。

32 そこで兵士たちは、小舟の綱を断ち切って、そのまま流れ去るのに任せた。

33 ついに夜の明けかけたころ、パウロは、一同に食事をとることを勧めて、こう言った。「あなたがたは待ちに待って、きょうまで何も食わずに過ごして、十四日になります。

34 ですから、私はあなたがたに、食事をとることを勧めます。これであなたがたは助かることになるのです。あなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません。」

35 こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝をささげてから、それを裂いて<sup>かんしや</sup>208食べ始めた。

36 そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。

37 船にいた私たちは全部で二百七十六人であった。

38 十分食べてから、彼らは麦を海に投げ捨てて、船を軽くした。

39 夜が明けると、<sup>すな はま</sup>209どこの陸地かわからないが、砂浜のある入江が目にと留まったので、できれば、そこに船を<sup>こ</sup>210乗り入れようということになった。

40 <sup>いかり</sup>錨を切って海に捨て、同時に<sup>す</sup>綱を解き、風に<sup>すな はま</sup>前の帆を上げて、砂浜に向かって進んで行った。

41 ところが、<sup>ちようりゆう</sup>211潮流の流れ合う<sup>あさ</sup>212浅瀬に乗り上げて、船を<sup>ざ</sup>座礁させてしまった。へさきはめり込んで動かなくなり、ともは激しい波に打たれて破れ始めた。

42 兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと相談した。

43 しかし百人隊長は、パウロをあくまでも助けようと思って、その計画を押さえ、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がるように、

44 それから残りの者は、板切れや、その他の、船にある物につかまって行くように命じた。こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった。

## 二八章

- 1 こうして救われてから、私たちは、ここが<sup>213</sup>マルタと呼ばれる島であることを知った。
- 2 <sup>214</sup>島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。おりから雨が降りだして寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなをもてなしてくれた。
- 3 パウロがひとかかえの柴を<sup>しば</sup>たばねて火にくべると、熱気のために、一匹のまむしがはい出して来て、彼の手に取りついた。
- 4 <sup>215</sup>島の人々は、この生き物がパウロの手から下がっているのを見て、「この人はきつと人殺した。海からはのがれたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ」と互いに話し合った。
- 5 しかし、パウロは、その生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。
- 6 島の人々は、彼が今にも、はれ上がって来るか、または、<sup>たお</sup>倒れて急死するだろうと待っていた。しかし、いくら待っても、彼に少しも変わった様子が見えないので、彼らは考えを変えて、「この人は神さまだ」と言いだした。
- 7 さて、その場所の近くに、島の首長でボブリオという人の<sup>りようち</sup>領地があった。彼はそこに私たちを<sup>しょうたい</sup>招待して、三日間手厚くもてなしてくれた。
- 8 たまたまボブリオの父が、熱病と下痢とで床に着いていた。そこでパウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった。
- 9 このことがあってから、島のほかの病人たちも来て、直してもらった。
- 10 それで彼らは、私たちが非常に尊敬し、私たちが<sup>しゆつばん</sup>出帆するときには、私たちに必要な品々を用意してくれた。
- 11 三か月後に、私たちは、この島で冬を過ごしていた、船首に<sup>216</sup>デオスクロイの飾りのある、アレキサンドリヤの船で<sup>しゆつばん</sup>出帆した。
- 12 シラクサに寄港して、三日間とどまり、
- 13 そこから<sup>217</sup>回って、レギオンに着いた。一日たつと、南風が吹き始めたので、二日目にはポテオリに入港した。
- 14 ここで、私たちは兄弟たちに会い、<sup>すす</sup>勧められるままに彼らのところに七日間滞在した。こうして、私たちはローマに<sup>とうちやく</sup>到着した。
- 15 私たちのことを聞いた兄弟たちは、ローマから<sup>218</sup>アピオ・ポロと<sup>219</sup>トレス・タベルネまで出迎えに来てくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた。
- 16 私たちがローマに入ると、<sup>220</sup>パウロは番兵付きで自分だけの家に住むことが許された。
- 17 三日の後、パウロはユダヤ人のおもだった人たちを呼び集め、彼らが集まったときに、こう言った。「兄弟たち。私は、私の国民に対しても、先祖の慣習に対しても、何一つそむくことはしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に渡されました。
- 18 ローマ人は私を取り調べましたが、私を死刑にする理由が何もなくだったので、私を釈放しようと思ったのです。
- 19 ところが、ユダヤ人たちが反対したため、私はやむなくカイザルに上訴しました。それは、私の同胞を訴えようとしたわけではありません。
- 20 このようなわけで、私は、あなたがたに会ってお話ししようと思い、お招きしました。私はイスラエルの望みのためにこの鎖につながれているのです。」
- 21 すると、彼らはこう言った。「私たちは、あなたのことについて、ユダヤから何の知らせも受けておりません。また、当地にきた兄弟たちの中で、あなたについて悪いことを告げたり、話したりした者はありません。
- 22 私たちは、あなたが考えておられることを、直接あなたから聞くのがよいと思っています。この宗派については、至る所で非難があることを私たちは知っているからです。」
- 23 そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。
- 24 ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかった。

25 こうして、彼らは、お互いの意見が一致せずに帰りがけたので、パウロは一言、次のように言った。「聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの父祖たちに語られたことは、まさにそのとおりでした。

26 『この民のところに行って、告げよ。

あなたがたは確かに聞きはするが、

決して悟らない。

確かに見てはいるが、決してわからない。

27 この民の心は鈍くなり、

その耳は遠く、

その目はつぶっているからである。

それは、彼らがその目で見、

その耳で聞き、

その心で悟って、[221](#)立ち返り、

わたしにいやされることのないためである。』

28 ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。」[222](#)

30 こうしてパウロは満二年の間、[223](#)自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

- 1 あるいは「食事をともにしている」
- 2 あるいは「兄弟」
- 3 直訳「取る」
- 4 直訳「が満ちて」
- 5 あるいは「分けられた」
- 6 すなわち「小アジアの西海岸の州」
- 7 すなわち「ユダヤ教に回心した外国人」
- 8 あるいは「発酵中の新しいぶどう酒」
- 9 直訳「第三時」
- 10 あるいは「律法のない者」「外国人（異教徒）」
- 11 直訳「陣痛」
- 12 直訳「与える」
- 13 別訳「右手によって」
- 14 別訳「のがれなさい」
- 15 異本「エルサレムにおいて、使徒たちによって多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行われ、大いなる恐れがすべての上にあった」
- 16 あるいは「家々で」
- 17 あるいは「心の純真さ」
- 18 直訳「第九時」
- 19 あるいは「柱廊」
- 20 別訳「子」ギリシヤ語「バイス」
- 21 別訳「源」
- 22 あるいは「メシヤ」一油そそがれた者
- 23 「神に」は補足
- 24 直訳「キリスト」
- 25 別訳「私を立てられたように、ひとりの預言者を」
- 26 別訳「子」ギリシヤ語「バイス」
- 27 別訳「だれによって」
- 28 あるいは「においてです」
- 29 あるいは「のつつて」
- 30 「を通して」は補足
- 31 あるいは「諸国民」
- 32 別訳「来て」
- 33 すなわち「メシヤ」一油そそがれた者
- 34 参照使徒四・二五注
- 35 別訳「今の事情について」
- 36 参照使徒三・一三注
- 37 あるいは「仲間」
- 38 ある異本は「キリスト」を加えている
- 39 別訳「勧めの子」
- 40 あるいは「と共謀して」
- 41 直訳「権威のうちにある」
- 42 直訳「を通して」
- 43 直訳「に手をかけ」
- 44 あるいは「語り続けなさい」



- 45 直訳「見よ」
- 46 直訳「木」
- 47 あるいは「乱暴を働いた」
- 48 あるいは「指導者」
- 49 別訳「右手によって」
- 50 異本「彼にあつて」または「彼について」を加える
- 51 直訳「心をのこぎりで引き切る」
- 52 あるいは「の群れ」
- 53 あるいは「すべての群れ」
- 54 すなわち「小アジアの西海岸の州」
- 55 あるいは「に仕える」
- 56 ギリシヤ語「エモル」
- 57 直訳「に起こるとき」
- 58 直訳「神に」
- 59 「同胞」は補足
- 60 別訳「解放」
- 61 別訳「私を立てられたように、ひとりの預言者を」
- 62 ギリシヤ語「エクレシヤ」
- 63 直訳「心中で振り向き」
- 64 異本「ロンパン」「レンバム」「ライバン」「レバン」等
- 65 ごく初期の写本に「家」とあるものが多い。七十人訳は「神」（詩篇一三二・五）である
- 66 直訳「心をのこぎりで引き切る」
- 67 「主を」は補足
- 68 直訳「ことば」 別訳「教え」
- 69 別訳「これは、荒れ果てた道である」
- 70 「馬車に」は補足
- 71 別訳「生まれ」
- 72 異本は三七節をこのあとに挿入している。「そこでピリポは言った。『もしあなたが心底から信じるならば、よいのです。』すると彼は答えて言った。『私は、イエス・キリストが神の御子であると信じます。』」
- 73 旧約聖書の「アシュドデ」
- 74 あるいは「音」
- 75 異本は「幻で」を欠く
- 76 直訳「この方」
- 77 「信者の数が」は補足
- 78 意味「かもしか」
- 79 あるいは「大隊」
- 80 直訳「第九時」
- 81 あるいは「家の奴隸」
- 82 直訳「第六時」
- 83 「食事を」は補足
- 84 「動物」は補足
- 85 直訳「見よ」
- 86 ごく初期の写本の一つでは「ふたり」
- 87 別訳「何の差別もつけずに」
- 88 あるいは「尊敬してひれ伏した」

- [89](#) 直訳「第九時」
- [90](#) 直訳「見よ」
- [91](#) あるいは「敬い」
- [92](#) 異本「神がすべての人の…イスラエルの子孫に送られたみことばについては」
- [93](#) 別訳「すなわち、神がどのようにナザレのイエスに…を注がれたかを」
- [94](#) 直訳「食べたり、飲んだりしました」
- [95](#) 別訳「なぜ、あなたは…したのか」
- [96](#) 別訳「の家に入って」
- [97](#) 「の獣」は補足
- [98](#) 「言って」は補足
- [99](#) 直訳「見よ」
- [100](#) 別訳「何の差別もつけずに」
- [101](#) 「のなさること」は補足
- [102](#) 異本「ヘレニストたち」（ギリシヤ語を話す人たち）
- [103](#) 直訳「加えられた」
- [104](#) すなわち「ヘロデ・アグリッパ一世」
- [105](#) 直訳「見よ」
- [106](#) 「災い」は補足
- [107](#) あるいは「さばきの座」
- [108](#) 異本「へ」
- [109](#) 異本「彼らを養われました」
- [110](#) 別訳「私はあなたがたが考えているような人ではありません」
- [111](#) 「イエスを」は補足
- [112](#) 直訳「木」
- [113](#) 権威ある写本に「私たちの子孫」と読むものがある
- [114](#) あるいは「敬虔な者」
- [115](#) 別訳「神のみこころによって、その時代に仕え」
- [116](#) 直訳「義と認められる」
- [117](#) 直訳「義と認められる」
- [118](#) 直訳「預言者たち」
- [119](#) 直訳「ことば」
- [120](#) 異本「主」
- [121](#) 異本「神」
- [122](#) あるいは「礼拝する」
- [123](#) 直訳「境界」あるいは「地域」
- [124](#) あるいは「同じように」
- [125](#) あるいは「救われる」
- [126](#) すなわち「偶像崇拜」
- [127](#) 別訳「の中で私をお選びになり」
- [128](#) あるいは「天幕」
- [129](#) あるいは「知られていたこれらのことをなさる主」
- [130](#) 異本 三四節として「しかし、シラスはそこにとどまることに決めた」
- [131](#) すなわち「小アジアの西海岸の州」
- [132](#) 別訳「フルギヤとガラテヤ地方」
- [133](#) 異本「それゆえ」

- 134 あるいは「を信じる者」
- 135 あるいは「去った」
- 136 異本「神」
- 137 別訳「神を信じたことを、全家族とともに心から喜んだ」
- 138 あるいは「約束」「保証」
- 139 別訳「さえずる者」
- 140 ギリシヤ語「ダイモニオン」
- 141 あるいは「アレオパゴスの議会」
- 142 後期のある写本「一つの血」
- 143 異本「テトス」。「テテオ・ユスト」を欠く写本もある
- 144 「エルサレムに」は補足
- 145 別訳「学識のある」
- 146 別訳「すでに信者になっていた人たちを、恵みによって大いに助けた」
- 147 直訳「聖霊のあることを聞いたことさえありませんでした」
- 148 異本「の事がらについて」
- 149 たぶん五万ドラクマ
- 150 別訳「主の力により、みことばはますます広がり、力強くなって行った」
- 151 直訳「御霊によって」
- 152 「の模型」は補足
- 153 あるいは「入って行くような危険を冒さないように」
- 154 ギリシヤ語「エクレシヤ」
- 155 別訳「ある人たちは彼を（その原因と）考えた」
- 156 別訳「ゼウスから」
- 157 ギリシヤ語「エクレシヤ」
- 158 ギリシヤ語「エクレシヤ」
- 159 直訳「彼ら」
- 160 あるいは「（窓）台に」
- 161 あるいは「歩いて行く」
- 162 異本「トロギュリヤに泊まり、その後」を挿入する
- 163 別訳「御霊に縛られて」
- 164 直訳「さあ、ご覧なさい」（呼びかけのことば）
- 165 直訳「の血について」
- 166 異本「主」
- 167 最も古い写本の一つ「主」
- 168 「滞在の」は補足
- 169 直訳「物」
- 170 別訳「翌日、その人たちを引き連れ、ともに身をきよめて」
- 171 「ローマ」は補足
- 172 あるいは「大隊」
- 173 別訳「ある者はこのことを叫び、ほかの者はほかのことを叫び続けたので」
- 174 あるいは「（律法）の厳格なしかたに従って」
- 175 別訳「皮ひもで縛ったとき」
- 176 直訳「縛っていたので」
- 177 あるいは「陰謀を巡らし」
- 178 直訳「やって来て、兵営に入り」

- [179](#) 直訳「第三時」
- [180](#) あるいは「投石兵」
- [181](#) 別訳「『...また馬も用意し、それにパウロを乗せて、無事に総督ペリクスのもとに送り届けよ』と言いつけた」
- [182](#) 直訳「なわめ」
- [183](#) 異本「ご健勝で（あいさつのことば）」を加える
- [184](#) 直訳「演説家」
- [185](#) あるいは「パウロを訴える証拠を総督に示した」
- [186](#) 後期の異本に、このあと、「そして私たちが自分たちの律法で彼をさばこうとしたところ、7 千人隊長ルシヤがやって来て、むりやりに彼を私たちの手から奪い、8 彼を訴える者は、あなたの前に来るようにと命じました」という挿入がある
- [187](#) あるいは「群衆を集めたり」
- [188](#) 「最善を」は補足。別訳「努めています」
- [189](#) 別訳 三節冒頭の「特に」を、「問題に」のあとに置き、「特に精通しておられるからです」とする
- [190](#) 「以前は」は補足
- [191](#) すなわち「パレスチナの外の町々」
- [192](#) 直訳「太陽の輝きよりも明るく」
- [193](#) 異本「わたしを」を挿入
- [194](#) 別訳「死人の中から最初によみがえって、この民と異邦人とに光を宣べ伝える、ということです」
- [195](#) 別訳「短い時間で」
- [196](#) 別訳「時間が短くあろうと長くあろうと」
- [197](#) 直訳「なわめ」
- [198](#) あるいは「沿岸」
- [199](#) すなわち「十月の、贖いの日」
- [200](#) あるいは「船主」
- [201](#) 直訳「目的が達せられると思って」
- [202](#) すなわち「北東風」
- [203](#) 異本「カウダ」
- [204](#) 直訳「すべての望み」
- [205](#) 別訳「陸地が近づいて来たように」
- [206](#) 直訳「二〇オルグイア」一オルグイアは一・八五メートル
- [207](#) 直訳「一五オルグイア」
- [208](#) 異本「私たちも分け与えて」を挿入
- [209](#) あるいは「まだ陸地ははっきりしなかったが」
- [210](#) 異本「安全に乗り入れよう」
- [211](#) 直訳「二つの海」
- [212](#) 直訳「所」
- [213](#) 別訳「メリタ」、ある異本は「メリテネ」と読む
- [214](#) ギリシヤ語「バルバロイ」
- [215](#) 参照使徒二八・二注
- [216](#) 直訳「ゼウスのふた子」
- [217](#) 異本「錨を上げて」
- [218](#) アピア街道上の、ローマより約六三・五キロメートル離れた宿場
- [219](#) アピア街道上の、ローマより約四九キロメートル離れた宿場
- [220](#) 異本「パウロ...」の前に「百人隊長は囚人たちを守備隊長に引き渡したが」を挿入
- [221](#) 別訳「悔い改めて」

[222](#) ある写本には二九節として、次の挿入がある。「彼がこれらのことを話し終えると、ユダヤ人たちは互いに激しく論じ合いながら、帰って行った」

[223](#) 別訳「自費で生活し」

# ローマ人への手紙

- [一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)
- [六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)
- [十一章](#) [十二章](#) [十三章](#) [十四章](#) [十五章](#)
- [十六章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 神の福音のために選ば分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、
- 2 ―この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、
- 3 御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、
- 4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって 公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。
- 5 このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです。
- 6 あなたがたも、それらの人々の中にあつて、イエス・キリストによって召された人々です、―このパウロから、
- 7 ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ。
- 私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- 8 まず第一に、あなたがたすべてのために、私はイエス・キリストによって私の神に感謝します。それは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。
- 9 私が御子の福音を宣べ伝えつづ霊をもって仕えている神があかししてくださるのですが、私はあなたがたのことを思わぬ時はなく、
- 10 いつも祈りのたびごとに、神のみこころによって、何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに行けるようにと願っています。
- 11 私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。
- 12 というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。
- 13 兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです。
- 14 私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならぬ負債を負っています。
- 15 ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。
- 16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。
- 17 なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、<sup>3</sup>その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「<sup>4</sup>義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。
- 18 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。
- 19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。
- 20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであつて、彼らに弁解の余地はないのです。
- 21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神として<sup>5</sup>あがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。
- 22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、
- 23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。

24 それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。

25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。

26 こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、

27 同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行うようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。

28 また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。

29 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪たくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、

30 そしる者、<sup>6</sup>神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、

31 わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。

32 彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。



## 二章

- 1 ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行っているからです。
- 2 私たちは、そのようなことを行っている人々に下る神のさばきが正しいことを知っています。
- 3 そのようなことをしている人々をさばきながら、自分で同じことをしている人よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるのだとも思っているのですか。
- 4 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。
- 5 ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めない心<sup>7</sup>のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。
- 6 神は、ひとりひとりに、その人の行いに従って報いをお与えになります。
- 7 忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと不滅のものとを求める者には、永遠のいのちを与え、
- 8 党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと 憤りを下されるのです。
- 9 患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行うすべての者の上に下り、
- 10 栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行うすべての者の上にあります。
- 11 神にはえこひいきなどはないからです。
- 12 律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。
- 13 それは、律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行う者が正しいと認められるからです。
- 14 ー律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。
- 15 彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいつよになってあかし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。ー
- 16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行われるのです。
- 17 もし、あなたが自分をユダヤ人ととなえ、律法を持つことに安んじ、神を誇り、
- 18 みこころを知り、<sup>8</sup>なすべきことが何であるかを律法に教えられてわきまえ、
- 19 20 また、知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の<sup>9</sup>導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、
- 21 どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなと説きながら、自分は盗むのですか。
- 22 姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌みきらいながら、自分は神殿の物をかすめるのですか。
- 23 律法を誇りとしているあなたが、どうして律法に違反して、神を侮るのですか。
- 24 これは、「神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている」と書いてあるとおりです。
- 25 もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです。
- 26 もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者とみなされないでしょう。
- 27 また、からだに割礼を受けていないで律法を守る者が、<sup>10</sup>律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、さばくことにならないでしょうか。

- 28 外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼かつれいが割礼かつれいなのではありません。
- 29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字もんじではなく、御霊みたまによる、心の割礼かつれいこそ割礼かつれいです。その誉れほまは、人からではなく、神から来るものです。

# 三章

- 1 では、ユダヤ人のすぐれたところは、いったい何ですか。割礼にどんな益があるのですか。
- 2 それは、あらゆる点から見て、大いにあります。第一に、彼らは神のいろいろなおことばをゆだねられています。
- 3 では、いったいどうなのですか。彼らのうちに<sup>11</sup>不真実な者があつたら、その<sup>12</sup>不真実によって、神の真実が無に帰することになるでしょうか。
- 4 絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。それは、
- 「あなたが、そのみことばによって正しいとされ、
- さばかれるときには勝利を得られるため。」
- と書いてあるとおりです。
- 5 しかし、もし私たちの不義が神の義を<sup>13</sup>明らかにするとしたら、どうなるでしょうか。人間的な言い方をしますが、怒りを下す神は不正なのでしょうか。
- 6 絶対にそんなことはありません。もしそうだとしたら、神はいったいどのように世をさばかれるのでしょうか。
- 7 でも、私の偽りによって、神の真理がますます明らかにされて神の栄光となるのであれば、なぜ私がなお罪人としてさばかれるのでしょうか。
- 8 「善を現すために、悪をしようではないか」と言つてはいけなのではないでしょうか——私たちはこの点でそしられるのです。ある人たちは、それが私たちのことばだと言っていますが。——もちろんこのように論じる者どもは当然罪に定められるのです。
- 9 では、どうなのでしょう。私たちは他の者に<sup>14</sup>まさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。
- 10 それは、次のように書いてあるとおりです。
- 「義人はいない。ひとりもない。
- 11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。
- 12 すべての人が迷い出て、
- みな、ともに無益な者となつた。
- 善を行う人はいない。ひとりもない。」
- 13 「彼らのどは、開いた墓であり、
- 彼らはその苦で欺く。」
- 「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」
- 14 「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」
- 15 「彼らの足は血を流すのに速く、
- 16 彼らの道には破壊と悲愴がある。
- 17 また、彼らは平和の道を知らない。」
- 18 「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」
- 19 さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。
- 20 なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によつては、かえつて罪の意識が生じるのです。
- 21 しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によつてあかしされて、神の義が示されました。
- 22 すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。

- 23 すべての人は、罪を犯したので、<sup>つみ おか</sup>15神からの栄誉を受けることができず、
- 24 ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、<sup>めく あがな あたい ぎ みと</sup>価なしに義と認められるのです。
- 25 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、<sup>しん こう</sup>16なだめの供え物として、<sup>そな もの おおやけ しめ</sup>公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。
- 26 それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義と<sup>ぎ あらわ</sup>お認めになるためなのです。
- 27 それでは、私たちの誇りはどこにあるのでしょうか。それはすでに取り除かれました。どういう原理によってで<sup>ほこ と のぞ</sup>しょうか。行いの原理によってで<sup>しん こう</sup>しょうか。そうではなく、信仰の原理によってです。
- 28 <sup>ぎ みと</sup>17人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるとというのが、私たちの考えです。
- 29 それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人にとっても神ではないのでしょうか。確かに神は、異邦人に<sup>い ほうじん たし い ほうじん</sup>ととっても、神です。
- 30 神が唯一ならばそうです。この神は、割礼のある者を信仰によって義と認めてくださるとともに、割礼のない者<sup>ゆい いっ しん こう</sup>をも、信仰によって義と認めてくださるのです。
- 31 それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。<sup>しん こう ぎ みと</sup>かえって、律法を確立することになるのです。

## 四章

- 1 それでは、<sup>18</sup>肉<sup>ふ そ</sup>による私たちの父祖<sup>ふ そ</sup>アブラハムの場合は、どうでしょうか。
- 2 もしアブラハムが行いによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。
- 3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた」とあります。
- 4 働く者の場合に、その報酬<sup>ほうしゆう めぐ</sup>は恵みでなくて、当然支払<sup>し はら</sup>うべきものとみなされます。
- 5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。
- 6 ダビデもまた、行いとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。
- 7 「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、  
幸いである。
- 8 主が罪を認めない人は幸いである。」
- 9 それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義とみなされた」と言っていますが、
- 10 どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。<sup>19</sup>割礼を受けてからでしょうか。<sup>20</sup>まだ割礼を受けていないときでしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです。
- 11 彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、
- 12 また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。
- 13 というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。
- 14 もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。
- 15 律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反ありません。
- 16 そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰<sup>21</sup>によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。
- 17 このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。
- 18 彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこうになる」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。
- 19 アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだ<sup>からだ</sup>が死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。
- 20 彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、
- 21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。
- 22 だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。
- 23 しかし、「彼の義とみなされた」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、
- 24 また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。

25 主イエスは、私たちの罪<sup>つみ</sup>のために死に渡<sup>わた</sup>され、私たちが義<sup>ぎ</sup>と認め<sup>みと</sup>られるために、よみがえられたからです。

## 五章

- 1 ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を<sup>22</sup>持っています。
- 2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに<sup>23</sup>喜んでいます。
- 3 そればかりではなく、患難さえも<sup>24</sup>喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、
- 4 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。
- 5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。
- 6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。
- 7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。
- 8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。
- 9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。
- 10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。
- 11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいてのです。
- 12 そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。
- 13 というのは、<sup>25</sup>律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。
- 14 ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方の<sup>26</sup>ひな型です。
- 15 ただし、恵みには違反の場合とは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。
- 16 また、賜物には、罪を犯したひとりによる場合と違った点があります。さばきの場合は、一つの違反のために罪に定められたのですが、恵みの場合は、多くの違反が義と認められるからです。
- 17 もしひとりの違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりのイエス・キリストにより、いのちにあつて支配するのです。
- 18 こういうわけで、ちょうどひとりの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、ひとりの義の行為によってすべての人が義と認められ、いのちを与えられるのです。
- 19 すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。
- 20 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。
- 21 それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。





## 第六章

- 1 それでは、どうということになりますか。恵<sup>めぐ</sup>みが増し加<sup>ま</sup>わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。
- 2 絶対<sup>ぜつたい</sup>にそんなことはありません。罪<sup>つみ</sup>に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。
- 3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたものではありませんか。
- 4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬<sup>ほうむ</sup>られたのです。それは、キリストが御父<sup>みちち</sup>の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。
- 5 もし私たちが、<sup>27</sup>キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活<sup>ふつかつ</sup><sup>28</sup>とも同じようになるからです。
- 6 私たちの古い人がキリストとともに十字架<sup>じゆうじ</sup>につけられたのは、罪<sup>つみ</sup>のからだ<sup>か</sup>が<sup>29</sup>滅<sup>ほろ</sup>びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。
- 7 死んでしまった者は、罪<sup>つみ</sup>から<sup>30</sup>解放<sup>かいほう</sup>されているのです。
- 8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。
- 9 キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配<sup>しはい</sup>しないことを、私たちは知っています。
- 10 なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪<sup>つみ</sup>に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。
- 11 このように、あなたがたも、自分<sup>つみ</sup>は罪<sup>つみ</sup>に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい。
- 12 ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪<sup>つみ</sup>の支配<sup>しはい</sup>にゆだねて、その情欲<sup>じようよく</sup>に従<sup>したが</sup>ってはいけません。
- 13 また、あなたがたの手足を不義<sup>ふぎ</sup>の器<sup>うつわ</sup>として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義<sup>ぎ</sup>の器<sup>うつわ</sup>として神にささげなさい。
- 14 というのは、罪<sup>つみ</sup>はあなたがたを支配<sup>しはい</sup>することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法<sup>りつぽう</sup>の下にはなく、恵み<sup>めぐ</sup>の下にあるからです。
- 15 それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下ではなく、恵み<sup>めぐ</sup>の下にあるのだから罪を犯<sup>つみ</sup>そう、ということになるのでしょうか。絶対<sup>ぜつたい</sup>にそんなことはありません。
- 16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従<sup>ふくじゆう</sup>すれば、その服従<sup>ふくじゆう</sup>する相手の奴隷<sup>どれい</sup>であつて、あるいは罪<sup>つみ</sup>の奴隷となつて死に至<sup>いた</sup>り、あるいは従<sup>じゆう</sup>順<sup>じゆん</sup>の奴隷となつて義に至<sup>ぎ</sup>るのです。
- 17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪<sup>つみ</sup>の奴隷でしたが、伝えられた教えの規<sup>き</sup>準<sup>じゆん</sup>に心から服従<sup>ふくじゆう</sup>し、
- 18 罪<sup>つみ</sup>から解放<sup>かいほう</sup>されて、義<sup>ぎ</sup>の奴隷となつたのです。
- 19 あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚<sup>けが</sup>れと不法<sup>ふぼう</sup>の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義<sup>ぎ</sup>の奴隷としてささげて、聖潔<sup>せいけつ</sup>に進みなさい。
- 20 罪<sup>つみ</sup>の奴隷であつた時は、あなたがたは義<sup>ぎ</sup>については、自由にふるまっていました。
- 21 その当時、今ではあなたがたが恥<sup>は</sup>じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。
- 22 しかし今は、罪<sup>つみ</sup>から解放<sup>かいほう</sup>されて神の奴隷となり、聖潔<sup>せいけつ</sup>に至<sup>いた</sup>る実を得たのです。その行き着く所は永遠<sup>えいえん</sup>のいのちです。
- 23 罪<sup>つみ</sup>から来る報酬<sup>ほうしゆう</sup>は死です。しかし、神の下さる賜物<sup>たまもの</sup>は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠<sup>えいえん</sup>のいのちです。



## 七章

- 1 それとも、兄弟たち。あなたがたは、律法が人に対して権限を持つのは、その人の生きている期間だけだ、という事を知らないのですか——私は律法を知っている人々に言っているのです。——
- 2 夫のある女は、夫が活着ている間は、律法によって夫に結ばれてゐます。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。
- 3 ですから、夫が活着ている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行つても、姦淫の女ではありません。
- 4 私の兄弟たちよ。それと同じように、あなたがたも、キリストのからだによって、律法に対しては死んでゐるのである。それは、あなたがたが他の人、すなわち死者の中からよみがえつた方と結ばれて、神のために実を結ぶようになるためです。
- 5 私たちが肉にあつたときは、律法による数々の罪の欲情が私たちの<sup>31</sup>からだの中に働いていて、死のために実を結びました。
- 6 しかし、今は、私たちは自分を捕らえていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい<sup>32</sup>御霊によって仕えてゐるのです。
- 7 それでは、どういふことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかつたでしょう。律法が、「<sup>33</sup>むさぼつてはならない」と言わなかつたら、私は<sup>34</sup>むさぼりを知らなかつたでしょう。
- 8 しかし、罪はこの戒めによって機会を捕らえ、私のうちにあらゆる<sup>35</sup>むさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。
- 9 私はかつて律法なしに生きてゐましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。
- 10 それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえつて死に導くものであることが、わかりました。
- 11 それは、戒めによって機会を捕らえた罪が私を欺き、戒めによって私を殺したからです。
- 12 ですから、律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。
- 13 では、この良いものが、私に死をもたらしただけなのでしょうか。絶対にそんなことはありません。それはむしろ、罪なのです。罪は、この良いもので私に死をもたらすことによって、罪として明らかにされ、戒めによって、極度に罪深いものとなりました。
- 14 私たちは、律法が靈的なものであることを知つてゐます。しかし、私は罪ある人間であり、売られて罪の下にある者です。
- 15 私には、自分のしてゐることがわかりません。私は自分がしたいと思ふことをしてゐるのではなく、自分が憎むことを行つてゐるからです。
- 16 もし自分のしたくないことをしてゐるとすれば、律法は良いものであることを認めてゐるわけです。
- 17 ですから、それを行つてゐるのは、もはや私ではなく、私のうちに住みつゐる罪なのです。
- 18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでゐないのを知つてゐます。私には善をしたいという願ひがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
- 19 私は、自分でしたいと思ふ善を行わないで、かえつて、したくない惡を行つてゐます。
- 20 もし私が自分でしたくないことをしてゐるのであれば、それを行つてゐるのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。
- 21 そういふわけで、私は、善をしたいと願つてゐるのですが、その私に惡が宿つてゐるという原理を見いだすのです。
- 22 すなわち、私は、内なる人<sup>36</sup>としては、神の律法を喜んでゐるのに、

- 23 私の<sup>37</sup>からだの中には異なつた律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
- 24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれが<sup>38</sup>この死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。
- 25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。

# 八章

- 1 こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。
- 2 なぜなら、キリスト・イエスに<sup>39</sup>ある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、<sup>40</sup>あなたを解放したからです。
- 3 肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。
- 4 それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。
- 5 肉に従う者は肉のなことをもつばら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。
- 6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。
- 7 というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。
- 8 肉にある者は神を喜ばせることができません。
- 9 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいます。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。
- 10 もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。
- 11 もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊<sup>41</sup>によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださいます。
- 12 ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。
- 13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。
- 14 神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。
- 15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。
- 16 私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。
- 17 もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。
- 18 今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。
- 19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。
- 20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。
- 21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に<sup>42</sup>入れられます。
- 22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。
- 23 そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。
- 24 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。<sup>43</sup>だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。
- 25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

27 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

28 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、<sup>44</sup>神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

29 なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多く兄弟たちの中で長子となられるためです。

30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。

31 では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。

32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

33 神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。

34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、<sup>45</sup>よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

35 私たちを<sup>46</sup>キリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

36 「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。

私たちは、ほふられる羊とみなされた。」

と書いてあるとおりです。

37 しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、

39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

## 九章

1 私はキリストにあつて<sup>いつわ</sup>真実を言い、<sup>せいれい</sup>偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。

2 私には大きな悲しみがあり、私の心には<sup>た</sup>絶えず<sup>いた</sup>痛みがあります。

3 もしできることなら、私の<sup>どうほう</sup>同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから<sup>ひ</sup>引き離されて、<sup>はな</sup>のろわれた者となることさえ願いたいのです。

4 彼らはイスラエル人です。子とされることも、<sup>けいやく</sup>栄光も、<sup>りつほう</sup>契約も、<sup>れいはい</sup>律法を与えられることも、<sup>れいはい</sup>礼拝も、<sup>れいはい</sup>約束も彼らのものです。

5 <sup>ふ</sup>父祖たちも<sup>そ</sup>彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。<sup>ばんぶつ</sup>47このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

6 しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエル人ではなく、

7 アブラハムから出たからといって、すべてが子どもではなく、「<sup>よ</sup>イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」のだからです。

8 すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。

9 約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」

10 このことだけでなく、私たちの父<sup>ぜん</sup>イサクひとりによってみごもったり<sup>たし</sup>リベカのこともあります。

11 その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行わないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、<sup>め</sup>召してくださる方によるようにと、

12 「兄は弟に仕える」と彼女に告げられたのです。

13 「わたしはヤコブを<sup>あい</sup>愛し、<sup>にく</sup>エサウを憎んだ」と書いてあるとおりです。

14 それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。

15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ」と言われました。

16 したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

17 <sup>せいしよ</sup>聖書は<sup>しめ</sup>パロに、「<sup>しめ</sup>わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである」と言っています。

18 こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。

19 すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう。」

20 しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、<sup>かたちづく</sup>いったい何ですか。<sup>かたちづく</sup>形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか」と言えるでしょうか。

21 <sup>とうき</sup>陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、<sup>たつと</sup>尊いこと<sup>うつわ</sup>に用いる器でも、また、<sup>うつわ</sup>つまらないことに用いる器でも作る<sup>けんり</sup>権利を持っていらないのでしょうか。

22 ですが、もし神が、<sup>いか</sup>怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その<sup>ほろ</sup>滅ばされるべき<sup>いか</sup>怒りの器を、<sup>ゆた</sup>豊かな寛容をもって<sup>にんたい</sup>忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。

23 それも、神が<sup>うつわ</sup>栄光のためにあらかじめ用意しておられた<sup>ゆた</sup>あわれみの器に対して、その<sup>ゆた</sup>豊かな栄光を知らせてくださるためなのです。

24 神は、この<sup>うつわ</sup>あわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、<sup>いほうじん</sup>異邦人の中からも<sup>め</sup>召してくださったのです。

25 それは、ホセアの書でも言っておられるとおりです。

「わたしは、わが<sup>たみ</sup>民でない者をわが<sup>たみ</sup>民と呼び、

愛<sup>あい</sup>さなかつた者<sup>あい</sup>を愛<sup>よ</sup>する者と呼ぶ。

26 『あなたがたは、わたしの民ではない』と、  
わたしが言ったその場所で、彼らは、  
生<sup>よ</sup>ける神の子どもと呼ばれる。」

27 また、イスラエルについては、イザヤがこう叫<sup>さけ</sup>んでいます。  
「たといイスラエルの子どもたちの数は、  
海<sup>すな</sup>べの砂のようであっても、  
救<sup>すな</sup>われるのは、残<sup>すな</sup>された者である。」

28 主は、みことばを完全<sup>びんそく</sup>に、しかも敏速<sup>びんそく</sup>に、  
地<sup>な</sup>上に成<sup>と</sup>し遂<sup>と</sup>げられる。」

29 また、イザヤがこう預言<sup>よげん</sup>したとおりです。  
「もし万軍<sup>ばんぐん</sup>の主が、  
私たちに子孫を残されなかつたら、  
私たちはソドムのようになり、  
ゴモラと同じものとされたであろう。」

30 では、どういうことになりますか。義<sup>ぎ</sup>を追い求めなかつた異邦人<sup>いほうじん</sup>は義<sup>ぎ</sup>を得ました。すなわち、信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>による義<sup>ぎ</sup>で  
す。

31 しかし、イスラエルは、義<sup>ぎ</sup>の律法<sup>りつぽう</sup>を追い求めながら、その律法<sup>りつぽう</sup>に到<sup>とう</sup>達<sup>たつ</sup>しませんでした。

32 なぜでしょうか。信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>によって追<sup>しん</sup>い求<sup>こう</sup>めることをしないで、行<sup>ぎ</sup>いによるかのように追<sup>しん</sup>い求<sup>こう</sup>めたからです。彼らは、  
つまずきの石<sup>いし</sup>につまずいたのです。

33 それは、こう書かれていとおります。

「見よ。わたしは、  
シオンに、つまずきの石<sup>いし</sup>、妨<sup>さまた</sup>げの岩<sup>いわ</sup>を置く。

彼<sup>しん</sup>に信<sup>ら</sup>頼<sup>い</sup>する者は、  
失<sup>しつ</sup>望<sup>ぽう</sup>させられることがない。」



## 一〇章

- 1 兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願ひ求めているのは、彼らの救われることです。
- 2 私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。
- 3 というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。
- 4 キリストが<sup>48</sup>律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。
- 5 モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いています。
- 6 しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言つてはいけない。」それはキリストを引き降ろすことです。
- 7 また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言つてはいけない。」それはキリストを死者の中から引き上げることです。
- 8 では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。
- 9 <sup>49</sup>なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。
- 10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。
- 11 聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」
- 12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべてのの人に対して恵み深くあらわれるからです。
- 13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。
- 14 しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。
- 15 遭わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりつぱでしょう。」
- 16 しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか」とイザヤは言っています。
- 17 そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリスト<sup>50</sup>についてのみことばによるのです。
- 18 でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。
- 「その声は全地に響き渡り、
- そのことばは<sup>51</sup>地の果てまで届いた。」
- 19 でも、私はこう言いましょう。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。
- 「わたしは、民でない者のことで、
- あなたがたのねたみを起こさせ、
- 無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」
- 20 またイザヤは大胆にこう言っています。
- 「わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、
- わたしをたずねない者に自分を現した。」
- 21 またイスラエルについては、こう言っています。
- 「不従順で反抗する民に対して、
- わたしは一日中、手を差し伸べた。」



## 一章

- 1 すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。
- 2 神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたのではありません。それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました。
- 3 「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私の<sup>52</sup>いのちを取ろうとしています。」
- 4 ところが彼に対して何とお答えになりましたか。「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」
- 5 それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。
- 6 もし恵みによるのであれば、もはや行いによるのではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。
- 7 では、どうなるのでしょうか。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。
- 8 こう書かれているとおりです。
- 「神は、彼らに鈍い心と  
見えない目と聞こえない耳を与えられた。  
今日に至るまで。」
- 9 ダビデもこう言います。
- 「彼らの食卓は、彼らにとって  
わなとなり、網となり、  
つまずきとなり、報いとなれ。」
- 10 その目はくらんで見えなくなり、  
その背はいつまでもかがんでおれ。」
- 11 では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなののでしょうか。絶対にそんなことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。
- 12 もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの<sup>53</sup>完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。
- 13 そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。
- 14 そして、それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。
- 15 もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。
- 16 初物が聖ければ、粉の全部が聖いのです。根が聖ければ、枝も聖いのです。
- 17 もしも、枝の中のあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をとともに受けているのだとしたら、
- 18 あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです。
- 19 枝が折られたのは、私がつぎ合わされるためだ、とあなたは言うでしょう。
- 20 そのとおりです。彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐

れなさい。

21 もし神が<sup>だい き</sup>台木の<sup>えだ お</sup>枝を惜しまれなかつたとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。

22 見てごらんさい。神のいつくしみときびしさを。<sup>たお</sup>倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであつて、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。

23 彼らであつても、もし<sup>ふ しんこう つづ</sup>不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼ら<sup>ふた</sup>を再びつぎ合わせるのです。

24 もしあなたが、野生種であるオリーブの木から切り取られ、もとの性質<sup>せいしつ</sup>に反して、栽培されたオリーブの木<sup>さいばい</sup>につがれたのであれば、これらの栽培種<sup>さいばいしゆ</sup>のものは、もっとたやすく自分の<sup>だい き</sup>台木につがれるはずです。

25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの<sup>おく き</sup>奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を<sup>かしこ</sup>賢いと思うことがないようにするためです。その奥義<sup>おく き</sup>とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の<sup>い ほうじん</sup>完成のなる時までであり、

26 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりです。

「救う者が<sup>ふ けいけん</sup>シオンから出て、

ヤコブから<sup>と ほう</sup>不敬虔を取り払う。

27 これこそ、彼らに与えた<sup>けいやく</sup>わたしの契約である。

それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」

28 彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、<sup>ふ そ</sup>選<sup>あ</sup>びによれば、父祖たちのゆえに、愛されている者なのです。

29 神の<sup>たまもの</sup>賜物と<sup>しやうめい</sup>召命とは変わることがありません。

30 ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順<sup>ふ、じゆうじゆん</sup>であつたが、今は、彼らの不従順<sup>ふ、じゆうじゆん</sup>のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、

31 彼らも、今は不従順<sup>ふ、じゆうじゆん</sup>になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。

32 なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順<sup>ふ、じゆうじゆん</sup>のうちに閉じ込められたからです。

33 ああ、神の<sup>ち え</sup>54知恵と<sup>ち しき</sup>知識との<sup>とみ</sup>富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。

34 なぜなら、だれが主のみこころを知つたのですか。また、だれが主のご計画にあずかつたのですか。

35 また、だれが、まず主<sup>むく</sup>に与えて報いを受けるのですか。

36 というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至る<sup>いた</sup>からです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

## 一二章

- 1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。
- 2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。
- 3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。
- 4 一つのからだには多くの器官があつて、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、
- 5 大ぜいいる私たちも、キリストにあつて一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。
- 6 私たちは、与えられた恵みに従つて、異なつた賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。
- 7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。
- 8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれをしなさい。
- 9 愛には偽りがあつてはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。
- 10 兄弟愛をもつて心から互いに愛し合い、尊敬をもつて互いに人を自分よりまさっていると思ひなさい。
- 11 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。
- 12 望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。
- 13 聖徒の入用に協力し、旅人をもてなさい。
- 14 **55** あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであつて、のろつてはいけません。
- 15 喜ぶ者といつしよに喜び、泣く者といつしよに泣きなさい。
- 16 互いに一つ心になり、高ぶつた思いを持たず、かえつて身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思つてはいけません。
- 17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。
- 18 あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。
- 19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」
- 20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。
- 21 悪に負けてはいけません。かえつて、善をもつて悪に打ち勝ちなさい。

# 一三章

- 1 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。
- 2 したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きま
- 3 支配者を恐ろしいと思うのは、良い行いをするときではなく、悪を行うときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行いなさい。そうすれば、支配者からほめられます。
- 4 それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行うなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います。
- 5 ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。
- 6 同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。
- 7 あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。
- 8 だれに対しても、何の借りもあつてはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。
- 9 「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」という戒め、またほかにどんな戒めがあつても、それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」ということばの中に要約されているからです。
- 10 愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。
- 11 あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行いなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は56救いが私たちにもっと近づいているからです。
- 12 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。
- 13 遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。
- 14 主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

## 一四章

- 1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。
- 2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。
- 3 食べる人は食べない人を侮<sup>あなど</sup>ってはいけないし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。
- 4 あなたはいついだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。
- 5 ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信<sup>かくしん</sup>を持ちなさい。
- 6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝<sup>かんしゃ</sup>しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝<sup>かんしゃ</sup>しているのです。
- 7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。
- 8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。
- 9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。
- 10 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮<sup>あなど</sup>るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。
- 11 次のように書かれているからです。
- 「主は言われる。わたしは生きている。
- すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、
- すべての舌<sup>した</sup>は、神を<sup>57</sup>ほめたたえる。」
- 12 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。
- 13 ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げ<sup>さまた</sup>になるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。
- 14 主イエスにあつて、私<sup>わたくし</sup>が知り、また確信<sup>かくしん</sup>していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。ただ、これは汚れていると認める人にとっては、それは汚れたものなのです。
- 15 もし、食べ物<sup>けが</sup>のことで、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛<sup>あい</sup>によって行動しているではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物<sup>けが</sup>のことで、滅ぼさ<sup>ほろ</sup>さないでください。
- 16 ですから、あなたがたが良いとしている事がらによって、そしられないようにしなさい。
- 17 なぜなら、神の国は飲み食い<sup>のみく</sup>のことでなく、義と平和と聖霊<sup>せいれい</sup>による喜びだからです。
- 18 このようにキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人々にも認められるのです。
- 19 そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い<sup>58</sup>求めましょう。
- 20 食べ物<sup>けが</sup>のことで神のみわざを破壊<sup>はかい</sup>してはいけません。すべての物はきよいのです。しかし、それを食べて<sup>59</sup>人につつまずきを与えるような人の場合は、悪いのです。
- 21 肉を食べず、ぶどう酒を飲まず、そのほか兄弟のつまずきになることをしないのは良いことなのです。
- 22 あなたの持っている信仰は、神の御前でそれを自分の信仰として保ちなさい。自分が、良いと認めていることによって、さばかれない人は幸福です。
- 23 しかし、疑い<sup>うたが</sup>を感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰<sup>しんこう</sup>から出ていないからです。信仰<sup>しんこう</sup>から出ていないことは、みな罪です。





# 一五章

- 1 私たち力のある者は、力のない人たちの弱さになるべきです。自分を喜ばせるべきではありません。
- 2 私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。
- 3 キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった」と書いてあるとおりです。
- 4 昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。
- 5 どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。
- 6 それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。
- 7 こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、<sup>60</sup>私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。
- 8 私は言います。キリストは、神の真理を現すために、割礼のある者のしもべとなりました。それは父祖たちに与えられた約束を保証するためであり、
- 9 また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。こう書かれているとおりです。
- 「それゆえ、私は異邦人の中で、  
あなたを<sup>61</sup>ほめたたえ、  
あなたの御名をほめ歌おう。」
- 10 また、こうも言われています。
- 「異邦人よ。主の民とともに喜べ。」
- 11 さらにまた、
- 「すべての異邦人よ。主をほめよ。  
もろもろの国民よ。主をたたえよ。」
- 12 さらにまた、イザヤがこう言っています。
- 「エッサイの根が起こる。  
異邦人を治めるために立ち上がる方である。  
異邦人はこの方に望みをかける。」
- 13 どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもつて満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。
- 14 私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。
- 15 ただ私が所々、かなり大胆に書いたのは、あなたがたにもう一度思い起こしてもらうためでした。
- 16 それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、<sup>62</sup>神から恵みをいただいているからです。
- 私は神の福音をもつて、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。
- 17 それで、神に仕えることにに関して、私はキリスト・イエスにあつて誇りを持っているのです。
- 18 私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて<sup>63</sup>成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行いにより、
- 19 また、<sup>64</sup>しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。

- 20 このように、私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。
- 21 それは、こう書いてあるとおりです。
- 「彼のことを伝えられなかった人々が  
見るようになり、  
聞いたことのなかった人々が  
さと  
悟るようになる。」
- 22 そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、
- 23 今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行く場合は、あなたがたのところに立ち寄ることを多年希望していましたので
- 24 ―というのは、途中あなたがたに会い、まず、しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです、―
- 25 ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。
- 26 それは、マケドニアとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために献金することにしたからです。
- 27 彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があります。異邦人は霊的なことでは、その人々からもらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。
- 28 それで、私はこのことを済ませ、65彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通過してイスパニヤに行くことにします。
- 29 あなたがたのところに行くときは、キリストの満ちあふれる祝福をもって行くことと信じています。
- 30 兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。
- 31 私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、またエルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように。
- 32 その結果として、神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところへ行き、あなたがたの中で、ともにいこいを得ることができますように。
- 33 どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン。

## 一六章

- 1 ケンクレヤにある教会の<sup>66</sup>執事<sup>しつじ</sup>で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦<sup>すいせん</sup>します。
- 2 どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあつてこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。
- 3 キリスト・イエスにあつて私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。
- 4 この人たちは、自分のいのちの危険<sup>きけん</sup>を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人<sup>いほうじん</sup>のすべての教会も感謝しています。
- 5 またその家の教会によろしく伝えてください。私の愛するエパネトによろしく。この人は<sup>67</sup>アジアでキリストを信じた最初の人です。
- 6 あなたがたのために非常<sup>ひじょう</sup>に労苦したマリヤによろしく。
- 7 私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコと<sup>68</sup>ユニアスにもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となつたのです。
- 8 主にあつて私の愛するアムブリアトによろしく。
- 9 キリストにあつて私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキスとによろしく。
- 10 キリストにあつて練達したアベレによろしく。アリストプロの家の人たちによろしく。
- 11 私の同国人ヘロデオンによろしく。ナルキソの家の主にある人たちによろしく。
- 12 主にあつて労している、ツルバナとツルボサによろしく。主にあつて非常に労苦した愛するペルシスによろしく。
- 13 主にあつて選ばれた人ルポスによろしく。また彼と私との母によろしく。
- 14 アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによろしく。
- 15 フィロロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく。
- 16 あなたがたは聖なる口づけをもつて互いのあいさつをかわしなさい。キリストの教会はみな、あなたがたによろしくと言っています。
- 17 兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂<sup>ぶんれつ</sup>とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。
- 18 そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の<sup>69</sup>欲<sup>よく</sup>に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもつて純朴な人たちの心をだましているのです。
- 19 あなたがたの従順<sup>じゆうじゆん</sup>はすべての人に知られているので、私はあなたがたのことを喜んでます。しかし、私は、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあつてほしい、と望んでいます。
- 20 平和の神は、すみやかに、あなたがたの<sup>70</sup>足<sup>あし</sup>でサタンを踏み碎いてくださいます。
- どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。
- 21 私の同労者テモテが、あなたがたによろしくと言っています。また私の同国人ルキオとヤソンとソシパテロがよろしくと言っています。
- 22 この手紙を筆記した私、テルテオも、主にあつてあなたがたにごあいさつ申し上げます。
- 23 私と全教会との家主であるガイオも、あなたがたによろしくと言っています。市の収入役であるエラストと兄弟クワルトもよろしくと言っています。<sup>71</sup>
- 25 26 私の福音とイエス・キリストの宣教によつて、すなわち、世々にわたつて長い間隠されていたが、今や現されて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によつて、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた奥義の啓示によつて、あなたがたを堅く立たせることができる方、

ち え と ゆいいつ  
27 知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。

- 1 別訳「聖い霊」
- 2 別訳「大能の働きにおいて…」あるいは「大能の御子として公に示された」
- 3 別訳「その義はただ信仰による」
- 4 別訳「信仰による義人は生きる」
- 5 あるいは「栄光を帰せず」
- 6 別訳「神に憎まれる者」
- 7 別訳「に比例して」
- 8 別訳「何が重要であるかを律法に教えられて、それを判別し」
- 9 別訳「教導者」
- 10 「律法の」は補足
- 11 別訳「不信仰」
- 12 別訳「不信仰」
- 13 あるいは「推薦する」
- 14 「劣っている」とも訳せる
- 15 別訳「神の栄光に達しない」
- 16 あるいは「なだめる物」
- 17 直訳「なぜなら」異本「それゆえに」
- 18 別訳「私たちの先祖アブラハムの肉による場合」
- 19 直訳「割礼において」
- 20 直訳「無割礼において」
- 21 別訳「からです」
- 22 異本「持つていよう（堅く保とう）ではないか」
- 23 別訳「喜ばうではないか」
- 24 別訳「喜ばうではないか」
- 25 「モーセ律法」
- 26 別訳「予表」
- 27 別訳「キリストの死のさまにつき合わされるなら」
- 28 あるいは「につき合わされるからです」
- 29 別訳「無力となり」
- 30 別訳「放免されて」
- 31 直訳「肢体」
- 32 別訳「霊」
- 33 あるいは「悪い欲望を持つてはいけない」
- 34 あるいは「悪い欲望」
- 35 あるいは「悪い欲望」
- 36 別訳「に関しては」
- 37 別訳「肢体」
- 38 別訳「死の、このからだ」
- 39 別訳「あつて」
- 40 異本「私」
- 41 異本「のゆえに」
- 42 異本「入れられるからです」
- 43 異本「だれが目で見ていることを望むでしょう」

- [44](#) 異本「すべてのことが働いて益となることを」
- [45](#) 異本「死人の中よりよみがえられた方」
- [46](#) 異本「神の」
- [47](#) 別訳「万物の上にある神はとこしえにほめたたえるべきかたです」
- [48](#) 別訳「律法の目標であり」
- [49](#) 別訳「すなわち」
- [50](#) 別訳「（キリスト）の」
- [51](#) 別訳「人の住む果て」
- [52](#) ギリシヤ語「ブシュケー」
- [53](#) あるいは「成就」
- [54](#) 別訳「富と、知恵と、知識とは」
- [55](#) 異本「あなたがたを」を欠く
- [56](#) 別訳「私たちの救いをもっと近づいているからです」
- [57](#) 別訳「告白する」
- [58](#) 異本「求めます」
- [59](#) あるいは「自分自身つまずくような人」
- [60](#) 異本「あなたがた」
- [61](#) 別訳「告白し」 参照ローマ一四・一一注
- [62](#) 異本「神によって」
- [63](#) 別訳「なさらなかったことは何をも話そうなどとはしません」
- [64](#) 別訳「しるしと奇蹟」
- [65](#) 直訳「彼らのために、この実に確認の印を押してから」
- [66](#) 別訳「女執事」「しもべ」
- [67](#) すなわち「小アジアの西海岸の州」
- [68](#) 別訳「ユニア」（女性）
- [69](#) 直訳「腹」
- [70](#) 別訳「足の下で」
- [71](#) 異本 二四節として「私たちの主イエス・キリストの恵みがあなたがたすべてとともにありますように。アーメン」を挿入するものがある

# コリント人への手紙第一

- [一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)
- [六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)
- [十一章](#) [十二章](#) [十三章](#) [十四章](#) [十五章](#)
- [十六章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 神のみこころによってキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、
- 2 コリントにある神の教会へ。すなわち、私たちの主イエス・キリストの御名を、至る所で呼び求めているすべての人々とともに、聖徒として召され、キリスト・イエスにあつて聖なるものとされた方々へ。主は私たちの主であるとともに、そのすべての人々の主です。
- 3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- 4 私は、キリスト・イエスによってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも神に感謝しています。
- 5 というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあつて豊かな者とされたからです。
- 6 それは、キリストについてのあかしが、あなたがたの中で確かになったからで、
- 7 その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待っています。
- 8 主も、あなたがたを、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところのない者として、最後まで堅く保ってくださいます。
- 9 神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。
- 10 さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願いします。どうか、みな一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。
- 11 実にはあなたがたのことをクロエの家の者から知らされました。兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるようで、
- 12 あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケバに」「私はキリストにつく」と言っているということです。
- 13 <sup>1</sup>キリストが分割されたのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか。
- 14 私は、クリスポとガイオのほか、あなたがたのだれにもバプテスマを授けたことがないことを<sup>2</sup>感謝しています。
- 15 それは、あなたがたが私の名によってバプテスマを受けたと言われないようにするためでした。
- 16 私はステパナの家族にもバプテスマを授けましたが、そのほかはだれにも授けた覚えはありません。
- 17 キリストが私をお遣わしになったのは、バプテスマを授けさせるためではなく、福音を宣べ伝えさせるためです。それも、キリストの十字架がむなしくならないために、ことばの知恵によってはならないのです。
- 18 十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。
- 19 それは、こう書いてあるからです。
- 「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、  
賢い者の賢さをむなしくする。」
- 20 知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。
- 21 事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。
- 22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。
- 23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人に



とっては愚かでしょうが、

24 しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なので  
す。

25 なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはな  
く、身分の高い者も多くはありません。

27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世  
の弱い者を選ばれたのです。

28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のよう  
にするため、無に等しいものを選ばれたのです。

29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

30 しかしあなたがたは、<sup>3</sup>神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにあって、神の知  
恵となり、また、義と聖めと、贖いとになりました。

31 まさしく、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

## 二章

- 1 さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行つたとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神の<sup>ち え</sup>あかしを宣べ伝えることはしませんでした。
- 2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架<sup>じゆうじ か</sup>につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。
- 3 あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く<sup>おそ</sup>、恐れおののいていました。
- 4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の<sup>み たま み ちから</sup>あらわれでした。
- 5 それは、あなたがたの持つ信仰<sup>しんこう</sup>が、人間の知恵<sup>ち え</sup>にささえられず、神の力にささえられるためでした。
- 6 しかし私<sup>わ</sup>たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。
- 7 私たちの語るのは、隠<sup>かく</sup>された奥義<sup>おくぎ</sup>としての神の知恵<sup>ち え</sup>であつて、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。
- 8 この知恵を、この世の支配者<sup>しはいしや</sup>たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主<sup>さと</sup>を十字架<sup>じゆうじ か</sup>につけはしなかつたでしょう。
- 9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。  
「目が見たことのないもの、  
耳が聞いたことのないもの、  
そして、人の心に思い浮<sup>おも</sup>かんだことのないもの。  
神を愛<sup>あい</sup>する者のために、  
神の備えてくださったものは、みなそうである。」
- 10 神はこれを、御霊<sup>み たま</sup>によって私たちに啓示<sup>けいじ</sup>されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。
- 11 いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊<sup>れい</sup>のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊<sup>み たま</sup>のほかにはいずれも知りません。
- 12 ところで、私たちは、この世の霊<sup>れい</sup>を受けたのではなく、神の御霊<sup>み たま</sup>を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜<sup>たま</sup>つたものを、私たちが知るためです。
- 13 この賜物<sup>たまもの</sup>について話すには、人の知恵<sup>ち え</sup>に教えられたことばを用いず、御霊<sup>み たま</sup>に教えられたことばを用います。その御霊<sup>み たま</sup>のことばをもって御霊<sup>み たま</sup>のことを解くのです。
- 14 生まれながらの人間は、神の御霊<sup>み たま</sup>に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟<sup>さと</sup>ることができません。なぜなら、御霊<sup>み たま</sup>のことは御霊<sup>み たま</sup>によってわきまえるものだからです。
- 15 御霊<sup>み たま</sup>を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによつてもわきまえられません。
- 16 いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導<sup>みちび</sup>くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。

### 三章

- 1 さて、兄弟たちよ。私は、あなたがたに向かって、御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>に属<sup>ぞく</sup>する人に対するように話すことができないで、肉<sup>せき</sup>に属<sup>ぞく</sup>する人、キリストにある幼<sup>わか</sup>子<sup>なご</sup>に対するように話しました。
- 2 私はあなたがたには乳<sup>ちち</sup>を与えて、堅<sup>かた</sup>い食物<sup>しょくじ</sup>を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。
- 3 あなたがたは、まだ肉<sup>せき</sup>に属<sup>ぞく</sup>しているからです。あなたがたの間にねたみや争<sup>あらそ</sup>いがあることからすれば、あなたがたは肉<sup>せき</sup>に属<sup>ぞく</sup>しているではありませんか。そして、ただの人のように歩<sup>ある</sup>んでいるではありませんか。
- 4 ある人が、「私はパウロにつく」と言えば、別の人は、「私はアポロに」と言う。そういうことでは、あなたがたは、ただの人たちではありませんか。
- 5 アポロとは何でしょう。パウロとは何でしょう。あなたがたが信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>に入るために用<sup>もち</sup>いられたしもべであつて、主<sup>き</sup>がおのおのに授<sup>さづ</sup>けられたとおりのことをしたのです。
- 6 私が植<sup>う</sup>えて、アポロが水<sup>みづ</sup>を注<sup>つ</sup>ぎました。しかし、成長<sup>せいしやう</sup>させたのは神<sup>かみ</sup>です。
- 7 それで、たいせつなのは、植<sup>う</sup>える者でも水<sup>みづ</sup>を注<sup>つ</sup>ぐ者でもありません。成長<sup>せいしやう</sup>させてくださる神<sup>かみ</sup>なのです。
- 8 植<sup>う</sup>える者と水<sup>みづ</sup>を注<sup>つ</sup>ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働<sup>した</sup>きに從<sup>したが</sup>つて自分自身の<sup>5</sup>報<sup>ほう</sup>酬<sup>しゆう</sup>を受けるのです。
- 9 私たちは神<sup>かみ</sup>の協<sup>きやう</sup>力<sup>りき</sup>者であり、あなたがたは神<sup>かみ</sup>の畑<sup>はたけ</sup>、神<sup>かみ</sup>の建<sup>たて</sup>物<sup>ぶつ</sup>です。
- 10 与<sup>め</sup>えられた神<sup>かみ</sup>の恵<sup>めぐ</sup>みによつて、私は賢<sup>かしこ</sup>い建<sup>けん</sup>築<sup>ちく</sup>家<sup>か</sup>のように、土<sup>つち</sup>台<sup>だい</sup>を据<sup>す</sup>えました。そして、ほかの人がその上に家<sup>いへ</sup>を建<sup>た</sup>てています。しかし、どのよう<sup>す</sup>に建<sup>た</sup>てるかについてはそれぞれが注<sup>し</sup>意<sup>い</sup>しなければなりません。
- 11 というのは、だれも、すでに据<sup>す</sup>えられている土<sup>つち</sup>台<sup>だい</sup>のほかに、ほかの物<sup>もの</sup>を据<sup>す</sup>えることはできないからです。その土<sup>つち</sup>台<sup>だい</sup>とはイエス・キリストです。
- 12 もし、だれかがこの土<sup>つち</sup>台<sup>だい</sup>の上に、金<sup>きん</sup>、銀<sup>ぎん</sup>、宝<sup>ほう</sup>石<sup>せき</sup>、木<sup>き</sup>、草<sup>くさ</sup>、わらなどで建<sup>た</sup>てるなら、
- 13 各<sup>めい</sup>人の働<sup>いりよう</sup>きは明<sup>めい</sup>瞭<sup>りやう</sup>になります。その日<sup>ひ</sup>がそれ<sup>しん</sup>を明<sup>か</sup>らかにするのです。というのは、その日<sup>ひ</sup>は火<sup>あらい</sup>とともに現<sup>あら</sup>れ、この火<sup>か</sup>がその力<sup>りき</sup>で各<sup>めい</sup>人の働<sup>いりよう</sup>きの真<sup>ま</sup>価<sup>か</sup>をためすからです。
- 14 もしだれかの建<sup>た</sup>てた建<sup>た</sup>て物<sup>ぶつ</sup>が残<sup>のこ</sup>れば、その人<sup>ひと</sup>は報<sup>むく</sup>いを受<sup>う</sup>けます。
- 15 もしだれかの建<sup>た</sup>てた建<sup>た</sup>て物<sup>ぶつ</sup>が焼<sup>や</sup>ければ、その人<sup>ひと</sup>は損<sup>そん</sup>害<sup>がい</sup>を受<sup>う</sup>けますが、自分自身<sup>おのれみづか</sup>は、火<sup>か</sup>の中<sup>な</sup>をくぐるようにして助<sup>たす</sup>かります。
- 16 あなたがたは神<sup>しん</sup>の神<sup>でん</sup>殿<sup>でん</sup>であり、神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>があなたがたに宿<sup>す</sup>つておられることを知らないのですか。
- 17 もし、だれかが神<sup>しん</sup>の神<sup>でん</sup>殿<sup>でん</sup>をこわすなら、神<sup>かみ</sup>がその人<sup>ひと</sup>を滅<sup>ほろ</sup>ぼされます。神<sup>かみ</sup>の神<sup>しん</sup>殿<sup>でん</sup>は聖<sup>せい</sup>なるものだからです。あなたがたがその神<sup>しん</sup>殿<sup>でん</sup>です。
- 18 だれも自分<sup>おのれ</sup>を欺<sup>あざむ</sup>いてはいけません。もしあなたがたの中で、自分は今の世<sup>よ</sup>の知<sup>ち</sup>者<sup>しや</sup>だと思<sup>おも</sup>う者がいたら、知<sup>ち</sup>者<sup>しや</sup>になるためには愚<sup>おろ</sup>かになりなさい。
- 19 なぜなら、この世<sup>よ</sup>の知<sup>ち</sup>恵<sup>え</sup>は、神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まえ</sup>では愚<sup>おろ</sup>かだからです。こう書いてあります。「神<sup>かみ</sup>は、知<sup>ち</sup>者<sup>しや</sup>どもを彼<sup>かれ</sup>らの悪<sup>わる</sup>賢<sup>がしこ</sup>さの中<sup>な</sup>で捕<sup>と</sup>らえる。」
- 20 また、次のようにも書いてあります。「主<sup>き</sup>は、知<sup>ち</sup>者<sup>しや</sup>の論<sup>ろん</sup>議<sup>ぎ</sup>を無<sup>む</sup>益<sup>えき</sup>だと知<sup>し</sup>つておられる。」
- 21 ですから、だれも人<sup>ひと</sup>間<sup>かん</sup>を誇<sup>ほこ</sup>つてはいけません。すべては、あなたがたのものです。
- 22 パウロであれ、アポロであれ、ケパであれ、また世界<sup>せかい</sup>であれ、い<sup>い</sup>のち<sup>ち</sup>であれ、死<sup>し</sup>であれ、また現<sup>げん</sup>在<sup>ざい</sup>のものであれ、未<sup>み</sup>来<sup>らい</sup>のものであれ、すべてあなたがたのものです。
- 23 そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神<sup>かみ</sup>のものです。

## 四章

- 1 こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義おくぎの管理者だと考えなさい。
- 2 この場合、管理者には、忠実であることが要求されます。
- 3 しかし、私にとっては、あなたがたによる判定はんてい、あるいは、およそ6人間はんけんによる判決を受けることは、非常ひじょうに小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。
- 4 私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪むざいとされるわけではありません。私をさばく方は主です。
- 5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中かくに隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛しょうさんが届くのです。
- 6 さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言つて来ました。それは、あなたがたが、私たちの例によって、「書かれていることを越えない」ことを学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して高慢こうまんにならないためです。
- 7 いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。
- 8 あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。私たち抜きで、王さまになっています。いつそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかったのです。そうすれば、私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに。
- 9 私は、こう思います。神は私たち使徒を、死罪しざいに決まった者のように、行列のしんがりとして引き出されました。こうして私たちは、御使いみつかにも人々にも、7この世の見せ物になったのです。
- 10 私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱いが、あなたがたは強いのです。あなたがたは栄誉えいよを持っているが、私たちは卑しめられています。
- 11 今に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、虐待ぎやくたいされ、落ち着く先もありません。
- 12 また、私たちは苦勞して自分の手で働いています。はずかしめられるときにも祝福しゆくふくし、迫害はくがいされるときにも耐え忍び、
- 13 ののしられるときには、8慰めなぐさのことばをかけます。今でも、私たちはこの世のちり、あらゆるもののかすです。
- 14 私がかこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとするためです。
- 15 たといあなたがたに、キリストにある養育係よういくかりが一人あろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音ふく音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。
- 16 ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか、私にならう者となってください。
- 17 そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。彼は、私が至る所いたところのすべての教会で教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。
- 18 私があなたがたのところへ行くことはあるまいと、思い上がっている人たちがいます。
- 19 しかし、主のみこころであれば、すぐにもあなたがたのところへ行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく、力を見せてもらいましょう。
- 20 神の国はことばにはなく、力にあるのです。
- 21 あなたがたはどちらを望むのですか。私はあなたがたのところへむちを持って行きましょうか。それとも、愛あいと優やさしい心で行きましょうか。

## 五章

- 1 あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。
- 2 それなのに、あなたがたは誇り高ぶって<sup>9</sup>います。<sup>10</sup>そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。
- 3 私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を<sup>11</sup>主イエスの御名によってすでにさばきました。
- 4 あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、
- 5 このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主<sup>12</sup>の日に救われるためです。
- 6 あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。
- 7 新しい粉のかたまりのままでいるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。
- 8 ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種の入らない、純粹で真実なパンで、祭りをしようではありませんか。
- 9 私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。
- 10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。
- 11 <sup>13</sup>私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。
- 12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。
- 13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。

## 六章

- 1 あなたがたの中には、仲間の者と争いを起こしたとき、それを聖徒たちに訴えないで、あえて、正しくない人たちに訴え出るような人がいるのでしょうか。
- 2 あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。
- 3 私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということを、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。
- 4 それなのに、この世のことで争いが起ると、教会のうちでは無視される人たちを裁判官に選ぶのですか。
- 5 私はあなたがたをはずかしめるためにこう言っているのです。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することのできるような賢い者が、ひとりもいないのですか。
- 6 それで、兄弟は兄弟を告訴し、しかもそれを不信者の前ですのですか。
- 7 そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていないのですか。
- 8 ところが、それどころか、あなたがたは、不正を行う、だまし取る、しかもそのようなことを兄弟に対してしているのです。
- 9 あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、
- 10 盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。
- 11 あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。
- 12 すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。
- 13 食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります。ところが神は、そのどちらをも滅ぼされます。からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです。
- 14 神は主をよみがえらしましたが、その御力によって私たちをもよみがえらせてくださいます。
- 15 あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。
- 16 遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。「ふたりは一体となる」と言われているからです。
- 17 しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。
- 18 不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のもです。しかし、不品行を行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。
- 19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。
- 20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。

## 七章

- 1 さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、男が女に触れないのは良いことです。
- 2 しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。
- 3 夫は自分の妻に対して<sup>14</sup>義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して<sup>15</sup>義務を果たしなさい。
- 4 妻は自分のからだに関する権利を持つてはならず、それは夫のものです。同様に夫も自分のからだについての権利を持つてはならず、それは妻のものです。
- 5 互いの権利を奪い取ってはいけません。ただし、祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません。あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないためです。
- 6 以上、私の言うところは、容認であって、命令ではありません。
- 7 <sup>16</sup>私の願うところは、すべての人が私のものであることです。しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。
- 8 次に、結婚していない男とやもめの女に言いますが、私のようにしていられるなら、それがよいのです。
- 9 しかし、もし自制することができなければ、結婚しなさい。<sup>17</sup>情の燃えるよりは、結婚するほうがよいからです。
- 10 次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。
- 11 —もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい—また夫は妻を離別してはいけません。
- 12 次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主ではなく、私です。信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。
- 13 また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。
- 14 なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。
- 15 しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとして<sup>18</sup>あなたがたを召されたのです。
- 16 なぜなら、妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかりますか。
- 17 ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのを召しになったときのままの状態です。私は、すべての教会で、このように指導しています。
- 18 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。
- 19 割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです。
- 20 おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。
- 21 奴隷の状態です。召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。
- 22 奴隷も、主にあつて召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。
- 23 あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。
- 24 兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態、神の御前にいなさい。
- 25 処女のことについて、私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみによって信頼できる者として、意見を

の  
述べます。

26 現在の危急げんざい ききゆうのときには、男はそのままの状態じょうたいにとどまるのがよいと思います。

27 あなたが妻つまに結ばれているなら、解とかれたいと考えてはいけません。妻つまに結ばれていないのなら、妻つまを得たいと思っつてはいけません。

28 しかし、たといあなたが結婚けつこんしたからといって、罪つみを犯すのではありません。たとい処女しよじよが結婚けつこんしたからといって、罪つみを犯すのではありません。ただ、それらの人々は、その身に苦難くなんを招くでしょう。私はあなたがたを、そのようなめに会わせたくないのです。

29 兄弟あなたちよ。私は次のことを言いたいです。時は縮ちぢまっています。今からは、妻つまのある者は妻つまのない者のようにしていなさい。

30 泣く者は泣かない者のように、喜ぶ者は喜ばない者のように、買う者は所有しない者のようにしていなさい。

31 世よの富とみを用いる者は用いすぎないようにしなさい。この世よの有様すさまじは過ぎ去るからです。

32 あなたがたが思い煩わづらわないことを私は望んでいます。独身どくしんの男は、どうしたら主きよに喜ばれるかと、主きよのことに心を配きります。

33 しかし、結婚けつこんした男は、どうしたら妻つまに喜ばれるかと世よのことに心を配きり、

34 <sup>19</sup>心こころが分かれるのです。独身どくしんの女や処女しよじよは、身もたましいも聖きよくなるため、主きよのことに心を配きりますが、結婚けつこんした女は、どうしたら夫おとこに喜ばれるかと、世よのことに心を配きります。

35 ですが、私がこう言っているのは、あなたがた自身の益えきのためであつて、あなたがたを束縛そくばくしようとしているのではありません。むしろあなたがたが秩序ちつじよある生活を送おくつて、ひたすら主きよに奉仕ほうしできるためなのです。

36 もし、処女しよじよである自分の娘むすめの婚期こんきも過ぎようとしていて、そのままでは、娘むすめに対しての扱い方が正しくないと  
思い、またやむをえないことがあるならば、その人は、その心のままにしなさい。罪つみを犯すわけではありません。彼らに結婚けつこんさせなさい。

37 しかし、もし心のうちに堅かたく決意けつぎしており、ほかに強いられる事情じじようもなく、また自分の思うとおりに行うことのできる人が、処女しよじよである自分の娘むすめをそのままにしておくのなら、そのことはりっぱです。

38 ですから、処女しよじよである自分の娘むすめを結婚けつこんさせる人は良いことをしているのであり、また結婚けつこんさせない人は、もっと良いことをしているので。

39 妻つまは夫おとこが生きている間は夫おとこに縛しばられています。しかし、もし夫おとこが死んだなら、自分の願う人と結婚けつこんする自由があります。ただ主きよにあつてのみ、そうなのです。

40 私の意見みたまでは、もしそのままにしていられたら、そのほうがもっと幸いです。私も、神の御霊みたまをいただいていると思います。



# 八章

- 1 次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。
- 2 人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないので。
- 3 しかし、人が神を愛するのなら、その人は神に知られているのです。
- 4 そういうわけで、偶像にささげた肉を食べることについてですが、私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。
- 5 なるほど、多くの神や、多くの主があるので、神々と呼ばれるものならば、天にも地にもありますが、
- 6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、すべてのものはこの神から出ており、私たちもこの神のために存在しているのです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、すべてのものはこの主によって存在し、私たちもこの主によって存在するのです。
- 7 しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんで来たため偶像にささげた肉として食べ、それで彼らのそのように弱い良心が汚れるのです。
- 8 しかし、私たちを神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。
- 9 ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。
- 10 知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、それによって力を得て、その人の良心は弱いのに、偶像の神にささげた肉を食べるようなことにならないでしょうか。
- 11 その弱い人は、あなたの知識によって、滅びることになるのです。キリストはその兄弟のためにも死んでくださったのです。
- 12 あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を踏みにじるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。
- 13 ですから、もし食物が私の兄弟をつまずかせるなら、私は今後いつさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまずきを与えないためです。

## 九章

1 私には自由がないのでしょうか。私は使徒ではないのでしょうか。私は私たちの主イエスを見たのではないのでしょうか。あなたがたは、主にあつて私の働きの実ではありませんか。

2 たとい私がほかの人々に対しては使徒でなくても、少なくともあなたがたに対しては使徒です。あなたがたは、主にあつて、私が使徒であることの証印です。

3 私をさばく人々に対して、私は次のように弁明します。

4 いったい私たちには飲み食いする権利がないのでしょうか。

5 私たちには、ほかの使徒、主の兄弟たち、ケパなどと違って、信者である妻を連れて歩く権利がないのでしょうか。

6 それともまた、私とバルナバだけには、生活のための働きをやめる権利がないのでしょうか。

7 いったい自分の費用で兵士になる者がいるのでしょうか。自分でぶどう園を造りながら、その実を食べない者がいるのでしょうか。羊の群れを飼いながら、その乳を飲まない者がいるのでしょうか。

8 私がこんなことを言うのは、人間の考えによって言っているのでしょうか。律法も同じことを言っているではありませんか。

9 モーセの律法には、「穀物をこなししている牛に、くつこを掛けてはいけない」と書いてあります。いったい神は、牛のことを気にかけておられるのでしょうか。

10 それとも、もっぱら私たちのために、こう言っておられるのでしょうか。むろん、私たちのためにこう書いてあるのです。なぜなら、耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分配を受ける望みを持って仕事をするのは当然だからです。

11 もし私たちが、あなたがたに御霊のものを蒔いたのであれば、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは行き過ぎでしょうか。

12 もし、ほかの人々が、あなたがたに対する権利にあずかっているのなら、私たちはなおさらその権利を用いてよいはずではありませんか。それなのに、私たちはこの権利を用いませんでした。かえて、すべてのことについて耐え忍んでいます。それは、キリストの福音に少しの妨げも与えまいとしてなのです。

13 あなたがたは、宮に奉仕している者が宮の物を食べ、祭壇に仕える者が祭壇の物にあずかることを知らないのですか。

14 同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられます。

15 しかし、私はこれらの権利の一つも用いませんでした。また、私は自分がそうされたくてこのように書いているのでもありません。私は自分の誇りをだれかに<sup>20</sup>奪われるよりは、死んだほうがましだからです。

16 というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわいだ。

17 もし私がこれを自発的にしているのなら、報いがありましょう。しかし、強いられたにしても、私には務めがゆだねられているのです。

18 では、私にどんな報いがあるのでしょうか。それは、福音を宣べ伝えるときに報酬を求めないで与え、福音の働きによって持つ自分の権利を十分に用いないことなのです。

19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。

20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。

21 律法を持たない人々に対しては、—私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが—律法

を持たない者のようになりました。それは律法りつぽうを持たない人々を獲得かくとくするためです。

22 弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得かくとくするためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人いくにんかでも救うためです。

23 私はすべてのことを、福音ふくいんのためにしています。それは、私も福音ふくいんの恵みめぐみをともに受ける者となるためなのです。

24 競技場きやうぎじやうで走る人たちは、みな走つても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。

25 また闘技とうぎをする者は、あらゆることについて自制じせいします。彼らは朽ちる冠くかんむりを受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠くかんむりを受けるためにそうするのです。

26 ですから、私は決勝点けつしんとうがどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘けんとうもしてはいません。

27 私は自分のからだを打ちたたいて従したがわせます。それは、私がほかの人に宣のべ伝えておきながら、自分自身が失格しつかく者になるようなことのないためです。

## 一〇章

- 1 そこで、兄弟たち。私はあなたがたにぜひ知ってほしいのです。私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通って行きました。
- 2 そしてみな、<sup>21</sup>雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、
- 3 みな同じ御霊の食べ物を食べ、
- 4 みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。
- 5 にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。
- 6 これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのためです。それは、彼らがむさぼったように私たちが悪をむさぼることのないためです。
- 7 あなたがたは、彼らの中のある人たちにならって、偶像崇拜者となつてはいけません。聖書には、「民が、すわつては飲み食いし、立っては踊った」と書いてあります。
- 8 また、私たちは、彼らのある人たちが姦淫をしたのにならって姦淫をすることはないようにしましょう。彼らは姦淫のゆえに一日に二万三千人死にました。
- 9 私たちは、さらに、彼らの中のある人たちが主を試みたのにならって主を試みることはないようにしましょう。彼らは蛇に滅ぼされました。
- 10 また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。
- 11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、<sup>22</sup>世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。
- 12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。
- 13 あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。
- 14 ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。
- 15 私は賢い人たちに話そうに話します。ですから私の言うことを判断してください。
- 16 私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。
- 17 パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの方がともに一つのパンを食べるからです。
- 18 肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。供え物を食べる者は、祭壇にあずかるではありませんか。
- 19 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。
- 20 いや、彼らのささげる物は、神ではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。
- 21 あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できないことです。主の食卓にあずかったうえ、さらに悪霊の食卓にあずかることはできないことです。
- 22 それとも、私たちは主のねたみを引き起こそうとするのですか。まさか、私たちが主よりも強いことはないでしょう。
- 23 すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、しても

よいのです。しかし、すべてのことが徳とくを高めるとはかぎりません。

24 だれでも、自分の利益りえきを求めないで、他人の利益りえきを心がけなさい。

25 市場いちばに売っている肉は、<sup>23</sup>良心の問題として調べ上げることにはしないで、どれでも食べなさい。

26 地とそれに満ちているものは、主のものだからです。

27 もし、あなたがたが信仰しんこうのない者に招待しょうたいされて、行きたいと思うときは、<sup>24</sup>良心の問題として調べ上げることにはしないで、自分の前に置かれる物はどれでも食べなさい。

28 しかし、もしだれかが、「これは偶像にささげた肉です」とあなたがたに言うなら、そう知らせた人のために、また良心のために、食べてはいけません。

29 私が良心と言うのは、あなたの良心ではなく、ほかの人の良心です。私の自由が、他の人の良心たによってさばかれるわけがあるでしょうか。

30 もし、私が神に感謝かんしゃをささげて食べるなら、私が感謝する物のために、そしられるわけがあるでしょうか。

31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現あらわすためにしなさい。

32 ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい。

33 私も、人々が救われるために、自分の利益りえきを求めず、多くの人の利益りえきを求め、どんなことでも、みなの人を喜ばせているのですから。

## 一章

- 1 私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。
- 2 さて、あなたがたは、何かにつけて私を覚え、また、私があなたがたに伝えたものを、伝えられたとおりに堅く守っているので、私はあなたがたをほめたいと思います。
- 3 しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。
- 4 男が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていたら、自分の頭をはずかしめることになります。
- 5 しかし、女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭をはずかしめることになります。それは髪をそっているのと全く同じことだからです。
- 6 女がかぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまいなさい。髪を切り、頭をそることが女として恥ずかしいことながら、かぶり物を着けなさい。
- 7 男はかぶり物を着けるべきではありません。男は神の似姿であり、神の栄光の現れだからです。女は男の栄光の現れです。
- 8 なぜなら、<sup>25</sup>男は女をもとにして造られたのではなく、女が男をもとにして造られたのであり、
- 9 また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。
- 10 ですから、女は頭に権威のしるしをかぶるべきです。それも御使いたちのためにです。
- 11 とはいえ、主にあつては、女は男を離れてあるものではなく、男も女を離れてあるものではありません。
- 12 女が男をもとにして造られたように、同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から発しています。
- 13 あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が頭に何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。
- 14 自然自体が、あなたがたにこう教えていないのでしょうか。男が長い髪をしていたら、それは男として恥ずかしいことであり、
- 15 女が長い髪をしていたら、それは女の光栄であるということです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。
- 16 たとい、このことに異議を唱えたがる人がいても、私たちにはそのような習慣はないし、神の諸教会にもありません。
- 17 ところで、聞いていただくことがあります。私はあなたがたをほめません。あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです。
- 18 まず第一に、あなたがたが教会の集まりをするとき、あなたがたの間には<sup>26</sup>分裂があると聞いています。ある程度は、それを信じます。
- 19 というのは、あなたがたの中で<sup>27</sup>ほんとうの信者が明らかにされるためには、分派が起こるのもやむをえないからです。
- 20 しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。
- 21 食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませるので、空腹な者もおれば、酔っている者もいるというしまつです。
- 22 飲食のためなら、自分の家があるでしょう。それとも、あなたがたは、神の教会を軽じ、貧しい人たちははずかしめたいのですか。私はあなたがたに何と言ったらよいでしょう。ほめるべきでしょうか。このことに関しては、ほめるわけにはいきません。
- 23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、
- 24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのため<sup>28</sup>の、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

- 25 夕食の後、<sup>さかずき</sup>杯をも同じようにして言われました。「この<sup>さかずき</sup>杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」
- 26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この<sup>さかずき</sup>杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。
- 27 したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の<sup>さかずき</sup>杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して<sup>つみ</sup>罪を犯すことになります。
- 28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、<sup>さかずき</sup>杯を飲みなさい。
- 29 みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくことになります。
- 30 そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。
- 31 しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。
- 32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに<sup>つみ</sup>罪に定められることのないためです。
- 33 ですから、兄弟たち。食事に集まるときは、<sup>たが</sup>互いに待ち合わせなさい。
- 34 <sup>くうふく</sup>空腹な人は家で食べなさい。それは、あなたがたが集まることによって、さばきを受けることにならないためです。その他のことについては、私が行ったときに決めましょう。

## 一二章

- 1 さて、兄弟たち。<sup>み たま たまもの</sup>29御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ知のこをを知っていただきたいのです。
- 2 ご承知のように、あなたがたが異教徒であつたときには、どう導かれたとしても、引かれて行つた所は、ものを言わない偶像の所でした。
- 3 ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によつて語る者はだれも、「イエスは<sup>30</sup>のわれよ」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。
- 4 さて、賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。
- 5 奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。
- 6 働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。
- 7 しかし、みな<sup>えき</sup>の益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。
- 8 ある人には御霊によつて知恵のこ<sup>ち え</sup>ばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のこ<sup>ち しき</sup>ばが与えられ、
- 9 またある人には同じ御霊による信仰が与えられ、ある人には同一の御霊によつて、いやしの賜物が与えられ、
- 10 ある人には奇蹟を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。
- 11 しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであつて、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。
- 12 ですから、ちょうど、からだ<sup>からだ</sup>が一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分<sup>ぶぶん</sup>はたとい多くあつても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。
- 13 なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によつてバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。
- 14 確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。
- 15 たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない」と言つたところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。
- 16 たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない」と言つたところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。
- 17 もし、からだ全体が目であつたら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであつたら、どこでかぐのでしょうか。
- 18 しかしこのとおり、神はみこころに従つて、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。
- 19 もし、全部がただ一つの器官であつたら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。
- 20 しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。
- 21 そこで、目が手に向かつて、「私はあなたがを必要としな<sup>い</sup>い」と言うことはできないし、頭が足に向かつて、「私はあなたがを必要としな<sup>い</sup>い」と言うこともできません。
- 22 それどころか、からだの中で比較的<sup>ひかくてき</sup>に弱いと見られる器官が、かえてなくてはならないものなのです。
- 23 また、私たちは、からだの中で比較的<sup>ひかくてき</sup>に尊くないとみなす器官を、<sup>31</sup>ことさらに尊びます。こうして、私たちの見<sup>み</sup>ばえのしない器官は、ことさらに良<sup>よ</sup>いかつこうになりますが、
- 24 かつこうの良<sup>よ</sup>い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣<sup>おと</sup>つたところをことさらに尊<sup>たつと</sup>んで、からだをこのように調和させてくださったのです。
- 25 それは、からだの中に<sup>ぶん れつ</sup>32分裂がなく、各部分が互<sup>たが</sup>いにいたわり合うためです。
- 26 もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がとも



に喜ぶのです。

27 あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりかく き かんは各器官なのです。

28 そして、神は教会の中で人々を次のように任命にんめいされました。すなわち、第一に使徒し と、次に預言者よ げん しゃ、次に教師きょう し、それから奇蹟き せきを行う者、それからいやしの賜物たまものを持つ者、助ける者、治める者、異言い げんを語る者などです。

29 みなが使徒し とでしょうか。みなが預言者よ げん しゃでしょうか。みなが教師きょう しでしょうか。みなが奇蹟き せきを行う者でしょうか。

30 みながいやしの賜物たまものを持っているでしょうか。みなが異言い げんを語るでしょうか。みなが解き明かしと けをするでしょうか。

31 あなたがたは、よりすぐれた賜物たまものを熱心しめに求めなさい。

また私は、さらにまさる道しめを示してあげましょう。

# 一三章

- 1 たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。
- 2 また、たとい私が預言の<sup>33</sup>賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うち也没有せん。
- 3 また、たとい私が持っている物の全部を<sup>34</sup>貧しい人たちに分け与え、また私のからだを<sup>35</sup>焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。
- 4 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。
- 5 礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、
- 6 不正を喜ばずに真理を喜びます。
- 7 すべてを<sup>36</sup>がまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。
- 8 愛は決して絶えることがありません。預言の<sup>37</sup>賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。
- 9 というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。
- 10 完全なものが現れたら、不完全なものはすたれます。
- 11 私が子どもであつたときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになつたときには、子どものことをやめました。
- 12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。
- 13 こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。

## 一四章

- 1 愛<sup>あい</sup>を追い求めなさい。また、御霊<sup>みたま</sup>の<sup>38</sup>賜物<sup>たまもの</sup>、特に預言<sup>よげん</sup>することを熱心に求めなさい。
- 2 異言<sup>いげん</sup>を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも聞いていないのに、<sup>39</sup>自分の霊<sup>れい</sup>で奥義<sup>おくぎ</sup>を話すからです。
- 3 ところが預言<sup>よげん</sup>する者は、徳<sup>とく</sup>を高め、勤め<sup>すず</sup>をなし、慰め<sup>なぐさ</sup>を与えるために、人に向かって話します。
- 4 異言<sup>いげん</sup>を話す者は自分の徳<sup>とく</sup>を高めますが、預言<sup>よげん</sup>する者は教会<sup>とく</sup>の徳<sup>とく</sup>を高めます。
- 5 私はあなたがたがみな異言<sup>いげん</sup>を話すことを望んでいます、それよりも、あなたがたが預言<sup>よげん</sup>することを望みます。もし異言<sup>いげん</sup>を話す者がその解き明かしをして教会<sup>とく</sup>の徳<sup>とく</sup>を高めるのでないなら、異言<sup>いげん</sup>を語る者よりも、預言<sup>よげん</sup>する者のほうがまさっています。
- 6 ですから、兄弟たち。私があなたがたのところへ行<sup>い</sup>って異言<sup>いげん</sup>を話すとしても、黙示<sup>もくし</sup>や知識<sup>ちしき</sup>や預言<sup>よげん</sup>や教えなどによって話さないなら、あなたがたに何の益<sup>えき</sup>となるでしょう。
- 7 笛<sup>ふえ</sup>や琴<sup>こと</sup>などのちのちない楽器<sup>がくき</sup>でも、はつきりした音<sup>おと</sup>を出さなければ、何を吹<sup>ふ</sup>いているのか、何をひいているのか、どうしてわかりましょう。
- 8 また、ラッパ<sup>せんとう</sup>がもし、はつきりしない音<sup>いん</sup>を出したら、だれが戦闘<sup>じゆんび</sup>の準備<sup>じゆんび</sup>をするでしょう。
- 9 それと同じように、あなたがたも、舌<sup>した</sup>で明瞭<sup>めいりやう</sup>なことばを語るものでなければ、言っている事をどうして知ってもらえるでしょう。それは空気<sup>くわい</sup>に向かって話しているのです。
- 10 世界<sup>こせ</sup>にはおそらく非常に多く<sup>ひじよう</sup>の種類の<sup>しゆるい</sup>ことばがあるでしょうが、意味<sup>い</sup>のないことばなど一つありません。
- 11 それで、もし私がそのことばの意味<sup>い</sup>を知らないなら、私はそれを話す人にとって異国人<sup>いこくじん</sup>であり、それを話す人も私にとって異国人<sup>いこくじん</sup>です。
- 12 あなたがたの場合<sup>み</sup>も同様<sup>たま</sup>です。あなたがたは御霊<sup>みたま</sup>の<sup>40</sup>賜物<sup>たまもの</sup>を熱心に求めているのですから、教会<sup>とく</sup>の徳<sup>とく</sup>を高めるために、それが豊<sup>ゆた</sup>かに与えられるよう、熱心に求めなさい。
- 13 こういうわけですから、異言<sup>いげん</sup>を語る者は、それを解き明<sup>と</sup>かすことができるように祈<sup>いの</sup>りなさい。
- 14 もし私が異言<sup>いげん</sup>で祈<sup>いの</sup>るなら、私の霊<sup>れい</sup>は祈<sup>いの</sup>るが、私の知性<sup>ちせい</sup>は実<sup>じ</sup>を結ばないのです。
- 15 ではどうすればよいのでしょうか。私は霊<sup>れい</sup>において祈<sup>いの</sup>り、また知性<sup>ちせい</sup>においても祈<sup>いの</sup>りましょう。霊<sup>れい</sup>において賛美<sup>さんび</sup>、また知性<sup>ちせい</sup>においても賛美<sup>さんび</sup>しましょう。
- 16 そうでないと、あなたがたが霊<sup>れい</sup>において祝福<sup>しゆくふく</sup>しても、<sup>41</sup>異言<sup>いげん</sup>を知らない人々の座席<sup>ざせき</sup>に着<sup>き</sup>ている人は、あなたの言っていることがわからぬのですから、あなたの感謝<sup>かんしや</sup>について、どうしてアーメンと言えるでしょう。
- 17 あなたの感謝<sup>かんしや</sup>は結構<sup>けつこう</sup>ですが、他の人の徳<sup>とく</sup>を高めることはできません。
- 18 私は、あなたがたのだれよりも多くの異言<sup>いげん</sup>を話すことを神に感謝<sup>かんしや</sup>していますが、
- 19 教会<sup>いげん</sup>では、異言<sup>いげん</sup>で一万語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性<sup>ちせい</sup>を用いて五つのことばを話したいのです。
- 20 兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事<sup>あくじ</sup>においては幼子<sup>おきなご</sup>でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。
- 21 律法<sup>りつぽう</sup>にこう書いてあります。「『わたしは、異<sup>こと</sup>なつた舌<sup>した</sup>により、異国<sup>いこく</sup>の人のくちびるによってこの民<sup>たみ</sup>に語るが、彼らはな<sup>き</sup>おわたしの言うことを聞き入れない』と主は言われる。」
- 22 それで、異言<sup>いげん</sup>は信者<sup>しんじや</sup>のためのしるしではなく、不信者<sup>ふしんじや</sup>のためのしるしです。けれども、預言<sup>よげん</sup>は不信者<sup>ふしんじや</sup>でなく、信者<sup>しんじや</sup>のためのしるしです。
- 23 ですから、もし教会全体<sup>いげん</sup>が一か所に集まって、みなが異言<sup>いげん</sup>を話すとしたら、初心<sup>しんじや</sup>の者とか信者<sup>しんじや</sup>でない者とかが入って来たとき、彼らはあなたがたを、気が狂<sup>くる</sup>つていと言わないでしょうか。
- 24 しかし、もしみなが預言<sup>よげん</sup>をするなら、信者<sup>しんじや</sup>でない者や初心<sup>しんじや</sup>の者が入って来たとき、その人はみな<sup>つみ</sup>の者によって<sup>42</sup>罪

を示されます。みなにさばかれ、

25 心の秘密があらわにされます。そうして、神が確かにあなたがたの中におられると言って、ひれ伏して神を拝むでしょう。

26 兄弟たち。では、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まるときには、それぞれの人が賛美したり、教えたり、黙示を話したり、異言を話したり、解き明かししたりします。そのすべてのことを、徳を高めるためにしなさい。

27 もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても三人で順番に話すべきで、ひとりとは解き明かしをしない。

28 もし解き明かす者がだれもいなければ、教会では黙っていないさい。<sup>43</sup>自分だけで、神に向かって話さない。

29 預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。

30 もしも座席に着いている別の人に黙示が与えられたら、先の人は黙りなさい。

31 あなたがたは、みながわかるがわる預言できるのであって、すべての人が学ぶことができ、すべての人が勧めを受けることができます。

32 預言者たちの霊は預言者たちに服従するものなのです。

33 それは、神が混乱の神ではなく、<sup>44</sup>平和の神だからです。

聖徒たちのすべての教会で行われているように、

34 教会では、妻たちは黙っていないさい。彼らは語ることを許されていません。律法も言うように、服従しなさい。

35 もし何かを学びたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、妻にとっては<sup>45</sup>ふさわしくないことです。

36 神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいはまた、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。

37 自分を預言者、あるいは、御霊の人と思う者は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。

38 もし<sup>46</sup>それを認めないなら、その人は認められません。

39 それゆえ、私の兄弟たち。預言することを熱心に求めなさい。異言を話すことも禁じてはいけません。

40 ただ、すべてのことを適切に、秩序をもって行いなさい。

# 一五章

1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音<sup>ふくいん</sup>を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音<sup>ふくいん</sup>です。

2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えたこの福音<sup>ふくいん</sup>のことはしっかりと保<sup>たも</sup>つていれば、この福音<sup>ふくいん</sup>によって救われるのです。

3 私があなたがたに最もたいせつなことで伝えたのは、私も受けたことであつて、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、

4 また、葬<sup>ほうむ</sup>られたこと、また、聖書の示すとおり、三日目によみがえられたこと、

5 また、ケバに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中の大多数の者は今なお生き残っています、すでに眠<sup>ねむ</sup>った者もいくらかいます。

7 その後、キリストはヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れました。

8 そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現れてくださいました。

9 私は使徒の中では最も小さい者であつて、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。

10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵み<sup>めぐみ</sup>です。

11 そういうわけですから、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。

12 ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、<sup>47</sup>死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。

13 もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。

14 そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質<sup>しんこう じつしつ</sup>のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。

15 それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言<sup>い</sup>つて神<sup>48</sup>に逆らう証言をしたからです。

16 もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかったでしょう。

17 そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。

18 そうだったら、キリストにあつて眠<sup>ねむ</sup>った者たちは、滅<sup>ほろ</sup>んでしまったのです。

19 もし、私たちがこの世にあつてキリストに単なる希望を置いていただけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀<sup>あわ</sup>れな者です。

20 しかし、今やキリストは、眠<sup>ねむ</sup>った者の初穂<sup>はつ ほう</sup>として死者の中からよみがえられました。

21 というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。

22 すなわち、アダムにあつてすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。

23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂<sup>はつ ほう</sup>であるキリスト、次にキリストの再臨<sup>さいりん</sup>のときキリストに属<sup>ぞく</sup>している者です。

24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配<sup>し ぱい</sup>と、あらゆる権威<sup>けん い</sup>、権力<sup>けん りよく</sup>を滅<sup>ほろ</sup>ぼし、国を父なる神にお渡<sup>わた</sup>しになります。

25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。

26 最後の敵である死も滅ばされます。

27 「彼は万物をその足の下に従したがわせた」からです。ところで、万物が従したがわせられた、と言うとき、万物を従したがわせたその方がそれに含められていないことは明らかです。

28 しかし、万物が御子に従したがうとき、御子自身も、ご自分に万物を従したがわせた方に従したがわれます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

29 もしこうでなかったら、死者のゆえにバプテスマを受ける人たちは、何のためにそうするのですか。もし、死者は決してよみがえらないのなら、なぜその人たちは、死者のゆえにバプテスマを受けるのですか。

30 また、なぜ私たちもいつも危険にさらされているのでしょうか。

31 兄弟たち。私にとって、毎日が死の連続です。これは、私たちの主キリスト・イエスにあつてあなたがたを誇る私の誇りにかけて、誓つて言えることです。

32 もし、私が人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。もし、死者の復活がないのなら、「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか」ということになるのです。

33 思い違いをしてはいけません。友だちが悪ければ、良い習慣がそこなわれます。

34 目をさまして、正しい生活を送り、罪をやめなさい。神についての正しい知識を持っていない人たちがいます。私はあなたがたをはずかしめるために、こう言っているのです。

35 ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」

36 愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。

37 あなたが蒔く物は、後にできるからだけでなく、麦やその他の穀物の種粒です。

38 しかし神は、みこころに従したがつて、それからからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。

39 すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります。

40 また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの栄光と地上のからだの栄光とは異なっており、

41 太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います。

42 死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえられ、

43 卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえられ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえられ、

44 <sup>49</sup>血肉のからだで蒔かれ、<sup>50</sup>御霊に属するからだによみがえられるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

45 聖書に「最初の人アダムは生きた者となった」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。

46 最初にあったのは血肉のものであり、御霊のものではありません。御霊のものはあとに<sup>51</sup>来るのです。

47 第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。

48 土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ているのです。

49 私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、<sup>52</sup>天上のかたちをも持つのです。

50 兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉の<sup>53</sup>からだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

51 <sup>54</sup>聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。

52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

- 53 朽<sup>く</sup>ちるものは、必ず朽<sup>く</sup>ちないものを着なければならず、死<sup>ふ</sup>ぬものは、必ず不<sup>ふ</sup>死<sup>し</sup>を着なければならぬからです。
- 54 しかし、朽<sup>く</sup>ちるものが朽<sup>く</sup>ちないものを着、死<sup>ふ</sup>ぬものが不<sup>ふ</sup>死<sup>し</sup>を着るとき、「死は勝利にのまれた」としるされている、みことばが実現します。
- 55 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」
- 56 死のとげは罪<sup>つみ</sup>であり、罪<sup>つみ</sup>の力<sup>りつぼう</sup>は律法です。
- 57 しかし、神に感謝<sup>かんしゃ</sup>すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。
- 58 ですから、私の愛<sup>あい</sup>する兄弟<sup>けい</sup>たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励<sup>はげ</sup>みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。

## 一六章

- 1 さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたように、あなたがたにもこう命じます。
- 2 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおの、いつも週の初めの日に、  
収入に<sup>しゆうにゆう おう</sup>応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。
- 3 私がそちらに行ったとき、あなたがたの承認<sup>しやうにん</sup>を得た人々に手紙を持たせて派遣<sup>は</sup>し、あなたがたの献金をエルサレム<sup>けん きん</sup>に届けさせましょう。
- 4 しかし、もし私も行くほうがよければ、彼らは、私と<sup>は</sup>いつしよに行くことになるでしょう。
- 5 私は、マケドニヤを通つて後、あなたがたのところへ行きます。マケドニヤを通るつもりでいますから。
- 6 そして、たぶんあなたがたのところに滞在<sup>たいざい</sup>するでしょう。冬を越<sup>こ</sup>すことになるかもしれません。それは、どこに行くとしても、あなたがたに送っていただこうと思うからです。
- 7 私は、いま旅の途中<sup>とちゆう</sup>に、あなたがたの顔を見たいと思っているのではありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在<sup>たいざい</sup>したいと願っています。
- 8 しかし、五旬節<sup>ごじゆんせつ</sup>まではエペソに滞在<sup>たいざい</sup>するつもりです。
- 9 というのは、<sup>55</sup>働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです。
- 10 テモテがそちらへ行ったら、あなたがたのところで心配<sup>しんぱ</sup>なく過ごせるよう心を配ってください。彼も、私と同じように、主のみわざに<sup>はげ</sup>励んでいるからです。
- 11 だれも彼を軽んじてはいけません。彼を平安のうちに送り出して、私のところに來させてください。私は、彼が兄弟たちとともに来るのを待ち望んでいます。
- 12 兄弟アポロのことですが、兄弟たちと<sup>は</sup>いつしよにあなたがたのところへ行くように、私は強く彼に<sup>すす</sup>勧めました。しかし、彼は今、そちらへ行こうとは全然思っていない。しかし、機会があれば行くでしょう。
- 13 目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。
- 14 いったいのことを愛<sup>あい</sup>をもって行いなさい。
- 15 兄弟たちよ。あなたがたに<sup>すす</sup>勧めます。ご承知<sup>しやうち</sup>のように、ステパナの家族は、アカヤの初穂<sup>はつほ</sup>であつて、聖徒たちのために熱心に奉仕<sup>ほうし</sup>してくれました。
- 16 あなたがたは、このような人たちに、また、ともに働き、労しているすべての人たちに服従<sup>ふくじゆう</sup>しなさい。
- 17 ステパナとポルトナトとアカイコが<sup>56</sup>來たので、私は喜んでいます。なぜなら、彼らは、<sup>57</sup>あなたがたの足りない分を補<sup>おぎな</sup>ってくれたからです。
- 18 彼らは、私の心をも、あなたがたの心をも安心させてくれました。このような人々の労をねぎらいなさい。
- 19 アジヤの諸教会がよろしくと言っています。アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあつて心から、あなたがたによろしくと言っています。
- 20 すべての兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。聖なる口づけをもつて、互<sup>たが</sup>いにあいさつをかわしなさい。
- 21 パウロが、自分の手であいさつを書きます。
- 22 主を愛さない者はだれでも、<sup>58</sup>のろわれよ。<sup>59</sup>主よ、來てください。
- 23 主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。
- 24 私の愛は、キリスト・イエスにあつて、あなたがたすべての者ととともにあります。<sup>60</sup>アーメン。



- 1 別訳「キリストが分割されています」
- 2 異本「神に感謝して」
- 3 別訳「キリスト・イエスによって、神の（子）です」
- 4 異本「奥義」
- 5 あるいは「賃金」
- 6 直訳「人の日による」
- 7 別訳「この世にも」とし「御使いにも」の前に置く
- 8 あるいは「優しく答えます」
- 9 別訳「...いるのですか」
- 10 別訳「むしろ悲しんで...除こうとするはずではありませんか」
- 11 別訳「主イエスの御名によって」を四節冒頭に置く
- 12 異本「イエス」を挿入
- 13 別訳「しかし、私はいま書きます。兄弟と呼ばれる者で...、いっしょに食事をしてもいけないのです」
- 14 あるいは「その当然受けるべきものを与え」
- 15 あるいは「その当然受けるべきものを与え」
- 16 異本「それは、私の願うところが...であることだからです」
- 17 「情の」は補足
- 18 異本「私たち」
- 19 異本「（三三節の終わり）配ります。 34 妻と処女との間にも違いがあります。結婚していない者は...主のことに心を配りますが...」
- 20 直訳「むなしくされるよりは」
- 21 あるいは「雲の中、海の中で」
- 22 直訳「私たちの教訓のためです。この私たちに世の終わりが来ています」
- 23 直訳「良心のゆえのせんさくをしないで」
- 24 参照 I コリント一〇・二五注
- 25 直訳「男は女からのものではなく、女が男からのものだからです」
- 26 あるいは「分派争い」。ギリシヤ語「スキスマ」
- 27 直訳「試験済みのもの」
- 28 異本「に裂かれたわたしのからだ」
- 29 別訳「霊的な事がら」
- 30 ギリシヤ語「アナテマ」
- 31 別訳「いっそうの尊敬をもっておおいます」
- 32 ギリシヤ語「スキスマ」
- 33 「賜物」は補足
- 34 「貧しい人たちは補足
- 35 異本「誇るために」
- 36 あるいは「おおい」
- 37 「賜物」は補足
- 38 「賜物」は補足
- 39 「自分の」は補足
- 40 「賜物」は補足
- 41 別訳「霊の賜物を持っていない人」または「一般人の席に着いている人」
- 42 あるいは「良心を責められます」

- 43 直訳「自分と神とに語りなさい」
- 44 別訳「聖徒たちのすべての教会におけると同様に、平和の神だからです」
- 45 直訳「恥ずべき」
- 46 異本「無知な者があれば無知のままにしておきなさい」
- 47 複数「死んだ人々」
- 48 別訳「について」
- 49 別訳「生まれながらのからだ」
- 50 別訳「霊のからだ」
- 51 「来るのです」は補足
- 52 異本「私たちも天上のかたちを帯びましょう」
- 53 直訳「血と肉」
- 54 直訳「見よ」
- 55 直訳「広い門と働き」
- 56 別訳「いてくれるのを」
- 57 別訳「あなたがたの欠けたものを補って」
- 58 ギリシヤ語「アナテマ」
- 59 ギリシヤ語「マラナ・タ」
- 60 異本「アーメン」を欠く

# コリント人への手紙第二

- [一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)
- [六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)
- [十一章](#) [十二章](#) [十三章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカヤ全土にいるすべての聖徒たちへ。
- 2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- 3 私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。
- 4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。
- 5 それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。
- 6 もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。
- 7 私たちがあなたがたについて抱いている望みは、動くことはありません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともしているように、慰めをもとめていることを、私たちは知っているからです。
- 8 兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、
- 9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。
- 10 ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。<sup>1</sup>なおも救い出してくださいさという望みを、私たちはこの神に置いているのです。
- 11 あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してくださいさでしょう。それは、多くの人々の<sup>2</sup>祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげようになるためです。
- 12 私たちがこの世の中で、特にあなたがたに対して、聖さと神から来る誠実さをもつて、<sup>3</sup>人間的な知恵によらず、神の恵みによって行動していることは、私たちの良心のあかしするところであって、これこそ私たちの誇りで
- す。
- 13 私たちは、あなたがたへの手紙で、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません。そして私は、あなたがたが<sup>4</sup>十分に理解してくれることを望みます。
- 14 あなたがたは、ある程度は、私たちを理解しているのですから、私たちの主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであるということを、さらに十分に理解してくださいさよう望むのです。
- 15 この確信をもつて、私は次のような計画を立てました。まず初めにあなたがたのところへ行くことによって、あなたがたが<sup>5</sup>恵みを二度受けられるようにしようとしたのです。
- 16 <sup>6</sup>すなわち、あなたがたのところを通してマケドニヤに行き、そしてマケドニヤから再びあなたがたのところへ帰り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。
- 17 そういうわけですから、この計画を立てた私が、どうして軽率でありえたでしょう。それとも、私の計画は人間的な計画であって、私にとっては、「しかり、しかり」は同時に、「否、否」なのでしょうか。
- 18 しかし、神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「しかり」と言って、同時に「否」と言うようなものではありません。
- 19 私たち、すなわち、私とシルワノとテモテとが、あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり」と同時に「否」であるような方ではありません。この方には「しかり」だけがあるのです。
- 20 神の約束はことごとく、この方において「しかり」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」

と言い、神に栄光<sup>き</sup>を帰<sup>かへ</sup>するのです。

21 私たちをあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保<sup>かた</sup>ち、私たちに油をそそがれた方は神です。

22 神はまた、確認<sup>かくにん</sup>の印<sup>いん</sup>を私たちに押し、<sup>お</sup>保証<sup>ほしょう</sup>として、御霊<sup>みたま</sup>を私たちの心に与えてくださいました。

23 私はこのいのち<sup>しやうにん</sup>にかけ、神を証人<sup>よ</sup>にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたに対する思いやりのためです。

24 私たちは、あなたがたの信仰<sup>しんこう</sup>を支配<sup>し</sup>しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために働く協力者です。あなたがたは、信仰<sup>しんこう</sup>に堅く立<sup>かた</sup>っているからです。

## 二章

- 1 そこで私は、あなたがたを悲しませることになるような訪問は二度とくり返すまいと決心したのです。
- 2 もし私があなたがたを悲しませているのなら、私が悲しませているその人以外に、だれが私を喜ばせてくれるでしょうか。
- 3 あのような<sup>8</sup>手紙を書いたのは、私が行くときには、私に喜びを与えてくれるはずの人たちから悲しみを与えられたくないからでした。それは、私の喜びがあなたがたすべての喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからです。
- 4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱えている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。
- 5 もしある人が悲しみのもとになったとすれば、その人は、私を悲しませたというよりも、ある程度——というのは言い過ぎにならないためですが——あなたがた全部を悲しませたのです。
- 6 その人にとっては、すでに多数の人から受けたあの処罰で十分ですから、
- 7 あなたがたは、むしろ、その人を赦し、慰めてあげなさい。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。
- 8 そこで私は、その人に対する愛を確認することを、あなたがたに勧めます。
- 9 私が手紙を書いたのは、あなたがたがすべてのことにおいて従順であるかどうかをためすためであつたのです。
- 10 もしあなたがたが人を赦すなら、私もその人を赦します。私が何かを赦したのなら、私の赦したことは、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。
- 11 これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。
- 12 私が、キリストの福音のためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いてくださいましたが、
- 13 兄弟テトスに会えなかったので、心に安らぎがなく、そこの人々に別れを告げて、マケドニアへ向かいました。
- 14 しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。
- 15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。
- 16 ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。
- 17 私たちは、多くの人のように、神のこば<sup>9</sup>に混ぜ物をして売るようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。

## 三章

- 1 私たちはまたもや自分を推薦しようとしているのでしょうか。それとも、ある人々のように、あなたがたにあてた推薦状とか、あなたがたの推薦状とかが、私たちに必要なのでしょうか。
- 2 私たちの推薦状はあなたがたです。それは私たちの心にしるされていて、すべての人に知られ、また読まれているのです。
- 3 あなたがたが私たちの奉仕によるキリストの手紙であり、墨によってではなく、生ける神の御霊によって書かれ、石の板にではなく、<sup>10</sup>人の心の板に書かれたものであることが明らかだからです。
- 4 私たちはキリストによって、神の御前でこういう確信を持っています。
- 5 何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです。
- 6 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下しました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者です。文字は殺し、御霊は生かすからです。
- 7 もし石に刻まれた文字による、死の務めにも栄光があつて、モーセの顔の、やがて消え去る栄光のゆえにさえ、イスラエルの人々がモーセの顔を見つめることができなかつたほどだとすれば、
- 8 まして、御霊の務めには、どれほどの栄光があることでしょう。
- 9 罪に定める務めにも栄光があるのなら、義とする務めには、なおさら、栄光があふれるのです。
- 10 そして、かつて栄光を受けたものは、この場合、さらにすぐれた栄光のゆえに、栄光のないものになっているからです。
- 11 もし消え去るべきものにも栄光があつたのなら、永続するものには、なおさら栄光があるはずです。
- 12 このような望みを持っているので、私たちはきわめて大胆にふるまいます。
- 13 そして、モーセが、消えうせるものの最後をイスラエルの人々に見せないように、顔におおいを掛けたようなことはしません。
- 14 しかし、イスラエルの人々の思いは鈍くなつたのです。というのは、今日に至るまで、古い契約が朗読されるときに、同じおおいが掛けられ<sup>11</sup>たままで、取りのけられてはいません。なぜなら、それはキリストによって取り除かれるものだからです。
- 15 かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かつているのです。
- 16 しかし、人が主に向くなら、そのおおいを取り除かれるのです。
- 17 主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。
- 18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、<sup>12</sup>鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

## 四章

- 1 こういうわけで、私たちは、あわれみを受けてこの務<sup>つと</sup>めに任<sup>にん</sup>じられているのですから、勇気を失うことなく、
- 2 恥<sup>かく</sup>ずべき隠<sup>す</sup>された事を捨て、悪巧<sup>わるたく</sup>みに歩まず、神のこ<sup>み</sup>とばを曲げず、真理を明<sup>み</sup>らかにし、神の御前<sup>みまへ</sup>で自分自身をすべての人の良心<sup>すいせん</sup>に推薦<sup>か</sup>しています。
- 3 それでもなお私たちの福音<sup>ふくいん</sup>におおいが掛<sup>か</sup>かっているとしたら、それは、滅<sup>ほろ</sup>びる人々の場合に、おおいが掛<sup>か</sup>かっているのです。
- 4 その場合、この世の神が不信<sup>ふしんじや</sup>者の思<sup>し</sup>いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光<sup>ふくいん</sup>にかかわる福音<sup>かがや</sup>の光を輝<sup>かがや</sup>かせないようにしているのです。
- 5 私たちは自分自身を宣<sup>の</sup>べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣<sup>の</sup>べ伝え<sup>つた</sup>ます。私たち自身は、イエス<sup>13</sup>のために、あなたがたに仕<sup>か</sup>げられるしもべなのです。
- 6 「光<sup>しき</sup>が、やみの中から輝<sup>かがや</sup>き出<sup>で</sup>よ」と言<sup>み</sup>われた神は、私たちの心<sup>こころ</sup>を照<sup>あ</sup>らし、キリストの御顔<sup>みがお</sup>にある神の栄光<sup>ち</sup>を知る知識<sup>しき</sup>を輝<sup>かがや</sup>かせてくださったのです。
- 7 私たちは、この宝<sup>たから</sup>を、土<sup>うつわ</sup>の器<sup>はか</sup>の中に入れて<sup>は</sup>いるのです。それは、この測<sup>はか</sup>り知れない力が神のものであつて、私たちから出たものでないことが明<sup>あ</sup>らかにされるためです。
- 8 私たちは、四方八方<sup>きゆう</sup>から苦しめられますが、窮<sup>きゆう</sup>することはありませ<sup>と</sup>ん。途方<sup>とほう</sup>にくれていますが、行きづまることはありませ<sup>と</sup>ん。
- 9 迫害<sup>はくがい</sup>されていますが、見捨<sup>み</sup>てられることはありませ<sup>す</sup>ん。倒<sup>たお</sup>されますが、滅<sup>ほろ</sup>びませ<sup>と</sup>ん。
- 10 いつでもイエスの死<sup>し</sup>をこの身<sup>み</sup>に帯<sup>お</sup>びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身<sup>み</sup>において明<sup>しめ</sup>らかに示<sup>しめ</sup>されるためです。
- 11 私たち生<sup>な</sup>きている者は、イエスのため<sup>た</sup>に絶<sup>わた</sup>えず死<sup>し</sup>に渡<sup>わた</sup>されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死<sup>し</sup>ぬべき肉<sup>し</sup>体<sup>てい</sup>において明<sup>しめ</sup>らかに示<sup>しめ</sup>されるため<sup>た</sup>め<sup>め</sup>なのです。
- 12 こうして、死<sup>し</sup>は私たちのうち<sup>うち</sup>に働<sup>はたら</sup>き、いのちはあなたがたのうち<sup>うち</sup>に働<sup>はたら</sup>くのです。
- 13 「私は信<sup>しん</sup>じた。それゆえに語<sup>ご</sup>った」と書<sup>か</sup>いてあるとおり、それと同じ信<sup>しん</sup>仰<sup>かう</sup>の霊<sup>れい</sup>を持<sup>も</sup>っている私たちも、信<sup>しん</sup>じているゆえに語<sup>ご</sup>るのです。
- 14 それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前<sup>みまへ</sup>に立たせてくださることを知<sup>し</sup>っているからです。
- 15 すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵<sup>めぐ</sup>みが<sup>14</sup>ますます多<sup>お</sup>くの<sup>お</sup>人々<sup>かんしや</sup>に及<sup>およ</sup>んで感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>が満<sup>み</sup>ちあふれ、神の栄光<sup>あらわ</sup>が現<sup>あらわ</sup>れるようになるためです。
- 16 ですから、私たちは勇気を失<sup>お</sup>いませ<sup>と</sup>ん。たとい私たちの外<sup>おとろ</sup>なる人<sup>ひと</sup>は衰<sup>お</sup>えても、内<sup>うち</sup>なる人<sup>ひと</sup>は日<sup>ひ</sup>々新<sup>あたら</sup>たにされてい<sup>い</sup>ます。
- 17 今の時の軽<sup>かん</sup>い患<sup>なん</sup>難<sup>なん</sup>は、私たちのうち<sup>うち</sup>に働<sup>はたら</sup>いて、測<sup>はか</sup>り知れない、重<sup>えい</sup>い永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>の栄光<sup>えい</sup>をもた<sup>も</sup>たらすから<sup>から</sup>です。
- 18 私たちは、見<sup>み</sup>えるもの<sup>もの</sup>にで<sup>で</sup>はなく、見<sup>み</sup>えないもの<sup>もの</sup>にこそ目<sup>め</sup>を留<sup>と</sup>めます。見<sup>み</sup>えるもの<sup>もの</sup>は一<sup>い</sup>時<sup>とき</sup>的<sup>てき</sup>であり、見<sup>み</sup>えないもの<sup>もの</sup>はいつまでも続<sup>つ</sup>くから<sup>から</sup>です。



## 五章

- 1 私たちの<sup>15</sup>住まいである地上の幕屋<sup>まく や</sup>がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠<sup>えい えん</sup>の家です。
- 2 私たちはこの幕屋<sup>まく や</sup>にあつてうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。
- 3 それを着たなら、私たちは裸<sup>はだか</sup>の状態<sup>じやうたい</sup>になることはありませんからです。
- 4 確かにこの幕屋<sup>まく や</sup>の中<sup>ぬち</sup>にいる間は、私たちは重荷<sup>おもな</sup>を負<sup>お</sup>つて、うめいています。それは、この幕屋<sup>まく や</sup>を脱ぎたいと思うからでなく、かえつて天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちのまれてしまうためにです。
- 5 私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その<sup>16</sup>保証<sup>ほしやう</sup>として御霊<sup>み たま</sup>を下さいました。
- 6 そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体<sup>はな</sup>にいる間は、主から離れているということも知っています。
- 7 確かに、私たちは見るところによつてではなく、信仰<sup>しん こう</sup>によつて歩んでいます。
- 8 私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体<sup>はな</sup>を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。
- 9 そういうわけで、肉体<sup>はな</sup>の中<sup>うち</sup>にあらうと、肉体<sup>はな</sup>を離れてしようと、私たちの念願<sup>ねん がん</sup>とするところは、主に喜ばれることです。
- 10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座<sup>ざ</sup>に現<sup>あらわ</sup>れて、善<sup>ぜん</sup>であれ悪<sup>あく</sup>であれ、各自<sup>各自</sup>その<sup>17</sup>肉体<sup>こ</sup>にあつてした行為<sup>い</sup>に<sup>18</sup>応じて報<sup>むく</sup>いを受けることになるからです。
- 11 こういうわけで、私たちは、主<sup>おそ</sup>を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。私たちのことは、神の御前<sup>み まえ</sup>に明らかです。しかし、あなたがたの良心<sup>れい しん</sup>にも明らかになることが、私の望みです。
- 12 私たちはまたも自分自身をあなたがたに推薦<sup>すい せん</sup>しようとするものではありません。ただ、私たちのことを誇る機会<sup>きかい</sup>をあなたがたに与えて、心においてではなく、うわべのことで誇る人たちに答えることができるようにさせたいのです。
- 13 もし私たちが気が狂<sup>くる</sup>つて<sup>19</sup>いるとすれば、それはただ神のためであり、もし正気<sup>しょう き</sup>であるとすれば、それはただあなたがたのためです。
- 14 というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。
- 15 また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。
- 16 ですから、私たちは今後<sup>ひようじゆん</sup>、<sup>19</sup>人間<sup>ひようじゆん</sup>的な標準<sup>ひようじゆん</sup>で人を知ろうとはしません。かつては人間<sup>ひようじゆん</sup>的な標準<sup>ひようじゆん</sup>でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。
- 17 だれでもキリストのうちに<sup>20</sup>あるなら、<sup>20</sup>その人<sup>その</sup>は新しく造<sup>つく</sup>られた者<sup>す</sup>です。古いものは過ぎ去<sup>さ</sup>つて、見よ、すべてが新しくなりました。
- 18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによつて、私たちをご自分と和解<sup>わ かい</sup>させ、また和解<sup>わ かい</sup>の務<sup>つと</sup>めを私たちに与えてくださいました。
- 19 すなわち、神は、キリストにあつて、この世<sup>この</sup>をご自分と和解<sup>わ かい</sup>させ、違反<sup>いはん</sup>行為<sup>こう い</sup>の責<sup>せ</sup>めを人々に負<sup>お</sup>わせないで、和解<sup>わ かい</sup>の<sup>21</sup>ことばを私たちにゆだねられたのです。
- 20 こういうわけで、私たちはキリストの使節<sup>し せつ</sup>なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願<sup>こん がん</sup>しておられるようです。私たちは、キリストに代わつて、あなたがたに願<sup>わ かい</sup>います。神の和解<sup>わ かい</sup>を受け入れなさい。
- 21 神は、罪<sup>つみ</sup>を知らない方を、私たちの代わり<sup>つみ</sup>に罪<sup>つみ</sup>とされました。それは、私たちが、この方<sup>この</sup>にあつて、神の義<sup>ぎ</sup>となるためです。

## 六章

- 1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください。
- 2 神は言われます。
- 「わたしは、恵みの時にあなたに答え、  
救いの日にあなたを助けた。」
- 確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。
- 3 私たちは、この務めがそしられないために、どんなことにも人につまずきを与えないようにと、
- 4 あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しているのです。すなわち非常な忍耐と、悩みと、苦しみと、嘆きの中で、
- 5 また、むち打たれるときにも、入獄にも、暴動にも、労役にも、徹夜にも、断食にも、
- 6 また、純潔と知識と、寛容と親切と、聖霊と偽りのない愛と、
- 7 真理のことばと神の力とにより、また、左右の手に持っている義の武器により、
- 8 また、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたり、好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。私たちは人をだます者のように見えても、真実であり、
- 9 人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、<sup>21</sup>罰せられているようであつても、殺されず、
- 10 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。
- 11 コリントの人たち。私たちはあなたがたに包み隠すことなく話しました。私たちの心は広く開かれています。
- 12 あなたがたは、私たちの中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。
- 13 私は自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください。
- 14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。
- 15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。<sup>22</sup>信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。
- 16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。
- 「わたしは彼らの間に住み、また歩む。  
わたしは彼らの神となり、  
彼らはわたしの民となる。」
- 17 それゆえ、彼らの中から出て行き、  
彼らと分離せよ、と主は言われる。  
けが<sup>ふ</sup>汚れたものに触れないようにせよ。  
そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、
- 18 わたしはあなたがたの父となり、  
あなたがたはわたしの息子、娘となる、  
と全能の主が言われる。」

## 七章

- 1 愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いつさいの靈肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。
- 2 私たちに対して心を開いてください。私たちは、だれにも不正をしたことがなく、だれをもそこなったことがなく、だれからも利をむさぼったことがありません。
- 3 責めるためにこう言うものではありません。前にも言ったように、あなたがたは、私たちとともに死に、ともに生きるために、私たちの心のうちにあるのです。
- 4 私のあなたがたに対する信頼は大きいのであって、私はあなたがたを大いに誇りとしています。私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。
- 5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまな苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。
- 6 しかし、<sup>23</sup>氣落ちした者を慰めてくださる神は、テスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。
- 7 ただテスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。
- 8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、
- 9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは<sup>24</sup>神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。
- 10 <sup>25</sup>神のみこころに添った悲しみは、<sup>26</sup>悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらしめます。
- 11 ご覧なさい。<sup>27</sup>神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょう。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、処罰を断行させたことでしょう。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。
- 12 ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは悪を行った人のためでもなく、その被害者のためでもなくて、私たちに対するあなたがたの熱心が、神の御前に明らかにされるためであったのです。
- 13 こういうわけですから、私たちは慰めを受けました。
- この慰めの上にテスの喜びが加わって、私たちはなおいっそう喜びました。テスの心が、あなたがたすべてによって安らぎを与えられたからです。
- 14 私はテスに、あなたがたのことを少しばかり誇りましたが、そのことで恥をかかずに済みました。というのは、私たちがあなたがたに語ったことがすべて真実であったように、テスに対して誇ったことも真実となったからです。
- 15 彼は、あなたがたがみなよく言うことを聞き、<sup>28</sup>恐れおののいて、自分を迎えてくれたことを思い出して、あなたがたへの<sup>29</sup>愛情をますます深めています。
- 16 私は、あなたがたに全幅の信頼を寄せることができるのを喜んでいます。

# 八章

- 1 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思ひます。
- 2 苦しみゆえの激しい試練の中にあつても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となつたのです。
- 3 私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、
- 4 聖徒たち<sup>30</sup>をささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願つたのです。
- 5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従つて、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。
- 6 それで私たちは、テトスがすでにこの恵みのわざをあなたがたの間で始めていたのですから、それを完了させるよう彼に勧めたのです。
- 7 あなたがたは、すべてのことに、すなわち、信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、<sup>31</sup>私たちから出てあなたがたの間にある愛にも富んでいるように、この恵みのわざにも富むようになってください。
- 8 こうは言つても、私は命令するものではありません。ただ、他の人々の熱心さをもって、あなたがた自身の愛の眞実を確かめたいのです。
- 9 あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。
- 10 この献金のことについて、私の意見を述べましょう。それはあなたがたの益になることだからです。あなたがたは、このことを昨年、他に先んじて行つただけでなく、このことを他に先んじて願つた人たちです。
- 11 ですから、今、それをし遂げなさい。喜んでしようと思つたのですから、持っている物で、それをし遂げることができるはずで。
- 12 もし熱意があるならば、持たない物によつてではなく、持っている程度に応じて、それは受納されるのです。
- 13 私はこのことによつて、他の人々には樂をさせ、あなたがたには苦勞をさせようとしているのではなく、平等を圖っているのです。
- 14 今あなたがたの余裕が彼らの欠乏を補うなら、彼らの余裕もまた、あなたがたの欠乏を補うことになるのです。こうして、平等になるのです。
- 15 「多く集めた者も余るところがなく、少し集めた者も足りないところがなかつた」と書いてあるとおりです。
- 16 私があなたがたのことを思うのと同じ熱心を、テトスの心にも与えてくださった神に感謝します。
- 17 彼は私の勧めを受け入れ、非常な熱意をもって、自分から進んであなたがたのところに行こうとしています。
- 18 また私たちは、テトスといつしよに、ひとりの兄弟を送ります。この人は、福音の働きによつて、すべての教会で称賛されていますが、
- 19 そればかりでなく、彼は、この恵みのわざに携わっている私たちに同伴するよう諸教会の任命を受けたのです。私たちがこの働きをしているのは、主ご自身の栄光のため、また、私たちの誠意を示すためにほかなりません。
- 20 私たちは、この献金の取り扱いについて、だれからも非難されることがないように心がけています。
- 21 それは、主の御前ばかりでなく、人の前でも公明正大なことを示そうと考えているからです。
- 22 また、彼らといつしよに、もうひとりの兄弟を送ります。私たちはこの兄弟が多くのことについて熱心であることを、しばしば認めることができました。彼は今、あなたがたに深い信頼を寄せ、ますます熱心になっています。
- 23 テトスについて言えば、彼は私の仲間で、あなたがた<sup>32</sup>の間での私の同勞者です。兄弟たちについて言えば、彼らは諸教会の<sup>33</sup>使者、キリストの栄光です。
- 24 ですから、あなたがたの愛と、私たちがあなたがたを誇りとしている証拠とを、諸教会の前で、彼らに示しては

しいのです。

# 九章

- 1 聖徒たちのためのこの奉仕については、いまさら、あなたがたに書き送る必要はないでしょう。
- 2 私はあなたがたの熱意を知り、それについて、あなたがたのことをマケドニヤの人々に誇って、アカヤでは昨年から準備が進められていると言ったのです。こうして、あなたがたの熱心は、多くの人を奮起させました。
- 3 私が兄弟たちを送ることにしたのは、この場合、私たちがあなたがたについて誇ったことがむだにならず、私が言っていたとおりに準備してしてもらうためです。
- 4 そうでないと、もしマケドニヤの人が私といっしょに行って、準備ができていないのを見たら、あなたがたはもちろんですが、私たちも、このことを確信していただけに、恥をかくことになるでしょう。
- 5 そこで私は、兄弟たちに勧めて、先にそちらに行かせ、前に約束したあなたがたの<sup>34</sup>贈り物を前もって用意していただくことが必要だと思いました。どうか、この献金を、<sup>35</sup>惜しみながらするのではなく、<sup>36</sup>好意に満ちた贈り物として用意しておいてください。
- 6 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、<sup>37</sup>豊かに蒔く者は、<sup>38</sup>豊かに刈り取ります。
- 7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。
- 8 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。
- 9 「この人は散らして、貧しい人々に与えた。  
その義は永遠にとどまる。」
- と書いてあるとおりです。
- 10 蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。
- 11 あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。
- 12 なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。
- 13 このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく<sup>39</sup>与えていることを知って、神をあがめることでしょう。
- 14 また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。
- 15 ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。

# 一〇章

- 1 さて、私パウロは、キリストの柔和と寛容をもって、あなたがたにお勧めします。私は、あなたがたの間にいて、面と向かっているときは<sup>40</sup>おとなしく、離れているあなたがたに対しては強気な者です。
- 2 しかし、私は、あなたがたのところに行くときには、私たちを肉に従って歩んでいるかのように考える人々に対して勇敢にふるまおうと思っているその確信によって、強気にふるまうことがなくて済むように願っています。
- 3 私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。
- 4 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。
- 5 私たちは、さまざまな思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、
- 6 また、あなたがたの従順が完全になるとき、あらゆる不従順を罰する用意ができています。
- 7 <sup>41</sup>あなたがたは、<sup>42</sup>うわべのことだけを見えています。もし自分はキリストに属する者だと確信している人がいるなら、その人は、自分がキリストに属しているように、私たちもまたキリストに属しているということを、もう一度、自分でよく考えなさい。
- 8 あなたがたを倒すためではなく、立てるために主が私たちに授けられた権威については、たとい私が<sup>43</sup>多少誇りすぎることがあっても、恥とはならないでしょう。
- 9 私は手紙であなたがたをおどしているかのように見られたくありません。
- 10 彼らは言います。「パウロの手紙は重みがあって力強いが、<sup>44</sup>実際に会った場合の彼は弱々しく、その話しぶりは、なっていない。」
- 11 そういう人はよく承知しておきなさい。離れているときに書く手紙のことばがそうなら、いっしょにいるときの行動もそのとおりです。
- 12 私たちは、自己推薦をしているような人たちの中のだれかと自分を同列に置いたり、比較したりしようなどとは思いません。しかし、彼らが自分たちの間で自分を量ったり、比較したりしているのは、知恵のないことなのです。
- 13 私たちは、限度を越えて誇りはしません。私たちがあなたがたのところまで行くのも、神が私たちに量って割り当ててくださった限度内で行くのです。
- 14 私たちは、あなたがたのところまでは行かないのに無理に手を伸ばしているではありません。事実、私たちは、キリストの福音を携えてあなたがたのところにまで行ったのです。
- 15 私たちは、自分の限度を越えてほかの人の働きを誇ることはしません。ただ、あなたがたの信仰が成長し、あなたがたによって、私たちの領域内で私たちの働きが<sup>45</sup>広げられることを望んでいます。
- 16 それは、私たちがあなたがたの向こうの地域にまで福音を宣べ伝えるためであって、決して他の人の領域で<sup>46</sup>なされた働きを誇るためではないのです。
- 17 誇る者は、主を誇りなさい。
- 18 自分で自分を推薦する人でなく、主に推薦される人こそ、受け入れられる人です。

# 一章

- 1 私の少しばかりの愚かさをこらえていただきたいと思います。<sup>47</sup>いや、あなたがたはこらえているのです。
- 2 というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。
- 3 しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあつてはと、私は心配しています。
- 4 というわけは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかつた別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです。
- 5 私は自分をあの大使徒たちに少しでも劣っているとは思いません。
- 6 たとい、話は巧みでないにしても、知識についてはそうではありません。私たちは、すべての点で、いろいろな場合に、そのことをあなたがたに示して来ました。
- 7 それとも、あなたがたを高めるために、自分を低くして報酬を受けずに神の福音をあなたがたに宣べ伝えたことが、私の罪だったのでしょか。
- 8 私は他の諸教会から奪い取つて、あなたがたに仕えるための給料を得たのです。
- 9 あなたがたのところにいて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニヤから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補つてくれたのです。私は、万事につけあなたがたの重荷にならないようにしましたし、今後もそうするつもりです。
- 10 私にあるキリストの真実にかけて言います。アカヤ地方で私のこの誇りが封じられることは決してありません。
- 11 なぜでしょう。私があなたがたを愛していないからでしょうか。神はご存じです。
- 12 しかし、私は、今していることを今後も、し続けるつもりです。それは、私たちと同じように誇るところがあるとみなされる機会をねらっている者たちから、その機会を断ち切つてしまうためです。
- 13 こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であつて、キリストの使徒に変装しているのです。
- 14 しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。
- 15 ですから、サタンの手下どもが義のしもべに変装したとしても、格別なことはありません。彼らの最後はそのしわざにふさわしいものとなります。
- 16 くり返して言いますが、だれも、私を愚かと思つてはなりません。しかし、もしそう思うなら、私を愚か者扱いにしないで。私も少し誇つてみせます。
- 17 これから話すことは、主によつて話すのではなく、愚か者としてする思い切つた自慢話です。
- 18 多くの人が肉によつて誇つているので、私も誇ることにします。
- 19 あなたがたは賢いのに、よくも喜んで愚か者たちをこらえています。
- 20 事実、あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、だまされても、いばられても、顔をたたかれられても、こらえているではありませんか。
- 21 言うのも恥ずかしいことですが、言わなければなりません。私たちは弱かつたのです。しかし、人があえて誇ろうとすることなら、—私は愚かになつて言いますが—私もあえて誇りましょう。
- 22 彼らはヘブル人ですか。私もそうです。彼らはイスラエル人ですか。私もそうです。彼らはアブラハムの子孫ですか。私もそうです。
- 23 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。



- 24 ユダヤ人から<sup>48</sup>三十九のむちを受けたことが五度、
- 25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難<sup>なん</sup>船<sup>せん</sup>したことが三度あり、一昼夜、海上を漂<sup>ただよ</sup>ったこともあります。
- 26 幾<sup>いく</sup>度も旅をし、川<sup>なん</sup>の難、盗賊<sup>とうぞく</sup>の難、同<sup>なん</sup>国民<sup>こく</sup>から受ける難、異<sup>なん</sup>邦<sup>ほう</sup>人<sup>じん</sup>から受ける難、都<sup>なん</sup>市の難、荒<sup>あら</sup>野<sup>の</sup>の難、海<sup>なん</sup>上の難、にせ兄弟<sup>なん</sup>の難に会い、
- 27 労<sup>わ</sup>し苦<sup>む</sup>しみ、たびたび眠<sup>よ</sup>られぬ夜<sup>す</sup>を過<sup>う</sup>ごし、飢<sup>う</sup>え渴<sup>かわ</sup>き、しばしば食<sup>く</sup>べ物<sup>ぶつ</sup>もなく、寒<sup>さ</sup>さに凍<sup>こ</sup>え、裸<sup>はだか</sup>でいたこともありました。
- 28 <sup>49</sup>このような外<sup>ぐわい</sup>から来<sup>き</sup>ることのほかに、日<sup>ひ</sup>々私<sup>わたし</sup>に押<sup>お</sup>しかかるすべての教<sup>きょう</sup>会<sup>かい</sup>への心<sup>こころ</sup>づかひがあります。
- 29 だれかが弱<sup>よわ</sup>くて、私<sup>わたし</sup>が弱<sup>よわ</sup>くない、ということがあ<sup>あ</sup>るでし<sup>し</sup>ょうか。だれかがつまずいていて、私<sup>わたし</sup>の心<sup>こころ</sup>が激<sup>はげ</sup>しく痛<sup>いた</sup>まないでお<sup>お</sup>られま<sup>ま</sup>しょうか。
- 30 もしどうしても誇<sup>ほこ</sup>る必要<sup>ひつやう</sup>があるなら、私<sup>わたし</sup>は自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の弱<sup>よわ</sup>さを誇<sup>ほこ</sup>ります。
- 31 主<sup>しゅ</sup>イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>ス・キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ストの父<sup>ふ</sup>なる神<sup>かみ</sup>、永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>にほめたたえら<sup>え</sup>れる方<sup>かた</sup>は、私<sup>わたし</sup>が偽<sup>いつわ</sup>りを言<sup>い</sup>つてい<sup>い</sup>ないの<sup>の</sup>を<sup>を</sup>ご存<sup>ぞん</sup>じです。
- 32 ダマスコではアレ<sup>あ</sup>タ<sup>た</sup>王<sup>わう</sup>の代<sup>だい</sup>官<sup>くわん</sup>が、私<sup>わたし</sup>を捕<sup>と</sup>らえようとしてダマスコの町<sup>まち</sup>を監<sup>かん</sup>視<sup>し</sup>しました。
- 33 そのとき私<sup>わたし</sup>は、城<sup>じやう</sup>壁<sup>へき</sup>の窓<sup>まど</sup>からかごでつ<sup>つ</sup>り降<sup>お</sup>ろされ、彼<sup>かれ</sup>の手<sup>て</sup>をの<sup>の</sup>が<sup>が</sup>れました。

## 一二章

- 1 無益なことです、誇るのもやむをえないことです。私は主の 幻 と啓示のことを話しましょう。
- 2 私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に――肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それとも知りません。神はご存じです、――第三の天にまで引き上げられました。
- 3 私はこの人が、――それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです、――
- 4 パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。
- 5 このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。
- 6 たとい私が誇りたいと思ったとしても、愚か者にはなりません。真実のことを話すのだからです。しかし、誇ることは控えましょう。私について見る、私から聞くこと以上に、人が私を過大に評価するといけなからです。
- 7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。
- 8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。
- 9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
- 10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、<sup>50</sup>侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。
- 11 私は愚か者になりました。あなたがたが無理に私をそうしたのです。私は当然あなたがたの推薦を受けてよかったです。たとい私は取るに足りない者であっても、私はあの大使徒たちにどのような点でも劣るところはありませんでした。
- 12 使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間で行われた、しるしと不思議と力あるわざです。
- 13 あなたがたが他の諸教会より劣っている点は何でしょうか。それは、私のほうであなたがたには負担をかけなかったことだけです。この不正については、どうか、赦してください。
- 14 今、私はあなたがたのところに行こうとして、三度目の用意ができています。しかし、あなたがたに負担はかけません。私が求めているのは、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身だからです。子は親のためにたくわえる必要はなく、親が子のためにたくわえるべきです。
- 15 ですから、私はあなたがたのたましいのためには、大いに喜んで財を費やし、また私自身をさえ使い尽くしましょう。私があなたがたを愛すれば愛するほど、私はいよいよ愛されなくなるのでしょうか。
- 16 あなたがたに重荷は負わせなかったにしても、私は、悪賢くて、あなたがたからだまし取ったのだと言われます。
- 17 あなたがたのところに遭わした人たちのうちのだれによって、私があなたがたを欺くようなことがあったでしょうか。
- 18 私はテトスにそちらに行くように勧め、また、あの兄弟を同行させました。テトスはあなたがたを欺くようなことをしたでしょうか。私たちは<sup>51</sup>同じ心で、同じ歩調で歩いたではありませんか。
- 19 あなたがたは、前から、私たちがあなたがたに対して自己弁護をしているのだと<sup>52</sup>思っていたことでしょう。しかし、私たちは神の御前で、キリストにあつて語っているのです。愛する人たち。すべては、あなたがたを築き上げるためなのです。
- 20 私の恐れていることがあります。私が行つてみると、あなたがたは私の期待しているような者でなく、私もあなたがたの期待しているような者でないことになるのではないのでしょうか。また、争い、ねたみ、憤り、党派心、そし

り、陰口<sup>かげぐち</sup>、高ぶり<sup>そうどう</sup>、騒動があるのではないのでしょうか。

21 私<sup>わたし</sup>がもう一度行くとき、またも私の神<sup>かみ</sup>が、あなたがたの面前<sup>めんぜん</sup>で、私をはずかしめることはないのでしょうか。そして私は、前から罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>おか</sup>していて、その行<sup>い</sup>った汚<sup>けが</sup>れと不品行<sup>ふひんこう</sup>と好色<sup>こうしよく</sup>を悔<sup>く</sup>い改<sup>あらた</sup>めない多くの人たちのために、嘆<sup>なげ</sup>くようなことにはならないのでしょうか。

## 一三章

1 私があなたがたのところへ行くのは、これで三度目です。すべての<sup>53</sup>事實は、ふたりか三人の証人<sup>しょうにん</sup>の口によって確認されるのです。

2 私は二度目の滞在<sup>たいざい</sup>のときに前もって言っておいたのですが、こうして離れて<sup>はな</sup>いる今も、前から罪<sup>つみ</sup>を犯している人たちとほかのすべての人たちに、あらかじめ言っておきます。今度そちらに行ったときには、容赦<sup>ようしや</sup>はしません。

3 こう言うのは、あなたがたはキリストが私によって語っておられるという証<sup>しょう</sup>拠<sup>こ</sup>を求めているからです。キリストはあなたがたに対して弱くはなく、あなたがたの間にあって強い方です。

4 確かに、弱さのゆえに十字架<sup>じゆうじか</sup>につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリスト<sup>54</sup>にあって弱い者ですが、あなたがたに対する神の力のゆえに、キリストとともに生きています。

5 あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味<sup>しんみ</sup>しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか——あなたがたがそれに不適格であれば別です。

6 しかし、私たちは不適格でないことを、あなたがたが悟<sup>さと</sup>るように私は望んでいます。

7 私たちは、あなたがたがどんな悪も行わないように神に祈<sup>いの</sup>っています。それによって、私たち自身の適格<sup>てきかく</sup>であることが明らかになるというのではなく、たとい私たちは不適格<sup>ふてきかく</sup>の<sup>55</sup>ように見えても、あなたがたに正しい行いをしてもらいたいためです。

8 私たちは、真理に逆らっては何をすることもできず、真理のためなら、何でもできるのです。

9 私たちは、自分は弱くてもあなたがたが強ければ、喜ぶのです。私たちは<sup>56</sup>あなたがたが完全な者になることを祈<sup>いの</sup>っています。

10 そういうわけで、離れていてこれらのことを書いているのは、私が行ったとき、主が私に授けてくださった権威<sup>けんい</sup>を用いて、きびしい処置をとることのないようにするためです。この権威が与えられたのは築き上げるためであって、倒<sup>たお</sup>すためではないのです。

11 終わりに、兄弟たち。<sup>57</sup>喜びなさい。<sup>58</sup>完全な者になりなさい。慰<sup>なぐさ</sup>めを受けなさい。一つ心になりなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。

12 聖なる口づけをもって、互<sup>あひ</sup>いにあいさつをかわしなさい。すべての聖徒<sup>せいと</sup>たちが、あなたがたによろしくと言っていきます。

13 主イエス・キリストの恵<sup>めぐ</sup>み、神の愛<sup>あい</sup>、聖霊<sup>せいれい</sup>の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。

- 1 あるいは「私たちは、この神が、これからも私たちに救い出してくださることを望んでいます」
- 2 「の祈り」は補足
- 3 直訳「肉の（知恵）」
- 4 直訳「最後まで」
- 5 異本「喜び」
- 6 直訳「そして」
- 7 あるいは「手付け金」
- 8 「手紙を」は補足
- 9 あるいは「（神のことば）を腐敗させる（ようなことはせず）」
- 10 直訳「肉の心」
- 11 別訳「（掛けられ）ています。それがキリストにあつて取り除かれることが、まだ啓示されていなかったからです」
- 12 あるいは、「主の栄光を鏡に映すように見ながら」
- 13 あるいは「による」
- 14 直訳「多くの人によって増し加わり」
- 15 直訳「地上の幕屋の家」
- 16 あるいは「手付け金」
- 17 直訳「肉体による事がら（複数）」
- 18 直訳「（狂って）いた」
- 19 直訳「肉によって」
- 20 あるいは「そこには新しい創造があります」
- 21 あるいは「懲戒されている」
- 22 直訳「信者はどんな部分を不信者とともに所有するのでしょうか」
- 23 あるいは「へりくだった者」
- 24 直訳「神によって」
- 25 直訳「神によった」
- 26 あるいは「悔い改めに導いて、後悔のいらぬ救いを得させますが」
- 27 直訳「神による悲しみ」
- 28 直訳「恐れとおののきをもって」
- 29 直訳「内臓」
- 30 直訳「に仕える」
- 31 直訳「あなたがたの中にある私たちからの愛」、異本「私たちに對するあなたがたの愛」
- 32 直訳「にとっては」
- 33 直訳「使徒」
- 34 直訳「祝福」
- 35 直訳「貪欲のようになく」
- 36 直訳「祝福」
- 37 直訳「祝福をもって」
- 38 直訳「祝福をもって」
- 39 あるいは「わかち合っていることを知って」
- 40 直訳「謙遜であるが」
- 41 別訳「あなたがたの前にあることを、見なさい」「あなたがたは、うわべのことしか見ていないのですか」
- 42 直訳「あなたがたの顔の前にあること」

- [43](#) あるいは「大いに誇ったとしても」
- [44](#) 直訳「そのからだでいるのは弱々しく」
- [45](#) 別訳「重んじられるようになること」
- [46](#) 直訳「準備された」
- [47](#) 別訳「私を忍んでください」
- [48](#) 直訳「四十に一つ足りない」
- [49](#) 別訳「言及されなかったいろいろのこと」
- [50](#) あるいは「虐待」
- [51](#) 別訳「同じ御霊によって」
- [52](#) あるいは「思っていたのですか」
- [53](#) 直訳「ことば」
- [54](#) 異本「（キリスト）とともに弱い者ですが」
- [55](#) 直訳「ようであつても」
- [56](#) 直訳「あなたがたの完成のために」
- [57](#) 別訳「さようなら」
- [58](#) あるいは「生活を正しなさい」

# ガラテヤ人への手紙

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)  
[六章](#)

[【戻る】](#)

## 一章

- 1 使徒<sup>しと</sup>となったパウロ——私が使徒<sup>しと</sup>となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神<sup>しよきうがい</sup>によったのです——
- 2 および私とともにいるすべての兄弟<sup>めい</sup>たちから、ガラテヤ<sup>めい</sup>の諸教会へ。
- 3 どうか、<sup>1</sup>私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安<sup>つみ</sup>があなたがたの上にありますように。
- 4 キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。<sup>2</sup>私たちの神であり父である方のみこころによったのです。
- 5 どうか、この神に栄光<sup>めい</sup>がとこしえにありますように。アーメン。
- 6 私は、キリストの恵み<sup>めい</sup>をもってあなたがたを召<sup>め</sup>してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音<sup>ふくいん</sup>に移って行くのに驚<sup>おどろ</sup>いています。
- 7 ほかの福音<sup>ふくいん</sup>といっても、もう一つ別に福音<sup>ふくいん</sup>があるわけではありません。あなたがたをかき乱<sup>みだ</sup>す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけ<sup>みづみ</sup>です。
- 8 しかし、私たちであろうと、天の御使<sup>の</sup>いであろうと、もし私たちが宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えた福音<sup>ふくいん</sup>に反することをあなたがたに宣<sup>の</sup>べ伝えるなら、その者は<sup>3</sup>のろわれるべきです。
- 9 私たちが前に言<sup>の</sup>ったように、今もう一度私は言<sup>の</sup>います。もしだれかが、あなたがたの受<sup>ふくいん</sup>けた福音<sup>ふくいん</sup>に反することを、あなたがたに宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えているなら、その者は<sup>4</sup>のろわれるべきです。
- 10 いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心<sup>かんしん</sup>を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまお人の歓心<sup>かんしん</sup>を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。
- 11 兄弟<sup>の</sup>たちよ。私はあなたがたに知らせましよう。私が宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えた福音<sup>ふくいん</sup>は、人間によるものではありません。
- 12 私はそれを人間からは受けなかつたし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示<sup>けいし</sup>によって受けたのです。
- 13 以前ユダヤ教徒であつたころの私の行動は、あなたがたがすでに聞いているところです。私は激<sup>はげ</sup>しく神の教会<sup>はく</sup>を迫害<sup>がい</sup>し、これを滅<sup>ほろ</sup>ぼそうとしました。
- 14 また私は、自分と同族で同年輩<sup>どうねんばい</sup>の多くの者<sup>くら</sup>たちに比べ、はるかにユダヤ教に進<sup>せん</sup>んでおり、先祖<sup>せんぞ</sup>からの伝承<sup>でんしょう</sup>に人一倍熱心<sup>いっぺんねつしん</sup>でした。
- 15 けれども、生まれたときから私を選び分け、恵み<sup>めい</sup>をもって召<sup>め</sup>してくださった方が、
- 16 異邦<sup>いほう</sup>人の間に御子<sup>みこ</sup>を宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えさせるために、御子<sup>みこ</sup>を私のうちに啓示<sup>けいし</sup>することをよしとされたとき、私はすぐに、<sup>5</sup>人<sup>い</sup>には相談<sup>さうだん</sup>せず、
- 17 先輩<sup>せんぱい</sup>の使徒<sup>しと</sup>たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出<sup>い</sup>て行き、またダマスコ<sup>もど</sup>に戻<sup>もど</sup>りました。
- 18 それから三年後に、私はケバをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間<sup>たいびい</sup>滞在<sup>ざいざい</sup>しました。
- 19 しかし、主の兄弟<sup>しと</sup>ヤコブは別として、ほかの使徒<sup>しと</sup>にはだれにも会いませんでした。
- 20 私があなたがたに書いていることには、神の御前<sup>みまえ</sup>で申<sup>い</sup>しますが、偽<sup>いつわ</sup>りはありません。
- 21 それから、私はシリアおよびキリキヤの地方<sup>しよきようがい</sup>に行きました。
- 22 しかし、キリストにあるユダヤの諸教会<sup>しよきうかい</sup>には顔<sup>ほろ</sup>を知られていませんでした。
- 23 けれども、「以前<sup>はくがい</sup>私たちを迫害<sup>はくがい</sup>した者が、そのとき滅<sup>ほろ</sup>ぼそうとした信仰<sup>しんこう</sup>を今は宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えている」と聞いてだけはいないので、
- 24 彼らは私のことで神をあがめていました。



## 二章

- 1 それから十四年たつて、私は、バルナバといっしょに、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。
- 2 それは啓示によって上つたのです。そして、異邦人の間で私の宣べている福音を、人々の前に示し、おもだった人々たちには個人的にそうしました。それは、私が力を尽くしていま走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないためでした。
- 3 しかし、私といっしょにいたテトスでさえ、ギリシヤ人であつたのに、割礼を強いられませんでした。
- 4 実は、忍び込んだにせ兄弟たちがいたので、強いられる恐れがあつたのです。彼らは私たちを奴隷に引き落とそうとして、キリスト・イエスにあつて私たちの持つ自由をうかがうために忍び込んでいたのです。
- 5 私たちは彼らに一時も譲歩しませんでした。それは福音の真理があなたがたの間で常に保たれるためです。
- 6 そして、おもだった者と見られていた人々からは、—彼らがどれほどの人々たちであるにしても、私には問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません—そのおもだった人々は、私に対して、何もつけ加えることをしませんでした。
- 7 それどころか、ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者への福音をゆだねられていることを理解してくれました。
- 8 ペテロにみわさをなして、割礼を受けた者への使徒となさつた方が、私にもみわさをなして、異邦人への使徒としてくださったのです。
- 9 そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケバとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し伸べました。それは、私たちが異邦人のところへ行き、彼らが割礼を受けた人々のところへ行くためです。
- 10 ただ私たちが貧しい人々をいつも顧みるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところでした。
- 11 ところが、ケバがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきことがあつたので、私は面と向かつて抗議しました。
- 12 なぜなら、彼は、ある人々がヤコブのところから来る前は異邦人といっしょに食事をしていたのに、その人々が来ると、<sup>6</sup>割礼派の人々を恐れて、だんだんと異邦人から身を引き、離れて行つたからです。
- 13 そして、ほかのユダヤ人たちも、彼といっしょに本心を偽つた行動をとり、バルナバまでもその偽りの行動に引き込まれてしまいました。
- 14 しかし、彼らが福音の真理に<sup>7</sup>ついてまっすぐに歩んでいないのを見て、私はみな<sup>めんぜん</sup>の面前でケバにこう言いました。「あなたは、自分がユダヤ人でありながらユダヤ人のようには生活せず、異邦人のように生活していたのに、どうして異邦人に対して、ユダヤ人の生活を強いるのですか。<sup>8</sup>
- 15 私たちは、生まれながらのユダヤ人であつて、異邦人のような罪人ではありません。
- 16 しかし、人は律法の行いによつては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によつて義と認められる、ということを知つたからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行いによつてではなく、キリストを信じる信仰によつて義と認められるためです。なぜなら、律法の行いによつて義と認められる者は、ひとりもいないからです。
- 17 しかし、もし私たちが、キリストにあつて義と認められることを求めながら、私たち自身も罪人であることがわかるのなら、キリストは罪の助成者なのでしょうか。そんなことは絶対にありえないことです。
- 18 けれども、もし私が前に打ちこわしたものをもう一度建てるなら、私は自分自身を違反者<sup>9</sup>にしてしまうのです。
- 19 しかし私は、神に生きるために、律法によつて律法に死にました。
- 20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあつて生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によつて生きているのです。
- 21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によつて得られるとしたら、それこそキリストの死は無意味です。

# 三章

- 1 ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。
- 2 ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも<sup>10</sup>信仰をもって聞いたからですか。
- 3 あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。
- 4 あなたがたが<sup>11</sup>あれほどのことを経験したのは、むだだったのでしょうか。万が一にもそんなことはないでしょうか。
- 5 とすれば、あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇蹟を行われた方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなさったのですか。それともあなたがたが<sup>12</sup>信仰をもって聞いたからですか。
- 6 アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。
- 7 ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。
- 8 聖書は、神が異邦人をその信仰によって義と認めてくださることを、前から知っていたので、アブラハムに対し、「あなたによってすべての国民が祝福される」と前もって福音を告げたのです。
- 9 そういうわけで、信仰による人々が、信仰の人アブラハムとともに、祝福を受けるのです。
- 10 というのは、律法の行いによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」
- 11 ところが、律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。<sup>13</sup>「義人は信仰によって生きる」のだからです。
- 12 しかし律法は、<sup>14</sup>「信仰による」のではありません。「律法を行う者はこの律法によって生きる」のです。
- 13 キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「<sup>15</sup>木にかけられる者はすべてののろわれたものである」と書いてあるからです。
- 14 このことは、アブラハムへの祝福が、キリスト・イエスによって異邦人に及ぶためであり、その結果、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるためなのです。
- 15 兄弟たち。人間の場合にたとえてみましょう。人間の<sup>16</sup>契約でも、いったん結ばれたら、だれもそれを無効にしたり、それに付け加えたりはしません。
- 16 ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は「子孫たちに」と言って、多数をさすことはせず、ひとりをさして、「あなたの子孫に」と言っておられます。その方はキリストです。
- 17 私の言おうとすることはこうです。先に神によって結ばれた契約は、その後四百三十年たつてできた律法によって取り消されたり、その約束が無効とされたりすることがないということです。
- 18 なぜなら、相続がもし律法によるのなら、もはや約束によるのではないからです。ところが、神は約束を通してアブラハムに相続の恵みを下さったのです。
- 19 では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。
- 20 仲介者は一方だけに属するものではありません。しかし<sup>17</sup>約束を賜る神は唯一者です。
- 21 とすると、律法は神の約束に反するのでしょうか。絶対にそんなことはありません。もしも、与えられた律法がいのちを与えることのできるものであったなら、義は確かに律法によるものだったでしょう。
- 22 しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。
- 23 信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。
- 24 こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの<sup>18</sup>養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。
- 25 しかし、信仰が現れた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。
- 26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。
- 27 バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。
- 28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。

29 もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相<sup>そうぞく</sup>続人なのです。

## 四章

- 1 ところが、相続人<sup>そうぞく</sup>というものは、全財産<sup>ぜんざいさん</sup>の<sup>19</sup>持ち主なのに、子どものうちは、奴隷<sup>どれい</sup>と少しも違わず、  
2 父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります。
- 3 私たちもそれと同じで、まだ小さかった時には、この世の<sup>20</sup>幼稚な教えの下に奴隷となっていました。
- 4 しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。
- 5 これは律法の下にある者を贖<sup>あがな</sup>い出すため、その結果、私たちが子としての身分<sup>みぶん</sup>を受けるようになるためです。
- 6 そして、あなたがたは子であるゆえに、神は「アバ、父」と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました。
- 7 ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人<sup>そうぞく</sup>です。
- 8 しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷<sup>どれい</sup>でした。
- 9 ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値<sup>むかち</sup>の<sup>21</sup>幼稚な教えに逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとするのですか。
- 10 あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています。
- 11 あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないか、と私はあなたがたのことを案じています。
- 12 お願いします。兄弟たち。私のようにしてください。私もあなたがたのようになったのですから。あなたがたは私に何一つ悪いことをしていません。
- 13 ご承知のとおり、私が<sup>22</sup>最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。
- 14 そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあつたのに、あなたがたは輕蔑したり、きらつたりしないで、かえって神の御使いのように、またキリスト・イエスご自身であるかのように、私を迎えてくれました。
- 15 それなのに、あなたがたのあの喜びは、今どこにあるのですか。私はあなたがたのためにあかしますが、あなたがたは、もしできれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思っただけではありませんか。
- 16 それでは、私は、<sup>23</sup>あなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵<sup>てき</sup>になったのでしょうか。
- 17 あなたがたに対するあの人々の熱心<sup>ねつしん</sup>は正しいものではありません。彼らはあなたがたを自分たちに熱心にならせようとして、あなたがたを<sup>24</sup>福音の恵みから締め出そうとしているのです。
- 18 良いことで熱心<sup>しつしん</sup>に慕われるのは、いつであつても良いものです。それは私があなたがたといっしょにいるときだけではありません。
- 19 私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。
- 20 それで、今あなたがたといっしょ<sup>ごま</sup>にいることができれば、そしてこんな語調でなく話せたらと思います。あなたがたのことをどうしたらよいかと困っているのです。
- 21 律法の下にいたいと思う人たちは、私に答えてください。あなたがたは律法の言うことを聞かないのですか。
- 22 そこには、アブラハムにふたりの子があつて、ひとり<sup>おんな</sup>は女奴隷から、ひとり<sup>どれい</sup>は自由の女から生まれた、と書かれています。
- 23 女奴隷の子は肉によって生まれ、自由の女の子は約束<sup>いやく</sup>によって生まれたのです。
- 24 このことには比喩<sup>ひよ</sup>があります。この女たちは二つの契約です。一つはシナイ山から出ており、奴隷となる子を産みます。その女はハガルです。
- 25 このハガルは、アラビヤにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、彼女はその子どもたちとともに奴隷だからです。
- 26 しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。
- 27 すなわち、こう書いてあります。
- 「喜べ。子を産まない不妊<sup>ふにん</sup>の女よ。  
声をあげて呼ばわれ。  
産みの苦しみを知らない女よ。  
夫に捨てられた女の産む子どもは、  
夫のある女の産む子どもよりも多い。」
- 28 兄弟たちよ。あなたがたはイサクのように約束<sup>いやく</sup>の子でもあります。
- 29 しかし、かつて肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害<sup>はくがい</sup>したように、今もそのとおりです。
- 30 しかし、聖書は何と言っていますか。「奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子どもは決して自由の女の子どもとともに相続人<sup>そうぞく</sup>になつてはならない。」
- 31 こういうわけで、兄弟たちよ。私たちは奴隷<sup>どれい</sup>の女の子どもではなく、<sup>25</sup>自由の女の子どもです。

## 五章

- 1 キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしましょう。
- 2 よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。
- 3 割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行う義務があります。
- 4 律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。
- 5 私たちは、信仰により、御霊によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです。
- 6 キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。
- 7 あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。
- 8 そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。
- 9 わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです。
- 10 私は主にあつて、あなたがたが少しも違った考えを持っていないと確信しています。しかし、あなたがたをかき乱す者は、だれであろうと、さばきを受けるのです。
- 11 兄弟たち。もし私が今でも割礼を宣伝しているなら、どうして今なお迫害を受けることがありましょう。それなら、十字架のつまずきは取り除かれているはずです。
- 12 あなたがたをかき乱す者どもは、いつそのこと切り取ってしまうほうがよいのです。
- 13 兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。
- 14 律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。
- 15 もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。
- 16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
- 17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。
- 18 しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。
- 19 肉の行いは明白であつて、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、
- 20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、**26**分派、
- 21 ねたみ、酩酊、遊興、そうといった類のものです。前にもあらかじめ言つたように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。
- 22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、
- 23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。
- 24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまな情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。
- 25 もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。
- 26 互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることをないようにしましょう。

## 六章

- 1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥<sup>おちい</sup>つたなら、御霊<sup>み たま</sup>の人であるあなたがたは、柔和<sup>にやうわ</sup>な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑<sup>ゆうわく</sup>に陥<sup>おちい</sup>らないように気<sup>き</sup>をつけなさい。
- 2 互いの重荷<sup>おもなかり</sup>を負い合い、そのようにしてキリストの律法<sup>りつぽう</sup>を全<sup>ま</sup>うしなさい。
- 3 だれでも、りっぱでもない自分を何<sup>なん</sup>かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺<sup>あざむ</sup>いているのです。
- 4 おのおの自分の行い<sup>い</sup>をよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思<sup>おも</sup>ったことも、ただ自分だけの誇<sup>ほこ</sup>りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。
- 5 人にはおのおの、負<sup>おし</sup>うべき自分自身の重荷<sup>おもなかり</sup>があるのです。
- 6 みことばを教えられる人は、教える人<sup>あなど</sup>とすべての良いものを分け合<sup>ま</sup>いなさい。
- 7 思い違<sup>ちが</sup>いをしてはいけません。神は侮<sup>あは</sup>れるような方ではありません。人は種<sup>こ</sup>を蒔<sup>ま</sup>けば、その刈<sup>か</sup>り取りもすることになります。
- 8 自分の肉のために蒔<sup>ま</sup>く者は、肉から滅<sup>ほろ</sup>びを刈<sup>か</sup>り取り、御霊<sup>み たま</sup>のために蒔<sup>ま</sup>く者は、御霊<sup>み たま</sup>から永遠<sup>えいえん</sup>のいのちを刈<sup>か</sup>り取るのです。
- 9 善<sup>ぜん</sup>を行うのに飽<sup>あ</sup>いてはいけません。失望<sup>しつぼう</sup>せずにいれば、時期<sup>しき</sup>が来<sup>き</sup>て、刈<sup>か</sup>り取ることになります。
- 10 ですから、私たちは、機会<sup>きかい</sup>のある<sup>27</sup>たびに、すべての人に対して、特に信仰<sup>しんこう</sup>の家族<sup>けんぞく</sup>の人たちに善<sup>ぜん</sup>を行<sup>い</sup>ましょう。
- 11 ご覧<sup>らん</sup>のとおり、私は今こんなに大きな字で、自分のこの手であなたがたに書<sup>か</sup>いています。
- 12 あなたがたに割<sup>わり</sup>礼<sup>れい</sup>を強<sup>き</sup>制<sup>せい</sup>する人たちは、肉において外見<sup>がいけん</sup>を良くしたい人々<sup>ひとら</sup>です。彼らはただ、キリストの十字架<sup>じゆうじ</sup>のために迫害<sup>わい</sup>を受け<sup>う</sup>けたくないだけなのです。
- 13 なぜなら、割<sup>わり</sup>礼<sup>れい</sup>を<sup>28</sup>受<sup>う</sup>けた人たちは、自分自身が律法<sup>りつぽう</sup>を守<sup>まも</sup>っていません。それなのに彼らがあなたがたに割<sup>わり</sup>礼<sup>れい</sup>を受け<sup>う</sup>けさせようとするのは、あなたがたの肉を誇<sup>ほこ</sup>りたいためなのです。
- 14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架<sup>じゆうじ</sup>以外に誇<sup>ほこ</sup>りとするものが決<sup>け</sup>してあつてはなりません。この<sup>29</sup>十字架<sup>じゆうじ</sup>によって、世界は私に対して十字架<sup>じゆうじ</sup>につけられ、私も世界に対して十字架<sup>じゆうじ</sup>につけられたのです。
- 15 割<sup>わり</sup>礼<sup>れい</sup>を受けているか受<sup>う</sup>けていないかは、大事<sup>だいじ</sup>なことではありません。大事<sup>だいじ</sup>なのは新しい<sup>あたら</sup>い<sup>30</sup>創造<sup>そうぞう</sup>です。
- 16 どうか、この基準<sup>きくん</sup>に従<sup>したが</sup>って進<sup>きん</sup>む人々<sup>ひとら</sup>、すなわち神のイスラエルの上に、平安<sup>やすみ</sup>とあわれみがありますように。
- 17 これからは、だれも私を煩<sup>わづら</sup>わさないようにしてください。私は、この身に、イエスの焼<sup>や</sup>き印<sup>いん</sup>を帯<sup>お</sup>びているのですから。
- 18 どうか、私たちの主イエス・キリストの恵<sup>めぐ</sup>みが、兄弟<sup>けい</sup>たちよ、あなたがたの霊<sup>れい</sup>とともにありますように。アーメン。

- 1 異本「父なる神と私たちの主イエス・キリスト」
- 2 別訳「神であり私たちの父である」
- 3 ギリシヤ語「アナテマ」
- 4 ギリシヤ語「アナテマ」
- 5 直訳「血肉」
- 6 あるいは、「割礼者の中の回心した人たち」
- 7 別訳「向かって」
- 8 パウロのことはをここまでとして訳すこともできる
- 9 直訳「として明らかにする」
- 10 直訳「信仰について」
- 11 別訳「あれほど苦しみを受けたことが無意味なことだったのでしょうか」
- 12 直訳「信仰について」
- 13 別訳「信仰による義人は生きる」
- 14 別訳「信仰に基づいているではありません」
- 15 別訳「十字架」
- 16 別訳「遺言」
- 17 「約束を賜る」は補足
- 18 別訳「家庭教師」
- 19 直訳「主」
- 20 別訳「靈力」または「原理」
- 21 別訳「靈力」または「原理」
- 22 別訳「以前」
- 23 別訳「あなたがたを真理に従って扱ったために」
- 24 「福音の恵みから」は補足
- 25 異本は五章一節の前半を四章三一節に続けて、「しかし、キリストは、自由の女の自由をもつて私たちが自由にしてくださいました」としている
- 26 あるいは「異端」
- 27 あるいは「間に」
- 28 異本「受けてしまった」
- 29 あるいは「イエス・キリストによつて」
- 30 別訳「被造物」

# エペソ人への手紙

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)  
[六章](#)

[【戻る】](#)



# 一章

- 1 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実な<sup>ちゆうじつ</sup>1エペソの聖徒たちへ。
- 2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- 3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的<sup>れいてき</sup>祝福<sup>しゆく</sup>をもって私たちを祝福してくださいました。
- 4 すなわち、神は私たちを世界の基<sup>もと</sup>の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。
- 5 神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、<sup>あい</sup>2愛をもってあらかじめ定めておられました。
- 6 それは、神がその愛する方<sup>あひ</sup>にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光<sup>めいぐ</sup>が、ほめたたえられるためです。
- 7 この方<sup>あひ</sup>にあって私たちは、その血による贖<sup>あがな</sup>い、罪の赦し<sup>ゆる</sup>を受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- 8 この恵みを、神は私たちの上にあふれさせ、<sup>あひ</sup>3あらゆる知恵と思慮深さをもって、
- 9 みこころの奥義<sup>おくぎ</sup>を私たちに知らせてくださいました。それは、この方<sup>あひ</sup>にあって神があらかじめお立てになったみむねによることであり、
- 10 時がついに満ちて、実現します。いつさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方<sup>あひ</sup>にあって、一つに集められるのです。
- 11 この方<sup>あひ</sup>にあって私たちは御国<sup>みくに</sup>を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画<sup>けいけ</sup>のままをみな行<sup>な</sup>う方の目的<sup>しやうてき</sup>に従<sup>したが</sup>って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。
- 12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光<sup>めいぐ</sup>をほめたたえるためです。
- 13 この方<sup>あひ</sup>にあってあなたがたもまた、真理<sup>しんり</sup>のことば、あなたがたの救いの福音<sup>ふくいん</sup>を聞き、<sup>あひ</sup>4またそれを信じたことにより、約束<sup>やくそく</sup>の聖霊<sup>せいれい</sup>をもって証印<sup>しやういん</sup>を押されました。
- 14 聖霊<sup>せいれい</sup>は私たちが御国<sup>みくに</sup>を受け継ぐことの保証<sup>ほしょう</sup>です。これは神の民の贖<sup>あがな</sup>いのためであり、神の栄光<sup>めいぐ</sup>がほめたたえられるためです。
- 15 こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰<sup>しんこう</sup>と、すべての聖徒<sup>せいと</sup>に対する<sup>あひ</sup>5愛とを聞いて、
- 16 あなたがたのために絶えず感謝<sup>かんしや</sup>をささげ、あなたがたのことを覚えて祈<sup>いの</sup>っています。
- 17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示<sup>けいじ</sup>の御霊<sup>みたま</sup>を、あなたがたに与えてくださいますように。
- 18 また、あなたがたの心の目がはつきり見えるようになって、神の召<sup>め</sup>しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒<sup>せいと</sup>の受け継ぐものがどのように栄光<sup>めいぐ</sup>に富んだものか、
- 19 また、神の全能<sup>ぜんのう</sup>の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができるようになります。
- 20 神は、その全能<sup>ぜんのう</sup>の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右<sup>みぎ</sup>の座に着かせて、
- 21 すべての支配<sup>しはい</sup>、權威<sup>けんい</sup>、権力<sup>けんりき</sup>、主權<sup>しゆけん</sup>の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。
- 22 また、神は、いつさいのものをキリストの足の下に従<sup>したが</sup>わせ、いつさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。
- 23 教会はキリストのからだであり、いつさいのものをいつさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。



## 二章

- 1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、
- 2 そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました。
- 3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。
- 4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、
- 5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリスト<sup>6</sup>とともに生かし、—あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです—
- 6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。
- 7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。
- 8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。
- 9 行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。
- 10 私たちは神の作品であつて、良い行いをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。
- 11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であつて、
- 12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあつて望みもなく、神もない人たちでした。
- 13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。
- 14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、
- 15 ご自分の肉において、<sup>7</sup>敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまな規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、
- 16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は<sup>8</sup>十字架によって葬り去られました。
- 17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちに平和を宣べられました。
- 18 私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。
- 19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。
- 20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。
- 21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、
- 22 このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

## 三章

- 1 こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロが言います。
- 2 あなたがたのためにと私がいただいた、神の恵みによる私の務めについて、あなたがたはすでに聞いたことでしょう。
- 3 先に簡単に書いたとおり、この奥義は、啓示によって私に知らされたのです。
- 4 それを読めば、私がキリストの奥義をどう理解しているかがよくわかるはずです。
- 5 この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。
- 6 その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。
- 7 私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。
- 8 すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え、
- 9 また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするためです。
- 10 これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、
- 11 私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた神の永遠のご計画によることです。
- 12 私たちはこのキリストにあり、キリストを信じる信仰によって大胆に確信をもって神に近づくことができるのです。
- 13 ですから、私があなたがたのために受けている苦難のゆえに落胆することのないようお願いします。私の受けている苦しみは、そのまま、あなたがたの光栄なのです。
- 14 こういうわけで、私はひざをかがめて、
- 15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。
- 16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいませるように。
- 17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、
- 18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、
- 19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。
- 20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、
- 21 教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

## 四章

1 さて、主しゆうじんの囚人である私はあなたがたに勧めます。召めされたあなたがたは、その召めしにふさわしく歩みなさい。

2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、

3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。

5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。

6 すべてのものの上にあり、すべてのものを貫つらぬき、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。

7 しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。

8 そこで、こう言われています。

「高い所に上られたとき、

彼は多くの捕虜を引き連れ、

人々に賜物を分け与えられた。」

9 ―この「上られた」ということばは、彼が9まず地の低い所に下られた、ということではなくて何でしょう。

10 この下られた方自身が、すべてのものを満すために、もろもろの天よりも高く上られた方なのです―

11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。

12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、

13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、

15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。

16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わせられ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

17 そこで私は、主にあつて言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。

18 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れていきます。

19 道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行いをむさぼるようになっていきます。

20 しかし、あなたがたはキリストを、このようには学びませんでした。

21 ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞き、キリストにあつて教えられているのならばです。まさしく真理はイエスにあるのですから。

22 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、

23 またあなたがたが心の霊において新しくされ、

24 真理に基づき義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。

25 ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。

26 怒<sup>いか</sup>つても、罪<sup>つみ</sup>を犯<sup>おか</sup>してはなりません。日<sup>く</sup>が暮<sup>い</sup>れるまで 憤<sup>いきどお</sup>ったままでいてはいけません。

27 悪魔<sup>あくま</sup>に機会<sup>ぐうかい</sup>を与えないようにしなさい。

28 盗<sup>ぬす</sup>みをしている者は、もう盗<sup>ぬす</sup>んではいけません。かえって、困<sup>こま</sup>っている人に施<sup>ほどこ</sup>しをするため、自分の手<sup>て</sup>をもって正しい仕事<sup>しごと</sup>をし、ほねおって働<sup>はたら</sup>きなさい。

29 悪いことばを、いつさい口<sup>くち</sup>から出<sup>で</sup>してはいけません。ただ、必要<sup>ひつやう</sup>なとき、人の徳<sup>とく</sup>を養<sup>やしな</sup>うのに役立つことばを話し、聞<sup>き</sup>く人に恵<sup>めぐ</sup>みを与<sup>たま</sup>えなさい。

30 神<sup>かみ</sup>の聖霊<sup>せいれい</sup>を悲<sup>かな</sup>しませてはいけません。あなた<sup>あな</sup>がたは、贖<sup>あがな</sup>いの日<sup>ひ</sup>のために、聖霊<sup>せいれい</sup>によつて証印<sup>しょういん</sup>を押<sup>お</sup>されているのです。

31 無慈悲<sup>むじひ</sup>、憤<sup>いきどお</sup>り、怒<sup>いか</sup>り、叫<sup>さけ</sup>び、そしりなどを、いつさいの悪意<sup>あくい</sup>とともに、みな捨て去<sup>す</sup>りなさい。

32 お互<sup>たが</sup>いに親切<sup>せんせつ</sup>にし、心<sup>こころ</sup>の優<sup>やさ</sup>しい人<sup>ひと</sup>となり、神<sup>かみ</sup>がキリストにおいて<sup>10</sup>あなた<sup>あ</sup>がたを赦<sup>ゆる</sup>してくださつたように、互<sup>たが</sup>いに赦<sup>ゆる</sup>し合<sup>あ</sup>ひなさい。

# 五章

- 1 ですから、愛<sup>あい</sup>されている子どもらしく、神にならう者となきなさい。
- 2 また、愛<sup>あい</sup>のうちに歩みなさい。キリストも<sup>11</sup>あなたがたを愛<sup>あい</sup>して、私<sup>わが</sup>たちのために、ご自身<sup>みづか</sup>を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。
- 3 あなたがたの間では、聖徒<sup>せいと</sup>にふさわしく、不品行<sup>ふひんこう</sup>も、どんな汚れも、またむさぼりも、口<sup>くち</sup>にすることさえいけません。
- 4 また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談<sup>じようだん</sup>を避けなさい。そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝<sup>かん</sup>しなさい。
- 5 あなたがたがよく見て知っているとおり、不品行<sup>ふひんこう</sup>な者や、汚れた者や、むさぼる者——これが偶像礼拝者<sup>ぐうぞうらいはいしや</sup>です、——こういう人はだれも、キリストと神との御国<sup>みくに</sup>を相続<sup>そうぞく</sup>することができません。
- 6 むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行いのゆえに、神の怒りは不従順<sup>ふじゆうじゆん</sup>な子らに下るのです。
- 7 ですから、彼らの仲間になつてはいけません。
- 8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主<sup>は</sup>にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。
- 9——光の結ぶ実<sup>み</sup>は、あらゆる善意<sup>ぜんい</sup>と正義<sup>せいぎ</sup>と真実<sup>まこと</sup>なのです——
- 10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。
- 11 実<sup>み</sup>を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。
- 12 なぜなら、彼らがひそかに行っていることは、口<sup>くち</sup>にするのも恥ずかしいことだからです。
- 13 けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。
- 14 明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。
- 「眠<sup>ねむ</sup>っている人よ。目をさませ。
- 死者<sup>しや</sup>の中から起き上がれ。
- そうすれば、キリストが、あなたを照<sup>て</sup>らされる。」
- 15 そういうわけですから、賢<sup>かしこ</sup>くない人のようにではなく、賢<sup>かしこ</sup>い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、
- 16 機会<sup>かい</sup>を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。
- 17 ですから、愚かにならないで、主<sup>は</sup>のみこころは何であるかを、よく悟<sup>さと</sup>りなさい。
- 18 また、酒に酔<sup>よ</sup>つてはいけません。そこには放蕩<sup>ほうとう</sup>があるからです。御霊<sup>みたま</sup>に満たされなさい。
- 19 詩<sup>さんび</sup>と賛美<sup>えい</sup>と霊の歌とをもって、互<sup>たが</sup>いに語り、主に向かつて、心から歌い、また賛美<sup>さんび</sup>しなさい。
- 20 いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神<sup>かんしや</sup>に感謝<sup>かん</sup>しなさい。
- 21 キリストを恐れ尊<sup>つま</sup>んで、互<sup>たが</sup>いに従<sup>したが</sup>いなさい。
- 22 妻たちよ。あなたがたは、主<sup>は</sup>に従<sup>したが</sup>うように、自分の夫<sup>つま</sup>に従<sup>したが</sup>いなさい。
- 23 なぜなら、キリストは教会のかしらであつて、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫<sup>つま</sup>は妻のかしらであるからです。
- 24 教会<sup>したが</sup>がキリストに従<sup>つま</sup>うように、妻も、すべてのことにおいて、夫<sup>したが</sup>に従<sup>したが</sup>うべきです。
- 25 夫たちよ。キリストが教会を愛<sup>あい</sup>し、教会のためにご自身<sup>みづか</sup>をささげられたように、あなたがたも、自分の妻<sup>つま</sup>を愛<sup>あい</sup>しなさい。
- 26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、
- 27 ご自身<sup>みづか</sup>で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖<sup>きよ</sup>く傷<sup>きず</sup>のないものとなつた栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。
- 28 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛<sup>あい</sup>さなければなりません。自分の妻<sup>つま</sup>を愛<sup>あい</sup>する者は自分<sup>みづか</sup>を愛<sup>あい</sup>して

いるのです。

29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養<sup>にく</sup>い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

30 私たちはキリストのからだの部分だからです。

31 「それゆえ、人は父と母を離<sup>はな</sup>れ、その妻と結ば<sup>つま</sup>れ、ふたりは一体となる。」

32 この奥義<sup>おくぎ</sup>は偉大<sup>いだい</sup>です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

33 それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛<sup>つま</sup>しなさい。妻もまた自分の夫を敬<sup>うやま</sup>いなさい。



## 六章

- 1 子どもたちよ。主にあつて両親に従<sup>したが</sup>いなさい。これは正しいことだからです。
- 2 「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴<sup>ともな</sup>ったものです。すなわち、
- 3 「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする」という約束です。
- 4 父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえつて、主の教育と訓戒<sup>くんかい</sup>によつて育てなさい。
- 5 奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従<sup>したが</sup>うように、恐れおの<sup>おそ</sup>のいて真心<sup>まごころ</sup>から<sup>12</sup>地上の主人に従<sup>したが</sup>いなさい。
- 6 人のごきげん<sup>ぜん い</sup>とりのような、うわべだけの仕方<sup>しほう</sup>でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行<sup>な</sup>ひ、
- 7 人にではなく、主に仕えるように、善意をもつて仕えなさい。
- 8 良いことを行<sup>な</sup>えば、奴隷であつても自由人であつても、それぞれその報<sup>むく</sup>いを主から受けることをあなたがたは知つています。
- 9 主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたの主が天におられ、主は人を差別<sup>たいのう</sup>されることがないことを知っているのですから。
- 10 終わりに言います。主にあつて、その大能の力によつて強められなさい。
- 11 悪魔の策略<sup>あくま さくりやく</sup>に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具<sup>ぶぐ</sup>を身に着けなさい。
- 12 私たちの格闘<sup>かくとう</sup>は血肉<sup>けつにく</sup>に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者<sup>しはいしや</sup>たち、また、天にいるもろもろの悪霊<sup>あくれい</sup>に対するものです。
- 13 ですから、邪悪<sup>じやあく</sup>な日に際して対抗<sup>たいこう</sup>できるように、また、いつさいを成し遂<sup>な</sup>げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具<sup>ぶぐ</sup>をとりなさい。
- 14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理<sup>こし</sup>の帯<sup>し</sup>を締め、胸には正義<sup>せいぎ</sup>の胸当て<sup>むねあ</sup>を着け、
- 15 足には平和の福音<sup>ふくいん</sup>の備え<sup>そな</sup>をはきなさい。
- 16 これらすべてのものの上に、信仰の大盾<sup>しんこう おおだて</sup>を取りなさい。それによつて、悪い者が放つ火矢<sup>ひや</sup>を、みな消すことができます。
- 17 救いのかぶとをかぶり、また御霊<sup>みたま</sup>の与える剣<sup>つるぎ</sup>である、神のことばを受け取りなさい。
- 18 すべての祈りと願<sup>いの</sup>いを用いて、どんなときにも御霊<sup>みたま</sup>によつて祈りなさい。そのためには絶えず目<sup>いの</sup>をさましていて、すべての聖徒<sup>せいと</sup>のために、忍耐<sup>にんたい</sup>の限りを尽<sup>かぎ</sup>くし、また祈りなさい。
- 19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、福音<sup>ふくいん</sup>の奥義<sup>おくぎ</sup>を大胆<sup>だいたん</sup>に知らせることができるよう私のためにも祈<sup>いの</sup>ってください。
- 20 私は鎖<sup>くさり</sup>につながれて、福音<sup>ふくいん</sup>のために大使<sup>くさり</sup>の役を果たしています。鎖<sup>くさり</sup>につながれていても、語るべきことを大胆<sup>だいたん</sup>に語れるように、祈<sup>いの</sup>ってください。
- 21 あなたがたにも私の様子や、私が何をしているかなどを知<sup>あ</sup>っていただくために、主にあつて愛する兄弟であり、忠実<sup>ちゆうじつ</sup>な奉仕者<sup>ほうし</sup>であるテキコが、一部始終<sup>しじう</sup>を知らせるでしょう。
- 22 テキコをあなたがたのもとに遣<sup>つか</sup>わしたのは、ほかでもなく、あなたがたが私たちの様子を知り、また彼によつて心に励まし<sup>はげ</sup>を受けるためです。
- 23 どうか、父なる神と主イエス・キリストから、平安と信仰に伴<sup>しんこう</sup>う愛<sup>ともな</sup>とが兄弟たちの上にありますように。
- 24 私たちの主イエス・キリストを朽ちぬ愛<sup>あい</sup>をもつて愛するすべての人の上に、恵<sup>めぐ</sup>みがありますように。

- 1 異本「エペソの」を欠く
- 2 別訳 四節の「御前で」の下に「愛をもって」をつける
- 3 別訳「あらゆる知恵と思慮深さをもって」を前の句の「神は」に続ける
- 4 別訳「信じ、御子にあつて」
- 5 異本「愛」を欠く
- 6 異本「（キリスト）にあつて」
- 7 別訳「敵意」を一四節に入れて「隔ての壁、すなわち敵意を打ちこわし、ご自分の肉において...律法を廃棄されました」とする
- 8 別訳「ご自身にあつて」
- 9 異本「まず」を欠く
- 10 異本「私たち」
- 11 異本「私たち」
- 12 直訳「肉による」

# ピリピ人への手紙

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 キリスト・イエスのしもべであるパウロとテモテから、ビリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。
- 2 どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- 3 私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝し、
- 4 あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り、
- 5 あなたがたが、最初の日から今日まで、<sup>1</sup>福音を広めることにあずかって来たことを感謝しています。
- 6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。
- 7 私があなたがたすべてについてこのように考えるのは正しいのです。あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。
- 8 私が、キリスト・イエスの愛の心をもって、どんなにあなたがたすべてを慕っているか、そのあかしをし给你们するのは神です。
- 9 私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、
- 10 あなたがたが、真に<sup>2</sup>すぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日<sup>3</sup>には純真で非難されることがなく、
- 11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現されますように。
- 12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。
- 13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、<sup>4</sup>親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、
- 14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。
- 15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もありますが、善意をもってする者もあります。
- <sup>5</sup>16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために立てられていることを認めています、
- 17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。
- 18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。
- 19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。
- 20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも<sup>6</sup>恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。
- 21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。
- 22 しかし、<sup>7</sup>もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。
- 23 私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。

24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です。

25 私はこのことを確信していますから、あなたがたの信仰の進歩と喜びとのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてといっしょにいるようになることを知っています。

26 そうなれば、私はもう一度あなたがたのところに行けるので、私のことに関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあつて増し加わるでしょう。

27 ただ一つ。キリストの福音にふさわしく **8**生活しなさい。そうすれば、私が行つてあなたがたに会うにしても、また離れているにしても、私はあなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、

28 また、どんなことがあつても、反対者たちに驚かされることはない。それは、彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。これは神から出たことです。

29 あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜つたのです。

30 あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。

## 二章

1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ<sup>はげ</sup>り、愛<sup>あい</sup>の慰<sup>なぐさ</sup>めがあ<sup>み</sup>り、御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>の交<sup>あひ</sup>わりがあ<sup>あいじよう</sup>り、愛<sup>あい</sup>情<sup>じよう</sup>とあわれ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>みがあるなら、

2 私の喜<sup>いつ</sup>びが満<sup>ち</sup>たされるように、あ<sup>た</sup>なたがたは一致を保<sup>あ</sup>ち、同<sup>あ</sup>じ愛<sup>あい</sup>の心を持<sup>も</sup>ち、心<sup>こころ</sup>を合<sup>あ</sup>わせ、<sup>ごころざし</sup>「志」を一つにしてくだ<sup>さ</sup>い。

3 何<sup>じ</sup>事<sup>こ</sup>でも<sup>ちゆうしん</sup>9 自<sup>き</sup>己<sup>よ</sup>中<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>や虚<sup>きよ</sup>榮<sup>えい</sup>からすることなく、へりくだ<sup>た</sup>つて、互<sup>たが</sup>いに人<sup>た</sup>を自<sup>かえり</sup>分<sup>り</sup>よりもすぐれた者<sup>た</sup>と思<sup>あ</sup>いなさい。

4 自<sup>た</sup>分のこ<sup>こ</sup>とだけ<sup>ころ</sup>ではなく、他<sup>こころがま</sup>の人<sup>な</sup>のこ<sup>こ</sup>とも顧<sup>す</sup>み<sup>な</sup>さ<sup>い</sup>い。

5 あ<sup>み</sup>なたがたの間<sup>す</sup>では、そ<sup>こころ</sup>のう<sup>が</sup>な心<sup>こころ</sup>構<sup>か</sup>え<sup>い</sup>でいなさい。そ<sup>こころ</sup>れはキ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>ト・イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>スのう<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>にも見<sup>み</sup>ら<sup>ら</sup>れるも<sup>も</sup>の<sup>の</sup>で<sup>で</sup>す。

6 キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>トは神<sup>しん</sup>の御<sup>み</sup>姿<sup>すがた</sup>である方<sup>かた</sup>なの<sup>の</sup>に、神<sup>しん</sup>のあ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>方<sup>かた</sup>を捨<sup>す</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ない<sup>い</sup>とは考<sup>く</sup>え<sup>え</sup>ず、

7 ご自<sup>せい</sup>分<sup>ぶん</sup>を<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>に<sup>し</sup>て、仕<sup>し</sup>え<sup>え</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>の姿<sup>すがた</sup>をとり、人<sup>じん</sup>間<sup>かん</sup>と同<sup>どう</sup>じ<sup>じ</sup>よう<sup>よう</sup>にな<sup>な</sup>られ<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。人<sup>せい</sup>とし<sup>し</sup>て<sup>て</sup>の性<sup>せい</sup>質<sup>しつ</sup>をも<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>現<sup>あらわ</sup>れ、

8 自<sup>い</sup>分<sup>ふ</sup>を卑<sup>した</sup>しくし、死<sup>じ</sup>にま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>従<sup>したが</sup>い、実<sup>じ</sup>に十<sup>じゆう</sup>字<sup>じ</sup>架<sup>か</sup>の死<sup>し</sup>にま<sup>ま</sup>でも<sup>も</sup>従<sup>したが</sup>われ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。

9 そ<sup>あ</sup>れ<sup>い</sup>ゆ<sup>い</sup>え<sup>え</sup>神<sup>しん</sup>は、こ<sup>こ</sup>の方<sup>かた</sup>を高<sup>たか</sup>く上<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>て、す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>名<sup>な</sup>にま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>名<sup>な</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>与<sup>よ</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。

10 そ<sup>あ</sup>れ<sup>い</sup>は、イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>スの御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>によ<sup>よ</sup>つ<sup>つ</sup>て、天<sup>てん</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>、地<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>、地<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>下<sup>した</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>が、ひ<sup>ひ</sup>ざ<sup>ざ</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>が<sup>が</sup>め、

11 す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>口<sup>くち</sup>が、「イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>ス・キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>トは主<sup>しゅ</sup>である」と告<sup>こ</sup>白<sup>はく</sup>し<sup>し</sup>て、父<sup>ふ</sup>なる神<sup>しん</sup>がほ<sup>ほ</sup>め<sup>め</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>え<sup>え</sup>ら<sup>ら</sup>れる<sup>る</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>で<sup>で</sup>す。

12 そ<sup>あ</sup>う<sup>い</sup>い<sup>い</sup>う<sup>い</sup>わけ<sup>い</sup>で<sup>い</sup>す<sup>い</sup>から、愛<sup>あい</sup>する<sup>す</sup>人<sup>ひと</sup>たち、い<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>も<sup>も</sup>従<sup>じゆう</sup>順<sup>じゆん</sup>であ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に、私<sup>わたし</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>とき<sup>とき</sup>だ<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>で<sup>で</sup>なく、私<sup>わたし</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ない<sup>ない</sup>今<sup>いま</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>お<sup>お</sup>さ<sup>さ</sup>ら、恐<sup>おそ</sup>れ<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の救<sup>きう</sup>いの<sup>の</sup>達<sup>たつ</sup>成<sup>せい</sup>に<sup>に</sup>努<sup>な</sup>め<sup>め</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>い。

13 神<sup>しん</sup>は、み<sup>み</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>に、あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>に働<sup>はたら</sup>いて「志<sup>こころざし</sup>」を<sup>を</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>さ<sup>さ</sup>せ、事<sup>こと</sup>を行<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>で<sup>で</sup>す。

14 す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を、つ<sup>つ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>や<sup>や</sup>か<sup>か</sup>ず、疑<sup>うたが</sup>わ<sup>わ</sup>ず<sup>ず</sup>に行<sup>い</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>い。

15 そ<sup>ひ</sup>れ<sup>い</sup>は、あ<sup>ひ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>が、非<sup>ひ</sup>難<sup>なん</sup>さ<sup>さ</sup>れる<sup>る</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>ない<sup>ない</sup>純<sup>じゆん</sup>真<sup>しん</sup>な<sup>な</sup>者<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>なり、ま<sup>ま</sup>た、曲<sup>じやく</sup>が<sup>が</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>邪<sup>じゃ</sup>悪<sup>あく</sup>な<sup>な</sup>世<sup>せい</sup>代<sup>だい</sup>の中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>傷<sup>きず</sup>の<sup>の</sup>ない<sup>ない</sup>神<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>なり、

16 い<sup>に</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>ば<sup>ば</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>かり<sup>かり</sup>握<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>て、彼<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>間<sup>かん</sup>で<sup>で</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>光<sup>かが</sup>とし<sup>し</sup>て<sup>て</sup>輝<sup>かが</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>で<sup>で</sup>す。そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>す<sup>す</sup>れ<sup>れ</sup>ば、私<sup>わたし</sup>は、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>努<sup>な</sup>力<sup>りき</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>む<sup>む</sup>だ<sup>だ</sup>で<sup>で</sup>は<sup>は</sup>なく、苦<sup>く</sup>労<sup>らう</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>む<sup>む</sup>だ<sup>だ</sup>で<sup>で</sup>な<sup>な</sup>かつ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を、キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>トの<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>に<sup>に</sup>誇<sup>ほこ</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>す。

17 た<sup>しん</sup>とい<sup>こう</sup>私<sup>そな</sup>が、あ<sup>しん</sup>なた<sup>こう</sup>が<sup>そな</sup>た<sup>もの</sup>の<sup>もの</sup>信<sup>しん</sup>仰<sup>かう</sup>の<sup>の</sup>供<sup>く</sup>え<sup>え</sup>物<sup>ぶつ</sup>と<sup>と</sup>礼<sup>らい</sup>拝<sup>はい</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>に、<sup>そな</sup>11 注<sup>しゆ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>の<sup>の</sup>供<sup>く</sup>え<sup>え</sup>物<sup>ぶつ</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>ても、私<sup>わたし</sup>は<sup>は</sup>喜<sup>き</sup>び<sup>び</sup>ま<sup>ま</sup>す。あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>に<sup>に</sup>喜<sup>き</sup>び<sup>び</sup>ま<sup>ま</sup>す。

18 あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>も<sup>も</sup>同<sup>どう</sup>じ<sup>じ</sup>よう<sup>よう</sup>に<sup>に</sup>喜<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>く<sup>く</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>い。私<sup>わたし</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>喜<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>く<sup>く</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>い。

19 し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>し、私<sup>わたし</sup>もあ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を知<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>励<sup>はげ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>受<sup>う</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>で、早<sup>はや</sup>く<sup>く</sup>テ<sup>て</sup>モ<sup>も</sup>テ<sup>て</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>送<sup>おく</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>と、主<sup>しゅ</sup>イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>スに<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>望<sup>のぞ</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

20 テ<sup>て</sup>モ<sup>も</sup>テ<sup>て</sup>の<sup>の</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>私<sup>わたし</sup>と<sup>と</sup>同<sup>どう</sup>じ<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>にな<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て、真<sup>ま</sup>実<sup>じつ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>心<sup>こころ</sup>配<sup>はい</sup>して<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>は、ほ<sup>ほ</sup>か<sup>か</sup>に<sup>に</sup>だ<sup>だ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>ない<sup>ない</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>で<sup>で</sup>す。

21 だ<sup>だ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>み<sup>み</sup>な<sup>な</sup>自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>自<sup>じ</sup>身<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>求<sup>もと</sup>め<sup>め</sup>る<sup>る</sup>だ<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>で、キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>ト・イ<sup>い</sup>エ<sup>え</sup>スの<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>求<sup>もと</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ん。

22 し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>し、テ<sup>て</sup>モ<sup>も</sup>テ<sup>て</sup>の<sup>の</sup>12 子<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>父<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>仕<sup>し</sup>え<sup>え</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>て、彼<sup>かれ</sup>は<sup>は</sup>私<sup>わたし</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>福<sup>ふく</sup>音<sup>いん</sup>に<sup>に</sup>奉<sup>ほう</sup>仕<sup>し</sup>て<sup>て</sup>来<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。

23 で<sup>で</sup>す<sup>す</sup>から、私<sup>わたし</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>か<sup>か</sup>が<sup>が</sup>わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>だ<sup>だ</sup>い、彼<sup>つか</sup>を<sup>を</sup>遭<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>望<sup>のぞ</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

24 し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>私<sup>わたし</sup>自<sup>じ</sup>身<sup>しん</sup>も<sup>も</sup>近<sup>かく</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>と、主<sup>は</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>確<sup>かく</sup>信<sup>しん</sup>して<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

25 し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>し、私<sup>わたし</sup>の<sup>の</sup>兄<sup>きゆう</sup>弟<sup>てい</sup>、同<sup>どう</sup>労<sup>らう</sup>者<sup>しや</sup>、戦<sup>せん</sup>友<sup>ゆう</sup>、ま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>13 使<sup>し</sup>者<sup>しや</sup>とし<sup>し</sup>て<sup>て</sup>私<sup>わたし</sup>の<sup>の</sup>窮<sup>きゆう</sup>乏<sup>ぼう</sup>の<sup>の</sup>とき<sup>とき</sup>に<sup>に</sup>仕<sup>し</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>人<sup>じん</sup>エ<sup>え</sup>パ<sup>ぱ</sup>フ<sup>ふ</sup>ロ<sup>ろ</sup>デ<sup>で</sup>ト<sup>と</sup>は、あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>送<sup>おく</sup>ら<sup>ら</sup>ね<sup>ね</sup>ば<sup>ば</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ない<sup>い</sup>と思<sup>おも</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

26 彼<sup>かれ</sup>は、<sup>した</sup>14 あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>を<sup>を</sup>慕<sup>もと</sup>い<sup>い</sup>求<sup>もと</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>り、ま<sup>ま</sup>た、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の<sup>の</sup>病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>に<sup>に</sup>伝<sup>でん</sup>わ<sup>わ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>氣<sup>き</sup>に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>で<sup>で</sup>す。

27 ほ<sup>ほ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>に、彼<sup>かれ</sup>は<sup>は</sup>死<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ほ<sup>ほ</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>病<sup>びやう</sup>氣<sup>き</sup>に<sup>に</sup>か<sup>か</sup>かり<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>が、神<sup>しん</sup>は<sup>は</sup>彼<sup>かれ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>く<sup>く</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。彼<sup>かれ</sup>ば<sup>ば</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>で<sup>で</sup>なく<sup>く</sup>私<sup>わたし</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>ん<sup>ん</sup>で、私<sup>わたし</sup>にと<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>悲<sup>かな</sup>し<sup>し</sup>み<sup>み</sup>に<sup>に</sup>悲<sup>かな</sup>し<sup>し</sup>み<sup>み</sup>が<sup>が</sup>重<sup>おも</sup>なる<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>ない<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>だ<sup>だ</sup>さ<sup>さ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。

28 そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>で、私<sup>わたし</sup>は<sup>は</sup>大<sup>だい</sup>急<sup>きつ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup>彼<sup>かれ</sup>を<sup>を</sup>送<sup>おく</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>す。あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>彼<sup>かれ</sup>に<sup>に</sup>再<sup>ふた</sup>び<sup>び</sup>会<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>喜<sup>き</sup>び、私<sup>わたし</sup>も<sup>も</sup>心<sup>こころ</sup>配<sup>はい</sup>が<sup>が</sup>少<sup>すく</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>なる<sup>る</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>で<sup>で</sup>す。

29 ですから、喜びにあふれて、主にあつて、彼<sup>むか</sup>を迎えてください。また、彼のような人々には尊敬<sup>そんけい</sup>を払いなさい。

30 なぜなら、彼は、キリストの仕事のために、いのちの危険<sup>きけん</sup>を冒<sup>おか</sup>して死ぬばかりになったからです。彼は私に対して、あなたがたが私に仕えることのできなかつた分を果たそうとしたのです。

### 三章

1 最後に、私の兄弟たち。主にあって<sup>15</sup>喜びなさい。前と同じことを書きますが、これは、私には煩わしいことではなく、あなたがたの安全のためにもなることです。

2 どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼<sup>かつれい</sup>の者に気をつけてください。

3 神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、<sup>16</sup>人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼<sup>かつれい</sup>の者なのです。

4 ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると  
思うなら、私は、それ以上です。

5 私は八日目の割礼<sup>かつれい</sup>を受け、イスラエル民族<sup>みんぞく</sup>に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法<sup>りつぽう</sup>についてはパリサイ人、

6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義<sup>ぎ</sup>についてならば非難<sup>ひなん</sup>されるところのない者です。

7 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損<sup>そん</sup>と思うようになりました。

8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損<sup>そん</sup>と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、

9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義<sup>ぎ</sup>ではなくて、キリストを信じる信仰による義<sup>ぎ</sup>、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義<sup>ぎ</sup>を持つことができる、という望みがあるからです。

10 私は、キリストとその復活<sup>ふつかつ</sup>の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態<sup>じょうたい</sup>になり、

11 どうにかして、死者の中からの復活<sup>ふつかつ</sup>に達したいのです。

12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。<sup>17</sup>そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。

13 兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、

14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠<sup>えいかん</sup>を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

15 ですから、<sup>18</sup>成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。

16 それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準<sup>きじゆん</sup>として、進むべきです。

17 兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。

18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙<sup>なみだ</sup>をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。

19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの<sup>19</sup>欲望<sup>よくぼう</sup>であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥<sup>はじ</sup>なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

20 けれども、私たちの国籍<sup>こくせき</sup>は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力<sup>みちから</sup>によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。



## 四章

- 1 そういうわけですから、私の愛し慕う兄弟たち、私の喜び、冠<sup>かんむり</sup>よ。どうか、このように主にあつてしっかりと立ってください。私の愛する人たち。
- 2 ユウオデヤに勧め<sup>すす</sup>め、スントケに勧め<sup>すす</sup>めます。あなたがたは、主にあつて一致<sup>いつち</sup>してください。
- 3 ほんとうに、真<sup>しん</sup>の<sup>20</sup>協力者<sup>たの</sup>よ。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください。この人たちは、いのちの書に名のしるされているクレメンスや、そのほかの私の同労者たちとともに、福音を広めることで私に協力して戦ったのです。
- 4 いつも主にあつて喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。
- 5 あなたがたの寛容<sup>かんよう</sup>な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。
- 6 何も思い煩<sup>おも</sup>わな<sup>わ</sup>ないで、あらゆる場合に、感謝<sup>かんしゃ</sup>をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。
- 7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。
- 8 最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉<sup>ほま</sup>れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての<sup>21</sup>評判<sup>ひやうばん</sup>の良いこと、そのほか徳<sup>とく</sup>と言われること、称賛<sup>しょうさん</sup>に値<sup>あた</sup>いすることがあるならば、そのようなことに心を留<sup>と</sup>めなさい。
- 9 あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行<sup>き</sup>しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。
- 10 私のことを心配してくれるあなたがたの心が、このたびついによみがえて来たことを、私は主にあつて非常に喜びました。あなたがたは心にかけてはいたのですが、機会<sup>ひじょう</sup>がなかったのです。
- 11 乏しいからこう言うではありません。私は、どんな境遇<sup>きやうぐう</sup>にあつても満ち足りることを学びました。
- 12 私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽く<sup>あ</sup>くことにしも飢えることにも、富む<sup>と</sup>くことにしも乏しいことにも、あらゆる境遇<sup>きやうぐう</sup>に対処<sup>たいしよ</sup>する秘訣<sup>ひけつ</sup>を心得ています。
- 13 私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。
- 14 それにしても、あなたがたは、よく私と困難<sup>こんなん</sup>を分け合ってくれました。
- 15 ビリビの人たち。あなたがたも知っているとおり、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行つたときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。
- 16 テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏<sup>とぼ</sup>しさを補<sup>おぎな</sup>ってくれました。
- 17 私は贈り物を求めているわけではありません。私のほしいのは、あなたがたの収支<sup>しゆうし</sup>を償<sup>つぐな</sup>わせて余りある<sup>あま</sup><sup>22</sup>霊<sup>れい</sup>的<sup>てき</sup>祝福<sup>しよくふく</sup>なのです。
- 18 私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エバフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであつて、神が喜んで受けてくださる供え物<sup>そな</sup>です。
- 19 また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光<sup>とうみ</sup>の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。
- 20 どうか、私たちの父なる神に御栄え<sup>みさか</sup>がとこしえにありますように。アーメン。
- 21 キリスト・イエスにある聖徒<sup>せいと</sup>のひとりひとりに、よろしく伝えてください。私といっしょにいる兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。
- 22 聖徒<sup>せいと</sup>たち全員が、そして特に、カイザルの家に属<sup>ぞく</sup>する人々が、よろしくと言っています。
- 23 どうか、主イエス・キリストの恵<sup>めぐ</sup>みが、あなたがたの霊<sup>れい</sup>とともにありますように。

- 1 別訳「福音にあずかって」
- 2 別訳「異なっているものを区別する」
- 3 直訳「のために」
- 4 別訳「総督官邸」
- 5 異本 一六節と一七節を入れ替えたものがある
- 6 あるいは「恥を受けることなく」
- 7 別訳「もし肉体において生きることが私にとって実り多い働きとなるとしたら、私はどちらを選んだらよいのか」
- 8 別訳「御国の民の生活をしてください」
- 9 あるいは「党派心」
- 10 すなわち「特権を主張されずに」
- 11 別訳「灌祭」
- 12 直訳「適格性」
- 13 直訳「使徒」ギリシヤ語「アポストロス」
- 14 異本「あなたがたすべてを見ることを願い求めており」
- 15 別訳「ごきげんよう」
- 16 直訳「肉を」
- 17 別訳「なぜなら...捕らえてくださったからです」
- 18 別訳「完全」
- 19 直訳「腹」
- 20 別訳「スズゴス（人名）」
- 21 あるいは「良いと言われるもの」
- 22 直訳「果実」

# コロサイ人への手紙

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒<sup>し と</sup>パウロ、および兄弟<sup>ちゆうじつ</sup>テモテから、
- 2 コロサイにいる聖徒<sup>せい と</sup>たちで、キリストにある忠実な兄弟<sup>ちゆうじつ</sup>たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- 3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り<sup>いの</sup>、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝<sup>かんしや</sup>しています。
- 4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰<sup>しんこう</sup>と、すべての聖徒<sup>せい と</sup>に対してあなたがたが抱えている愛<sup>あい</sup>のことを聞いたからです。
- 5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音<sup>ふくいん</sup>の真理<sup>まこと</sup>のことばの中で聞きました。
- 6 この福音<sup>ふくいん</sup>は、あなたがたが神の恵み<sup>めぐみ</sup>を聞き、それをほんとうに理解<sup>りかい</sup>したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢い<sup>いきおい</sup>をもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音<sup>ふくいん</sup>はそうにしてあなたがたに届いたのです。
- 7 これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は<sup>2</sup>私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人<sup>つかひと</sup>であって、
- 8 私たちに、御霊<sup>みたま</sup>によるあなたがたの愛<sup>あい</sup>を知らせてくれました。
- 9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力<sup>しん</sup>によって、神のみこころに関する真の知識<sup>しん</sup>に満たされますように。
- 10 また、主になつた歩み<sup>せい と</sup>をして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行<sup>ぜんこう</sup>のうちに実を結び、神を知る知識<sup>ちしき</sup>を増し加えられますように。
- 11 また、神の栄光ある権能<sup>けんのう</sup>に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容<sup>しんたい</sup>を尽くし、
- 12 また、光の中にある、聖徒<sup>せい と</sup>の相続分<sup>そうぞくぶん</sup>にあずかる資格<sup>しかく</sup>を私たちに与えてくださった父なる神に、<sup>4</sup>喜びをもって感謝をささげることができますように。
- 13 神は、私たちを暗やみの圧制<sup>あつせい</sup>から救い出して、愛する御子<sup>あい</sup>のご支配<sup>みこ</sup>の中に移してくださいました。
- 14 この御子<sup>みこ</sup>のうちにあって、私たちは、贖い<sup>あがな</sup>、すなわち罪の赦し<sup>あがな</sup>を得ています。
- 15 御子<sup>みこ</sup>は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。
- 16 なぜなら、万物は御子<sup>ばんぶつ</sup>にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も權威も、すべて御子<sup>みこ</sup>によって造られたのです。万物は、御子<sup>みこ</sup>によって造られ、御子<sup>みこ</sup>のために造られたのです。
- 17 御子<sup>みこ</sup>は、万物よりも先に存在し、万物は御子<sup>ばんぶつ</sup>にあって成り立っています。
- 18 また、御子<sup>みこ</sup>はそのからだである教会のかしらです。御子<sup>みこ</sup>は初めてであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。
- 19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質<sup>ほんしつ</sup>を御子のうちに宿らせ、
- 20 その十字架<sup>じゆうじか</sup>の血によって平和をつくり、御子<sup>みこ</sup>によって万物を、御子<sup>みこ</sup>のために和解<sup>わかい</sup>させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子<sup>みこ</sup>によって<sup>5</sup>和解<sup>わかい</sup>させてくださったのです。
- 21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵<sup>はな</sup>となつて、悪い行いの中にあつたのですが、
- 22 今は神は、御子<sup>みこ</sup>の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解<sup>わかい</sup>させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難<sup>きよ</sup>されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。
- 23 ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音<sup>ふくいん</sup>の望みからはずれることなく、信仰<sup>しんこう</sup>に踏みとどまらなければなりません。この福音<sup>ふくいん</sup>は、天の下すべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、<sup>6</sup>このパウロはそれに仕える者となつたのです。
- 24 ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、

私の身をもつて、キリストの苦しみの欠けたところを<sup>7</sup>満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。

25 私は、あなたがたのために神からゆだねられた務<sup>つと</sup>めに従<sup>したが</sup>って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。

26 これは、多くの世代にわたって隠<sup>かく</sup>されていて、いま神の聖徒<sup>せいと</sup>たちに現<sup>あらわ</sup>された奥義<sup>おくぎ</sup>なのです。

27 神は聖徒<sup>せいと</sup>たちに、この奥義<sup>おくぎ</sup>が異邦<sup>いほう</sup>人の間にあつてどのように栄光<sup>えいこう</sup>に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義<sup>おくぎ</sup>とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。

28 私たちは、このキリストを宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>え、知恵<sup>ちえ</sup>を尽くして、あらゆる人を戒<sup>つ</sup>め、あらゆる人を教<sup>いまし</sup>えています。それは、すべての人を、キリストに<sup>8</sup>ある成人として立たせるためです。

29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの<sup>9</sup>力によって、労苦しながら奮闘<sup>ふんどう</sup>しています。

## 二章

1 あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。

2 それは、この人たちが心に励ましを受け、愛によって結び合わされ、理解をもって豊かな全き確信に達し、神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。

3 このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。

4 私がこう言うのは、だれもまことしやかな議論によって、あなたがたをあやまちに導くことのないためです。

5 私は、肉体においては離れていても、霊においてはあなたがたといっしょにいて、あなたがたの秩序とキリストに対する堅い信仰とを見て喜んでいます。

6 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあつて歩みなさい。

7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、<sup>10</sup>あふれるばかり感謝しなさい。

8 あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の<sup>11</sup>幼稚な教えによるものであつて、キリストによるものではありません。

9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。

10 そしてあなたがたは、キリストにあつて、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。

11 キリストにあつて、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。

12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。

13 あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であつたのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、

14 いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。<sup>12</sup>神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。

15 神は、<sup>13</sup>キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。

16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。

17 これらは、次に来るものの影であつて、本体はキリストにあるのです。

18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようしたり、御使い礼拝をしようとする者に、<sup>14</sup>ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによつていたずらに誇り、

19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとなり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。

20 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の<sup>15</sup>幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、

21 「すぎるな。味うな。さわるな」というような定め<sup>16</sup>に縛られるのですか。

22 そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであつて、人間の戒めと教えによるものです。

23 そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。

### 三章

- 1 こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。  
そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。
- 2 あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。
- 3 あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
- 4 <sup>16</sup> 私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。
- 5 ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。
- 6 このようなことのために、神の怒りが<sup>17</sup>下るのです。
- 7 あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。
- 8 しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥すべきことばを、捨ててしまいなさい。
- 9 互いに偽りを言ってはけません。あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて、
- 10 新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。
- 11 そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。
- 12 それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。
- 13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦しにくださったように、あなたがたもそうしなさい。
- 14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は<sup>18</sup>結びの帯として完全なものです。
- 15 キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。
- 16 <sup>19</sup> キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、<sup>20</sup>感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。
- 17 あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。
- 18 妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。
- 19 夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはけません。
- 20 子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。
- 21 父たちよ。子どもを<sup>21</sup>おこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。
- 22 奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。人のごきげんのような、うわべだけの仕方ではなく、主を恐れかしこみつつ、真心から従いなさい。
- 23 何をするにも、人に対してではなく、主に對してするように、心からしなさい。
- 24 あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。
- 25 不正を行う者は、自分が行った不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。

## 四章

1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平<sup>せいぎ こうへい</sup>を示しなさい。

2 目をさまして、感謝<sup>かんしゃ</sup>をもって、たゆみなく祈りなさい。

3 同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義<sup>おくぎ</sup>を語れるように、祈ってください。この奥義<sup>おくぎ</sup>のために、私は牢<sup>ろう</sup>に入れられています。

4 また、私がこの奥義<sup>おくぎ</sup>を、当然語るべき語り方で、はっきり語れるように、祈ってください。

5 外部の人に対して賢明<sup>けんめい</sup>にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。

6 あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。

7 私の様子<sup>ようす</sup>については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたに一部始終<sup>しじう</sup>を知らせるでしょう。

8 私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子<sup>ようす</sup>を知り、彼によって心に励まし<sup>はげ</sup>を受けるためにほかなりません。

9 また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子<sup>ようす</sup>をみな知らせてくれるでしょう。

10 私といっしょに囚人<sup>しゆうじん</sup>となっているアリストアルコが、あなたがたによろしくと言っています。バルナバのいとこであるマルコも同じです——この人については、もし彼があなたがたのところにいったなら、歓迎<sup>かんげい</sup>するようにという指示<sup>し</sup>をあなたがたは受けています。——

11 ユストと呼ばれるイエスもよろしくと言っています。割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者<sup>どうろうしや</sup>です。また、彼らは私を激励<sup>げきれい</sup>する者となってくれました。

12 あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信<sup>かくしん</sup>して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。

13 私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞<sup>ひじよう</sup>しています。

14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。

15 どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、また<sup>22</sup>ヌンバと<sup>23</sup>その家にある教会に、よろしく言ってください。

16 この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。

17 アルキボに、「主にあって受けた務めを、注意<sup>つと</sup>してよく果たすように」と言ってください。

18 パウロが自筆<sup>みづか</sup>であいさつを送ります。私が牢<sup>ろう</sup>につながれていることを覚えていてください。どうか、恵みがあなたがたとともにありますように。



- 1 別訳「この福音は、あなたがたに届いているものです。福音は世界中で実を結び成長しているように、あなたがたの間でも...あなたがたが...とき以来そうなのです」
- 2 異本「あなたがたが」
- 3 あるいは「によって成長しますように」
- 4 別訳「喜びをもって」を一一節の「忍耐...」の前に挿入する
- 5 「和解」以下は補足
- 6 直訳「私、パウロ」
- 7 別訳「代表して満たしています」「満たすために私の分を果たしています」
- 8 別訳「あつて完全な者」
- 9 あるいは「働き」
- 10 異本「信仰において」または「キリストにおいて」を挿入
- 11 別訳「靈力」
- 12 別訳「キリスト」
- 13 別訳「十字架」
- 14 別訳「ほうびについて...あなたがたに対する不利な批評をさせては」
- 15 別訳「靈力」
- 16 異本「あなたがたの」
- 17 異本「不従順の子らの上に」を加える
- 18 別訳「すべての徳を結び合わせる」
- 19 異本「主」または「神」
- 20 別訳「（神の）恵みにあふれて」
- 21 異本「いらだたせては」
- 22 あるいは「ヌンパス（男性）」
- 23 異本「彼らの」

# テサロニケ人への手紙第一

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

1 パウロ、シルワノ、テモテから、父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。<sup>めぐ</sup>恵みと平安があなたがたの上にありますように。

2 私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝し、<sup>かんしや</sup>祈りの<sup>いの</sup>ときにあなたがたを覚え、

3 絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の<sup>しんこう</sup>働き、<sup>あい</sup>愛の<sup>あい</sup>労苦、主イエス・キリストへの望みの<sup>にんたい</sup>忍耐を思い起こしています。

4 神に愛されている兄弟たち。あなたがたが神に選ばれた者であることは私たちが知っています。

5 なぜなら、私たちの福音があなたがたに伝えられたのは、ことばだけによつたのではなく、力と聖霊と強い確信とによつたからです。また、私たちがあなたがたのところで、あなたがたのために、どのようにふるまつたかは、あなたがたが知っています。

6 あなたがたも、多くの苦難の中で、<sup>くなん</sup>聖霊<sup>せいれい</sup>による喜びをもつてみことばを受け入れ、私たちと主にならう者になりました。

7 こうして、あなたがたは、マケドニヤとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。

8 主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。

9 私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、

10 また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

## 二章

1 兄弟たち。あなたがたが知っているとおり、私たちがあなたがたのところに行ったことは、むだではありませんでした。

2 ご承知のように、私たちはまずピリビで苦しみ会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました。

3 私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません。

4 私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。

5 ご存じのとおり、私たちは今まで、へつらいのこたばを用いたり、むさぼりの口実を設けたりしたことはありません。神がそのことの証人です。

6 また、キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名誉を受けようとはしませんでした。

7 それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、<sup>1</sup>優しくふるまいました。

8 このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。

9 兄弟たち。あなたがたは、私たちの労苦と苦闘を覚えているでしょう。私たちはあなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。

10 また、信者であるあなたがたに対して、私たちが敬虔に、正しく、また責められるところがないようにふるまったことは、あなたがたがあかしし、神もあかししてくださることです。

11 また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、

12 ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、<sup>2</sup>おごそかに命じました。

13 こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のこたばを受けたとき、それを人間のこたばとしてではなく、事実どおりに神のこたばとして受け入れてくれたからです。この神のこたばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。

14 兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会にならう者となったのです。彼らがユダヤ人に苦しめられたのと同じように、あなたがたも自分の国の人々に苦しめられたのです。

15 ユダヤ人は、主であられるイエスをも、預言者たちをも殺し、また私たちをも追い出し、神に喜ばれず、すべての人の敵となっています。

16 彼らは、私たちが異邦人の救いのために語るのを妨げ、このようにして、いつも自分の罪を満たしています。しかし、御怒りは彼らの上に臨んで窮みに達しました。

17 兄弟たちよ。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されたので——といっても、顔を見ないだけで、心においてではありませんが、——なおさらのこと、あなたがたの顔を見たいと切に願っていました。

18 <sup>3</sup>それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました。

19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。

20 あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです。

## 三章

- 1 そこで、私たちはもはやがまんできなくなり、私たちだけがアテネにとどまることにして、
- 2 私たちの兄弟であり、キリストの福音において神の<sup>4</sup>同<sup>ふく</sup>労<sup>いん</sup>者<sup>しや</sup>であるテモテを遣<sup>どう</sup>わしたのです。それは、あなたがたの<sup>しんこう</sup>信仰<sup>しんこう</sup>についてあなたがたを強<sup>はげ</sup>め励<sup>はげ</sup>まし、
- 3 このような<sup>くなん</sup>苦難<sup>くなん</sup>の中<sup>どうよう</sup>にあつても、動揺<sup>どうよう</sup>する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っている<sup>くなん</sup>とおり、私たちはこのような苦難<sup>くなん</sup>に会うように定められているのです。
- 4 あなたがたのところ<sup>しんこう</sup>にいたとき、私たちは苦難<sup>しんこう</sup>に会うようになる、と前もって言<sup>ち</sup>つておいたのですが、それが、ご承<sup>しやう</sup>知<sup>ち</sup>のとおり、はたして事<sup>じ</sup>実<sup>じ</sup>となつたのです。
- 5 そうい<sup>ゆう</sup>うわけ<sup>ゆう</sup>で、私も、あれ以上はがまんできず、また誘惑<sup>ゆうわく</sup>者があなたがたを誘惑<sup>ゆうわく</sup>して、私たちの労苦<sup>しんこう</sup>がむだになるようなことがあつてはいけないと思<sup>しんこう</sup>つて、あなたがたの信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>を知るために、彼を遣<sup>つ</sup>わしたのです。
- 6 ところが、今テモテがあなたがたのところから私<sup>しんこう</sup>たちのもとに帰<sup>しんこう</sup>つて来<sup>あ</sup>て、あなたがたの信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>と愛<sup>あい</sup>につ<sup>しんこう</sup>いて良<sup>しんこう</sup>い知<sup>しんこう</sup>らせをもた<sup>しんこう</sup>らしてくれまし<sup>しんこう</sup>た。また、あなたがたが、いつも私<sup>しんこう</sup>たちのことを親<sup>しんこう</sup>切<sup>こう</sup>に考<sup>しんこう</sup>えてい<sup>しんこう</sup>て、私<sup>しんこう</sup>たちがあなたがたに会<sup>しんこう</sup>いた<sup>しんこう</sup>いと思<sup>しんこう</sup>うよう<sup>しんこう</sup>に、あなたがたも、しきりに私<sup>しんこう</sup>たちに会<sup>しんこう</sup>いた<sup>しんこう</sup>がつてい<sup>しんこう</sup>ることを、知<sup>しんこう</sup>らせてくれまし<sup>しんこう</sup>た。
- 7 このようなわけ<sup>なぐさ</sup>で、兄弟<sup>なぐさ</sup>たち。私<sup>なぐさ</sup>たちはあらゆる苦<sup>かん</sup>しみと患<sup>なん</sup>難<sup>なん</sup>のうちにも、あなたがたのことでは、その信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>によつて、慰<sup>なぐさ</sup>めを受けまし<sup>なぐさ</sup>た。
- 8 あなたがたが主<sup>かた</sup>にあつて堅<sup>かた</sup>く立<sup>かた</sup>つていてくれるなら、私<sup>かた</sup>たちは今<sup>かた</sup>、生<sup>かた</sup>きが良<sup>かた</sup>いがあります。
- 9 私<sup>かた</sup>たちの神<sup>かた</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まえ</sup>にあつて、あなたがたのこ<sup>み</sup>とで喜<sup>み</sup>んでい<sup>み</sup>る私<sup>み</sup>たち<sup>み</sup>のこのすべ<sup>み</sup>ての喜<sup>み</sup>び<sup>み</sup>のため<sup>み</sup>に、神<sup>かん</sup>にど<sup>かん</sup>んな感<sup>かん</sup>謝<sup>しや</sup>をさ<sup>かん</sup>さげたら良<sup>かん</sup>い<sup>しや</sup>でし<sup>かん</sup>よう。
- 10 私<sup>しんこう</sup>たちは、あなたがたの顔<sup>しんこう</sup>を見<sup>しんこう</sup>たい、信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>の不<sup>お</sup>足<sup>そな</sup>を補<sup>お</sup>いた<sup>い</sup>いと、昼<sup>い</sup>も夜<sup>い</sup>も熱<sup>い</sup>心<sup>い</sup>に祈<sup>い</sup>つていま<sup>い</sup>す。
- 11 どうか、私<sup>しんこう</sup>たちの父<sup>しんこう</sup>なる神<sup>しんこう</sup>であり、また私<sup>しんこう</sup>たちの主<sup>お</sup>イエ<sup>お</sup>スである方<sup>い</sup>ご自<sup>い</sup>身<sup>い</sup>が、私<sup>い</sup>たちの道<sup>い</sup>を開<sup>い</sup>いて、あなたがたの<sup>い</sup>ところに行<sup>い</sup>か<sup>い</sup>せてくだ<sup>い</sup>さいま<sup>い</sup>すよう<sup>い</sup>に。
- 12 また、私<sup>たが</sup>たちがあなたがたを愛<sup>あ</sup>してい<sup>あ</sup>るよう<sup>あ</sup>に、あなたがたの互<sup>あ</sup>いの間<sup>あ</sup>の愛<sup>あ</sup>を、またすべ<sup>あ</sup>ての人<sup>あ</sup>に對<sup>あ</sup>する愛<sup>あ</sup>を増<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>せ、満<sup>あ</sup>ちあ<sup>あ</sup>ふれさ<sup>あ</sup>せてくだ<sup>あ</sup>さいま<sup>あ</sup>すよう<sup>あ</sup>に。
- 13 また、あなたがたの心<sup>せい</sup>を強<sup>せい</sup>め、私<sup>ふた</sup>たちの主<sup>ふた</sup>イエ<sup>ふた</sup>スがご自<sup>せい</sup>分のすべ<sup>ふた</sup>ての聖<sup>せい</sup>徒<sup>と</sup>ととも<sup>せい</sup>に再<sup>ふた</sup>び来<sup>ふた</sup>られるとき、私<sup>せい</sup>たちの父<sup>せい</sup>なる神<sup>せい</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まえ</sup>で、聖<sup>きよ</sup>く、責<sup>せ</sup>められるところのない者<sup>きよ</sup>としてくだ<sup>きよ</sup>さいま<sup>きよ</sup>すよう<sup>きよ</sup>に。

## 四章

1 終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあつて、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。

2 私たちが、主イエスによって、どんな命令をあなたがたに授けたかを、あなたがたは知っています。

3 神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、

4 各自わきまえて、自分の<sup>5</sup>からだを、聖く、また 尊く保ち、

5 神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、

6 また、このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしないことです。なぜなら、主はこれらすべてのことについて正しくさばかれるからです。これは、私たちが前もってあなたがたに話し、きびしく警告しておいたところです。

7 神が私たちを召されたのは、汚れを行わせるためではなく、聖潔を得させるためです。

8 ですから、このことを拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたに聖霊をお与えになる神を拒むのです。

9 兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちからです。

10 実にマケドニア全土のすべての兄弟たちに対して、あなたがたはそれを実行しています。しかし、兄弟たち。あなたがたにお勧めします。どうか、さらにますますそうであってください。

11 また、私たちが命じたように、落ち着いた生活することを 志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい。

12 外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。

13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。

14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。

15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。

16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

## 五章

1 兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。

2 主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく 承知しているからです。

3 人々が「平和だ。安全だ」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。

4 しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。

5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。

6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、 慎み深くしていきましょう。

7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。

8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、 慎み深くしていきましょう。

9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあつて救いを得るようにお定めになったからです。

10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。

11 ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。

12 兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。

13 その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。

14 兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。

15 だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。

16 いつも喜んでいなさい。

17 絶えず祈りなさい。

18 すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです。

19 御霊を消してはなりません。

20 預言をないがしろにははいけません。

21 しかし、すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。

22 悪はどんな悪でも避けなさい。

23 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだが完全に守られますように。

24 あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしていただきます。

25 兄弟たち。私たちのために<sup>6</sup>も祈ってください。

26 すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつをなさい。

27 この手紙がすべての兄弟たちに読まれるように、主によって命じます。

28 私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。

- 1 異本「また、子どものように」
- 2 別訳「あかししました」
- 3 別訳「なぜなら、...行こうとしたからです」
- 4 異本「しもべ」
- 5 別訳「妻」
- 6 異本「...もまた」



# テサロニケ人への手紙第二

[一章](#) [二章](#) [三章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 パウロ、シルワノ、テモテから、私たちの父なる神および主イエス・キリストにあるテサロニケ人の教会へ。
- 2 父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- 3 兄弟たち。あなたがたのことに、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。そうするのが当然なのです。なぜならあなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増加わっているからです。
- 4 それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその<sup>1</sup>従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。
- 5 このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。
- 6 つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、
- 7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、<sup>2</sup>力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。
- 8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。
- 9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。
- 10 その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の——そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです——感嘆的となられます。
- 11 そのためにも、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか、私たちの神が、あなたがたをお召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を慕うあらゆる願いと信仰の働きとを全うしてくださいますように。
- 12 それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあって栄光を受けるためです。

## 二章

- 1 さて兄弟たちよ。私たちの主イエス・キリストが再び来られることと、私たちが主のみもとに集められることに  
関して、あなたがたにお願いすることがあります。
- 2 霊によってでも、あるいはことばによってでも、あるいは私たちから出たかのような手紙によってでも、主の日が  
すでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。
- 3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、<sup>3</sup>不法の人、すなわち滅  
びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。
- 4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設  
け、自分こそ神であると宣言します。
- 5 私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことをよく話しておいたのを思い出しませんか。
- 6 あなたがたが知っているとおりに、彼がその定められた時に現れるようにと、いま引き止めているものがあるの  
です。
- 7 不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めている  
のです。
- 8 その時になると、不法の人が現れますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれ  
ます。
- 9 不法の人の<sup>4</sup>到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、
- 10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受  
け入れなかったからです。
- 11 それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。
- 12 それは、真理を信じないで、悪を<sup>5</sup>喜んでいたすべての者が、さばかれるためです。
- 13 しかし、あなたがたのことについては、私たちはいつでも神に感謝しなければなりません。主に愛されている兄  
弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、<sup>6</sup>初めから救いにお選びになったからで  
す。
- 14 ですから神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光を得させてくださっ  
たのです。
- 15 そこで、兄弟たち。堅く立って、私たちのことば、または手紙によって教えられた言い伝えを守りなさい。
- 16 どうか、私たちの主イエス・キリストと、私たちの父なる神、すなわち、私たちを愛し、恵みによって永遠の  
慰めとすばらしい望みとを与えてくださった方ご自身が、
- 17 あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように。

## 三章

1 終わりに、兄弟たちよ。私たちのために<sup>いの</sup>祈ってください。主のみことばが、あなたがたのところと同じように早く広まり、またあがめられますように。

2 また、私たちが、ひねくれた悪人どもの手から救い出されますように。すべての人が<sup>しんこう</sup>信仰を持っているのではないからです。

3 しかし、主は真実な方ですから、あなたがたを強くし、<sup>7</sup>悪い者から守ってくださいます。

4 私たちが命<sup>いのち</sup>じることを、あなたがたが現に実行しており、これからも実行してくれることを私たちは主<sup>かく</sup>にあつて確<sup>かく</sup>信<sup>しん</sup>しています。

5 どうか、主があなたがたの心<sup>みちび</sup>を導<sup>あひ</sup>いて、神の愛<sup>にんたい</sup>とキリストの忍耐<sup>にんたい</sup>を持たせてくださいますように。

6 兄弟たちよ。主イエス・キリストの御名<sup>みな</sup>によって命<sup>いのち</sup>じます。締め<sup>し</sup>まりのない歩み方をして<sup>8</sup>私たちから受けた言い伝えに従わないでいる、すべての兄弟たちから離れていなさい。

7 どのように私たちを見ならうべきかは、あなたがた自身が知っているのです。あなたがたのところで、私たちは締め<sup>し</sup>まりのないことはしなかったし、

8 人のパンをただで食べることもしませんでした。かえって、あなたがたのだれにも負担<sup>ふたん</sup>をかけまいとして、昼も夜も労苦しながら働き続けました。

9 それは、私たちに権利<sup>けんり</sup>がなかったからではなく、ただ私たちを見ならうようにと、身をもつてあなたがたに模範<sup>もはん</sup>を示<sup>しめ</sup>すためでした。

10 私たちは、あなたがたのところにいたときにも、働きたくない者は食べるなど命<sup>いのち</sup>じました。

11 ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締め<sup>し</sup>まりのない歩み方をしている人たちががあると聞いています。

12 こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命<sup>いのち</sup>じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。

13 しかしあなたがたは、たゆむことなく善<sup>ぜん</sup>を行いなさい。兄弟たちよ。

14 もし、この手紙に書いた私たちの指示<sup>しじ</sup>に従<sup>したが</sup>わない者があれば、そのような人には、特に注意<sup>ちゅうい</sup>を払い、交際<sup>こうさい</sup>しないようにしなさい。彼が恥<sup>は</sup>じ入<sup>い</sup>るようになるためです。

15 しかし、その人を敵<sup>てき</sup>とはみなさず、兄弟として戒<sup>いまし</sup>めなさい。

16 どうか、平和の主ご自身が、どんな場合にも、いつも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。どうか、主があなたがたすべてと、ともにおられますように。

17 パウロが自分の手であいさつを書きます。これは私のどの手紙にもあるしるしです。これが私の手紙の書き方です。

18 どうか、私たちの主イエス・キリストの恵<sup>めぐ</sup>みが、あなたがたすべてとともにありますように

- 1 あるいは「忍耐」
- 2 別訳「彼（主イエス）の御力の使い」
- 3 異本「罪の人」
- 4 あるいは「いることは」
- 5 あるいは「認めていた」
- 6 異本「初穂として」
- 7 あるいは「悪から」
- 8 異本「彼らが...受けた」

# テモテへの手紙第一

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)  
[六章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから、
- 2 信仰による真実のわが子テモテへ。父なる神と私たちの主なるキリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とがありますように。
- 3 私がマケドニアに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて、ある人たちが違った教えを説いたり、
- 4 果てしない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。
- 5 この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。
- 6 ある人たちはこの目当てを見失い、わき道にそれで無益な議論に走り、
- 7 律法の教師でありたいと望みながら、自分の言っていることも、また強く主張していることについても理解していません。
- 8 しかし私たちは知っています。律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです。
- 9 すなわち、律法は、正しい人のためにあるのではなく、律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、
- 10 不品行な者、男色をする者、人を誘拐する者、うそをつく者、偽証をする者などのため、またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです。
- 11 祝福に満ちた神の、栄光の福音によれば、こうなのであって、私はその福音をゆだねられたのです。
- 12 私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。
- 13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。
- 14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。
- 15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた」ということばは、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。
- 16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。
- 17 どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。
- 18 私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。
- 19 ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。
- 20 その中には、ヒメナオとアレキサンデルがいます。私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。

## 二章

- 1 そ<sup>はじ</sup>こ<sup>すす</sup>で、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願<sup>いの</sup>い、祈<sup>かんしや</sup>り、とりなし、感謝<sup>いげん</sup>がささげられるようにしなさい。
- 2 それは、私<sup>い</sup>たちが敬虔<sup>けいけん</sup>に、また、威厳<sup>いげん</sup>をもつて、平安で静かな一生<sup>す</sup>を過<sup>す</sup>ごすためです。
- 3 そうすることは、私たちの救<sup>み</sup>い主である神の御前<sup>みまえ</sup>において良いことであり、喜ばれることなのです。
- 4 神は、すべての人が救<sup>ゆい</sup>われて、真理<sup>いつ</sup>を知るようになるのを望<sup>ちゆうかいしや</sup>んでおられます。
- 5 神は唯一<sup>ゆいいつ</sup>です。また、神と人との間の仲介<sup>ちゆうかいしや</sup>者も唯一<sup>ゆいいつ</sup>であつて、それは人としてのキリスト・イエスです。
- 6 キリストは、すべての人の贖<sup>あがな</sup>いの代価<sup>だいにか</sup>として、ご自身をお与えになりました。これが時<sup>いた</sup>至<sup>いた</sup>つてなされたあかしなのです。
- 7 そのあかしのために、私<sup>せん</sup>は宣伝<sup>でんしや</sup>者<sup>し</sup>また使徒<sup>しと</sup>に任<sup>にん</sup>じられ——私<sup>しんこう</sup>は真実<sup>しんこう</sup>を言<sup>い</sup>つており、うそは言<sup>い</sup>いませ<sup>ん</sup>ん——信<sup>い</sup>仰<sup>ほう</sup>と真<sup>きよう</sup>理<sup>し</sup>を異邦<sup>いほう</sup>人に教<sup>きよう</sup>える教<sup>し</sup>師<sup>し</sup>とされま<sup>し</sup>た。
- 8 ですから、私<sup>い</sup>は願<sup>い</sup>うのです。男<sup>うやま</sup>は、怒<sup>うやま</sup>ったり言<sup>うやま</sup>い争<sup>うやま</sup>つたりすることなく、どこででもきよい手<sup>うやま</sup>を上げ<sup>うやま</sup>て祈<sup>うやま</sup>るよう<sup>うやま</sup>にしなさい。
- 9 同じように女<sup>うやま</sup>も、つつましい身<sup>うやま</sup>なりで、控<sup>ひか</sup>えめに慎<sup>つつし</sup>み深<sup>ふか</sup>く身<sup>かざ</sup>を飾<sup>かみ</sup>り、はでな髪<sup>かみ</sup>の形<sup>しんじゆ</sup>とか、金<sup>こう</sup>や真<sup>い</sup>珠<sup>ふく</sup>や高価<sup>いふく</sup>な衣<sup>い</sup>服<sup>ふく</sup>によつてではなく、
- 10 むしろ、神を敬<sup>うやま</sup>うと言<sup>うやま</sup>っている女<sup>うやま</sup>にふさわしく、良<sup>かざ</sup>い行<sup>かざ</sup>いを自<sup>かざ</sup>分の飾<sup>かざ</sup>りとしなさい。
- 11 女<sup>したが</sup>は、静<sup>したが</sup>かにして、よく従<sup>したが</sup>う心<sup>したが</sup>をもつて教<sup>したが</sup>えを受<sup>したが</sup>けなさい。
- 12 私<sup>し</sup>は、女<sup>し</sup>が教<sup>し</sup>えたり男<sup>し</sup>を支配<sup>し</sup>したりする<sup>は</sup>ことを許<sup>ゆる</sup>しません。ただ、静<sup>し</sup>かにしていなさい。
- 13 アダム<sup>はじ</sup>が初<sup>はじ</sup>めに造<sup>つく</sup>られ、次<sup>つく</sup>にエバ<sup>はじ</sup>が造<sup>つく</sup>られたからです。
- 14 また、アダム<sup>まど</sup>は惑<sup>まど</sup>わされなかつたが、女<sup>まど</sup>は惑<sup>まど</sup>わされてしま<sup>まど</sup>い、あやまちを犯<sup>おか</sup>しました。
- 15 しかし、女<sup>つつし</sup>が慎<sup>つつし</sup>みをもつて、信<sup>しんこう</sup>仰<sup>こう</sup>と愛<sup>あい</sup>と聖<sup>きよ</sup>さとを保<sup>たも</sup>つなら、子<sup>たも</sup>を産<sup>たも</sup>むことによつて救<sup>たも</sup>われます。



## 三章

- 1 「人がもし監督<sup>かん とく</sup>の職<sup>しよく</sup>につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということは真実です。
- 2 ですから、監督<sup>かん とく</sup>はこういう人でなければなりません。すなわち、非難<sup>ひ なん</sup>されるところがなく、ひとりの妻<sup>つま</sup>の夫であり、自分を制<sup>せい</sup>し、慎み<sup>つつし</sup>深く、品位<sup>ふか</sup>があり、よくもてなし、教える能力<sup>のうりよく</sup>があり、
- 3 酒飲みでなく、暴力<sup>ぼうりよく</sup>をふるわず、温和<sup>おん わ</sup>で、争<sup>あらそ</sup>わず、金銭<sup>きん せん</sup>に無欲<sup>む ぶく</sup>で、
- 4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳<sup>い げん</sup>をもって子どもを従<sup>したが</sup>わせている人です。
- 5 ―自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるよう――
- 6 また、信者<sup>しん じや</sup>になったばかりの人であってはいけません。高慢<sup>こう まん</sup>になって、悪魔<sup>あく ま</sup>と同じさばきを受けることにならないためです。
- 7 また、教会外の人々にも評判<sup>ひやう ばん</sup>の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔<sup>あく ま</sup>のわなに陥<sup>おちい</sup>らないためです。
- 8 執事<sup>しつ じ</sup>もまたこういう人でなければなりません。謹厳<sup>きん げん</sup>で、二枚舌<sup>に まい した</sup>を使わず、大酒飲みでなく、不正な利をむさばらず、
- 9 きよい良心<sup>しん こう</sup>をもって信仰<sup>おく ぎ</sup>の奥義<sup>たも</sup>を保っている人です。
- 10 まず審査<sup>しん さ</sup>を受けさせなさい。そして、非難<sup>ひ なん</sup>される点がなければ、執事<sup>しつ じ</sup>の職<sup>しよく</sup>につかせなさい。
- 11 <sup>2</sup>婦人執事<sup>ふ じん しつ じ</sup>も、威厳<sup>い げん</sup>があり、悪口<sup>せう</sup>を言わず、自分を制<sup>せい</sup>し、すべてに忠実<sup>ちゆう じつ</sup>な人でなければなりません。
- 12 執事<sup>しつ じ</sup>は、ひとりの妻<sup>つま</sup>の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。
- 13 というのは、執事<sup>しつ じ</sup>の務め<sup>つと</sup>をりつばに果たした人は、良い地歩<sup>ち ほ</sup>を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰<sup>しん こう</sup>について強い確信<sup>かく しん</sup>を持つことができるからです。
- 14 私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いながらも、この手紙を書いていきます。
- 15 それは、たとい私がおそくなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。
- 神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。
- 16 <sup>3</sup>確かに偉大なのはこの敬虔<sup>けい けん</sup>の奥義<sup>おく ぎ</sup>です。
- 「<sup>4</sup>キリストは肉において現<sup>あらわ</sup>れ、
- 霊<sup>れい</sup>において義<sup>ぎ</sup>と宣言<sup>せん げん</sup>され、
- 御使<sup>み つか</sup>いたちに見られ、
- 諸国民<sup>しよ こく じん</sup>の間に宣<sup>の</sup>べ伝<sup>つた</sup>えられ、
- 世界中で信じられ、
- 栄光<sup>えい かつ</sup>のうちに上げられた。」

## 四章

- 1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。
- 2 それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、
- 3 結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人が感謝して受けるようにと、神が造られた物です。
- 4 神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。
- 5 神のことばと祈りとによって、聖められるからです。
- 6 これらのことを兄弟たちに教えるなら、あなたはキリスト・イエスのりっぱな奉仕者になります。信仰のことばと、あなたが従って来た良い教えのことばとによって養われているからです。
- 7 俗悪で愚にもつかぬ空想話を避けなさい。むしろ、敬虔のために自分を鍛練しなさい。
- 8 肉体の鍛練もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です。
- 9 このことばは、真実であり、そのまま受け入れるに値することばです。
- 10 私たちはそのために労し、また苦心しているのです。それは、すべての人々、ことに信じる人々の救い主である、生ける神に望みを置いているからです。
- 11 これらのことを命じ、また教えなさい。
- 12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範にならなさい。
- 13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。
- 14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。
- 15 これらの務めに心を砕き、しっかりとやりなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。
- 16 自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うことになります。

# 五章

- 1 年寄りをしかつてはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人たちには兄弟に対するように、
- 2 年とった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。
- 3 やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。
- 4 しかし、もし、やもめに子どもか孫かがいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。
- 5 ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に置いて、昼も夜も絶えず神に願いと祈りをささげています
- が、
- 6 自堕落な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。
- 7 彼女たちがそしりを受けることのないように、これらのことを命じなさい。
- 8 もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。
- 9 やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、
- 10 良い行いによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわざに務め励んだ人としなさい。
- 11 若いやもめは断りなさい。というのは、彼女たちは、キリストにそむいて情欲に引かれると、結婚したが
- 12 初めの誓いを捨てたという非難を受けることになるからです。
- 13 そのうえ、怠けて、家々を遊び歩くことを覚え、ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいをして、話してはいけないことまで話します。
- 14 ですから、私が願うのは、若いやもめは結婚し、子どもを産み、家庭を治め、反対者にそしる機会を与えないことです。
- 15 というのは、すでに、道を踏みはずし、サタンのあとについて行った者があるからです。
- 16 もし信者である婦人の身内にやもめがいたら、その人がそのやもめを助け、教会には負担をかけないようにしなさい。そうすれば、教会はほんとうのやもめを助けることができます。
- 17 よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。
- 18 聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけない」、また「働き手が報酬を受けることは当然である」と言われているからです。
- 19 長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。
- 20 罪を犯している者をすべての人の前で責めなさい。ほかの人をも恐れさせるためです。
- 21 私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちとの前で、あなたにおごそかに命じます。これらのことを偏見なしに守り、何事もかたよらないで行いなさい。
- 22 また、だれにでも軽々しく接手をしてはいけません。また、他人の罪にかかわりを持つてはいけません。自分を清く保ちなさい。
- 23 これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起る病気のためにも、少量のぶどう酒を用いなさい。
- 24 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。

25 同じように、良い行いは、だれの目にも明らかですが、そうでない場合でも、いつまでも隠れたままだいることは  
ありません。

## 六章

- 1 くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないからです。
- 2 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。なぜなら、その良い奉仕から益を受けるのは信者であり、愛されている人からです。あなたは、これらのことを教え、また勧めなさい。
- 3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、
- 4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、
- 5 また、知性が腐ってしまつて真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。
- 6 しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。
- 7 私たちは何一つこの世に持って来なかつたし、また何一つ持つて出ることもできません。 6
- 8 衣食があれば、それで満足すべきです。
- 9 金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。
- 10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追ひ求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもつて自分を刺し通しました。
- 11 しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。
- 12 信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。
- 13 私は、すべてのものにいのちを与える神と、ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもつてあかしされたキリスト・イエスとの御前で、あなたに命じます。
- 14 私たちの主イエス・キリストの現れの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。
- 15 その現れを、神はご自分の良しとする時に示してくださいます。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、
- 16 ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。アーメン。
- 17 この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて樂しませてくださる神に望みを置くように。
- 18 また、人の益を計り、良い行いに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。
- 19 また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。
- 20 テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。そして、俗悪なわだ話、また、まちがつて「靈知」と呼ばれる反対論を避けなさい。
- 21 これを公然と主張したある人たちは、7信仰からはずれてしまいました。
- 恵みが、あなたがたとともにありますように。

- 1 あるいは「なされるべき」
- 2 別訳「執事の妻」
- 3 直訳「一致した意見ですが」
- 4 異本「神」
- 5 直訳「信仰」
- 6 異本「それは明らかです」を加える
- 7 あるいは「信仰についてまちがってしまいました」

# テモテへの手紙第二

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 神のみこころにより、キリスト・イエスにあるいのちの約束によって、キリスト・イエスの使徒となつたパウロから、
- 2 愛する子テモテへ。父なる神および私たちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安がありますように。
- 3 私は、夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こしては、先祖以来きよい良心をもつて仕えている神に感謝しています。
- 4 私は、あなたの涙を覚えているので、あなたに会つて、喜びに満たされたいと願っています。
- 5 私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿つたものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。
- 6 それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもつてあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。
- 7 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。
- 8 ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみとをともにしてください。
- 9 神は私たちを救い、また、聖なる招きをもつて召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであつて、
- 10 それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現れによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。
- 11 私は、この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されたのです。
- 12 そのため、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私<sup>1</sup>のお任せしたものを、かの日のために守つてくださることができる
- と確信しているからです。
- 13 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもつて、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。
- 14 そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。
- 15 あなたの知っているとおり、アジアにいる人々はみな、私を離れて行きました。その中には、フゲロとヘルモゲネがいます。
- 16 オネシポロの家族が主があわれんでくださるよう。彼はたびたび私を元気づけてくれ、また私が鎖につながれていることを恥とも思わず、
- 17 ローマに着いたときには、熱心に私を捜して見つけ出してくれたのです。
- 18 一かの日には、主があわれみを彼に<sup>2</sup>示してくださいますように――彼がエペソで、どれほど私に仕えてくれたかは、あなたが一番よく知っています。



## 二章

- 1 そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。
- 2 多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。
- 3 キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともしてください。
- 4 兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。
- 5 また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。
- 6 労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。
- 7 私が言っていることをよく考えなさい。主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます。
- 8 私の福音に言うとおり、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさい。
- 9 私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことは、つながれてはいません。
- 10 ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。
- 11 次のことは信頼すべきことばです。「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。
- 12 もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。
- 13 私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」
- 14 これらのことを人々に思い出させなさい。そして何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争などしないように、神の御前できびしく命じなさい。
- 15 あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。
- 16 俗悪なむだ話を避けなさい。人々はそれによってますます不敬虔に深入りし、
- 17 彼らの話は癌のように広がるのです。ヒメナオとピレトはその仲間です。
- 18 彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、ある人々の信仰をくつがえしているのです。
- 19 それにもかかわらず、神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」
- 20 大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。
- 21 ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。
- 22 それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。
- 23 愚かで、無知な思弁を避けなさい。それが争いのもとであることは、あなたが知っているとおりです。
- 24 主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、
- 25 反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。
- 26 それで悪魔に捕らえられて思うままにされている人々でも、目ざめてそのわなをのがれることもあるでしょう。

## 三章

- 1 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。
- 2 そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、
- 3 情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、
- 4 裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、
- 5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。
- 6 こういう人々の中には、家々に入り込み、愚かな女たちを<sup>4</sup>たぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、
- 7 いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることでできない者たちです。
- 8 また、こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。彼らは知性の腐った、信仰の失格者です。
- 9 でも、彼らはもうこれ以上に進むことはできません。彼らの愚かさは、あのふたりの場合のように、すべての人にはつきりわかるからです。
- 10 しかし、あなたは、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、
- 11 またアンテオケ、イコニウム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。しかし、主はいつさいのことから私を救い出してくださいました。
- 12 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。
- 13 しかし、悪人や詐欺師たちは、だましたりだまされたりしながら、ますます悪に落ちて行くのです。
- 14 けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、
- 15 また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができますのです。
- 16 聖書はすべて、<sup>5</sup>神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。
- 17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

## 四章

- 1 神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思つて、私はおごそかに命じます。
- 2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。
- 3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもつて、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、
- 4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。
- 5 しかし、あなたは、どのような場合にも 慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。
- 6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。
- 7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。
- 8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。
- 9 あなたは、何とかして、早く私のところに来てください。
- 10 デマスは今の6世を愛し、私を捨ててテサロニケに行つてしまい、また、クレスケンスは7ガラテヤに、テトスはダルフマテヤに行ったからです。
- 11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴つて、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。
- 12 私はテキコをエペソに遣わしました。
- 13 あなたが来るときは、トロアスでカルポのところに残しておいた上着を持って来てください。また、書物を、特に羊皮紙の物を持って来てください。
- 14 銅細工人のアレキサンデルが私をひどく苦しめました。そのしわざに応じて主が彼に報いられます。
- 15 あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らつたからです。
- 16 私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。どうか、彼らがそのためにさばかれることのありませんように。
- 17 しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。私は獅子の口から助け出されました。
- 18 主は私を、すべての悪のわざから助け出し、天の御国に救い入れてくださいます。主に、御栄えがとこしえにありますように。アーメン。
- 19 プリスカとアクラによろしく。また、オネシポロの家族によろしく。
- 20 エラストはコリントにとどまり、トロビモは病気のためにミレトに残して来しました。
- 21 何とかして、冬になる前に来てください。ユプロ、ブデス、リノス、クラウドヤ、またすべての兄弟たちが、あなたによろしくと言っています。
- 22 主があなたの霊とともにおられますように。恵みが、あなたがたとともにありますように。

- 1 別訳「に任されたものを」
- 2 原語は一七節の「見つけ出す」と同じことば
- 3 別訳「悪魔に捕らえられていた者も、目ざめて、そのわなをのがれ、神のみこころをなすようになるかもしれないからです」
- 4 別訳「とりこにして」
- 5 直訳「神のいぶきによる」
- 6 あるいは「時代」
- 7 異本「ゴール」

# テトスへの手紙

[一章](#) [二章](#) [三章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 神し とのしもべ、また、イエス・キリストの使徒パウロ―私は、神しん こうに選ばれた人々の信仰いけい けんと、敬虔けいけんにふさわしい真理の知識ち しきと<sup>1</sup>のために使徒とされたのです。
- 2 それは、偽いつわることのない神し とが、永遠えい えんの昔から約束してくださった永遠えい えんのいのちの望みに基づくことです。
- 3 神は、ご自分の定められた時に、このみことばを宣教せん きやうによって明らかにされました。私は、この宣教せん きやうを私たちの救い主なる神の命令によって、ゆだねられたのです―このパウロから、
- 4 同じ信仰による真実のわが子テトスへ。父なる神および私たちの救い主なるキリスト・イエスから、恵みと平安がありますように。
- 5 私があなたをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。
- 6 それには、その人が、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、その子どもは不品行を責められたり、反抗的であつたりしない信者であることが条件です。
- 7 監督かん とくは神の家の管理者として、非難されるところのない者であるべきです。わがままでなく、短気たん きでなく、酒飲しゅ かんみでなく、けんか好きでなく、不正な利を求めず、
- 8 かえて、旅人をよくもてなし、善ぜんを愛し、慎あみ深く、正しく、敬虔けいけんで、自制心じ せい しんがあり、
- 9 教えにかなった信頼すべきみことばを、しっかりと守っていなければなりません。それは健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。
- 10 実じつは、反抗はん こう てき的な者、空論くう ろんに走る者、人を惑まどわす者が多くいます。特に、割礼かつ れいを受けた人々がそうです。
- 11 彼らの口を封じなければいけません。彼らは、不正な利を得るために、教えるはいけないことを教え、家々は かいを破壊しています。
- 12 彼らと同国人であるひとりの預言者よ げん しやがこう言いました。
- 「クレテ人は昔からのうそつき、悪いけどもの、なまけ者の食くいしんぼう。」
- 13 この証言しやう げんはほんとうなのです。ですから、きびしく戒いましめて、人々の信仰しん こうを健全けん ぜんにし、
- 14 ユダヤ人の空想話や、真理から離れた人々の戒めには心を寄せないようにさせなさい。
- 15 きよい人々には、すべてのものがきよいのです。しかし、汚れた、不信仰人々には、何一つきよいものはありません。それどころか、その知性ち せいと良心けがまでも汚れています。
- 16 彼らは、神を知っていると口では言いますが、行いでは否定しています。実に忌まわしく、不従順ふ じゆう じゆんで、どんな良いわざにも不適格です。

## 二章

- 1 しかし、あなたは健全な教えにふさわしいことを話さない。
- 2 老人たちには、自制し、謹厳で、慎み深くし、信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように。
- 3 同じように、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。
- 4 そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、
- 5 慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができるのです。それは、神のことがそしられるようなことのないためです。
- 6 同じように、若い人々には、思慮深くあるように勧めなさい。
- 7 また、<sup>2</sup>すべての点で自分自身が良いわざの模範となり、教えにおいては純正で、威厳を保ち、
- 8 非難すべきところのない、健全なことを用いなさい。そうすれば、敵対する者も、私たちについて、何も悪いことが言えなくなって、恥じ入ることになるでしょう。
- 9 奴隷には、すべての点で自分の主人に従って、満足を与え、口答えせず、
- 10 盗みをせず、努めて真実を表すように勧めなさい。それは、彼らがあらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。
- 11 というのは、すべての人を救う神の恵みが現れ、
- 12 私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、
- 13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。
- 14 キリストが私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。
- 15 あなたは、これらのことを十分な権威をもって話し、勧め、また、責めなさい。だれにも軽んじられてはいけません。

## 三章

1 あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと権威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。

2 また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。

3 私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快楽の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。

4 しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現れたとき、

5 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。

6 神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。

7 それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです。

8 これは信頼できることばですから、私は、あなたがこれらのことについて、確信をもって話すように願っています。それは、神を信じている人々が、良いわざに励むことを心がけるようになるためです。これらのことは良いことであつて、人々に有益なことです。

9 しかし、愚かな議論、系図、口論、律法についての論争などを避けなさい。それらは無益で、むだなものです。

10 分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。

11 このような人は、あなたも知っているとおり、墮落しており、自分で悪いと知りながら罪を犯しているのです。

12 私がアルテマスかテキコをあなたのもとに送ったら、あなたは、何としてでも、ニコポリにいる私のところに来てください。私はそこで冬を過ごすことに決めています。

13 ぜひとも、律法学者ゼナスとアポロとが旅に出られるようにし、彼らが不自由しないように世話をしあげなさい。

14 私たち一同も、なくてはならないもののために、正しい仕事に励むように教えられなければなりません。それは、実を結ばない者にならないためです。

15 私といっしょにいる者たち一同が、あなたによろしくと言っています。私たちの信仰の友である人々に、よろしく言うてください。

恵みが、あなたがたすべてとともにありますように。



- 1 別訳「による」
- 2 別訳「すべての点で」を六節の「思慮深く」の前に入れる
- 3 あるいは「望みどおりに永遠のいのちの相続人となる」

# ピレモンへの手紙

- 1 キリスト・イエスの囚人であるパウロ、および兄弟テモテから、私たちの愛する同労者ピレモンへ。
- 2 また、姉妹アピヤ、私たちの戦友アルキボ、ならびにあなたの家にある教会へ。
- 3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたにたの上にありますように。
- 4 私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています。
- 5 それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛とについて聞いているからです。
- 6 私たちの間でキリストのためになされているすべての良い行いをよく知ることによって、あなたの信仰の交わりが生きて働くものとなりますように。
- 7 私はあなたの愛から多くの喜びと慰めとを受けました。それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによって力づけられたからです。
- 8 私は、あなたのなすべきことを、キリストにあつて少しもはばからず命じることができるのですが、こういうわけですから、
- 9 むしろ愛によって、あなたにお願いしたいと思います。2年<sup>2</sup>老いて、今はまたキリスト・イエスの囚人となっている私パウロが、
- 10 獄<sup>3</sup>中で生んだわが子<sup>4</sup>オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。
- 11 彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとつても私にとつても、役に立つ者となっています。
- 12 そのオネシモを、あなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。
- 13 私は、彼を私のところにとどめておき、福音のために<sup>5</sup>獄中<sup>5</sup>にいる間、あなたに代わつて私のために仕えてもらいたいとも考えましたが、
- 14 あなたの同意なしには何一つすまいと思いました。それは、あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです。
- 15 彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであつたのでしょうか。
- 16 もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。特に私にとってそうですが、あなたにとってはなおさらのこと、肉においても主にあつても、そうではありませんか。
- 17 ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。
- 18 もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのだしたら、その請求は私にしてください。
- 19 この手紙は私パウロの自筆です。私がそれを支払います—あなたが今のようになれたのもまた、私によるのですが、そのことについては何も言いません。—
- 20 そうです。兄弟よ。私は、主にあつて、あなたから益を受けたいのです。私の心をキリストにあつて、元気づけてください。
- 21 私はあなたの従順を確信して、あなたにこの手紙を書きました。私の言う以上のことをしてくださるあなたであると、知っているからです。
- 22 それにまた、私の宿の用意もしておいてください。あなたがたの祈りによって、私もあなたがたのところに行けることと思っています。
- 23 キリスト・イエスにあつて私とともに囚人となっているエパfrasが、あなたによろしくと言っています。
- 24 私の同労者たちであるマルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくと言っています。
- 25 主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。<sup>6</sup>

- 1 異本「あなたがたの」
- 2 あるいは「大使であって」
- 3 直訳「束縛の中で」
- 4 直訳「有益な」
- 5 直訳「束縛の中に」
- 6 異本「アーメン」を加える

# ヘブル人への手紙

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)  
[六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)  
[十一章](#) [十二章](#) [十三章](#)

[【戻る】](#)

## 一章

- 1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました、
- 2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。
- 3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。
- 4 御子は、御使いたちよりもさらにすぐれた御名を相続されたように、それだけ御使よりもまさるものとなりました。
- 5 神は、かつてどの御使いに向かつて、こう言われたでしょう。
- 「あなたは、わたしの子。
- きょう、わたしがあなたを生んだ。」
- またさらに、
- 「わたしは彼の父となり、
- 彼はわたしの子となる。」
- 6 さらに、長子をこの世界にお送りになるとき、こう言われました。
- 「神の御使いはみな、彼を拝め。」
- 7 また御使いについては、
- 「神は、御使いたちを風とし、
- 仕える者たちを爰とされる。」
- と言われましたが、
- 8 御子については、こう言われます。
- 「神よ。あなたの御座は世々限りなく、
- あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。
- 9 あなたは義を愛し、不正を憎まれます。
- それゆえ、神よ。あなたの神は、
- あふれるばかりの喜びの油を、
- あなたとともに立つ者にまして、
- あなたに注ぎなさいました。」
- 10 またこう言われます。
- 「主よ。あなたは、初めに
- 地の基を据えられました。
- 天も、あなたの御手のわざです。
- 11 これらのものは滅びます。
- しかし、あなたはいつまでもながらえられます。
- すべてのものは着物のように古びます。
- 12 あなたはこれらを、外套のように巻かれます。
- これらを、着物のように取り替えられます。
- しかし、あなたは変わることがなく、
- あなたの年は尽きることがありません。」
- 13 神は、かつてどの御使いに向かつて、こう言われたでしょう。
- 「わたしがあなたの敵を

あなたの足台とするまでは、

わたしの右の座ざに着いていなさい。」

14 御使みつかいはみな、仕える霊れいであって、救いの相続者そうぞくしやとなる人々に仕えるため遣わされたのではありませんか。

## 二章

1 ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかりと心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。

2 もし、御使いたちを通して語られたみことばでさえ、堅く立てられて動くことがなく、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたとすれば、

3 私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができません。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、

4 そのうえ神も、しるしと不思議とさまざまな<sup>2</sup>力あるわざにより、また、みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物によってあかしされました。

5 神は、私たちがいま話している後の世を、御使いたちに従わせることはなさらなかったのです。

6 むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。

「人間が何者だというので、

これをみこころに留められるのでしょうか。

人の子が何者だというので、

これを顧みられるのでしょうか。

7 あなたは、彼を、

御使いよりも、<sup>3</sup>しばらくの間、低いものとし、

彼に栄光と誉れの冠を与え、<sup>4</sup>

8 万物をその足の下に従わせられました。」

万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません。

9 ただ、御使いよりも、<sup>5</sup>しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見ています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。

10 神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの<sup>6</sup>創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。

11 聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。

12 「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。

教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」

13 またさらに、

「わたしは彼に信頼する。」

またさらに、

「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」

と言われます。

14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、

15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

16 主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。

17 そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同

じようにならなければなりません。それは民の罪のため、<sup>たみ</sup><sup>つみ</sup>なだめがなされるためなのです。

18 主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。



# 三章

1 そういうわけですから、天の召しに<sup>め</sup>あずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰<sup>しんこう</sup>の使徒<sup>しと</sup>であり、大祭司<sup>だいさいし</sup>であるイエスのことを考えなさい。

2 モーセが神の家全体のために<sup>ちゆうじつ</sup>忠実であつたのと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して<sup>ちゆうじつ</sup>忠実なのです。

3 家よりも、家を建てる者が大きな栄誉を持つ<sup>えいよ</sup>のと同様に、イエスはモーセよりも大きな栄光を受けるのにふさわしいとされました。

4 家はそれぞれ、だれかが建てるのですが、すべてのものを造<sup>つく</sup>られた方は、神です。

5 モーセは、しもべとして神の家全体のために<sup>ちゆうじつ</sup>忠実でした。それは、後に語られる事をあかしするためでした。

6 しかし、キリストは御子<sup>みこ</sup>として神の家を<sup>ちゆうじつ</sup>忠実に治められるのです。もし私たちが、確信<sup>かくしん</sup>と、希望<sup>ほこ</sup>による誇りとを、終わりまでしっかりと持ち続けるならば、私たちが神の家なのです。

7 ですから、聖霊<sup>せいれい</sup>が言われるとおりです。

「きょう、もし御声<sup>みこえ</sup>を聞くならば、

8 <sup>あら</sup>荒野での試みの日に

<sup>みいひ</sup>御怒りを引き起こしたときのように、  
心をかたくなにしてはならない。

9 あなたがたの父祖たちは、  
そこでわたしを試みて<sup>しやうこ</sup>証拠を求め、  
四十年の間、わたしのわざを見た。

10 だから、わたしはその時代を<sup>いきどお</sup>憤って言った。  
<sup>つね</sup>彼らは常に心が迷い、  
<sup>さと</sup>わたしの道を悟らなかつた。

11 わたしは、怒りをもって誓<sup>ちか</sup>つたように、  
決して彼らをわたしの安息に入らせない。」

12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰<sup>ふしんこう</sup>の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。

13 「きょう」と言われている間に、日々<sup>たが</sup>互いに<sup>はげ</sup>励まし合<sup>あ</sup>つて、だれも罪に惑<sup>つみ</sup>わされて<sup>まど</sup>かたくなにならないようにしなさい。

14 もし最初の確信<sup>かくしん</sup>を終わりまでしっかりと保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。

15 「きょう、もし御声<sup>みこえ</sup>を聞くならば、  
<sup>みいひ</sup>御怒りを引き起こしたときのように、  
心をかたくなにしてはならない。」

と言われているからです。

16 聞いていながら、御怒りを引き起こしたのはだれでしたか。モーセに率<sup>ひき</sup>いられてエジプトを出た人々の全部ではありませんか。

17 神は四十年の間だれを怒<sup>いか</sup>っておられたのですか。罪を犯した人々、しかばねを<sup>つみ</sup>荒野に<sup>おか</sup>さらした、あの人たちをではありませんか。

18 また、わたしの安息に入らせないと神が誓<sup>ちか</sup>われたのは、ほかでもない、従おうとしなかつた人たちのことではありませんか。

19 それゆえ、彼らが安息に入れなかつたのは、不信仰<sup>ふしんこう</sup>のためであつたことがわかります。

## 四章

1 こういうわけで、神の安息に入るための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれに入れないようなことのないように、私たちは恐れる心を持つてではありませんか。

2 福音を説き聞かされていることは、私たちも彼らと同じなのです。ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。<sup>7</sup>みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。

3 信じた私たちは安息に入るので。

「わたしは、怒りをもって誓ったように、  
決して彼らをわたしの安息に入らせない。」

と神が言われたとおりです。みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。

4 というのは、神は七日目について、ある個所で、「そして、神は、すべてのみわざを終えて七日目に休まれた」と言われました。

5 そして、ここでは、「決して彼らをわたしの安息に入らせない」と言われたのです。

6 こういうわけで、その安息に入る人々がまだ残っており、前に福音を説き聞かされた人々は、不従順のゆえに入らなかったのですから、

7 神は再びある日を「きょう」と定めて、長い年月の後に、前に言われたと同じように、ダビデを通して、

「きょう、もし御声を聞くならば、  
あなたがたの心をかたくなにはならない。」

と語られたのです。

8 もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであったら、神はそのあとで別の日のことを話されることはなかったでしょう。

9 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。

10 神の安息に入った者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。

11 ですから、私たちは、この安息に入るよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。

12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

## 五章

- 1 大祭司だいさいしはみな、人々の中から選ばれ、神に仕える事がらについて人々に代わる者として、任命にんめいを受けたのです。  
それは、罪のために、ささげ物といけにえとをささげるためです。
- 2 彼は、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知まよな迷っている人々を思いやることができるのです。
- 3 そしてまた、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のためのささげ物をしなければなりません。
- 4 まただれでも、この名誉めいよは自分で得るのではなく、アロンのように神に召めされて受けるのです。
- 5 同様に、キリストも大祭司となる栄誉えいよを自分で得られたのではなく、彼に、  
「あなたは、わたしの子。  
きょう、わたしがあなたを生んだ。」  
と言われた方が、それをお与えになったのです。
- 6 別の個所で、こうも言われます。  
「あなたは、とこしえに、  
メルキゼデクの位に等しい祭司さいしである。」
- 7 キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声さけごえと涙なみだとをもつて祈いのりと願いをささげ、そしてその敬虔けいけんのゆえに聞き入れられました。
- 8 キリストは御子みこであられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順じゆうじゆんを学び、
- 9 完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、
- 10 神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司だいさいしととなえられたのです。
- 11 [8](#)この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍にぶくなっているため、説き明かすことが困難です。
- 12 あなたがたは年数からすれば教師きょうしになっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅かたい食物ちちではなく、乳ちちを必要とするようになっています。
- 13 まだ乳ばかり飲んでいような者はみな、義ぎの教えに通じてはいません。幼子おきなごなのです。
- 14 しかし、堅い食物はおとなの物であつて、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

## 六章

- 1 ですから、私たちは、キリストについての初歩の教をあとにして、<sup>せいじゆく</sup>9成熟を目ざして進もうではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、
- 2 きよめ<sup>あら</sup>の洗いについての教え、手を置く<sup>ぎ しき</sup>儀式、死者の復活<sup>ふつ かつ</sup>、とこしえのさばきなど基礎<sup>き そ</sup>的なことを再びやり直したりしないようにしましょう。
- 3 神がお許しになるならば、私たちはそうすべきです。
- 4 一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊<sup>せい れい</sup>にあずかる者となり、
- 5 神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、
- 6 しかも墮落<sup>だ らく</sup>してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、<sup>10</sup>自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱<sup>ち じよく</sup>を与える人たちだからです。
- 7 土地は、その上にしばしば降る雨を吸い込んで、これを耕す人たちのために有用な作物を生じるなら、神の祝福<sup>しゆく ふく</sup>にあずかります。
- 8 しかし、いばらやあざみなどを生えさせるなら、無用なものであって、やがてのろいを受け、ついには焼かれてしまいます。
- 9 だが、愛<sup>あい</sup>する人たち。私たちはこのように言いますが、あなたがたについては、もっと良いことを確信<sup>かく しん</sup>しています。それは救いにつながることです。
- 10 神は正しい方であって、あなたがたの行いを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛<sup>あい</sup>をお忘れにならないのです。
- 11 そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心<sup>しめ</sup>さを示して、最後まで、私たちの希望<sup>かく</sup>について十分な確信<sup>しん</sup>を持ち続けてくれるように切望します。
- 12 それは、あなたがたがなまけずに、信仰<sup>しん ぎう</sup>と忍耐<sup>にん たい</sup>によって約束のものを相続<sup>そう ぞく</sup>するあの人たちに、ならう者となるためです。
- 13 神は、アブラハムに約束されるとき、ご自分よりすぐれたものをさして誓<sup>ちか</sup>うことがありえないため、ご自分をさして誓<sup>ちか</sup>い、
- 14 こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福<sup>しゆく ふく</sup>し、あなたを大いにふやす。」
- 15 こうして、アブラハムは、忍耐<sup>にん たい</sup>の末に、約束のものを得ました。
- 16 確かに、人間は自分よりすぐれた者をさして誓<sup>ちか</sup>います。そして、確証<sup>かく しやう</sup>のための誓<sup>ちか</sup>いというのは、人間のすべての反論<sup>はん ろん</sup>をやめさせます。
- 17 そこで、神は約束の相続者<sup>そう ぞく しや</sup>たちに、ご計画の変わらないことをさらにはつきり示そうと思い、誓<sup>しめ</sup>いをもって保証<sup>ちか</sup>されたのです。
- 18 それは、変えることのできない二つの事がらによって、——神は、これらの事がらのゆえに、偽<sup>いつわ</sup>ることができません——前に置かれている望みを捕らえるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。
- 19 この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨<sup>たし</sup>の役を果たし、またこの望みは幕の内側に入るのです。
- 20 イエスは私たちの先駆<sup>さき が</sup>けとしてそこに入り、永遠<sup>えい えん</sup>にメルキゼデクの位に等しい大祭司<sup>だい さい し</sup>となりました。

## 七章

1 このメルキゼデクは、サレムの王で、すぐれて高い神の祭司でしたが、アブラハムが王たちを打ち破って帰るの  
を出迎えて祝福しました。

2 またアブラハムは彼に、すべての戦利品の十分の一を分けました。まず彼は、その名を訳すと義の王であり、次に、サレムの王、すなわち平和の王です。

3 父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。

4 その人がどんなに偉大であるかを、よく考えてごらん下さい。族長であるアブラハムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えたのです。

5 レビの子らの中で祭司職を受ける者たちは、自分もアブラハムの子孫でありながら、民から、すなわち彼らの兄弟たちから、十分の一を徴集するようにと、律法の中で命じられています。

6 ところが、レビ族の系図にない者が、アブラハムから十分の一を取って、約束を受けた人を祝福したのです。

7 いうまでもなく、下位の者が上位の者から祝福されるのです。

8 一方では、死ぬべき人間が十分の一を受けていますが、他の場合は、彼は生きていとあかしされている者が受けるのです。

9 また、いうならば、十分の一を受け取るレビでさえアブラハムを通して十分の一を納めているのです。

10 というのは、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたときには、レビはまだ父の腰の中にいたからです。

11 さて、もしレビ系の祭司職によって完全に到達できたのだったら、——民はそれを基礎として律法を与えられたのです——それ以上何の必要があつて、アロンの位でなく、メルキゼデクの位に等しいと呼ばれる他の祭司が立てられたのでしょうか。

12 祭司職が変われば、律法も必ず変わらなければなりません、

13 私たちが今まで論じて来たその方は、祭壇に仕える者を出したことの無い別の部族に属しておられるのです。

14 私たちの主が、ユダ族から出られたことは明らかですが、モーセは、この部族については、祭司に関する何を何も述べていません。

15 もしメルキゼデクに等しい、別の祭司が立てられるのなら、以上のことは、いよいよ明らかになります。

16 その祭司は、肉についての戒めである律法にはよらないで、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。

17 この方については、こうあかしされています。

「あなたは、とこしえに、

メルキゼデクの位に等しい祭司である。」

18 一方で、前の戒めは、弱く無益なために、廃止されました、

19 ——律法は何事も全うしなかったのです——他方で、さらにすぐれた希望が導き入れられました。私たちはこれによって神に近づくのです。

20 また、そのためには、はっきりと誓いがなされています。

21 ——彼らの場合は、誓いなしに祭司となるのですが、主の場合には、主に対して次のように言われた方の誓いがあります。

「主は誓ってこう言われ、

みこころを変えられることはない。

『あなたはとこしえに祭司である。』」——

22 そのようにして、イエスは、さらにすぐれた契約の保証となられたのです。

23 また、彼らの場合は、死ということがあるため、<sup>つと</sup>務めにいつまでもとどまることができず、大ぜいの者が祭司となりました。

24 しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることもない祭司の務めを持っておられます。

25 したがって、ご自分によって神に近づく人々を、<sup>11</sup>完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

26 また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。

27 ほかに大祭司たちとは違い、キリストには、まず自分の罪のために、その次に、民の罪のために毎日いけにえをささげる必要はありません。というのは、キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。

28 律法は弱さを持つ人間を大祭司に立てますが、律法のあとから来た誓いのみことばは、永遠に全うされた御子を立てるのです。

# 八章

- 1 以上述べたことの要点はこうです。すなわち、私たちの大祭司は天におられる大能者の御座の右に着座された方であり、
- 2 人間が設けたのではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です。
- 3 すべて、大祭司は、ささげ物といけにえとをささげるために立てられます。したがって、この大祭司も何かささげる物を持っていなければなりません。
- 4 もしキリストが地上におられるのであったら、決して祭司とはならないでしょう。律法に従ってささげ物をする人たちがいるからです。
- 5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意なさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」
- 6 しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。
- 7 もしあの初めの契約が欠けのないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう。
- 8 しかし、神は、それに欠けがあるととして、こう言われたのです。
- 「主が、言われる。
- 見よ。日が来る。
- わたしが、イスラエルの家やユダの家と
- 新しい契約を結ぶ日が。
- 9 それは、わたしが彼らの父祖たちの手を引いて、
- 彼らをエジプトの地から導き出した日に
- 彼らと結んだ契約のようなものではない。
- 彼らがわたしの契約を守り通さないで、
- わたしも、彼らを顧みなかったと、主は言われる。
- 10 それらの日の後、わたしが、
- イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、
- 主が言われる。
- わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、
- 彼らの心書きつける。
- わたしは彼らの神となり、
- 彼らはわたしの民となる。
- 11 また彼らが、おのおのその町の者に、
- また、おのおのその兄弟に教えて、
- 『主を知れ』と言うことは決してない。
- 小さい者から大きい者に至るまで、
- 彼らはみな、わたしを知るようになるからである。
- 12 なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、
- もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」
- 13 神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いものとされたのです。年を経て古びたものは、すぐに消えて行きます。

# 九章

- 1 初<sup>はじ</sup>めの契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>にも礼<sup>れい</sup>拝<sup>はい</sup>の規<sup>き</sup>定<sup>てい</sup>と地<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>の聖<sup>せい</sup>所<sup>じよ</sup>とがありまし<sup>た</sup>。
- 2 幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>が設<sup>もう</sup>けられ、その前<sup>ぜん</sup>部<sup>ぶ</sup>の所<sup>しよ</sup>には、燭<sup>しよく</sup>台<sup>たい</sup>と机<sup>つくえ</sup>と供<sup>そな</sup>えのパンがありまし<sup>た</sup>。聖<sup>せい</sup>所<sup>じよ</sup>と呼ば<sup>よ</sup>れる所<sup>しよ</sup>です。
- 3 また、第二<sup>だいに</sup>の垂<sup>た</sup>れ幕<sup>まく</sup>のうし<sup>ろ</sup>には、至<sup>し</sup>聖<sup>せい</sup>所<sup>じよ</sup>と呼ば<sup>よ</sup>れる幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>が設<sup>もう</sup>けられ、
- 4 そこには金<sup>こう</sup>の香<sup>だん</sup>壇<sup>だん</sup>と、全<sup>ぜん</sup>面<sup>めん</sup>を金<sup>きん</sup>でおお<sup>わ</sup>れた契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の箱<sup>はこ</sup>があり、箱<sup>はこ</sup>の中<sup>なかつ</sup>には、マ<sup>ま</sup>ナの入<sup>い</sup>った金<sup>きん</sup>のつば、芽<sup>め</sup>を出<sup>い</sup>したア<sup>ア</sup>ロ<sup>ロ</sup>ンの杖<sup>づえ</sup>、契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の二<sup>ふた</sup>つ<sup>つ</sup>の板<sup>いた</sup>がありまし<sup>た</sup>。
- 5 また、箱<sup>はこ</sup>の上<sup>うへ</sup>には、贖<sup>しよく</sup>罪<sup>ざい</sup>蓋<sup>がい</sup>を翼<sup>つばさ</sup>でおお<sup>お</sup>っている栄<sup>えい</sup>光<sup>こう</sup>のケ<sup>け</sup>ルビ<sup>るび</sup>ムがありまし<sup>た</sup>。しかしこれらについ<sup>て</sup>は、今<sup>いま</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>述<sup>の</sup>べることができま<sup>せ</sup>ん。
- 6 さて、これら<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>が以上<sup>いじやう</sup>のよう<sup>よう</sup>に整<sup>せい</sup>えら<sup>れ</sup>れた上<sup>うへ</sup>で、前<sup>ぜん</sup>の幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>には、祭<sup>さい</sup>司<sup>し</sup>たちがい<sup>い</sup>つも入<sup>い</sup>つて礼<sup>れい</sup>拝<sup>はい</sup>を行<sup>い</sup>うので<sup>す</sup>が、
- 7 第二<sup>だいに</sup>の幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>には、大<sup>だい</sup>祭<sup>さい</sup>司<sup>し</sup>だけが年<sup>ねん</sup>に一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>だけ入<sup>い</sup>ります。そ<sup>の</sup>と<sup>き</sup>、血<sup>ち</sup>を携<sup>も</sup>え<sup>ず</sup>に入<sup>い</sup>るよう<sup>よう</sup>なこ<sup>の</sup>とはありま<sup>せ</sup>ん。そ<sup>の</sup>血<sup>ち</sup>は、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のた<sup>た</sup>めに、また、民<sup>たみ</sup>が知<sup>し</sup>ら<sup>ず</sup>に犯<sup>おか</sup>した罪<sup>つみ</sup>のた<sup>た</sup>めにさ<sup>さ</sup>げ<sup>る</sup>もの<sup>です</sup>。
- 8 これによ<sup>つ</sup>つて聖<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>は次<sup>し</sup>のこ<sup>の</sup>を<sup>を</sup>示<sup>しめ</sup>してお<sup>し</sup>られ<sup>ま</sup>す。す<sup>な</sup>わ<sup>ち</sup>、前<sup>ぜん</sup>の幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>が存<sup>ぞん</sup>続<sup>ぞく</sup>して<sup>い</sup>るか<sup>ぎ</sup>り、ま<sup>ま</sup>こ<sup>の</sup>の聖<sup>せい</sup>所<sup>じよ</sup>へ<sup>の</sup>の道<sup>みち</sup>は、ま<sup>ま</sup>だ明<sup>めい</sup>ら<sup>か</sup>に<sup>に</sup>さ<sup>さ</sup>れて<sup>い</sup>ない<sup>い</sup>とい<sup>う</sup>こ<sup>の</sup>で<sup>す</sup>。
- 9 この幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>はそ<sup>の</sup>の<sup>12</sup>當時<sup>だんじ</sup>のた<sup>た</sup>め<sup>め</sup>の比<sup>ひ</sup>喩<sup>ゆ</sup>で<sup>す</sup>。そ<sup>の</sup>れに<sup>に</sup>従<sup>したが</sup>つて、さ<sup>さ</sup>げ<sup>る</sup>物<sup>もの</sup>とい<sup>い</sup>け<sup>に</sup>え<sup>と</sup>がさ<sup>さ</sup>げ<sup>ら</sup>れ<sup>ま</sup>す<sup>が</sup>、そ<sup>の</sup>れ<sup>ら</sup>は礼<sup>れい</sup>拝<sup>はい</sup>する者<sup>もの</sup>の良<sup>らい</sup>心<sup>しん</sup>を全<sup>ぜん</sup>全<sup>ぜん</sup>に<sup>に</sup>す<sup>る</sup>こ<sup>の</sup>はでき<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。
- 10 それ<sup>ら</sup>は、た<sup>た</sup>だ食<sup>あ</sup>物<sup>じ</sup>と飲<sup>の</sup>み物<sup>ぶつ</sup>と種<sup>あ</sup>々<sup>ろ</sup>の洗<sup>せん</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>関<sup>かん</sup>する<sup>もの</sup>で、新<sup>あら</sup>しい秩<sup>ちつ</sup>序<sup>じよ</sup>の立<sup>た</sup>て<sup>ら</sup>れる時<sup>とき</sup>ま<sup>で</sup>課<sup>か</sup>せ<sup>ら</sup>れた、か<sup>か</sup>ら<sup>だ</sup>に<sup>に</sup>関<sup>かん</sup>する規<sup>き</sup>定<sup>てい</sup>に<sup>に</sup>すぎ<sup>な</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>で</sup>す。
- 11 し<sup>し</sup>かしキ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>トは、<sup>13</sup>す<sup>す</sup>で<sup>で</sup>に<sup>に</sup>成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>した<sup>す</sup>ば<sup>ら</sup>しい事<sup>こと</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>の大<sup>だい</sup>祭<sup>さい</sup>司<sup>し</sup>と<sup>と</sup>して<sup>して</sup>来<sup>き</sup>られ、手<sup>て</sup>で<sup>で</sup>造<sup>つく</sup>った物<sup>もの</sup>で<sup>で</sup>ない、言<sup>い</sup>い<sup>か</sup>替<sup>か</sup>え<sup>え</sup>れば、こ<sup>の</sup>造<sup>つく</sup>ら<sup>れ</sup>た物<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>は違<sup>ちが</sup>った、さ<sup>さ</sup>らに偉<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>な、さ<sup>さ</sup>らに全<sup>ぜん</sup>全<sup>ぜん</sup>な幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>を通<sup>とほ</sup>り、
- 12 ま<sup>ま</sup>た、や<sup>や</sup>ぎと子<sup>こ</sup>牛<sup>ぎう</sup>と<sup>と</sup>の血<sup>ち</sup>によ<sup>つ</sup>つてで<sup>で</sup>な<sup>く</sup>、ご自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の血<sup>ち</sup>によ<sup>つ</sup>つて、た<sup>た</sup>だ一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>、ま<sup>ま</sup>こ<sup>の</sup>の聖<sup>せい</sup>所<sup>じよ</sup>に入<sup>い</sup>り、永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>の贖<sup>あがな</sup>い<sup>い</sup>を<sup>を</sup>成<sup>な</sup>し<sup>と</sup>遂<sup>すな</sup>げ<sup>ら</sup>れた<sup>の</sup>で<sup>す</sup>。
- 13 もし、や<sup>や</sup>ぎと雄<sup>め</sup>牛<sup>ぎう</sup>の血<sup>ち</sup>、ま<sup>ま</sup>た雌<sup>めい</sup>牛<sup>ぎう</sup>の灰<sup>はい</sup>を汚<sup>けが</sup>れた人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>に注<sup>きよ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>かけ<sup>る</sup>と、そ<sup>の</sup>れが聖<sup>せい</sup>め<sup>め</sup>の働<sup>はたら</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>して肉<sup>にく</sup>体<sup>たい</sup>をき<sup>き</sup>よ<sup>よ</sup>い<sup>い</sup>もの<sup>の</sup>に<sup>に</sup>す<sup>る</sup>とす<sup>べ</sup>ば、
- 14 ま<sup>ま</sup>して、キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>トが傷<sup>あ</sup>づ<sup>づ</sup>のないご自<sup>み</sup>身<sup>たま</sup>を、とこ<sup>し</sup>え<sup>え</sup>の御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>によ<sup>つ</sup>つて神<sup>かみ</sup>にお<sup>お</sup>さ<sup>さ</sup>げ<sup>ら</sup>れた<sup>の</sup>そ<sup>の</sup>の血<sup>ち</sup>は、ど<sup>ど</sup>ん<sup>な</sup>な<sup>に</sup>か<sup>か</sup>、<sup>14</sup>私<sup>わたし</sup>たち<sup>の</sup>の良<sup>らい</sup>心<sup>しん</sup>をき<sup>き</sup>よ<sup>よ</sup>めて死<sup>し</sup>んだ行<sup>な</sup>い<sup>い</sup>から離<sup>はな</sup>れ<sup>さ</sup>せ、生<sup>な</sup>ける神<sup>かみ</sup>に仕<sup>つか</sup>える者<sup>もの</sup>とす<sup>る</sup>こ<sup>の</sup>で<sup>す</sup>。
- 15 こ<sup>の</sup>う<sup>う</sup>い<sup>い</sup>うわ<sup>わ</sup>け<sup>け</sup>で、キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>トは新<sup>あら</sup>しい<sup>15</sup>契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の仲<sup>な</sup>介<sup>かい</sup>者<sup>しや</sup>で<sup>す</sup>。そ<sup>の</sup>れは、初<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>の契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の<sup>15</sup>と<sup>と</sup>きの違<sup>ちが</sup>反<sup>はん</sup>を贖<sup>あがな</sup>う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>の死<sup>じ</sup>が実<sup>じつ</sup>現<sup>げん</sup>した<sup>の</sup>で、召<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>れた者<sup>もの</sup>たち<sup>の</sup>が永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>の資<sup>し</sup>産<sup>さん</sup>の約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>を受<sup>う</sup>けるこ<sup>の</sup>が<sup>が</sup>でき<sup>き</sup>るた<sup>た</sup>め<sup>め</sup>の<sup>15</sup>で<sup>す</sup>。
- 16 <sup>16</sup>遺<sup>ゆい</sup>言<sup>ごん</sup>には、遺<sup>ゆい</sup>言<sup>ごん</sup>者<sup>しや</sup>の死<sup>し</sup>亡<sup>ぼう</sup>証<sup>しやう</sup>明<sup>めい</sup>が必<sup>ひ</sup>要<sup>よう</sup>で<sup>す</sup>。
- 17 <sup>17</sup>遺<sup>ゆい</sup>言<sup>ごん</sup>は、人<sup>ひと</sup>が死<sup>し</sup>んだ<sup>17</sup>と<sup>と</sup>き初<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>で<sup>で</sup>有<sup>ゆう</sup>効<sup>こう</sup>に<sup>に</sup>なる<sup>の</sup>で<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>つて、<sup>18</sup>遺<sup>ゆい</sup>言<sup>ごん</sup>者<sup>しや</sup>が<sup>18</sup>生<sup>せい</sup>きて<sup>い</sup>る間<sup>かん</sup>は、決<sup>けつ</sup>して効<sup>こう</sup>力<sup>りよく</sup>はあ<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。
- 18 し<sup>し</sup>た<sup>が</sup>つて、初<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>の契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>も血<sup>ち</sup>なし<sup>し</sup>に<sup>に</sup>成<sup>せい</sup>立<sup>り</sup>した<sup>の</sup>で<sup>で</sup>はあ<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。
- 19 モー<sup>りつ</sup>セ<sup>ほう</sup>は、律<sup>りつ</sup>法<sup>ぽう</sup>に<sup>に</sup>従<sup>したが</sup>つて<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>の戒<sup>がい</sup>め<sup>め</sup>を民<sup>たみ</sup>全<sup>ぜん</sup>体<sup>たい</sup>に<sup>に</sup>語<sup>かた</sup>つて<sup>後</sup>、水<sup>みづ</sup>と赤<sup>あか</sup>い色<sup>いろ</sup>の羊<sup>やぎ</sup>の毛<sup>け</sup>とヒ<sup>ひ</sup>ソ<sup>そ</sup>プ<sup>ぷ</sup>と<sup>と</sup>のほ<sup>ほ</sup>か<sup>か</sup>に、子<sup>こ</sup>牛<sup>ぎう</sup>とや<sup>や</sup>ぎ<sup>の</sup>の血<sup>ち</sup>を取<sup>と</sup>つて、契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の書<sup>しよ</sup>自<sup>じ</sup>体<sup>たい</sup>にも民<sup>たみ</sup>の全<sup>ぜん</sup>体<sup>たい</sup>にも<sup>に</sup>注<sup>つ</sup>ぎ<sup>か</sup>け<sup>る</sup>、
- 20 「こ<sup>の</sup>れは神<sup>かみ</sup>が<sup>19</sup>あ<sup>あ</sup>なた<sup>た</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>して<sup>して</sup>立<sup>た</sup>て<sup>ら</sup>れた<sup>19</sup>契<sup>けい</sup>約<sup>やく</sup>の血<sup>ち</sup>で<sup>で</sup>ある<sup>の</sup>」<sup>と</sup>い<sup>い</sup>まし<sup>た</sup>。
- 21 ま<sup>ま</sup>た彼<sup>か</sup>は、幕<sup>まく</sup>屋<sup>や</sup>と礼<sup>れい</sup>拝<sup>はい</sup>の<sup>21</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>の器<sup>き</sup>具<sup>ぐ</sup>にも同<sup>どう</sup>様<sup>よう</sup>に<sup>に</sup>血<sup>ち</sup>を注<sup>つ</sup>ぎ<sup>か</sup>け<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。
- 22 そ<sup>の</sup>れ<sup>で</sup>、律<sup>りつ</sup>法<sup>ぽう</sup>によ<sup>よ</sup>れば、<sup>22</sup>す<sup>す</sup>べ<sup>べ</sup>て<sup>て</sup>の物<sup>もの</sup>は血<sup>ち</sup>によ<sup>よ</sup>つて<sup>て</sup>き<sup>き</sup>よ<sup>よ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れる、<sup>22</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>つて<sup>て</sup>よ<sup>よ</sup>い<sup>い</sup>で<sup>す</sup>。
- また、血<sup>ち</sup>を注<sup>つ</sup>ぎ<sup>か</sup>け<sup>る</sup>出<sup>で</sup>す<sup>の</sup>こ<sup>の</sup>が<sup>が</sup>な<sup>な</sup>ければ、罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆる</sup>し<sup>は</sup>ない<sup>い</sup>の<sup>の</sup>で<sup>す</sup>。
- 23 <sup>23</sup>で<sup>で</sup>す<sup>か</sup>ら、天<sup>てん</sup>に<sup>に</sup>ある<sup>もの</sup>の<sup>23</sup>か<sup>か</sup>た<sup>た</sup>ど<sup>ど</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>もの<sup>の</sup>は、こ<sup>の</sup>れ<sup>ら</sup>の<sup>もの</sup>の<sup>23</sup>よ<sup>よ</sup>つて<sup>て</sup>き<sup>き</sup>よ<sup>よ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れる<sup>の</sup>必<sup>ひ</sup>要<sup>よう</sup>があ<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>し<sup>た</sup>。し<sup>し</sup>かし<sup>し</sup>天<sup>てん</sup>に<sup>に</sup>ある<sup>もの</sup>の自<sup>じ</sup>体<sup>たい</sup>は、こ<sup>の</sup>れ<sup>ら</sup>より<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>に</sup>に<sup>に</sup>すぐ<sup>く</sup>れ<sup>た</sup>い<sup>い</sup>け<sup>に</sup>え<sup>で</sup>、き<sup>き</sup>よ<sup>よ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>な</sup>ければ<sup>な</sup>り<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。
- 24 キ<sup>き</sup>リ<sup>り</sup>ス<sup>す</sup>トは、本<sup>もと</sup>物<sup>ぶつ</sup>の模<sup>も</sup>型<sup>けい</sup>に<sup>に</sup>すぎ<sup>な</sup>い、手<sup>て</sup>で<sup>で</sup>造<sup>つく</sup>った<sup>24</sup>聖<sup>せい</sup>所<sup>じよ</sup>に入<sup>い</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>の</sup>で<sup>で</sup>な<sup>く</sup>、天<sup>てん</sup>そ<sup>の</sup>の<sup>もの</sup>の<sup>24</sup>に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>の</sup>で<sup>で</sup>す。そ<sup>し</sup>し



て、今、私たちのために神の御前に現れてくださるのです。

25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげ  
ることはなさいません。

26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ  
一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、

28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、20罪を負うためではな  
く、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

# 一〇章

1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。

2 もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはずです。

3 ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。

4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。

5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。

「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、  
わたしのために、からだを造ってくださいました。

6 あなたは全焼のいけにえと

罪のためのいけにえとで

満足されませんでした。

7 そこでわたしは言いました。

『さあ、わたしは来ました。

聖書のある巻に、

わたしについてしるされているとおり、

神よ、あなたのみこころを行うために。』」

8 すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ（すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物）を望まず、またそれらで満足されませんでした」と言い、

9 また、「さあ、わたしはあなたのみこころを行うために来ました」と言われたのです。後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。

10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。

11 また、すべて祭司は毎日立てて礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。

12 しかし、キリストは、**21**罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、

13 それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。

14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

15 聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。

16 「それらの日の後、わたしが、

彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、

主は言われる。

わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、

彼らの思いに書きつける。」

またこう言われます。

17 「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法を思い出すことはしない。」

18 これらのことが赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用です。

19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。

20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。

- 21 また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。<sup>い だい さい し</sup>
- 22 そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたので  
すから、全き信仰<sup>しん こう</sup>をもって、真心<sup>ま ごころ</sup>から神に近づくではありませんか。
- 23 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺<sup>どう よう</sup>しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。
- 24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。
- 25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。
- 26 もし私たちが、真理<sup>ち りき</sup>の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。
- 27 ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。<sup>おそ</sup>
- 28 だれでもモーセの律法を無視する者は、二、三の証人<sup>し けい し ょ</sup>のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。
- 29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約<sup>けいやく</sup>の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊<sup>めぐ み たま あなど</sup>を侮る者は、どんなに重い処罰<sup>しよ ばつ</sup>に値するか、考えてみなさい。
- 30 私たちは、「復讐<sup>ふく しゆう</sup>はわたしのすることである。わたしが報いをする」、また、「主がその民をさばかれる」と言われる方を知っています。
- 31 生ける神の手に陥<sup>おちい</sup>ることは恐ろしいことです。<sup>おそ</sup>
- 32 あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。
- 33 人々の目の前で、そしりと苦しみとを受けた者もあれば、このようなめにあった人々の仲間になった者もありました。
- 34 あなたがたは、捕らえられている人々を思いやり、また、もつとすぐれた、いつまでも残る財産<sup>ざい さん</sup>を持っていることを知っていたので、自分の財産<sup>ざい さん</sup>が奪<sup>うば</sup>われても、喜んで忍<sup>しの</sup>びました。
- 35 ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものなのです。<sup>むく</sup>
- 36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐<sup>にん たい</sup>です。
- 37 「もうしばらくすれば、  
来るべき方が来られる。おそくなることはない。
- 38 わたしの義人<sup>ぎ じん</sup>は信仰<sup>しん こう</sup>によって生きる。  
もし、恐れ退<sup>おそ</sup>くなら、  
わたしのころは彼を喜ばない。」<sup>しりぞ</sup>
- 39 私たちは、恐れ退<sup>おそ</sup>いて滅<sup>しりぞ</sup>びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。<sup>ほろ たも</sup>

# 一章

- 1 信仰は望んでいる事から<sup>22</sup>保証し、目に見えないものを確信させるものです。
- 2 昔の人々はこの信仰によって<sup>23</sup>称賛されました。
- 3 信仰によって、私たちは、この世界が神のことで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。
- 4 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。
- 5 信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。
- 6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。
- 7 信仰によって、ノアは、まだ見ていない事からについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。
- 8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。
- 9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。
- 10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。
- 11 信仰によって、サラも、すでにその年を過ぎた身であるのに、子を宿す力を与えられました。彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。
- 12 そこで、ひとりの、しかも死んでも同様のアブラハムから、天の星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれたのです。
- 13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。
- 14 彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。
- 15 もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会はあったでしょう。
- 16 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。
- 17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。
- 18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、
- 19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。
- 20 信仰によって、イサクは未来のことについて、ヤコブとエサウを祝福しました。
- 21 信仰によって、ヤコブは死ぬとき、ヨセフの子どもたちをひとりひとり祝福し、また自分の杖のかしらに寄りかかって礼拝しました。
- 22 信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子孫の脱出を語り、自分の骨について指図しました。
- 23 信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三か月の間隠されていました。彼らはその子の美しいのを見たからです。彼らは王の命令をも恐れませんでした。

- 24 信仰しんこうによって、モーセは成人したとき、パロの娘むすめの子と呼ばれることを拒み、
- 25 はかない罪の楽しみよを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。
- 26 彼は、キリストのゆえに受けるそしりよを、エジプトの宝にまさる大きな富とみと思いました。彼は報いむくとして与えられるものから目はなを離さなかつたのです。
- 27 信仰しんこうによって、彼は、王の怒りを恐れいかないで、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍おそび通したからです。
- 28 信仰しんこうによって、初子ういごを滅ほろぼす者が彼らに触れることのないように、彼は過越すぎこしと血の注ぎとを行いました。
- 29 信仰しんこうによって、彼らは、かわいた陸地を行くのと同様に紅海を渡りました。エジプト人は、同じようにしようとしたが、のみこまれてしまいました。
- 30 信仰しんこうによって、人々が七日の間エリコの城の周囲を回ると、その城壁はくずれ落ちました。
- 31 信仰しんこうによって、遊女ラハブは、偵察に來た人々たちを穩やかに受け入れたので、不従順な人々たちといっしょに滅ほろぼることを免れました。
- 32 これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者よげんしやたちについても話すならば、時が足りないでしょう。
- 33 彼らは、信仰しんこうによって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、
- 34 火の勢いきりを消し、劍の刃をのがれ、弱者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥おとしれました。
- 35 女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。
- 36 また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、
- 37 また、石で打たれ、**24** 試みを受け、のこぎりで引かれ、劍で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏とげしくなり、悩まされ、苦しめられ、
- 38 —この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした—荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。
- 39 この人々はみな、その信仰しんこうによってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。
- 40 神は私たちのために、さらにすぐれたものを**25** あらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全まつとうされるといふことはなかつたのです。

## 一二章

1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いつさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

2 信仰の<sup>26</sup>創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はるか昔をものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

4 あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。

5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。

「わが子よ。

主の懲らしめを軽んじてはならない。

主に責められて弱り果ててはならない。

6 主はその愛する者を懲らしめ、

受け入れるすべての子に、

むちを加えられるからである。」

7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。

8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。

9 さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。

10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

12 ですから、弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。

13 また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。なえた足が関節をはずさないため、いやむしろ、いやされるためです。

14 すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。

15 そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように、

16 また、不品行の者や、一杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がないようにしなさい。

17 あなたがたが知っているとおり、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。

18 あなたがたは、手でさわれる山、燃える火、黒雲、暗やみ、あらし、

19 ラッパの響き、ことばのとどろきに近づいているものではありません。このとどろきは、これを聞いた者たちが、それ以上一言も加えてもらいたくないと願ったものです。

- 20 彼らは、「たとい、<sup>けもの</sup>獣でも、<sup>ふ</sup>山に触れるものは石で打ち殺されなければならない」というその命令に耐えることができなかったのです。
- 21 また、その光景があまり恐ろしかったので、モーセは、「私は<sup>おそ</sup>恐れて、<sup>ふる</sup>震える」と言いました。
- 22 しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。
- 23 また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全<sup>ばん みん しん ばん しや まつと</sup>うされた義人たちの<sup>ぎ じん れい</sup>霊、
- 24 さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る<sup>けいやく</sup>注ぎかけの血に近づいています。
- 25 語っておられる方を拒まないように注意しなさい。なぜなら、地上においても、警告を与えた方を拒んだ彼らが<sup>おそ</sup>処<sup>しよ</sup>罰<sup>まつ</sup>を免れることができなかったとすれば、まして天から語っておられる方に背を向ける私たちが、<sup>せ</sup>処罰<sup>しよまつ</sup>を免れることができないのは当然ではありませんか。
- 26 あのかきは、その声が地を揺り動かしましたが、このたびは約束をもって、こう言われます。「わたしは、もう一度、地だけではなく、天も<sup>ゆ うご</sup>揺り動かす。」
- 27 この「もう一度」といふことは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、<sup>ゆ うご</sup>揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。
- 28 こういうわけで、私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。こうして私たちは、<sup>ゆ うご み くに</sup>慎重と恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕<sup>かん しや</sup>をすることができます。
- 29 私たちの神は<sup>や つ</sup>焼き尽くす火です。

# 一三章

きようだい あい

1 兄弟愛をいつも持つていなさい。

2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。

3 牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持つているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい。

4 結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寢床を汚してはいけません。なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行う者とをさばかれるからです。

5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持つているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」

6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。

「主は私の助け手です。私は恐れません。

人間が、私に対して何がきましょう。」

7 神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生活の<sup>27</sup>結末をよく見て、その信仰にならなさい。

8 イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。

9 さまざまの異なった教えによって迷わされてはなりません。食物によってではなく、恵みによって心を強めるのは良いことです。食物に気を取られた者は益を得ませんでした。

10 私たちには一つの祭壇があります。幕屋で仕える者たちには、この祭壇から食べる権利がありません。

11 動物の血は、罪のための供え物として、大祭司によって聖所の中まで持つて行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるからです。

12 ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

13 ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。

14 私たちは、この地上に永遠の都を持つているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。

15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名を<sup>28</sup>たたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。

16 善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようにいけにえを喜ばれるからです。

17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であつて、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。

18 私たちのために祈ってください。私たちは、正しい良心を持つていると確信しており、何事についても正しく行動しようとして願っているからです。

19 また、もっと祈ってくださるようお願いします。それだけ、私があなたがたのところに早く帰れるようになるからです。

20 永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、

21 イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行うことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。



22 兄弟たち。このような<sup>すす</sup>勧めの<sup>こと</sup>ばを<sup>29</sup>受けてください。私はただ手短に書きました。

23 私たちの兄弟テモテが<sup>しやくほう</sup>釈放されたことをお知らせします。もし彼が早く来れば、私は彼といっしょにあなたがたに会えるでしょう。

24 すべてのあなたがたの<sup>し どうしや</sup>指導者たち、また、すべての<sup>せい と</sup>聖徒たちによろしく言ってください。イタリヤから来た人たちが、あなたがたによろしくと言っています。

25 恵<sup>めぐ</sup>みが、あなたがたすべてとともにありますように。

- 1 別訳「長子を再びこの世界にお送りになるとき」
- 2 あるいは「奇蹟」
- 3 別訳「いくらか」
- 4 異本「彼をあなたの御手のわざの上に置かれました」を挿入
- 5 別訳「いくらか」
- 6 別訳「指導者」または「君」
- 7 異本「彼らは、そのみことばを聞いた人たちと、信仰によって結びつけられなかったからです」
- 8 あるいは「このことについて」
- 9 別訳「完全」
- 10 別訳「自分で神の子を...恥辱を与えている間は」として「そういう人々」の前に入れる
- 11 別訳「永遠に」
- 12 別訳「今の時のことをさす比喩です」
- 13 異本「来ようとしている」
- 14 異本「あなたがたの」
- 15 あるいは「遺言」
- 16 原語は一五節の「契約」と同じ
- 17 原語は一五節の「契約」と同じ
- 18 異本「遺言者が生きている間は効力があるでしょうか」
- 19 あるいは「遺言」
- 20 直訳「罪なしに」
- 21 あるいは「罪のために一つのいけにえをささげて後、永遠に神の右の座に着き」
- 22 別訳「...の実体であり」
- 23 直訳「あかしを得たのです」
- 24 異本 この句を欠くものがある
- 25 別訳「予見しておられたので」
- 26 別訳「指導者」
- 27 別訳「終わり」
- 28 直訳「告白する」
- 29 別訳「こらえてください」

# ヤコブの手紙

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。
- 2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。
- 3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。
- 4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。
- 5 あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきつと与えられます。
- 6 ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。
- 7 そういう人は、主から何かをいただけたらと思っはなりません。
- 8 そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。
- 9 貧しい境遇にある兄弟は、自分の高い身分を誇りとしなさい。
- 10 富んでいる人は、自分が低くされることに誇りを持ちなさい。なぜなら、富んでいる人は、草の花のように過ぎ去って行くからです。
- 11 太陽が熱風を伴って上って来ると、草を枯らしてしまいます。すると、その花は落ち、美しい姿は滅びます。同じように、富んでいる人も、働きの最中に消えて行くのです。
- 12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。
- 13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言っははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。
- 14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。
- 15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。
- 16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。
- 17 すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。父には移り変わりや、移り行く影はありません。
- 18 父はみこころのままに、真理のことばをもって私たちをお生みになりました。私たちを、いわば被造物の初穂にするためなのです。
- 19 愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを<sup>1</sup>知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。
- 20 人の怒りは、神の義を実現するものではありません。
- 21 ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。
- 22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であつてはいけません。
- 23 みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見ると人のようです。
- 24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであつたかを忘れてしまいます。
- 25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。
- 26 自分は宗教に熱心であると思つても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。
- 27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分

をきよく守ることです。

## 二章

- 1 私の兄弟たち。あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから、人をえこひいきしてはいけません。
- 2 あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな服装をした人が入って来、またみすばらしい服装をした貧しい人も入って来たとします。
- 3 あなたがたが、りっぱな服装をした人に目を留めて、「あなたは、こちらの良い席におすわりなさい」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい」と言うのであれば、
- 4 あなたがたは、自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったのではありませんか。
- 5 よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世<sup>2</sup>の貧しい人々を選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。
- 6 それなのに、あなたがたは貧しい人を軽蔑したのです。あなたがたをしいたげるのは富んだ人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。
- 7 あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名をけがすのも彼らではありませんか。
- 8 もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という<sup>3</sup>最高の律法を守るなら、あなたがたの行いはりっぱです。
- 9 しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。
- 10 律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。
- 11 なぜなら、「姦淫してはならない」と言われた方は、「殺してはならない」とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人を殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。
- 12 自由の律法によってさばかれる者らしく語り、またそのように行いなさい。
- 13 あわれみを示したことのない者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。
- 14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがなければ、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。
- 15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、
- 16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。
- 17 それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。
- 18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行いを持っています。行いのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行いによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」
- 19 あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。
- 20 ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知りたいと思いますか。
- 21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか。
- 22 あなたの見てのとおり、彼の信仰は彼の行いとともに働いたのであり、信仰は行いによって全うされ、
- 23 そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた」という聖書のことが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。
- 24 人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。
- 25 同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行いによって義と認められたではありませんか。

はな

26 たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです。

しんこう

## 三章

- 1 私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。
- 2 私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりつばに制御できる完全な人です。
- 3 馬を御するために、くつわをその口かけると、馬のからだ全体を引き回すことができます。
- 4 また、船を見なさい。あのように大きな物が、強い風に押されているときでも、ごく小さなかじによって、かじを取る人の思いどおりの所へ持って行かれるのです。
- 5 同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。ご覧なさい。あのように小さい火があのような大きい森を燃やします。
- 6 舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。
- 7 どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています。
- 8 しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。
- 9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。
- 10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あつてはなりません。
- 11 泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。
- 12 私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりするようなことは、できることでしょうか。塩水が甘い水を出すこともできないことです。
- 13 あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔和な行いを、良い生き方によって示しなさい。
- 14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇つてはいけません。真理に逆らって偽ることになります。
- 15 そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、<sup>4</sup>肉に属し、悪霊に属するものです。
- 16 ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。
- 17 しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。
- 18 義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和の<sup>5</sup>うちに蒔かれます。



## 四章

- 1 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。
- 2 あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。
- 3 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。
- 4 貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。
- 5 それとも、「<sup>6</sup>神は、私たちのうちに住まわせた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。
- 6 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」
- 7 ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。
- 8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。
- 9 あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。
- 10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。
- 11 兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。
- 12 律法を定め、さばきを行う方は、ただひとりであり、その方は救うことも滅ぼすこともできます。隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか。
- 13 聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう」と言う人たち。
- 14 あなたがたには、<sup>7</sup>あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。
- 15 むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」
- 16 ところがこのとおり、あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。
- 17 こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行わないなら、それはその人の罪です。

## 五章

- 1 聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲愴を思つて泣き叫びなさい。
- 2 あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、
- 3 あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食ひ尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。
- 4 見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。
- 5 あなたがたは、地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、殺される日にあたつて自分の心を太らせました。
- 6 あなたがたは、正しい人を罪に定めて、殺しました。彼はあなたがたに抵抗しません。
- 7 こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。
- 8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。
- 9 兄弟たち。互につぶやき合つてはいけません。さばかれないためです。見なさい。さばきの主が、戸口のところに立つておられます。
- 10 苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によつて語つた預言者たちを模範にしなさい。
- 11 見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさつたことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。
- 12 私の兄弟たちよ。何よりもまず、誓わないようにしなさい。天をさしても地をさしても、そのほかの何をさしてもです。ただ、「はい」を「はい」、「いいえ」を「いいえ」としなさい。それは、あなたがたが、さばきに会わないためです。
- 13 あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。喜んでいる人がいますか。その人は賛美しなさい。
- 14 あなたがたのうちに病氣の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によつて、オリーブ油を塗つて祈ってもらいなさい。
- 15 信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。
- 16 ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。
- 17 エリヤは、私たちと同じような人でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六か月の間、地に雨が降りませんでした。
- 18 そして、再び祈ると、天は雨を降らせ、地はその実を実らせました。
- 19 私の兄弟たち。あなたがたのうちに、真理から迷ひ出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すようなことがあれば、
- 20 罪人を迷ひの道から引き戻す者は、罪人のたましいを死から救ひ出し、また、多くの罪をおおうのだということを、あなたがたは知っていないさい。

- 1 別訳「知っておきなさい」
- 2 直訳「に対して」
- 3 あるいは「（私たちの）王の律法」
- 4 あるいは「靈的でなく」
- 5 あるいは「のために」
- 6 別訳「神が私たちのうちに住まわせた御霊は、ねたむほどに（私たちを）慕い求めておられる」
- 7 異本「あす、あなたがたのいのちは、どのようなものであるか」

# ペテロの手紙第一

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 イエス・キリストの使徒ペテロから、Pont、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ヒテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、
- 2 父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にますます豊かにされますように。
- 3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。
- 4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。
- 5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。
- 6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならないのですが、
- 7 あなたがたの信仰の<sup>1</sup>試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのときに称賛と栄光と栄誉になることがわかります。
- 8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはいないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。
- 9 これは、信仰の結果である、<sup>2</sup>たましいの救いを得ているからです。
- 10 この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。
- 11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、<sup>3</sup>だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。
- 12 彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはつきり見たいと願っていることなのです。
- 13 ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現れのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。
- 14 従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず、
- 15 あなたがたを召して下さった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。
- 16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない」と書いてあるからです。
- 17 また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。
- 18 ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、
- 19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。
- 20 キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現れてくださいました。
- 21 あなたがたは、死者の中からこのキリストをよみがえらせて彼に栄光を与えられた神を、キリストによって信じる人々です。このようにして、あなたがたの信仰と希望は神にかかっているのです。

22 あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに<sup>4</sup>心から熱く愛し合いなさい。

23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。

24 「人はみな草のようで、  
その栄えは、みな草の花のようだ。  
草はしおれ、  
花は散る。

25 しかし、主のことばは、  
とこしえに変わることがない。」  
とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。

## 二章

- 1 ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、
- 2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、5みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。
- 3 あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。
- 4 主のもとに来なさい。主は、人に捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。
- 5 あなたがたも生ける石として、霊の家に6築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。
- 6 なぜなら、聖書にこうあるからです。
- 「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して7失望させられることがない。」
- 7 したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが 礎の石となった」のであって、
- 8 「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからです。またそうなるように定められていたのです。
- 9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわさを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。
- 10 あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。
- 11 愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。
- 12 異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行いを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。
- 13 人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、
- 14 また、悪を行う者を罰し、善を行う者をほめるように王から遣わされた総督であっても、8そうしなさい。
- 15 というのは、善を行って、愚かな人々の無知の口を封じることが、神のみこころだからです。
- 16 あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。
- 17 すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。
- 18 しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。
- 19 人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。
- 20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。
- 21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。
- 22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。

23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。

24 そして自分から<sup>じゆうじ</sup>9十字架<sup>か</sup>の上で、私たちの罪<sup>つみ</sup>をその身に負われました。それは、私たちが罪<sup>つみ</sup>を離<sup>はな</sup>れ、義<sup>ぎ</sup>のために生きるためです。キリストの打<sup>う</sup>ち傷<sup>きず</sup>のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧<sup>ぼくしや</sup>者であり監<sup>かん</sup>督<sup>とく</sup>者である方のもとに帰ったのです。



# 三章

1 同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であつても、妻の無言のふるまいによつて、神のものとされるようになるためです。

2 それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。

3 あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、

4 むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。

5 むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾つて、夫に従つたのです。

6 たとえばサラも、アブラハムを主と呼んで彼に従いました。あなたがたも、どんなことをも恐れないで善を行えば、サラの子となるのです。

7 同じように、夫たちよ。妻が女性であつて、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

8 最後に申します。あなたがたはみな、心を一つにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。

9 悪をもつて悪に報いず、侮辱をもつて侮辱に報いず、かえつて祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。

10 「いのちを愛し、  
幸いな日々を過ごしたいと思う者は、  
舌を押さえて悪を言わず、  
くちびるを閉ざして偽りを語らず、

11 悪から遠ざかつて善を行い、  
平和を求めてこれを追い求めよ。

12 主の目は義人の上に注がれ、  
主の耳は彼らの祈りに傾けられる。  
しかし主の顔は、  
悪を行う者に立ち向かう。」

13 もし、あなたがたが善に熱心であるなら、だれがあなたがたに害を加えるでしょう。

14 いや、たとい義のために苦しむことがあるにしても、それは幸いなことです。彼らの脅かしを恐れたり、それによつて心を動揺させたりしてはいけません。

15 むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。

16 ただし、優しく、<sup>10</sup>慎み恐れて、また、正しい良心をもつて弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの正しい生き方をのしる人たちが、あなたがたをそしつたことで恥じ入るでしょう。

17 もし、神のみこころなら、善を行つて苦しみを受けるのが、悪を行つて苦しみを受けるよりよいのです。

18 キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなつたのです。それは、肉においては死に渡され、<sup>11</sup>霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。

19 その霊において、キリストは捕らわれの霊たちのもとに行つて、みことばを語られたのです。

20 昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待つておられたときに、従わなかつた霊たちのことです。わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通して救われたのです。

21 そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。バプテスマは肉体の汚れを取り除く

ものではなく、正しい良心の神への誓いであり、イエス・キリストの復活によるものです。

22 キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの權威と權力を従えて、神の右の座におられます。

## 四章

- 1 このように、キリストは肉体において<sup>12</sup>苦しみを受けられたのですから、あなたがたも同じ心構えて自分自身を武装しなさい。肉体において苦しみを受けた人は、罪とのかかわりを断ちました。
- 2 こうしてあなたがたは、地上に残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。
- 3 あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行い、好色、情欲、醉酒、遊興、宴会騒ぎ、<sup>13</sup>忌むべき偶像礼拝などにふけたものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。
- 4 彼らは、あなたがたが自分たちといっしょに度を過ぎた放蕩に走らないので不思議に思い、また悪口を言います。
- 5 彼らは、生きている人々をも死んだ人々をも、すぐにもさばこうとしている方に対し、申し開きをしなければなりません。
- 6 というのは、死んだ人々にも福音が宣べ伝えられていたのですが、それはその人々が肉体においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神によって生きるためでした。
- 7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。
- 8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。
- 9 つぶやかないで、互いに親切にもてなし合いなさい。
- 10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。
- 11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。
- 12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、
- 13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。
- 14 もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。
- 15 あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、悪を行う者、みだりに他人に干渉する者として苦しみを受けるようなことがあってはなりません。
- 16 しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、この名のゆえに神をあがめなさい。
- 17 なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。
- 18 義人がかろうじて救われるのだとしたら、神を敬わない者や罪人たちは、<sup>14</sup>いったいどうなるのでしょうか。
- 19 ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行うにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せしなさい。

## 五章

1 そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現れる栄光にあずかる者として、お勧めします。

2 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを、牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自分から進んでそれをなし、卑しい利得を求める心からではなく、心を込めてそれをしなさい。

3 あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。

4 そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の<sup>15</sup>冠を受けるのです。

5 同じように、若い人たちよ。長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。

6 ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。

7 あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

9 強く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。

10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのおとで完全にし、強く立たせ、強くし、<sup>16</sup>不動の者としてくださいます。

11 どうか、神のご支配が世々限りなくありますように。アーメン。

12 私の認めている忠実な兄弟シルワノによって、私はここに簡潔に書き送り、勧めをし、これが神の真の恵みであることをあかししました。この恵みの中に、しっかりと立っていなさい。

13 バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた<sup>17</sup>婦人がよろしくと言っています。また私の子マルコもよろしくと言っています。

14 愛の口づけをもって互いにあいさつをかわしなさい。

キリストにあるあなたがたすべての者に、平安がありますように。

- 1 別訳「純粹さ」
- 2 異本「あなたがたの」を加える
- 3 別訳「いつ」
- 4 異本「きよい心から」
- 5 別訳「靈的な」
- 6 別訳「あなたがた自身を...築き上げなさい」
- 7 あるいは「恥をこうむる」
- 8 「そうしなさい」は補足
- 9 あるいは「十字架に至るまで」
- 10 あるいは「恐れをもって」
- 11 あるいは「御霊によつて」
- 12 すなわち「死なれた」
- 13 直訳「不法な」
- 14 直訳「どこへ出ることになるのでしょうか」
- 15 直訳「花輪」
- 16 異本「不動の者とし」を欠く
- 17 異本「（バビロンにある）教会」

# ペテロの手紙第二

[一章](#) [二章](#) [三章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって私たちと同じ<sup>1</sup> 尊い信仰を受けた方々へ。
- 2 神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にあります豊かにされますように。
- 3 というのは、私たちをご自身の栄光と徳<sup>2</sup> によってお召しになった方を私たちが知ったことによって、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与えるからです。
- 4 その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。
- 5 こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、
- 6 知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、
- 7 敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。
- 8 これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません。
- 9 これらを備えていない者は、近視眼であり、盲目であって、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れてしまったのです。
- 10 ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行っていれば、つまりくことなど決してありません。
- 11 このようにあなたがたは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを豊かに加えられるのです。
- 12 ですから、すでにこれらのことを知っており、現に持っている真理に堅く立っているあなたがたであるといえ、私はいつもこれらのことを、あなたがたに思い起こさせようとするのです。
- 13 私が地上の幕屋にいる間は、これらのことを思い起こさせることによって、あなたがたを奮い立たせることを、私のなすべきことと思っています。
- 14 それは、私たちの主イエス・キリストも、私にはつきりお示しになったとおり、私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。
- 15 また、私の去った後に、あなたがたがいつでもこれらのことを思い起こせるよう、私は努めたいのです。
- 16 私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。
- 17 キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」
- 18 私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。
- 19 <sup>3</sup> また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなつて、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。
- 20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。
- 21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。

## 二章

1 しかし、イスラエルの中には、よ げん しや せ 預言者も出ました。同じように、あな が た の 中にも、きやう し あらわ せ 教師が現れるようになります。彼らは、減 び を もたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するよう な こととさえして、自分たちの身にすみやかな減 び を 招いています。

2 そして、多くの者が彼らの好色 へんしよく にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。

3 また彼らは、貪欲 どんよく なので、作り事 くりもの のことばをもつてあなたがたを食物にします。彼らに対するさばきは、昔から おこた 怠りなく行われており、彼らが減 ば されないまですることはありません。

4 神は、罪を犯した御使 つかい いたちを、容赦 じやうしや せず、地獄 じごく に引き渡し、さばきの時まで暗やみ くらやみ の穴 けつ の中に閉 へ 込めてしまわれ ました。

5 また、昔の世界 くるよ のを赦 じやう せず、義 ぎ を宣 の べ 伝えたノア たち八人の者を保護 し、不敬虔 な世界に洪水 こうすい を起こされました。

6 また、ソドムとゴモラの町を破滅 ぱめつ に定めて灰にし、以後の不敬虔 な者 へのみせしめとされました。

7 また、無節操 な者 たちの好色 なふるまいによって悩 なや まされていた義人 ロトを救い出されました。

8 というのは、この義人 ぎじん は、彼らの間に住んでいましたが、不法 な行いを見聞 けん きて、日々その正しい心 いた を痛めていた からです。

9 これらのことでわかるように、主は、敬虔 な者 たちを、誘惑 誘わく から救い出し、不義 な者 どもを、さばきの日まで、懲 ちやう 罰 ばつ のもとに置くことを心得ておられるのです。

10 汚れた情欲 けいよく を燃や し、肉 にく から従 したが って歩み、権威 けん い を侮 へん する者 たちに対しては、特にそうなのです。彼らは、大胆 だいたん 不敵 ぶてき な、尊大 そんだい な者 たちで、<sup>5</sup> 栄誉 えいよ ある人 たちをそしって、恐れるところがありません。

11 それに比べると、御使 つかい いたちは、勢 いにも力 ちから にもまさっているにもかかわらず、主の御前 みまへ に彼らをそしって訴え ることはしません。

12 ところがこの者 どもは、捕らえられ殺されるために自然に生まれついた、理性 りせい のない動物と同じで、自分が知りもしないことをそしるのです。それで動物が滅 ほろ ぼされるように、彼らも滅 ほろ ぼされてしまうのです。

13 彼らは不義 ぶぎ の報いとして損害 した が を受けるのです。彼らは昼のうから飲 のみ 騒 さわ ぐことを楽しみとえています。彼らは、しみや傷 きず のようなもので、あなたがたといっしょに宴席 えんせき に連なるときに自分たちの<sup>6</sup> だましごとを楽しんでいるのです。

14 その目は淫行 いうこう に満ちており、罪 つみ に関しては飽 あ くることを知らず、心の定まらない者 たちを誘惑 し、その心は欲 いく に目が ありません。彼らはのろいの子です。

15 彼らは正しい道を捨ててさまよっています。不義 ぶぎ の報酬 ほうしゆう を愛したペオルの子バラムの道に従 したが ったのです。

16 しかし、バラムは自分の罪を とがめられました。ものを言うことのないろばが、人間の声でものを言い、この預言 げん 者 たちの狂った振舞いをはばんだのです。

17 この人 たちは、水のない泉、突風 いたずみ とつふう に吹き払われる霧 霧 です。彼らに用意されているものは、<sup>7</sup> まっ暗 なやみです。

18 彼らは、むなしだい言 たいげん そう じ 語を吐いており、誤 ま った生き方をしていて、ようやくそれをのがれようとしている人々 を肉欲 と好色 へんしよく によって誘惑 し、

19 その人 たちに自由を約束しながら、自分自身が滅 ほろ びの奴隷 どれい なのです。人はだれかに征服 せいふく されれば、その征服 せいふく 者 者の奴隷 どれい となつたのです。

20 主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれ て征服 せいふく されるなら、そのような人 たちの終わりの状態 は、初め じゆめ の状態 よりももっと悪いものとなります。

21 義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖 せい な命令 にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとつてよかったのです。

22 彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に へん 戻る」とか、「豚は身を洗って、またどろの中 ちゆう ころが へん へる」とか



いう、ことわざとおりです。

# 三章

- 1 愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、これらの手紙により、記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるためなのです。
- 2 それは、聖なる預言者たちによって前もって語られたみことばと、あなたがたの使徒たちが語った、主であり救い主である方の命令とを思い起こさせるためなのです。
- 3 まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、
- 4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」
- 5 こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、
- 6 当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。
- 7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。
- 8 しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。
- 9 主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。
- 10 しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、9天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは10焼き尽くされます。
- 11 このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。
- 12 そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。
- 13 しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。
- 14 そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。
- 15 また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。
- 16 その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所の場合もそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。
- 17 愛する人たち。そういうわけですから、このことをあらかじめ知っておいて、よく気をつけ、無節操な者たちの迷いに誘い込まれて自分自身の堅実さを失うことにならないようにしなさい。
- 18 私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。

- 1 あるいは「種類の」
- 2 あるいは「（徳）へと」
- 3 別訳「こうして私たちには、預言のことばがいつそう確実なものとされたのです」
- 4 あるいは「試練」
- 5 あるいは「御使いたち」
- 6 異本「愛餐」 参照ユダー三
- 7 直訳「やみの暗黒」
- 8 別訳「彼らは次のことを故意に忘れようとしているのです」
- 9 別訳「諸原素」
- 10 異本「見つけ出されます」

# ヨハネの手紙第一

[一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)

[【戻る】](#)

## 一章

- 1 <sup>はじ</sup>初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見 たもの、じつと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、
- 2 —このいのちが<sup>あらわ</sup>現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠<sup>えい えん</sup>のいのちを伝えます。すなわち、<sup>み ちち</sup>御父とともにあつて、私たちに<sup>あらわ</sup>現された<sup>えい えん</sup>永遠のいのちです。—
- 3 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、<sup>み ちち</sup>御父および<sup>み こ</sup>御子イエス・キリストとの交わりです。
- 4 私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。
- 5 神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。
- 6 もし私たちが、神と交わりがあると言っていないが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは<sup>いつわ</sup>偽りを言っているのであつて、真理を行つてはいません。
- 7 しかし、もし神が光の中におられるように、<sup>つみ</sup>私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは<sup>たが</sup>互いに交わりを保ち、<sup>たも</sup>御子イエスの血はすべての罪から<sup>み</sup>私たちをきよめます。
- 8 もし、<sup>つみ</sup>罪はないと言うなら、私たちは自分を<sup>あざむ</sup>欺いており、真理は私たちのうちにありません。
- 9 もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から<sup>つみ</sup>私たちをきよめてくださいます。
- 10 もし、<sup>つみ</sup>罪を犯してはいないと言うなら、<sup>おか</sup>私たちは神を<sup>いつわ</sup>偽り者と<sup>もの</sup>するのです。神のみことばは私たちのうちにありません。

## 二章

- 1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さなくなるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。
- 2 この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。
- 3 もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。
- 4 神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。
- 5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。
- 6 神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。
- 7 愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いているわけではありません。むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです。
- 8 しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとっても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。
- 9 光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もお、やみの中にいるのです。
- 10 兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、<sup>1</sup>つまずくことはありません。
- 11 兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩んでいるのであって、自分がどこへ行くのか知らないのです。やみが彼の目を見えなくしたからです。
- 12 子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。
- 13 父たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。
- 14 小さい者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが御父を知ったからです。父たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。
- 15 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに<sup>2</sup>御父を愛する愛はありません。
- 16 すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。
- 17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみことばを行う者は、いつまでもながらえます。
- 18 小さい者たちよ。今は終わりの時です。あなたがたが反キリストの来ることを聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であることがわかります。
- 19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。もし私たちの仲間であったのなら、私たちといっしょにとどまっていたことでしょう。しかし、そうなったのは、彼らがみな私たちの仲間でなかったことが明らかにされるためなのです。
- 20 あなたがたには聖なる方からのそそぎの油があるので、<sup>3</sup>だれでも知識を持っています。
- 21 このように書いて来たのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからであり、<sup>4</sup>また、偽りはすべて真理から出てはいないからです。
- 22 偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。御父と御子を否認する者、それが反キリストです。
- 23 だれでも御子を否認する者は、御父を持たず、御子を告白する者は、御父をも持っているのです。
- 24 あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどま

ているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。

25 それがキリストご自身の私たちにお与えになった約束であって、永遠えいえんのいのちです。

26 私は、あなたがたを惑まどわそうとする人たちについて以上のことを書いて来ました。

27 あなたがたの場合は、キリストから受けたそそぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。彼の油がすべてのことについてあなたがたを教えるように、——その教えは真理であって偽いつわりりではありません——また、その油があなたがたに教えたとおりに、あなたがたはキリストのうちにSとどまるのです。

28 そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現あらわれるとき、私たちが信しん頼らいを持ち、その来臨らいりんのときに、御前みまえで恥はじ入いるということのないためです。

29 もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、義ぎを行う者がみな神から生まれたこともわかるはずで  
す。

# 三章

- 1 私たちが神の子どもと呼ばれるために、—事実、いま私たちは神の子どもです—御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。
- 2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。
- 3 キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。
- 4 罪を犯している者はみな、不法を行っているのです。罪とは律法に逆らうことなのです。
- 5 キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。
- 6 だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。
- 7 子どもたちよ。だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しくあられるのと同じように正しいのです。
- 8 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。
- 9 だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。
- 10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。
- 11 互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。
- 12 カインのようであってはいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行いは悪く、兄弟の行いは正しかったからです。
- 13 兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。
- 14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。
- 15 兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。
- 16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てべきです。
- 17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。
- 18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。
- 19 それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。
- 20 たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。
- 21 愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、
- 22 また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。
- 23 神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛



し合うこと<sup>あ</sup>です。

24 神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御<sup>み</sup>霊<sup>たま</sup>によって知るのです。

## 四章

- 1 愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。
- 2 人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。
- 3 イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ています。
- 4 子どもたちよ。あなたがたは神から出た者です。そして彼らに勝ったのです。あなたがたのうちにられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。
- 5 彼らはこの世の者です。ですから、この世のことばを語り、この世もまた彼らの言うことに耳を傾けます。
- 6 私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分けます。
- 7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。
- 8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。
- 9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。
- 10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。
- 11 愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちがまた互いに愛し合うべきです。
- 12 いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおりられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。
- 13 神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおりられることがわかります。
- 14 私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。
- 15 だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおりられ、その人も神のうちにいます。
- 16 私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおります。
- 17 このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあつてキリストと同じような者であるからです。
- 18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。
- 19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。
- 20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、<sup>7</sup>目に見えない神を愛することはできません。
- 21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。

# 五章

- 1 イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。
- 2 私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。
- 3 神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。
- 4 なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。
- 5 世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。
- 6 このイエス・キリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られたのです。そして、あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。
- 7 あかしするものが三つあります。
- 8 御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです。
- 9 もし、私たちが人間のあかしを受け入れるなら、神のあかしはそれにまさるものです。御子についてあかしされたことが神のあかしだからです。
- 10 神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。
- 11 そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。
- 12 御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。
- 13 私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。
- 14 何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。
- 15 私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので。
- 16 だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。死に至る罪があります。この罪については、願うようには言いません。
- 17 不正はみな罪ですが、死に至らない罪があります。
- 18 神によって生まれた者はだれも罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた方が彼を守ってくださるので、悪い者は彼に触れることができないのです。
- 19 私たちは神からの者であり、世全体は悪い者の支配下にあることを知っています。
- 20 しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。
- 21 子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。

- 1 別訳「つまずかせる」
- 2 異本「神」
- 3 異本「すべてのことを知っています」
- 4 別訳「また、偽りは...出ていないことを」として、前の行の「真理を」の次に置く
- 5 別訳「とどまりなさい」
- 6 あるいは「なぜなら、たとえ自分の心に責められても、神は私たちの心よりも大きく...」
- 7 異本「どうして...愛することができるでしょうか」

## ヨハネの手紙第二

- 1 長老から、選ばれた夫人とその子どもたちへ。私はあなたがたをほんとうに愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々がみな、そうです。
- 2 このことは、私たちのうちに宿る真理によることです。そして真理はいつでも私たちとともにあります。
- 3 真理と愛のうちに、父なる神と御父の御子イエス・キリストからの恵みとあわれみと平安は、私たちとともにあります。
- 4 あなたの子どもたちの中に、御父から私たちが受けた命令のとおり真理のうちに歩んでいる人たちがいるのを知って、私は非常に喜んでいます。
- 5 そこで夫人よ。お願いしたいことがあります。それは私が新しい命令を書くのではなく、初めから私たちが持っていたものののですが、私たちが互いに愛し合うということです。
- 6 愛とは、<sup>1</sup>御父の命令に従って歩むことであり、命令とは、あなたがたが初めから聞いているとおり、愛のうちに歩むことです。
- 7 なぜお願いするかと言えば、人を惑わす者、すなわち、イエス・キリストが人として来られたことを告白しない者が大ぜい世に出て行ったからです。こういう者は惑わす者であり、反キリストです。
- 8 よく気をつけて、<sup>2</sup>私たちの労苦の実をだいにしにすることなく、豊かな報いを受けるようになりなさい。
- 9 だれでも行き過ぎをして、キリストの教えのうちにとどまらない者は、神を持っていません。その教えのうちにとどまっている者は、御父をも御子をも持っています。
- 10 あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。
- 11 そういう人にあいさつすれば、その悪い行いをともにすることになります。
- 12 あなたがたに書くべきことがたくさんありますが、紙と墨でたくはありません。あなたがたのところに行つて、顔を合わせて語りたいと思います。<sup>3</sup>私たちの喜びが全きものとなるためにです。
- 13 選ばれたあなたの姉妹の子どもたちが、あなたによろしくと言っています。

1 直訳「彼の」 別訳「イエス・キリストの」

2 異本「あなたがたの」

3 異本「あなたがたの」

# ヨハネの手紙第三

- 1 長老<sup>ちやうろう</sup>から、愛<sup>あい</sup>するガイオへ。私はあなたをほんとうに愛<sup>あい</sup>しています。
- 2 愛<sup>あい</sup>する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈<sup>いの</sup>ります。
- 3 兄弟<sup>しょうぎ</sup>たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいるその真実を証言<sup>しやうげん</sup>して<sup>1</sup>くれるので、私は非常に喜んでいます。
- 4 私の子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。
- 5 愛<sup>あい</sup>する者よ。あなたが、旅をしているあの兄弟たちのために行っているいろいろなことは、真実な行いです。
- 6 彼らは教会の集まりであなたの愛<sup>あい</sup>についてあかししました。あなたが神にふさわしいしかたで彼らを次の旅に送り出してくれるなら、それはりっぱなことです。
- 7 彼らは御名<sup>みな</sup>のために出て行きました。異邦人<sup>いほうじん</sup>からは何も受けていません。
- 8 ですから、私たちはこのような人々をもてなすべきです。そうすれば、私たちは真理のために彼らの同労者<sup>どうろうしや</sup>となれるのです。
- 9 私は教会に対して少しばかり書き送ったのですが、彼らの中でかしらになりたがっているデオテレベスが、私たちの言うことを聞き入れません。
- 10 それで、私が行ったら、彼のしている行<sup>こう</sup>いを取り上げるつもりです。彼は意地悪いことばで私たちをののしり、それでもあきらまずに、自分が兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人々の邪魔<sup>じやま</sup>をし、教会から追いつけているのです。
- 11 愛<sup>あい</sup>する者よ。悪を見ならわな<sup>ぜん</sup>いで、善を見ならいなさい。善<sup>ぜん</sup>を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことのない者です。
- 12 デメテリオはみなの人からも、また真理そのものからも証言<sup>しやうげん</sup>されています。私たちも証言<sup>しやうげん</sup>します。私たちの証言<sup>しやうげん</sup>が真実であることは、あなたも知っているところです。
- 13 あなたに書き送りたいことがたくさんありましたが、筆<sup>すみ</sup>と墨でしたくはありません。
- 14 間もなくあなたに会いたいと思います。そして顔を合わせて話し合ひましょう。
- 15 平安があなたにありますように。友人たちが、あなたによろしくと言っています。そちらの友人たちひとりひとりによろしく言ってください。

1あるいは「くれたので、私は非常に喜びました」



# ユダの手紙

- 1 イエス・キリストのしもべであり、ヤコブの兄弟であるユダから、父なる神にあって愛され、イエス・キリストのために守られている、召された方々へ。
- 2 どうか、あわれみと平安と愛が、あなたがたの上に、ますます豊かにされますように。
- 3 愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていますが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。
- 4 というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縦に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。
- 5 あなたがたは、すべてのことをすっかり知っているにしても、私はあなたがたに思い出させたいことがあるのです。それは、<sup>1</sup>主が、民をエジプトの地から救い出し、次に、信じない人々を滅ぼされたということです。
- 6 また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。
- 7 また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています。
- 8 それなのに、この人たちもまた同じように、夢見る者であり、肉体を汚し、権威ある者を軽んじ、<sup>2</sup>栄えある者をそしています。
- 9 御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるように」と言いました。
- 10 しかし、この人たちは、自分には理解もできないことをそしり、わきまえない動物のように、本能によって知るような事からの中で滅びるのです。
- 11 ああ。彼らはカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのようにそむいて滅びました。
- 12 彼らは、あなたがたの愛餐の<sup>3</sup>しみです。恐れげもなくともに宴を振りますが、自分だけを養っている者であり、風に吹き飛ばされる、水のない雲、実を結ばない、枯れに枯れて、根こそぎにされた秋の木、
- 13 自分の恥のあわをわき立たせる海の荒波、さまよう星です。まっ暗なやみが、彼らのために永遠に用意されています。
- 14 アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。「見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。
- 15 すべての者にさばきを行い、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」
- 16 彼らはぶつぶつ言う者、不平を鳴らす者で、自分の欲望のままに歩んでいます。その口は大きなことを言い、利益のためにへつらって人をほめるのです。
- 17 愛する人々よ。私たちの主イエス・キリストの使徒たちが、前もって語ったことばを思い起こしてください。
- 18 彼らはあなたがたにこう言いました。「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者どもが現れる。」
- 19 この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間です。
- 20 しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって

いの  
祈り、

21 神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。

22 疑いを抱く人々を<sup>4</sup>あわれみ、

23 火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。

24 あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、

25 すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、權威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

1 異本「イエス」

2 あるいは「（天使たちの）栄光」

3 あるいは「暗礁」

4 異本「確信づけ」

# ヨハネの黙示録

- [一章](#) [二章](#) [三章](#) [四章](#) [五章](#)
- [六章](#) [七章](#) [八章](#) [九章](#) [一〇章](#)
- [十一章](#) [十二章](#) [十三章](#) [十四章](#) [十五章](#)
- [一六章](#) [一七章](#) [一八章](#) [一九章](#) [二〇章](#)
- [二一章](#) [二二章](#)

[【戻る】](#)

# 一章

- 1 イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。
- 2 ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかしした。
- 3 この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを<sup>1</sup>心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。
- 4 ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、後に来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、
- 5 また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、めぐ恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解放ち、
- 6 また、私たちを<sup>2</sup>王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。
- 7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。
- 8 神である主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」
- 9 私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。
- 10 私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。
- 11 その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エベソ、スミルナ、ベルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」
- 12 そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。
- 13 それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。
- 14 その頭と髪のはきは、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。
- 15 その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。
- 16 また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。
- 17 それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、
- 18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。
- 19 そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。
- 20 わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

## 二章

1 エベソにある教会の御使いに書き送れ。

『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の<sup>3</sup>間を歩く方が言われる。

2 「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。

3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。

4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。

7 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」』

8 また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。

『初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。

9 「わたしは、あなたの苦しみと貧しさとを知っている。——しかしあなたは実際は富んでいる——またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。

10 あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちの有人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

11 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。」』

12 また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。

『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。

13 「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。

14 しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行わせた。

15 それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。

16 だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。

17 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」』

18 また、テアテラにある教会の御使いに書き送れ。

『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神の子が言われる。

19 「わたしは、あなたの行いとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近ごろの行いが初めの

行いにまさっていることも知っている。

20 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行わせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。

21 わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとししない。

22 見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行う者たちも、<sup>4</sup>この女の行いを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。

23 また、わたしは、この女の子どもたちをも<sup>5</sup>死病によって殺す。こうして全教会は、わたしが人の<sup>6</sup>思いと心を探る者であることを知るようになる。また、わたしは、あなたがたの行いに応じてひとりひとりに報いよう。

24 しかし、テアテラにいる人たちの中で、この教えを受け入れておらず、彼らの言うサタンの深いところをまだ知っていないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。

25 ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていないさい。

26 勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、<sup>7</sup>諸国の民を支配する権威を与えよう。

27 彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを<sup>8</sup>治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。

28 また、彼に明けの明星を与えよう。

29 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」』

# 三章

1 また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。

『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。

2 目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行いが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。

3 だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさないければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。

4 しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。

5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表す。

6 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』』

7 また、フィラデルフィヤにある教会の御使いに書き送れ。

『聖なる方、真実な方、ダビデのかぎを持っている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、彼が閉じるとだれも開く者がなく、その方がこう言われる。

8 「<sup>9</sup>わたしは、あなたの行いを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。

9 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうでなくて、うそを言っている者たちに、わたしは<sup>10</sup>こうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。

10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを<sup>11</sup>試みるために、<sup>12</sup>全世界に来ようとしている<sup>13</sup>試練の時には、あなたを守ろう。

11 わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていないなさい。

12 勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。

13 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』』

14 また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。

『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。

15 「わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。

16 このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。

17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

18 わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現さないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。



い。

19 わたしは、愛する者をしかつたり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

22 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。「 』 』 」

## 四章

1 その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言った。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」

2 たちまち私は御霊に感じた。すると見よ。天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、

3 <sup>14</sup>その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える<sup>15</sup>虹があった。

4 また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。

5 御座からいならずまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。

6 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。

7 第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。

8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」

9 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、

10 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。

11 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

## 五章

1 また、私は、御座<sup>み ざ</sup>にすわっておられる方の右<sup>みぎ</sup>の手に巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>があるのを見た。それは内側にも外側にも文字が書きしるされ、七つの封印<sup>ふういん</sup>で封<sup>ふう</sup>じられていた。

2 また私は、ひとりの強い御使<sup>み つか</sup>いが、大声でふれ広めて、「巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を開いて、封印<sup>ふういん</sup>を解<sup>と</sup>くのにふさわしい者はだれか」と言っているのを見た。

3 しかし、天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかった。

4 巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を開くにも、見るのにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったので、私は激<sup>はげ</sup>しく泣<sup>な</sup>いていた。

5 すると、長老<sup>ちやうろう</sup>のひとりが、私に言った。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出た獅子<sup>し し</sup>、ダビデの根が勝利を得たので、その巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を開いて、七つの封印<sup>ふういん</sup>を解<sup>と</sup>くことができます。」

6 さらに私は、16御座<sup>み ざ</sup>——そこには、四つの生き物<sup>ちやうろう</sup>がいる——と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊<sup>こやう</sup>が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目<sup>め</sup>があった。その目は、全世界に遣<sup>み</sup>わされた神の七つの御霊<sup>みたま</sup>である。

7 小羊は近づいて、御座<sup>み ざ</sup>にすわる方の右の手から、巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を受け取った。

8 彼<sup>み</sup>が巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を受け取ったとき、四つの生き物<sup>ちやうろう</sup>と二十四人の長老<sup>ちやうろう</sup>は、おのおの、立<sup>たて</sup>琴<sup>こと</sup>と、香<sup>かう</sup>のいっばい入った金<sup>はち</sup>の鉢<sup>はち</sup>を持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。

9 彼らは、新しい歌を歌って言った。

「あなたは、巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を受け取って、その封印<sup>ふういん</sup>を解<sup>と</sup>くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族<sup>ぶ ぞく</sup>、国語<sup>こくご</sup>、民族<sup>みん ぞく</sup>、国民<sup>こく じん</sup>の中から、神のために人々<sup>あがな</sup>を贖<sup>あがな</sup>い、

10 私たちの神のために、この人々を17王国<sup>こく</sup>とし、祭司<sup>さいし</sup>とされました。彼らは地上を治めるのです。」

11 また私は見た。私は、御座<sup>み ざ</sup>と生き物<sup>ちやうろう</sup>と長老たちとの回りに、多くの御使<sup>み つか</sup>いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍<sup>いくまん</sup>、千の幾千倍であった。

12 彼らは大声で言った。

「ほふられた小羊は、力<sup>ちから</sup>と、富<sup>とみ</sup>と、知恵<sup>ち え</sup>と、勢<sup>いきお</sup>いと、誉<sup>ほま</sup>れと、栄光<sup>さん び</sup>と、賛美<sup>さん び</sup>を受けるにふさわしい方です。」

13 また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。

「御座<sup>み ざ</sup>にすわる方と、小羊<sup>さん び</sup>とに、賛美<sup>さん び</sup>と誉<sup>ほま</sup>れと栄光<sup>えい げん</sup>と力が永遠<sup>えい げん</sup>にあるように。」

14 また、四つの生き物はアーメンと言<sup>ちやうろう</sup>い、長老<sup>ちやうろう</sup>たちはひれ伏<sup>ふ</sup>して拝<sup>おが</sup>んだ。

## 六章

- 1 また、私は見た。小羊が七つの封印の一つを解いたとき、四つの生き物の一つが、雷<sup>かみなり</sup>のような声で「来なさい」<sup>18</sup>と言うのを私は聞いた。
- 2 私は見た。見よ。白い馬であつた。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠<sup>かんむり</sup>を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行つた。
- 3 小羊が第二の封印を解いたとき、私は、第二の生き物が、「来なさい」と言うのを聞いた。
- 4 すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪<sup>うば</sup>い取ることが許された。人々が、互<sup>たが</sup>いに殺し合うようになるためであつた。また、彼に大きな剣<sup>つるぎ</sup>が与えられた。
- 5 小羊が第三の封印を解いたとき、私は、第三の生き物が、「来なさい」と言うのを聞いた。私は見た。見よ。黒い馬であつた。これに乗っている者は量<sup>ふういん</sup>りを手<sup>と</sup>に持っていた。
- 6 すると私は、一つの声のようなものが、四つの生き物の間で、こう言うのを聞いた。「小麦<sup>ます</sup>—<sup>19</sup>一斗<sup>ます</sup>は一デナリ。大麦<sup>ます</sup>三斗<sup>ます</sup>も一デナリ。オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない。」
- 7 小羊が第四の封印を解いたとき、私は、第四の生き物の声が、「来なさい」<sup>20</sup>と言うのを聞いた。
- 8 私は見た。見よ。<sup>21</sup>青<sup>あざ</sup>ざめた馬であつた。これに乗っている者の名は死<sup>し</sup>といい、そのあとにはハデス<sup>したが</sup>がつき従つた。彼らに地上の四分の一<sup>つるぎ</sup>を剣<sup>けん</sup>とききんと死病<sup>けもの</sup>と地上の獣<sup>けい</sup>によって殺<sup>ころ</sup>す權威<sup>けんい</sup>が与えられた。
- 9 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかし<sup>さいだん</sup>のために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。
- 10 彼らは大声<sup>さけ</sup>で叫<sup>せい</sup>んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血<sup>ふくしゆう</sup>の復讐<sup>ふくしゆう</sup>をなさらないのですか。」
- 11 すると、彼らのひとりひとりに白い衣<sup>ころも</sup>が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟<sup>い</sup>たち<sup>わた</sup>で、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡された。
- 12 私は見た。小羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震<sup>じしん</sup>が起こつた。そして、太陽<sup>あらの</sup>は毛<sup>あらの</sup>の荒布<sup>あらぬの</sup>のように黒くなり、月の全面が血のようになった。
- 13 そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが、大風に揺られて、青い実<sup>ふ</sup>を振り落<sup>お</sup>とすようであつた。
- 14 天は、巻<sup>ま</sup>き物が巻<sup>ま</sup>かれるように消えてなくなり、すべての山<sup>やま</sup>や島<sup>しま</sup>がその場所から移された。
- 15 地上の王<sup>おう</sup>、高官<sup>こうかん</sup>、千人隊長<sup>せん にん たい ちよう</sup>、金持ち<sup>かねもち</sup>、勇者<sup>ゆうざ</sup>、あらゆる奴隸<sup>ど れい</sup>と自由人<sup>じゆうじん</sup>が、ほら穴<sup>あな</sup>と山の岩間<sup>いわま</sup>に隠<sup>かく</sup>れ、
- 16 山や岩に向かつてこう言った。「私たちの上に倒<sup>たお</sup>れかかつて、御座<sup>み ざ</sup>にある方<sup>み かた</sup>の御顔<sup>み かお</sup>と小羊の怒<sup>いか</sup>り<sup>いか</sup>り<sup>いか</sup>とから、私<sup>わたし</sup>たちをかくまってくれ。
- 17 御怒<sup>み い</sup>りの大<sup>おほい</sup>いなる日<sup>ひ</sup>が来たのだ。だれがそれに耐<sup>た</sup>えられよう。」

## 七章

- 1 この後、私は見た。四人の御使<sup>みつか</sup>いが地の四隅<sup>よすみ</sup>に立って、地の四方の風を堅く押さえ、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。
- 2 また私は見た。もうひとりの御使<sup>みつか</sup>いが、生ける神<sup>いん</sup>の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威<sup>けんい</sup>を与えられた四人の御使<sup>みつか</sup>いたちに、大声で叫んで言った。
- 3 「私たちが神のしもべたちの額<sup>ひたい</sup>に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害<sup>お</sup>を与えてはいけない。」
- 4 それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫<sup>いん</sup>のあらゆる部族<sup>ぶぞく</sup>の者が印を押されていて、十四万四千人であった。
- 5 ユダ<sup>ぶぞく</sup>の部族<sup>いん</sup>で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、ガドの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、
- 6 アセルの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、ナフタリの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、マナセの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、
- 7 シメオンの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、レビの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、イッサカルの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、
- 8 ゼブルンの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、ヨセフの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、ベニヤミンの部族<sup>ぶぞく</sup>で一万二千人、印を押された者がいた。
- 9 その後、私は見た。見よ。あらゆる国民<sup>のち</sup>、部族<sup>こくみん</sup>、民族<sup>ぶぞく</sup>、言語<sup>みんぞく</sup>のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜい<sup>ぐん</sup>の群衆<sup>しゆう</sup>が、白い衣を着、しゅろの枝を手<sup>えだ</sup>に持って、御座<sup>みざ</sup>と小羊との前に立っていた。
- 10 彼らは、大声で叫んで言った。
- 「救<sup>きう</sup>いは、御座<sup>みざ</sup>にある私たちの神にあり、小羊にある。」
- 11 御使<sup>みつか</sup>いたちはみな、御座<sup>みざ</sup>と長老たち<sup>ちやうろう</sup>と四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座<sup>みざ</sup>の前にひれ伏し、神を拝して、
- 12 言った。
- 「アーメン。賛美<sup>さんび</sup>と栄光<sup>ちえ</sup>と知恵<sup>かんしや</sup>と感謝<sup>はま</sup>と誉れと力と勢<sup>いきお</sup>いが、永遠<sup>えいえん</sup>に私たちの神にあるように。アーメン。」
- 13 長老<sup>ちやうろう</sup>のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか」と言った。
- 14 そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存<sup>ぞん</sup>じです」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難<sup>なん</sup>から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。
- 15 だから彼らは神の御座<sup>みざ</sup>の前にいて、聖所<sup>せいじよ</sup>で昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座<sup>みざ</sup>に着いておられる方も、彼らの上に幕屋<sup>まくや</sup>を張られるのです。
- 16 彼らはもはや、飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼ら<sup>えんねつ</sup>を打つことはありません。
- 17 なぜなら、御座<sup>みざ</sup>の正面におられる小羊<sup>ぼくしや</sup>が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉<sup>いずみ</sup>に導<sup>みちび</sup>いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙<sup>なみだ</sup>をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」

# 八章

- 1 小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。
- 2 それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。
- 3 また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。
- 4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。
- 5 それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずまと地震が起こった。
- 6 すると、七つのラッパを持っていた七人の御使いはラッパを吹く用意をした。
- 7 第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、血の混じった雹と火とが現れ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。
- 8 第二の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となった。
- 9 すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。
- 10 第三の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。
- 11 この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。
- 12 第四の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。
- 13 また私は見た。一羽の鷲が中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわざ来る。わざわざ、わざわざ来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」

## 九章

- 1 第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には<sup>23</sup>底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。
- 2 その星が、<sup>24</sup>底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上り、太陽も空も、この穴の煙によって暗くなった。
- 3 その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。
- 4 そして彼らは、地の草やすべての青草や、すべての木には害を加えないで、ただ、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。
- 5 しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を<sup>25</sup>刺したときのような苦痛であった。
- 6 その期間には、人々は死を求めるが、どうしても見いだせず、死を願うが、死が彼らから逃げて行くのである。
- 7 そのいなごの形は、出陣の用意の整った馬に似ていた。頭に金の冠のようなものを着け、顔は人間の顔のようであった。
- 8 また女の髪のような毛があり、歯は、獅子の歯のようであった。
- 9 また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その翼の音は、多くの馬に引かれた戦車が、戦いに馳せつけるときの響きのようであった。
- 10 そのうえ彼らは、さそりのような尾と針とを持っており、尾には、五か月間人間に害を加える力があつた。
- 11 彼らは、底知れぬ所の御使いを王にいただいている。彼の名はヘブル語で<sup>26</sup>アバドンといい、ギリシヤ語で<sup>27</sup>アポリュオンという。
- 12 第一のわざわいは過ぎ去った。見よ。この後なお二つのわざわいが来る。
- 13 第六の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は神の御前にある金の祭壇の<sup>28</sup>四隅から出る<sup>29</sup>声を聞いた。
- 14 その声がラッパを持っている第六の御使いに言った。「大川ユーフラテスのほとりにつながれている四人の御使いを解き放せ。」
- 15 すると、定められた時、日、月、年のために用意されていた四人の御使いが、人類の三分の一を殺すために解き放された。
- 16 騎兵の軍勢の数は二億であった。私はその数を聞いた。
- 17 私が 幻の中で見た馬とそれに乗る人たちの様子はこうであった。騎兵は、火のような赤、くすぶった青、燃える硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は、獅子の頭のようで、口からは火と煙と硫黄とが出ていた。
- 18 これらの三つの災害、すなわち、彼らの口から出ている火と煙と硫黄とのために、人類の三分の一は殺された。
- 19 馬の力はその口とその尾とにあつて、その尾は蛇のようであり、それに頭があつて、その頭で害を加えるのである。
- 20 これらの災害によって殺されずに残った人々は、その手のわざを悔い改めないで、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続け、
- 21 その殺人や、魔術や、不品行や、盗みを悔い改めなかった。

## 一〇章

- 1 また私は、もうひとりの強い御使<sup>みつか</sup>いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上<sup>お</sup>には虹があつて、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであつた。
- 2 その手には開かれた小さな巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、
- 3 獅子<sup>しし</sup>がほえるときのように大声で叫<sup>さけ</sup>んだ。彼が叫<sup>さけ</sup>んだとき、七つの雷<sup>かみなり</sup>がおのおの声を出した。
- 4 七つの雷<sup>かみなり</sup>が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷<sup>かみなり</sup>が言ったことは封じて、書きしるすな」と言うのを聞いた。
- 5 それから、私の見た海と地との上に立つ御使<sup>みつか</sup>いは、右手を天に上げて、
- 6 永遠<sup>えいえん</sup>に生き、天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを創造<sup>そうぞう</sup>された方をさして、誓<sup>ちか</sup>つた。「もはや時が延ばされることはない。
- 7 第七の御使<sup>みつか</sup>いが吹き鳴らそうとしているラッパの音<sup>ひび</sup>が響くその日には、神の奥義<sup>おくぎ</sup>は、神がご自身のしもべである預言者<sup>よげん</sup>たちに<sup>じようじゆ</sup>30告げられたとおりに成就する。」
- 8 それから、前に私が天から聞いた声が、また私に話しかけて言った。「さあ行つて、海と地との上に立つている御使<sup>みつか</sup>いの手にある、開かれた巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を受け取りなさい。」
- 9 それで、私は御使<sup>みつか</sup>いのところに行つて、「その小さな巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を下さい」と言つた。すると、彼は言つた。「それを取つて食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜<sup>みつ</sup>のように甘い。」
- 10 そこで、私は御使<sup>みつか</sup>いの手からその小さな巻<sup>ま</sup>き物<sup>もの</sup>を取つて食べた。すると、それは口には蜜<sup>みつ</sup>のように甘かつた。それを食べてしまうと、私の腹<sup>はら</sup>は苦くなつた。
- 11 そのとき、彼らは私に言つた。「あなたは、もう一度、もろもろの民族<sup>みんぞく</sup>、国民<sup>こくみん</sup>、国語<sup>こくご</sup>、王たちについて預言<sup>よげん</sup>しなければならない。」



# 一章

- 1 それから、私に杖のような<sup>つえ</sup>31測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。
- 2 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、<sup>せいじよ</sup>32そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにじる。
- 3 それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」
- 4 彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。
- 5 彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。
- 6 この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもつて地を打つ力を持っている。
- 7 そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。
- 8 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。
- 9 もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。
- 10 また地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。
- 11 しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常に恐怖に襲われた。
- 12 そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。
- 13 そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため<sup>だいじしん</sup>33七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。
- 14 第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る。
- 15 第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。
- 「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」
- 16 それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、
- 17 言った。
- 「万物の支配者、今いまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、<sup>ばんぶつ</sup>34王となられたことを感謝します。
- 18 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒り<sup>しはいしや</sup>35の日が来しました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。」
- 19 それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いなくま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。

## 一二章

- 1 また、巨大な<sup>きよ だい</sup>しるしが天に現れた。<sup>あらわ</sup>ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠<sup>かんむり</sup>をかぶっていた。
- 2 この女は、みごもっていたが、産みの苦しみと痛み<sup>いた</sup>のために、叫び<sup>さけ</sup>声をあげた。
- 3 また、別の<sup>あらわ</sup>しるしが天に現れた。見よ。大きな赤い<sup>りゆう</sup>竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠<sup>かんむり</sup>をかぶっていた。
- 4 その尾は、天の星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子<sup>こ</sup>を食い<sup>く</sup>尽くすためであった。
- 5 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖<sup>つえ</sup>をもって、すべての<sup>36</sup>国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。
- 6 女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間<sup>37</sup>彼女を養うために、神によって備えられた場所があった。
- 7 さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、
- 8 勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。
- 9 こうして、この巨大な竜、すなわち、<sup>38</sup>悪魔とか、<sup>39</sup>サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。
- 10 そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。
- 「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリスト<sup>きん い</sup>の権威<sup>あらわ</sup>が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前<sup>み まえ</sup>で訴<sup>う</sup>えている者が投げ落とされたからである。
- 11 兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。
- 12 それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわざ<sup>あく ま</sup>いが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下つたからである。」
- 13 自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。
- 14 しかし、女は大鷲の翼<sup>おろし</sup>を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。
- 15 ところが、蛇はその口から水を川のように女のうしろへ吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。
- 16 しかし、地は女を助け、その口を開いて、竜が口から<sup>40</sup>吐き出した川を飲み干した。
- 17 すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。
- 18 <sup>41</sup>そして、彼は<sup>42</sup>海への砂の上に立った。

# 一三章

- 1 また私は見た。海から一匹の獣<sup>けもの</sup>が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠<sup>かんむり</sup>があり、その頭には神をけがす名があった。
- 2 私の見たその獣<sup>けもの</sup>は、ひょうに似ており、足は熊<sup>くま</sup>の足のようで、口は獅子<sup>しし</sup>の口のようにであった。竜<sup>りゆう</sup>はこの獣<sup>けもの</sup>に、自分の力と位と大きな権威<sup>けんい</sup>とを与えた。
- 3 その頭のうちの一つは打ち殺されたかと思われたが、その致命的な傷も直ってしまった。そこで、全地は驚<sup>おどろ</sup>いて、その獣<sup>けもの</sup>に従<sup>したが</sup>い、
- 4 そして、竜<sup>りゆう</sup>を拝<sup>おが</sup>んだ。獣<sup>けもの</sup>に権威<sup>けんい</sup>を与えたのが竜<sup>りゆう</sup>だからである。また彼らは獣<sup>けもの</sup>をも拝<sup>おが</sup>んで、「だれがこの獣<sup>けもの</sup>に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう」と言った。
- 5 この獣<sup>けもの</sup>は、傲慢<sup>ごうまん</sup>なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威<sup>けんい</sup>を与えられた。
- 6 そこで、彼はその口を開いて、神に対するけがしごとを言い始めた。すなわち、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちをのしった。
- 7 彼はまた聖徒<sup>せいと</sup>たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許<sup>ゆる</sup>され、また、あらゆる部族<sup>ぶぞく</sup>、民族<sup>みんぞく</sup>、国語<sup>こくご</sup>、国民を支配<sup>しはい</sup>する権威<sup>けんい</sup>を与えられた。
- 8 地に住む者で、<sup>43</sup>ほふられた小羊<sup>せうやう</sup>のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。
- 9 耳のある者は聞きなさい。
- 10 <sup>44</sup>とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣<sup>つるぎ</sup>で殺<sup>ころ</sup>す者は、自分も剣<sup>つるぎ</sup>で殺されなければならない。ここに聖徒<sup>せいと</sup>の忍耐<sup>にんたい</sup>と信仰<sup>しんこう</sup>がある。
- 11 また、私は見た。もう一匹の獣<sup>けもの</sup>が地から上って来た。それには小羊<sup>せうやう</sup>のような二本の角があり、竜<sup>りゆう</sup>のようにものを言った。
- 12 この獣<sup>けもの</sup>は、最初の獣<sup>けもの</sup>が持っているすべての権威<sup>けんい</sup>を<sup>45</sup>その獣<sup>けもの</sup>の前で働<sup>はたら</sup>かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷<sup>きず</sup>の直った最初の獣<sup>けもの</sup>を拝<sup>おが</sup>ませた。
- 13 また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行<sup>ふ</sup>った。
- 14 また、あの獣<sup>けもの</sup>の前で行うことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑<sup>まど</sup>わし、剣<sup>つるぎ</sup>の傷<sup>きず</sup>を受けながらもなお生き返<sup>かへ</sup>ったあの獣<sup>けもの</sup>の像<sup>ぞう</sup>を造<sup>つく</sup>るように、地上に住む人々に命<sup>いのち</sup>じた。
- 15 それから、その獣<sup>けもの</sup>の像<sup>ぞう</sup>に息を吹き込んで、獣<sup>けもの</sup>の像<sup>ぞう</sup>がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣<sup>けもの</sup>の像<sup>ぞう</sup>を拝<sup>おが</sup>まない者をみな<sup>46</sup>殺<sup>ころ</sup>させた。
- 16 また、小さい者にも、大きい者にも、富<sup>と</sup>んでいる者にも、貧<sup>まず</sup>しい者にも、自由人<sup>じゆうじん</sup>にも、奴隷<sup>どれい</sup>にも、すべての人々にその右の手かその額<sup>ひたい</sup>かに、刻印<sup>こくいん</sup>を受けさせた。
- 17 また、その刻印<sup>こくいん</sup>、すなわち、あの獣<sup>けもの</sup>の名、またはその名の数字<sup>しすう</sup>を持っている者以外は、だれも、買うことも、売<sup>う</sup>ることもできないようにした。
- 18 ここに知恵<sup>ちえ</sup>がある。思慮<sup>しりよ</sup>ある者はその獣<sup>けもの</sup>の数字<sup>しすう</sup>を数<sup>かず</sup>えなさい。その数字は人間をさしているからである。その数字は<sup>47</sup>六百六十六である。

## 一四章

1 また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあった。

2 私は天からの声を聞いた。大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった。

3 彼らは、御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、<sup>48</sup>新しい歌を歌った。しかし地上から贖われた十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかった。

4 彼らは女によって汚されたことのない人々である。彼らは童貞なのである。彼らは、小羊が行く所には、どこにでもついて行く。彼らは、神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。

5 彼らの口には偽りがなかった。彼らは傷のない者である。

6 また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に<sup>49</sup>住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。

7 彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

8 また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

9 また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、

10 そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。

11 そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。

12 神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける聖徒たちの忍耐はここにある。」

13 また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについて行くからである。」

14 また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。

15 すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗っておられる方に向かって大声で叫んだ。「かま<sup>50</sup>を入れて刈り取ってください。地の<sup>51</sup>穀物は実ったので、取り入れる時が来ましたから。」

16 そこで、雲に乗っておられる方が、地にかまを入れると地は刈り取られた。

17 また、もうひとりの御使いが、天の聖所から出て来たが、この御使いも、鋭いかまを持っていた。

18 すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを<sup>52</sup>入れ、地のぶどうのぶさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」

19 そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。

20 その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百<sup>53</sup>スタディオンに広がった。

一五章

1 また私は、天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。神の激しい怒りはここに窮まるのである。

2 私は、火の混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神の立琴を手にして、このガラスの海のほとりに立っていた。

3 彼らは、神のしもべモーセの歌と小羊の歌とを歌って言った。  
「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、真実です。54 もろもろの民の王よ。

4 主よ。だれかあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか。ただあなただけが、聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。」

5 その後、また私は見た。天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた。

6 そしてその聖所から、七つの災害を携えた七人の御使いが出て来た。彼らは、きよい光り輝く 55 亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。

7 また、四つの生き物の一つが、永遠に生きておられる神の御怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使いに渡した。

8 聖所は神の栄光と神の全能から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその聖所に、入ることができなかった。

## 一六章

1 また、私は、大きな声が聖所から出て、七人の御使いに言うのを聞いた。「行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に向けてぶちまけよ。」

2 そこで、第一の御使いが出て行き、鉢を地に向けてぶちまけた。すると、獣の刻印を受けている人々と、獣の像を拝む人々に、ひどい悪性のはれものができた。

3 第二の御使いが鉢を海にぶちまけた。すると、海は死者の血のような血になった。海の中の56いのちのあるものは、みな死んだ。

4 第三の御使いが鉢を川と水の源とにぶちまけた。すると、それらは血になった。

5 また私は、水をつかさどる御使いがこう言うのを聞いた。「今いまし、昔います聖なる方。あなたは正しい方です。なぜならあなたは、このようなさばきをなさったからです。」

6 彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者たちです。」

7 また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ。万物の支配者である神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」

8 第四の御使いが鉢を太陽に向けてぶちまけた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。

9 こうして、人々は57激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。

10 第五の御使いが鉢を獣の座にぶちまけた。すると、獣の国は暗くなり、人々は苦しみのあまり舌をかんだ。

11 そして、その苦しみと、はれものとのゆえに、天の神に対してけがしごとを言い、自分の行いを悔い改めようとしなかった。

12 第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。

13 また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。

14 彼らはしるしを行う悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大きいなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。

15 —見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである—

16 こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。

17 第七の御使いが鉢を空中にぶちまけた。すると、大きな声が御座を出て、聖所の中から出て来て、「事は成就した」と言った。

18 すると、いなずまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほどに大きな、強い地震であった。

19 また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。

20 島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなった。

21 また、—58タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雹の災害のため、神にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。

# 一七章

- 1 また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。」
- 2 地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。」
- 3 それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。
- 4 この女は 紫 と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで<sup>59</sup>身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手を持っていた。
- 5 その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン」という名であつた。
- 6 そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。
- 7 すると、御使いは私にこう言った。「<sup>60</sup>なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘義と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘義とを話してあげましょう。」
- 8 あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上つて来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現れるのを見て驚きます。
- 9 ここに知恵の心があります。七つの頭とは、この女がすわっている七つの山で、七人の王たちのことです。
- 10 五人はすでに倒れたが、ひとりは今おり、ほかのひとは、まだ来ていません。しかし彼が来れば、しばらくの間とどまるはずです。
- 11 また、昔いたが今はいない獣について言えば、彼は八番目でもあります、先の七人のうちのひとりです。そして彼はついには滅びます。
- 12 あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。
- 13 この者どもは心を一つにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。
- 14 この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」
- 15 御使いはまた私に言った。「あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です。」
- 16 あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。
- 17 それは、神が、みことばの成就するときまで、神のみこころを行う思いを彼らの心に起こさせ、彼らが心を一つにして、その支配権を獣に与えるようにされたからです。
- 18 あなたが見たあの女は、地上の王たち<sup>61</sup>を支配する大きな都のことです。」

# 一八章

1 この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下って来るのを見た。地はその栄光のために明るくなった。

2 彼は力強い声で叫んで言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの<sup>62</sup>巢くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巢くつとなった。

3 それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒<sup>63</sup>を飲み、地上の王たちは、彼女と不品行を行い、地上の商人たちは、彼女の極度の<sup>64</sup>好色によって富を得たからである。」

4 それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。

5 なぜなら、彼女の罪は<sup>65</sup>積み重なって天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです。

6 あなたがたは、彼女が支払ったものをそのまま彼女に返し、彼女の行いに応じて二倍にして戻しなさい。彼女が混ぜ合わせた杯の中には、彼女のために二倍の量を混ぜ合わせなさい。

7 彼女が自分を誇り、<sup>66</sup>好色にふけたと同じだけの苦しみと悲しみとを、彼女に与えなさい。彼女は心の中で『私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない』と言うからです。

8 それゆえ一日のうちに、さまざまな災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく神である主は力の強い方だからです。

9 彼女と不品行を行い、<sup>67</sup>好色にふけた地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣き、悲しみます。

10 彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、こう言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。』

11 また、地上の商人たちは彼女のことで泣き悲しみます。もはや彼らの商品を買う者がだれもないからです。

12 商品とは、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、香木、さまざまな象牙細工、高価な木や<sup>68</sup>銅や鉄や大理石で造ったあらゆる種類の器具、

13 また、肉桂、<sup>69</sup>香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊、それに馬、車、<sup>70</sup>奴隸、また人のいのちです。

14 また、あなたの心の望みである熟したくだものは、あなたから遠ざかってしまい、あらゆるはでな物、はなやかな物は消えうせて、もはや、決してそれらの物を見いだすことができません。

15 これらの物を商って彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、泣き悲しんで、

16 言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。麻布、紫布、緋布を着て、金、宝石、真珠<sup>71</sup>を飾りにしていた大きな都よ。

17 あれほどの富が、一瞬のうちに荒れすたれてしまった。』また、すべての船長、すべての<sup>72</sup>船客、水夫、海で働く者たちも、遠く離れて立っていて、

18 彼女が焼かれる煙を見て、叫んで言いました。『このすばらしい都のような所がほかにあろうか。』

19 それから、彼らは、頭にちりをかぶって、泣き悲しみ、叫んで言いました。『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。海に舟を持つ者はみな、この都の<sup>73</sup>おごりによって富を得ていたのに、それが一瞬のうちに荒れすたれるとは。』

20 おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、<sup>74</sup>あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。」

21 また、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき臼のような石を取り上げ、海に投げ入れて言った。「大きな都バビ



ロンは、このように激しく打ち倒されて、もはやなくなって消えうせてしまう。

22 立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の声は、もうおまえのうちに聞かれなくなる。あらゆる技術を持った職人たちも、もうおまえのうちに見られなくなる。ひき臼の音も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。

23 ともしびの光は、もうおまえのうちに輝かなくなる。花婿、花嫁の声も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。なぜなら、おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。

24 また、預言者や聖徒たちの血、および地上で殺されたすべての人々の血が、この都の中に見いだされたからだ。」

# 一九章

- 1 この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。  
「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。」
- 2 神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」
- 3 彼らは再び言った。「ハレルヤ。彼女の煙は永遠に立ち上る。」
- 4 すると、二十四人の長老と四つの生き物はひれ伏し、御座についておられる神を拝んで、「アーメン。ハレルヤ」と言った。
- 5 また、御座から声が出て言った。  
「すべての、神のしもべたち。小さい者も大きい者も、神を恐れかしこむ者たちよ。われらの神を賛美せよ。」
- 6 また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。  
「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。」
- 7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。
- 8 花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」
- 9 御使いは私に「小羊の婚宴に招かれた者は幸いです、と書きなさい」と言い、また、「これは神の真実のことばです」と言った。
- 10 そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」
- 11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。
- 12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。
- 13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。
- 14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。
- 15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。
- 16 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名が書かれていた。
- 17 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、
- 18 王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」
- 19 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。
- 20 すると、獣は捕らえられた。また、獣の77前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼と一つしよに捕らえられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。
- 21 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

## 二〇章

- 1 また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、天から下って来るのを見た。
- 2 彼は、<sup>78</sup>悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕らえ、これを千年の間縛って、
- 3 底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。
- 4 また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。
- 5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。
- 6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。
- 7 しかし千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、
- 8 地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は<sup>79</sup>海への砂のようである。
- 9 彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。
- 10 そして、彼らを惑わした<sup>80</sup>悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。
- 11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あともなくなった。
- 12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。
- 13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行いに応じてさばかれた。
- 14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。
- 15 いのちの書に<sup>81</sup>名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

## 二一章

- 1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。
- 2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。
- 3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、<sup>82</sup>
- 4 彼らの目の涙をすっきりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」
- 5 すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。「書きしるせ。これらのことは、信すべきものであり、真実である。」
- 6 また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、  
渴く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。
- 7 勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。
- 8 しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」
- 9 また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」
- 10 そして、御使いは<sup>83</sup>御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。
- 11 都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。
- 12 都には大きな高い城壁と十二の門があつて、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあつた。
- 13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があつた。
- 14 また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあつた。
- 15 また、私と話していた者は都とその門とその城壁とを測る<sup>84</sup>金の測りざおを持っていた。
- 16 都は四角で、その長さと幅は同じである。彼がその<sup>85</sup>さおで都を測ると、一万二千<sup>86</sup>スタディオンあつた。長さも幅も高さも同じである。
- 17 また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四<sup>87</sup>ペーキュスあつた。これが御使いの尺度でもあつた。
- 18 その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。
- 19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髓、第四は緑玉、
- 20 第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。
- 21 また、十二の門は十二の真珠であつた。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であつた。
- 22 私は、この都の中に<sup>88</sup>神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の<sup>89</sup>神殿だからである。
- 23 都には、これを照らす太陽も月もいらない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。
- 24 諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。

25 都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

26 こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。

27 しかし、すべて汚れた者が、憎むべきことと偽りとを行う者は、決して都に入れない。小羊のいのちの書に90名が書いてある者だけが、入ることができる。

## 二二章

- 1 御使<sup>みつか</sup>いはまた、私に水晶<sup>すいしゅう</sup>のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座<sup>みざ</sup>から91出て、
- 2 都の大通りの中央を流れていた。川の兩岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国<sup>しよこく</sup>の民をいやした。
- 3 もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座<sup>みざ</sup>が都の中にあつて、そのしもべたちは神に仕え、
- 4 神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額<sup>ひたい</sup>には神の名がついている。
- 5 もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠<sup>えいえん</sup>に王である。
- 6 御使<sup>みつか</sup>いはまた私に、「これらのことばは、信ずべきものであり、真実なのです」と言った。預言者<sup>よげんしや</sup>たちのたましいの神である主は、その御使いを遣わし、すぐに起こるべき事を、そのしもべたちに示そうとされたのである。
- 7 「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことば92を堅く守る者は、幸いである。」
- 8 これらのことを聞き、また見たのは私ヨハネである。私が聞き、また見たとき、それらのことを示してくれた御使<sup>みつか</sup>いの足もとに、ひれ伏して拝もうとした。
- 9 すると、彼は私に言った。「やめなさい。私は、あなたや、あなたの兄弟である預言者<sup>よげんしや</sup>たちや、この書のことば93を堅く守る人々と同じしもべです。神を拝みなさい。」
- 10 また、彼は私に言った。「この書の預言のことばを封じてはいけぬ。時が近づいているからである。
- 11 不正を行う者はますます不正を行い、汚れた者はますます汚れを行いなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行い、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。」
- 12 「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。
- 13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」
- 14 自分の着物を洗つて、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通つて都に入れるようになる者は、幸いである。
- 15 犬ども、魔術を行う者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行う者はみな、外に出される。
- 16 「わたし、イエスは御使いを遣わして、諸教会<sup>しよきやうかい</sup>94について、これらのことをあなたがたにあかしした。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」
- 17 御霊<sup>みたま</sup>も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。
- 18 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。
- 19 また、この預言<sup>よげん</sup>の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。
- 20 これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。
- 21 主イエスの恵み<sup>めぐみ</sup>が95すべての者とともにあるように。アーメン。

- 1 あるいは「...を守る」
- 2 あるいは「王」
- 3 直訳「ただ中を」
- 4 異本「彼らの行い」
- 5 別訳「死」
- 6 直訳「腎臓」（内なる人を表す）
- 7 あるいは「異邦人」
- 8 あるいは「牧する」
- 9 あるいは「わたしは...知っている（見よ。...開いておいた）。すなわち、あなたは...否まなかったことを」
- 10 直訳「与える」
- 11 あるいは「誘惑する」
- 12 直訳「人の居住している地」
- 13 あるいは「誘惑」
- 14 直訳「御座に着いている」
- 15 あるいは「光輪」
- 16 別訳「御座と四つの生き物の間、長老たちの間に」
- 17 あるいは「王」
- 18 異本「そして、見なさい」を加える
- 19 ギリシヤ語「コイニックス」 乾量で、約一リットル相当
- 20 参照黙示録六・一注
- 21 あるいは「灰色」
- 22 直訳「の上に落ちる」
- 23 直訳「底知れぬ所の縦穴」
- 24 参照黙示録九・一注
- 25 直訳「打つ」
- 26 「破壊」の意
- 27 「破壊者」の意
- 28 異本「四」の字を欠く
- 29 直訳「一つの声」
- 30 直訳「福音が宣べられた」
- 31 直訳「葦」
- 32 直訳「外に投げなさい」
- 33 直訳「七千の人々の名」
- 34 直訳「治められた」
- 35 「の日」は補足
- 36 あるいは「異邦人」
- 37 直訳「彼らが...養う」
- 38 ギリシヤ語「ディアボロス」一反抗者
- 39 ギリシヤ語「サタナス」。ヘブル語「サタン」
- 40 直訳「投げられた」
- 41 異本「私は...立つた」とし、一三・一に入れる
- 42 直訳「海」
- 43 別訳「世の初めからほふられた」

- 44 別訳「人を取りこにする」
- 45 別訳「その権威によって」
- 46 ある初期の写本には「…殺させる」とある
- 47 異本「六百十六」
- 48 ある初期の写本では「いわば新しい歌を歌った」
- 49 直訳「すわる」
- 50 直訳「送り出して」
- 51 直訳「収穫はかわいた」
- 52 直訳「送り出し」
- 53 一スタディオンは一八五メートル
- 54 異本「世々の王」
- 55 ある写本には亜麻布（リノン）ではなくて、石（リソン）とある
- 56 直訳「生ける霊」 異本「海の中のもの」
- 57 直訳「大きな」
- 58 一タラントは約三五キログラム
- 59 直訳「金めっきの」
- 60 直訳「あなたは驚いているのですか」
- 61 直訳「（王たち）の上に王国を持つ大きな都」
- 62 別訳「牢」
- 63 初期の写本で「によって倒れ」とあるものも多い
- 64 別訳「ぜいたく」
- 65 直訳「結び合わされて」
- 66 別訳「ぜいたく」
- 67 別訳「ぜいたく」
- 68 あるいは「青銅」「しんちゅう」
- 69 原語「アモーモン」（インド原産の香木）
- 70 直訳「肉体（複数）」
- 71 直訳「の金めっきをする」
- 72 直訳「各地への航海者」
- 73 直訳「ぜいたく」
- 74 直訳「彼女に対するあなたがたのさばきをされた」
- 75 直訳「妻」
- 76 直訳「ぶどう酒の酒ぶね」
- 77 別訳「権威によって」
- 78 原語「ディアボロス」
- 79 直訳「海」
- 80 原語「ディアボロス」
- 81 「名の」は補足
- 82 異本「また彼らの神となり」を加える
- 83 別訳「霊にあつて」
- 84 直訳「測り、金の葦」
- 85 直訳「葦」
- 86 一スタディオンは一八五メートル



[87](#) 一ペーキユスは四五センチ

[88](#) あるいは「聖所」

[89](#) あるいは「聖所」

[90](#) 「名が」は補足

[91](#) 別訳「（出て）いた都の大通りの中央と、川の両岸には…」

[92](#) あるいは「に心を留める」

[93](#) あるいは「に心を留める」

[94](#) あるいは「のために」

[95](#) 異本「聖徒たち」

# あとがき

聖書は永遠の神のことばであって、あらゆる時代に対して、常に新しい力をもって語り、救いのための知恵を人々に与えることのできるものである。『聖書 新改訳』は、今の時代の人々のために、この神のことばである聖書を、正確に、わかりやすく翻訳しようとして企画された。

翻訳編集に携わった者の一致した願いは、原語にあくまでも忠実であり、最も読みやすく、しかも聖書としての品位を失わない訳文を得ることであつた。

新約はネストレの校訂本二四版、旧約はキッテルの三版以後のものに基づき、訳業を進めたが、問題の個所については、正しい本文に近づくことに努めた。

どの翻訳についても言えることであろうが、私たちは、聖書翻訳の古い歴史の中で教会が私たちに残してくれた遺産に負うところが非常に多い。ここにあって「新改訳」という名を採ったのも、多くの先達の業績に負うところが大きいことを認めるからである。

わかりやすく翻訳するためには、現代において一般に用いられている範囲の中で、ことばや、文型、また、書き表し方を用いる必要があつた。このために、用字用語も、なるべく当用漢字およびその音訓表の範囲内にとどめるようにした。国語の特徴の一つである敬語の使い方もなるべく簡素化した。神ご自身に関することば使いには、敬体を用いて誤解のおそれのないようにした所が多いが、敬体を用いずに、神のみわざそのものを簡潔に表した個所も多い。神のみわざは敬語の適用範囲を越えたところがあると判断したからである。

訳語の中で、特に注意したことについて一、二、説明したい。

旧約聖書においては、特に、文語訳ではエホバと訳され、学者の間ではヤハウェとされている主の御名を、この訳では【主】と訳し、それによって主の御名がしるされている個所を明らかにした。そうでない〈主〉は〈主〉を代名詞などで受けた場合または通常の〈主〉を意味することばの訳である。

新約聖書で〈ハデス〉〈ゲヘナ〉と訳出されているのは、それぞれ、「死者が終末のさばきを待つ間の中間状態で置かれる所」「神の究極のさばきにより、罪人が入れられる苦しみ場所」をさすが、適切な訳語がないために音訳にとどめたのである。しかし、旧約聖書では、新約の〈ハデス〉に対応する〈シェオル〉を〈よみ〉と訳した。これらの訳語の統一については、さらに検討が必要であろう。

この『聖書 新改訳』の標準版が節ごとに改行しているのは、ただ読みやすさのためであつて、他意はない。文段を示すとき、一行あけたり、一字下げしたりしているのも、同様である。

また、章節を示す数字も後代のものであつて、聖書固有のものではないので、便宜上のものである。そのため、私たちの用いた校訂本の章節の分け方が従来の邦訳のそれと違う場合には、できるだけ、邦訳の章節の分け方のほうを採用して無用の混乱を避けるようにした。

## \* 注の説明

注は、その注の性質を示す〈別訳〉〈直訳〉〈あるいは〉〈異本〉等の〈 〉の中に入つた語をもつて始まる。次にその説明をする。

### (1) 旧新約に共通の注記

〈別訳〉は、本文には採らなかったが、重要と思われる別の訳。

〈直訳〉は、本文に意識を採用したとき、特に注記することが必要と思われた直訳。

〈あるいは〉は、本文と微妙な相違のある他の訳、または本文と同義であるが、別の言い回し。

### (2) 新約にだけ用いられている注記

〈異本〉は、写本間に相違がある場合、本文には採らなかったが、重要と思われるものの訳。

〈すなわち〉は、本文の訳語では、原意を表すのにいくぶん不十分である場合の説明。

〈原語〉〈ヘブル語〉〈アラム語〉〈ギリシヤ語〉は、これらの原語の音訳を示す。

## 第三版あとがき

第三版においては、およそ九百節に改訂を施した。その大半は、いわゆる不快表現、差別表現にかかわるものである。身体的な弱さを指すのに使われてきた語、例えば「めくら」「おし／つんば」等は、「目の見えない（人）、盲目、盲人」「口のきけない（人）／耳の聞こえない（人）」等に変更した。

特に、「らい病（人）」と訳されていたヘブル語「ツアラアト」とその派生語、及びギリシヤ語「レブラ」「レブロス」は、本改訂版では、従来の訳語や新たな造語を含む複数の選択肢を検討した結果、「ツアラアト」「ツアラアトの者・人」「ツアラアトに冒された（者・人）」と訳出することとした。聖書のツアラアトは皮膚に現れるだけでなく、家の壁や衣服にも認められる現象であり、それが厳密に何を指しているかはいまだに明らかでないからである。

「ツアラアトの者・人」（ツアルア）と「ツアラアトに冒された」（メツォラア）は、ヘブル語の名詞ツアラアトから派生したと考えられる動詞の受動分詞（それぞれ基本語幹カルと強意語幹プアル）であり、人の場合に限定して使われ、皮膚がツアラアトという「何らかの原因により、人体や物の表面が冒された状態」を描写している。

この症候は、前述のとおり、壁や衣服にも現れることがあり、「きよい」と宣言されるまで、それらはけがれたものと見なされた。それゆえ、聖書が教える神のきよめの恵みを正しく理解するために、「ツアラアトに冒された」という表現を適切に解釈する必要がある。なお、「らいを病む」「らいに冒された」等の表現がふさわしい、とする考え方もあるが、ヘブル語「ツアラアト」を特定の病名に結び付けることはできないとの結論に達した。

以上のことから、第三版における訳語「ツアラアト」「ツアラアトの者・人」「ツアラアトに冒された（者・人）」が暫定的であることを了解されたい。

なお、不快表現、差別表現以外の改訂は、今回は最小限度にとどめた。しかし、一つの訳語の改訂（例えば、創世記一章二節「地は形がなく」を「地は茫漠として」とした）が、その文脈の理解や聖書全体の神学に多大な影響を与えることを考えるなら、改訂の重要さは個所の数で測られるものではないであろう。

# 著作権について

本電子書籍内のプログラム、聖書データの全部または一部を著作権者ならびに発行者に無断で複製、転載、改ざん、公衆送信（ホームページなどに転載することを含む）することを禁じます。

新約聖書 新改訳

1970年9月1日 発行  
1978年3月1日 第2版発行  
2003年10月25日 第3版発行  
2013年12月1日 第3版電子書籍発行

翻 訳 新日本聖書刊行会  
〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-8  
発 行 いのちのことば社  
〒164-0001 東京都中野区中野 2-1-5

©1970,1978,2003 新日本聖書刊行会  
「新改訳聖書は、新改訳聖書刊行会によって翻訳され、  
その著作権は新日本聖書刊行会に継承されました。」

新改訳聖書の翻訳は、ロックマン財団の  
財政的援助によって遂行できました。

表紙 菊池信義  
EPUB制作 大津博子